

ヨセフ・アロイス・シュムペーター

補遺稿「資本主義・社会主義・民主主義」

シュムペーター章句集成

<刊行本に用いられなかった廃棄手稿、論点整理につくられた手稿、
テキスト各部の構成に用いられた手稿、ノート類等>

編集（含 解説と日本語訳及び摘要）
農学博士 浦城晋一（三重大学名誉教授）

協力者 アーサー・ハイム
井上孝榮

補遺稿

資本主義、社会主義、そして民主主義

ヨセフ・A・シュムペーター稿 ハーヴァード大学経済学教授

序文(第1版)

第1版から第2版までに書かれた本書についての
所感的並びに反省的コメント

「資本主義・社会主義・民主主義」第2版のための変更

- 第I部 マルクスの体系
- 第II部 資本主義は生き延びうるや？
- 第III部 社会主義は作動しうるや？
- 第IV部 社会主義と民主主義
- 第V部 第I・II次世界大戦と社会主義政党
対 アメリカ経済とケインズ理論

目次
(0-1)

表紙・目次	・・・・・・・・	1
	ページ 0-(1)	
序文(第1版)	・・・・・・・・	6
	ページ 0-(2)	
第1版から第2版までに書かれた本書についての 所感的並びに反省的コメント	・・・・・・・・	10
	ページ 0-(3)-1~25	
「資本主義・社会主義・民主主義」第2版のための変更	・・・・・・・・	21
	ページ 0-(4)	
第I部 マルクスの体系	・・・・・・・・	26
(1) 歴史の経済的解釈	・・・・・・・・	27
	ページ I-(1)-1~19	
(2) 経済学者 マルクス	・・・・・・・・	38
	ページ I-(2)-1~23	
(3) オストロ・マルキストなど	・・・・・・・・	55
	ページ I-(3)-1~19	
(4) その他 雑録	・・・・・・・・	67
	ページ I-(4)-1~4	
第II部 資本主義は生き延びうるや?	・・・・・・・・	70
(1) 創造的破壊の継起	・・・・・・・・	71
	ページ II-(1)-1~15	
(2) 独占行動と無駄	・・・・・・・・	87
	ページ II-(2)-1~10	

(3) 資本主義システムの変質	・・・ 108
パセイジ II-(3)-1 ~ 23	
(4) 資本主義システムの死を招来させるに至る 自壊的体内疾患	・・・ 122
パセイジ II-(4)-1 ~ 35	
 第Ⅲ部 社会主義は作動しうるや？	・・・ 150
 (このテキストの主題、可能性が示す限りでの社会主義の経済学)	
(1) 社会主義のブループリント	・・・ 151
パセイジ III-(1)-1 ~ 38	
追加 1 ~ 6	
(2) ブループリントによる社会主義の比較優越論	・・・ 177
パセイジ III-(2)-1 ~ 49	
(3) (2)の補足的パセイジ	・・・ 214
パセイジ III-(3)-1 ~ 29	
(4) 社会主義システムにおける人間的諸要素	・・・ 225
パセイジ III-(4)-1 ~ 37	
(5) (4)の補足的パセイジ	・・・ 270
パセイジ III-(5)-1 ~ 66	
(6) 移行過程 —— 社会化 ——	・・・ 298
パセイジ III-(6)-1 ~ 19	
(7) 社会主義の経済的バランスシート	・・・ 313
パセイジ III-(7)-1 ~ 4	
 第Ⅳ部 社会主義と民主主義	・・・ 318
(1) 社会主義と民主主義における様々なパターン	・・・ 319
パセイジ IV-(1)-1 ~ 9	
(2) 社会主義をめぐる権力への意志	・・・ 332
パセイジ IV-(2)-1 ~ 17	

(3)	民主主義の概念についての雑録 パセイジ IV—(3)—1～45	・・・347
(4)	民主主義を根拠付ける二つの理論 ——代表制理論(the representative theory)から 選抜(淘汰)制理論(the selective theory)へ—— パセイジ IV—(4)—1～18	・・・372
(5)	民主主義的成功の諸条件 パセイジ IV—(5)—1～5	・・・404
(6)	移行の前線における諸屈折 パセイジ IV—(6)—1 - a、b、c、d 2 - a、b	・・・420
(7)	移行(過渡)期における「社会主義と民主主義」 パセイジ IV—(7)—1～10	・・・431
(8)	結論 社会主義と民主主義 パセイジ IV—(8)—1～8	・・・443
第V部	第I・II次世界大戦と社会主義政党 付 アメリカ経済とケインズ理論	・・・454
(1)	第I次世界大戦から第II次世界大戦へ 1) 第I次世界大戦の諸帰結 パセイジ V—(1)—1)	・・・455 ・・・456
	2) 管理資本主義に入った社会主義者達 パセイジ V—(1)—2)	・・・465
	3) 第II次世界大戦と社会主義政党の将来 パセイジ V—(1)—3)	・・・475
(2)	第II次世界大戦中のアメリカからの展望雑録 パセイジ V—(2)—1～27	・・・481
(3)	大戦直後の世界情勢と社会主義諸政党進出 の様々な様相 パセイジ V—(3)—1～14	・・・492
(4)	(3)の補足的パセイジ パセイジ V—(4)—1～34	・・・507

(5) アメリカの事情、ワシントン経済学と ケインジアン・セオリー	・・・ 5 2 1
パセイジ V—(5)—1～1 2	
(6) スターリンとフランス・イギリス ・アメリカにおけるロシア問題	・・・ 5 4 0
パセイジ V—(6)—1～6	
編者後記	・・・ 5 5 5

序文(第一版)

0-(2)

本書は、社会主義という主題に即して、私のほとんど40年に及ぶ思考・観察・研究の積み重ねを一つの読みやすい形態に作り出す、という努力の結果である。民主主義の問題は、社会の社会主義的秩序と政府の民主主義的方法の間の関連についての私の見解を述べることが——後者についてのどちらかと言えば範囲の広い分析なしには——不可能であることが論証せられたが故に、本書の中の今占められている場所においておくことを余儀なくされた。・・・

私の仕事は私がそうであろうと考えていたよりももっと困難なものであることがわかった。配列せられなければならない異質の諸資料の断片は一人の個人——自分の生涯の様々なステージにおいて社会主義者でない者が通常もつよりは多くの観察の機会をもち、しかも自分がありきたりではないやり方で見届けた物事に対して反応してきた、そういう一個人——が持つ諸見解や諸体験を反映したものである。私はこの諸足跡を消すことを毛頭望まなかった。もし私がそうしたものを取り除くことを試みたとすれば、本書が要求するに価するとみてよいような関心の多くは失われたであろう。

(*)・・・広範にして異質な諸資料はいくばくかの個人的な手書き文書類から未整理な(秩序付けられていない)ノート類の山々に至るものであり、それらは部分的には不思議にも尚生きており、しかも自分達の主人や時代の神々に縋り付いている。・・・(書かれた後、線で消されている。・・・編者)

それ以上にこれらの資料は又ある一個人——いつも正直に表面下に探查を試みるかたわら、時代の中の如何なる期間に渡っても社会主義の諸問題を自分の専門的な研究からする主要な示唆としたことは決してなかったものであり、それ故に他のことについてよりもこの問題のいくらかの話題について言うべきものを多くもっていることになるのだが——の分析諸努力の反映されたものでもあった。私がバランスのよく取れた専門諸論文を書くことを狙っているという印象を生み出すことを避けるために、私は五つの中心的な諸テーマのまわりに私の素材を掌握するのが最善であると考えてきた。それらの間の様々な交差と橋渡しはもとより用意されてあ

る。そして私は望むものであるが、提示したものの組織的一体性のような何かが成し遂げられることになった。しかし事の本質においては、それらは——相互に独立したものではないとしても——ほとんどが分析のもつ自足的な諸断面なのである。

第Ⅰ部はマルクス主義者の教条という主題に付き私が述べなければならないこと——並びに事実問題として私が20～30年間も授業を続けてきたこと——を非専門的なやり方で集約したものである。社会主義の主要諸問題の議論に福音の露わな呈示によって序を付すことはマルクス主義者に対してはなされて当然のことであるだろう。しかしマルクス主義者ではない者の一人によって建てられた家屋の玄関のところでしなければならないこととは何であろうか？ かのメッセージのもつユニークな重要性、受取りか拒絶かとは完全にかかわりのない一個の重要性、の中にあるこのマルクス主義者でない者の信条に対する立会人(witness)であることを担うというのがそこにおける立場である。但しそれは読解を困難ならしめる。更に引き続く作業の中ではマルクス主義者の諸用具(tools)は全く用いられていない。後者(作業)の諸帰結は再三にわたって、かの一人の偉大なる思想家の諸傾向と比較されるのであるが、マルキシズムに関心をもたない読者諸氏は第Ⅱ部から始めるのも又良しである。

第Ⅱ部——資本主義は生き残ることができるか？——では、私が試みたのは、社会の社会主義的形態なるものは資本家的社会の同様に不可避免的な解体の中から不可避免的に出現するであろう、ということを示すことである。多くの読者は怪しむであろう。速やかに一般的な意見に——保守層の間においてすら——なりつつあるものを確立せんが為、私は何故にかくも手間がかかり、しかも複雑している分析を必要とするのか、と。理由は次の如くである。一方において我々のその帰結に対しては我々のほとんどが同意しているのだが、資本主義を殺しつつあるその過程の性質に関して「不可避免的に」という言葉に貼り付けられるべきその正確な意味に関して、我々は合意を得ていないということである。提示された諸行論のほとんどは——マルクス主義の者においても他の一層にポピュラーなラインの者もともに——間違っていると信じるので、私はそれを引き受けるべき私の義務であると感じたのである。そして私は読者に私の逆説的な結論に効果的に導き上げるために相当なる煩わしさを課そうとする。その結論とは、資本主義はその達成(achievement)によって殺されつつある、である。

我々がそうなるだろうと私が考えているように、社会主義は今次大戦の結末の中に直接的に実行上のこととなるかも知れない一個の実践的命題である、ということを見究めた上で、我々は第Ⅲ部——社会主義は作動できるのか？——の中で、社会主義の秩序がその下で一定の経済的成功であり得ると期待されてよいような諸条件に依存するものである一個の大きな問題の範囲を調べることになるだろう。この部は「移行上の」諸問題を含めて、その様々な諸論題につき、でき得る限り一個のバランスのとれた取扱いとなるようにしている。この問題には、これまでなされてきたような容易ならざる仕事——その数は多くない——の諸結果を愛や憎しみがぼかしてしまうことがあったので、広く受け入れられている諸見解の単なる再叙述にすぎないことすらもが、そこここで、正当化されるよう見受けられた。

第Ⅳ部——社会主義と民主主義——は、この国で進行しつつあった論争に対する一つの寄与である。・・・(*)・・・しかしこの部では原理的な設問だけが取り扱われていることに注意するべきである。この主題に関連した諸事実または諸所見は本書の全面に——特に第Ⅲ部と第Ⅴ部に渡って——撒かれている。・・・(**)・・・

(*)・・・しかしながら、我々の多くは民主主義をば、それを規定するよりもそれを愛するところが大きいので、この論争はスローガンの反復のさなかで尽くされてしまいやすい、ということを見出しているが如くである。極めて単純な結論に向かうとみられるものに到達せんがためには、合理化された基礎が置かれなければならない。いくらかの読者は恐らく自分自身の判断でその基礎部分に関心を向けるであろう。・・・(書かれた後、線で消されている…編者)

(**)・・・私は私がマルクス主義者では決してない、と述べた。私はマルクス学研究者でもないのである。マルクスがかつて書いた手紙、あるいはマルクス・エンゲルス研究所によって刊行された資料の全て、あるいはこれまで集められたマルクス主義者向けの諸テキスト、等々を私は読んでいない。しかし、私はマルクスの主要な刊行物を知っているし、その上、一人のエコノミストとして——分析技術に対しては専門家の目をもって——それらを読んだのである。これらを、私は敢えて言うのであるが、私はどんなマルクス文献学者(a Marx philologist)が行うであろうよりもよ

り良く理解するものであるし、しかもこれこそが私の解釈と批判を呈示することに対する私の正当性をなすものである。もっとも私はマルクスの手形清算についての知識においてはかの専門家達に及ぶべくもないのだが。しかし私が第V部を扱うためになさなければならない入場の許可は由々しきにおいて一層に大(much more serious)なるものがあるのである。(書かれた後、線で消されている・・・編者)

第V部は一篇のスケッチであることを目指したものである。・・・(*)・・・他の部門におけるよりも一層に、私は人物的な観察と——非常に断片的な——探索から述べられなければならないようなことに、自己限定するのを望んだ。それ故にこの部に向けられた資料は——疑いもなく痛ましい程に——不完全なものである。しかしそこにそれがあるところのものは生きている。

(*)・・・その導入的パラグラフにおいて指摘したように、私は専門家の標準を上向きに装いはしない。(書かれた後、線で消されている・・・編者)

本書の内容のどの部分をも未だ印刷して発表していない。・・・(以下省略)・・・

ハーバード大学 1942年3月 ヨセフ・アロイス・シュンペーター

第Ⅰ版出版後、第Ⅱ版出版に至る「本書」についての
所感的並びに反省的章句

摘要

資本主義の運命について批判された。「誰をも喜ばせるようするべきであったのか？　だが私は周辺の気分に合わせてそれを他のように書き替えることはできない。」反対に、「何故にフランクフルト学派はこの書に対してピグーと同じことを告げないのか？」。新版ではレトリックを行き過ぎのないよう、またトーンを控え目にするべきである。悲惨なトラブルを告げる場合ですら。それにしても戦後の信じ難い諸状況がある。意志喪失的混乱の誤った展望下に全てを置こうとするイリュージョン、幻想的な危険に対する幻想的な救済手段、アメリカにおける戦時経済からの回復、失業と過剰供給能力、インフレーションと価格・賃金統制。災禍を蒙った世界における絶望的悲惨に根ざす混沌。社会主義に向かう諸勢力と路線闘争、社会主義と民主主義、ロシアを専制的社会主義から解放する為のあと半分の仕事、避け得ない第Ⅲ次世界大戦(それはすでに始まっている)。もし諸君が本当に完全雇用を望み、経済諸活動の無駄を露呈しているような特別の損失を避けたいのならば、更に自由と責任を望むのならば、問題は全く他の問題となる、1)全てはいずれにせよ労働者達に属し、2)その功績は就業の機会ではなくして規律にある、ものだから。・・・その他
(編者)

第Ⅰ版出版後、第Ⅱ版出版に至る「本書」についての
所感的並びに反省的章句

0-(3)-1~25

1 うわべ(仲間)言葉の整理?・・・挫折・・・私は批判されている。・・・私は誰をも喜ばすことを好むべきである。しかし私は他のようにはなすことができないし、周囲の空気の下ではそれを取り消すこともできない。・・・

人々が満足しなかったのはどのところか?・・・

行論——論の展開——は結論を引き出すという追加的操作としても十二分に適切である。但し一点、言及だけがあって判断が何も付されていないことが、時折論証さえなされているとしても、その結論は長期のものではないものしか得られないということが。・・・ニューディール、官僚制、それに労働問題は調和させられている。・・・要約しよう。

2 私を叩いていたものはこれである——諸価値についてのこの破壊は宗教や私的自発性といったものを賞賛する人々によってなしとげられたものだということ。・・・カトリック教会はただ一つの厳粛な要素である。・・・もし我々がボルシェヴィストであるならば——私は属性的価値とは決して争わないのであるから——私は世界はそれに信をおいている人々によって押し倒されるということだけを了解するべきである。・・・大統領と議員は選出される前には真正の「保守派」である。歴史をもたないこの国のトラブルは体質(system)であった。次いで債務国に負債を取り除こうとさせるいくらかの余地をもたらした。・・・

3 本日、46年4月29日、お祈りに際して——このように終始、神に極めて近いところであって——あらゆる素朴さの中で、我々の時代の平和という帰結に向けてのこれがその瞬間だ、と私には直覚された。・・・更にその場合、それとの関連においてそれとは区別されるべき考えが、私は新版ではその類の何事かをなすことができるだろうか、という考えが浮かんだ。・・・それは一つのエラーであろうか?・・・お祈りの中にもエラ

一は来る。そして重要なことは、度を過ぎたことはしない、しかも修辞を次のようにする。すなわち悲惨なトラブルを告げるにも、落ち着いた抑制のきいたトーンで、又、簡潔なスタイルで行う。・・・導入(序)としては、ある地域的な平和についての思想、乃至は省察が？・・・そしてその場合、新しい章にはこの国の事情のみが。・・・「自分の諸利益を以てするこの国の政治(策)に対する由々しき妨害」が、それだけで国内政治の全てなのである。・・・更に全く信じられない。・・・意志喪失的混乱・・・手探り(保守派においても、但し彼らは多少なりの指示を意図するにすぎない)。・・・幻想、それは道徳的価値を破壊し、しかも全てを誤った展望のもとに置き、更に諸事実をあるべき諸事実にとどめ、すなわち願望的諸事実ならしめる。・・・どのように反作用がなされるか。・・・ロシアの資金、それは敵対的なプロパガンダを隠している場合であるかのように読める。・・・それに失業がない。・・・社会主義の背後にあるロシア帝国主義・・・コナント(Conant)は平然と言う。すなわち、あらゆることが起こり得よう、「起こり得る」は、恐らくは、他の一つか二つの国を「成り行きに任せる」ことである。そしてそれが告げられれば、戦争は避けられるのではないかと、そのことが見究められていない。・・・事実、かつてヒットラーが侵略したよりも多くの諸国民がある、フィンランド、ポーランド、ここではセンチメンタリズムは役立たない。

4 社会主義、その諸困難性——何故にフランクフルト学派は本書については、ピグーの著作についてなしたように、同じことを告げないのか。・・・それは「一連の事」(string)なのである。・・・私はこのことを忘れないでおく必要がある！・・・いつでも私は社会不安の中にある既得利益を引き合いに出すことができる——社会主義がそれを除去するであろうような物事のやり方によって——。集团的サボタージュと「農民達」——それはエゴイストの最たるもの——は実際上ありそうな社会主義の下では(そういう態度を・・・編者)ずばり取り止めるということにはならないであろう。・・・

社会主義に都合良しとさせるところの諸力・・・路線の闘争者であろうとする社会主義者達の情念、更に他の者達は等しく民主主義的に数え上げられた臣従者であるだけである。・・・非社会主義者の存在は過失であるだけではなくして、罪なのである。・・・聖パウロのノックにおける従者もまた様々である。・・・どの程度にまで(そしてどこで)社会主義者は民主

主義者であるのか。・・・立場の変換は戦争の論争、である。・・・資本主義は大衆のために何を為すのか？・・・(プトレミーの天動説は正確にかくも快適に旅した。)・・・広告は無駄ではない！・・・練り歯磨きそのものは役割をもつが、社会主義にあっても必要である。・・・

5 本書に対して・・・

独占と運命観、無益性と貯蓄(節約)・・・私の保守的ヴィジョンを事前に示すこと。・・・最終章における諸賃金についての論についての反作用の恐怖、他の労働者の犠牲におけるそれ。・・・労働者の利益は・・・インフレーション・・・計画を事前に示す、不人気な真実、大規模事業の立ち上げ・・・徒労に退化されてはならない・・・論外・・・復興債と不足払いについての妨害された議論

6 本書・・・本書は遊戯風の主題、並びに主題に対する反対論ではない。そうする機会はどのようにもある——しかし本書はそれを採らない。・・・採ることを拒否する、あるいは・・・

本の開始について、それは恐らくはポピュラーな諸源泉を開始点とするのが最も良いであろう。・・・

独占・・・率直な満足・・・

近年の不況、それより我々の時代における革命について、更にその必要性は100パーセントないこと。・・・宿命論——逃げ場がない。・・・唯一の大外衣——但しゲイトにおける守護錠である——がないので、潰れるということはない。・・・諸君は諸君自身を信じることができないのか。・・・空しきもの・・・民主主義と自由・・・

大問題、すなわち、ドイツと日本についてのこと。・・・ヒットラーはファシズムの生み出した存在である。・・・ロシアは押収よりも他の事は決定しない。・・・実処的な諸問題、すなわち、諸君が欲しているところのもの、強制、完全雇用・・・賃金と価格政策上の諸問題・・・自分自身の生活を創出する。・・・私が描こうとしているものは、その有機的全体の中にあるシステムである。・・・アメリカにおける革命・・・獄中における4つの自由・・・自由社会、小ブルジョワジーの国・・・私に賛成して、または私に反対して、何がなされるべきであるか、すなわち「計

画」。・・・独占についてと貯蓄(節約)についての外交的怒号・・・自殺——この大戦、ここでつくられるべき見取り図、どんなものかが注目されるべきである。

7 空しさと敗北主義についての序文的エッセイ・・・第一版の序文において私は本書の来歴を語った。全てはその中に書かれてある。しかし哲学として更にまとまりとしては把握してはいなかった。資本主義と共にあるこの百年の非経済的な事跡が関連に対する判断にとって決定的である。——何も起こっていなかった、となすほど当然であるとは言えない。・・・保守主義への言及——本書。・・・独占と経済学に対する異議と、についてもまた。・・・一つの事件(事情)をもつには適用されるべき事情がある。・・・あって欲しさではない。・・・一個の社会システムの諸長所の認識は決定的なものではない。・・・かの優越したシステムは、それらが良くなつた時に消滅する。アントニウス・ピオウス(Antonius Pious)あるいはディオクレティアンでさえも、プリニウスでさえも・・・

- 8 序文・・・私が準備不足で見落としているもの・・・
- 1) リーダーシップについての、又静態化についての我々の欠如・・・
 - 2) 階級闘争の重要性の喪失についての何事か・・・
 - 3) ファシズム・・・
 - 4) 教会・・・
 - 5) 良質のストックの絶滅・・・
世界諸勢力 対 活力と光輝を失っている問題・・・諸小国を売り渡す・・・
-

- 9 I 第二の変更・・・完全に不可能というわけではない・・・アメリカの労働事情とギルド社会主義について・・・
はっきりと今や他の労働者に反対するストライキがすでに・・・
- II 第一の変更・・・私の指標との比較・・・
- III この国(合衆国)における事情と経済的帰結・・・仮に国家的保障

があったとしても、私的エキスパートの出来難さがある。・・・「そこに守られるべき何かがあることがないならば」。・・・

- 10
- 1) 変更はない。
 - 2) 敗北主義 一より少ないとしても一 表出する・・・
 - 3) 前言はペシミスティックであった。だがそれは私が予想していなかったものである。しかし我々自身をブルジョワジーの立場におき、しかも彼が何も望み得ないということである。・・・利益と安全だけでなく、名誉と礼儀においても衝突することに盲目且つ聞こえず、である。・・・
 - 4) そしてそのようにして手先(他人の道具)として労働者階級と共にする事態となるだろう。・・・

我々はそれが不可能であるところのものを受け入れ、それを信じるべきだとする。・・・我々の下には、だが常にすべてを信じる人々がいる。・・・意志喪失と儀礼形式・・・あるいは最終章において・・・経済と社会事情について、を。・・・「煩わされることになったであろう敗北主義は多大でない」。・・・合理的な闘争は本質的なことであるが、その傍らで我々は完全雇用についてナンセンスを語る。・・・

11 新版・・・

現実に変えられるべきところは何もない。・・・

一層更なる開拓が、但し他の批評家は、このことが一個の新しい要請を招来するのだ、ということを理解できない。・・・はかない・・・

アメリカ人の視角・・・実処的推定・・・連邦物価統制局、諸賃金、諸課税、利子・・・必要な諸事物をファイナンスすることは経済的失策ではない、すなわち、周辺諸条件が状況を不可能ならしめているのである。・・・諸々の事柄が我々の眼前に、我々がそれらを了解できない程に、はっきりと置かれることができるであろう。・・・大企業体の創出・・・完全雇用・・・英国社会主義についての、本当の雇用問題(ベッケ)、それに賃金問題・・・利子問題・・・世界戦争の作用・・・資本主義的な再生産は可能である、しかし・・・悲惨なゲームを演じるにはあまりにも老いている。・・・ギルド社会主義・・・ビスマルクとモーゲンソーについては、私は忍耐なく

しては語ることはできないだろう。・・・赤字財政と均衡予算についても・・・差異はない・・・何故にヘーゲル主義者は資本主義と平和を書かないのか。更に国家の保障を以てする輸出。・・・恐らくは、最後の章で告げることは尚可能であろう、すなわち、かくも驚くべきことは反ヒューマニティ——チンギスハーン——なのではなくして、その全き非合理性なのである、と。・・・すでに第一次世界大戦において、何事かの中にもっと空しいものが、すなわちオーストリア・ハンガリー君主制を破壊した時のフランスと偉大なる成功がそれを再度高揚するようにセットされたであろうところの事と区分することに。・・・それと恐らくは戦後需要・・・そして恐らくは計画が？・・・所得税について・・・ベバリッチとマレー・・・悪徳 対 再建・・・サボタージュ、仰々しく言う、諸君が欲したもの、そして私がそうしたいところのものを。

1 2 「歴史の哲学」があるのだとすれば、私は新しい章でこの視点を前面に設けることができたのでは。

a) 底流をなす傾向

b) チャンスといったもの

帰するところハーディーに・・・

合衆国においてサンジカリズムの可能性があるのは、禁止するどんな社会主義政党もがないからである。・・・

1 3 第Ⅱ版のための哲学的(しかもご機嫌取りの)序文・・・弁明・・・批判に忍耐強く・・・有効なもの何か、そしてどのように・・・そこで、それが先ず第一に、次いで私の・・・が、そして他の事と僅かな事等々と。・・・できるならばの時のみ・・・一つの問題の解決への最初の一步はそれを認知することである。・・・社会主義者・・・資本家・・・

1 4 資本主義のための前言・・・敗北・・・他の類書に比較しての本書・・・有用な剥奪(放逐)が出てこない。・・・しかし今日では人々は疲れており、彼らはイエスかノーかを求める。・・・慰めのための賛成と反対・・・自

由進歩主義についてのオールド・ボーイ達の定義・・・そして最終章では、課税、OPA(連邦物価統制局)、諸賃金がシステムを機能させないために十分なものがあつたことは、全く明瞭であることを。・・・しかもそれは望まれなければならない。・・・凡庸の仲間・・・

15 最終章・・・再び改革 対 回復・・・

同じ構図が描かれようとするから同意が得られない。・・・国が挫折している真只中に資産そのものが輸出されるよりも更に悪いことはない。・・・労働者が他の労働者に反対してストライキを行うことも同じ。・・・ドイツの30年代におけるように。・・・「敗北主義」・・・「熟考する」・・・

16 もし私が最終章を冷静に保っていくことに成功するならば、恐怖と無秩序な破壊についての法則に遭遇し且つ必要でさえあるのか。・・・

17 民主主義と自由・・・逃避主義と敗北主義・・・反民主主義——敗北の一形態・・・友と敵に対する認識が本質的・・・政治的な書物ではない。・・・それは蹶る馬に対しては残忍である。・・・

18 章・・・もはや実処的な諸問題の中にはない。引き続き諸配慮は戦争の作用の社会的構造と社会主義者諸グループの諸特徴に及ぼしたものを含む。・・・イギリス・・・ロシア——流布されている解釈が全く誤っているほどに込み入っている。我々はそれが成功をもたらしているもの他に、合理的専制を認める。他の戦勝諸国と似ておらず、それはこの他にその指導者に対し、その戦術に、聖なるロシアの度を越えた賞金を再要求している。紛争はない。・・・自暴自棄的な被占領地・・・どんなチャンスが・・・休むことなく、また、疲れ果てた逃避主義者、我々は政策に民主主義的政治を求めている。

19 一つの可能性はただ序文の中にある(そうすることでそれは本来的に新しい章への導入となるだろう)。描かれるべき世界状勢、際立った事実、ロシアの勝利——イギリスや合衆国を超える勝利・・・そして、それは専制を強化する。・・・このようにしてロシア国家は次のように告げられること多大である、新しい軍備、新しい災禍である、と。・・・スエーデン、スイス、スペインでさえもの降伏は・・・恐怖とポーランド・・・爆撃を以てするだけの占領・・・ロシア国の性格(紛争ではない)と意志の診断・・・どの程度に「同じもの」のうちにあるか。・・・

更に信じがたい諸現象がある、a) ほとんど明白なことであるが、認知されていない、b) この専制が「自由諸国」に対する同盟関係を保持していたということ。・・・すなわち社会主義の事情・・・問題が主張されることが出来る前に明白なことの再表明。・・・弱い社会に対するに警察の役割を伴っているような冷酷無慈悲な論理。・・・ a) 何が起きるかの予測、b) 状況・・・変化しつつある。・・・

20 序において、何故にないのか・・・ファシズム・・・カトリック教会・・・

21 第一に・・・敗北主義は行論(an argument)ではない。・・・

第二に・・・何かに適用するものではない・・・権利と義務を根拠付けること。・・・

第三に・・・合理的行動に向かっの第一歩は問題に立ち向かうことである(問題を解くこと、それを認識と言う)。・・・
上記についてはうまくいかなかった。「全てのところでなされるべきである」。・・・諸々の消費者銀行は単に行政機関ではなく、そして単に「そうであると、信じられ得る」だけのことである。・・・イギリスにおける第二次大戦時の部局(B)の進化は全く社会主義者の助言を伴った一部門の如くであった。・・・見せかけ・・・なされることのできる全てのこと、それは社会主義者の注目すべき位置。

2 2 新しい版・・・闘っている彼の世界観がある。・・・実処的諸問題
— 無問題・・・厳肅性・・・

a)、b)、c)を阻止するための完全雇用・・・より容易なものは何もない。・・・
ロシアとの紛争——第三次世界大戦——ソビエトとの紛争ではなくして
ロシアとの紛争である——より真正の帝国主義・・・共産主義者の危険に
ついて・・・a) マルクス主義者である、b) リベラルな社会主義は別な
のか？・・・

2 3 序文または章で・・・

道徳的に、及び、政治的に、更に防ぐことを為しえない、そして現今の
諸態度においてそうである。・・・責務は尚一層に大となっている。・・・
逃避主義、あたかも爆弾が唯一の問題であるが如くに！・・・怖いものの
示唆。・・・官僚制が——それを統御する——諸力を創出するならば、と
言っているが如きこの見解・・・(低位利用にある機構に侵害を加える要
求)・・・民主主義は——我々が見究めようとしている権力政治のゲーム
に替えて——方針喪失性を意味する(全ては酒宴に乗り替えられる)。完全
雇用——実処的問題としてのそれ・・・労働者達のあらゆる成果が他の労
働者達のコストの上に得られる、ということの想像上の危険はない
か。・・・ロシアとのトラブルはない——そしてそれはいつも、すり替え
られている。それが理論家のパターン(マルクスと向かい合っているところ
の)である。・・・そこでロシア帝国主義・・・暴利取得者・・・いまだ、
第二次大戦の社会学を書く時ではない——だがはっきりとマルクス主義
的でなく・・・その場合、「如何なる意味において」。・・・

2 4 第二版への序文・・・人間的諸事象に根拠を適用しようとする前判
断——但しそれは次の認識を含蓄する。「なされるべきことは愛と憎し
みに依存する」と。・・・ハーディの不署名(Hardy's no signature)・・・意
図されているものはいつも安楽である。・・・合衆国の対外政策——道徳
的であるほどには正当化され得ない政治学としてのもの——は政策がな
い。と言うのは、政策は国内政策であり、しかも正にユーモアを伴ったも

のだから。・・・

25 新しい章の中に、一案？・・・

誠実性に基づかされている。・・・例えば失業・・・イギリスの課税システムからがもっと良いのでは・・・

明らかに仕事の他の半分がなされるべくして残っており、しかもそれは軍事的にのみ解かれることができる一個の問題に対しては行使が必要である。・・・更に理論上の困難はどこにでもあるということ、人々にそれらをだまして見せようとするものであるということ、政治的に彼等が願望しているものが経済的に必要なのだということ。・・・現実に意図されているものが現実にある場合、そのようにすることだけが、完全に単純であるような諸問題を創出する。・・・デフレーションとインフレーション・・・完全雇用・・・

倒れるには任せられない一個のシステムがある——その故は民主主義的な賛同がないからであるが——それを働かせないよう決定させられるだけなのである。・・・

インフレーションはどこまで利子引上げによって吸収されるというのだろうか！・・・

想像的な危険に対する想像的な救済手段。・・・ケース、防ぎ得ない第三次世界大戦、(すでに始まっている)。・・・

もし諸君が完全雇用を、a) 災禍を避けるために、b) 劣化を避けるために、c) 社会的損失を避けるために、本当に欲するというのならば、経済活動の無駄(浪費)を露呈させること、——幾分かは容易となるだろう。・・・もし諸君が自由と責任を欲するというのならば——何故にそれは幾ばくかのコストと経済的キャパシティの不使用といったことが。・・・アイデアの出来前・・・

全く別の問題、a) 何がどうあろうと労働者の手中に全てを行かせるものであるが故に——彼等は株主(die Aktionäre)である、b) 利点は労働の機会ではなくして規律であるが故に。・・・改革 対 回復・・・完全に真実、完全に正しい・・・

「資本主義、社会主義、民主主義」第2版のための変更

0-(4)

考え方は本書を完全に変化のないままに、そこで用いられている用語上の——支持されているように見受けられる——訂正すらをも行うことなく、世に送ろうということである。そうしないと読者の心の中に、著者が以前に書いた何物かを撤回、乃至は修正しようとする何等かの意向を胸に秘めている、という印象が起りかねないということを守るためである。新しい諸材料は新しい序文と第V部の末尾に追加して一つの章を付すというやり方で追加されるであろう。(第XXVIV章 第二次大戦の帰結)

この序文は、本書の行論に反対して引き起こされた異論に対する他は何物をも付け加えないのであるが、「敗北主義」という非難と取り組むことで充分であろう。いふなれば、分析家が自分が見出した社会の諸パターンや諸傾向を——結果として得られる構図が喜ばしいものであるのかないのかを問題にせず——提示するという権利と義務を再主張することがそれであろう。しかしそれはまた、どのようにそうした分析の諸結果が実践的な政治的使用におかれるかを示すことにもなるであろう。

新しい章は社会主義諸政党の歴史的スケッチをより新しい時期にまで引き上げるだろうものであるが、二つの目的に資することになるだろう。一方において最近の数年間を通じての様々な出来事の行程をこれに先行する分析の枠組みに適合させるであろう、更にこのようにして後者の信頼性のテストと予見のための基礎を提供するものであろう。他方において、それはアメリカ合衆国とヨーロッパの現在の経済的並びに政治的情況の含蓄を論じることになるだろう、そして大戦によって形作られた社会的変化を評価することの試みとなるであろう。そこでは至る所で行われている共産主義諸政党の、社会主義諸政党の融合や他のやり方での、支配の試みについてのいくつかのコメントがなされることになるだろう。

賛成または反対の立場・・・我々は真理に賛成の立場であることはできないのか？・・・我々の行論のための真直な行論・・・最終章のために食味(appetite)をつくる・・・表明はケース——他のものに対する——によって伴われることができる・・・但し(?)に対してそれはあるのではない・・・逃避主義者にある、敗北主義者である。

・・・本書の中にほのかに描かれた歴史哲学へと・・・。それにも拘わらず、それはある導入を必要とする。というのは、その行論は本書の他の部分よりも一層に「敗北主義者」として読者を印象付けるであろう、そこでレッテルなるものは、読者の心からある行論が生じるのを防ぐことにおいて効果的であるが故に、敗北主義と逃避についての短い論考のためのこの好機を用いることが私に見出されるということになったのである。

しかし、他の論点もある。これには私は先ずはコメントを付すのが好ましいとなすべきであろう。多くの読者といくらかの批評家は第Ⅱ部における独占問題についての私の取り扱いにより衝撃を受けたように見受けられるのである。

私の行論は、疑いもなく、確証されている諸事実が扱われている限りにおいて、現代世界には、本書において限定されたような特定の意味における社会主義へ向かおうとする強力な傾向が存在する、という帰結を生み出しているのである。このように設定せよ。この命題はそれが奇抜であるということ以上には驚くべきことは何もないのは確かである。このテーゼのあらゆる奇抜性はその傾向に対し私がもつべき責任のある諸要因の中にあり、それに——実際のところ次の逆説的とも言えるいくつかの批判をうちつけているところの他の命題に縮約されてもよいような——諸要因の中にあるのである。逆説的な批判とは、資本主義は殺されつつある、経済的な失敗によってではなくして経済的な成功によって、更にこの成功がその社会構造に対してもった諸効果によって、と(**Capitalism is being killed not by failure but by economic success and by the effects this success has upon the social structure.**)。私は社会主義や他の何者かを弁護する意図を私をもたなかったことを明瞭たらしめるようにあらゆる配慮を尽くしてきた、と私は考えてきた。それにも拘わらず、私にとって途方もない楽しみとして、私は実際に告発された——・・・の如くでなかったとしても、一度ならず再度に渡って・・・。

(以上の部分は次の論述に取り替えられている・・・編者)

・・・本書の中にほのかに描かれた歴史哲学へと・・・。それにも拘わらず、ある導入が必要である。というのは、私の行論の尚より多くの他の諸部分が——全体としての本書の持つてはいないところの——特定の誤

解にさらされているその状況についての私の諸コメントであるからである。この序文の残りのところで、私はそれ故にこれらの誤解のうちの少なくとも一つ——私の敗北主義と呼ばれているその部分——を清算する好機会を私自身利用したいと思うのである。

本書の行論は、確認され得る諸事実が扱われている限りにおいて、現代世界には社会主義に向かおうとする一つの強力な傾向、すなわち、経済的諸事象の管理が私的企業者の手中から公的権威の手中にと移されていく一つの傾向が実存するという結論を疑いもなく生み出している。このようにおくならば、叙述はそれが奇抜であること以上に驚くべきことは何もないのは確かなのである。奇抜であるところのもの、それにいくらかの読者によっては驚かされていると感じさせられたであろうところのものは、私が呈示したその傾向のもつ動機なのである。しかしながら、何等かのそうした傾向の存在の認知または否定は、それが指示している方向に向かおうとする到達点を我々が愛するとか憎むとかとは、論理的に言って全く関わりのない問題なのである。私はそのことを全く明瞭ならしめるようあらゆる配慮を尽くしてきた、と私は考えていた。そしてとりわけ、誰かが好まないいくらかの事件の予言の中にも背理的ではないということである。それにも拘わらず、私を途方もなく喜ばしたものとして私は実際に咎めだてられたのである——一度ならず再三に——私が「外国の集産主義を説いている」として——私が知っている限り印刷されたものはなかったけれども。

私に繰り返させていただきたい、そこで、「私は何事をも提案していない、私は何事をも押し付けていない、私は露呈しておくのである」(je ne propose rien, je n'impose rien, j'expose.)。すなわち、私は如何なる説教もなしてはいない。私が行いたい全てのことは、保守主義者にも社会主義者にも等しく便利ならしめるために、何故に諸々の事物はそのようであるのか、及びそれらは何故にそれらが動こうとする道程において動くのであるか、を説明することなのである。更に進んで、資本主義が「死の審判を受けて」いる、及び社会主義が「不可避的」である(capitalism is "doomed" and socialism is "inevitable".)と言う時、私が抱いて意味を規定するのに私はあらゆる注意を払ってきたと考えていた。もしその内在する理論に従ってそれ自身が働き尽くすことが許されるならば、あるいは同じことであるが、もしそれを排除しようとする傾向が出現しないのならば、社会主義をもたらすであろうという先述の傾向の存在に至るということ、これが私の構築しようと思っている——そして私は尚もそれを構築

したと考えている——ものの全てなのである。

この論述が何等かの特定の国における諸事物の実際の行程についての予言を意味しないことは明瞭とされるべきであり、諸事物の起きる時機の宣託であることは尚一層に乏しい。起こり得る諸事実のしかるべき集合の集約に資す、ただそれだけのことなのである。その命題が社会学的決定論を語っているのでもない。と言うのは天文学の体系とは似ておらず、社会現象の体系は一意の決定を許さないのである。そしてこのことが可能ではないとなると、決定論は唯物論的形而上学の教条に還元され、そこで——それ故に——科学的意味——または「操作可能な」意味をもつことを止めるのである。仮にそれが何等かの意味をもつとしても、それは運命論あるいは——資本主義的文明の立脚点に基づいて言えば——敗北主義として扱われるべきものは何ももたないこととなろう。何となれば、これらの言葉は行動している人達の諸態度を呈示するものであり、観察者の諸態度には適用できないものであるからである。諸事実はそれら自体、だからして、諸事実についての表明は決して敗北主義でもその反対でもありえない。

(*) 敗北主義は、もし何事かを意味するとすれば、いくつかの諸グループの敗北の予見、あるいは敗北主義者がそれを以て自身を同一視するところの動機を意味する。本書において、あるいは私の科学的な仕事一般の中で一貫して私は私自身をどんなグループとも、どんな動機とも同一視していない。

しかし私は、まさしくこの行論によって、ほとんどの人々が多くのより更なる打撃となるような負い目と考えるであろうところのものに、私自身をさらしたことはなかったか——無価値であることの負い目——？ 本書に呈示されたような膨大な不吉な諸事実、とりわけ資本主義社会の解体過程がはるかに進んでいるという諸事実、それらが実務上は関係なしとすれば、一体どのようにして敗北主義以外の何事かを示唆できるというのか？ よろしい、ある船がゆっくりと沈んで行きつつあるという趣旨が盛り込まれた一部のレポートがもつその実践的諸用途を想定しよう。船を浮上させんが為のクルーによってそこで採られた諸手段は、事実上、無価値でありえよう。そしてそのレポートを受理した精神は——そのレポートがそこにはそれを無価値と呼ぶことの中に、そこにはそれを <例えそのレポートが「それについて何がなされるべきか」の設問に向けて進められるものではなかったとしても> 敗北主義者と呼ぶよりも利益となるもの

は何一つないという内容のものである限りにおいてだが——事実上、敗北主義者でありえよう。一個の問題の解決に向けての第一歩は、そのケースの諸事実を検証することである。そうすることを拒否する者は逃避主義である。逃避主義者の態度は不吉なる諸事実の率直な呈示であるというよりは深く根を下ろした敗北主義の一層増幅された呈示である。時折、それは放棄の一形態である。

読者はこの新しい章を精読する場合、このことの全てを心に留めておくことが要求される。第二次大戦の社会学を書くには時機が至っていない。しかしその帰結は当然あるべき疑問を超えてはつきりしている。何であれ、今次の大戦は、私が第一次大戦の帰結について語る場合の様相を更に加速している影響として、私が叙述しているものを抱懐している、しかもその影響は、ロシアの勝利がその敵に対してだけでなくして、その同盟国に対しても覆っている、ということの政治的意味合いが支配している事柄によって複雑化されている。諸々の物事の単純な状態から創出されているものであるところの滲透しつつある逃避主義、あるものはこれだけである。更に逃避主義は、またもやそれを敗北主義者と呼ぶことによってその章の行論をそのようにおこうとするであろう。私が望みうる唯一のことは、いくらかの読者がそうはならないだろうということである。これらのことすらもが、「何かなされるべきか」に関して、助言をあやまることになろう。

但し本書は政治的な著作ではない。叙述と説明(「分析」)は私の選んだ仕事である。私は私のなしうる限り、ベストに、それを完成したい。そして私がそのようになすことの唯一の途は、それをまもることなのである。慰めと助言に対しては、私は読者に対し、それを身につけている人々たるように任せる。

タコニック、コネチカット、1946年3月

J・A・S

第 I 部 マルクスの体系

- (1) 歴史の経済的解釈
- (2) 経済学者 マルクス
- (3) オストロ・マルキストなど
- (4) その他 雑録

(1) 歴史の経済的解釈

摘要

自己推進する経済機構の存在、それは経済的諸過程を変え、自身の生産諸条件を変えていくが、その傍ら上部構造にも変化を強いる如きやり方で作動し、更にはそれらに内在する諸々の必要に即し次なる段階乃至は体制を——単に自らの作動によるだけで——つくり出すといったように自らを変えていく。マルクス風の社会動態論、いくつかの基礎的な原則の光の下に、人間存在の諸紛争と諸浮沈についての構成を成功裡に与えるものであるかのようなものである。しかしその儘のものである限り真実から離れている。それにも拘わらず、弁護され得ない部分が削除されたとしてさえ、その土台部分は多分に残されている。その中には、資本主義の古い構造が立ち去り、次なる段階の新しいパターンへの変換があり、次から次へと、最後には社会主義に向かう、という多くの局面がふくまれている。・・・その他
(編者)

第 I 部 マルクスの体系

I—(1)—1～19

歴史の経済的解釈

1 社会生活——経済的な歴史の把握。・・・そこにブルジョワジーとしてのマルクスがある。

シュムペーターの歴史の経済的解釈は本書を貫く彼のヴィジョンであり、第Ⅱ～Ⅴ部の集約・総括はこれによっている。そのオリジナルとしてマルクスの唯物論的解釈(**the materialistic interpretation of history**)をおく。但しマルクスの哲学はヘーゲルのそれより唯物的ではないし、その歴史の理論は歴史過程を経験科学の要請のもとに考慮しようとするどんな他の試みよりも更に唯物的だとは言えない、形而上学的乃至は中世神学的な色彩すらもつ、とする。それにも拘わらず、第Ⅰ部にマルクスの教義をおき、全篇をその見直し——超克的発展——の装いを持たせたのは歴史の経済的解釈の故であろう。シュムペーターはこれを2つの命題に縮約する。

(1) 生産の諸形態と諸条件が帰するところ諸態度と諸行動、それにその文明を育む社会構造の基本的決定因子である。

(2) 生産の諸形態そのものがそれら自身の論理をもっており、それらはそれらに内在する不可避性に従って——それら自身の働きによるだけでそれらの後継諸形態を生み出すといった如くに——変化する。

第1命題は下部構造の上部構造規定の決定論であるが、シュムペーターはそれよりも第2命題の方を重視する。経済発展の展開過程とその結果もたらされる社会学的組織構造の変化——新機軸と選抜・淘汰(**innovation and selection**)の結果として——についての命題である。(以上・・・編者)

2 語るに勝る！ 見よ、眼に浮かべよ。

3 我々は目に浮かべる(**visualize**)ことを試みなければならない。あるいは

は再び戻って精神に対しても。・・・差、差当たってはこの作用とその変化を解明する。・・・

何を選ぶのか？・・・経済的解釈にまで遡り、そして分析をそれに役立たしめる。・・・ifを持ち込むこと、但しそれには制度的にのみ。・・・全くオリジナルではない。・・・

経済学(者達)はそれをなさない。彼等がなすのは生起したことの検討である。それがゴールというだけならば、問題はない、だがそれでは一個の理論たりえない。・・・

しかし誤った階級理論、誤ったヴィジョンは全てを墮落させる。社会主義は予見され得るのか？ そうではない。・・・犯罪的ではない。歴史家のように。・・・

判断することは難しい、欠点を改善することも難しい。・・・すぐさま了解された、留保のことすらをも、・・・あらゆる段階は歴史的に考察される。

4 全ての社会的状態は次なる状態を「それら自身の枠組みの産出として」生み出す。・・・保守することもありそうである。・・・私の社会主義判断は、これまた経済的な歴史の把握に即している。・・・ヴィジョンを。

5 経済的な歴史解釈について尚考察を進めることになろう、恐らくは。・・・手押し粉ひき機・・・イデオロギーは蒸気でも煙でもないことを尚できる限り述べるだろう。・・・不可避性の論証・・・ランゲとスウィーヂイ！・・・

そこで階級！・・・歴史の階級闘争把握はそれほど悪くはない、私がそれを告げねばならないほどには！・・・そして「諸事実(与件)」・・・

ブルジョワジー国家は自由貿易を採った。

6 自らの推進力を必要としないプロペラ。・・・経済的な歴史把握は主要な体躯を全てが不可避なものとする行論のなかにある、とすでに述べた。そしてこのアスペクトは尚受け入れられる！

人間存在は、何故に彼等は闘うか、を示している。・・・社会主義公共機関(Gemeinwesen)の計画、社会主義的政策・・・

7 階級理論を欠く——マルクスとヘーゲル、倫理的唯物論を欠く——ベルンスタインとエンゲルス、我々が立ち入るべきことでもない。

ブルジョワ的なもの・・・社会的 — 経済的範疇としての資本・・・価値は単純に価値である。・・・機械的な蓄積・・・会計は貨幣の作用の中の社会主義的要点であるのかも。・・・オリジナリティがある。・・・

イデオロギーとしての心理学に対する留意・・・社会科学・・・経済学一心の訓練

8 マルクス——心理学への留意・・・見かけの背後にある把握・・・イギリス史・・・諸階級と生産形態・・・その限りでそれは歴史的である。

挿入、ウェーバーとフォイエルバッハ・・・特殊的で経済的範疇を備えた諸階級・・・

剰余価値——ロードベルタス・・・それにエンゲルスも・・・社会的で経済的な範疇・・・

9 マルクスの魅力ある説明構成の成功は、直接的で且つ深いものがあつた。人間存在の争いと浮沈がいくつかの基本的諸原理の光の下で秩序だて

られるのである。もっとも身近なところにある諸々の秘密、歴史の最深の意味、それが赤裸々にそこにおかれているようにみられた。とりわけ、筆舌に尽くし難い退屈の経験に由来して嫌悪された経済理論の乾ききった骨組みや象牙の塔に奉仕し尽くす歴史家達のそれに劣らず乾いた骨組みから、突如として、秩序だった「死の勝利」(“trionfo del morte”)の下に燦々と輝く遙かなる頂上へと動いているところの実生活に至りつつあることを見出した、と啓発された若者の熱狂に我々は気付くであろう。今や自分達は日々の政治の操り人形達を見透かしており、事物の核心——灰色の頭を振って「それはそうではない」と論じることで軽侮を買っているだけのあらゆる職業的権威達によっては否定されるものではあったが——を了解している者として認められた、と感じたのである。

10 更にはるかに重要なのは、マルクスが社会的研究についての一つの新しい目標と一つの新しい方法に貢献したことである。経済生活の歴史過程の理論の可能性を洞察し、しかも歴史的パターンの現実のバラエティを解釈する用具として、理論に必要なあらゆる概念と命題を探求した。一般化——通常は命題なるものは一般化が行われるほど、もたらされる内容が損なわれるのであるが——によって特定の事実の何をも失うことのない「真実についての強度に一般的な思考装置の極限」——この中へはヘーゲリアン的な何物かがあることは疑いない——を探求した。彼は一般化が中味を損なうという必然性を否定し、しかも引き続いてその否定に驚くべき程度における成功をもたらした。そこでは経済の進化を分析するため彼以前になされた試みの全てが、彼の成功と比較される時、無意味なものに転落したのである。諸々の古典もまた歴史的諸背景を描きはしたが、資本主義過程の叙述とは程遠かった。古典の作家達はまた自分達が見出したものに外挿を試み、その上で一定に保たれている自然的諸資源と結合する資本と人口の増加といった要素から変化の構図を発展させようと試みた。しかしこれは、かの壮大なマルクスの社会動態についての概念に追加するものは何もないという程のものであった。マルクスの概念は、たとえそれを以て解明しようとしたあらゆる諸方法、諸原則、諸結果が誤ったものであったとしても、その価値を保つものであった。

1 1 並びに多くの(若者と)同じ弁解をなしえない知識人達がある。彼等は単純に出来の悪さの故に権力への志向同様、分析への志向からも永久に排除されており、それについて(若者と)同じ道を感じる。だがこうした背後には一層重大で、しかも本質的であるような何物かがある。近代的分析が——理論的分析であれ、歴史的または統計的分析であれ——マルクスの行論と相対する時は、後者(マルクスの行論)が打ち負かされることは確かである。芸術家の場合、最高の業績に登りつめたならば、その業績は数世紀に渡って重要性を保持するという特権がある。科学の場合そうではない。我々経済学徒は我々が進歩させた程度の業績で悦に入っている根拠はほとんどない。それにもかかわらず進歩に取り組んでいかなければならず、しかも時から時へと時の流れに由来して蒙るところのあらゆる挫折に抗して我々は前へ動くのである。とりわけその過程で理論分析のテクニックを作り上げてきた。この用具にはマルクス主義者は競争し得ない、しかしその一方でそれを作り上げるコストの中には専門化、無味乾燥、それに盲従があるのである。我々は以前の世代の人々が成し遂げたよりも遥かに満足のできる様々の貨幣的、非貨幣的メカニズムの詳細を提示することができる。しかし理論は、その過程で今まであった赤々と燃えている関連物を失う。このことは避け得ないことであり、他の科学が時代遅れとなるや崩れ落ちてしまうのと比較すれば、悪い運命にあるのではない。とは言え、マルクスが自ら課した仕事は残されており、且つそれは我々が駆使できるより良き分析装置と、より大なる実証的資料と結合して企てられなければならない仕事であろう。この点においてマルクスの冒険は我々にとって失われてはいない。

1 2 マルクス主義者は非マルクス経済学を「ブルジョワ的」として叙述する習慣がある。この言葉はマルクスによってそれに与えられた元々の意味が失われたものである。マルクスは自分自身はブルジョワ的経済学者と規定している。十九世紀タイプの資本主義世界が終結をなし、社会的進化を完成させ、無限の彼方に送り込まれる、そうしたことを信じている一人の経済学者という意味においてである。これは少なくとも科学的基準に即してその言葉を定義するものであり、それに労働者達だけがそうした信念に耽るどんな残された経済学者もいないという不利益のもとにおかれたことを示す言葉であった。・・・後になって、彼等が無能であるか、またはブルジョワジーの利益の愚鈍な防衛者であるかにあたる言葉となった。

13 今日、充分且つ素朴な意味で一個のマルキストになり得る者は誰もいないし、しかも同時に自分は科学的分析を公平に扱っているのだと装うことができる者もない。もし彼が真実に立脚しようとするならば、非常に異なった構図、それも重要な点で異なった、更にいくつかの点では反対の含蓄をもった構図が出てくるであろう。しかしながら、支持し難いものが放棄された後、尚、土台は残るところが大であることは少なからず明らかである。

こう進む限りではマルクス自身は、彼の際立った諸資質の故に、彼の提携者達や追随者達——無批判で視野が狭かった——のいくばくかよりも悪い位置にあった。彼の諸資質の中には、一方で事柄の論理についての鋭い感性があり、他方では文化的価値についての鋭い感性があった。我々には共産党宣言からの我々の引用に戻って関説するだけが必要である。ひとたび、それだけ多くのことがブルジョワジーの時代の必然性と諸業績の双方につき認められるのなら、引き続く搾取についての燃え上がる攻撃はその確からしさの多くを失わせるものである。奇妙な設問が自動的に設せられることになる。マルクスの意味であれ、その他のどんな意味においてであれ、搾取は文化的業績の必須の先行条件ではなかったか、その時代というのは、実は過去の時代ではなかったのか、と。搾取という言葉は、そこで、その毒牙の多くとその意味のもち得るところを失うことになるのである。古代ローマ人達が奴隷達を——叛乱を起こした時に——処理した方法は、古代世界にそのヒューマニティに対する特殊な意味を与えるような、全てのこととの不愉快な結縁性を獲得するのである。今日では、賃金目録以外には社会的世界の中にあるどんなことをも洞察する能力がないという、そういう資質によって社会主義者のポーズをとる野蛮人達があり、その親方であることが——マルクスがそれらの全てにつき当惑することがなければ——マルクスの権利の枠内にはあるのである。しかしマルクスに対してはこの憐れむべき権利は否定される。

14 今や我々はそれ(歴史の経済的解釈・・・編者)を構成する2つの命題の第2の命題の信頼性に一つの意見をつくり得る。内生的または自己推

進的といえる経済的進化に対して、あるいはまた、でき得る限り平明にそれを設けるとして、資本主義社会の経済過程は——正にその構造からして——それ自体を革命化し且つどんな与えられた時代にあっても向かうこともあろうそれぞれの均衡状態を破壊せずにはおかないという命題に対して、マルクスは自分のケースを確立することにどこまで成功していたのだろうか。回答は、私は信じるものであるが、マルクスはそれがそうであると正確に認知してはいたが、当該命題の論証には成功していなかった。

更に正確に類似の回答が上記設問の背後にある設問に対して与えられている筈である。この経済的進化はその制度的枠組みを常に社会主義が不可避免的に結果するようなやり方で変換していくであろう、という確信をもつことでマルクスは正しかったかどうか。資本主義マシーンをどこまでも——我々がどんな時代にあってもその運行を見出すであろうようなどんな状態からも離れていくように——展開させるであろう諸要素が存在すると主張している命題が正しかったかどうか、これを事実認識上の設問として提起するかたわら、今や我々の前にある命題は特定のコースを採りつつある未来の発展についての命題であるということ、これが解明されるべき第一の事柄である。

15 今や未来の出来事についての諸命題または予見(**forecasts**)は——言葉の厳格な意味での予言(**prophecies**)でないならば——現在と過去に作用してきたメカニズムへの固執を仮定しているという意味で仮説的である。天文学上の出来事の予言ならば、それが損害を与えはしないだろうことは確かだと安心しておれるので、それが仮説であることに敢えて言及する必要はない。しかし社会的分野ではそうはいかない。従ってマルキシアンの諸命題は、すぐさま「もし我々が観察している過程が正しい道を探り続けるならば」、という但し書きによって修正されなければならない。全くの正統派マルキストといえどもこれを認めている。一事例として、ヒルファーディングのような真にマルクスの厳粛性の中に浸っているような人物が、「資本主義は言ってみればその重さの故に崩壊するであろう」という理論は棄てる必要がある、と考えたことを以前にほのめかした、という事実によってその根拠を示すことができよう。ヒルファーディングが描いたこれに替わるものは「大企業の累進的統合」であるが、これは恐らく特殊に納得してのことではない。というのは、そうした機構は帰するとこ

る「一種の官僚制社会主義」への接近に向かつての明白な屈折を示すものであろうから。ともかく、それは多くのあり得ることの一つでしかないが、我々がそれを承認するやいなや、他の可能性を排除できなく、そこで、その本来の位置に負荷されているところの決定論はどこかへ行ってしまうことになる。

16 しかし行論の筋にもう一つのものがあるようにみられる。その筋はマルクスが実際に取り上げた教条と少なくとも同じようにそうしているマルキシアンの信条のファンダメンタルズとの一致部分である。マルクスが展望したタイプの崩壊を期待することは完全にナンセンスであろう。窮乏化の理論が事実と反している、資本主義過程の正確な分析から実際に期待できるどんなものとも反している、このことは同じである。しかし資本主義生産の諸条件が「人間性の心的状態と文化的外観」を「行動と思考の諸習慣の資本主義的様式」からかけ離れたものにさせるよう変換されることはありうる。資本主義的な経済行動が、一方において企業者乃至は資本家と工場内にある煉瓦や原動機の間と与えられた密接な関係を破壊するならば、それは資本家がかつて産業のキャプテンであることを意味していた、その領主的位置に関わった全てのものを摩耗し尽くすこととなり、他方において資本家が依って立つところの家族制度と生活様式の中の動機の体系を破壊するならば、それによって財産が保たれている掌握力を解きはなしてしまうことになり、その世代は資本主義社会のあらゆる標識灯が正に意味を失うところにまで進化させられることにはなりはしないのか？ これは実際に起きることではないのか？ そしてマルクス主義者はこれで充分ではないのか——我々は結局において悪い理論の疑わしいきらびやかさを欲しているのだろうか。

17 この社会—心理学的過程が、多くの重要な点で社会主義を招来させようとする諸要求——とりわけあらゆる生産手段の上に社会的統制をおこうとする動機——となるような、いくつかの事柄の首位にあることは疑いない。この過程を外部から妨害しようとする諸々の事件は疑いなく屈折したものであろう。それを永久に押し込めようとするとも考えられる。しかし現代資本主義の社会システムの枠内では、こうしたことがありそうだ

と示す何物もない。

18 この過程は文化的並びに政治的補完物のもつ極めて幅広い変異種の枠内で進行できるものであること、並びに社会的オーガニズムの権威主義的諸形態がそれに関与する必要は必須のものではないということ、が特に注意されてしかるべきである。民族主義者の独裁下の社会主義は職業的社会主義者の言葉を以てすると社会主義とは認められないかもしれないが、科学的分析の冷徹な雰囲気の下では全て同じく社会主義のラベルを貼られなければならないであろう。社会主義者である人々のうちの多くが自分達が愛育する理想を——彼等をして資本主義社会の自由と民主主義を渴望させるであろうものと同じやり方で——今や求めるであろう、というそういう諸状況を求めて我々のいくらかは生きていくだろうことは全くあり得ないことではないのである。資本主義社会の最上層の人々が時折彼等を没落させるような書物の正にその出版の費用負担をなすといった優しさを身につけているのもそうである。社会主義者達の多くは、その場合、これは自分達が闘い取ろうと意図してきた類のものではない、本当に考えているのは自分達によって運営されている場合のみの社会主義であって、そうしたものは他の事柄だ、と明白に言い張るであろう。これが成り行きであるべきだとしても、マルクスは彼が来るべきものの本質的諸特徴を——その定式化は不正確であったかも知れないにせよ——正確に見通していた、という補足を受ける資格がある。

もし私が私の含意を伝えることに成功していたならば、「社会主義の必然性」についての更なる言葉は必要としないであろう。しかし進化と革命の間の正確な関係がその師の考えの中で如何なるものであったかについて、マルキシアン達が経験する困難から出てくる一つの道を同時に示唆している我々の行論を我々は追加してもよいであろう。

19 華々しい革命が、想像に火をつけようと企図しているようなどんなポスターにも、「特徴づけられ」なければならない、ことは疑いない。更に次のことも同じく全く理解できることである。すなわち、ある具体的なアイデアに熱病的にとりつかれた人は誰でも、それについて語りつつある

時とそれに関連して行動している時には、自分が書齋に戻るやいなや至極当然の事ととらえられるような諸結論や諸態度を用いる術(すべ)を容易には見出せないだろう、ということ。このようにマルクスは疑いなく革命を説いたのであり、エンゲルスは様々な戦術を——来るべき物理的な衝突の中で自分の役割であるとはっきり意識していたものための準備を整えんが為——研究するという辛労に実際に赴いたのである。

しかしこの種のことは、もし我々が思想家の審判に赴こうとしているのなら、考慮から外さなければならぬ。彼の全体系は歴史的因果連鎖の論理の中での最も硬い信念に基づいたものであるから、マルクス自身の諸標準を革命家達に共通した小児病的諸態度と共に分かち合える程にそれほど引き下げることで彼を非難するなどはでき得ることではない。同時に、彼は制度的構造物には内在する慣性の作用をもとより明らかにしたのであり、社会主義の実現への最後のステップとして革命は恐らくは必要だと考えていた。しかしそれは革命一般ではなくして時の充分性の下での革命であり、このことがあらゆる他の人達との差をつくっている。誠実なマルクス主義者は誰彼なくロシア革命——それは彼等に受け入れることができる解釈を許すコースの恐らくは埒外にあった——との関係でこのことの含蓄が指摘されることに苛立たされたのである。

(2) 経済学者 マルクス

摘要

社会的・経済的カテゴリーとしての資本、労働量価値、剰余価値の変換としての貯蓄乃至は蓄積、資本家達による全剰余価値の搾取、競争の圧力下に行われる一層多くの剰余価値を求めての労働節約的機械への不断の投資、絶望的紛糾へ投げ込まれるかたわら労働者の産業予備軍とも結合した窮乏化、景気循環、淘汰的集中、そして崩壊。経済分析の技術で見ると限りマルクスはリカードの最初にして最後の弟子であった。平均概念による——実は偏差こそが重要なのだが——諸価値と諸価格の把握、平均的状况からの推論は彼の単純化された社会学と弁証法的社会哲学に結合している。静態的均衡下では剰余価値は絶望的に支持され得ない。とりわけ「労働」という商品には決して適用され得ない。更に言えば、競争を搾取ゲームにまでもたらず諸状況は企業者機能による動態過程の中にこそ存在するものでなければならず、これこそ如何なる他のルーチンの過程よりも遥かに重要である。この機能の創造的局面を通して諸事実を探查するならば、窮乏化や集中の諸相はマルクスの呈示よりずっと異なって見られよう。一連の分析における失敗、それにも拘わらず、その背後に現れる何かがある。この何かは経済変化の歴史過程の理論モデルを構成する。・・・その他
(編者)

I—(2)—1～23

経済学者 マルクス

1 マルクスについての篇の下で・・・

マルクスは均衡状態でもって推論してはいない、そこで搾取すらもが正当にあり得ることだとさえ解釈する。

2 一人の経済学者としてのマルクスの理解は——技術的な点に関する限りで、だからして——「彼が最初にして最後のリカードの生徒であった」という事実から始まる。

時間モデル・・・リカードの観察律(Betrachtungsgesetz)・・・

3 しかし不変資本(constant capital)の利潤喪失性はこれら全てに回帰しなければならないのであろうか？・・・資本の理論・・・リカードの観察律

進化かまたは革命か：くだらない論争・・・時の充分性をもった革命は「革命を以てしては新しい状況が創出され得ない」ということを知っていた。・・・だが、そのヒューマニティは！！

4 国民の生活内実が一個の理論である——そうしたことが論理的に可能であろうか？・・・恐らく他に多くのものが。・・・宣託——それは他と同様ではあるが、一つの功德である。・・・利点も欠点もない。

諸作用の複綜・・・かくして何がマルクス風のことなのか？——更にそれは可能なのか？・・・そして私の限界理念(Grenzidee)に対してそれはどのように向き合っているのか？・・・
ある状態がそれ以前の状態によってはっきりと規定されている(平均の概

念に対して残余のものが重要)、という意味での一個の明確な規定(この意味での平均)。

5 幾人かのマルクス学研究者に従って、それが際立って本質的であるかないかは別とし、我々はマルクスの労働数量価値が単に社会的所得の総体を労働所得と資本所得に分割することを演じる用具として資させようとする見解をとる。(個々の相対価格の理論はそこでは第二次的な問題となる。)というのは、我々が今、検討するだろうように、マルクスの価値論は——我々はその仕事を個別価格の問題から分離することができるとなす限り——その仕事に、帰するところ、失敗しているということになるからである。

6 マルクス——彼のより深い重要性・・・
その中にある本質——消費支出に対する赤いチェックの必要性を示したこと。

7 マルクスにとって、貯蓄と蓄積は「剰余価値の資本への転化」と同義である。貯蓄への個別的な試みが必然的且つ自動的に実質資本を増大させるものではないが、私はこれを検討課題としようとは思わない。今日多くの経済学者達が——その中ではケインズ氏によって導かれるか、または影響を受けている諸グループが際立っているのだが——これを否定し、時にはそれをしてある確からしさを現わさせようとする論点とは反対となる可能性があることを強調している。しかし不正確ではあるにせよ、マルクスの見解は、ここに私が挑戦する価値ありとは考えないほどには、真実に多分近いように私にはみられる。

8 偉大性、諸帰結の双方が社会的なものと結びついている・・・
だが、その理論には欠点がある・・・ケインズの判断・・・もう一度地

代論を・・・アジテーション的・・・彼の理論は歴史的であったのか？・・・

 利率の低下といったこと、第Ⅰ巻と第Ⅲ巻・・・人間による人間の搾取・・・この理論は歴史的であるか？・・・
 経済的な歴史把握の「滲透」・・・動態論・・・範疇的精緻性・・・

9 マルクスはあらゆる彼の哲学的造詣を以て——尚本質的に——一個の動態論を構築した！ だが均衡理論と発展理論の間の諸関係を正しく検証しはしなかった。・・・彼にはそうしなかったことが多すぎる。

[V]における集中と更に総崩壊・・・そして与件変動(Datenveränderung)・・・外的事情・・・

10 理論——誤っている、技術的にもヴィジョンにおいても・・・企業者—資本家としている・・・窮乏化——相対的窮乏化である。・・・それらが改善されたとしても・・・動態的—進化的・・・更に魅力的；政策の解明、更に起こった全てのことをも！・・・政治の包含・・・そして第二命題は経済的に異なった路線に属する。・・・人間の性質・・・地代理論・・・Vに至る。

 帰結：社会主義への発展とは如何なる意味のものか、a) 進歩においてどの種の意味か、b) 私の理論——だが何を以て社会主義と呼ぶか。・・・どのようにそれはヒットラーリズムと関わるのか。

11 歴史の経済的解釈が如何に価値のある用具であるか、に注意を払っておく必要がある。門人達は歴史のもつあらゆる秘密に対する比較的単純な鍵を受け取り、それによって諸観察と諸理念を整えさせ、時代を同じくする諸事象を配列させる見取り図(uniform schema)を受け取った。・・・世界中のどこにおいても生起している事柄が、マルクスの章句の光の下におかれると単純にして明瞭なものとなる。・・・そうした分析ですら非社会主義者の論文内容に比して大きく優れている。歴史の経済的解釈の不出来な姉妹である社会階級についての理論ですら、もしそれによってプロレ

タリアの自覚という理念の中に叩き込む用具としての価値の故だけならば、その場合我々には違ったように見える。

1 2 マルクスに従えば、資本主義の世界に対しては——もっと早期の状態がもった一層に複雑した構成にとって代わって——二つの社会階級だけが存在する。ブルジョワジーとプロレタリアート。両者の性質を区分するものは財産所有の有無、持てる者と持たざる者の差である。この高度に単純化された構図は——歴史は階級闘争の歴史であるという命題は——マルクス自身により、ブルジョワジー内部の諸グループ間の、並びに異なった諸国のブルジョワジー間相互の、戦いの承認——それは彼等が封建グループかまたはプロレタリアグループと戦った、または戦っているのと全く負けず劣らずの頻度で戦っていることの承認——によって修正されなければならなかった。修正は理論を事実と明らかに衝突することから救うかたわら、その心臓を引き裂くものである。更にブルジョワジー優越の初期の時代には他の人達より有利な位置には全くなかったいくらかの人達による財産の獲得の問題がある。マルクスは当然この問題を解いたが、貯蓄といったものについての「子供じみたおとぎ話」に触れる気乗りのしない解決であった。

このようにブルジョワジーの階級的地位の起源は、依然ダークの下にある。その後のブルジョワジーに向かってなされる非ブルジョワジー要素の不断の高まり、並びに階級的機能の充足に耐えられない家族のブルジョワジー階級からの離脱——すなわちワイシャツ姿からワイシャツ姿への三世帯——がある。この現象はマルクスの追随者達によって無視され、みるべき研究成果はない。財産所有を以てする階級区分とそれに即した敵対関係の諸原則がその全てである。

1 3 マルクス自身は社会階級につき、どんな理論をも発展させなかった。ただ理論構成のための礎石と原動機を提供した。フランスにおける階級闘争の歴史はその優れた例である。・・・ただし現象をもっぱら経済的な語句で試みていること、並びに全ての事柄を生産手段の上に支配権をもつ、もたない、の人々の間に設せられた非現実的でしかも二次的な区分の上に帰せさせようと試みていること、等は正にマルクス自身が創設した諸困難

に対応するものである。すべての点でエンゲルスの社会階級の理論は、マルクスの諸基礎の再生でも運用でもなく、マルクスとエンゲルスは分業関係のものであった。そうは言っても、歴史の意味付けである階級闘争のスローガンの追随者に対する訴えは、それによって切り下げられるといったことは全くなかった。

14 分析における一連の失敗と益々大となっていく章句——それは疑わしい宝石を研磨するような誤った社会学と結合している——の失敗。これは今日の有能な経済学者達の大多数がマルクスの経済学にためらいなく与える評決である。しかしこの評決の中にある確信を揺るがすであろう事実を考察することに失敗があってはならない。如何に荒々しく我々がマルクスの予言と修辞を裸にすることができても、その背後にそれ自身の意味と価値をもつ何物かの全容が現れてくるのである。更に如何に厳しく誤りを責められようとも、何物かが残されるのである。この何物かとは、経済的变化の歴史的過程につき一個の理論モデルを構築しようとする試みである。

その意味するところを明らかにせんがためには、歴史の経済的解釈とそのマルクス体系全体に対する根幹的重要性につき言われてきたことを想起しなければならない。我々は今やそれを分解した二つの命題の内の第二のもの——社会生活の中の経済的要素はそれ自身の中に進化的推進力を含んでおり、その推進力たるやそれ自身のロジックと必然性により生産の社会的並びに経済的諸条件を変更し、更には第一命題のおかげ(徳目)で他の全てのことを変えていくとするもの——と取り組んでいる。そしてマルクスの純粹に経済的な行論——彼の経済分析、つまり我々が通常「理論」と呼んでいるもの——は、何故に、且つどのように経済機構がこれほどにも絶え間なく変更され続けるのであるか、全ての経済構造(社会主義のそれを除く)が生み出す発展妨害的諸力は何であるか、更にそれらの諸力はどのように別のしかるべき構造をもたらすよう、且つ併せて他の文明の社会的諸条件をもたらすよう働くのであるか、を示さんがために必要な概念的用具の装置を提供する目的に資するものなのである。

通常経済理論は、このようなことを試みたりはしない。しかし我々は——リカードがまたもやその著者なのであるが、その著作の数ページに渡っ

て、とりわけはつきりと見出される——地代・賃金・利潤の歴史的な、そして未来の道程についての特定の諸命題からなる「経済変化の理論の諸エレメント」を見出すことは真実なのである。マルクスは、彼が多くの局面でリカードの教義から出発していることは疑いないところであるのと同じく、これらの諸命題から出発したということは十二分にあり得ることである。だがここでリカードが提供した仕法は極めて僅かであり、非マルクス主義理論の中ではその僅かなところすら、ジョン・スチュワート・ミル以降は完全にとりわけよいい程に死に絶えたのである。

15 様々な種類の経済的メカニズムの叙述に留まらず、我々が考察している現実のメカニズムの歴史的進化——それは文明の曙光から、資本主義を経過し、更により先にと進むものであるが——を正確な原則に帰属させることを企てるという、そうした経済理論のアイデアはマルクスにのみ割り当てられるのが公正だということ。そこでは理論は歴史的含蓄と現実生活の紛争と破局についての、リアリティの魅力あるフレイバーを獲得するのであり、それは他の経済学者の理論構成には必然的に欠けたものであることは間違いなく、彼等は与えられた経済諸システム——そのいずれもが適当な諸仮定によって定義されている——の作動を分析する諸手段を提供することで満足しており、そして彼等が経済史家達と社会史家達の多数派と完全な見解の一致をみている、そのことは、「これらの諸システムのあるものの歴史的継起について、あるいはある歴史的状態が他のそれを“生み出す”ところの道程については何も言えない」という、まさにそのことである。

もとよりこれら全ては誤りを許しはしない。その上この歴史を単純な諸原則に帰させようとする壮大な目的は疑問視されることがはつきりしており、且つ容易に我々の仲間のいくらかによって——そうした知ったかぶりの他の「歴史哲学」と同様に——これらは厳粛にして自覚的な歴史家達にとっては通常いただけないものであった——公判なしには否決されかねないものである。たとえ我々が異議を唱えないとしても疑問はマルクスの社会ヴィジョンの正しさに関し、且つそのゴール——どんな実際的なゴールとも区別されるべき科学的ゴール——についての実現に向けての「彼の特別の貢献の価値」に関して依然として残されるのである。

16 そうすることでマルクスはより鋭く、しかもより深いヴィジョンをもつというメリットを得ただけでなく、リカードから受け取った概念装置を改良するというメリットを得た。例えば、リカードの固定資本と流動資本の間のルーズにして粗雑な区分を不変資本と可変資本(=賃金)との間のずっと適切な区分に置き換え、且つ生産過程の持続期間についてのリカードのもやもやした観念を「資本の有機的構成」という、はるかにずっと勢いのある概念に置き換えた。しかしもっと重要なのは資本主義過程の分析の中の「資本に対する正味の報酬」に対する合理的評価を与える試み、すなわち彼の搾取の理論である。

恐らく大衆は挫折させられ、搾取されていると常を感じていた。だから彼等は理路をわきまえるや直ちにそうだと語ったのである。ともかく知識人達は大衆の集合的な諸見解を大衆のために定式化し、大衆に対しそうなのだということを常に語ってきた。ただ、それによって正確な意味を与えるものでは必ずしもなかった。マルクスの長所と成功は、彼が彼以前の大衆心理の解説者達の行論——どのように搾取がもたらされるかを示そうとする試み——のもつ諸々の弱点を自覚していたことである。交渉力といったものについてのどんなスローガンもマルクスを満足させなかった。搾取なるものは、時たま偶然に個別的な諸事情から発生するものではなく、資本主義システムの正にその論理に由来する結果であって、不可避的であり、どんな個別的な意図からも完全に独立したものである。彼が欲したのはこの論証であった。労働は——労働の諸サービスではない——商品となり、他の商品と同様に売買される。ここより労働価値の一般法則が適用可能となる。即ち、労働の量は価格をそれに含まれた人々の働く時間の数に比例したものとさせていくであろう。だが労働の量で含まれた人々の時間のどんな数が？ よろしい。人々の時間の数とは、かの労働者に養育と衣食住を得させた且つ得させているものである。これは労働の価値を構成し、労働者はこれに比例した諸賃金を——均衡状態では——受け取るであろう。彼はこのように自分の労働の十分な価値を受け取る——そしてそのどんな部分にも逸せられたものはない。だが労働者は、自分の労働(労働力)を生み出すため取られるよりも、更に多くの時間数を働き出すことが出来る、ということも事実である。後者から得られる生産物も同じく——均衡状態では——資本主義社会の諸市場でそれらに投じられた人々の働く時間数に比例した価値を持つことになろう。かくしてそれぞれの労働者の生

産物の価値は彼の労働の価値よりも一層に大となるであろう。そしてその差、余剰価値は資本家に行く。資本家的評価の機構をコントロールしている基本法のおかげで、必然的にそうなのであり、労働者はそこでは「彼の」生産物のその十分な価値を得ることを逸されるのである。

搾取(**exploitation**)なる言葉はマルクスの科学的行論と合体したものであり、彼のバトルを闘うべく行進する弟子達を満足させるのに役立った。しかし次の点は指摘されなければならない。定常的経済過程の理論の通常の水準にたてば、マルクス自身の諸仮定の下では剰余価値についてのいくつかの教義は絶望的に支持し難い。労働価値論は——たとえ他のあらゆる商品には正確であったとしても——労働という商品には決して適用され得ない。労働者達が機械のように原価計算に対応して生みだされる、ということをこの理論は意味しているのであるから。論理的には、もしマルクスがいわゆる賃金鉄則を受け入れ、且つマルサス風の諸ラインに即して論を進めたならば、彼の位置は改善されるであろう。しかしこれこそ極めて注意深く拒否されたところである。その上、完全競争的均衡はあらゆる資本家—雇用者が搾取利益をつくる状況では存在し得ない。というのはこのケースだと、彼等は個々に生産の拡大を試み、その数量効果(**the mass effect**)が不可避免的にその種の利益をゼロに迄切り下げる傾向をとるからである。不完全競争の理論に訴えることにより、競争の作用を——摩擦や制度的禁止、または貨幣や信用上の障害などを強調することで——幾分かはこのケースを修正できる可能性はある。しかしこうしたやり方での修正は極めてモデレイトであり、マルクスが心から嫌ったものである。

しかしマルクスの行論の実質はそのようなレベルにはなかった。彼が考えていたことに比すれば定常的経済過程や静態均衡のどんな命題も二次的な重要性をもつに過ぎない。更にマルクスは、自分のポジションを基本的には傷つけることなしに、次のことを認めることができた筈である。完全均衡状態は資本主義社会が決して到達できなく、且つそこではブルジョワジーが存在し得ない状態であり、その状態は生産物の諸価値と生産諸要素の諸価値の間の——測定されたとしたら——どんな差とも両立し得ないということ。剰余価値はブルジョワジー達が生産を革命化する時はいつでも発生するものであり、更にひとたび新技術が確立されると、この余剰は消滅する傾向をとるという正確にこのことの故に、そこでの紛糾がマルクスをして多くの——赤々と燃え上がり、しかも時折誤導させるような——記述に永く生命をもたせることを確実にしているのである。マルクスが

事実問題として競争そのものがそうした余剰——その発生は労働価値説の教義とは何等関係がない——を消滅させる傾向をもたらしことを認めてはいなかったことは真実である。そして彼の分析が正され適切な動態論設定の中におかれるならば、部分的には救済できることもまた真実である。

17 生産の様々に異なる期間(時間)の導入が——それ自体現実、且つあらゆるケースにおいて——諸商品の価値についてのマルクスの基本理論によって指示されるそれとは異なった価格で販売させる原因となる、ならないかという疑問がある。実情をいうと、マルクスはこれを疑問視することはなかったし、リカードのこの論点についての不完全さを見出しており、しかもそうならないことの重大性をリカードよりもよく自覚していたので、彼は——論理的障害に逢着した時、真の理論家達ならばそうするように——あらゆる頑固さを以て、もし諸価格が労働の量への比例性という法則によって決定されないならば、どのように現実の諸価格は決定されるのかを示すという仕事に没頭した。そして更に進んで諸価格が決められている原理は、かの労働価値の法則とは結局において実は矛盾しないのだということを証明しようとした。

このため数年の歳月と数百頁の紙数が費やされている。しかし彼の努力の最終の結果が現実我々の眼前にあるものかどうか、は公然の疑問である。というのは彼の主著の第三巻は、彼の死後に継ぎ合わされたものであり、そうした但し書付きの性格を大いに含むものであるから。しかし問題が師によって悪く設定され、弟子によって悪く受け取られていることには論議の余地がない。書かれてあるように定式化するならば、比例性の原理と利潤率均等の原理は——もし同じ平面で導入されているのならば、だからして諸価格は同じ意味においてと行論の同じ段階でという双方において一致しなければならず——論理的に両立し得ない。一方が他方よりも論理的に優先し、他方が前者の諸帰結を修正していく、という意味においてならば両立しえないことはないが。マルクスの労働価値説は相互に了解することに失敗した防衛者と批判者の諸努力によって平行線となってきたのである。

18 資本家は戦利品「剰余価値」を労働節約的機械に投資する。マルクスの行論からは、資本家たる者は正にそうする筈であり、しかも敏速にという点が本質的である(蓄積の理論)。何故に不可避的で自動的にこのことがなされる筈なのか、その理由は競争の圧力を以て証明される。競争が資本家にこのコースを強いるのであり、さもないと競争から脱落させられるであろう。このことは経験的事実の観察によっている。諸事業体が自らがあげた利益の大部分を事業にむしり戻すよう強いられている、他に選択の余地はほとんどない、このことを我々全ては知っている。しかしこれは資本主義的進化の急速な率の原因ではなく結果である。そこで説明しなければならないのはこの進化とその率であり、ひとたび説明がつけば、それは次から次へといつの時代にも存在している産業的自動機構のもつ「際立った不安定性と刺激性」を説明し、更には全ての設立されてある事業体の「不断のモデルチェンジ」の必然性を説明していくのである。こうした説明なしには利益の再投資の過程、とりわけマルクスによって指示された方向での再投資は動機を欠くこととなり、そしてその動機はマルクスの著作自体の中には見出し得ない。

だからして、搾取の理論と搾取の説明から得られる結論は、仮に事実問題としてのその解明が満足するべきものと言えさえするものであったとしても、尚不十分なものとなる。だからしてマルクスの付けた橋は単なる表面上の現象に過ぎず、我々が彼の理論と彼のヴィジョンにとって全く外来性のものである諸要素によって釘打ちがなされるものでなければ、我々の下で壊れてしまうという理由から、我々はマルクスの彼の次のステップにまでついていくことができない。

主要な釘は投資のどんなルーティンな過程よりもはるかに重要なものであるところの企業者機能である。更に言えば、それ以上に投資がファイナンスする「創造の仕事」から自らの重要性とその含意を獲得するところのものである。マルクスはこのことを考慮することができなかった。彼は企業者と資本家を同一視する旧古典学派の見解を受け入れた。二つの機能が彼等の時代の家族経営の企業ではしばしば一致するという環境を拡大することで、こうした同一視は部分的には許されることかも知れないとしても、それにしてもそれは誤った分析を留めている。

このことから離れても、しかしながら、マルクス自身のヴィジョンとその理論的装置の構造は彼をして資本主義の過程を見させるのに「何かある

種の自動的で非人間的なもの」とさせることを不可避とさせた。そこでは唯一の創造的な作用力である労働が逃れられないよう鎖によって自走する装置に縛り付けられているとみるものであった。この装置は走るにつれてそのように自己展開をなすのであるが、再投資こそが、この展開に利用可能な唯一の自動的要素であった。どのような他の見解も寄生的な資本家階級の構図を引き出すことが困難であろう、というのがその理由であった。

寄生的資本家階級のもつ唯一の機能はと言えば、働いている労働者から価値を絞り出すことであり、且つそれを再び生産過程の中へ絞り込むことであった。しかしながら、如何なる重要性も、これにはり付けられる必要はない。マルクスの分析装置はそのようには作動しないだろうということでも全く充分である。それはそれとして、類似の理論的情況と類似の実際の諸傾向が我々自身の時代の貨幣的理論の多くの中に存在し、且つまた、責任を負っている。我々の時代の最も輝かしい作家の幾ばくかを以てすると、投資はまたもや「誤った装置がなそうとしてもなし得ないそのこと」をなすべく構築された標語となっている、ということに留意するのは興味あることである。我々はこれを当世の習慣に従って景気循環の貨幣理論と呼んでいる。

それにも(以上にも)かかわらず、我々をして揺れ動く橋を渡ってマルクスの蓄積の理論を受け取らせよう。

19 マルクスのリカードへの直接的依存は他の如何なるところよりも生産過程における機械化の諸影響の段において大きい。たった今述べられた裂け目を渡った我々が取り組むべきもの、「窮乏化の理論」はリカードの機械化を扱った有名な章に完全に寄りかかっている。マルクスは労働者が累進的な進行率で機械により排除されていくとなし、自分に対する諸批判には激怒に満ちた当てこすりを浴びせた。彼は根拠が安全でない時、いつもそうするように。そのように排除された労働者達は——あるいはマルクスによって日常的に供せられる言葉では街頭に投げ出された労働者達(産業予備軍)——は賃金を引き下げさせる。そこで一方において累進する悲惨が結果としてもたらされた傍ら、他方で創出された生産能力と社会の消費能力間の乖離を増大させた。

これら全ての中に認められるべきものは何もない、あったとしてもせいぜい経済的变化に付帯した強度の臨時的混乱の上に極めて控え目なケースがつくられたに過ぎない。蓄積の理論から得られるのは、全体としてとらえられた生産過程での労働の排除は競争下でという諸仮定の下では出てこない。更に総実質(total real)賃金の——相対的とは区別された——絶対的低下は排除からは引き出しえないであろう。最後に生産能力と生産物の吸収能力との乖離は賃金の絶対的低下からさえも引き出せない。

マルクスの行論のもつこの全体的連鎖が基本的に悪いものであったとしても、改良された諸分析が——適切な諸仮定の挿入といったことをして——マルクス流の諸結果のそれぞれを可能性としての、乃至は傾向としてさえもの——基本的な諸要因によって、それはずっと見劣りのするものにされるであろうが——叙述し、そうしたものの論証となるかも知れないことは真実である。これあるが故に、資本主義の時代の全体に渡ってみられる実質賃金の上昇を伴った雇用の着実な増加を、マルクスの明確な論破として、指摘することも全く正当化されない。

そうした間奏曲は、新しい国々を開発する場合になされたことと一致して、結局においては何事をも証明するものではない、ということが容易に答えられ得るのである。理論的な行論は理論的な行論によって論破されることがあるのみである。しかしこのファクトがマルクスの行論が破産に遭遇していることをテストしていることは確かである。

20 機械化の自動的な過程の圧力の下で、事業体群は——下降型コスト・カーブに沿って——絶望的な紛糾の中に突き落とされる。この紛糾は過剰生産と過少消費の双方によって特徴づけられるものであり、そこでは益々少数の者が生き残り、その他の者と連繋している資本家達は累進的に「奪われていく」ことになる。熟練工の消滅や巨大企業の成長の事実、その他のこのことの実事上の含蓄を描き出しているような事柄等々は明白であり、しかも誠実に——勝利感をもって——指摘された。この勝利が、実際にどれ程に大きいものであったかの論証、及び述べられている部分的には確かにそうであったことがどれ程に満足のいくものであったかという設問については我々は見送ることにする。同じ結論に導き上げられている行論の他のブランチについては言われ得ることはさほどに多くはない。

更に推論された生産する力と消費する力の乖離は反復する資本主義恐慌を説明するためにつくられた。景気循環論としてこれは、資本主義システムの作動そのもの(the working of capitalist system as such)はそうした乖離をもたないのであるから、全く落第である。この理論は不況が実際に起こった場合に観察される表面的な現象の叙述に誤った用具を適用したもの、というより以上のものではない。

いくらかの人々が天才の一撃と考へ、他の人々が分析における単なる誤りであると考えような作品では、同一の行論が資本主義の最終的破局に至る迄の深読みがなされることになる(「崩壊の理論」)。時から時へと恐慌を生み出していくであろう同一のメカニズムが時の過程と共に密度を増加していく。そして何等かのあるそうした恐慌が——先行する恐慌と種類において異なるのであるが——或る日、そのシステムを失敗、恥辱、悲惨の混乱の中で殺してしまうであろう。その場合、階級的自覚をもったプロレタリアートが抵抗し難い勢いで立ち上がり、生産手段の収容——「収奪者の収奪」を行うであろう。このことを「真に偉大な精神の下に教えた」ことはマルクスの榮譽と言わねばならない。この構図の中には如何なる恐ろしい事柄も意味されておらず、如何なるサディズムも入っていない。それは労働者だけでなく資本家をも、——彼等は論理的にも完全にこのシステムの特種な種類の被害者と考えられている——普遍的に解放する構図なのである。解放は途方もない文化的諸力(新しい文化的創造の源泉)をも解放する。ここにおいて我々は更に進んで「進化か革命か」という見出しの下で行われる愚かな論争を片付けることになる。すでに強調しておいたように、マルクスは歴史的センスを、つまるところ欠いてはいなかった。

21 恐らくはマルクスはその足取りを速くすることは可能だと考えていた。ここにあげる例は彼の奇妙に曲がりくねった自由貿易賛成論である。練達のエコノミストである彼は、自由貿易は労働者階級の利益になる、とする立場にあると誰からも完全に認められていた。しかしながら、社会主義の指導者たる者はブルジョワジーのそうした主張を——多分正しいものであったとしても——承認することには強度に嫌がっていてしかるべきだとなし、単にそれが進化の足取りを速め、もって資本主義をより早く終わらせるという根拠に即してのみ、これに賛成した。

マルクスは、彼の意味での社会主義への「成熟」がないような環境下では革命の主導性(revolutionary initiative)を是認することは決してなかった。しかし彼はどんな社会にあっても制度的枠組みはその経済的基礎を永続させるような「それ自身の慣性」(“a momentum of its own”)をもつという事実を正当に認めていた。彼が革命によって排除しようとしたものが、このモメンタムであったことは確かである。暴力によって新しい世界を創出することを望む革命主義者達に共通した幼稚な態度の如何なるものも彼に課すことはできなかったが、とはいえ、彼の交友関係と彼の情熱は特殊なケースではあるが彼をして似た態度をとるよう変質させた。彼の革命は社会主義へ向かっての進化と両立できなくはないだけでなく、その実現であった。それは時の充分性の下での革命であった。

ついでながら言うておくと、このことがいまだに——そうでないにもかかわらず——マルクスを一人の洞察者(visionary)、科学的社会主義者、そしてユートピアン社会主義に対する反対者とみることに固執している全ての人々に対する回答である。産業の合理化が極めて徹底したところまで行き尽くされ、そして利子率がゼロに向かって収斂していると見込まれることができる場合、人々の心理的状态が、その上に封建的並びにブルジョワ的先入観を失ってしまい且つ心理的に大きな変化を肯定する準備ができていと見込まれることができる場合、そうした場合に時の充分性の下での社会主義は「全く理に適ったもの」としてあるのであり、どこかで、またどうにかして、しつらえ上げられた社会主義の図式からの単なる思想とは実際的にも異なった事柄となると言えるであろう。

22 マルクスの経済学についての我々のスケッチは以上の如くである。不完全ではあるかも知れないが、マルクスの体系の一般的性格についての一個の理念、彼がその下に自らの諸問題を見据えたその光、彼がそうしたことに関与させるべく持ち込んだ情熱と技法、等を示すには充分であろう。そうだとすると、一人の作家を賞賛することが、同時に犯された重大な誤りに有罪の判決を与えながら、行われるということになる。我々の多くにとって、そのようなことがどうして出来ようか、というエッジウォースに対する一つのパラドックスでもあるように見受けられるものを理解するための助けと、それはなるであろう。

一方においてマルクスの方法が時代遅れで、今や額面通り受け取れないことは事実である。その上、防ぐことが出来得るべき誤りが充満しており、どんな半宗教的昇華を以てしても変更には役立たない。綿密に検討を加えるならば、修正は——多くのケースで可能である傍ら——「社会的実体についてのマルクスの構図の基本線」の中に深く切り込んでなされる、ということになるであろうことが示される。誤りはその体系の上にランダムに散らばっているのではなく、マルクスの経済体系の中の最も典型的にマルクス的な教義のいくつかに対し、しかも最も本質的であるようないくつかの論点のまわりにかたまっているのである。そこでもし我々が、それらを支持できるものに再定式化するとか、あるいはそれらが含んでいる真実のそうした要素に還元するとか、そうしたことを為すならば、マルクス的な「非難の炎」は完全に消滅することになる。そうした作業は、バーナード・ショウがどこかで述べているように、「社会的憤激であるものの伝達」というところに自らを保とうとするマルクス的事实に対し真面目に取り組もうとするような何人においても極めて為し難いものとなる。

しかし他方において、いくらかのケースにあっては歪曲にも等しいこうした誤読をなした作家(マルクス)こそが、今日の時代においてすら決着のついていない、未来の時代の経済科学であるところのもの——この科学の構築のため我々はゆっくりと精力的に礎石と原動機、関数方程式と循環積分法を集めている——を洞察した最初の人であったということも多分に真実なのである。これは高度の偉業であり、孤高でありさえする。その時代に語られていることはもとより、その後で語られていることが、主としてマルクスが彼の経済動態論に与え、且つそれを社会動態論の体系へと拡大した「独特の出し物」であった。

23 マルクスの純粹に経済的な行論についての判定はすぐにも修正を要求されるように見受けられる。彼にとって最も問題であったのは均衡を外れた状態、または本質的に変化していく状態であり、それ自体を均衡の状態に仕上げることは決して許されることでなくして、反対にそれから更にもっと先まで離されていく(いき得る)ものであるところの他の状態を生み出すのだ、ということマルクスは説明しなかったし、且つ多分、気付きさえしなかった。

それは良くない。・・・恐らく次のように言うのがベターである。先ずは修正の結果述べるのが一番よく、そしてこのようなエッセイの中で可能な限りその多くを追加することである。純粹に経済的な行論と純粹に社会的行論の双方に関しては正しくすることが可能である。しかしそれでも尚、その最も堅い目的(aim)だけでなく、いくらかの細部の点でも問題は残る。その上牙は抜かれ、刺はぬぐわれるのである。科学は常に予言ではない。

そして帰結の召喚と同様に予見が問題となる。(資本主義の可能性についての展望？ 貧困の廃絶？)・・・修正によりあらゆる色彩と含意が失われる。・・・そうであってもそれは私がただマルクスを改良しようと思図しているとしてのことであり、尚一層の愛情を以て言うべきであろう、慣用の理論に立った批判は全く的外れであると。・・・しかし事態をそれは改善しない。・・・機構は、a) 経済と、b) 諸階級の上にある、資本主義とその動態についての誤った判断。・・・

ところで、そうしたマルキシアンの経済学だが、約言すれば、それはどんな冷徹な分析家——彼等は近代的科学装置をもって装備している——をも打撃するのに失敗するにきまっているのである。それは絶望とみられて十分なケースであろう。更にこのことは実際に力量ある経済学者達の殆ど大多数の宣告——疑わしい諸宝石で研磨されていることの中にある一連の失敗作——なのである。この声明を支持することにおいて、我々はケインズ氏を留意することだけを必要としている。

改善はこの場合、ただ含意の定義である。1) 非均衡、2) 不完全競争、3) 労働価値説、についての審問・・・ランゲ、魅力と実証・・・社会学については一つの課題である。・・・時間についての過程のモデル・・・

我々はそれでも尚マルクス主義者たり得るや？・・・理論は常に「・・・ならば」においてのみ告げられる。・・・経済的歴史把握の教義の重要性について述べるべきであることが忘れられてはならない。この2つの法則が論破する。・・・資本主義は虚偽の存在である！と。

(3) オストロ・マルキストなど

摘要

マルクスの理念、方法、経済学の後継者としての正統マルクス学派(ヒルファードィングやそうした人々)。金融資本、その産業一般の統制、大規模化・独占化・集中化と結び付けられ、そうした寄与により資本制秩序の安定化がなされた。1)生産し得る物を購入し得ないような本国市場における需要不足、2)利潤率を機械化により高く保とうとする試みの後の重厚な投資に由来する利潤率の低落、から逃れようとする資本家の手段としての帝国主義。他の市場や投資分野を侵し、残された前資本主義圏を資本循環の中に巻き込む。ナショナリズムと結合した本国政府を急き立てて後進国を征服させ、資本の投資によって植民地化し、競合諸国に対する非友好ムードに遭遇するや、更には戦争に赴かせる。結果として利潤不足の埋め合わせがなされる。もとより上述の図式が全てではないし、資本家主導の帝国主義的行動は稀かも知れない。むしろ、より重要な論点は、大きい政府に向けて国内諸政策の変化を強いることであり、課税の方法により公的部門の新しい設定と拡大がなされることであり、労働基準局・諸社会政策・失業救済と結合した公共投資であり、更には産業の官僚制的な計画と統制であり、次なる段階を前もって創出しようとする管理資本主義なのである。・・・その他 (編者)

I—(3)—1～19

オストロ・マルキストなど

1 マルクス・・・哲学・・・共通の土壌・・・

天国、悲しみの中のこの側面、バイブルのような正しさはまさしく僅少であるとしても。

ロシアでの参画・・・だがアメリカでの復活(ルネサンス)はとりわけ注目に値する！

ネオマルキスト達、ステルンベルグ(ベルンスタイン！もまた)・・・宗教、諸目的。予言・祝福の教義・・・社会情勢に対する根拠付けは論点ではない。最近の状況ととりわけ解明の図式・・・しかし宗教がまたもや発展に対する困難・・・相克、すなわち科学的発展・・・

ブルジョワ経済、今日のブルジョワ系経済学者・・・似合わないブーツの一足・・・(?)・・・高位の人がゆっくりとモスクワからの指令を受け取る・・・卑劣・・・神についてスピーチする・・・科学者達・・・

ネオマルキスト達(新マルクス学派)・・・それについてのそれぞれの見解の表明を(イギリスで！リカード)・・・

誰もがマルキストになれる、且つ利子を安くする・・・彼の文化的立脚点、共産党宣言・・・保守的な判断！自由貿易についての屈折した行論・・・帝国主義、ネオマルキスト・・・収奪者の収奪・・・ランゲと彼の論文に關説・・・私はその矛盾にみちた評価に対して他の一例を与える。

2 このようにして全ての要素をその中に見通すことになる！・・・そして経済的歴史観は部分をよく指示する——独裁に即しても・・・偉大であるのはその正しいヴィジョンである。資本主義の総崩壊・・・リカードの観察律・・・

3 搾取について数量が等しくならぬことはすでに述べた。．．．
決して変えられない。それでも何故にそれほど魅力的であるのか。．．．
だがそういったことは何でもない。真に動的なものがある。．．．
帝国主義——ナチズム．．．
不可避性——だがこれについては経済学と諸与件によって論証が必要。．．．不可避であるとは何を意味しているのか。．．．社会的—心理的契機．．．

4 出発点．．．諸与件．．．そこにはそれが全てを提供するところのものがある。．．．帝国主義．．．利潤をめぐる闘争．．．

5 利潤率低下の法則．．．
究極の勝利——科学的社会主義、しかしすでに述べられたこと、だが尚それにつき論証することに回帰する。．．．恐らくはヒットラーリズムにも．．．

6 マルクス．．．失業．．．
与件と操作可能な変数の問題．．．諸方法、諸要素、制度——とりわけ私的資産の——、合理性．．．資本は一つの与件である！ 子供の寓話．．．
人口は与件ではない．．．生産関数
発展の理論、ミルを見よ．．．蓄積は産出と増加の関数であり、利子の関数ではない。．．．
人々は機械のように生産されることはない、という議論に直面した時、マルクスは労働節約的方法を、剰余価値が——例えば労働時間の短縮といったことによって——切り下げられる場合の代償である量に対する「必要な圧迫」として、把握するのである。しかしそれは平均利潤率の実現を妨げることになるのでは。．．．生産方法の変化．．．高賃金＝低利潤．．．
資本主義は利潤なしには生きられない。．．．

諸与件、すなわち変化しつつある「他に同じならば」(“*ceteris paribus*”)

・・・労働節約は単に利潤をもたらす形態である。だがそれはゆがんでい
る。・・・利潤の保護、結合、国家保証の行使、帝国主義、独占主義・・・
戦争

7 如何に反社会的か！・・・

労働者と農業者の利害関係はどんなビジネスグループ——少なくとも常
に何かを給付することを義務付けられているようなグループ——に対し
てよりも悪い。・・・そして「労働」が一職業を給養することは反社会主
義的である。・・・マルクス主義者は広く言って古典派経済学の古参と共
にある。

8 金融資本論は尚重要！！・・・

ネオマルキスト達一般の仕事は今日それについてなされた業績の最上の
ものであろう。・・・最近の学的ストックとしての帝国主義論・・・

一個の誤ったヴィジョン・・・階級理論についてのノート(現存する諸
階級と理論の誤りについての我々の視角)・・・我々の眼からは解決され
ていない。・・・オルレアンのフィリップ・・・

9 1)搾取、2)低落していく利潤率・・・

恐らくは異なるものとされた諸理論についての関説と批判よりも、それ以
上の何かあるものと連携されている。・・・

コストは価値に比例的でない。・・・リード(Read)についての章句・・・
与件変化が本質的・・・仮説としては充分！・・・マルクスはここでは技
術的に問題外・・・そしてどの程度に等しくそれと同一化できるのか。・・・

「動態論」・・・利潤の防衛、大経営・・・集中、述べられる時はいづれ
も帝国主義をも・・・利潤とその保持をめぐる闘争・・・斬新なのはその
モデル・・・価格に由来するごたごたは本質的にマルクスのでない。・・・
マルクス自身がそれを指摘し、それに基いている。・・・

与えられる総崩壊・・・資本家はその諸業績を歪める。・・・ここでの「与件」は歴史把握と階級諸政策に合体する。

10 マルクスにおける費用価格・・・

科学の運命——魅力的なものとなるところが少なくない。・・・だが素人に対してそうだ！・・・恐慌は資本主義が大群衆の上に投げつけるものでもあるが、同じ要因によって生起する。・・・都合の良いものではない・・・というのは個々の問題と関連付けると更に苛烈となるものだから。・・・マルキシズムとヒットラーリズム・・・

11 説明されている意味が何であることを警戒せよ・・・

批判に対する基礎を欠く・・・減数と被減数は疑わしいが、だがさほど誤ってはいない。・・・均等な利潤率・・・そしてその場合、かくして困難が。理念、量、それに分配において・・・
今やその動態、というのは不可逆過程の分析用具なのだから。・・・貯蓄についての蓄積の理念・・・窮乏化(合理的命題)・・・利潤を防衛しそれを制圧するための階級闘争、すなわち、労働時間の短縮問題、婦人及び児童労働問題、それに貨幣価値問題を補足・・・総崩壊(同じ原因による恐慌)・・・強制収容的恐慌論・・・唯物史観との結合、とりわけその第二命題との結合・・・

誤っているギラギラした偽のヴィジョン、プロレタリアの仕事を他の諸階級が行ってしまうという社会主義的政策(時局から、だが深い洞察で)・・・

若く且つ経験のない人達は、暗黒の中にある情景を自分で見出したかのように感じる。

金融資本論・・・ナショナリズムに関説・・・ヒルファデーディング、それにバウエル、アドラー、ルクセンブルグ、ステルンベルグ・・・ネオマルキスト達、帝国主義論・・・集団規律を保つための闘争！・・・社会主義の不可避性——解決・・・しかし誰が知る。

誤りを正すならば魅力は消え去る。・・・ブルジョワ経済学者の嘲笑・・・それは何か？ かくして3、では動態論を、それらは若い人達に与えられるものではないという反論が、そこでVを。・・・そうしたものがマルクス経済学である。何故にそれはかくも多大に魅力的なのか、とりわけ・・・より広い含意。

彼は現実によくを語っているのか？ 部分的にはみせかけだけでしかない。大部分には現実にそうなのか——我々は分割できる所だけしか告げられない。・・・現実に常に遭遇する場において線や面積のような標準尺度がない。・・・だからマルクスは我々の資本理論によって打ちのめされる。・・・どこまでが自動的に(二つの命題)に・・・

帝国主義——一つの政策・・・ネオマルクス主義者達・・・社会主義的戦術家・・・不可避性

12 若い人々はうっとりとする。・・・社会主義を基礎付けること・・・そうした芳気がある。・・・議論の性質・・・魅力・・・我々はマルキストになり得るか？

マルクス主義者の政策と革命・・・進化と革命・・・自動展開説・・・経済的歴史把握と諸階級の導入・・・但し階級闘争はその場所に次々と見出されるものであるとしても。・・・例えば国民間の闘争・・・ネオマルキスト達・・・帝国主義・・・アインシュタイン——ドイツ・・・一般性があり、しかも尚、具体性を保つ、但し理論の中でさえ同じ。・・・ピグーとケインズ・・・ウェブレン・・・

中枢の存在・・・イタリアとフランスにおけるロシアとドイツ・・・階級的混乱主義者は自由を渴望する。・・・金を出すものは優しさを身につける。・・・このことは社会主義が民主主義であり得ないということの意味するものではない。・・・プログラムを欠くという激しい流儀、すなわち無批判の信条。・・・

それぞれの文化・・・可鍛性(柔軟につくられ得ること)。

13 実際どんなわけでマルクス主義の歴史が？・・・ネオマルキスト、ステルンベルグ・・・神聖な利子の確からしさ・・・何事からの救済・・・システムの一体性、一体性などはない。・・・時間モデル・・・余計なもの・・・弟子・・・リカード教授・・・リカードとケネー・・・

社会主義の疑問は経済的なものではない——そうとは言え、そのわめき声と喧伝はマルキストが一言あってしかるべきものである。・・・尚、他の諸矛盾が・・・価値論の矛盾・・・貨幣論も弱い・・・搾取の性質・・・文化的ヴィジョン・・・科学的社会主義・・・

階級闘争の判断のための指導書、共産党宣言(マニフェスト)・・・哲学・・・ネオマルキスト達・・・帝国主義・・・

14 同様に「反作用の部分としての政治」については、すでにマルクス主義者の経済学のところでも述べた。もはや政治力学は——おおざっぱには経世家が強力か、または賢明であっても——決定をもたらさないし、諸努力の指揮者でもない。しかしそれでも、政治が分離して取り扱われることはできないような、及び「必要がないものがあるとすれば、それは政治力学だけだ」とは言えないような、そうした契機(**das Moment**)はない。・・・それでも尚、一個の与件であるところのものは、分析上の選択の一素材だと言うべきである。・・・更に最近10年間の解明について、すでに何かがある。マルクス主義は構造変化の分析を何もしていないのではあるが。・・・というのは、我々が後に検討するように、危機一般(失業、投資機会の欠如といったこと)にこそ対応して、これらの諸事実があるのだからである。それは70年代に似たところがありさえする。・・・

進化と革命は時の成熟の充分性の問題である！・・・均衡、そしてこれらのことは社会的浪費の多くの源泉・・・IとIIで帝国主義を・・・

1905年の革命についてはすでに・・・

15 ナポレオン——革命——アンシャンレジーム・・・
地位に就くことだけが要求される。・・・まだその日でないのなら、どの

ようにそうでないのか。・・・

「計画」と「統制」・・・オーストリー・マルキスト達・・・マルキシアンの狙いはそれ自身を伝播配達していくことの論証でなければならない、ということが政策のなかにある。・・・

何故にアメリカでは人々がもっと過激になり得ないのか。・・・ニューディールがなされてきた。・・・以前には過少に見積もられていた課税の諸方法・・・インフレーションが危険であるかないか、は必ずしも重要でない。・・・

完全雇用・・・投資・・・管理資本主義・・・

保護は困難を更に広げるような全てをすでに身につけている。・・・それがそうであるかは定かでない。

16 マルクスを解釈し直そうとする傾向・・・近代経済学と結合させるような方向において。・・・

ネオマルキシズム・・・魅力と科学・・・理論と歴史的結脈・・・
マルクスと自由貿易・・・第二命題・・・誤ったヴィジョン・・・
評価以前の理論・・・予言の悲劇・・・章句の諸事例に眼を。

17 我々は尚マルクス主義たり得るや？・・・

それはない。集中、金融資本、外国貿易論、賃金財、資本の構成、恐慌・・・ブルジョワ理論との比較・・・

18 マルクスによってヒントが与えられ、バウアー、ヒルファーディング、ルクセンブルグ、それにステルンベルグによって構築せられた興味ある教義の発展は、我々の最後のステップにスケッチされた資本主義の過程についての分析から導かれる。すなわち、貧困化した大衆は彼等が生産することができるだろう物を購入することができない、という事実を資本家達が見出した場合、並びに利潤率が——機械化によってそれを保持しよう

とするそれぞれの試みの後——急速に収縮しつつあることを見出した場合、彼等は他の市場乃至は投資の分野を侵略しようと試みる。全ての資本主義国で起こっているように、彼等は先ず保護領の至る所でこれを求めて絶叫する。そして同時に自分達を保護する事の出来ない国々へ出掛けて行き、母国の政府にこれらの諸国を植民地化してくれるようせきたてる。あるいは——もし、そうしたことができないとなると——これらの諸国に投資することによって経済的に征服する。「現存する前資本主義空間を通しての資本化」(“capitalizing through the existing precapitalist space”)である。競合し合っている彼等の諸国は衝突し、且つ非友好的な空気の下におかれるが、こうした諸国の内にある資本家達は全て、母国での利潤の縮減と過当競争の増大により、背後からそうするよう鞭打ちの拍車がかげられる。ここから民族主義的な態度と言ひ回しが生じ、ここから資本主義的戦争が生じる。これが社会主義者の帝国主義の理論であるが、帝国主義は資本主義的進化の最後の段階として自らを現わす。

この理論が評価しなければならないような——歴史上の、且つ現在の——事実の広がりや如何に幅広いものかは問うまでもない。この図式に適合したように見受けられる諸事実を研究する事、これこそ信徒たちに許されることなのである。検証の量の多さが注目される。しかしながら、もとより、我々がそれに導き上げられる諸段階に信頼をおかないのならば、検証の量の多さがこの教義を救うものではない。とりわけ、こうした事実関係に対して、もっとより良く適合する他の説明があるならば、そうである。疑わしい事例検証の長いリストの上に帝国主義論が加えられ、歴史の経済的解釈が干渉を加えてくる。実際、帝国主義の理論はその適用の技法の非常によい事例である。資本主義過程についての一大シンフォニーの全楽器構成はそれに依存する。そして社会主義がマルクスに従ってやってくる道程は「全ての社会構造がその中で次のそれを前もって作り出す道程」であることの最も良質で力強い開示なのである。

19 比肩し難い大胆さと見事さをもった「一撃」を理解するため、我々は彼の経済学と社会学の関係を規定しておかなければならない。歴史の経済的解釈の第二の命題が再度召喚される。この命題は自己展開していく経済機構の存在を自明の前提とし、そしてその経済過程と生産の諸条件は、それ自身を変化させていくだけでなく、我々が現実に観察する制度的上部

構造におけるその変化を強いるといったやり方で変化する、ということの論証によって正当化されなければならない。歴史の経済的解釈そのものの枠内では、そうした論証は提供され得ない。歴史的分析の為しうる全ては「一致ともっともらしさ」を大なり小なりの程度に確立することである。更に歴史的分析はより強力な媒介物によって補強されないならば、生産関数における変革はどのようにしてもたらされるか、並びにそれは社会の制度的型枠とそこに含まれる慣習、態度、意志をどのように形作るのか、を示すことはできない。これなくしてはかの命題は——そして、帰するところ、歴史そのものの経済理論は——実際のところ一個の仮説以外の何物でもないことになろう。これらの必要なものの全てを充たすもの、それが今、我々の眼前にある。マルクスの経済的教義の本体はこれらの諸設問に対する諸回答の集積以外の何物でもない。

マルクスに従って、経済システムが——どんな時にも接近しつつあるどんな均衡状態からも離れて——推進されること、並びにこのことを為さしめている——どんな経済外的な衝撃の助けをも必要としないような——「ある作用力」があるということ、これらのことの含蓄を今や我々は知っている。更に我々はこの経済的変化がどのように社会的変化を強いたか、社会的諸階層(諸階級)——諸制度と諸態度の担い手であったもの——を創出し、高揚させ、沈滞させ、破壊することで、及びどのように彼等を「客観的」諸利益の敵対者を意味するような状況に置くことでそうさせたか、を知る。このようにして経済的過程は自らの制度的与件を変化させる。マルクスの経済学とマルクスの社会学の関係につき、前者が後者を補完すると答えられよう。社会学的説明がその道程を走り、そして実際に社会的進化の理論に生長する場合の歯車を、経済学的行論が提供するのである。このことは——組織的になされたものとしては——それ以前には試みられたことが決してなかった。マルクス以降では歴史学派によって部分的に試みられたにすぎない。

資本蓄積の機構を通して作動する企業間の競争的闘争を叙述している中で、マルクスは、より弱い競争者達は累進的に消し去られていく(“収奪されていく”)ので、個々の事業体の規模はそれぞれの分野でごく少数の巨大事業体だけが残されるところまで拡大される傾向を採る(“集中の理論”)、という命題を引き出している。一見して物事の継起過程について驚くほどによく検証されているかのように見えるこの命題は、ほとんどの人々に——敵対者をも含めて——大きく印象付けられた。

一連の疑問、マルクスの根拠付けは完全に正しかったのか、換言すればそうした集中への傾向が実際に彼の行論から導かれるが如くあったのか。それが立論通りであったのか、あるいは益々多くの成果を上げてきている近年の諸業績の光の下で改正されることが出来得たものであったのか。更にその検証はどの程度に本物であったのか。こうした設問には立ち入らないであろう。我々が与えたいのはそのタイプのどんな行論もがもつ説明力としての価値を展示せんがための行論の為され方についてである。

先ず「大企業の理論」をそれは我々にあてがう。それは正確に経済学の初心者、経済学のトレーニングを受けていない知識人が熱望するものである。彼等が経済学のいくつかの論文に眼を転じても、それを見出さないことになりがちで、かの悪魔的な大企業の諸政策は第二次的な場所に追いやられ、彼等には全く関心のない諸問題が長々と取り扱われているのを見出す。マルクスは彼等のために問題の事柄を大きく照らし出し、説明を与え、考えるべきことは何か、漠とした疑惑を変えるにはどんな方法があるのか、衝動的にもたれた嫌悪感はどのように正当化されるか、を語るのである。R・ヒルファァーディングの労作(金融資本論)はこのため高度金融の理論の補足を付け加えている。この補足は初学者には尚一層に多くの生き生きとした生活と現実のセンスを与えるものであったが、その傍ら、その種の内容は古い内容で且つ主題が魅力的であるだけであった職業的経済学者に対しては、尚更なる満足を与えることに失敗していた。

第二に、何故に生産関数が不断に革命化されるのかといったこと、並びにこれに付帯した諸階級を消滅させる過程——マルクスが根拠付けたのは諸階級という言い方においてであり、個々の事業体の不断の浮沈ではないというのでこう言う——が、その社会の意識構造をどのように変えるかといったこと、そうした事柄は、しかしながら、我々も直接検証しているのである。ブルジョワ的諸態度は、先ずは職人層のプロレタリア化、続いて小・中規模の工業家のプロレタリア化を伴って、消失していく傾向を採る。そして富裕であるということで人々を惹きつけてきた縮小しつつある一団は収奪によって平準化させられ、累進的にその真正の位置と利害を明らかにしている大衆と対面する。このようにして経済過程は社会的戦闘を闘うようもたれた軍隊を創出し、政治的情況を演出し、人々をしてあらゆる局面で——経済的な事柄だけではない——彼等が実際に行うよう考えさせ、且つ感じさせるのである、と。

このように我々がたった今授与しているものを授与することによって、これが一例であるようなタイプの行論が実際は「為そうと意図されたことを為す」ことに成功する、ということを読者は認めてくれるだろうと私は思う。

(4) その他 雑録

摘要

ベルンスタイン、ロードベルタス、エッジウォース、
マックス・ウェーバー、パレート、ランゲ等。
そしてレーニン主義とボルシェビズム・・・その他
(編者)

I—(4)—1～4

その他 雑録

1 マルクスの試験——アメリカ人のマルクス主義について、その新しい意図について・・・但しマルクスは統計的には何も主張しなかった、と思われる。

2 1) 社会心理学的問題、2) 実際的でない、3) 理論上の、4)・・・それ故にマルクスが依然として尚正当化されない、そうは言っても、というのを再度にわたって「観察」に言及してきた・・・
恐慌——総崩壊——流行、利点、新奇・・・
与件(前提)の変化と歴史観及び階級理論との総合作用は避け得ない・・・
資本家達の闘争、帝国主義、政治・・・

3 適当な場所に挿入・・・ 1) 心理的な問題とはかかわろうとしなかったことに対するマルクスの弁明・・・持続的タイプの人種問題といったもの 2) ベルンスタイン、適当な場所に、彼の行論についても、経済に対する非コミニストの論理(そして他の領域ではなく?)、 3) 通俗的な概念の純化を主張する、そうすることで感情を入れずにおく、との説明・・・ナンセンス・・・ 4) 小市民の問題でもなく、労働組合の問題でもない、5) 関説、ロードベルタス、社会的であると同時に経済的であるカテゴリー、 5) —a) 低落する利潤率、6) 資本構成、それに廃棄資本に付される余剰のないこと、7) 搾取に対する可能な限りの正当化について・・・リカルド——の観察律・・・ 5) a～7)、構図への方向付け・・・ 8) 時間モデルと資本といったこと、その都度登場してくる範疇がどんなものであろうと、それぞれの歩みが誤りであるにもかかわらず・・・ 9) 社会主義者の予言の実質的基礎・・・社会主義者の可能性と社会主義者の文化、構図は疾感とブルジョワジーの譲歩がもたらすものによって整えられる・・・私の提案・・・社会主義者が言い立てることと言い得ないこと・・・壮大な見世物、トラスト、収用・・・終わり・・・

4 引用と解説が必要なのではないか。・・・一番手に「エッジウォース」(“Edgeworth”)、二番手に「マックス・ウェーバー」(“Max Weber”)、三番手に「パレート」(“Pareto”)(p 1 2)・・・p 1 4はもっと後、という成り行きになる・・・、四番手にベルンスタイン(Bernstein) p 1 4—修正主義— p 2 2 迄はおおむね適当、但し p 1 5、1 6、1 7は再検討の必要が・・・ランゲ(Lange)についての体系的な配慮—と反論—は？・・・

レーニン主義は、あらゆるヴィジョンを床に投げつける。・・・粗雑な理論・・・社会主義へ向かっての発展・・・経済外的与件の作用と反作用・・・経済的な歴史把握とボルシェヴィズム・・・

第Ⅱ部 資本主義は生き延びうるや？

- (1) 創造的破壊の継起
- (2) 独占行動と無駄
- (3) 資本主義システムの変質
- (4) 資本主義システムの死を
招来させるに至る自壊的体内疾患

(1) 創造的破壊の継起

摘要

静態的均衡下に利潤の余地はない。完全競争下にもそうであり、不完全競争又は寡占的競争の下でも大きくはない。高い成長率は均衡的秩序の移動の下では達成されることが出来ない。必要なのは競争についての含蓄の変更である。参入の自由化における価格競争と新製品又は新技術の創出との間にある差、均衡に対し前者は促進的であり、後者は破壊的である。変革衝撃力としては、ドアの幅を拡げるのとビルを爆破するのが比較の例えである。創造的破壊は企業者主導下でなされる革新の奔流であって、変革の累積的で連鎖作用の結果をもたらす、資本主義とは経済進化の推進力を体現した急速な産業変革の形態ということになる。注意すべきは征服された側の問題だけでなく、通常分析では故意に無視されている征服する諸要因についてである。1760年から1940年に至る生活と産業の歴史は質的变化の経過過程であり、新しい生活スタイルの上の新消費財から、また産業組織の新形態の上の新生産方法から来っている。創造的破壊の過程は諸産業の大規模化と独占化に深く関連しており、時代にまたがる過程の中に新概念、競争的独占及び独占的競争がもたれる。目先の適応で運行している企業の大階層があり、それは不断の地震によって揺れさせられ且つその間淘汰的自己破壊がなされていく。負けずに残った者も新製品や新技術の次なる侵入からの脅威に即して戦略を持たなければならない。事業仲間とのカルテルに類似した相互規制があり、そこに押し付けと押しやりとの間の揺らぎがある。・・・その他 (編者)

Ⅱ—(1)—1～15

創造的破壊の継起

1 野心的な密義の中にある資料・・・

私は第Ⅴ章では単に2%ということだけで算定した。・・・

それは1928年のパリティ価格が適用され、そのように1978年に対しては・・・私的可処分所得でのことではあったが、1928年の2.7倍であった。・・・適用価格についての変化のため修正がなされるとして、1978年に向けては1600億適用価格である。・・・更に平均所得は1928年の適用価格で650から約1300までとなる。・・・2%の複利で1ドルの額は1.55・・・

グロスでの全所得は、クズネッツによると、全私的消費と資本投資80億からなり、合して1300億となる。

2%(修正価格)に対応して900億であるとする・・・かくして900億×1.55・・・1928年価格で約1400億である。・・・一人当たり1000、ただしグロスで・・・ただし3%の場合であると、 $1.9 \times 900 = 1710$ 億・・・

重大問題、その後戦争がある歯止めをかけることになった。・・・

1943年価格の場合であると、26年基準価格の103.1(1928年は95)であり、この後者は(95の108%)であるから、1880億となる。・・・

*このノートは大戦後の第Ⅱ版に追加された部分の執筆に際したノートの様である。しかしここにおくことが妥当であると判断した。内容的にわからないところが大きであるが、シュンペーターの頭の中での計算の様相を窺わせるためおいた。・・・なお数の単位はドル。・・・(編者)

2 社会的—経済的な二重の意味、科学的—資本家的な二重の意味・・・ 企業家と資本家・・・資本家と地主、ペザント・・・略奪品・・・

3 利潤に対する、並びに私的所有に対する真の行論・・・人々は制度と原理について語るのが常であり、人物や策略については決して語らない。

4 生産上の成果(performance)・・・個別企業の戦略といったもの・・・そしてその場合、その企業はすべての彼の仲間達——彼等はずっと多くの利益、乃至は損失をあげている——から監視されなければならない！・・・脅威と損失を抱えた諸計画・・・新商品に由来する損失と脅威・・・

諸利益とその付帯物の源泉・・・奔流の中の航海・・・
諸利益は他のところからも来る・・・a) 事業情況は作り出される、
b) 個別企業に対しては利益にも損失にもなる・・・

戦略はどこから入ってくるのか？・・・計画、若い企業の、成功した企業の、協議した企業の、腐食している企業のそれ・・・

第二段には尚、完全競争的ケースの批判が所属する・・・反復の危険・・・資本主義の本質は第Ⅱ章の2で描かれる。(第Ⅱ章の2は、刊行本では第Ⅱ部の第6・7章)・・・

5 非効率を扱って・・・

価格は社会的費用に比例する・・・完全競争についてのカーンとラーナー・・・速すぎることと遅すぎること・・・これは制限なのか！？だが省略する・・・ラグナー・・・ここにおいて価格競争の二重の意味・・・ブルジョワジーの時代は、多くの愚かさや価格競争を伴う・・・蓄積の機能、それは独占に即して諸銀行も入る・・・このことは大規模生産に直結する・・・窒素企業といったもの・・・事前のまた事後の利潤の防衛・・・だが制御機構が・・・だが不断に動いている・・・スティーガーの見解に逆らって——独占体における利潤についての・・・独占、大企業——静態的に経営されている謂れはない・・・これら三企業にみられる運動、広告と販売装置と諸サービスによって保護された和議・・・規制に

由来する消費者の(産出上の)利害・・・制限の機能・・・

6 何故にこれらの諸理論が馬鹿げた結論を導いたのかの理由・・・

これらの理論——以前には充分正しかったであろう——が見逃しているところは、叙している問題が産業変革の過程に埋め込まれているということ、その結果としてこれらの行動様式が把握されるべきであり、且つそうすることで諸理論は意味を取得するということである。それを私はそのように見逃していたが、極めて重要な事実である。・・・

* これらの諸理論とはマーシャル・ウィクゼル理論からマーシャル・クールノー理論及びその発展の上に立つ経済理論・・・刊行本では第6章、納得すべき資本主義・・・A・マーシャル 諸原理、K・ウィクゼル 講義、A・クールノー 諸研究・・・(編者)

形式的な諸特性のことはさておく。・・・それにも拘わらず諸価値が否定される必要はない、更にもって完全競争に関しては。・・・アウトサイダーのセンター・・・目標を変える。・・・モデルを見よ。・・・諸企業が所与の諸環境下でなすであろうところのものは「ステパンの余事」(Nebensache Stephens)——枝葉末節のこと——である。

基礎的な章の終わりのところで、かの諸理論——独占に対してはそれは発展の中から発生し、且つその一形態であるとする——が以前には正しく扱われてきたかについての留意。

評論は、独占について

- a) ほとんど現れていない、とすること
- b) 現れていたとしても独占ではなかったのではないか、とみること
- c) 独占であったとしても、それらの独占は尚、不断にもっと妥当なものになり得るであろう、とすること
- d) 一個の独占設定には長所のあること、その下で偶々のことではあるが一隅に一個の権力設定をなしている、となすこと・・・独占について完全に他の把握が必要、且つ競争についても・・・
- e) 硬直性・・・事前と事後・・・独占的競争は自由競争であり、且つ同時に欠乏の準備である、とすること

しかし、 α) 我々はそれでも変革のため外部から来る人物はないとみており、 β) 我々は価格操作を生産的変革との如何なる関係もなしに、且つ価格を維持せんがためのみに、検討している。・・・

a) 速やかに清算がなされなければならないことである、b) あるいは創出されたものに一昔もの間、縛りつけなければならないということになれば、消費者サイドと生産者サイドにおいて陳腐化が起きる。

・・・トータルコストだがプライムコスト・・・

7 現存している事業体を運転することに付帯する決まりきった操作の部分、そのルーティンが全てではない。これらの事業体が絶え間のない地震によって揺れているような基盤の上に立っているという事実、この事実によってルーティンそのものが支配されているのである。どんな時点をとっても、幾ばくかの人々がもっと良くなるべきどんなことをも考え得なかったという理由から、ともかくも現存在にたどり着いている、といった企業群の大階層があるのは疑い得ない。自分達のビジネスを確立された路線上で運転しており、変化があったとしても消極的適応によって管理されるべき外的事情の変化として受け取られているのである。しかし彼等の行動の観察が資本主義の作動について我々に語ってくれる多くは、ある時点で病院に横たわっている兵士についての観察が軍の動きについて我々に語ってくれるものと同じほどのものなのである。同様にどんな時点を採ったとしても、資本主義的進化の巨大な奔流によってつくられた多くの入り江といったものがあり、その中に多くの企業群が避難してきており、しかも努力もせず当面の諸利益を搾取しているという事態があるのである。これらの入り江が研究する興味を与えないのは確かであるが、その流れの生活はかの奔流の中にあるのである。

どのようにこうしたことが独占を伴って遂行されたのか——アメリカでは過大と言ってよい程にそうなのであるが——、あるいは個別的な問題を越えた論点なのか、誘引されるのか強いられるのか、事前の利潤確保か事後のそれか、調整が遅すぎるのではないか、といった等々の問題が今や論証に至ることになる。更に無駄の問題も単純でないこと、投資が失敗して、ボナンザ時代に不毛の準地代を支払う、ことになることも問題である。

* ボナンザ時代・・・事業の大当たりがごろごろしているような時代、
アメリカ20世紀初頭・・・(編者)

このことを認識することは新しい視点を採用することであり、その視点からして個別事業体の利潤形成と利潤保全の戦略が見極められ、且つまた何であれ与えられた産業の諸々の運命とそれに全体としての産業機構の機能遂行が見極められるのである。だが、もっと正確には、どのようにしてこの新しい視点が我々の論題に乗るかである。・・・競争と独占についての他の概念・・・

8 その奔流の中での生活は一個の限られた持続性をもつ過程であり、どんな企業が与えられたとしても、どんな瞬間においてであれ、それが存在し行う事は、創造的破壊として検討されなければならない。あるいは単純に生活史の典型的なケースは何か次の如くである、即ち、任意の与えられた経済が何であるか、並びに任意の時点でなしているものは何であるか、は、それが実存に至る前に計画と建上げによって部分的には決定されているということ。その計画と結合し、それをチャンスまたは優越性であると信じられると示された一個のアイデアがあったのである。・・・そしてそこで、それがどのように我々の外観を変えることか！・・・

そうは言っても今日の理論家達や官庁エコノミスト達——産業的諸条件について報告書を書いている——の双方は、ほとんど相変わらずに、そうした諸病院とそうした諸々の入り江が全てであった如く説明をつけている。結果として我々は諸産業についての構図をば、その諸産業の構成要素が与えられたもの、等しく所与の方法でもたらされたもの、そして他ならぬ所与の市場で——そこでは準独占的な諸事情がもっともらしく高く適正な諸価格と低い産出量を以て特徴付けられるような事態が確保されている——それぞれのシェアをめぐる抗争が正に演じられているもの、として得ることになるのである。しかしこの分析は資本主義的進化を体現するケースを無視している。分析が適用不能ではないが、全く別な事柄が重要なのである。征服された諸事態が凍結されてあるだけではないのであって、その征服しつつある諸要因こそが新しい光の下に現れるのである。・・・生活史の立場・・・せき立てられて生産する・・・常にそのような計画が・・・企業は二つのことをなす。

9 それは我々に新しい視点を与えることになる。そこから我々は個別企業の行動とその利潤形成、並びに利潤保持の戦略を見究め、何であれ与えられた産業の運命を見究め、全体としての産業機構の機能遂行のあり方を見究めるのであるが、この視点は理論家達や官庁エコノミスト達——産業的諸条件についての報告書を書いている——によっては通常は採用されていない。だが正確には如何にしてこの視点を抱えている問題の上へのせるかである。

我々が何等かの事業体をば建物、機械、原材料のストック、貸借関係とといったもの——それらはともかくも現存するに至ったものであり、且つともかくも管理されるべきものとなっている——の集成とびったり一致するものと考えをやめ、それを実体的に存在しているものとして、すなわち今あるものを規定している過去の生きている存在として、且つ今なされていることによって大きく規定される未来と結合して生きている存在として、考え始めることになるや否や——それで充分であり——我々は・・・

・・・亜種としてのこれらの生活過程・・・恐らくは先ずは創造的破壊が、独占とは関係なしに？・・・等しく愛すべき一個の産業・・・それは競争的である——創造的破壊と創造的には破壊されなかった人達の諸工夫、但しその彼方には保身に汲々としている人達がいる。何故にもっとも意欲的な当事者達と同じではないのか。・・・その中には価格伸縮性があり、諸企業が計画としてその存在の入り口のところにたたずんでいる時に決定されることが多い(気まぐれ)。・・・事前と事後・・・ボナンザ時代・・・生活史から見られた奔流の中の生活・・・硬直的に完全競争の緩和・・・資本主義はさなくとも良くなしたに違いなかったことを為すということを示すのみである。・・・

10 人が突然に死に直面させられた時、彼の全生活が彼の心の眼の前をよぎる、と聞いている。これと同様に、いうなれば1760年——石鹼が丁度入ってきた——から1940年に至る労働者の家計の進化を今一度

検討してみよう。そして経済史の中で得たものが如何に乏しいものであったとしても、誰の眼にも明白であろうところのもの、すなわち、その内容はコンテンツに変化のない路線上を単純に成長してきたものではない、質的变化の過程を経験してきたものである、ことに注意できる。同様に同じ期間につき典型的な農場のもつ生産的装置の歴史を検討しよう。輪作、耕耘、それに肥育の合理化の開始から今日の——エレベーターや鉄道と結合した——機械化されたものに至る。あるいは木炭炉から我々の時代のタイプに至る製鉄鋼産業の生産装置の歴史、あるいは水車から現代の動力プラントに至る動力生産装置の歴史、あるいは鉄道から航空機に至る輸送の歴史。

把握されるべき本質的な真実は「資本主義は急速な産業的变化の一形態であり、方法である」ということであり、それは事の重大性の中で他の全ての事柄をして光輝を失わせるものであるが、それにもかかわらず粘り強く無視されているところのことなのである。それは事の性質において進化的であり、且つ静態的ではありえない。資本主義過程のこの進化的性質は経済生活がおかれる社会的並びに自然的な環境——環境は変化し、更にその変化によって経済活動の諸与件を変化させる、この事実は重要であり、これらの諸変化(戦争、革命といったもの)はしばしば産業上の変化を条件付けるものである——の中で進行するという事実に根差すだけではない。更に環境の変化は原動力(**prime mover**)ではないのである。人口や資本における準自動的な増加に根差すものでもない。資本主義のエンジンを作動にセットして保つ基本的な衝動は資本主義企業が創出する新しい消費財であり、生産と輸送の新しい方法であり、新しい市場であり、新しい産業組織から来るものである。

* 10、については刊行本83～84頁に同様の記述があるが、全く同じではないので収録した。シュムペーターの資本主義過程の認識の核心部分をなす。・・・(編者)

11 新しい立場、すなわち、我々が時代に渡る過程を掌握することの内にそれはある。その過程は時代に渡って、より長くなければならず、それは企業群がある時点に存在し、且つ活動したところのもの全てに対し、その意味を与えるものでなければならない。・・・この過程が如何に遂行

されたかを検討する。・・・能動的で積極的な設問(ここでは同じ問題が他のものに変換されることができる)。・・・一財の導入・・・競争的独占化・・・独占化競争と独占の硬直的な無駄・・・予言的競争すらもが機能をもつか?・・・時代に渡る過程は重要であり、その要素である全てのことが考察されなければならない。

1 2 はかりうべき利益・・・

自動車——少数支配(*kleinen Regierung*)の発展、その場合、金融が多くの失敗を伴いながらも一個の権力に・・・

2 1年以降、三つの事業体——これらは再三にわたって提示された他者への協定がある場合においてのみ保つを得た——、それはだが価格を硬直化することを強いる。・・・産出の位置をも・・・

この極めて巨大な利益の性質・・・ここでは利潤?・・・誰がそれをしぼしの間検討し、組織的な機能の中にはないとし得るか。・・・

見かけよりもずっと効率的、様々な工夫により行き過ぎるだけでなく反復をも満たしている。その質の形態の中に、競争的紛糾(闘争)の予期し得る結果がある、更に市場の間断なき哺育があるのである。・・・

指導者の位置の喪失が忘れられてはならない、そして何もないところからの高揚も。・・・硬直性、穏当なケース・・・せいぜいのところ騒ぎ立てられているだけ・・・だがこれを見出したあるエコノミストが反唱している。・・・鵜呑みにしている。・・・単一の売り手は、だが所与の需要と共にあるのではない。・・・行き得ない・・・スタンダードオイル・・・独占における硬直性

1 3 いくらかの産業分野で与えられた規模をもつ、与えられた数の事業体があり、それぞれが独占的に競争的な(*monopolistically competitive*)、そして同時に寡占的な(*oligopolistic*)状況下で、与えられた方法による生産を行っている、且つ特定の市場を支配している、としよう。これらの事業体は識別し得る生産物を生産し、それぞれの行動が残余の企業に問題になるほどの規模をもっている。その位置はそれ故に技術的意味で完全競争的でない。しかしこの型が——正確にあるいは近似的に——完全競争的な事業体と同じ結果をもたらすような重要な場合がある、ということが観察さ

れるべきである。

14 私が伝えたいものを最もよく描くであろう型には、更に次のように仮定が加わる。それぞれの事業体はしっかり腰を据えて自分の市場を守る用意があるが、他人の領域を侵すことは避けている、出来る限り安定したものに自分の生産物の価格を保ち、状況に応じて産出量・品質・広告努力を変えていく、ということ。これらの価格と産出量は、完全競争的諸条件の下にもたらされるであろうものよりは、価格において、より高く、産出量において、より少ないのが一般的であるだろう。過剰能力があることは恐らくは確かであろう。利潤をつくることと財をつくることの間にある敵対性は充分目立っている。

今やそうした諸型が生じ、短期的分析の立場から見ればそれらは相当に頻繁でさえある。しかし資本主義過程の中では、これらは絶え間なき嵐の中の小康でしかないのであり、且つ一般的に言って、時間のどんな長さに渡っても主張はできないものである。この事態をめぐってこうした事業体が行っている事柄が様々に——より良く、且つより安く——行うための諸計画が舞い交う。その諸計画は遅かれ早かれ具体化される。そうした諸計画が、そうした事業の一つか二つによってやり遂げられるか、あるいはその目的のため設立された新事業体によって試みが失敗に至るか、そうしたことは問題でない。いずれの場合にあっても古い構造は取り去られ、新しい構造が出現する。瞬時的または短期的に行うことに自己限定をなしている観察者にとっては、このことが政治的革命のような例外的な出来事のように映じることは充分にありうるだろう。時代に渡って——長期に——資本主義過程を調べている観察者にとっては、それは企業の精神(*the spirit of enterprise*)を身につけているわけではないような部門においてすら、生起する正常な事柄なのである。ニュー・イングランドの農業は鉄道によって滅され、高コストの小売店や百貨店はチェーン・ストアによって滅された。

15 ここにきて、資本主義のエンジンの作動についての我々の諸見解を精査するべき必要性は明白。

(1) 第一に赴くべきは、競争についての伝統的な概念を見直すことである。競争の真の挺子は新しい生産物と新しい技術の衝撃である。通常理論によって、もっぱら強調されてきた価格競争や業界参入の自由よりも、それははるかに効果的であり、「ドアの拡張と建物の爆撃」程の威力の差がある。競争の概念がこうした衝撃を含むほどに広げられると、他の成分の諸要素はその重要性の多くを失うだけでなく、異なった意味を獲得させることになる。業界参入の完全自由は、時折、遅滞的要素となることが論証せられる。そうでないと特許の授与や商標の保護を行う含意を失わせるであろう。価格の伸縮性もまた然りである。新製品と新技術の産業機構への入り込みは一般に——短期的にも長期的にも——諸価格の下落方向への変換を含むものではあるけれども、この変換は必ずしも通常の意味での価格競争のメカニズムによって、もたらされはしない。与えられた市場が一商品によって革命的再編を蒙った時、諸価格の統計が示すところでは知覚できるほどに高度の硬直性を演じることがある。内燃モーターは馬を駆逐したが、馬役はそれが広く用いられていた時よりも安くはなっていない。新しい香水は市場を征服し、消費の香水に対する願望をはるかに安く満足させる、とはいえ、旧ブランドが結局において売れている限り、単一の価格であることはそのファクトを指示するために必要でない。

(2) 我々が一時的小康として前記(1 4)した状態を享受している産業の事業行動を扱う場合ですら、従来からの分析はその状況下における一個の本質的要素を見落としている。いつの日か現在の構造を転覆する新しい何事かの侵入の脅威すらもが、一般に、長期的には産出量を完全競争の産出量に近づける事業政策を強いさせるに充分である。と言うのは、常に存在するプレッシャーを受け流すために利用可能な方法の中の少なくとも一つは産出量の規制(削減)のよって爆発することの抑制の内にあるからである。産出量の削減は——それが非正常的利潤をもたらすか否かは問わず——来るべき侵入者に対しあまりにも多くの未利用な利潤を残すことになり、以て品質とサービスといったものによってその名を確立させ、以て顧客をしっかりと惹きつけることを得さしめる、ということ。このようにして創造的破壊の過程は、それが実際にはすぐさま作動しないような場をも規律することになる。事業家達は、最近のワシントンでの聴聞において、審問家達が結局においてどんな競争をも理解することが出来ず、事業家達の言辞を分かったような顔をして眺めている傾向にあった、ということに驚かされたのである。消費者の利益という立場からみて、不完全競争の情

況には消費者が失うと見込まれるものに対する補償があるのである。

* 消費者が選択する生産物の一層大なる幅が提供されること、に創造的破壊の過程の本質の一面がある。

(3) ある寡占的グループにつき、それらの諸企業が相互に持てる市場を尊重し合うよう価格と産出量、それに融資条件を合意によって固定する、という協議に入るとしよう。ドイツのカルテルの形態の中に我々はその種の事をもっともよく思い浮かべることができる。そうした硬直的機構は絶対的頑固者達のまさしくその縮図と見るべきであろう。典型的なケースにあっては、始めは規律に従わせられているが、漸次新製品と新技術が脅威となり、実際の衝撃により吹き飛ばされることになる。すなわち十分な時間幅をとって観察すると、その時々で硬直的であるが、その連鎖で動くコンベアーにはどのような非伸縮性もありえない。しかしカルテルの諸規制が資本家の利益以外のあらゆるものに侵害を加えていることを意味することにはならない。経済生活が静態的なものならばカルテル的規制は当たり前のことなのである。それが創造的破壊の過程で充満されている時には、そうした組織構造(独占的諸方策)は長期的に総産出量の縮小をもたらすであろう、とは必ずしも言えないようなやり方で生産活動を制御し、固定し、保持することになるであろう。たとえ講じられた特定の施策が新技術の十分な利用を妨害する意図のものでも、他のやり方がとられよう。

誰かが1ポンド1セントの合成小麦粉を生産する方法を発明したとせよ。そうした恩恵を伏せておこうとする論議はない。しかしその合成小麦粉の突然の参入は小麦栽培者にとって破局であろう。その後、累進的不況効果のよく知られた連鎖——銀行の破局と小麦栽培者の需要に応じている全産業、更に全経済の破局——がある。それ故にその過程をスローダウンさせ、秩序だった撤退を許容させる論議、並びにこれまで自らを正当化させてき、破局が防がれるならば再度自らを正当化する可能性のあるところの、その持てる諸価値の不当な破壊を回避させるのを良しとするはつきりした論議はある。今やカルテルと類似の産業の自己組織化(self-organization)は——その方法が彼等自身の分野で阻止のため発生したもののか、またはその外側でのものかを問わず——ある程度には正にそうしたことを成就させるを得る。長引いた不況の時代に何故にそれが多発するのか、その理由がこれである。もとよりこの局面を政治家達や知識人達は気付いている。彼等はカルテルを業界主導でつくられた場合のみを咎めてい

るので、連邦復興局(NRA)の例のように自分達の後援下になされた場合には同種の事柄を完全に是認する。これを押し付けることと迫害することの間に奇妙な揺らぎ(vacillation)がある。これがカルテル問題の適切な提示の一つである。価格競争を制限する傾向にあるどんな事柄をもこれを無批判に責める、という通常のあり方は——資本主義的進化の設定の中では——ほとんど起こりそうにもない特殊なケースを念頭に描いているのである。利潤創出と産出量最大の間にある大きな隔たりは、このタイプの独占的諸政策が図られる経済システムの中では人が考えているほどには根拠になり得るところが小であること。更に高馬力の自動車は、ブレーキを持っていないよりも持っていた方が、一層安全であるだけでなく一層速く旅行をさせることができる、ということ。

(4) 歩調を合わせ秩序だった前進であるかのように見える「何事か」を強いるような諸政策は、どのような組織機構をも伴わずになされる場合ですら、製品の差別化を伴った寡占的パターンから生じている。その場合の条件は死にももの狂いで生き残ったごく少数の事業体だけが存在しており、しかも一方では彼等は不断に死の懲罰にさらされながら運行しなければならず、他方では些細というよりは遙かに死活的な何事かから自分達の競争者の排除に希望を託することはできない、という事実を自覚している事である。(3)での図式では硬直性の要素を強調したが、今や我々は他の要素を強調することで今一つの亜種をつくることになるだろう。即ち現代の寡占的統制は——動きとその動きの帰結に反発する防衛との間の間奏曲に替えて——累進的運動から直接的に出てくるものだという事実である。それは「あってよい」。併し事実問題として、それが常態なのである。

合衆国では少なくとも大規模産業の大部分は、このパターンに即してもたらされた。1 ダースほどの産業——この国の経済進歩のペースととりわけ結び付けられている——は、自動車から製缶に至る迄、容易にあげられようが、古典的事例として自動車産業を考えれば充分であろう。その産出の量的並びに質的な発展を見据えるならば、寡占的規制の理論が、このケースや他の類似の全てのケースでは、馬鹿げたミスフィット(当てはまらなさ)があること、並びにそれらがそうだとする根拠付けにおいてもそうだ、という事実を明らかにするのに助けになり得るような観察者はいない。ミスフィットはとりわけ不完全競争の理論、すなわち、不完全競争は「不経済に小規模な企業を不経済に過大に生み出していく傾向」があるという命題において顕著である。この命題は——読者が思うであろうようには—

一誤りでない。その設定の内部では全く正しく、しかも応用のいくつかに
おいてさえそうである。作者のない風刺は難しい(Difficile est satiram
non scribere.)。しかしここでは常識的推論を通常のルールで受け入れる
だけでよい。

我々の原理を適用するにあたって——一つの産業の歴史が全体として、
且つ資本主義的進化の過程にとって提供されるその装置舞台とも関連さ
せて、考察されなければならないし、又何等かの与えられた時点の状態の
表出でもなければ、又ある想像上の本質的には静態的性格をもつ舞台にお
いてでもないのであるが——我々は四つの明確に表示される画期を区別
することができる。先ず試行的画期があり、多くの小規模で短命に終わっ
た努力があり、そのほとんどは出発点から失敗を約束されていた。それは、
19世紀の中葉から1908年迄続いた。そこでヘンリー・フォードのスペ
クタクルな成功により始まる「ボナンザ時代」がくる。それは1915
年まで続き、数えきれない多くの損失と失敗が演じられたが、成功裡にあ
った少数のケースでは極めて大な利潤と結合していた。どのようにしてそ
れが次の画期(1916—23年)を導いたかを見て取ることは容易である。
再び多くの新規参入者が群がり来たり、その淘汰の中から幾ばくかの事業
体ははっきりと自分達の地位を確立し、多くの小さくはあるが重要な改良
がなされて引き続いて起こる生産性の爆発のための諸条件を創出した。第
四の画期はその爆発はその結果といえる統廃合、下落する利潤率、巨大三
企業の優位の様相によって特徴付けられる。この画期を通じて尚あらゆる
上昇基調で導かれてはいたが、その一方でとりわけ累進的に低落の徴候を
示していたほとんどのリセッションに直接通じていた。鉄道のもつ旅行者
と比較的短距離の貨物輸送を削減した——資本主義的世界で現実に問題
となるその種の競争の素晴らしい事例——あと、飽和とその結果である純
益の更なる減少に加えて、航空機との競争に直面することとなる。

その経過の全体を通じて、この産業(自動車産業)はそれ自体絶え間なく
動いただけでなく、経済システムの全体に力強い刺激を与えた。このこと
は、直接的にはタイヤやガソリン工業、道路建設業、販売店とサービス業
といった関連産業の発展を通してなされたが、間接的には所得と支出への
その影響——シフトされた諸財の需要表と供給表、及び刺激せられた全領
域の生産——を通してなされた。こうした全ての産出量に対してもつ諸効
果と比較すれば、この産業が自らの産出量を十分に——すなわち完全競争
の条件の下でなされていたならば達成した筈であろう程に——拡大した

か、またはしなかったか、という設問は重要だとは言えない。ともかくそれが唯一の重要事であることを止める。しかもその設問に肯定的に答えられるとしても、長期的立場に立ってのことで、短期的立場に立ってみればそうでないかも知れない。価格競争は、もとよりその三大事業体の間で欠落などはしていなかった。一方における次々と告知された「カット」(“cuts”)——主としてフォード会社によってそうされた——と他方における個別事業体の付け値(the offering)の年々の変更がある。もし価格伸縮性においてその証に今一步のものがあるとすれば、それは一部には戦時のピーク時に他産業に比して低かった価格からその引き下げられる程度が小であったためであり、一部には「下取り」(“trade in”)車に対する許容幅を変化させることによって価格を変化させようとする策のためであり、更に一部には性能における着実な改良の故にである。更に価格における競争が明瞭性において今一步であるとするれば、そしてもしそれぞれの事業体の価格が全体として一致した歩調で動く傾向があるとすれば、それは大事業体の企業戦略がある程度には競争相手の実際の動きと同様に期待される動きに即しても反応し、それ故に他の場合、つまり、そのような寡占的環境にあるのでなければ続ける必要がないような競争的闘争の結末を予測する、という事実と根差すものである。このようにして得られた諸結果は次のようなこととは異なる。すなわち一個のカルテルが、明瞭性において不足する形態においてではあるが、巨大企業間の競争並びに現存する乃至はポテンシャルなアウトサイダーからの競争が尚もこの三事業体の事業政策を規制している、という事実によって生み出されたものだろうということとは。

実績によって向上した、且つ実績によって自分達の基盤を保持、乃至拡大する、というのならば、彼等は敢えて困難な問題を持ち出し、煩わしい拘束を課し、そして外部からの攻撃に傷つきやすいような、そうしたカルテルに結合しても得るところは極めて少ないのである。得られた諸結果は古典的タイプの完全競争——規制する者の規制(the regulation of regulator)による——がもたらすであろうものとは異なる。規制されるのは状態ではなく動きなのであるから、個々の事業体が望みを託している全ては、突然の侵入による市場解体の回避であり、その傍ら守備領域の境界線が——幸運な、または幸運ではないような「当たり」(hits)に即して——拡大したり縮小したりすることを優しくさせることである。それ故、もし彼等が「海中の一滴」であったならばなすであろうこと、換言すればその時点で駆使できる諸利益の全てを十分に用いること、などはなさない。

更にそれを以て全ての競争者を駆逐するほどの絶対的で決定的なことを発生させるべきでないならば、例えば性能を改良するとか価格を引き下げるとかを徐々に、しかもできる限り他と歩調を合わせて行うのである。確立された位置、存在している物的施設、よく練り上げられた資本勘定、広告キャンペーン、よく発達させられた販売組織、各ステーションにお馴染みのサービス車のより拡大された整備、これらの全てが競争者の巨砲を撃退する助けとなることはもとよりである。しかし時の経過とともにみると、あたかもそこに完全競争があったかの如く、多分に同じ結果となる。更にまた完全競争過程にしてその進歩のペースが非常に急速であったとすれば、多くの倒産や他の避けうべき無駄を結果としてもたらしていくであろうことと比較するならば、上記の彼等の過程は程度においてずっと良好であろう。

* 資本保全についてはでき得る限りもう一度を！ だがこの視点は独占の場合においても再度くることになる。

(2) 独占行動と無駄

摘要

独占者の位置は、自分の商品に対し所与の市場を持ち、所与の需要表から独占的搾取を引き出しているような単一の売り手、ということである。充分な長期ではそうした位置は極度に稀であるが、短期にあつては独占類似体(近似的なものを含む)は全くありふれている。その中で最も重要なものは創造的破壊——不断に独占的位置を創り且つ破壊する——の過程の創出したものから構成される。新方法や新組織をもって新商品を生産している供給者の位置は、暫くの間、独占的に競争的な位置に赴く。その中には、もしその新しさが誤っておらず、且つ間髪を入れず参入してくる競争者がなければ、余剰の利得をもたらす真正の独占の要素がある。今一つの独占は鉄道や電力企業にみられるような投資の巨大性に根ざす地方的独占である。唯一の生産者であることは寡占状態にある企業以上の尚何かがあるわけではない。彼のあとを追って群がり出ようとする競争者と自分の場をめぐり競争しなければならない。独占者は潜在的競争者の脅威によって規律されているのが正常で、そうした独占者の利潤の源泉は新商品を成功裡に導入したことに起因する当面のコスト的優越にあるのであつて、何等かの特権と結びついた一種の使用税ではない。そうではなく危険と一緒にある成功プレミアムの一種なのである。独占資本主義は技術上、経営上、販売上の能率という点に関する限り、理想的に無駄から免れている。大企業においては驚くほどにそうである。併し急速な進歩に起因する社会的無駄は次の如く極めて多い。プラントの過剰ともいえる過大能力、労働者の失業と低位就業、諸サービスの重複と過大広告といったもの。併しその無駄は動態過程に生じたもので、それらの補償とのバランス関係が考慮に入れられなければならない。・・・その他 (編者)

Ⅱ—(2)—1～10

独占行動と無駄

1 単一の売り手という言葉によって指示される状態が、人々の感じ且つ悩んでいるような独占を構成するのに、それ自体充分なものではない、ということは、我々がクールノー・マーシャル理論の諸前提を述べるや否や直ちに明白となる。この理論は自分の商品に対して一つの所与の市場をもつ単一の売り手を示し、余暇にその市場を開拓するあらゆる能力を彼に許容することによって、価格、産出量及び利潤についての法則を導き出している。技術的には些細なことだが、この理論は独占者が対面する所与の需要表が彼自身の行動からも、彼の行動に対する他の任意の事業体の反作用からも厳格に独立していることを前提としている。ところがそれがそうでないならば、すなわちその単一の売り手がその需要表のシフト——その表との関連で利潤を最大化させようとする彼の試みからもたらされるであろう需要表のシフト——の全てを考慮に入れなければならないならば、そのような場合はいつでも彼はその理論が与えているようには行動できないのである。今や、一方では典型的な独占的搾取 (monopolistic exploitation) なるものは、彼がそのように行動する場合においてのみ起こるものであろうこと、他方では産出量における永続的趨勢の分析のため問題となるほどに十分に長い期間を見据えた上で、そのように行動できるようなケースは極めて稀でなければならないこと、が明白である。しばしの間、はかない議論を引き延ばしたが、我々はこれを以て自らを容易に満足させることができる。

* この紙面の余白にシュムペーターは「遡って設定された独占者についてのヒックスの構図」と記している。需要表のシフトについてはヒックスの理論の援用である。

諸商品、例えば塩といった物、がある。または諸商品の諸グループ、たばこ生産物のような物、がある。または一つの商品の中の、言ってみれば英国人の立場からする、特別の諸数量がある。これらの諸商品は他の諸商品——その業界への参入の効果的防止こそが實際上真に独占的な位置にあらんためには必要だと要求されるころのもの全てであるような諸商品——による代替が出来ない程、手に負えない代物だということ。こうした諸商品の独占販売は公的権威によって仕上げられるであろうし、実際

に塩、タバコ、マッチ、ブランディ等についてヨーロッパ諸国では財政的独占によって完成せられたのである。しかしどのようにしてそれが他のやり方で仕上げられ得るのか(禁止は除いて)、を見て取ることは容易でない。オレンジ類とか綿花類は競争と両立することはできない。資本主義はその結果に逆らって反転する。・・・香辛料、事後的には商品の廃棄がある。・・・通常公的憎悪が、そして短命である、a) 革新過程の中で、b) しかしまた、ここでは市場の発達が。・・・タングステン無きモリブデニウム、そしてどのようにそれは適応するのか。・・・フォードの革新・・・平等の諸条件についての公準・・・短命である。・・・だがとりわけここでは、特殊な事情にある場合を除いて、市場の創出と結び付けられる。・・・パテントは充分でない。・・・独占要素は利潤である。

2 濫用・・・

単一の売り手——いかさま・詐欺——は法制的に設定された場合にのみ存在し得よう。属性はそれに適応することではなく、この場合にはそれ自身である。

3 諸利潤、独占におけるその性質・・・

独立需要・・・しかし反作用がある、a) 作用による回復・・・b) 独占体が需要に即してはなし得ることが何もない程に、独立需要が不適切ではない場合・・・

資本の自己調達・・・そして全くもって巨大な装置・・・それは新しい方法、あるいは少なくともより良きリーダーシップを意味する。・・・U.S スチールではそうでない。・・・諸条件・・・囲い込みの創始・・・かくして、それについての利益は何なのか。

4 トラスト破壊(独禁法違反による)は個々のケースの不利益の上に基礎付けられるものでなければならない。だが私はただ一個の命題を確立しようとしているだけである、ということを考えてほしい。・・・

14～18世紀における我々の独占の中において、商業(Handel)、付帯的事実として冒険がある。・・・

憎悪——だがそれは匹敵する機能をすでにもつものであったということ、事後的に与えられた諸状況の下での命題であることが必要であったということ。・・・

5 16世紀と17世紀に——そしてそれ以前においてさえ——例えば英国で創出され、例えば廷臣といった有力な諸個人のために存在した、といった類の独占について主張しておくべき論点がある。それは単純に公衆を搾取する一方法であって他の如何なるものでもなかった。それ故にどんな政治家も独占という単なるその名称だけで理屈抜きの嫌悪を掻き立てられ、特に英語圏では攻撃の対象となっている。しかし真正の上記のケースの独占と結合した場合は極めて稀であり、他のところでは全く良識的な人々が——ひとたび独占なる言葉が議論の中に投げ込まれると——合理的な論議の余地をなくしてしまうに至っている。資本主義システムに反対する道徳的、並びに文化的なヴィジョンをもつ現代のエコノミスト達があた得る限りの頻度でそれを用いていることに意を注ぐのは驚くべきことではない。その同じ時代画期の事業的諸独占すらも真正の場合でなく、我々が今描写しつつあるものの仲間ではない。

立法的、乃至は行政的行為により作り出されたものは除くと、クールノー——マーシャルの記述に答えた独占体が一時的だけでなく長期的に存立し得るとなれば、それは供給される原料の利用可能な全体を単一の売り手によって管理するところからのみ発生し得るであろう。この原料は特定の諸目的に必須のものであるだけでなく、その売り手は言ってみればその使用における「需要表の持ち上げ」(raising the demand schedule)の可能性、または他者を征服することの可能性について考慮を払う必要が全くない、という状態が十分に確立されている条件がある場合である。そうしたパターンに近似しているとみられる事例があることは疑いない。19世紀のある期間の水銀はその一例である——ほとんどがアルマーデンとイドリアで生産され、ともに金融グループによって管理されていた。カタンガのラジュウムは今一つの事例である。しかしこれらの例は極めて少数であり、しかも極めてかけ離れた場合である。アングロ・アメリカン的世界は特定の諸原料を制することによって他の諸国に圧力をかけることができ

たのだ、と示唆されてきている。この政策の弁護者達の中の比較的良質の告知者は——素人ならば考えかねない——そうした貿易品目の目録のどれにも意を払わない程に慎重であった。そのようにそうした物品があっても、それらの内の単一の物品が単一の売り手で管理されたとしても、独占の真正のケースを生み出すわけではないのである。たとえ、もしそうした物品の全てが単一の売り手によって管理されていても、資本主義世界によって課せられたどんな独占由来の制限もが——量的重要性においては——事実そうであるように小であろう。更に必ず発生するに違いない技術上の変革によって尚一層に小となるであろう。完全競争は実際には——農産性の商品を除くならば——極めて理論の上だけのケースである。だが長期の独占もはかり知れない程に理論の上だけのケースなのである。

* 「その原料が一国でのみ見出されるということだけではもとより充分でない。あれこれの独占を一国がもつことにつき語るのは不幸な言葉の誤用の他の一例である。」と余白に記している。

短期にあってはこれと反対に、独占的状况は——近似的なものを含めしめるため独占類似体(monopoloid)と名付けるならば——これは全く普通のことである。二種がある。その一は例外的環境の所産である。オハイオ溪谷のある村が浸水によって島となることがあると、数時間または数日間はその村の雑貨屋は独占者となろう。今一つは絶え間なく独占類似現象を創出しては破壊するという創造的破壊の資本主義過程の産物である。この種類が——我々にとって——唯一重要なものである。それに属するいくらかのケースに短く注意を払うことにしたい。すなわち、もしある企業が新しい商品の生産を始めた、乃至は新しい方法で元からの商品の生産を始めたとすると、この企業は少なくともしばらくの間は「独占的に競争的な」状態に向けて動くであろう。事実、このことは独占競争の理論を適応するための最も興味深い機会を与えるものである。そうした企業が——その新規性が失敗でないならば——正常に取得できる——その場合競争が瞬時的にその企業の歩みに随伴して起こることはなかったとして——それ相当の余剰がある限り、我々はその中に「真正」の独占の一要素があると言ってよいであろう。しかし我々がこのように言う時、即座にも我々はこれはある有機的な機能を充たしている独占の極めて特殊な種類のものであること、及びそうしたものとして独占とは結びついていない諸結果に対応したものであることを付け加えなければならない。このことに似て、もし我々が人的努力に由来するあらゆる報酬を賃金と言うならば、そのような

報酬部分を賃金余剰(surplus wage)と呼んでよいだろうが、非常に特殊な賃金であることを認識しなければならないから、そのように呼ぶことで得られるものは多くはない。・・・更に支払われるものとしての独占的利得は地代とアナロジーをもつ。・・・自己防衛、埋蔵資源を買い占めたアルミニウム産業、・・・a) 事前に b) 開発するための手段をもつこと。

* 関連して次のような余白への記入がある。

「地方的な独占——鉄道と電力、その根拠は資本の巨大性に起因する。・・・最も巨大な企業が最も収益力の大きな企業ではない。・・・何故過大なものになったのか。・・・その地位を十分に利用し尽さない独占者はそのように振る舞うことはない。鉄道はどこに？それに競争が不可能な所での場合は？・・・パテント、支出・・・」

19世紀に一企業だけで生産されていた自動車、その唯一の生産者は——独占者ならばそう行動するべきだと想定されることをなさんがためには——その時の馬や馱馬車等は優越してはいないが受け入れられ得る代替物であったのだが、そうした代替物に対して存在していた需要に照らして正味の余剰(net surplus)を最大化させるような価格で自動車を提供しなければならないだろうか。そのようなことを為す人物は明らかに変人であろう。実際には、前方にぼんやりと見える一層大なる市場の誘惑と危険の双方が、その新商品の唯一の生産者をして完全競争の諸条件下で生産者が行動を強いられるのと多分に同じように行動するよう誘引する、というのがあらゆる正常なケースであろう。

寡占者達が潜在的競争の脅威によって規律されているのが正常である、ということは前に指摘し尽くされた。このことはここでのケースにあっても同様に真実であることを保っている。寡占的パターンの中で争い合っている企業におけるよりも更に明瞭に、我々の単一の生産者が産業的オーガニズム——そこでは競争者が彼を追って群れ出してくることは間違いなく、しかも彼は自らの需要を作り上げるに至っている状態がある——の中で自分の位置のため競争しなければならないことに気付く必要があるのである。需要を発展させようとする努力は通常その新製品が遂には置き替えられる迄続く。どんな場合でも数十年の問題である。彼がこうした諸条件に従って自分の産出の量と質を制御している限り、彼が物事の正常な道程の下では独占者たるべく行動し得ない、という但し書き付きでのみ独占者と呼ばれることができよう。

諸利潤の源泉は新商品(乃至は新方法)の成功裡の導入に付帯した臨時的なコスト的諸利益の中にある。更に諸利潤は資本主義過程の原動力である特殊な種類の偉業に対し与えられる諸賞金(premia)である。實際上あらゆるコストを超えた利益の余剰は「真正」の独占に由来するものを除けば、好況と不況の交替——これもそれ自体資本主義の過程と原動力に起因する——の継起に即した諸好機(最も広い意味での投機の諸機会)に対して「当たっていた」か、「いなかった」か、に帰せられるものである。諸利潤はそれが動きゆくものである限り「特権的使用料」(tolls)として述べられることができそうにない、ということが強調されなければならない。そうでないと我々は諸財の流れを増大させる支払いを呼び出すようあらかじめ準備を整えているということになる。更に進んで諸利潤の性質から次のことが導かれる。ある企業が損失になっていない場合、期待された利潤はほとんどの場合——急速の減価償却を行う、あるいはそれを以て失敗の嵐を乗り切る、あるいは損失を補修する基金を造出するため——十分な準備ができるほどに大でなければならないということ。厳密に言えば正味の利潤(net profit)は工場施設の廃棄価格にまで償却済みの状態に至る迄はないのである。また実際に失敗した時立ち返るためのオーナーの基金の蓄積なしには計画をもつ大胆性と自由はあり得ないのである。事業体はその道程を走り終える以前にサービスや報酬を査定することはあり得ない。その時正常以下の報酬が展望されるとしても、それは正常以上の報酬と一緒にになっているのである。また正常以上の報酬は他の事業体における正常以下の報酬か損失と一緒にになっているのである。「もし支払うべき利潤なしとすれば、その財貨がどれ程により安価で消費者に届けられ得るか、を考えよ」と大声で叫ぶことを為し得るために、頂点的成功だけを更に最も都合よく選ばれた時点においてのみあり得るような成功を持ち出すのはナンセンスである。

* 余白に記している。「この命題は詳細さを欠き、また教条的に読まれるに違いない。しかし私の書、景気循環論で発展させたもので、歴史的、且つ統計的に十分な詳細さを備えている。」・・・余白に記している。「社会主義においても尚も必要、——再度に渡って現在あるものに賦課し、価値を保全し、前進のための諸手段を大にする。」

必要利潤の概念——創造的破壊の過程を推進していくのに十分なほどに大な利潤——は上記に留意された、これらの諸概念のいくつかについて

の包攝によって拡大されるべきである。成功裡の事業体の生活によりカバーされる数十年の期間に渡って、その都度都度の状態は——その事業体そのものの行動とは独立して——「真正」の独占者として振る舞うことをその下に得さしめるような諸原因の所産であろう。そうした望外の事(windfalls)は、これを事後的にみれば、産出量の増大を伴ってなされるべきような何物も持たないということになる。しかし事前的にみられるならば、産出量の増大を伴ってなされるべき多くのものを持つのである。事後と事前は長期に渡る事業計画の基礎となっているチャンスとリスクの——意識の、または意識の下層にある——バランス関係の下に姿を現す。それ故にそれら——その都度その都度の事業計画——は、全ての企業がその中に生じ、且つ企業がそのために生産スケジュールを形づくるところの、一般的図式の中の一部であり、一片だということになる。

創造的破壊の規律的効果はあからさまには結局において働かないか、あるいは効果のあるものになるかは非常に長い時間を要するので結果は同じだ、というケースがある。鉄道や公共施設は實際上地方的に「真正」の独占的位置を獲得し得るであろう際立った事例である。公衆が独占的地位を見るのに人さらい達を見るのと同様のものがあるが、鉄道や公共施設は——人さらい達が独立して存在するものを搾取するのに対して——後に搾取するものを先ず最初に創出する。圧力は一般的経費(the overhead)の中の絶対的、及び相対的負担分に即して主張されるのであるから、需要を育むことの必要性はここではとりわけ重要となる。前のパラグラフでの行論がここでも真実であることを保っている。とりわけ諸商品と諸地域の等級の間に設せられる差別化に起因する独占的利得に関しては、今世紀の発展はそれなくしては不可能であったろうこと、並びに差別化に関係する様々な利害関係に対する利益と不利益の静態的バランスは——差別化の方策には現行の特に法制的理論が認めているよりは遥かに好都合なものが多くあるのだが——我々の問題とは完全に無関係であることを告げれば充分である。しかし鉄道や公共施設が進歩の伝達機関であったこと、彼等の悪事にも拘わらず産出に及ぼす正味の効果は制限的であること以外の何物かがあること、を否定する考えをもつ者は嘗てなかったのだから我々はこの問題にこれ以上入り込む必要はない。

利潤がもつ消え易いという性質が明らかにされるや、新製品を生産するどんな事業もがそれを保持することが、更にそれが蒸発してしまった場合であれば、適当な価格政策や数多くの工夫によってそれを何か他のものに

再生させることなどが試みられよう。諸々の工夫のうち、パテントのような手段は法制的に認められているが、その一方で法や世論はその他の諸工夫に対してどちらでもよいか、または敵意をもつことであろう。技術的な経験をできる限り秘密に保とうとする諸方策に対しては前者が、公共機関の官僚達から優先的取扱いを確保しようとする諸方策は後者が相当しよう。我々の立場からすれば、危険度のより高いタイプに企業は——あらゆるそうした防衛の手段が効果的に禁止されていたとし、且つ誰もが前もってそのことを十分に了解させられていたとなすならば——参入を許されるのは通常稀であろうということを付言しておく必要がある。この意味において制限的な独占諸政策は時代に渡った総産出を減少させるよりもむしろ増加させる装置として働くことが充分あり得よう。

しかし今一つ疑問が読者に起きるかも知れない。単一の売り手であることに留まるか、またはそのようになれるかに全神経をとがらせているような個別事業体——彼等が実在しているとしてこれを見出すよりもイメージすることの方が容易であるのだが——を考えるならば、これが私の叙述、彼等は成功している場合ですら独占者として振る舞うことは一般的にできないということに、如何によく一致しているかに驚かされるであろう。されば、何故にそうすることがかくも困難なのか？ 我々は単一の売り手の地位が、価値がないなどとは言ってこなかった。我々は単一の売り手が競争者を惹きつけるには、あまりにも短命であるような例外的に景気の良い状況下の利益の享受のできることを、を検討してきた。そうした好機会をフルに利用するのが大規模な単一の売り手の政策だとは一般化し得ないが、彼等は景気の悪い短期の状況下ではその単一の売り手の位置の利益をフルに利用する。彼等にとって、自らの商業的、並びに金融的構造に対する恒久的侵害を伴うことなしに、これを達成支配することは、如何なる競争的ケースの下でなされるよりも、限りなく容易である。これは「硬直性」の最も重要なケースを含むことは確かであり、その硬直性は秩序混乱的な——それはまた秩序安定的でもあるような——効果を全体としての経済のシステムに及ぼすことはあり得る。しかしそのケースは長期に渡って邪魔されることのない計画に展望を増大させたケースであり、且つまたそれは、独占的搾取が長期に持続するということを導くものでもない、すなわち、総産出量はこの体制の下では、競争的諸条件の下であるだろうよりは、より低い率で増大を持させるということをも導くものではない。

* 余白に次の書入れがある。「相当の期間に渡ってすら、こうした好機

会を充分に利用する小規模な単一の売り手がある。その根拠はその分野ではそこに侵入することを図る者が誰もいない程内容が貧しいからである。このケースは誇大に言うことも、無視することも同じくよくない。」・・・「ここにおいても、独占者についてのヒックスの構図が・・・」

6 我々はどんなケースであれ、知られざる真実以外の陳腐なことを教説することに罰を蒙ってきたので、私はここに述べてきたことのほとんどすべてが「トラスト問題」——合併という手段、または「トラスト」によって創出されてきている単一の売手の位置、及びそれに接近しようとする位置の問題——にも当てはまる、と指摘することで締めくくってよいのではないかと思う。トラストの形成過程に新しい技術的、あるいは商業的な諸原理が入っていなかったとしてすら、トラストは全ての教科書に指摘されてあるように「合同せられたる諸産業の合理化を目指した再構成」(the rationalizing reorganization)という点でカルテルとは異なるものであるから、そこには常に一個の新しい管理上の原理が含まれているのである。それ故にそれは存在している諸事業体の単なる独占化であろうよりも、何かもっと多くの含意をもっているのである。単一の売り手の位置の征服はそのケースにおける多くの要素の一つ以上のものでは決してないということである。そしてそうした位置に随伴した進歩について語ってよい事柄なのであるから、事情の如何を問わない「トラスト訴追」(trust busting)は許されない。それはマンチェスター型自由主義の時代の立法的サバイバルによる政治的搾取以外の何物でもない。どんな意味のものであれ、何等かの特定の告訴にはそれぞれのケースにあるデメリットに眼が向けられなければならない。

* とりわけ社会主義者の立場から、1) 明らかにふさわしいものであるように、2) 十分に温和な不況に答えるものとして、権力を規律し、且つ示す、という試みの中に訴追の意味がある。・・・

研究は常により広い枠組みと、より広い帰結の原因となる。・・・

そしてデメリットはより近年の資本主義であるほど極めて頻繁となる。過当競争(cutthroat 首切り競争)といったことは、社会的機能(役割)をもたない。・・・管理への言及は、よりベターにならなければならない。・・・誰がどのように管理するのか?・・・U.S スチール——巨大コンチェルンであることを示していない。・・・管理がトラスト化した産業そのもののそ

れであるのか、またはそうした産業における蓄積が侵攻することを許さないような他の産業についてのそれであるのか、は「与えて着飾らせる」類の空疎な章句のように内実がない。

7 無駄(浪費)・・・低位就業・・・現地人のように働く。・・・そしてそこにはおびただしい小企業がある。「小規模に過ぎる」、「おびただしさに過ぎる」。・・・単なる規模について我々はすでに今や尚確かなものとして語っている。・・・独占化のもつ利用し尽くさないこと。・・・

まさに同じことが、あまりにも速く、またはあまりにも遅くなされ、しかも追求される。・・・硬直的な短命のシステムのもつ伸縮性に対するに持続的な伸縮性・・・何事がこのようにその大きな背理を好んで保つものなのか。・・・

硬直性と浪費、どこに・・・先ずは「第2」に対してあり得よう。・・・それらは見かけほどには硬直的ではない、だが、硬直性が単純に欠点でない限り。・・・

もし濫用に即して我々がそれ自身に濫用でないことを意味させるならば、置き換え——その場合、不完全性が便利である。・・・事後と事前・・・

8 無駄(浪費)についての反対の概念——否定はしないが、単純ではない。・・・急速な進歩、現地人のように働く。・・・悲劇的・・・広告・・・だが他の関連で経済に向けて保証しているところは大きく、そして都合が良いかどうかという設問には関係がない。

規制(制限)は機能をもつ。・・・そして機会の完全利用・・・事後的、資本価値の保護・・・無駄・・・独占規制的な生産物(monopolrestrictive produce)・・・労働者の買収ですらある。・・・宣伝はその場合他の事柄をもついでに含むものである。与えられた諸関係の下での価格競争があまりにも強調されすぎた。そこにあるものは単に機構の一部である。・・・完全競争・・・どこへ導入するのか。・・・

新しい硬直性についての行論はそれに迫るところがほとんどない、a) 新しくないが故に、b) それほど重要でないが故に。・・・独占は、a) 破壊されるものかも知れないし、b) 長続きさえするものかも知れない。・・・

9 今やエコノミスト達は無駄(浪費)についての狭い観念を洗い落とし、そして今一つ概念——それは内に時間次元を含まなければならない——を認知すべきである。社会的無駄であるところのものは何等かの貨幣的・非貨幣的な報酬の中の非生産的なもので、そうした行為乃至は条件に責任を負う作因者に対するものは除かれる。それは経済の有機的構造の中の個々の場所と与えられた時点での表出であって、時間の経過の下での有機的過程(organic process)の中での一つの要素として考慮されるのなれば、必ずしも無駄多きものではない。逆に言えば、我々が無駄ということに意味付けようとしているものは、観察している期間の長さに関して相対的に存在している。

* 個別の事業体の株主の立場からの無駄と社会——この場合他の人々——の立場からの無駄には明瞭な差がある。ここでの無駄は後者のものである。

ある意味では「独占資本主義」(monopolistic capitalism) はほとんど理想的に無駄から免れている。ほとんどではないとしても多くの大規模事業体群は、技術的・経営的・商業的な能率において驚嘆に値するという意味でそうである。もう一つの意味では、産業は無駄を避けるという視点からその過程の管理につき、累増的に多くの事を学んできているが、独占的諸方策はその注目すべき諸事例である。しかし我々はこれと同じくその中にも社会的無駄の極めて由々しい源泉が存在しているような諸事例をもっている。その人目を惹く事例は保有せる生産諸資源をフルに使用する能力がそのシステムの中に欠けていること、——設備の過剰能力であるとか、労働の低位就業や失業によって演じられるが如きがあるということである。我々は失業を無駄の立場から取り扱っている、由々しい問題ではあるが。

しかし我々がこれらの諸現象を進化過程の舞台の中に位置づけるや否や、そこからの推論は上記とかなりの程度に違ったものとなる。急速な進歩は急速な陳腐化を意味する。未だ廃棄には至っておらず、だから充分には使われていないか、または間欠的にのみ用いられている、といった類の陳腐化したプラントは帳簿上、乃至は統計報告の中ではまだ生きている。急速な進歩は更に需要に先立った建設を緊急の事としており、それはすぐには利潤をあげて用いることのできない生産能力を創出することになる。第一の——陳腐化の——ケースでは結局のところ損失はない。第二の——需要に先立った投資——では、損失はあるとすればあるのであるが、それは産出の急速な拡大に対して支払われる価格の問題だということである。展開過程の交差関係に眼を向けることの稀な観察者には双方のケースが完全な誤導の光の下に現れる。急速な進歩は不断の変動——好況と不況の循環的交替を意味する。設備はその着工から繁栄の局面でのみフル稼働されるよう企図せられたものとして建設され、沈滞局面では縮小が過剰能力と失業の双方において発生するであろう、という帰結が結果としてもたらされることになる。

他の社会的仕組みによってそれがどのように避け得るであろうかに関し意見は様々であろうが、これが資本主義の無駄であることは疑いない。しかしこの無駄は総産出量が拡大する速さの一局面、言ってみれば、熱病的成長に随伴した無駄であるだけのことであり、成長のペースが減速するならばなくなるであろう無駄であるから、次のように言われなければならない。だからして資本主義過程のもつ無駄の充満のせいにするので、観察された産出の増加率が無駄に帰せしめられることはできない、という命題は支持されることができない。急速な拡大に対して支払われる価格としての無駄は社会主義でも発生するか、を言うのは容易でない。社会主義の純粋理論に従えば次の場合にのみ支払わなければならない。将来の需要を展望して、特定の設備が現存する補完的設備の能力と併せて用いることができるよりは、もっと大規模なプラントとして設備された場合。

独占資本主義のパターンの中にある諸資源の低位利用に対しては他の諸理由がある。しかし我々が注意した諸原因の結果を割り引くならば、考究されるべく残されているところはさほど多くはない。更に加えて補償の問題がある。私が誇張されて強調されていると信じている例は——ガソリンスタンドに古典的な事例をみるような——小規模で非能率な企業群と共に運行しているいくらかの特定の諸部門を溢れさせるという独占競争

の傾向に向けられたものである。だがこれは一時的なものとしてはそうであるとしても、一つの方法、失業の特に注目に値するタイプの面倒をみようとする非常に経済的な一方法であることが看過されるべきではない。もてる熟練が使いなくなった熟練工達はガソリンスタンドを営んでいる場合よりも更に悪い状態に至ることがあり得ようということ。

他の事例は広告や他の販売上の支出より提供される。その支出の額の全体でなく一部、特にある供給源から他の供給源に常客を移動させる、それだけの結果しかもたらさないような競争的広告の部分における出費の無駄である。いくらかの場合、出費は広告される物を生産するのに使い尽くされた資源の方を上回るほどとなる。そしてその物は広告あるが故にのみ受け取られる。そうした場合、経済的成果の指標として産出額それ自体が馬鹿げてみえる。20年代を通して我々はこの国で筆絶の販売活動の爆発を目の当たりにしてきた。一部にはすでに馴染み深くなっている筈の新しい消費財の奔流に根差すものであったことは真実であるが、我々はそれらの正常な重要性を誇大に叫ばれることに多分に平伏させられたのである。広告等の支出にどのような重みをつけるか——広告等に替えて生産者がどこまで品質とサービスの改良を重視するか——は正確には印象の問題を残している。消費者教育が将来におけるそうした支出の重要性を恐らくは切り下げよう。

もとよりどのような種類の無駄も——たった今、そしてその前に注意した二種類を含んで——諸資源の不適切な配分として述べられて差支えがないと思う。しかし我々はこの語を狭義に用い、それに第三のタイプの無駄という標題を与えたい。我々はそこから道徳的立場からのものは除きたい。例えて言えば、諸サービスの二重化と重複化は事業の通常の実行においても、産業グループ間のシェア戦争(rate wars)のような争いの中においても、一般に発生する。これは実は過剰能力の特殊なケースなのであるが、いくつかの興味ある論点を描き出すため分離して配慮されてよい。産業的パターンのきちっとしたバランスは、たとえそれが完璧に構築されたものであったとしても、急速な進歩の過程で急速に崩れるものである。諸改良が常にそのパターンの特定の要素と衝突し、ある部分では二重化をもたらす、他の部分ではボトルネックの困難をもたらすからである。しかしまたサービスの二重化は——競争の理想的な形態ではないであろうが——その非常に有効な形態であり、しかもサービスの質を他に替えるものがないからの故を以て保証するものでもある。その合理性は多いか少ないかの問

題であり、事業は補償のない無駄を示すであろうような過剰を防ぐための十分な動機と諸方法をもっているのである。他方においてシェア戦争は、社会にとっても総産出量の立場からしても、混じり気なしの諸悪ではないことは明白である。それは諸価格を、これ以上のものはないという効果を以て、且つ他のやり方でならば価格が本当に硬直的となったかも知れない局面で、引き下げるのである。

あるいは次のような無駄がある。私的企業を導くコスト計算は社会的に資源の適正配分を保障するであろうコスト計算とは一致しない、と論ぜられることがある。それは正しい。煙害や失業支給は公権力によってそれに入れさせるということでなければ、コストの私的明細の要素にはならない。しかし非常に多くのケースにおいてコスト計算の私的な方法は急速な進歩に好都合であり、かくして産出量の発展を利するのである。この考慮は厚生立場からは必ずしも決定的でない。それは我々の問題から離れている。

* 余白に「このことは最初にピグー教授によって強調された」、とある。

そのタイプが社会的に不適切な配置であることを推測させるような他の諸理由がある。諸資源をある産業から他の産業へ移し替えることによって産出量が増加させられるような諸ケースが不完全競争の諸条件の下でしばしば起こるのである。不完全性とは離れてさえ、もしある産業がコスト引き下げを図りながら産出を拡大することができるのならば、そうしたことはあるだろう。それにも拘わらずどんな単一の事業体もがそれをなすことができない(外部経済)。そうしたことは本質的に定常的な過程では極めて重要なことであろう傍ら、正確にはそれらは創造的破壊一般が、とりわけ巨大事業体の進化が消失していく傾向にある、という類の事柄なのである。

* シュムペーターは、R・F・カーン「理想的産出についての若干の覚書」、エコノミック・ジャーナル、1935、5月号をあげている。

あるいは我々は基金、とりわけ諸々の貯蓄の無駄遣いの事を考えてよいのかもしれない。すなわち、それらが「エンパイアビルディング」の中に消えてしまった、あるいはある個別企業執行部の個人的利益のために浪費されてしまった、という無駄である。ここでは諸々の基金の不適切な配分

と実物資源の不適切な配分との間を区別する必要がある。金融グループの征服戦争の中で直接的に浪費されるのは諸々の基金である。それは疑いなく——それ自身の中ではなかったにせよ——実物資源の不適切な配分を必然のものとする。しかしながら、株式の売買戦略とその類の全てが如何に道徳的に非難されるべきもの、あるいは美学的に醜悪なものでありうるにせよ、また投資の導きの糸を手中においている案内人達の行動が如何に策略に満ちたものであるにせよ——確かに資本主義は「その運命を嘆きながらも社会主義者達に仕事を託すような平均的資本家」に対して優しくはない——、直接的には彼等投機家達はこのシステムの生産的成果を因るための何物をももっていない。しかしほとんど休むところのない金融的海賊達は自分の戦利品たらしめようとしているものについて高度に生産的なアイデアをもつのである。持ち株会社のスキャンダラスな行為はその経営している会社の卓越した経営管理——管理の能率は持ち株会社によってもたらされた統合によって増大させられる——と両立し得るのである。かくして他のやり方では難攻不落であった競争的位置の金融的征服は合理化過程の中の偉大なる一步を語ってよいのである。英国採炭業とそのイギリス諸産業に対する諸サービスは、そうした方法の適用が問題外であったので、より良き姿を現してはいない。「コントロール」はその果実によって判断されなければならない。それは怪物(a bogey)であることを止めるべきである。

他の諸事業体や諸産業の上にかぶせられる、あるグループのコントロールの拡大は産出量の拡大に対し有害であるとは必ずしも言えない。たとえそれが競争しているグループを無力ならしめるため投資されたものであったとしても、例えば電力事業がガス事業の中に何等かの支配権を買い取るようなことであっても、整合の効果をもたらす私が秩序ある前進と呼ぶものの諸利益は産出量の増加において——それが他のやり方で行われるよりは——より大きな効果をもたらすであろうことは多分にあり得ることである。このことは競争者を無力ならしめることで得られうる展望が征服した設備を新しく持つことの中にその本質的要素があるのだろう、という追加的考慮とは全く独立している。諸資源の配置なるものの不適切な判断は——究極の帰結の考慮なしに展望されている場合の不適切だけでなく、産出量の長期的増加率を引き下げるとみる意味でも全く不適切なのであるが——以前に了解されたところのエコノミスト達、並びに政府委員会のメンバー達におけるほどの甚だしさはない。もとよりあるグループはある事業に及ぼすコントロールを、「目の玉を抉り出す」ことをなさんがた

めに、あるいはまたその設備を低位操業におくことでもたらされよう臨時的余剰を盗むためか、またはその株式に適切な投機を図るために、獲得することはあるだろう。またあるグループは買収されているが故に不利益な契約をなし、あるいは展望がなくなっている部門に介入せんがために、ある事業体に支配権を行使し、しかも資金や金融を供与することもあるだろう。過去の歴史はどこでもそれはあり、とりわけ他の国よりもその傾向が大いに満ち溢れているこの国においては、事例は充分である。設定されたケースの数と重要性は、しかし産出の趨勢についての我々の結論がこうした点から正しくないのではないか、という疑惑を正当化するものではない。将来にはこうした準犯罪的——または単純に犯罪的——な方策はさほど容易ではなくなるだろうし、正直な失策の役割はあるとしても、それらが今あるのが常であるよりも少なくなるだろうという明白な諸根拠がある。

他の事業体にある利用可能な余剰諸基金の投資から引き起こされる実物諸資源の誤投資(malinvestment)を期待する根拠は——失策は除き、また買収といったことがないとすれば——何もないということが忘れられてはならない。と言うは、もし投資している事業体に資すべきはっきりとした利益がないのならば、投資は単純にあってしかるべき利潤期待によって導かれていることになるであろうし、更に社会的諸結果もそうである限り、その絶対的完全にあるという自負から投資している事業体そのものを配するよう選好されよう。完全に名誉あるものであっても、しばしば社会的無駄のカテゴリーに入れられるような方策はあるが、それは一般律からの逸脱であることは明白である。こうした全てのことは査定することが極端に困難である。それらを正当化するためには観察者は極めて多くのケースに深く通じていなければならないし、問題にしている事業社会のもつ精神と一般環境に深く通じていなければならない。全く経験のない人々が最大限の確信を以てこれらの事柄をのたまうことに我慢するのは、これまた困難なことだから、こう言うのである。・・・

* 余白に記入、「ここで尚、無能と同根の問題につき何事かを・・・だからして、しかしながら、この他に、とすれば、といったこと、だがそれらは特別の状況、例えばインフレーション、に対する意味だけを持つ。」

10 我々の行論が完全競争についての我々の意見に如何に依存してい

るかを示しておく必要がある。これまで検証された論点のほとんどが、独占類似体の資本主義を明らかにしたのと正確に同じ程度に、完全競争の後光(halo)を曇らせている筈である。

我々の前任者、更にもっと前の世代の人達——おおざっぱにはミルとマーシャルの間の一世代で、その素晴らしい例はかのイタリアの指導者フランチェスコ・フェラーラ(Francesco Ferrara)である——でさえもが、完全競争に対しては、その無条件の賞賛から離れて漂流していると感じていた。一方ではマーシャルとエッチワース、それに後にはピグーや他の人達、は完全競争の諸特性についての一般的命題が真実であることを単純に止めるようなケースが数の上で益々増大しつつあることを見出してはいた。例えばどんな所得配分のあり方をも一個の与件として受け入れている場合ですら、完全競争が諸資源の理想的な配分を保証し、以て最大産出量をもたらす、といったことは真実ではない、と。他方では、同じ経済学者が明らかにしているように、たとえ完全競争的なパターンが実際に——ある粗雑な分析が我々に信じるべきものであったが如くに——達成されたとしても、その諸々の功德は、その条件の下で全ての人々が自分の為し得るベストを自分自身のために為すように試みる時、達成されるであろうような大きなものとはならないであろう——そうした諸条件と両立し得る満足の極大よりは大な量にはならないであろう——ということである。この命題は一見したほど陳腐平凡な命題ではない。それは数々の経済的行論において、例えば、これらの諸条件の変更なしに経済活動に影響を及ぼすことを狙った諸手段の効果を扱っているすべての行論では相当の役割を演じている。しかし我々の一層に遠い先祖達が信じたように、完全競争があらゆる時代とあらゆる場所で完全に理想的状態だと我々に信じ込ませるには、根拠薄弱なものがあるのである。

* 「関連文献には、またもやカーン氏の前掲した論文があげられてよい。しかしその主題には数多くの貢献が今日でも続出している。」

現代の——主として大戦(第一次)後の——の理論はそれを飛び越えて進んだ。経済過程の動態的諸局面の理論の発展の中に——言うなれば、何等かの攪乱に対する反作用の継起に、それらの様々な速さに、経済行動に及ぼす諸期待の影響に注意を払うことの中に——現代の理論家達はその古い図式を疑問視するに至った。その古い図式は、最初にワルラスによって発展させられたものであるが、それに従うと経済的均衡は非常に安定した

状態であって、諸価格や諸数量においてどんな変化が起こったとしても、その変化は速やかに吸収され、しかも滑らかに自己適応をさせる、となすものである。ところが現実には、際限なき期間に渡り、しかも一時的にはカオスの目立った招来をもたらすような、激しく、且つ爆発的でさえある諸変動の可能性があり、更に競争的システムのもつ自動制御と伸縮性(automatism and flexibility)に帰せられてきた回復の効果は、結局のところ幻想的であるようにみられた。我々は創造的破壊の過程の荒々しさを強調しているのであり、こうした諸考慮は付加的な重みをもつだけである。

現代産業の下では、独占類似体的諸要素こそが単なる随伴的要素でなく本質的要素であることが認知せられるや、完全競争に都合良き諸ケースの全体は直ちに瓦解する。過去50年間に渡る資本主義の偉業はそれらの要素なしには不可能だったのであり、極めて重要な諸局面においてそれらの諸要素は単なる必要悪ではなくして有機的諸機能に資すものであった。生産の現代的な方法が単に巨大設備を必要とするだけではなくして、巨大事業体をも必要とする。その限りにおいて、また巨大事業体が独占的諸方策に対する展望と手持ちの諸資源をもつことなしには創設され運営されることができないものである限り、完全競争を願望することはナンセンスである。

現代の産業的巨人たちが真正に独占者の位置に至るところ未だしの状態であり、且つマーシャル・クルーノの図式に従って開拓する事業体に設立の道をあけておくことがあったとしても、上記したことは真実であることを保つ。と言うのは、ある限られたケースを除けば、独占価格は常に競争的価格よりも高く、そして独占的産出量は常に競争的産出量よりも少ない、という理論は厳格に「同じ条件の範囲」(ceteris paribus proviso)の下でのみ妥当であるに過ぎないからである。言ってみれば、相互に一方は完全に競争的であり他方が完全に独占的である場合以外には他の如何なる状態も絶対でない、という点で他の状態と区別されるような二つの(等しい可能性である)状態を比較するならばという場合においてのみ正しい理論なのである。その条件が満たされない時はいつでも、言ってみれば、独占化が技術的・商業的・管理的な資質によって費用削減的な諸改良の導入を意味する場合にはいつでも、競争的産業が競争的状况の下で達成できる限りでの最低のコスト水準でもたらされる競争的価格と競争的産出量よりも、独占的産業が設する独占価格が必ずしも高くはなく、独占的産出量は必ずしも少なくはないのである。競争的な郵便乗合馬車群は真正に独

占的な郵便乗合馬車トラストよりも安い賃料でより多い旅客を運ぶことができるかも知れない。だがそれは鉄道が——それが真正に独占者であったとしても——完全競争的な郵便乗合馬車がなすであろうよりも高い賃料と少ない輸送サービスを供給するであろうことを導きはしない。アダム・スミスが「競争を狭くすることは常に公衆の利益に反するものでなければならない」、と言ったとすれば、彼は単純に妥当でなかった。・・・だが、我々が検討してきたように、鉄道は真正の独占者ではないのである。現代の製造工業の巨人達は更に一層にそうではない。

経済を機能において考察した場合にあっても、「完全競争のパターンに一致するシステムのもつ一つの特徴は社会的無駄のあらゆる源泉をもたない」、という我々自身の叙述は修正されなければならない。ひとたび我々が独占類似体の優越性——生産上の成果という点で完全に競争的な資本主義以上のものがあるということ——を認知するならば、二つの択一的システムのうちどちらがそれ自身の諸条件に内在する無駄からより大きく免れているか、という設問はその重要性を失う。とりわけ我々が、定常的均衡の中で発揮される比較上の徳性よりも、むしろ進化過程の中で如何になされるか、に関心をおくならばそうである。それにも拘わらず、完全競争的システムがいくつかの無駄の源泉から免れているとしても、それ自身の中に他の無駄を抱えていることを指摘しておく価値がある。

更に進んで免れている無駄は補償を伴う無駄であり、逆に悩まされている無駄は補償を伴わない無駄である場合もあり得る。このことは以前から注目されてきた純粋に競争的な過程についての近年の分析から十分に明らかにされた。一つの事例。独占類似体のもつ様々な硬直性由来の資源の無駄がどれ程に大きく見積もられようと、その持続的発展がどれ程に低く見積もられようと、後者の存在が全く否定されるのでなければ、そこには幾ばくかの補償がある。しかし完全競争による豚サイクルといったものに生じる無駄は補償にあたるものが何もない。即ち、何かの偶発事によって生じた有利な飼料・豚肉の価格関係が、豚生産の拡大を誘引し、それが一連の価格破壊をもたらし、更にその後に全養豚業者が生産を制限するとなると、そのように豚肉の高価格をもたらすことになり、今一つの支持し難い拡大を誘引する、といったこと。無駄は実際にある、だが、それ以外の何ものもない。

完全にまたは高度に競争的な諸産業——例えば小麦・綿花・生ゴムの生

産など——において、誰も要求しない状態の反復は、他の分野における硬直性の故にといった、もっともらしく付された根拠付けなど、事実無根のスローガンによって解明されるものではない。こうした反復に付帯した無駄は、それが急速な変化の過程として作動しなければならないとすれば、完全競争の分身または一部として受け取られなければならない。人々はいつも価格を引き上げんがために商品を破壊する措置に——もとよりあまりにも当然というだけのことであったが——衝撃を受けた。こうしたことは社会主義社会では起こり得ないだろう。資本主義社会でも、もし責任ある有能の政府がそうした状態を取り扱っていたならば発生する謂れはない。だがこの状態そのものが——人類の諸欲望を充たすであろう諸事物の実際の破壊とは関係がなかったとしても——無駄である。初期資本主義の時代にオランダの東インド商事会社がそのもとに運行されなければならなかった、そして競争を頭から排除していた諸条件を例とするならば、彼等の方策は数年前この国で起こった綿花・小麦・オレンジ類の廃棄がそうであったよりも遥かに無駄多きものであったとは確言できない。それは商人達が恐らくは利益を守ろうとしたものであり、そして近年の農産物の廃棄は単なる損失の防止、または減少であったことは疑いない。しかしその主たる差は、前者のケースでは崩壊が防がれた一方、後者のケースではそうしたやり方がその効果を経済の全体とその銀行制度を覆って広がる余地をもつ、というところにある。

(3) 資本主義システムの変質

摘要

1865年から1914年の間、一人当たり生産額を引き下げた国はなかった。過去の成果が反復され得ないだろうとなす謂れはないし、人口や土地資源といったものも、更には新しい技術的諸可能性もが投資機会の消滅の根拠とはなり得ないだろう。それにも拘わらず、資本主義の文明の持つ合理主義の精神は、超経験的な栄光を奪い去り、権利や義務或いは民主主義と社会主義につき新しい意味を授け、更には生活水準の向上の傍らに社会立法の意志と諸手段を創出する、といったことの諸探求に取り組んだ。それ以上に尚いくつかの局面に注意が払われるべきである。「所有と契約自由の制度」、これこそが真に私的な経済活動の表現であったのだが、それを後背へと押しやった。王権神授説とあわさったブルジョワジーによる財産権神授の信仰、そして労働市場における自由契約、これはすでに廃されてしまった。その上資本主義は前資本主義的型枠であったものを単に破壊し、自らを単に無防備である裸の状態であるにすぎなくした。更に進んで同じことを自分自身の型枠に加えることになる。資本主義過程における最も重要な変化は企業者機能の陳腐化の中にあり、それは経営管理の官僚制と自動化に根ざすものであり、大規模産業ではイノベーションそのものが小片に分割されたルーチンと化す。更にそうした変化の帰結として一種の定常状態に近い劣化状態に落ち込むこともありうる。それは資本主義社会の上層階層から利潤と同様社会的威信をも失わせることにもなる。このようにして資本主義の諸過程に及ぼす反作用は即ち敵意の雰囲気と社会主義へ向けての政治力学となる。・・・その他 (編者)

Ⅱ—(3)—1～23

資本主義システムの変質

1 この稿は尚「資本主義は生き残りうるや」であり、一個の序説を多分構成するものであった。だが、どこで？ 実際それは固有の輝ける論点であったのではなかったか、否。

王や僧正の合理化については、すでに十分に述べられている。・・・こうした分析は尚もっと後で重要となる。・・・すでに敵が養われていること、それに民主主義と社会主義が！ 更に社会立法の意志が！・・・形而上学は追い立てられている、といったこと。・・・義務の意識、人間性の改良・・・超経験的な魅力(superempirical glamor)は失われてしまっている。・・・しかしそうでないものがある。上部構造として感じられている不平等性。・・・能率とサービス・・・イデオロギーの後光・・・平和主義といったこと・・・

恐らくここで新しい部分が・・・そこで尚大量の組み替えが・・・集約もまた疑問である・・・恐らくこれらは二つに区分され、且つその間に押し込められるものがある。すなわち経済的な機会と無駄といったこと、・・・社会心理的過程がここにその成功を表出するものとして来る、ということ。・・・

2 機構 A の分析から観察されたファクト B につき、A から B がもたらされたかも知れないと知ったとしても、我々は A が B を生み出したと完全な確信を以て結論することはできない。・・・推論としてさえ他のありうべき諸原因に対する研究を待たなければならない。それは実験科学と区別される観察科学が抱える呪いである。・・・だからして・・・

1914年に先立つ半世紀の資本主義の発展を対象として、モノポロイドのもった動機的諸力が産出の瞠目するべき増大に適合的であったこと、及びそうであり得べくもなかったことを示そうとする諸行論が不適當であったこと、これを我々が尤もらしく示し得たとしても、その提示は経済的研究上の諸条件の中にある論証——それはモノポロイドの資本主義が

現実にテストを成し遂げている——に過ぎず、これに替えて資すものでなければならぬ種類のものの論証乃至は推論は組み込まれていない範囲での提示なのである。いくらかの他の要素がそれに対して責任を負うものであるかも知れないのである。更にその画期をとおして、資本主義はそうした諸要素の作用に対しては——資本主義のメカニズムを通す以外には——もはや、余地がないほどに完全に行き渡った、という理由から一個の設問が再構築されるべきである。ただしそれが我々の問題を解くかどうか？

3 しかし経営の官僚制化と心的構造の問題、所有と経営の分離の問題はどこで・・・ここではできる限り要約すること。更にこれらの進歩の諸形態が——重要な諸関係の中で——必然的(そして当然のことながら社会主義のための重要な前提)であることを認識するや直ちに、それを規制したり機能を反転したりすることは理論的にも何の根拠ももたないということ。反対理由だけでなく逆にそれに賛成となる根拠をも！・・・それでもそれは恐らくは結論的命題の助けになるだろう。・・・

4 次いで社会と人口が扱われなければならない。・・・続いて a) 装置は効率的であることをより少なからしめられるのではないか、 b) 何か(etwas)を止めることを強いられているのではないか、を扱うことである・・・資本主義はこれらの諸可能性を利用し尽くす方法である、ということ・・・

人口の増加、独立的なものか、または従属的なものか。・・・より多くの出産・・・魅力ある賃金・・・アイルランド人・・・資本と大衆の移民・・・技術進歩——人口の増加、人口の増加——資本主義がそれをもたらす諸国・・・

10/1の戦争、軍備・・・自由——使い尽くされてはいないが非常に生産的・・・新開諸国は産出があれば、さほど巨大でなかったとしても、その上に利潤を提供した！・・・だが二つの事柄・・・a) 資本主義対他の要素、b) 資本主義は他の要素によって更に推し進められる。・・・更に

それはどんな結果を導いてもよかった、1914年より前の(?)の場合であったとしても。

5 人口趨勢における回復は可能ではない。・・・a) その数が到達された故に、b) 留保された時間・・・原材料 a) 不足による圧力、b) 課題としての原材料生産の発展・・・婦人のエネルギーが解放せられた(それはより後の世代において、より長時間の労働についての諸条件に対して重要)。

6 その成果(performance)が反復されることはあり得ないような過去の成果が、資本主義の故であるのかないのかを今問うほどに、機会はありきたりのものではあり得ない。・・・それが投資に取り付けられることはすでに述べた。・・・19世紀に一人当たりの生産高を減少させたどんな国もなかったのでは。・・・

貯蓄は自己適応をなすであろう。・・・

需要側と供給側からの投資機会の減少・・・ここで私はより多い人々はより多くを作り出すと述べた。・・・更に一人当たりの産出をも？・・・それは尚決定的ではない。・・・子供がない時は貯蓄は少なくなる。・・・漸減的収益・・・極めて資本消費的な財、余暇・・・この他老人達が保持するであろう余暇。・・・但し徴候として、そして原因として。・・・

7 「十分に考慮される！」・・・このようにして飽食——生産——政策については何が。・・・そして私は過去の成果だけを描くだろうと述べた。・・・遅滞や漸減などはそれでも始めて取り上げる。・・・控え目だが質においても留意する。・・・ブルジョワ階級にそれは負っている、ということはどこで。・・・長期的諸潮流についても確かに・・・課税といったことや失業についても確かに・・・一挙に・・・

その成果が一層危険なものであるものに依存し過ぎるようなこと、あるいは所詮は一つの行論であるようなこと、あるいはそれが決定的なものではないようなこと、は本来どこで。．．．そのように失業はすでに．．．そうした結果についての私の即席の論評は私が漸減的な人口増加を適切に認知しない場合にのみ行う。．．．

8 成果が資本主義に帰属するや否やの設問に対する論議の中には、独立ではない要因としての政治について再びはっきりと。．．．

エンジンの区分．．．人間と材料．．．人口問題のインセンティブとしての、それはそれとしての追加．．．同様に、土地問題はすでに片付けられ、飽食(及び諸政策)はもっと後で片付くこととなる。

9 一つの大きな困難、それに人気のある諸行論．．．消費者の瞞着のあること．．．かくして三つの事柄を以てする比較と a) 可能性、b) 利用し尽くすこと．．．資本主義は資本価値の保全の上にもみ運行するということ．．．他の計算．．．法律家——相談料を取り続ける——による節約、しかしその他の点では——そしてトップの報酬の削減は大きなものではない。．．．生活の息吹きとしての不平等．．．人間の人間による搾取．．．事業家達は幸運な馬鹿者達であり、しかも過激派である。．．．有閑の人々は集中しており、しかもゆったりとした気質があるが、一様に本物であることが少ない。そしてこの中において彼は出費することができ、また有意味な金持ちなのである。

1) ——、2) 消滅——怠惰性は悪くない、3) 怠惰な金持ち(idle rich)によってなされる仕事、人に対する資本主義的な方法、政治といったこと、4) 動機、5) 節約．．．仕事と貯蓄に対する動機．．．怠惰な金持ちの中に登場する。．．．(怠惰については何が．．．イギリス)．．．家族についての考慮．．．

10 何故により少ない投資とより多い消費に対する適応はないの

か?・・・しかしそれでもそれは投資を意味するものであろうが——但しその幅が。・・・リカードは、その上にどんな恐慌理論も構築できない、ということを知っていたというべきであらうか。・・・

- 1 1 1) 企業執行部における職業心理上の枯渇の契機(他の事柄等も多分に悲観的見通しを正当化する諸環境の下にある)・・・
 - 2) 原料と食料は未だ稀少ではないし、圧力を行使してもいない。それに他の原料も存在しており、古い部分がよく用い尽くされている——石炭も——という状態にある。そこで他の生産への投資だけが問題になり得ること——入植地と新しいセンターの創出。
 - 3) 新しい状況への適応・・・
 - 4) 投資——資本の吸収——・・・
-

1 2 古き時代の個人的な——真に「私的」な——経済的諸活動の諸ニーズと諸方法を表現し、しかも個々の経済的イニシアティブを纏っていたものであるような、全てのそうした諸制度、とりわけ財産と契約のための諸制度を資本主義過程は背後に押しやることになる。それはすでに労働市場における自由契約制度を廃止してしまっている。そのように廃止しない場合にあっても、それは現存する法制的諸構成——例えば個人企業や合資会社に対応する法制的諸構成に対立するものとしての株式会社の法制的諸構成——のもつ相対的重要性を移動、乃至はずらすことによって、あるいはそれらの内容や含意を変えることによって、同じ目的を達成することになる。

アナロジーがある。民法典(civil codes)をもつところ、並びにそれをもたない多くの国々において、尚、妻に対する「愛情・貞節・服従」(“love, honor, and obey”)の要請の法(law)が存在している。恐らく語句を逆さにしても意味するところはさほど変わらないであらう。私は信じないのであるが、服従とは第一義的に夫の機能であることが常であったとする一束の語句を私はもつ。それにも拘わらず、それは何事か——とりわけある程度に強要させることができる何事か——を意味している。語句は尚、いまだ存在している。しかし明確な法制的義務を問うものである限り、そ

の含意は過去のものなのである。

1 3 オーナー企業者の伝統は尚残っている。・・・作用は婦人参政を唱える女達(suffragettes)を怒らせる。・・・ここでは生産についてはすでに述べられていることが忘れられてはならない。・・・私はその上にある合理化について、いまだ語っていないのではないか？・・・再び家なるものは子供なき場合には望ましくなく、子供は家なき場合には望ましくない、という相互作用があること。・・・それら全てが社会主義に向けての得点(point)になっている、ことは忘れられるべきでない。・・・しかし尚、さほどに幅広くには前進させられてはいない。・・・非常に幅広くではないが、力強く進んできている。・・・ほとんど不可避・・・暴力・・・それは健康な力ではない。・・・19世紀における婦人参政はどこで、そして私は家への反作用をも言及するべきである。・・・英雄的な適応・・・大学はタイプライターの中で擦り切れている。・・・社交(上層階層の)生活・・・バランスの欠如・・・近代的人間の一般的な破壊・・・現代の戯画・・・融合を伴う・・・

1 4 このようにして経済的崩壊がないだけでは、尚また、不満足であること、が先ずは示される。・・・そこでそれは破壊する。

- a) 企業者は重要でなくなる(経営管理もまた)——官僚制化、機構化・・・
- b) 合理化
- c) 生産と消費におけるブルジョワジーの慣習・・・家族制度、人口(乃至は人口を増すこと)・・・
- d) 他の人々の態度(Habitus)・・・
- e) 敵意——自信喪失(nicht-an-sich-selbst-glauben)
経済における集中——プロテスタントの倫理・・・封建的宗教・・・意味付け・・・

雰囲気、すなわち歯車の下に来るような破砕！競争の下で落伍していく。・・・農民達は騎士により指導される。・・・人々は彼等の階級の成就(業績)の下で健康なプライドを失う。・・・防衛される場での臨終的な防衛そのもの・・・

1 5 資本主義と社会政策

- 1) 社会立法は資本主義の成功を前提としている、そして一人当たり 2100 で何ができるかである。
- 2) 失業、高齢者と病疾者、教育、衛生・・・自由財・・・
- 3) そこで、あらゆるこうした合理主義者的な諸々の物事・・・日常生活の合理化、国王と法王・・・大衆は叫び、または彼等の鎖をがちやがちやさせる・・・経済のファイナンスについてはすでに・・・民主主義・・・
- 4) 社会立法は単純に押し付けられるものではなくして、「意志」一元論 (“will”monoism) といったものを超えて育て上げられる。(それは反復あるいは自明の矛盾でない)・・・

21-23 は後の行論とよく相関していない、フェミニズム、非英雄的平和主義、国際的道義性もそうである。

* 1)、における 2100 per head の単位はドル。・・・21-23 は本稿でのパセージの番号とは関係がない。・・・(編者)

1 6 国家は何物をも創出しない、という。・・・その一方で独占についてはぐちゃぐちゃ言うが、節約といったことには何も言わない。・・・そしてトラスト化した資本主義の下では諸条件は競争的企業者と競争的大企業に抗するものではない。・・・

私が社会主義に大きなヴィジョンを認めるとすれば、次の条件下でなければならない。

- 1) 企業者は偏にその業績成就を以て十二分である。(Der Unternehmer macht sich selbst überflüssig durch bloszes achievement.)・・・いくつかの問題は解決されており、解決の方法は知られている(計算と計算機構)・・・加えて指導機関の官僚制的で機構化された履行がある。・・・それは企業行動とのつながりを引き裂くもの(専門家達)であり、民主化を進めるものである(高揚が更に一層に可能ですらある)・・・安全狂・・・

2) 家族制度がその支持要素を摩耗させられる。・・・家庭の館の外で生活することが大幅に容易化する。・・・動機と生活形態・・・人口論的考察・・・出生率の低下は解明されている、a) 福祉理論と合理化によって(但しこの合理化は含意である摩耗とは何か別のものをもっているのでは?) b) 家庭の摩耗(Zerstören des Heims)によって。・・・合理主義的性格とその達成について・・・複式簿記はその合理主義的標語を誇張してはいない。・・・経済的合理性への集中といったものはもはやない。

3) 敵意——知識人達・・・ブルジョワ的信念の喪失、それ自体・・・ブルジョワジー世界は批判が激しいほど益々優しく処遇する。・・・権利意識は原因というよりも結果である。・・・単純に道徳的に非難する、本質的には資本主義に対する非難である。・・・不平等、利潤、搾取に対する・・・

17 現代の資本主義的「独占」の世界からは、不在であると想定されているあらゆる種類の諸徳性。この行論の中では扱われることがほとんどなかったか、または全くなかったところのもの、即ち、大規模企業の「諸悪」なるものは多分に想像上のもの——累増していく悲惨と専制についてのマルクスの図式程これに過ぎたるものはない——であること、等々は過度に反復されることはできない。しかし想像上のものであろうとなかろうと、そうしたことが論点ではない。集中の社会的な諸帰結は、たとえ管理の大規模単位が天国にいる天使達から拍手を引き出すが如く作動したとしても、同じことであろう。資本主義は尚、攻撃を為しつつある、と。・・・

世論調査での解説の意識構造(Mentalität)・・・競争的で社会主義的な諸々の投票の解説・・・一層に手厳しく投票する、そして財産や契約については尚も鋭敏である。・・・このようにして、その限りで、自ら立脚できるのでは。・・・且つ、これらはあらゆる意識構造から湧出する、一小市民、たった一人の資本家。・・・合衆国を見よ。・・・労働者が残っている、そう早くには登場しない。・・・農民だけが残っている。

そこで意味合いの変化が・・・それだから規制の変化が・・・変換・・・私的所有はかくして生産の中では死に絶える。・・・諸家族の中にある長期的視点・・・家族とマルサス主義・・・消費的所有・・・家族的動機・・・婦人達は何を考えなければならないのか?・・・合理化された世界・・・

農民達、合理的な忠誠・・・

政治的なものだけが問題でなく、資産の生々しさもまた、それは資本主義の中に死に絶える。・・・

- 1) これは、そこで、我々の諸公準へと導く。・・・
- 2) だがヴィジョンはすぐさま社会主義へ向けての運動となる。・・・
- 3) それは非常に長々としている。・・・
- 4) あり得べき様々な修正、ファシズム・・・

18 貯蓄と投資・・・だが利潤率は・・・不可避的である・・・政策・・・構図・・・事物が統計的にではなく考えられていることについては言うまでもなく配慮する・・・剰余価値の消滅・・・末尾には社会主義のゴールをおくことは避け得ない。・・・帝国主義、ナチズム・・・臣民のみの統治・・・若い人・・・連結している。

$$C+V+m=W=C_1+V_1+m_1+2C_1+V_1/2+m_1/2$$
$$=3C_1+3V_1/2+3m_1/2$$

マルクス主義者によるデータ解明と資本実態・・・若い人には——新聞のリアリティ、または労働者の下にあるような、そうした何事かが・・・議論に従って・・・渴望・・・見せかけの検証・・・低落する利潤率と集中・・・

19 資本輸出、植民、帝国主義、そして戦争(ナショナリズムのそれではない)についてはすでに・・・いくらかの留意が必要であろう。・・・ブルジョワジーの帝国主義に対する位置関係・・・幅のあるフレーズ、社会主義は企業群に対し味方するものではない。・・・私は無責任性についてのこの弁護に苦しめられてきた。・・・大学教師は自制の行為に自らを閉じこもらせることだけが唯一の機能である。・・・永久革命についてのトロッキーの理論・・・時の充分性について事態がそこで願望される、

1905年革命時のカウッキー・・・

20 独裁者達——自由、彼等はこれを容認しない。・・・承認されて与えられた目的なしに自由が制限されることはあり得ない。・・・ブルジョワジーはそうする意思をもたないし、且つそうすることができない。

諸手段、大規模産業、そして顧客(パトロン)の性質の変化——拡大(解積)・・・大量生産の結果・・・烙印(刻印)、充満した怠惰、合理的市民にはできない・・・彼等は自分達はできると考える。・・・教育——失業、読書人口・・・他の諸前提を満たしていない人々から、及びそれらを悪く満たしている人々から漂流してくる。・・・

独立は攻撃によってのみ・・・政治、官僚(制)——増大しつつある仕事・・・教授——トレーニング・・・実務家——仕事・・・といった区別。・・・思わせぶること自体は許される。・・・集团的利益と集团的攻撃・・・攻撃の必要性・・・力強い地盤と足取りによってのみ・・・メンタリティもまた・・・

21 この脱線からもとに戻って、我々は今ちょうど論じつつあることよりも、ことの不吉さにおいては劣らない一組の諸事実に直面する。私が以前述べたように、資本主義が封建制起源の制度的枠組みに対して行使したところのもの、それが自分自身のそれに行使されるということである。これを明らかにするためには、我々の道程の幾ばくかの先行的展開を振り返ってみるだけが必要である。と言うのは双方の結果は・・・からの結果だからである。・・・

そうではない。三段階論そのものではない。そして、資本主義は機構的——経済的に死の行程を歩むのではない、ということが重要なのである。巨大企業は新しい封建制度でなく、経済的デッドロックを意味しない。・・・競争の排除は他のやり方でそれに置き換えられるような意味、または重要性をもたない。しかし、a) それがおの場合反転して現実に資本主義の運行を遅延させ、しかもそれに替えて現実に社会主義的になると

いうこと、

b) その全過程は長引くものであり、しかも尚その範囲が見えないということ、それらがそこに現れてくるのが社会心理的にも政治的にも、本当に重要なのである。・・・

サラリーマン経営者はその後にくる。・・・しかしそれはすでに前以てきているのではないか？・・・体制、研究、絶え間のない計画・・・我々の設問に対する回答を完成する。・・・

2 2 静態的資本主義(stationary capitalism)というのは言葉の矛盾である。資本主義の上級階層は、もし経済変化、乃至は進化が停止するか、または完全に自動化するかであるならば、報酬を生むことを止めるであろうような諸源泉に浸って生きているのである。資本主義企業は——その著しい業績により——これらの諸結果の双方、あるいは少なくとも第二のもの(自動化)を生み出す傾向をもつものであるから、それ自身の成功により自らをいやが上にも繁栄させる傍ら、それ自身の成功の下でバラバラな小片に分裂するという傾向をもつ、と我々は結論するのである。

そうした傾向の下、完全に官僚制化された巨大産業単位は小規模と中規模の企業を排除し、その所有者を「収奪」する傾向がある。帰するところそれはまた企業家達を排除し、一つの階級としてのブルジョワジーを収奪する、というところが一層に重要である。社会主義の真のペース・メーカーは、それを説く知識人達やアジテーター達ではなくして、バンダービルト、カーネギー、ロックフェラーなのである。この結論は、あらゆる点でマルクス風の社会主義者の好みに合わないだろう。もっとポピュラーな(マルクスはこれを俗流と言っただろう)社会主義者達の叙述の好みには、合うところが尚少ないだろう。しかし予見が進行している限りでは、それは彼等の歩みと異ならないのである。

我々が資本主義過程の自分自身に及ぼす諸効果を考察しつつある限り、その効果は資本主義社会の上層階級の経済的基礎を超え、彼等の社会的ポジションにまで拡大するよう見られる。諸利潤、利子及びそうしたもの、それに経済学者は準地代をもつけ加えよう、等に由来する所得に併せて、資本主義過程は遂にはこうした階層の持つ社会的威信をも破壊するであ

ろう、ということ。そしてこの平行性は次のような些細なことに主に根ざすものではない。一人の所得の喪失は当然のこととしてその人の社会的地位を損傷する——それはもとより真実ではあるが全く第二次的な事柄である。ではなくして双方の現象が同じ原因の帰結、即ちブルジョワジーはその経済的ポジションとその社会的ポジションを——それが帰するところその経済的機能を失わせるであろうが故に——失いつつあるのだ、という点に根ざすものである。

23 資本主義が前資本主義にあったところのものを破壊するだけであつたとしてさえも、自らは裸にされるのではないか——成り行きに任せではなく必ず——ということを我々は検討している。・・・資本主義は先行者の構築したものだけを破壊し、そして何か自らが保持していこうとするものを取り揃えるといったようにはではない。・・・所有に対する合理的行論は君主制に対するそれのようには効力がない。・・・1)財産、競争、放任・・・合理的根拠に立脚した制度なるものはあり得ない。・・・2)諸態度と諸政策・・・3)反作用、それはそこでは攻撃に向けられよう・・・封建制度・・・それは過激派右翼である。・・・資本主義はそれ自身の枠組みに同じことを為す。・・・だが自らをも破壊する。そして同じ過程に即して、我々は完全に同じ足取りを反復できるかも知れない。

そこで敵意と政治——それらはそこで反作用する。・・・課税や干渉などではない・・・もはや自分のもてるもので好きなようになすことはできない。・・・新しい親方、だが敵対者、・・・我々は我々の親方を啓発しなければならぬ。愛想よく受け入れる、だがそれは得るところが何もない。・・・生活水準と余暇はもはや一つの原因に過ぎない。・・・世の中で残されているものは何か；財産神聖権は王達の神聖権と共に出ていく——ブルジョワジーが他のように信じていることは明らかだが。・・・アメリカ人もまた、そして150年に渡って実際にそうである。・・・政治制度・・・

明らかに、現実にあらゆる良質の頭脳が望んでいないとしても、ブルジョワ階級自体は合理化につき言われているものに配慮をなす。
a) 家族、家族家庭、家族企業・・・既述のこととⅢに指示・・・義務と過程の構図・・・b) 宗教、動機、・・・ブルジョワ急進主義・・・何故の責任かについてはこれ以上答えるものはない、安全・・・c) 主人

(Herrengefühl)感情の欠如・・・犯罪者の不承認のないこと・・・お気に
なさらぬのなら、どうぞ・・・知識人達、ブルジョワジー達が産み落
とした・・・意志は知性の後に死す(Wille stirbt apres nous)・・・ビジ
ネス事情は尚、感知される、但し長期に・・・貯蓄と貨幣・・・功利主義
(utilitarianism)の毒素・・・芸術の(?)・・・

敵対的世界であるだけではない・・・ブルジョワジーがこれと闘うこ
とを配慮していない敵対的世界でもある、だがそれについてはⅢにおいて
どのみち・・・更にそれが社会主義への論点であることは(1)において既
に多く述べた。——重要なテーマである！　だが過程は長々としている。
・・・進化と革命についてのテーマの取り扱いに配意(その誤りはすで
にここでは明らか)・・・保守主義・・・尚それほど広範にではない・・・
組み替えの種類についての短い考察を・・・

過程における反作用・・・民主主義と資本主義についてはどこで・・・
そこでは、人々は自ら赴くに任せられる、非制度の制度——社会的レッセ
フェール・・・競争、私的所有、民主主義、自由放任・・・方法・・・
新しい諸道徳へ・・・正に基本が消え去る、利潤と蓄積、そして不平等
と貯蓄・・・知識人達、そして恐らくは尚、最後に次のように告げるこ
とになる、帰結はそこで社会主義者のそれと同様であると・・・

(4) 資本主義システムの死を招来させるに至る自壊的体内疾患

摘要

企業者機能はその重要性を失っていきつつある。更に官僚制化した経営管理への適応はサラリーマン経営者を生み出す。そうすると資産に対する十分に血の通った諸権利といったものは既に消滅させられていることとなる。資本家階級全体のため闘おうとする意志などはない。諸価値と諸標準についてのブルジョワ的図式を保持しようとする限り非難の対象となることは確かである。ブルジョワジーの陣営は反対して結集する社会的諸勢力と対峙するには悪く装備されており、民主主義の諸方法で闘うことが出来ず、その諸利益を保護するための法的諸装置を次から次へとねじ取られていく。資本主義は経済的・合理的な諸批判には強いが、その背後で駆動する特殊合理的な諸批判に弱い。更にその上、資本主義下では知識人層が生み出され、それ自身を社会的不安の中に利益が授けられた今一つの亜種に進化させられていく。即ち、大衆——彼等は不安定性の砂漠の中へ信ぜべき何物かを熱望しながらも、イデオロギー的リーダーを欠いたまま追いやられている——の中であって、ブルジョワジー社会の持つ知性には密接に結び付けられながらも、他方でその何物かに対応して反ブルジョワジー的でその不満の食客となるべきであって当然であるような知識人がある。資本主義と資本主義の利益に反対する敵対の雰囲気、更に自らの出自であるブルジョワジー陣営への斟酌を拒否するような敵対的立法をもたらす不満の上部構造の構築がある。最後にブルジョワジー家族の解体と資本主義的動機乃至は望ましさの蒸散、古きブルジョワジー家族の中にあるものから現代の分離された個人の中にあるものへの自己利益の概念の変化、快樂主義的要素を含んだ功利主義をもってする生活の諸形態、短期的展望をもってする手前勝手な態度がある。・・・その他 (編者)

資本主義システムの死を招来させるに至る自壊的体内疾患

1 資本主義の過程は、それ自身の立役者達や彼等と結合する社会階級をして、その防衛機構を崩壊させ、その陣地の守備隊を追い払わせ、その表象となるであろう諸態度と諸利益を破壊させる、ということを過剰と言え程になさしめる傾向があるだけでなく、私が入口のところで触れておいたような自分自身に対する敵対の雰囲気を生み出す。このことは更なるコメントがなくとも導かれるものではあるが、その敵対の雰囲気の理論は——この問題の重要性とそのパラドキシカルな性質の故に——明示的に発展させられることが望ましい。但し通常なされているようなやり方では、マルクス主義者流儀のものは明らかに誤っているし、だからと言って更によく知られている方法もフロイト流心理学の技術的意味での合理化以外の何物でもないのであって、これをなし得ないように我々には見受けられるのである。

2 そこから始められるべき基本的命題。結社なりグループなりは、その結社やグループの利害をよくわきまえて、合理的に演じられたものとして行動する(act)、あるいはもっと一般化して、振る舞う(behave)ことは決してないということ。人々は大衆の状態で感じ、考え、異常合理的に(extra-rationally)に振る舞う。あるいはパレート(Pareto)が示しているように、振る舞いの大部分は、慣れとなって引き継がれており、且つ制度的に叩き込まれて生きながらえている、といった風にセットされた忠誠心や信条に従って没論理的にそうするのである。自分自身の法と合理的配慮に従って変わりはするが、そうしたものの出現と退廃の中に課される役割は少数派的な役割を演じるに過ぎない。この命題は——我々の道程の多くの転換点で我々を助けることになろうが——社会的世界についての現代的視野と18世紀から19世紀の初頭にみられた哲学的急進派の視野の間にある「あらゆるその最も重要な差」を包攝する。

我々は盗んだり殺したりはしない。その理由は——よく定義された利害と動機に照らした——合理的考慮から、我々はそうすべきではない、という論理的結論に至るからであるが、同時に我々の道徳的慣習がそうした

意思決定を我々の選択可能な図式から排除してしまうからでもある。我々は慣習的に受け入れるようなやり方で突きつけられた命令に盲従はしない。その理由は我々がそれぞれのケースにおいて個人的なあるいはその種の命令に従うことの合理性を認識するからであるが、同時に我々は極めて本能的に、且つ十分に意識的な熟慮なしにそうするからでもある。我々は日々の仕事を仕上げていく。それは、我々の個人的、乃至はグループ的な利害関係、あるいは我々の仕事がその一要素となっている社会的配列の賢明性といったものの論理的知覚からでなく、単純にそれが義務だと言われることをなそうとする理屈抜きの性向からそれをなすのである。我々は婦人に出会った時帽子を脱ぐのは、そうすることに何等かの特別の理由をもつからではない。——以上ほとんどの場合、我々はその行為に気づきさえもしない。

3 もし何等かの「論理」が全てのそうしたことに入り込んでくるとしても、そうした論理は踏み固められた道を巡視するような社会的承認——電気椅子に肩をすぼめるような、誰にも厳格に適用される語義での逸脱した振る舞いの社会的不承認——の認知を超えて進むものではない。しかしながら、これらの社会的承認または不承認は、振る舞いに対する独立した規制装置であるのではなく、社会的標準に対する認可されざる応諾 (*unsanctioned conformity*) となるようなものと同じ源泉から流出するものであることを付け加えたい。例えば刑法典はひとたび制定されるや、それ自身の中にいくばくかの生命を獲得するが、基本的にはそれはただ道徳的慣習を形に整えさせただけのものであり、その効力は第一義的にこの事実を負う。すなわち、法治がその社会の道徳的意味付けによっては承認されないルールを課す時はいつでも、国家の禁止に対するこの国の——アメリカでの——反作用が古典的事例であるような諸現象を我々はいつも観察する。

4 今一つの我々が必要とする基本的命題がある。それは資本主義過程は本質的に合理主義者の文明だということである。このことを我々はすでに確認した。私がそこでなすべきは手中の問題に担わされるものを規定するだけでよい。但し資本主義の文明が合理的なものであると言うにあたって、

人間行為の異常合理的な決定諸要素(extra-rational determinants)が当該文明の機能発揮に重要ではないという含蓄であるとは意味してはいない。アダム・スミスのタイプの経済学の古典によってはそれが過度に強調されたと思われるが、生産の資本主義システムが個人主義的合理性を——個々の自己利益と同様に——そのもてる全ての程度と方法において社会的サービスに作動させたことは真実である。我々がすでにみたように、合理的態度と合理的批判精神が経済の分野から生活の全ての他の領域に拡張されたことも真実である。

しかし、異常合理的な規律の重要性——そのシステムの基本的与件を構成する特定の制度的諸要素について、これを暗黙裡に受け入れることと、これに詮索抜きで順応することの重要性——はその場合、損傷されはしないのである。それ故に合理的態度が拡張されることは、そのエンジンの滑らかな走行に干渉することになる。王達と貴族たちと僧正達が超合理的な魅力(hyper-rational glamor)の保護衣を脱がせられることにもなれば、そして彼等がもつこともあり得よう、そうした功利主義者的諸利点に立脚させられるや、同一の過程が——ブルジョワジー達の苦行へ向けて——私有財産制の尊厳とそれに付帯した多くのことの上に運転していくことに対して起こるのである。このことの全てが今や研究対象であり、そして功利主義者的信認状を示すことが求められるということとなる。

5 資本主義の過程は直接的にそれ自身の基礎条件に侵襲を加える。徐々に前資本主義的並びに資本主義的諸機能の消滅と資本主義の生き残りに都合の良いような制度的機構の担い手であり、しかも保護者であった諸グループの双方の消滅によって。それだけでなく間接的には超合理的にもちきたられた忠誠心を破壊することによって侵襲を加える。以前このフレーズを用いた時の意味に追加されている意味において、資本主義の秩序は無防備の審問に立たされる。

6 我々は当面、資本家の中枢——あらゆる重要性を集中した中枢——である家族が解体しつつある事実に向けよう。しかし、これとは全く独立して、家族的動機と、とりわけその最高の形態——産業的、

または金融的王朝を創出するという野望——が多くの場合、単にその野望を充たすことの不可能性ということの故を以て死に絶えなければならないだろうということを我々は検討している。・・・であることの、かの「防ぎ難さ」と、かの「敵意」が・・・

更にそれ以上に、ブルジョワジーの振る舞いがその「防ぎ難さ」——読者がこの言葉に付している我々の行論の特別の意味付けを心に留めておいてくれること、及びその中に異なる何事かに解釈することのないように、私は望む——とその「敵意」——その様々な原因について私は描写を試みってきた——によって変化しつつあるのである。いくつかの国々で、またいくつかの時代で、ブルジョワジーは単純に歯車にはめ込まれたと感じており、あらゆる国とあらゆる時代でその感覚が自信を失わせている。国々の事業家が自分達の諸価値の図式とブルジョワジー世界の諸標準に自分自身を保とうとする限り、彼は——極めて限られた仲間の外側では、そして自分達の集団的利益のプロフェッショナルな防衛者の間においてさえ——自分達が非難と軽侮の対象であることを露呈するのである。如何にこの麻痺作用が事業活動にさえ及んでいるかは稀にしか認識されない。しかしこの要素が政治的あるいは他の階級的諸活動を麻痺させることが如何に由々しいものであるかについて理解するのは困難でない、と我々はなすべきであろう。ブルジョワジーは単に感じるだけでなく、自分達に反対して結集する社会的諸勢力に対して立ち向かう能力がないのであり、しかも民主主義というブルジョワ的理念の立場から利用できる諸手段を以て彼等と闘うことができないのである。ブルジョワジーからその利益を保護するため用いられてきた法制的措置を次から次へとねじり取り、しかも物事についてのブルジョワ的図式の立場からすれば、すでに確立されてある秩序に向けられた攻撃であると疑いもなくみられるものを制度化する、といったことが極めて容易に検証されるのである。

7 非ブルジョワ的立法に関連して、敵意と政治につき以前から言われてきたことと容易に衝突することはありうる。・・・重要な観察・・・このようにして、私は雇用者に対してではないが、チャンスは彼にはもはやないことを語るべきかも知れないし、あるいはまた独立した社会的権力であることを必要とし、一階級の側にそれは立つことは許されないとする裁判の社会学についても語るべきかも知れない。

8 しかし実際にそう尋ねられているのであるが、次のように尋ねられることは大いにあり得よう。すなわち、社会のあらゆる階層に伍して自分の義務を果たしつつある、と真面目に感じているような数多くの工業家によって——ナイーブな困惑の下に——「何故に資本主義は旗を翻した堂々たる試みの中から来ることはできないのか？」と。これまでになされた我々自身の行論はそれが功利主義者としての信認状を示すことに満ちていると十分に指摘しているのではなかったか？ そのため指摘されてよいような完全に良いケースはあり得ないのか？ その上で、かの工業家は次のように指摘することは間違いない。「ある分別ある労働者は、自分の企業との——言うなれば巨大製鋼所か自動車企業との——契約のバランスシートを検した上で、全ての点を考慮した結果として、自分はそれほど悪くなく働いており、しかもこの契約の利益は全て一方的なものではない、という結論に至ることは大いにあり得るのではないか？」と。——確かにそうである、ただ全く無関係であるだけである。・・・それらは合理的な行論である。それらは経済的理由にアピールしただけである。それらは批判の合理的な先鋒とは闘い得るのであるが、しかしその背後で駆動し続ける異常合理的な諸力とは闘い得ないのである。だとすれば、それ故にこうした功利主義者的根拠は武器としては「打撃力を欠いた」(sine ictus)ものであり、人間活動の原動力としては弱いということである。人々及び彼等が感じ、そして振る舞う彼等の様々なやり方を以てするほんの僅かではない経験もが、それは情熱を上回る支配力ではないのであり、行為の異常合理的な決定諸要素に対する代替要素にはならない、ということを示すことで充分となすべきである。

9 挙句の果てに資本主義社会は——それ自身を打倒するため必要とされるあらゆる諸要素を提供することに加えて——更に知識人階級をしてそうした諸要素を社会的にその諸可能性を発展させるべく育ませ、彼等にもものをはっきりと言わせ、更にそれらをオーガナイズすることを助けさせる能力と意志を持つよう進化させる。そうすることによって授与された利益とは別の亜種、社会的不安の中に授与せられる利益を知識人は自らのために創出するのである。この現象は、見物人にとっては地滑り的な過程の

不可避性をもつ何事かを獲得してきていると見られるほどに、ブルジョワジー社会のもつほとんどの基本的特性のいくつかと密接に結びつけられている。「知性」の中にその——従って不可避的な——確信を備えたものであるブルジョワジー社会は、そうしたタイプを生み出すことを助けるなどにはあり得なかったし、更にそれを失業——及び多分ブルジョワ的生活の通常の歩行の中での使い道のなさ(unemploymentability)——と呼ばれるほどの量において生み出すことを助けるなどにはあり得なかった。しかしその傍らで、その同じ時代において、資本家的世界は——今や明らかにされるべき諸理由によって——それ自身極めて無能であること、そして時折、子供じみた訓練主義者(disciplinarian)であることを証したのである。

しかしブルジョワジー社会は——自ら考案したもののため全てのものを棄てるという、ある種の自由の中にその特徴的な信条を備えていて——大衆をイデオロギー的にはその文化的唯物論の荒涼たる砂漠の中に(in the dreary desert of its cultural materialism)、指導者もなく放置するべきであった、信じ、且つ尊敬するべき何物かを熱望しながらも、ということもまた避け得なかったのである。この何物かが反ブルジョワジー的なものであるべきだったということ、及びそれは反抗に糧を求むべきものであったということ、そうしたことは、それが次のことだと知れば容易に了解される。すなわち、知的デミウルグ(the intellectual demiurge)とそうした好機会は相互的に見出される筈であり、しかも前者は通常知識人の出自であるブルジョワジーの陣営に反対する側に反転する筈である、という条理が作用する。知識人は尚、ある役割を演じるであろう、そしてもっと詳しい理論が一個の位置を求めている。

* デミウルグ(demiurge) : プラトンが考えた世界の創造者、最高神の次の神で、しばしば悪の始祖とされる、支配力の意もある。(編者)

10 知識人を後に従わせること、それはあらゆるヨーロッパ政府によって実際に行われ大よ19世紀の中葉まで続いた。・・・

資本主義の道徳性について・・・不満足を隠すこと——人々がそれを了解した時に破局が。・・・

1 1 ウィルケス(Wilkes) . . .

どんなそうした試みもが——それは基本的には罰金刑に相当するものだとする——ブルジョワ的意識に逆らって犯人達を保護するところのいくつかの私的諸要塞に行き合わせた。 . . .

安価な出版——校正過程の新しい特色 . . . 究極的に十分な自由と知識人達の創出 . . . 態度において批判的 . . . ヴォルテールのように . . . もはや宗教ではない . . . コンセンサスと制度 . . . 榮譽の諸気質に齒向った場の外での自由(freedom ausser wo gegen Humors of honer) . . .

知識人達は更に利害について語った。しかし彼等の集団利益は政治的世界について語られることができることでもあった。それは同じことであった。 . . .

a) しばしば労働者はストライキを図る、b) しかしできない、それ故は世論の支持と防衛により . . . 教導の傭兵隊長 . . . その後者については長期に . . .

1 2 できない、欠いている、望んでいないこと、それに無能、それらは同じことである。 . . . あらゆるランクとタイプのジャーナリスト達と作家達、あらゆるランクとタイプの教師と調査員、法律家の大部分と幾ばくかの医師と教説者達、それらは自由契約または準職業的形態で諸サービスを提供する。報酬はそれが与える時とそれが与える満足によって、例外はあるが、平均すれば高くはない。 . . . 不適切なトレーニング . . . 議論の中の満たされない信条についての採用され難い諸力の配列 . . .

隣人愛と教育——それを良しとする立脚点がない。 . . . 教育は供給を意味する——あらゆるホワイトカラー的な仕事に対する要請 . . .

ブルジョワジーの意識構造(mentality)と制度及びそれによって形作られた管理機構。 . . . 自由は抑圧され得ないものであり、しかも根底に難癖を意味する、それは階級的状态と階級の利益によって強化される。 . . .

13 「知識人」は社会の様々な領域から参集する。お互いに相争いながら自分のものでない階級の前衛として闘う。・・・高等教育を受けたものが多く、自由業やジャーナリズムとは関係が深い。ペンや口による言葉の力が武器である。・・・言動の特徴として、①実際の事件には直接の責任はもたない、②実務的経験からの知識はない、③批判的態度は自分を認知させるためでもある。・・・

源流は古代ギリシャのソフィスト達、続いて中世の修道士の中にも、資本主義の誕生期にはヒューマニスト達——古典を解義し、そのテキストクリティックから社会批判に。・・・諸侯の庇護をうけたが批判精神は一面のおもねりなどと共に大となった。ブルジョワジーが大衆をつくり、富と安い書物の時代になると世論形成者となろうとする。・・・「ペンは剣よりも強し」という態度、ウィルケス(18世紀)はその典型。・・・資本主義はそのどんな抑圧にも失敗した。・・・オルレアンのルイ・フィリップの下、ストライキの教唆者としての彼等を警察が検挙しなかった。ブルジョワジーの私的要塞が彼等を庇護した。・・・それができたのはボルシェヴィキやファシスト政府であり、彼等に忠誠を誓わせることができた。

大新聞の時代、新聞の経営基盤はブルジョワジーにあったが、更にブルジョワ批判のために新聞と知識人の連携が生じた。・・・教育の拡大が資本主義文明の特徴——とりわけ高等教育、需要に合致しない修学者の急増、知識人は失業または標準以下の低位就業に追い込まれることが多いが、一般労働者に伍して働けない。資格だけは多くもつが満足な仕事の出来るものは1ダースに一人もない。自意識に対して劣る職場で不愉快・不満を大とする。その憤慨が資本主義秩序の道徳的否認となる。・・・道徳的否認はマルクス体系への帰依により、それを越えたものになる。・・・労働運動や労働者の政治活動には——知識人の指導を渴望したものではなかった、しかし群れをなし始めた知識人にとっては好機であった——進んでこれに容喙し、刺激し、言葉でその正当性を表現した理論とスローガンを与え、組織化を図らせた。・・・その急進化はプロレタリア革命を示唆する。・・・知識人ならざる指導者達、隔たり感、怒らせられる。・・・彼等は現実対処から労働者達を叱りつけ得るが、知識人はそれができない。阿諛と追従、陰からの煽動、不満気の少数派ラディカルへの肩入れ。・・・

知識人達の最大の収容先・・・行政や他の公共機関、とりわけ教育機関・・・もともと合理主義的・功利主義的文明、即ちブルジョワジーの所

産である公共部門の肥大の中にもぐりこむ・・・それにも拘わらず、諸政策が資本主義に敵対・・・敵対的雰囲気醸成・・・資本主義のエンジン活動の妨害・・・キャリアの下僚乃至は参謀として・・・政治家の秘書として・・・そしてブルジョワジーの子弟の教育に任じ、子弟に体制反逆の精神を植え付ける。

* 13は刊行本の第二部、第13章の二、「知識人の社会学」の抄出である。(編者がその必要性を認めて行い、ここにおいておく。)

14 敵対の雰囲気・・・

繰り返さない——不機嫌に・・・先に述べた結論・・・

礼儀正しく責める・・・「考慮の外におく。」・・・

私は本来このように拮げられるべきだとは主張してこなかった、ただ「イラスト化」のためにのみ・・・

暗示しておいた様々な異論・・・29-39(恐らくは原稿の頁)ではそれに対して何も言及していない、とすでに述べた。かくしてすでに論じられたものの回復・・・補完にある諸政策、3頁にすでに言及。しかし「大きな諸々の可能性」があるのでは?・・・早い時代・・・資本主義によって創出された。不平等のあるところ、現代の政治に対する心理にあるものと同じ。・・・

この態度、よく考えられ、そして予見している・・・信認された労働者は、社会心理に即して第II章ですでに、状態はさほどのことはない、即ち労働者の契約はそれほど悪くはない、ということを示した。

15 スタインベックは途方もなく教訓的である・・・そしてハウプトマンの織工達(Webers)に比してどれほどに全く異なるものであることか(いつこれらが発行されたのか、時期?)・・・

資本主義は知識人を生み出すのではなく、過剰に生み出す、それ自身のロジックによって。更に、このようにして、彼等に準階級的(quasi-class)ポジションを作り出すのである。・・・どこから来たものであるにせよ、

その下で各人は多かれ少なかれ、ある姿勢とある利益的結合を設けることになる。・・・いふなれば、ここでは全てのことを理解していると信じているが、さりとて活動領域がないか、または軽侮しているような仕事だけしか持たない！・・・知識人達と社会主義については尚、何事かが述べられなければならない。IIにおいてが最も良く(更にその場合Vにおいて)・・・資本主義は人心を掌握しない。・・・(?)・・・ヨーロッパ英国における代表制との比較・・・

安全についての興奮状態(hysteria of security)——知識人達だけ！・・・南部諸州にとっては民主主義の原則からは否定されるようなあり得ないことが決定された。・・・策略を売ること・・・規制することが甚だ困難である。・・・このことを見抜くこと、そして満足であること、されば時間がかかっても大きな損傷はない。・・・人々は嘘をつこうとは考えていない——、そして激情の中で単純に赤を求めようとする、のは事実である。・・・ボルシェヴィストの立場からすれば、それでしばしば充分なのであり、——単純に親ロシアに適した者として資することになる。・・・

体制の攻撃者はほとんどの場合社会主義者をよそおう、とは限らない。・・・

16 何と哀れなブルジョワジー！・・・君達は愚かな羊だ。・・・首吊り人を買収することを試みる——国内では労働者を買収し、国外ではロシアをなだめる。・・・そして政治家が、その傍らで、この豚の成果を追う狩猟を助ける。・・・

17 「小ブルジョワジーは気がふれてしまった。」・・・何事からの選抜？　そこからどんな種類の成功が生じるのか——与えられた社会的仕組みの中で社会的に重要なものであるような——。・・・独裁制は個性の役割が徹底している経済に適合する。・・・私は社会主義が来たるかどうかを示すため語ってきた。

18 興味ある問題・・・興味ある現象——資本主義の内部で上位階層は次のように供述している。・・・あからさまな親ソビエトとあからさまな親ロシアは多分大きなものではない。しかしそういう行動をとる人々が多数派である。・・・

どのように上位階層は生活しているのか。・・・イギリスは工業国である。・・・それ以上に農民層(Muschiks)がない、そしてそれ故に自由な公開性が欠けていることが興味を惹く。・・・完全雇用かそれとも自由か・・・賃金といったものと投資・・・政治的決断としてのみ・・・

生活スタイルにおける変化に何があるのか、それは動機付けと同様に非常に重要である。・・・労働者層の保護が必要なことははっきりと・・・保守層の諸動機・・・イギリスのもつ多くのハンディキャップの一つ、それに保守的な警察についての政策。・・・何故に課税よりも抑圧された状態の方がほのめかされるのか。・・・

19 資本主義と資本家の利益に向けられたかの敵意の雰囲気・・・どんな嘆きをもたらすであろうよりも一層多くの満足が得られる——悲嘆の事実的基礎は大体において、その上で生活している全ての人々に即して表そうとなされているほどには、強力ではない。たとえそれがそのように強力であったとしても、異議申立人(discontent)の上部構造を生み出すには、それ自体充分なものではない。しかし多くの物事は、多かれ少なかれ——階級の組織化された衝突に向けてあらゆる資本主義的企業に浴せられたものであるところの——質問票の洪水に由来して、そのようにそのそれぞれの説明を見出すのである。その中に現代の政治家達と諸政党の態度があり、現代の立法の精神があるということ。・・・

もし我々が諸個人や諸政党は階級的利害の表出者であるというのならば、我々は真理の一半を強調していることになる。他の一半が、一半以上のものではないとしてもそれだけの重要性をもつものとして、あるのである。政治はそれ自身の利害を放出する職業(Politics is a profession that evolves interests.)である——その利害は一個の人物乃至は一個の政党が「代表」しているグループのもつ利害と一致する場合と同様、衝突する場

合もある——ということを考慮するならば、他の一半も視野の中に入れてくる。すなわち、そうした個人並びに政党の意見は他のどのようなことにもまして、キャリアと名声に直接に影響する政治的事情内の要因——その要因とは一つの時代の道徳律であり、それがいくつかのグループの大義を高揚させ、他の大義を問題外とさせる——に対して敏感だということである。物事の資本主義的秩序に対して敵対的な雰囲気からは、それ故に、彼の出自であるブルジョワジーの陣営を重んじることを原理的に拒否するような敵対的立法が導かれることになる。

20 ほとんど普遍的な不承認となっていることはすでに述べた。・・・被覆しているものを剥ぎ取ることについてもすでに述べた。・・・後ろ向きに働く政策・・・遅くさせる・・・諸課税がとりわけ、それをそこで再度に強調を！・・・均衡利潤の中で・・・貯蓄・・・富の割合・・・二つの道徳的世界・・・政治はもはや資本家利益にもつばらではなかった——否、そうではなかった。・・・資本家そのものが自分達の立場に立っていなかった。・・・

敵対的雰囲気は現代の政治の支配的留意点を提供するものであり、現代立法の先験的事実(the apriori)なのである。・・・自ずと保守的なものは益々以て(これには二つの根拠が)・・・もはや退却戦(Zückzugsfichte)あるのみ・・・幕間1・・・

21 敵意の雰囲気を通して資本家の船は、幾ばくかの期間、航海を続けてきたのであり、しかも敵意の雰囲気を通して資本家の船はそれが武装解除となるまで前方へと航海し続けなければならないであろう。多くの事柄が、偉大なことであるか、些細なことであるかを問わず、この図式の中でそれらの説明を受ける。諸階級の組織だった衝突、そして階級闘争のローガンはその例である。あるいは資本主義の秩序に、あるいは何らかの特定の資本家の利益に都合が良いか、都合が良いように見えるような諸命題、それが品位を欠くとしてケチをつけてみられるという事実。あるいは資本主義に向かつての人々の態度の中にある革命が仕上げられていくこと。並びにある種の道徳律が法廷外で親資本家的態度を暗黙裡に叩くよう出現

してきていること。そうした流儀と、あるいはまた一層ユーモラスな論点を含むものとして、現代の設問の洪水が如何にその見取り図に適合しているかの提示。それらの全ては、しかし説明的材料の海に溺死することなしには、読者の前に納得のいくよう置かれ得ない程のものなのである。・・・我々は先に進まなければならないが、上記は敵意の雰囲気を扱う一個の理論の路線として、提案されるものである。

2 2 あらゆる渡り鳥の中で最も哀れなのが追随者の支持を願う歴史家である。・・・僧正は冷笑する、もし君が人の罪を抱え込むならば、他の人々もまた冷笑し、更に遂には冷笑の根拠を抱え込むと信じることになるだろう。・・・

解体・・・知識人の影響・・・二重に a) 労働者に及ぼすもの、b) 雇用主自身とそこからブルジョワ階級に及ぼすもの・・・婦人有権者連盟・・・

2 3

a) 最後に変化は資本家階層そのものに及ぶに至る。・・・動機の摩耗・・・行動の諸形態・・・

b) α 弛緩する機能の諸結果

・・・それでも管理と貯蓄の機能だけはある——しかし過大なものではない。・・・それは外側だけでなく、内側においても作用する・・・地位と新与件・・・雇われ経営者・・・

β 保護がなく怯えている(士気を失っている)・・・それは姿勢にも行動にも作用する。・・・生産的資産——そのために闘うべく支配している・・・それが生産的諸力の喪失と敵対の雰囲気によって蒸発させられる(とすでに述べた)。・・・そして敵対的諸勢力の成長がある。それに道を開けさえするし、ブルジョワ民主主義の手段(命令、禁止といったこと)でこれと闘うことができない。・・・攻撃の合法化・・・保護の喪失は国際的でもある。・・・それぞれのケースにおいて教育がなし得るダメージには限界がある。

- γ もてる意識構造と諸態度——それ自身半ばは変換されている。・・・諸理念(ideals)と諸動機(motives)と意志(will)と罪悪感(conviction)は崩れてしまう。・・・
- c) 最終は次のことを仕上げていく。
- α 家族と子供・・・婦人とマルサス主義・・・王朝、確実化・・・個人的安全
- β 受け継がれ、且つ投資された富の中での家・・・心労と危険の源泉、もはや栄誉ではない。そして下方への操舵・・・安価な商品の質がより良いので高価なものは必要としない、例えばホテルといったもの、そのように消費者資本を手軽なものにする。・・・理想は知られているのではない。・・・教説される、・・・フェミニズム、産業的機能・・・教育される・・・形式化を導く・・・大邸宅・・・
- d) だが社会主義に向けての関説は？・・・いつ、どのように？・・・方法は？・・・いまだそこまでは！——しかもこの問題は我々に纏いついてくる。・・・この設問には次から次へと答えられよう。・・・世界革命・・・現代の社会心理学的体質・・・

24 資本主義は資本家階層自身の態度と動機をそのままにはおかない。この階層の重要性を考慮する時、またそれが厳しい選抜淘汰過程の産物であり、更にその動機の構図とその体制の成果(performance)との密接な関係を考慮する時、この点は恐らくあらゆるもののうち最も重要なものなのである。資本家層の振る舞いは、どんな場合にあって、経済的、及び政治的環境の変化に対応する変化と結び付けられている、というのがその根拠である。たとえその動機、乃至は価値の構図が影響を受けること無く完全に維持される——もとよりそんなことはあり得ない——としても、このことはそうであるだろう。だがそれを再形成することに加えて、資本家過程は直接的に正にその中心部である家族と家庭を攻撃する。我々はその難破を検討する前に、反復の危険を冒してでも、以前の結論を今一度述べ、且つ発展させることが有効であろう。

我々は検討してきた。企業者機能がゆっくりと、だが休むことなく重要

性を失っていきつつあること、そしてこのことが如何に資本家階級に影響を及ぼすよう結び付けられているのかということ。管理的・経営的機能と貯蓄の機能はこれも同様に重要性を失う傾向にあるのだが、それがグループ(資本家家族)のため残されるであろう全ての機能である。それは、封建時代の戦士階級とは似ておらず、社会的リーダーシップの他のラインを——階級として——征服するという仕事に対して悪しく装備されている。物事のこの状態への適応は、しかも最大のスケールでの物事に対する、即ち官僚制化されたビジネス(bureaucratized business)に対する適応は、それ自身の内に、次のような様々なビヘイビアの型を生み出すのに十分なものがあるだろう。即ち俸給取り経営者のタイプにおいて、それに以前注意しておいたような株主の様々なタイプにおいて。そこから財産のもつ血の気のみなぎった諸権利——それはすでに消え去ってしまっている——に由来するビヘイビアの諸種において。自分のものを確保しようとする、そしてそのために闘おうとする、かの頑固な意思もまた消失しつつある。

嘗ての闘って確保しようとする意志は、その展望と意味を失うが故に消失する。子供達に残されることができないような個々の役職とか、管理に対する抽象的な請求権と高度に壊れ易い報酬を意味するような幾ばくかの株式とか、そうしたはかない物事のために最後の塹壕に拠って闘うことは無意味である。個人的立場からも、全体としての階級の立場からも、同様にそうである。このことは最も重要な帰結をもつ。資本家階級の典型的人士達の時間的視野(the temporal horizon)を縮小する。彼の先代達の大部分が古く行ったような無限の将来のため働くことを止めて、短期的立場から「彼の」企業で起こっている諸事件を見ようとする傾向がある。・ ・ ・無責任というのではない、他の利害調節を図らざるを得ないだけである。一層に専門家的な態度、但し尚未だ諸事例であって、過度には主張されずにおく必要がある。

25 とりわけ、一個の産業的、乃至は金融的王朝を築こうとするような壮大な野心は、たとえ一族の動機が混じり気なしに残されたとしても、それを充たすことの困難性——実行上の不可能性を考慮してのことではあるが——の故だけからしても、死に絶えなければならない。この困難性もとより先に分析した「無防備性」と「敵意」によって大きく増幅される。直接的には様々な相続税を通して、間接的にはその諸価値についての殆ど

普遍的ともいえる不承認がそのことを敏感に意識するような社会階層の間に拡がるという無気力を通して増幅される。帰結として、我々は次の観察を得る。産業階級のその敵の信徒(**the creed of its enemies**)へのあるゆっくりとした変換、に非常に似た何事かがある、と。かの階級は以前からの価値の構図に従って行動する機会を欠き、且つその諸利益を防衛する手段を欠くだけではない。そうした価値の構図そのものとその諸利益を防衛しようとする動機を麻痺させる傾向をもつのである。資本家の意志は妨害されているだけでなく去勢されている(**being devitalized**)のである。ブルジョワ階級は彼が欲しているものをもつことを得ないだけでなく、その欲することを止めようとする方向に向かう途上にもあるのである。

それはゆっくりと典型的にブルジョワ階級の諸規範の中にある真面目さを失わせ、そして——部分的にはそれとは知らず——彼等と両立し得ないような諸々の諸価値と諸スローガンを受け入れることになる。それはかくしてその敵によって教育されることをそれ自身容認し、更に息子達と若者一般の教育を敵に手渡すことにさえなる。たまにはいくらかの人々が自ら結集し、「奮い立つ」ことを試みる、ことは疑いない。しかしそうした試みと彼等が引き出す反響の双方の弱さは、私が伝えようとしているものを——通常の黙殺よりも——一層良く描き出す。観察者にとってそこでの抵抗が不可能だとは見られないような状況下においてさえ、何等かの保護的な工夫を結局においてブルジョワ階級から捩じりとってしまうことが、何故にかくも容易なのか、その理由がそれである。

・・・放棄の最大を伴った効果の最大、人材の輸入が爆発的移動の充分さを含んでいるとしても、・・・ラッセルとアインシュタイン・・・

26 如何様にこのことが金をつくることに対して、そして可能性に対応する政治的領域で闘うことに対して、動機に影響を及ぼさざるを得ないものであるかについては指摘するまでもないことである。こうした諸環境が与えられたとして、我々はいかなれば事業家の心的状態の中に発生している疑問を検討するに至ることを期待するであろう。「よろしい、結局のところ何故うるさく言うのか？」——経過の中で双方の意味するところのもの。

切り詰められた資本支出だけでなく、所得支出の為され方についても観察しよう。・・・もう一度、一層に安逸ではないスタイルと安価な代替物といったものがある。先行のページを・・・更に今一つ小生産者の仕事がある。・・・

しかしながら遥かに重要な作用は動機と態度に与えられるもので、以前述べたように家族の望ましいタイプについてのものである。・・・子供をつくらないことは資本主義の直接の作用である。・・・ゾンバルトの理論——義務は必要である、充足と成熟は明瞭には予見できないのであるから。・・・彼自身への、並びに他者への呪い。フェミニズム。・・・何故にイギリスの女権主義者達は・・・恐ろしいこと・・・ブルジョワ家庭の困難もまた原因の一つ。・・・フェミニズム、マルサス主義者に至る、切り離された個人・・・

27 金をつくろうとする動機をこのように再度考えるというのか？そして永遠の今として。・・・現代人・・・状況はかくの如くである、私はこの全部分を読み、それらが必要であり、また反復にならないかどうかを見究めなければならない。・・・

私は政治的問題(課税もまた)と反作用問題(Rückwirkungen)(中間的舞台について、並びに過激派の拒否について作用がもたらすもの)にも没頭しなければならない。・・・私は家庭についてのそれを十分にしなければならないし、且つその上に家族の解体について効果的に論じ、結末をつけなければならない。それは私流儀で——その全てを資本主義が作り出したのだからといった私の形で——進められる。・・・

それにしても社会主義はどのように？・・・その時と様式は・・・非常に長きに渡る・・・

28 生産だけでなく、且つ枠組みと社会的理念だけでない、私的生活についても・・・このことは二通りのやり方で作用する。a) 家族家庭——それは生活スタイルの形成センターであるのだが——を見ようとしてい

る者ならどんな者にも、合理的に、言ってみれば、自分にとってそれは目指すべき唯一のものではないとするような者ならどんな者にも、それは不合理なように見えるだろうこと、b) その故は資本主義が提供するものであるからであること。・・・

子供がないことは完全に前途を変える。・・・(?)・・・成功裡の人物はどこでも答えない。・・・他方の側に工場、他方の側に計算・・・子供のない家庭は悪いホテルでしかない、子供がないことは我が家(Heim)をも望ましくないものにする。・・・

29 子供のいないことに伴うものに注意せよ。・・・家族紐帯の解体がその上に基礎付けられるということだけではないし、階級的ポジションにおける保持の弱体化が家族紐帯の解体の上に基礎付けられるということだけではない。「義務の体系」の解体があるのである。・・・

30 人口の経済的効率のことは以前に出てきた。・・・しかし動機と価値付け過程の気分(Wertungsgangsstimmung)を経た上でのものは尚ここで。・・・

資本主義は多種多様なものを提供する。・・・資本主義は更に直接に道徳的取付けを崩壊させ、そうした技術を発展させる。・・・義務、信念を、そしてその場合、他人の諸信念をも、顔を赤らしめるような道徳的不誠実がその人の権利となすような。・・・兵役・・・

重大事とは言え、ブルジョワ的現象ではない。・・・社会的責任—個人的無責任・・・子供をもたないことに対する一つの根拠は、稼いだり、ビジネスに赴いたりする事への嫌悪もまたそうである。・・・家庭は適応されず、そしてそれは子供に向けて反作用する。・・・貨幣的要素—より大なる良き状態に即した、より大なる多産はないということ、家族を見出す貧しい時代(poor time to find a family)・・・

3 1 我々はここでも同様に心的挫折(Retardation)の根拠の一つを扱う。
・・・家庭と守護神(Penaten)は一緒になっている。・・・家族は際立って
中心的である。・・・委ねるべき息子達がない。・・・家族的動機・・・
妻と子供・・・王朝のため働くことが合理的でない。・・・私的生活の合
理化・・・Ⅲに対しては反復ではない、そこでは私は尚、仕事に向かう経
営者について語っていた。・・・家族は農民においては変わっていない。・・・
子供の少なきことは資本主義の合理性を経てもたらされる。・・・

3 2 今やそれはせいぜいのところ農民において、そうであるにとどまる。
・・・労働者と職人においてはそうでない——と言って問題はない。

家庭作業は見事に全方位的である(Homework fair allround.)。・・・

我々の意味での家族は——それを一門一統(clan)とおいても——同じで
ある。・・・充実した生活は変わる事少なき堅固な枠組みである。しか
もそれは妻達を堅固ならしめ、道徳的慣習と情操の標準と態度を創出する。
一夫一妻制の解体をなさないよう構成された家族と標準的な家・・・

工業はブルジョワジーの妻を奪う。しかし出生率が高い場合には職業へ
の参入は尚も進行する。ブルジョワジーの妻の仕事がない。・・・

悲劇的な指導者、アンバランス、アンバランスとなっている社会・・・
教育についての認識のなさ・・・強力な(?)のみが解明を可能とさせ
る適応の偉業。・・・

3 3 全ての態度におけるこうした諸変化——あるいはその背後にある
資本主義的進化の諸事実——は当然のことながらブルジョワジー家族に
影響を与えるだろう。とりわけ家族を構築することの責任のとり方に対す
るブルジョワジーの安直性に影響するだろう。*) 単純な原因対結果の
二者があるのではなく、この二者は相互作用にあると言った方が良い。典

型的にブルジョワジーの家族生活と結合したアンビシャスのいくつかは望ましいものでなくなる、あるいは実現することが一層困難となる、あるいはその双方が同様に直接的にそれに影響する——相当程度にはそれぞれ自身によりビジネスに向けて、及び生活へ向けての新しい諸態度を生み出すのに充分であるだろうところのやり方において——、といったことがもたらされるような社会的雰囲気を生み出すことにより、ブルジョワジー家族に影響を与えるところの同様の社会過程がある。二つのものの更に一層の重要性をもたせるのに十分なこの局面が、今や、我々の注意を召喚するのである。

*) この安直性にみられる諸相(**variations in this readiness**)は統計的な結婚比率の中には確実なものとしてはもとより提供されない。というのは、結婚なるものは多くの異なった社会学的パターンをカバーする社会学的概念なのであるから、結婚率が知覚し得るほどに増加するとしても、ブルジョワジー的家族生活の意識内容に意味付けられた十分な意味での結婚は、同じ時代に完全に消え去っているのである。

エコノミストは現実に極めて明白であるようなことを示さないのが常である。手付かずの資本主義の時代(**the times of intact capitalism**)のブルジョワ的世界の内部にみられた「家族と家族家庭の支配的重要性」ということについても、その由来を示していない。ブルジョワ的家族家庭——街での家と田舎での屋敷——は特徴的な図式を身につけており、生活の一つのスタイルを形成している。ブルジョワ家族が社会生活——その諸価値に対する関与の一般的要点と文明のもつその諸形態の象徴——を観察するのはその窓からである。彼等の行動についての核心的事実はそこにある。

家族動機(**the family motive**)は資本主義エンジンの駆動力である。古典派経済学者達がなしたように、我々が自己利益の概念を綿密に検討するならば、我々はすぐさま「そうするだろうと想定された事柄は、切り離された一個人の自己利益から期待されることができるよう事柄では、結局においてない」ということを明らかにする。古典派経済学者達が明らかにしたのは、家族の中に錨を下ろしているところが工場の中に錨を下ろしているところよりも少なくはないタイプの者であり、その心情は家族と工場の双方によって形作られるということである。第一の錨が第二の錨よりも本質的なものではない、とは少なくとも言えない。双方を一緒にしてのみ、彼等の振る舞いは描かれるのであり、とりわけその視野(**the horizon**)につ

いて、これらの経済学者は述べたのである。

そして家族動機は妻と子供達(複数)を含む。子供のない結婚生活は、とりわけ子供の排除を計画の一部とした結婚生活は、ブルジョワ的振る舞いの中のその個性的特徴をもたらすために十分なものがあるとは言えない。即ち無限の将来のために働く、長期に渡った計画のため意味をもつよう全てのことを講じる、貯蓄の慣習といった、等々の態度をもたらすものではなくなる。子供のない家族は実際に切り離された個々人の態度と本質的に異なる諸態度をもたらす。それはブルジョワ的外観を私的と公的の双方の生活において変える。長期の、そして階級——もとよりブルジョワ階級——のために闘おうとする意志、自分の存命中に受け取れると個々人が期待する所得そのものとは区別されるような所得の源泉の保全と改良のために闘おうとする意志、こうした意味をかくも効果的に萎縮させるものは、これをおいて他にはない。もとよりブルジョワジー心理の中に持ち込まれた他の要素もある。しかしそれにも拘わらず、彼等の子供達の経済的位置に対する責任という点でしばしば特徴的に異なった見方をする近代的両親にも、我々が観察している事実から推論されるように、独自の重要性はあるのである。他の事柄と同様に、それも資本家過程の産物である。

出生率の低下は子供をもたないとする故にだけでなく一人か二人の供をもつ程度に家族数を制限しようとする故にはもっと大である。これは家族の動機の何等かの弱体化を必ずしも示さない——反対に際立って強い家族動機の存在を示すものであり得よう。多産性の減衰はブルジョワ階級だけでなく全階級に対しても、多かれ少なかれその傾向の拡散がある。出生率——歴史的には再生産率——の低下は全面的に資本主義的進化の結果の一つとしての「生活上のあらゆる合理化」に帰属させられる。私的生活領域への合理化の拡散の結果の一つ以外の何物でもない。通常説明で展開される他の要素は容易にこのことに還元されよう。我々はここに家族の少数化の願望とその願望の成就せられる容易性を区別しようと思う。

所得と出生率の関係、経済学者達やこれを扱う他のタイプの研究者達は何かある得心はしていないかのやり方で取り扱っているかのようである。古典はマルサスの見解——人口は常に利用可能な生活維持要件(available sustenance)によって設定される限界にまで増加し尽くす傾向にあるという見解——を無批判に受け入れてきた。必要な前提を挿入することで、我々がこの命題を的外れなものにしてしまうか、またはそれを拒

否して馬鹿げたものの記念碑とするか、はこの際問題でない。事実問題として、生活水準の高度化が——アメリカ・ヨーロッパ領域とそれを欠いた他の幾ばくかの国々で——家族数を制限しようとする願望を危うくしている、ということよりも更に明瞭であるものはないのである。

幾人かが言っているのであるが、次のように言うのは恐らく全くもって満足のいく言い方ではないだろう。即ち実質所得における増加が——かかるものとして——そうした結果を生み出す、自動的にであるか、合理化といったやり方で、且つそれによって誘引された先見に応じて増大させられた諸機会といったやり方によって。これでは多分に異論に晒されるであろうが、我々は次のように言うことでこれを回避することができる。資本主義的進化はあらゆる階層部分(brackets)の実質所得を増大と私的生活の合理化を共にもたらす——前者の過程が後者の原因だとは必ずしも言えないが、それは常に相伴っているものではある——。この第一印象としてはとるに足らない修正のようにも見えるものの主たる利点は、かの作家達が保持しようとしていた所得における(長期の)増加と出生率との間の硬直的關係が引き裂かれ、——それにとって代わって——一個のもっと伸縮的な、多くの例外をも許容するような関係を得るところにある。我々の命題からは、経済条件の改良が多くの場合に——特に良化が親子世帯補助(the subsidizing parenthood)によってもたらされている場合には——出生率を高めると期待される、という見解があながち間違いだとは導きだせないのである。結婚したカップルにおいて、あるいはまもなく結婚を考慮している適齢に達した人々において。一方において「知識人」グループに属する若いカップルの振る舞いの観察が、他方においてファーマーやペザント達(子供は一つの補助金)のカップルの振る舞いの観察が、この点を確認している。マルサスの理論に支持を与えるものではなく、合理化の理論と完全に一致するものとみられてよい。

資本主義的進化は家族数の制限を招くような客観的動機と主観的願望をこのように創出する。同時にそうした願望を充たすことを一層容易にする。このことは二つの方法で行われる。最初にこの願望は非常に強い禁止を創出したであろうような宗教的及び道徳的な性質の伝統的情操を逆走させる。嘗てはこうした点で義務の確立された意味が存在したとなると、それは強力な社会的協定(social convention)として裁可された。しかしこうしたことは資本主義的合理性が埋め込んでいく傾向にある正にその種類の事柄である。それは真面目な事例を追い払っていく。それは自分勝手

(self-government of individuals)を妨げようとする試みを社会的に承認しないことを意味する。次いで第二に、資本主義的な独創性と事業精神は——もしマルサスの道徳的抑制よりも他に方法がないのならば——男に最強の衝動を非繁殖的願望の方向へと仕向けるであろう、益々以て性能の高い避妊具をもたらした。このことは非常に重要で「低落の唯一無二の原因」と名付けられた(ハロッドの素晴らしい論文を見よ)。ある意味ではその通りである。しかしそれは立ち返って問題の理論が提供する説明を求めることになる。

ブルジョワ階級とブルジョワ的生活スタイルに対する論議の傾向は、私が既に言及してきた諸要素——更にそのうちにブルジョワ諸層が関与させられてある限り考慮されて充分であろう諸要素——よりも他の要素が力説されるということである。資本主義過程は、諸方式の一亜種として、ブルジョワ家族に体现されてきた正にそのブルジョワ的生活スタイルを脅かすのである。

3 4 三つの追加的コメントが我々の行論を補充する。

第一にブルジョワ的生活の新しいスタイルは、今までのところコスト面での利益という点で決定的といえるものを何も提供していない、と私は述べてきた。しかしこれは私的生活の諸欲望に奉仕することについての経常コスト、乃至は主要コスト(**the current or prime cost**)にだけ触れたものである。オーバーヘッドコストに関しては、そこに純粋な金銭的利益さえもがあることはすでに明白である。生活におけるほとんどの耐久的要素に向けられた出費に関する限り、とりわけ先行の諸収入によりファイナンスされて用いられている家屋、絵画、家具類の一部においては、「消費者資本」の蓄積の必要性はその過程で思い切った切り下げがなされるといってよい。「消費者資本」に対する需要は現今において以前よりも相対的にも少であるというのではない。少額所得者や所得に中流の者に由来する耐久的消費財に対する需要は累増してきており、上記を相殺しているのである。しかし次のように言える。獲得せられてある諸動機のパターンの中にある快樂主義的成分(**the hedonist component**)が問題にされている限り、ある水準を超えた所得であることへの望ましさは、これまた引き下げられているのである。読者がこのことを了解するのに必要なことは完全に実務的な

精神に身をおいて、その状況を再構成してみることだけである。成功裡にある人物や夫婦、あるいは社交界にある人物や夫婦、彼等はホテル、客船、列車の中で最上のものを購入できるのである。個人的な消費と利用の諸対象のうち利用可能な最上の品質のものに支払うとしても、それがどんなものであれ自分達に合わせた程度においてもつ、ということであろう。そこでそうしたラインの上に組み立てられた予算が「先代」(senior)の生活のスタイルが要求するものよりも遥かに低位であるだろう、と見て取ることは容易である。・・・行論は具体性をもたすため定式化されたものではある。・・・今一つの動機がある。可能性として支配的な重要性をもつことは決してなかったろうが、どこまでも限度を超え自らを行使しようとするもので、加えて過度なまでに行こうとする。

これに加えて第二の局面がある。上層階級における消費支出の(相対的)削減である。私は以前、産業財産の具体的な形態の「蒸発」について長く考えてきた。眼で見、且つ手で触れ得る産業財産は先進諸国では農業の分野でのみ固執されてきた。ペザントやファーマーの保有は所有物と所有者が実物的にどういうものであるかを近代人に示すため残されている。しかし言葉の死活的意味での所有者、とってよいブルジョワジーのそのタイプは突如として死に絶えていきつつあるのである。それ自身では、このことは消費的財産とそれに結びついた振る舞いの型に影響するわけではない。だが影響があるのは、彼等が家族の家に行き、且つその中の内容物の諸部分が尚も——その近代人に対し——感じさせ、息吹を与え、闘わせ、造形させ得るよう残されている限りにおいてである。しかし我々は今や次のように見る。即ち、部分的には変わりのない風習のものであるとしても、消費的資産とそれを以てするブルジョワ的家庭所持者の心理構造は正に効果的に麻痺させられつつある。生産サイドにおけると同様に、生活もその本質を解体させられており、我々の意味での具体的な即物性の重要なある端の部分を磨滅させ、そしてその帰結として長期的視野を採ろうとする我々の習慣もなくさせられる、ということ。こうした結果を明らかにするには、独身者か、子供のないカップルかが必要とする全ての物の諸サービスを当用買いしている様相を思い浮かべるだけでよい。それは錨を失った空間にあるが如く浮かんでいるのであり、それ故に今や家庭と言えるものはどこにもないのである。

我々の分析の第三の帰結は恐らく他の如何なるものよりも重要である。ヨーロッパ諸人種に属する殆どの部族を網羅して今日の定住がなされて

いる諸国の設定の後、画一的となった制度の整備は、両性間の問題を完全に解決した。その制度的枠組みの中で、そして私的諸条件の下では、一方では出生率に対し、他方では自ら課している満足すべき分業に対し責めを負うような何の問題も発生しなかった、と言った方が良いのかも知れない。同じ図式が、いくらかの変異を以てではあるが、近代の入り口のところまで半ば農業的性格をもち続けた中世都市においても作動していた。家族的家庭が重要な生産センターであり、今日の産業が充たしている諸機能の大部分を充たしていたのである。これを運転することは育児に吸収されなかった婦人のエネルギーの全てを召喚する明確な招命(vocation)であった。今尚、ペザントとファーマーの分野でこの制度図式の残存があるが、そこでは「婦人問題」(Frauenfrage)なるものは存在しない。職人や小店主の世界にあってもある程度までそうである。しかし近代の産業プロレタリアートにあってはそうでない。工場の仕事は単純家事作業の補足であるが、この家事作業は——もし何の助力もなしになされなければならないとすれば——他のやり方であったら不満足ながらもあり得たであろう時間的隙間を残すことはほとんどありそうにない。それ故に我々はこの問題に向かつての社会主義者グループの典型的態度を完全に了解し得ることになろう。もっとも相対立した諸傾向や語句の諸迷路があるが。多くの社会主義者はもとよりブルジョワ過激派もその他の者もブルジョワ過激主義のイデオロギーの多くを社会主義の世界にもちこんだ。どんな場合でもそれは当然「女権主義」(feminist)となる傾向がある。たとえ、その状況が主張されているようなものではなかったとしても、資本主義に反対する一般的な場合への今一つの告発を付加するものであった。このように社会主義者はこの豊かな政治的支援の源泉を無視する余裕などはなかったが、それにも拘わらず平均的な社会主義の指導者や追随者達はいつも婦人問題の原因に熱狂的とは言えなかった。労働市場での婦人の何のとらわれもない競争が引き起こすに違いない明白な諸困難のせいだけによるものではない。また単純に、社会主義政党たるもの、そうしたブルジョワ的婦人運動には当然冷笑を以て位置付けねばならない、といったことによるとも言えない。それはこの問題が典型的にブルジョワ階層の問題であるという事実の知覚のせいである。

というのは、悲劇——我々がとかくそれを讃える習性をもっているこの時代の中で、多くの偽物とは区別せられた真正のもの——はブルジョワ階層の中だけにあるからである。産業的發展はブルジョワ階級の婦人達からその天職を奪い、そのように恰もそれが職分であったかの如く空洞

化させた。家庭での生産を洗濯と調理を除いては——この諸機能すらもが侵襲されていくこととなるのだが——何物をも残さない。その一方で同じ産業的発展によって創出された社会的諸条件と意識構造が共に、以前ならば育児に吸収されていた余剰エネルギーを増大させているのである。*)生活の空洞性、肉体的であると同様、感情的な衝撃による憐れむべき動揺、その最も悲劇的な場合は失業(仕事がないこと)である。適応的な反作用のため利用できる諸機会は——それが消滅する傾向をとっていないところでさえ——その問題の解決に成功しない。特に最上位にある社会階層には「社交生活」(“society life”)があり、そして彼等のためにプレイするという正にその目的のために創出された諸々の利点のためプレイされるといったゲームがある。あるのは絶望的な試みであり、真正の工夫であると共に痛ましいものである。ホームのイデオロギーのぼろきれにしがみつき、為すだけの価値があるとされる何事かの中へビンや鍋を残すことを褒めたたえる、といったことである。最後に職業の侵入と婦人の職業を創出しようとする努力がある。これはもとより望みのないものではない。しかし差当り、しかも長期に渡って、来るべく約束されるものは動揺と恥辱であり、男子に与えられるもっとも悪いチャンスの到達域内のそれよりも更に小であることを避け得ないようなチャンスを得る以外の何物でもない。これこそ豊かさの中の真の貧困(the true poverty in plenty)である。

* 私がかつて入手した 14 世紀の報告は、南ドイツの平均的な騎士の家族は「貧乏人の子だくさん」で暮らしていたことを指摘している。・・・ある城では、ゆうに 100 人以上の子供達と共に生活するところの 4 つの高貴な家族があった、と述べられている。・・・上層階層の担っていた古い時代の育児機能・・・

3 5 我々の主題にとっては、我々の制度的枠組み(institutional framework)の中の最も重要な部分の分解が何よりも象徴的である。しかし我々の社会的、政治的な状況の中には尚、重要な要素がある。

近代の過激主義を特徴づけるような平衡感覚と冷静さの欠如、現代政治の内政と外交双方におけるヒステリー、熟慮と冷静のように見える全てに対する嫌悪、長期的視野に立った事柄との関連での性急さ、国家と個人の神経衰弱的な落ち着きのなさ、これらの全ては——尚かなりの程度に全体

を言い尽くしているとは言えないのであるが——人類の最も文明化された階層の半分が明らかに精神と身体の病理学的状態にあること、及び自らを困難と抑制により解体させると同時に他の半分の解体する、という事態によっている。彼等の双方がその「擁護」(“make a stand”)の為に、ためらいなく最善を尽くす、逆にそうすることを更に効果的ならしめるために彼等が自己の運命の現実自身に自身を向けること、それをブルジョワジー社会は——その社会心理学的根底の如何なるものからも——与えはしないのである。それは全体文化に対して重要である。しかし、とりわけ資本主義的ブルジョワジーの抵抗力と機能のために。

第Ⅲ部 社会主義は作動しうるや？

(このテキストの主題、可能性が示す限りでの社会主義の経済学)

- (1) 社会主義のブループリント
- (2) ブループリントによる社会主義の比較優越論
- (3) (2)の補足的パセージ
- (4) 社会主義システムにおける人間的諸要素
- (5) (4)の補足的パセージ
- (6) 移行過程 ——社会化——
- (7) 社会主義の経済的バランスシート

(1) 社会主義のブループリント

摘要

どんなイデオロギーからも解放された社会主義の定義、「集権的社会主義」、生産の諸段階についての及び生産それ自体についての管理が中央当局に付与されている如くはっきり指示されている一個の制度的パターンで、複数の管理主体の存在は排される。生産の中央当局はその計画を議会に提出しなければならない、また各部局で「その任にある人士達」に対し一定の行動の自由(自由裁量)を与えなければならない。上記の社会主義経済の純粹理論としての青写真の中には、諸価値とその導かれる諸費用あるいは帰属される諸報酬等々があり、そうした基礎的諸概念は資本主義の枠組みに依存するものではなく、もっとも単純化されたモデルであるロビンソン・クルーソーの経済諸活動にある基礎的諸属性を説明するため用いてよいものである。それは全社会機構における生産と消費、貯蓄と投資であるかの如く示されており、一人のクルーソーが如何様に彼の利用可能な諸資源を、彼の当面の及び将来の欲望充足を最大化させることに対応させて、配分するかを示すものである。基本的にこれらの諸考慮は資本主義経済の後を受けた社会主義経済においても同じである。しかしながら、この社会主義経済にあつては、生産過程と分配過程が同一の過程を進むという自動的ルールを欠いている。だからして一個の与件として、社会的生産物の各同志に対する相対的シェアの決定が、別途の異常経済的(政治的)な問題として、一つの区別されるべきこととなる。こうすることで消費の財・用役に対する需要関数と労働と貯蓄に対する供給関数が上記の相対的シェアから導き出され、これらの関数から中央生産当局は、具備している諸生産関数(諸技術)をもって、投入一産出過程における諸財と諸用役の諸数量を丁度、生産における限界生産力が消費における限界効用に等しいか、または対応しているが如くに、更に労働の供給が労働の需要に、また貯蓄の供給が貯蓄の需要に対応しているが如くに、見出すことが出来よう。・・・その他 (編者)

Ⅲ—(1)—1～38

社会主義のブループリント

1 第3エッセイ「作動しうるか？」・・・社会主義の経済学・・・
導入——もとより多かれ少なかれ、それを解義するものであるが——に即して・・・

(1) 社会主義の定義・・・社会主義の概念を他の概念から解放するためには重要である・・・

配分における差、選抜における差・・・本質的であるのは選抜の問題・・・そのすべてが書き換えられなければならない。・・・

(2) ここにおけるテーマ「作動しうるか」——論理的に悪いところは何もないということを示す。・・・

実行(実務的)可能性や比較はこの際問わない。・・・

民主主義的な節約、利子の役割と資本構成・・・経済における論理—管理問題が発生する。・・・最大性について不条理は何もない。・・・バローネ、F・テイラー、ランゲ等・・・たどえそのようになされる必要がなかったとしても、他の代替物が。・・・

(3) テーマは実行不可能性である。・・・事実、それについて語るべき多くのことがある。・・・ロビンズとハイエック・・・省く、時流とともに、しかも時流に逆らって泳ぐ。・・・だが実行可能性とは何時の？ それが重要な発見であり、強調されるべきことなのである。・・・

この問題は集中が非常に大切なので、回避することが困難である。・・・多分ここでは抽象的にのみ・・・むつかしいところは、例えば順応性(可鍛性)といった問題は(3)とは区別するべきである。・・・社会主義諸政党の実績・・・

(4) 能率比較・・・これにはさらに一対の留意が！・・・またもや再び同じ問題が、——あるいは正にここにおいて、——何時の？・・・

誰もが必要とされる態度(心構え)は、常にそうであるが、あたかも途方もなく巨大なものであるかの如く準備される。・・・どこまで大衆の規律と長期的政策がなされるかに依存する。・・・知識人あるいはレーニンを乗り越えられる人・・・人間のどんなタイプ、遂行の統制(control of

prosecution)？ 誰がそれを運転するのか？・・・その機構からさらに引き出すことはありうるのか？・・・それは再び一つの結果ではなかったか？・・・だが、そうは言っても、これまた不確実なことである。

(5) 移行経済の問題——ただし客観的な問題のみを・・・その時点に依存する。・・・偏見，ただし有効性はある・・・なお、全てでない・・・より良ければ良い程、より後になり、より良ければ良い程、過渡期間はより少ない。・・・喫茶店でべらべらしゃべる。・・・私の祖母が自転車をこいでいた時に、独占曲線を論じることの幼児性。・・・そして喫茶店にいる知識人達には、当然あまりにも多い無駄な行動の中にも、それぞれの段階を良くさせることはありうる。

2 「不幸にして我々は、ともあれ、まずは定義しなければならぬ。・・・」・・・その場合、私は、集権的社会主義だけを考える。・・・排除すべきこと。・・・我々が経済的アスペクト——生産的的局面と分配的局面の双方——において、管理についての権威を求めること。・・・だが私は事柄をそうならしめないようにすることができる。それでも分配が入ってこざるをえない。諸資源の単なる管理は、そうは言っても、私的所有と併せて処理されることができのでは。・・・

今や「もたらされた諸生産物の配分」を重ね入れるとしよう。次のように言うことは全く正しくない。——集権的な管理はそれぞれの個人が消費すべきものを決定する必要はない、と。・・・

競争的選抜(淘汰)の消滅が忘れられてはならない——社会主義が常に「可能的」であるのと同様に。・・・しかしなお、消滅しないものもあるということ。・・・

3 私は社会主義社会と商業的社会の範疇差の問題、並びに異種の世界にある諸概念の言い換えの問題を十分に強調しなかった可能性がある。・・・
ドップ — ラーナー論争といったものは、私が社会主義者達は類似性につき失望させられるかも知れないと述べた、その点に多分に即したものである。・・・

ドップの差の強調といったことは、一面では多分正しいが、経済的合理性

の中でのことではない。．．．そこへ入っていく人類の意志(Will der Menschheit)が明瞭ならしめられるならば、その場合、何か他のことが重要となる——資本主義がさほどに大きな差をもたらさない状態に至るということを示す可能性、及び、この可能性はその場合、それ相当に恵まれたものであるということ。．．．

当然のことながら、社会主義につき心からの微笑と手を組んで語りしかできない人には、このことは愉快的なことではない。信じようとはしない人には、これら全てを理解できない。．．．

このことを棚上げしてしまうことも、また極めて重要である——すなわち逃避主義である。．．．

4 ブループリントはそもそも報告書(Bericht)なのか。．．．

産業の下位階級(lower strata)における諸浪費、そして上層にても——オーイエス、結構。．．．より単純な課題への集中が——すなわち、それに対して課題の諸制限が働いている場合——能率を進めるのである。．．．非確定的なこれらの無駄以外の無駄とは。．．．拘束された資本主義の下では弁護士が益々重要となる。．．．

ブループリントは過度に能率的であるべきではない。心的な力は連鎖に火をつけさえする。．．．ボトルネックについての複合的な不満。．．．自己破壊。．．．

5 社会主義でない社会に対する標語、「商業的」を用いる。まずは、多くの人は言っている。社会主義は不可能であり、しかも実際的でない、と。．．．あるいは、恐らくどんな理論にも根ざすことなく、主に社会主義に反対するケースである。．．．まず我々は自らを満足させなければならない。．．．

6 論理的非決定性におけるブルジョワ的文化、それが再度である故に。．．．各ケースにあるリアリティ。．．．しかし歴史的諸ケースのもつバリエーションの幅は相当なものである。それら全てのケースの中で次の設

問に遭遇する。観察せられた諸現象の中のどれが明確な意味でのブルジョワ的要素に納得がいくよう帰属させられてよいのか、またはよくないのか。私はこの範囲の諸問題とは——付属的な場合は除き——取り組もうとは思わない。一個の感想を付すことに止めようと思う。

7 「ブルジョワ的諸要素」という言葉を用いる場合、私は個人的諸要素——ブルジョワ階級と呼ばれてよいものを構成している諸個人——のことを考えてはこなかった。考えていたのはブルジョワ時代(*bourgeois epoch*)の文化的諸要素のことである。すなわち一人のマルキシアンの意味での経済過程のブルジョワ的形態にまで跡付けられることのできるような、諸態度、行動の諸型、それに諸成果である。この文化に注意することは可能である(私にはできた)、だが途方もなく広い範囲を認識することは可能でない——童話的ですからある。・・・今や告げられる。技術は分離せられず、また医術と科学をブルジョワ的と拔書することは可能でない。ブルジョワジーの仕事だというわけではなく、合理的精神すなわち合理的な設問設定のもたらす仕事であるという訳で。・・・なおそうであっても a) 意志と b) 手段が用意される。・・・社会主義の精神は構築することが可能である、さらに知識人達は敵に対する仲間として機能する。・・・文化的な力を解放しようとする願望・・・

8 ブループリントの中に含ましめるべきだ、と言っているのでは。・・・しかし、それは混乱をもたらすだけである。誰もが見通しているように、関心のない場合、最初に改良主義、次いでマルクス主義といった行論は避けること。・・・

だが何故にそれが全てなのか？ 絶対的にというわけではないが、敵対的傾向に由来するものとして必要である。ルッソーは事実このようにして道を設けた。あるいは、さらに困難な区別、資本主義—攻撃の対象といったこと、我々がすでに検討しているように自営生産者(*Selbstproduzent*)であるかないかはどうでもよい。・・・

ブループリントは——どんなブループリントもがそうであるように——基準からの逸脱があるだけでなく、古い装いのものであるか否か、知識人の産物であるか否か、あるいは、いたずら坊主のそれであるかどうか、の

差は排除するものである。・・・思想の切り捨て・・・

9 ピグー 社会主義対資本主義・・・

この他に労働組合と政党(さらに政策と諸機会)についての資料・・・

10 社会主義・・・官房学派の簿記学(Cameralist Buchhaltung)・・・
ピグーの計画との比較…疑問1、どこで、イギリスで、疑問2、何が成されたと言うのか、建設的保守主義(konstruktiven Konservatismus)・・・

若さを保つことを「得る」——我々は生体解剖には反対の社会をもっており、そして若さを経験することに反対する何物をももっていない。・・・
人種の改良・・・農民・・・国有化・・・ある文明を好み、且つ好まない。・・・
失敗とその大きな利得・・・

11 それにもかかわらず私は繰り返す。革命によって確立されたこのシステムが全く作動しないとか、その文明は全てのこうした文化的諸損失から回復することはありえないだろうとか、そうした諸論を導きはしないのだ、と。

しかし、これは勇気の欠如から、嘲りによって諸困難と諸災厄を処理しようとする人達を許すものではない。無知な大衆や家庭からめったに外に出ない人々を前にして、栄光裡に解説をなし、そして喝采を引き出すのに勇気などは必要ないのである。大学の教師が何等かの勇気を必要とするというのなら、その勇気たるや——研究のための情熱と頭脳のための輝く眼に替えて——厚かましさと性癖が発酵する動物的気炎をセンス・自制・ファイトのごとく見せかけるための勇気である。活動する人々の真の勇気とは暴民達の欲望を胸で受け止めることのうちに存在し、しかも我々が生活しているシステムが要求するのは、この勇気であって他のものではない。

1 2 我々の時代の「経済的非理性」(die wirtschaftliche Unvernunft)
——ハイエクは常連の教唆者である——はいつも分析の客観性を欠いて
いる。・・・更にそれが理論の上に彩られている限り、この理論は現実に
「主観の意志」でしかない。・・・

1 3 把握されるべき第一の論点はそうした計画のロジックに不都合は
何もないということである。換言すれば、この計画は如何なる矛盾・不整
合と必要条件の欠如を含んでいない——内的な不条理はない、しかも完全
に——。更にこれらの諸条件を満たす状態をもたらすであろう諸方法が指
示されうる、との意味において完全に運転可能である。それは肺のない人
のごときものではない。我々は先ずこれでもって自らを満足させるつもり
である。その場合、論理的諸条件とは離れた実行可能性と能率を保証する
ような諸条件のもつ諸問題については、なお考慮に入れられていない。

これは目下の非常に単純な仕事である。というのは、社会主義体制はその
ロジックにつき責められ続けているが、それらは経済計算と経済計画に
主として還元されてよいものであり、今や問責は明確に棄却されていると
言われてよいからである。バローネ、テイラー、ティッシュ、ランゲ、ラー
ナー。不可能とは何を言っているのか。パレート、ボールギャン、ミーゼ
スにおけるように不可能とすることと共に考えられているものは何かで
ある。・・・

我々は基本的な差から出発する。
商業的社会にあつては、生産——輸送と流通をも同様に意味付ける——
と分配——私的諸所得の形成——はその時々同一の過程の中で進行す
る。経済的意味における生産とは、諸要素を諸財と諸用役——最後には消
費者の諸財と諸用役となる——に変換する目的に適合させられるチーム
に結合する(諸要素の諸チームへの整理配列)以外の何事をも意味しない。
そしてこのことは、帰するところ、それらの購買を意味し、しかもこれら
の購買は再度の——諸企業がしかるべき種類と量の諸財を生産しようと
決意する状態の——出現の期待のもとで諸所得を創出するものでもある。
それはどんな商業的社会にも対応し、少なくともそれに対し典型的である
ようなケースでは、貨幣的・実質的所得の形成を生産諸用役と生産物の価

格付けに同一化することとなる。

その場合投機といったものには何が。・・・更にランゲの言う余剰の配分は——しかしそれは必要なのか？ 私の方法は違う。・・・コスト＝価格であってもよいのではないか、必要にして十分？ 何故に更にそれら全てが使い果たされるのであるか？・・・諸用役の価格付け——そして需要と供給に向けての価格付け・・・そしてこれらは諸所得に回帰する。・・・価格付け——それはこのようにして同時的にすべてを規定する唯一の同一過程でもある。区別はある、a)分配 b)選別 c)相続権（だが必ずしも排除されない）。

1 4 社会主義はそうした自動ルールを欠いている。・・・良くない・・・だから社会的生産物の相対的分け前分の決定は特別経済的問題 (**extra-economic problem**)として別途の問題となる。言ってみれば経済的効率の考慮がルールを形作る諸動機の中に入り込んでくることはあろうけれども、更に同志達が意識して最大能率の達成に合致するように社会的生産物の分配を図ろうと決定することはあろうけれども、分配は依然一個の与件であろうからである。更に道徳的考慮の問題のようにもみえる——だがそれは、その問題の本質ではない——そして作業はそれだから進まない。・・・

平等性がそれぞれ異なった好みの方に即して意味するものは何か、平等性は不平等性を意味するものではないのか、それぞれ異なった理想を実現させるには何がなされるべきか、などは配慮しない。誰に対しても必要と能力に応じて——このことは付言すればそれぞれ区別されるべき事柄があるとの表現である——を我々は決して配慮しない。我々はこの構図においては単純に、「全ての成人(**Vollperson**)は等しく一個の単位として登場する」ということ、次いで「この単位は述べられた期間内に消費した財に対する支払いがなされなければ取り消される」ということ、を仮定しているだけである。・・・ピグーを！・・・

その場合、論証は二つのステップで、1)熟達した生産(よく知られた常識ではあるが)・・・どこで競り(**verauktionieren**)が(そのように全ては生産される?)・・・2)それが生産手段の諸価値を与える。この諸価値は、

全ての生産手段が使用されるという条件の下で比較調整され、そこから均衡価値(gleiche Gewichtswerte)が結果として導かれる。合理的な諸コストと賃金・地代が与えられる、ところが興味を惹く。減価償却といったことも。・・・そこで通常以下の生産(underproduction)は？ 貯蓄は？・・・労働証券(labor notes)・・・あとは省略が許されよう。・・・構築されたシステムでの分配としての作用の中に利子の問題が、だがこの点についても不必要、偏執者？・・・生産と満足(もとより後の方が大である)。・・・

それら全てが意味していて、しかも意味していないもの、競争・・・最も粗雑な社会主義者達だけが——彼等はある種のシュララフィア(Schlaraffia…怠惰を良しとし勤勉は悪徳視する)であるか、馬鹿者だが——それ故に反撥する。・・・競争は一個独特の義務だが、残念なことに至る所に押し入ってくる。事実はただ労働に対し私的欲望のあらゆる比例性を与えるだけのこと。(分配についてのごまかしといったこと)・・・あらゆる経済的制約と配慮が予見されてあれば、同じ方法と手段をもつことでもあり、そのようにして潤沢に至る。だがこの理念は影響力を持つ！更には冷笑して反対される。・・・見通されたこの不誠実は驚きである——正直な信念をもつ不正直。・・・取り除くことだけを要求しているような理念は独立した何かとして存在する。・・・

それはだが定常過程のロジックであるに過ぎない、しかし容易に拡張できる。利潤が動態では入ってくる。・・・だが次のようにされてはならない。すなわち、労働者は賃金だけを受け取ることができるのか、さもなければ、黙ってその全てをなのか。・・・何故にロシアではかくも容易に、しかも複雑な計算を必要とすることなしに、できたのか。・・・

帰結、財生産の基本的課題と経済的諸関係の論理は同一のものである。

——ロビンソン・クルーソー。

* シュムペーターは次のように記している。

限界生産力は価値限界生産力であったが、オーストリア学派の場合、物的限界生産力に或る消費者の限界効用を乗じたものである。この基礎に立って同時に生産の理論となり分配の理論となる彼等の理論をつくりだした。このような把握はただロビンソン・クルーソーの経済の場合において

のみ明白な意味をもつものとなる。クルーソーは様々な稀少な生産手段に対し生産物の限界効用である価値に従って評価する、すなわち価値を帰属させる。帰属説による生産手段の限界効用の認識は集権的社会主義の運営方式にまで発展させられた。バローネはそうした経済が、原型においてクルーソーの経済であるような様式で作動させられ、抽象的には一意に決定される一組の解をもつ方程式体系として与えられることを示した。・・・
「経済分析の歴史」第4編第6章3・第7章5を参照・・・編者]

15 ロビンソン・クルーソー——彼がそれとは別に社会的性格を強調することに極めて熱心であった、ことにマルクスが価値を認めたという点が重要であろう。・・・

16 あまりにも早くから述べることはできないこと、ロビンソンが一週間のうち一定時間を食物の調達にしていることは、論理的完全化の中で、それが満足の最大という問題で他のどんな資源配分にも無限に優越するものだからだ、ということを表そうとした、ということ。

17 「簿記は並のことよりも、もっと重要だ」、クルーソーは、そう強調するに至った。・・・基本的な差(資本主義経済との間の)・・・そこでは先ず所得を規定する、そして他の全てを入れ替えることができる。次いで価格が他の任意の諸量と共に規定される、しかし、これらの諸量が規定されなければならない。そしてそれが、すなわち、配分(allocation)である。・・・

我々は、これだけの生産手段をもって、この財のそれだけの単位量を生産することができよう。その財の単位量はそれだけの貨幣単位価値があり、しかも少なくとも他の用途を正当化するための必要物である。・・・

限界調整があるのみ、・・・限界生産費！・・・社会主義の下での貨幣(価格におけると類似——一般化された範疇)・・・

総合的につき合わされた貸借対照表・・・可能性は異論があるだけでなく、社会主義者自身がそれに疑いをもっている。カウッキーやその他は資本主義的価値付けとの連結において(auf Anschluss an cap. Wertungen) 価値を設けている。だがそれは実務的には重要であっても、問題を解くものではない。・・・

18 社会主義は、資本主義におけると同様に、産出の最大に赴く。ただし資本主義が正にそこまで赴くのは静態の諸仮定の下においてである、ということが本質的な点である！・・・経済的合理性の図式なるものは常に一個の最大を与える、ということよりも以上に理論が意味するところは何もないこととなる恐れがある。・・・

エゼキールに至る。・・・相対的シェアについてのノートブック・・・生産物提供の価値と一致する外部賃金の価値・・・直接的に与えられる比率(ratio)・・・生産関数の理論・・・

19 最大化条件は常に——それは条件だけのことではあるが——システムが能率のため常に試みるところのものである。・・・しかし各瞬間での最大化問題は、完全に第二次的な問題である。・・・我々はほとんどの些末な条件だけを明らかにしている(だからといって所与の量に即しても他に多くのことがあるだろう)、というのは、別な事柄が問題なのだから。・・・所与の量のパンを配分するとせよ、その場合、所与の生産構造が採用されているのと同じである。・・・全問題は長期間問題に転じる。

20 産業活動の諸条件がカルテルやトラストといった資本主義からはみ出してくるということが重要である。・・・ a)平等性は正義の、b)経済的なものは、より大なる効用水準の考慮の下においてのみ招来される。・・・ウェブの低落についての著作や他の著作、イギリス共和制に対する計画はどこで。

2 1 (最大化条件を満たすような解の)明確な一般化ははかり知れない困難を示すものであろうか? そしてもし我々が、経済的決定とは方程式群を解くことの問題ではなかったか、という段階にひとたび至るならば、その場合、社会主義の方程式群の解は——資本主義での多くの込み入りすぎた時間導関数、ラグの関係等々は主として寡占状態から来たるものであるから——全面的ではないにせよ、そうした困難を免れているだけに、技術的には、はるかに楽しい作業となるであろう、との疑いをもってよいのではないか。・・・

真実を言うと私は不運であったと思われる。私がそれを告白するべきであったその前に、私は社会主義システムの論理がどのように設問に召喚されるかを理解することは困難であることを見出していた。そして今、類似の告白をしなければならぬ訳でもない。資本主義のシステムは果たして方程式群を解くことによって作動していたのか? この点が極めて重要である。調整や再配置における勘(かん)による方法(**the method of feeling by adjustments and rearrangements**)が商業社会で採用されている方法であること——これが生産問題を解く合理的な解への道であるのかどうかは明瞭ではない。

2 2 選抜(淘汰)と配分・・・最大? 競争・・・私はそうは言っても読者が見極めるだろうと確信している。・・・重要度が些細であったとしても、無意味ではないということならば、完全競争は二重の意味をもつ。・・・適正は、選抜(淘汰)の一つの方法である。・・・このようにして比較においても再度、最大が・・・それは些細なことといったこと。・・・他の全てのことは第二次的。・・・完全競争についての改良、a)原価計算、b)所得の限界効用。

2 3 価格の性質と所得の性質・・・社会主義社会における地代・・・移転のコスト・・・重要性と配分の諸指標・・・労働コストだけではない。・・・諸利潤は他の支払いを満たす——各々の所得で加重せられた搾取の諸

指標。・・・各産業は受け取るものを支払うという含意——そうは言ってもそれがそうである必要はない。・・・平均費用原則の採用の中に・・・最適状態の性質、限界効用の働きの故にそれ(総効用)は当然大となる、と言われるのならば、それは疑わしい。・・・ここそこでウェルフェアについて・・・

「技術」についても・・・今や、豊かな遺産、そしてとりわけ、あり得たとしても静態的な問題である。・・・しかし「何故に、それにもかかわらず、進歩が重要なのか」については後に検討するであろう。・・・指導と方法がつけられなければならない。・・・「飽和的潤沢は達成されるや」(“Saturation erreicht sein?”)・・・この言葉は尚言及されない。

24 与えられた所得、自由な選択、要素は与えられている。・・・需要は与えられている、そしてそれ故に価格は $p_m = \varepsilon$ 、数量が与えられたとして。・・・それはあたかも所与の生産関数に即して一つの結合のみが得られ、しかもこれは内生的にのみもたらされ得るものであろう。・・・多数決が決して最大をもたらさないであろうことは、明白である。・・・更に生産方法と同様に財の種類も数量も決まる(所与の生産関数)、要素の価格が与えられるならば(競争があるならば)、要素の価値は $\pi q = \varepsilon$ よりも大となることが決まる。・・・生産費、意味?・・・その価格はそれぞれ手持たれている要素について質と均等になるところの価格である。限界生産性(Grenzproduktivitäten)との関連でいうと、「収益」(revenue)一単位当たりの要素価格は等しいということ、そしてこれらの諸価格は調整され得るということである。・・・故にどこでも価格=限界生産費が形成され、且つ、供給=需要である。・・・多くの策定配列のうちの一つのみが上記の配列である。・・・他の図式・・・クルーソーの経済・・・サン・シモン・・・

25 我々の行論を次の段階で役立たせる目的から、またこれらの疑問を解き、しかも理念を確立するために(pour fixer les idées) 我々の社会主義国家——しばらくの間それを一国とさせておく——の経済的世話がエンリコ・バローネ生産担当相に信託されていると仮定することが便宜である

だろう。言ってみれば大蔵大臣が予算案を下院にはかるのと多分に同じやり方で、バローネ大臣はその経済計画を議会に——必ず——提出する。それは実際上一個の予算——その外側では「生活を得る」為の何の努力も残されていないであろうような包括的予算——となるであろう。バローネと他の人達——F・テイラーは真に必要な友である——は社会主義の実現を妨害しようとする異教徒によって持ち込まれた二つの不可能性の最初のを成功裡に論破した。

最大化条件と更に進んで多くのことが明らかである。・・・全てのコストは価格に等しい、価値の諸指数・・・だが部分的である場合にのみ・・・「強制される」場合にはトラスト・・・

1) それがさほどにはなされていないことは確かである。それに他の仕方であったならば、もっと良く成され得たかも知れない！ ということ。(だがそれは民主主義的実務であったかも知れないが、民主主義的理想ではなかったろう。)そして実際に合理的根拠からのものである。だがそこで加えて二つの事柄がある。・・・

2) 不作為については合理的でないと言及(実務的言及に即して)・・・

3) 社会主義者達はその含蓄がブルジョワ的だと腹をたてる。更に多くの社会主義者達は自由と民主主義との関連でぶざまに負けてきた(ランゲ)、更に人々は節約を欲しないので腐敗があり得るということをみていない。貯蓄が過小となる。・・・貨幣といったもの、それは何事をもなさないが、実在性が言い張られているのは真実である。・・・分配について、これもまた他とさほどに異なったものではない。・・・

4) 選抜(淘汰)はここでか、もっと後で・・・性情の変更・・・信じられない受胎についての如く泣く、それについて笑うほど愚かなことはない。それがどれほどに宗教的なものであるかを告げるのみ。確かに解放は資本家達にも・・・

5) 新しい性情が必要か？ (否 それは実務であるだろう)・・・非常に高い道徳的水準が？ 「どこで作動するのか」・・・成果に対し知識人は？ それは結果の良さに関連するのみ。・・・

そしてそこでランゲ、目的設定といったこと・・・異論は様々な好みの方ではない、尚また・・・どれ程に多くの生きる喜びが潰されることか！そこで規律と規律賛歌の必要性が。・・・どこで、恐らく官僚制に即して、政治的成果の劣等性・・・文化論——それによろしいとして、我々は全く合理的に「怠惰の中に良き優しさ」を保つことになる。我々にはできない

のでは?・・・完全に成熟が示されている場合は、その時は何の説明も不要であり、そのように「解放」などを語るのは馬鹿げたこととなる。・・・しかし、それに対して絶対的理想が・・・それは選択の根拠として提供されるものではなく、そこには今なされるべきことは何かに対して選択の余地のないものである。・・・

資本主義の文化についてはどこで、病患、芸術といったこと? そしてそれはほとんどが大衆のためにのみ作り出されてきているということ。

・・・

26 各生産単位が「ある価格」(a “price”) ——それは限界費用に等しいか、または、ともかく比例している——で「売る」であろうところのものを生産すべきである、ということをこのルールは示してる。・・・だがここには混同の危険がある。それは限界費用が、時間の与えられた経過に関連させられた場合においてのみ、一定の数量的意味を担うという事実から起こってくる。一週間以内に鉄鋼追加一トンを生産するのに、あるいは列車の追加一本を走らせるのに、かかってくる原価の計算はその期間内に支払う全ての要素のコストを計上したりはしない。計上するのは一トンまたは一列車を追加するため蒙るべきコストについてだけである。一週間だけの問題なら原材料費以外の全てが實際上オーバーヘッドである。俸給や大部分の賃金すらもがそうである。そしてその価格が総費用のその部分をカバーしないという理由で注文が拒否されるいわれはない。もし、一か月、あるいはもっと長い——例えば一か年——観点からこれを問題にするならば、ずっと多くのコスト要素がオーバーヘッド範疇から離れて限界費用に算入され、生産過程を調整することになる。・・・限界費用は理論的文献の中では短期的視野と結合している。

何等かの突然の変化に直面して、社会主義的管理単位の経営者は今や歴史とは無関係な事柄となったコスト部分を——換言すれば、問題とする期間の長さとの関連で規定されたオーバーヘッドに帰属するすべてのコスト項目を——無視することになるろう。・・・しかし、このことは私が述べようと欲している論理原則をどちらかと言えば曖昧にする。すなわち、この論理原則は——人生においては事物が変わることなく期待から離れていくという事実を負うものであるから——生産単位が計画されるときか、現存している単位に広い範囲にわたる再編成が図られる時においてのみ、

実践的措置の中に見出されることができ。その時はオーバーヘッドコストはなく、減価償却費も含めて全てが主要・限界費用に入れられる。・・・社会主義経済の純粹論理を仕上げていく場合、言葉のこの意味を保っていくことが重要である。・・・入念に叙述すれば次のようになる。考慮されている場合では、課せられる限界費用は——事実上——課せられる平均費用と等しくなるだろう、あるいはそれらが実際に読み取られるであろうように、限界平均費用(marginal average cost)は追加的增加部分が生産せられた時、発生するであろうその平均費用に等しい、と。高度に重要な論文の中で、H. ホテリング教授は、一般的厚生を最大化にせんがためには、あらゆる諸価格が限界費用だけをカバーするという風に置かれるべきであり、そのオーバーヘッド部分は、言ってみれば、課税によって配慮されるべきである、という命題を以て彼の権威の重さを与えてきた。しかし疑問がある。どんな時間幅当たりの限界費用なのか。そして我々はこれに答えたけれども、尚、次の結論から逃げることはできない。見込み得る諸生産量と諸価格を計算する上で——これらの諸産出量や諸価格はその投資が行われた場合に見込みの中に入っている筈のものなのであるが——見込み得るべきオーバーヘッドコストを原理的に無視している社会は合理的な資源配分をなさないであろうこと、同じことであるが、欲望充足の可能な最大を達成することに失敗するであろうことである。

27 そうした構図を見て我々にショックだった最初の事柄は、資本主義過程についての構図との類似性である。今のところこのことに感情を害するような社会主義者はいないし、このことが自分にとって都合な何事かを立証してくれると希望するような、どんなアンチ社会主義者もない。実際次のような結論に至る。経済的結果における諸々の差は——バランスにおいて——両陣営が信奉していると公言しているほどには大でない。この結論は他の分析によるもので、単なる概念的な類似性によるものではない。コスト計算は一般的合理性の派生物であり、価格形成もこの図式で演じているものである限り同様である。貨幣は実体の貨幣ではなく、我々はそのタイトルを拒絶し得るように浄化されたものである。——次のような抗弁は初歩的な誤りである。将来に備えられる、労働によってのみ生起する、それに自己犠牲——最も不出来な田園詩は全く論破される——。本質的な差、分配は別な何物かであり、任意に理想的なものへと制御し得る。指導者やプラントや生産形態の選抜(淘汰)は別である。所得は何か別のよ

うに呼ばれる。このこととその構図自体は十分に詳述されなければならない。

第二の事柄は、この構図が特殊的に特殊なケース——自由にして完全な競争——と相性が良いということ。完全競争は社会主義者達と共にある種の聖油が塗られている筈であるから、多くの社会主義者達は、社会主義が遠く発展した将来に完全競争を実現する唯一の道である、と告げるほどに突き進む。・・・大企業の関連役職者の粛清・・・競争的企業者と大企業——何故にこの種の行論に人気があるのか。不平等に対する合理的な行論——平均以上の能力の育成の必要性・・・他の競争による指導者やプラントの選抜(淘汰)には触れられない。・・・

第三の事柄は、この構図が多くの可能な諸形態の中の一つに過ぎないということ、従って、必然的に「最良のもの」ではなく、しかもそうであり得る、ということである。このことはとりわけいくらかの人達(例えばランゲ)に——最大化の公理や他の諸根拠から——委託するのが良いかのように見える諸論点の中に正確に見られることができる。例示的に次の如きを受け入れる。議会による裁決は配分原則だけとし、そのフォーミュラが同志の需要に応じて如何に行動するかを律するとする、消費財の内容や装置との関連でどれだけの量をとったことは、同志達に委ねられる。正にその上に最大化が基礎付けられることになる。議会の裁決ではその最大がどれほどに少なかったかが告げられるということ。・・・誰が如何様に決定するのか——それは官僚機構であり、それを構成する社会主義が！である。・・・何を生産すべきかの決定が議会の議決という方法でなされると、予算の細目のかたちで裁決——または大臣への委任がなされるが、そこでこの場合の多数性はどのように機能するのかはもっともな疑問である。だが高位の知識人のある者が多大の影響力を持つことができ、更には順応に配慮を欠くとなると失脚させられるのはどんな人々かを予見できるとなると、そこで彼は単純に人民のため、及び、民族や国家の将来のため何が良いか——牛乳・衛生・住宅・禁止・スポーツ・文学など——を裁決することができる。それは合理主義者を変える。統治と決定の中樞をだけではない。・・・時間超越的の最大と瞬間的の最大は尚いつも民主主義とは別であるかも知れない——民主主義と個人的自由が混同されない謂れはない——。ランゲに従って、節約が甚だ不十分であるかも知れない、という点がとりわけ重要である。前もって見通され得るゴスプラン。・・・

何故に貴君は社会主義的経済計算につき煩わされるべきではないのか？・・・

28 これらの、および類似のケースの重要性・・・そうした重要性がどんなものであれ、社会主義的経営は——それら(最大を目指した相互に矛盾と不整合のない解としての計画を得ること)と取り組むことに十分な適応を果たすことで——非常に有利な位置にあるということが明白である。・・・十分な適応に達することは、商業的経営の場合にも達せられることがはっきりしていたとしても、それよりも煩雑な道程(*détour*)なしに——より確実に、より効果的に——なされ得るであろう。更にその上、その経済の持つ補完的部門の反作用についての不確実性から発生する諸困難の全てが著しく——言ってみれば最小限に——切り下げられるであろう。

これが社会主義経済の「実行可能性」に対する最初の障害(計算可能性)と取り組んだとき、私が当該経済システムの最適状態を規定する諸方程式を解くことは、社会主義体制の下では一層愉快で、しかも、希望に満ちた事柄となるであろう、と述べたその理由である。と言うのは一見してこの困難なるものを考量しようと試みるや否やすぐさま、第一次導関数、タイムラグ関係、「世襲」の諸現象など、そうした厄介な事柄の大部分がこれらの方程式群の中に侵入してきて、以てその単純な古典学派的諸系列を完全に破壊するからである。

不完全競争の諸条件の下においては、完全適応の一意の状態の正にその存在が——純粹理論の中の最も純粹なものの枠内ですら——しばしば極めて疑わしいものとなる。例えば、与件の各組に対して合理性の判定基準を充たすような「生産され、消費される生産物の諸価格と諸数量の一意に決定された体系」が存在するには、二つの想定が必要であり、この想定とあまり重要でない例外を除くと、その状況の何等かの変動に対する反作用がそのシステムを再構築していく過程で遅延や損失を引き起こすことがしばしばであり、いくつかのケースではシステムの構築そのものが結局のところ達せられないことすらあり得る。反作用そのものが遅れさせられる場合と同様、急き立てられる場合がある。もし全ての生産者達が価格における上昇を一斉に達成するならば、それは供給される数量における増大を

もたらずであろうし、更にその供給量の増加は価格がもはや適応を図り得る水準以下に迄低落するほどのものであり、更にまたこれに対する反作用は再びその上に大きな距離を設けるような様々な結果を招くであろう。もし生産者達が、例えば反作用が彼等の工場内で時間多用型の再配置を含むという理由から一斉に反応しないのであれば、直面する諸状況は完全な適応に替わるような他のある方法を導く、というやり方で反作用がなされることに、帰するところ、ならざるを得ないであろう。・・・(社会主義経済の下での社会主義的経営の計画では、このような複綜性や不確実性は免れている。・・・編者)

29 私は走り書きした必要性についての私の覚書に、何の誤りも犯さなかったことに注意せよ。(投資公準が)書かれる必要のないことは尚正しい。・・・それは出来る限り[3]に向けられている——現代資本主義のホテルにあるよりも、もっと幅広いものが観察されよう。・・・資本主義は今も世界的前進を成している——その最大限の給付(Leistung)がなされている。彼等は前進を伴って競争する！・・・創造的破壊(creative destruction)はもはやなく、彼等是不競争でもある。・・・その一方で、私の主張が将来のものにも通用するのか、または今日のものに通用するだけなのか、については見解が様々であることはすでに e)において指摘されている。・・・

(1) 自然諸資源のアメリカにおける浪費(Squandering)

(2) このようにして、大規模資本は資本保持(Kapitalerhaltung)を決定的瞬間に向けてはかる。そして生活の変化についての一傾向がつけられる。

a) その決着は事実がつけるべきである。・・・石が水中で浮上しようとする傾向をもつような、相互に反発し合う体系をもった諸理論について。・・・

b) 事前的視点と秩序だった前進・・・ここでは速すぎるか、また、遅すぎるかがある。・・・

そして概括していうなれば、我々の理論は「社会的利益に逆らっても、出来るだけ遅からしめる？」とするものである。

c) 社会主義は——一層の諸改良が期待されるならば——諸計画を推進するであろう。

d) 資本が償還されている場合か、あるいは、平均トータルコス

ト>平均プライムコストと現存プラントにおいてなっている場合においてのみ、私的諸企業は(新プラントの)導入を図るだろう。・・・

すでに投下された資本の価値への配慮なしにどんな改良も取り入れられるものは取り入れる、そしてそのようにして「資本の価値の保全とは言えない結果に飛躍する」、ということは正しいことなのか？

コスト漸減的生産をもってする競争、それがあつたのでは！・・・ロビンスは道路輸送について述べている、「賃料制」の自動車は資本の十分な価値を更新しなければならない、でないと(社債で生産がなされている場合であるが)倒産する。・・・このように、価格下落によって得られる社会的利得は、それだけ多いということにはならないのである。

e) どういう場合競争が入ってくるのか？ 旧式は削減しないだろうとなると、その結果、新式は安売りをすることを望み得ない。かくして問題は、新式がただ一種のレントを——今やトータルコストが少なくなり得たのであるからして——持つことができるだけか、ということになる。その場合、実際に、その場合尚、買収価格の不安がある。ランゲ自身は社会主義の中で、それらが共に働くとしている。・・・このようにして、平均トータルコスト<平均プライム費用がもたらされたとなると、旧式の資本をもつ——そして価格引き下げをもよく為し得る——企業群にとっては、その場合、そのままが利用可能なだけである、当面そうでないとしても、その場合は償還(但しそれは恐らく急き立てられよう?)がある。しかしなおも何等かの改良が導かれることは正当であり得ない——さもないと一セントの節約が百万の支出を、公共に対しある利得を作り出す限りにおいて、正当なものとなすだろう。しかもそれは尚、独占的企業者自身が基礎付けるを得る一つのコスト的利益ということになろう——諸利益は恐らくは手渡されはしない(ランゲ、p 129、改定版IV)・・・そして資本保全への傾向は、資本の所有が企業者機能と分離されている場合には、「一層力強くさえある」であろう。

私は理解することに失敗したことを告白する。問題はどんな革新かはそこに存在している概念そのものに依存する、ということである。論理的問題点を明らかにせんがために、我々は非現実的な諸仮定を設けている。次の如し。新プラントの寿命、乃至、年齢は固定されており、旧プラントにおけると同様固定されて同じ長さをもつ。更にまた、双方共に同じ産出の流れをもたらすという非現実的な仮定をおいている。更になお、これらの産出は古いプラントが見捨てられることになる筈だということに見合っ

たものになるという仮定をおいている。その場合、経常コストの流れの現在価値の額+(プラス)古いプラントの償却期間の末年における新プラントの現在価値の額>新しいプラントのコスト、ということになる。このようにして資産の現在価値が最大化される時、革新は導入されて、旧式のプラントはスクラップされることになる。かくして社会主義社会での導入ということになれば、新プラントは導入されるであろう。且つ正に資本価値への配慮が導入を必要とさせているのであり、旧式プラントの価値への顧慮は何の役割も果たしていない——入ってこない。だからこそ、——出来る限り同じ価格を承認しないとしても——資源の社会的浪費はあり得るのである。平均的創造を伴ったものの滲透の中にそうあるのでは。

(3) 貯蓄——リカードと同様に正しい。貨幣は人々の下に来るというよく知られている見解は尊敬に値する。・・・ここにおいても、「常に」そうであるという同じ飛躍がある。

30 経営はこの差を実現するものではなく、直接的に生産のその過程を——指令集第三項を今や満足させるであろうような、より大なる産出物を生産するという風に——再配置する。・・・

31 そうした潜在的諸「利潤」は、それらが諸資源の再配分の方向と範囲を——今や合理的になされ尽くされているというように——一意に決定する、という機能をなおも満たしている。更に社会主義社会におけるこの変更は、同時にそれら自身を示唆すると言ってよいような、あらゆる他の類似の変更と整合させられることができる。それは諸改良の秩序だった連続の中に適正化されるものであり、商業社会のようにそのシステムに——阻害要因として失業やあるいは不況の原因としてほとんど破局に近く作用して——侵害を加えることはないのである。機構についての純粹理論の領域の枠内では、この路線に沿った行論は「社会主義のための万歳三唱」を以て完結させられるほどに感銘的なものとなり得るであろう。・・・しかし、それは実務(行)(Praxis)ではない。・・・そしてこの他計画に属するものとしては——ランゲが見落としているものへの言及。・・・利潤の最大は利潤ゼロであることはどこで?・・・ビッグビジネスが競争

的産業に優越しているのと同様の優越性についての論理的可能性は？・・・ランゲの場合、資本の蓄積についての率を決定しようとする精力の浪費がある、それは社会主義社会で生きていくための価格であろう。・・・

32 その標準所得では消費者の需要よりも少ない「手、乃至は頭脳」をしか惹きつけられないような仕事に対しては標準以上の報酬が必要となる。この割増金(premia)は煩わしさにおける差と明瞭な関係を持ち、生来の、及び獲得せられた熟練にも或程度の関係をもつであろう。この点は資本家賃金(capitalist wages)も同じである。我々は実際にある種の労働市場をもつべきであろう。価格決定機構としては、それはどちらかと言えば非効率市場であろうが、最も民主主義的な——それほど民主主義的な市場はいくつかの市場でしかない——市場である。それは我々の社会主義システムの稼働において多くを変えるであろう。それは確定性に影響することはないであろうが、その一方でどんな場合にあっては諸資源配分の合理性を一層明瞭にもたらずであろう。

33 しかしながら、——何故に我々は——我々が結局において何等かの様々な例外を設けることに行きあたるのならば——包囲において停止を為すべきなのだろうか？ 何故に実際に我々は我々の構図をまとめて捨ててしまわないのか？・・・より高い人間性を作り出す？・・・実務上の最大のために、その故は彼が偏に合理的であるからか？・・・大豆と小豆・・・最大——理論が最大というから最大・・・

だがもし我々がゴスプラン——ソ連の国家計画委員会——を攻撃する根拠を求めているのであれば、何故にそこで停止するのであるか？ 真実であることを保証するものは何か、大豆か小豆かはどうでもよいが、全てがそのようにどちらでも良いのではない。・・・私はこのようにして最大の性質といったものを、並びにそれから進んでこのことの資本主義との家族的類似性を、とりわけ競争的資本主義とのそれを、並びに恐らくはそこから出てくる他の——費用といったものを示す——可能性をも、持つ。・・・

34 最大であることの長所——その場合、所得の平等という場での最大もまた、如何に知性が問われることでもあることか、この行論は諸属性を切り捨てている。・・・

35 何故に、では我々の青写真は一括して捨ててしまわれぬのか？何故に我々は包囲に関して条件付き例外のところで留まるのであるか？・・・もし我々がそのため一種のゴスプランを受け入れる用意があるのならば、何故に他の全ての事柄においてそうしないのか？・・・競争的商業社会とのアナロジーで言えば、最良の配分に基づいた「満足の最大」の故に、我々の社会主義体制は実現されるべきものであろうか？・・・徹底したビフテキ社会主義——より良いなされ方、青写真に付加されることのできる実際上の根拠のみにある、最大について、ビフテキ社会主義——だけが、それで満足させられることであろう。すでに指摘し尽くしたように、その他の如何なる方法も諸個人の実際の経済的諸要求を数え上げるところまでは進み得ないであろう。それは真実である。最大は表現の作法 (*façon de parler*) だけのものであり、与えられた諸条件の下で、特定の諸数量の最大化、乃至は、最小化することの中に存在する経済的合理性に対する別名である。時には一義的な解を得るが、時にはそのもとには何もない——それでも全くという訳ではないが——場合もある。一個の新しい約束と一個の新しい文化と一個の新しい人間性のヴィジョンをもち続けているどんな社会主義体制もが、その時点にある実際上の諸欲求を無視しなければならないことがあるのはほとんど確実であろう。例えば大豆と小豆の選択の如く、視野の中に他のどんな配慮もないといった場合にあっては、社会主義はそれらを学ぶかも知れない。牛乳とウィスキーの間の選択には差があるだろうし、徒食(*loafing*)と住宅供給の間の選択は更に一層の差があるだろう。もし人間の肉体を他の形態に造形するならば、欲求における徳目などはない。・・・しかしこれは他の問題である。・・・我々にとって疑問はこうである。

青写真を受け入れようとする我々の動機が論理的整合性を検証しようとするものである以上、社会主義はそれから外れたケースをも合理的であると為し得るや否やである。それ故に次の事を強調しておく必要がある。社会主義は尚一層に合理化され得る。——何となれば、それを評価し、そ

して誘引する者がそれを指揮する者なのであるから。ロビンソン・クルーソーの経済学が不当に見下されているのでは。・・・

36 職業選択の自由もまた、それにどれ程長時間働くかについても：単純に最悪というわけではない！・・・社会主義者は利潤に向かう権利をもつ(濫用！とは隔離)・・・後に独占の下で告げられるところと衝突しない。・・・だがそれについては比較論で時に応じて多くを。・・・

37 これらの行論はその説得力の多くを緩めている。・・・個別諸利潤の直接的充足を求めての闘争。・・・巨大なジョークを語るにおかれた準犯罪的教唆・・・

38 我々が考慮しているタイプの社会主義経済と完全競争タイプの商業的経済の間にある——しかも、かくもしばしば強調される——特殊な家族的類似性については何事が言えるか？ 社会主義思想の一学派に言及しているのであるが、その学派は完全競争を賛美し、次の根拠において社会主義を弁護する傾向がある。すなわち、現代社会にあつては、それにより完全競争の諸帰結が達成されることができ、更に改良され得る唯一の方式を提供する、それが社会主義であるとする。・・・一種の逃避主義の態度である。社会主義の陣営にあつてマルクス主義者の弱点を見抜き、更に流布されている批判の弱点をも見抜いている。更に実際上の重要性を産業分野ではもはやもっておらず、将来も再度もつことは決してあり得ないようなケースに対して、それを喜んで承認する。感じるどころが何であろうと承認されるべきであるとする、という態度であり、そういう御都合主義を喜んで包攝する力量ある経済学者達に訴えようとする。それ以上に次のような戦術がある。社会主義が自分がもともと欲していたものを達成するであろう、とオールドタイプのブルジョワ経済学をして語ることを得さしめるということ。・・・だがそうは言っても重要であり、それは社会的油で聖油を塗るものである。・・・

社会主義経済からの距離において商業主義経済の形態はもとより様々である。その中で展望されているタイプの社会主義によく似ているのはどれか、は力点が置かれるべくして選ばれた特定の諸特性に依存する。いくつかの巨大企業によって制御された資本主義経済が他の如何なる派生物よりも社会主義に似ている。同じ意味で完全に競争的な資本主義ほど似ていないものは何もない。その分配原則とその経営管理諸単位の指導者達の選出方法はこのことを示すのに十分なものがある。更に競争的資本主義のエッセンスはと言うと、その正に生活の息吹くところが個人的企業であるところであり、金銭的な責任体制であり、個人的な成功と失敗のロマンスであり、人的な成功と市場的な成功の同一化である。これらの全てが社会主義のどんなタイプのものも正確に排除しようとして意図してきているのである。・・・もっとも、そこには競争がある！のではなかったか。更に私がおの場合告げようとしていることは「生き生きしているという意味で自由な企業が自己責任の下で意味付けられる」ということ。・・・大企業におけるよりも多分に様々なものがある。・・・選別と配分・・・類似性、有害ではない、しかし、利益もまた少ない・・・

血の気のない概念であることも真実である——理論家の完全競争——。そこからは価格形成についての少しばかりの形式的な諸属性を除くと、全てのことが消失してしまっている。ところがこれらのことこそが、我々が生活類似の構図の中で見逃している類似点を実際に示すものなのである。その生産物及び生産手段の市場にあって完全競争下の企業は、無限小的要素であって、それ自身の行動によっては、いずれの諸価格にも影響を与えないのであり、諸価格はその行動の与件として受け入れられなければならないのである。もしこのことがあらゆる産業における、あらゆる企業の保持するところのものであるならば、諸価格と産出におけるこれらの諸量に対する反作用は、我々の社会主義経済のブループリントの中での産出物の諸価格と諸数量によって充たされるべきものであるような、ある諸条件を充たすものでもある、という帰結をもたらすであろう。特殊な家族的類似性とはこの点を指している。それに対し大きな重要度を付すには、一人の理論家を必要とする。・・・ランゲは、多すぎる嫌いはあるが、多くを純粹理論から裁定した。

付

1 競争的諸条件を回復させようとする試みについての、並びに社会主義者と槍で武装したブルジョワジーが、このように思いやりを以て共働しているような場において株主の役割を象徴するものについての、ノート。・・・もとより、小さな独占化は損失を仕事にまで強制する。

2 社会化された産業・・・活動を調和する・・・それが事実上、諸産業から育ったものであることを如何様に注意させるか。・・・企業者機能の機構化が(恐らくはⅡで)、社会主義のための歩行調整・・・ワシントンにおける計画・・・

3 新規の投資においてのみ問題・・・過程の中での利子率はゼロ——ゼロであるように努める？・・・この意味において、規定する。目標が与えられる場合には、更に一層に規定することになる。サン・シモン、他の社会主義者達——恣意的ではない、あるいはいまだに対象であるだけである——それを強調されなければならない、だがⅤでは扱わない。・・・

4 中央銀行の社会化——その場合、そのこと自体の中に巨大な経済があると信じられてよいであろう、すなわち、当然あり得べきものであったものの回復に有用であること。・・・更に節約のためにも、但し現実に非論理的である。・・・最初に判断があり、しかる後、跡を追うというのは、今日では非論理的である！

5 甚だ当然のことながら、準備の整っていない状態での社会化の指示による試みは、それを合理的ならしめる——問題を創出する！——ように映じる。・・・ドイツの社会化案は討議によって次のように要約される。・・・実行に干渉を伴わないように、極めて慎重に。

6 社会主義Ⅲ、・・・私は社会主義的調整を確実にしたか。・・・一歩一歩とそれに向けて・・・資本主義に対する負荷について・・・発展諸局面の特徴・・・そして(3)において次のことを見出す、すなわち、正しい諸決定は最適のものである、ということ。・・・ただし、これらの諸決定が最適の諸決定であるのは、場所的諸要素を最適に固定していることによる。・・・国家は創出しはしない。

(2) ブループリントによる社会主義の比較優越論

摘要

比較はメンタル・イメージを伴った諸実体の間でなされるべきである。社会主義のブループリントを、完全競争についての古典的タイプを具えた類似の(家族的類似性をもった)図式に対応するが如く、評価するべきではない。また更に進んで社会主義の下では文化的諸力が異常に解放されるといった評価も排されるべきである。比較するべきは、社会主義のブループリントと資本主義のそれを単純にそれぞれの経済的効果の立場からのみの一個のもっともらしかるべき諸可能性としての対比であろう。同じ人口と同じ生産諸手段それに同じ技術をもってするそれぞれの実質所得の流れの比較である。社会主義経済にあっては、何をどのように生産するかについての諸決定が完全に確定的である。こうした解は資本主義の構図に立脚して行われるよりは、一層の確実性をもって及び一層の迅速性をもって得られうる。比較が競争型の資本主義との比較であろうと、独占類似体の資本主義との比較であろうと同じである。更には経済的な問題においてであろうと、その改革に起因する問題(「経済進歩」の管理問題)においてであろうと同様に、然りである。決定された諸解が、それが人的エネルギーと物的諸資のすべてを節約するという根拠から、「合理的且つ最適的」であることに注意が払われるべきである。この一意決定性こそが、たとえそれが唯一つの支持してよい優越性であったとしても、社会主義経済の効率性は——諸潜在可能性から言って——大規模資本主義の経済的効率に優越しているところが、後者が19世紀中葉あたりのイギリスの標準的産業の資本主義に優越しているのと、正に同じだけ大なものがあるとなすのに全く十分であろう。無駄に関しても社会主義は多くの局面で免れている。一例をあげれば、失業の殆どは資本主義世界における技術上及び組織構造上の進歩に帰されるべき諸変動に根ざすものであるが、社会主義のブループリントではそもそも扱われるべき何物もないということである。そのように社会主義の経営は——可能性の問題としてではあるが——経済的ゴールに至るのにより少ないトラブル乃至は阻害ですませることができよう。・・・その他 (編者)

Ⅲ—(2)—1~49

ブループリントによる社会主義の比較優越論

1 社会主義の美学・・・途方もない文化的諸力を解放する、この比較の源泉・・・ランゲ・・・比較・・・文化的には不可能である。そして、どんな種類の人々を生み出すか、それが本質的である。・・・

1) 意味・・・一人当たりの生産(量)・・・見通されたこと、能率または相対的能率については何も言えない。・・・競争と独占の間の比較の困難性・・・及び様々な諸段階における諸関係・・・更にそれだけでなく、資本主義との比較は様々な異なる諸段階に属する場合には可能でない。・・・文化的といったものの比較、資本主義がもち来ったものは何かの検証が必要・・・人々が捨てないもの・・・ブルジョワジーの文化的業績・・・

2) 我々は資本主義を何事か——それが欠乏からのみ成り立っている何事か——のように見捨てることはできない。単純に盲目的な希望を託する(たとえ覚醒(Enttäuschung)が充分になされていないとしても)こともできない。・・・更にまた、能力と失業と構成の無駄も単純にはいかない。・・・尚、失業は資本主義が a) 自動的に水準を高め、b) 対策を用意している事柄である。・・・

3) だが確かに社会主義に対し持てる諸能力が過小評価されることはあり得る。あるいは節約の可能性についても。・・・(法律家3万人の良き頭脳、それは多すぎないか!)・・・様々な諸サービスが反社会的な利益に向けられているか、または生産過程の防衛に向けられているか、そういうことに無頓着である。・・・

帰結、そこには、社会主義は長期にはより少ない生産となる、というに等しい諸状況があるという可能性があるということ。ここでは恐らく所有制と官僚制についての行論が。・・・それはエッセイⅡ(資本主義は生き延びうるや)と衝突する。・・・金利生活者を欠く。・・・より大な収入に由来する蓄積(の喪失)は大衆にとっても一個の損失である、それは発展を促進するものであった。・・・有閑階級はみるべき節約をなさない——とりわけ今日では。・・・一個の社会の知識は、個々人の知識を変えることなしにでも変えることができる。(Intelligenz einer Gesellschaft kann

verändert werden ohne die Intelligenz eines einzelnen zu verändern.)

・・・ 選抜の方法は次のエッセイ(社会主義と民主主義)で・・・ 国家は創造しない。・・・

2 創出しない国家・・・他の機構、そして不幸なことに必要なことがあらゆる諸偏見の方向に逆進している。・・・諸々の偏り(deviations)を伴った諸困難・・・諸現場の闘争・・・

3 国家は創出しない・・・他方において、国家と自治体(Gemeinden)の生産者としての成功は、正しく疑問である。・・・

a) 顧客となることを強制することをもたらず態のものであるから、

b) ペイしないから・・・

戦争感情をかきたてる歪められた諸事実・・・

4 比較能率 案・・・

A それの意味のあることだとしても——比較はそれぞれの時代に対してなされる必要があり、「あり得たかも知れない場合」を論じたものの比較は笑うべきものである。・・・とりわけ、対決的配列(Auseinanderliegendes)や極めて特異な構成、個々の好みの方角(Geschmacksrichtungen)もまた比較にならない。・・・更に我々は先ず文化的契機を除外する。・・・それは決定的である。更に新人類が生み出されるであろう、といったことを受け入れない。・・・資本家と人間類型(Menschentyps)——それは劣化されてきている、更にアメリカでは低級なものが輸入されている。人は残念ながらサーバント個々人であり、彼女達の中の恋人ではない。・・・経済的なものの比較だけに限定する——かくして他にして等しい諸関係の下での一人当たりの平均的長期消費支出、といった副次的な事柄と取り組む。分配問題とはどうか？ 時期の問題は除外されるのか？——実際の選択の場合も、その時と同様に・・・

B 無駄(浪費)(waste)についてのナンセンスははねつける、過剰能力—

—消費者のための生産、独占。・・・

C だが大規模事業に対しては、——それらが競争的経済に対してもつ
のと同様の——、(優越の)事実上の可能性は認める。

D その場合、大きな諸利益が・・・

経済的成果は——その死活的な結果の故でなく——参画(*Beteiligung*)
として意味付けられる！・・・現代のラディカル・・・生き長らえている・・・
ベンサム主義者達・・・積極的に、a) いつも100年遡る(またしても
古い産業的事実を)、b) いつも集中し得る限り、本質的でないことに集
中する。・・・

ここに至る前から定量的に告げられ得ることは何もない、ことは明らかで
ある。与えられた可能性に即して、恐らく優越している。しかしこの可能
性の発展は一つの別の事柄である。しかし経済学者達がうまくやれば、尚
正しく算定されよう。・・・

5 第2エッセイで述べられたこと(第II部)を想起するならば、念入りに
「資本主義の現実」(*capitalist reality*)という語の二重の意味に我々は注
意を払わなければならない。理論的な諸々の青写真の間で比較を試みる時、
心に抱くであろうような資本主義経済の異なった諸類型の間で区別を設
するだけではなく——この種の最もラフな区分は競争的とビッグビジネ
ス的な資本主義の区分であろう——、青写真とは区別されたものとしての
諸現実態を語る場合においても、同様に今一つの、且つ遥かに困難な区別
を我々は引き出さなければならない。資本主義の過程は、常にそうであつ
たし、今日の資本主義でははっきりとそうでなければならないのであるが
——自らに対し、時には援護的であり、時には敵対的であるような、殆ど
の場合、ある点では援護的であり、他の点では敵対的であるような——政
治的諸活動によって強力に影響されてきている、という事実がある。援護
的であれ、敵対的であれ、あらゆる時点での政治的諸活動は、それを欠い
た時、その資本主義のエンジンが生み出したであろうものとは明らかに異
なったものであるような諸帰結を強いることになる。

6 政府補助金、課税、保護、規制等が諸々の凶解を提供する。今や非常

に多くの事例にみられるそれらの政治的諸活動は、論理的に言って、その資本主義過程によって創出された諸情況と社会的諸構成から育てられたものであるということ、並びにそれらの諸効果はその(資本主義のエンジンの)作動の一部であり、一片であるとみられるべきものであるということ、並びにそれを包含することに失敗するような、ある「現実」なるものを想定することは意味がないということ、が論じられてよいだろう。全ては結構。他のところで進められてきている特定の制限付けが付せられたとしても、私はこの行論に見出されてしかるべき欠点をもっていない。しかし、きちっとした診断のため付せられる、あらゆる名称の中には、もしそれらが独立した諸現象ではないと言われるのなら、我々は区別し得るよう残されてあるものを尚も区別しなければならないのである。その最も適切な比較は現在と似たある時期——そこでは資本主義に向けられる敵意ある諸態度や諸行動が資本主義の果たす機能の道程で数え上げられることが甚だ多く、また説明されることが甚だ多い——を以てなされる時、我々は生産の資本主義的エンジンを語っているのか、またはその歯車を語っているのか、を各事例の中で明確ならしめることは、我々の権利であり義務である。この意味において、他のようにはなし得ないのだが、我々は「自由」(free)と「拘束された」(fettered)資本主義を区別する。・・・

この側面はかくしてエッセイⅡ(資本主義は生き残りうるや)との関連におかれる。・・・次のように言うことは十分に悪い。・・・

- 1) 長持ちさせられた機械が良きアナロジーであるかも知れない。社会主義者は安易にそれに手をつける。最初にこわし、次いで嘆く。・・・
- 2) 恐らくそれは青写真と実業界から与えられた諸現実の間の区分だけのことであろう。・・・だが現実のものは尚、他のものを含むことも事実である。・・・

(5, 6は“fettered” capitalism の概念を定義的に示すものとして、極めて重要!!・・・編者)

7 比較・・・理想対理想間のものか、しからずば合理的な実体と合理的に期待された実体間のものか、(entweder zwischen ideal und ideal oder zwischen rationeller und rationeller expected reality)。・・・後者の場合には、傷ついた、またはダメージを受けているか、第3の場合であるか

ある。・・・比較においては資本主義に関連する諸罪悪もまた区別される。即ち資本主義が a) 自動的に除去する罪悪であるもの(フリーな資本主義下での失業) b) 除去のための手段とメンタリティを創出するもの(拘束された資本主義下での失業)。罪悪は例えば失業。・・・
資本主義はその敵対者に自由に且つ鷹揚に資金を提供する。・・・

能力はストックとして注入される(Ability runs in stocks.)——そしてこのことは、見逃されたことが重要であるという事実に対する見地から、見逃されざる必要がある。

8 拘束されたものとの比較か、拘束されていないものとの比較か。・・・後者の場合、正に社会主義そのものと同様に仮説的である。・・・どこで執行部は機能し、そして背を叩き、給料を出すのか。・・・

9 それにしても拘束された資本主義は現実に正しい対立点なのか？もし作動することが全く許されないのが当然ということになれば、社会主義の優越は自明のことであろうからである。・・・多分そうだから大規模産業資本主義は、[それは実際のところ、既に消滅したものでもある]と笑って告げることになろう。・・・

しかもそこでは、それほど拘束されているのならば、更にもはや道徳上も結びつくべきものが全くないのならば、当然のことながら優越は明らかだと告げることになろう。・・・

「このことを真直に受け取らせよ、聖職者が生活を得ることになる」。・・・ワイントラストは存続し得る、1820年、1870年、1900年にいつもそうであったように、——個人ビジネスが無しには済まされ得ないことの論証。・・・

社会主義は一個のビジネスである、そこで若者は自らの手柄(?)($\alpha\rho\eta\theta\tau\varepsilon\iota\alpha$)を少ない犠牲で得ようとするだろう。・・・

諸要素の搾取(開発)の重要性について・・・社会的労働者、または観察者の反社会性・・・

10 選抜(淘汰)過程における私的資産は他者の同意なしに行われる個人的決定の中に存する成功の塊である。・・・それは尚、自由競争に即している！！・・・

拘束され、そして傷ついた資本主義との比較・・・それはだが他方において、その社会政策的給付でもあるだけのことである。・・・

11 帰するところ、リストに能率を保持するという要素を付け加えるということに行き着く。・・・だがその前に、例えば、理想—現実・・・拘束された、拘束されざる・・・といった一連の論点がある。・・・
価値の創出というだけのことであれば、多分に単純なものである。定義は単純に、同等の人々、同等の諸手段、同等の技術的諸可能性でもって、実質所得のそうした一組の諸層(a such strata of real income)を——時の経過の下に——生産しようと欲していること。・・・
(分配と厚生はここで再度には取り上げない、社会主義の楽しさといったことも同様。)・・・

12 能率そのものの定義・・・より良き能率はより大なる能率である・・・
(3)または(4)で終わる——だが甚だ民主主義的とは見えない。・・・短期的視点となる危険もある、そしてそれを意図する場合にだけのことだが「国家は長期的視野を採り得る」ということ。・・・拘束され、且つ傷ついた資本主義は現実態ではないのか？・・・それに知識人の影響が纏いつている場合には確かにそうである。・・・だがその場合、傷つくことも重要な視点であるだろう。・・・
同じ人々と同じ技術・・・同じか、または・・・意味されているもの(他の方法もあり得る——確かに——)・・・
競争的システムの下でも良き生産はない。・・・寡占・・・比較は他の配分を可能にする。・・・

13 「比較」においても短期?・・・そしてどのように、と誰によって、の問題に属するのか?・・・民主主義の問題に属するのでは! 恐らくはそうは言っても、比較することは意味をもち得るか、という問題から始まる。・・・

それは「理論家」の祈りの中においてのみ可能である。・・・

国営企業(資本主義の下での・・・編者)は今のところ恐らく能率が低い、しかしそれは社会主義がもつであろうような頭脳をそこにもってはいないのである。・・・労働者の能率は多分に究め尽くされていない——全ては少数のグループに依存している。

14 衰退しつつある、しかも拘束された資本主義との比較——私と友人との間の見解の差——

標題1 尚、なされるべき多くのことがある——前稿3との整合に向けてもまた——、ここそこで我々のやり方を試みる。

標題2 秩序付けの範囲内で——但し我々は「後で検討するだろう」ということを強調している。・・・「資本主義が遅く社会主義に置換される」ということが、その重要性を「益々もっと少なくする」ようなことは何もない。・・・飽和化させられる、そして静態状態に接近し、しかもそこで自由競争についての章句がくる。・・・どのように社会的最大がブルジョワジーに対して抑制されるのだろうか、が全く明らかでない。・・・社会化の出現に対し有利な社会的諸条件があったとすれば、とはすでに述べている。・・・

エコノミストは官僚制に期待しよう、だが他方で国家は何物をも創出しないという。・・・カルテル官僚・・・現代の大企業の優越性はどこで・・・社会主義の他のものに対する利点(Vorteil)は資本主義で大規模が小規模を圧倒する利点よりも大である。・・・

小規模企業がより良い状態にあり得るとすれば、それが良き人物の魂の表出である場合(wenn der Ausdruck die Seele eines guten Manness)である。・・・

標題3 最初の6頁は恐らく書き替えられるべき・・・だが、メディチが征服したものがあつたとし、しかもこの企業群が再び独立した場合には、

それらの企業群がメディチの管理人によるよりは充分により良く管理されるであろうことは今日ありそうにない。・・・

II (資本主義は生き残りうるや・・・編者)における独占資本主義について。・・・というのは、このこともまた競争があり得るとすれば、それだけ厳しい能率が要求されるということ。・・・しかし、いつもそうであり得るわけではない。・・・競争はその構成からして、資本主義が資本家を生贄にする (compet. constitutionally incapable of accompl. those preposses, dasz Kapitalismus den Kapitalisten opfert——insult——) という——(無礼)——そうした先入観を完成する能力はない。・・・規制を伴ったものは独占資本主義に内在する諸傾向である。・・・

15 かくして「諸欠点」と社会主義の強力な長所・・・グッドアイデア・・・それは(2)と(3)を連結するものである。

I 技術的配列からの客観的長所・・・仕事が省かれるところが多い、即ち徴税と弁護士(私はどこかで以前このことを述べている)・・・消費者のための生産といったフレーズは排除する。・・・

有閑階級と高額所得者(所得5000乃至50,000ドルの問題)の除去はさして大きな利点ではない。・・・かくして無駄の下には現実に何かがある。独占権力、それにその場合の執行能力も。・・・

二種類の物足りなさ——ここでは恐らく、大きな文化的諸力の解放についてと失業の除去について——、更に不必要な支出——広告と弁護士——、及び、能うる限り利用し尽くさないことの除去も。・・・但し資本主義は明白な失敗があった場合のように脱ぎ棄てられない。・・・質的な重要性については、極めて様々な見解がもたれる。・・・多くの補償付きの長所・・・恐るべき見世物——第IIエッセイで恐らくたてられた諸問題の解決——・・・

更に私にとって考慮すべきことは、資本主義が何を自動的にもたらしていくのかではなくして、どこに手段と意志を準備していくかである。(nicht nur, was Kapitalismus automatisch hervorbringt, sondern wozu er Mittel und Wille bereitstellt.)・・・どのように文化において、事業だけでなく、並びに技術だけでなく、科学や医術においても・・・

II 異様な精神(Psychosis)、そしてそれは瓦解する——というのは、私は

巨大なる新しい力と巨大なる精神高揚の存在することを信じないものだから・・・恐らくは常に傷ついていくものとして・・・全てが益々指導的で支援的になっていくというナイーブな信仰はそれに対峙するものをもつ。・・・

官僚制的世界では極めて重要である勲章と肩書のあるところでは・・・帰するところ、私はここでは眼を離している選抜(淘汰)の故に信用してはいない。しかし肩書には冷笑している？・・・移行のところでは来たることがあり得る！・・・

しかし私にとって二つの尺度は一体何なのか。・・・それにしても社会主義における無駄の諸源泉は？・・・官僚制？・・・経験と実績が一体的であるかどうかにかかっている！・・・

「だがこれらは諸々の可能性である」と——それはどこに来るのか？ 押しなべて、最初の節の後に来るということになれば、あちこちでということ。・・・しかし対峙しているものに印象付けられた現実性であるのならば、それでよいと言われてよいのでは。・・・とりわけ資本主義がこれまでに創出したものであるだけでなく、それに向けて手段と意志を準備している場合には——すなわち失業——解決されない場合は別な何かがある。・・・それも一つの可能性・・・

16 改革はあらゆる諸条件を充たすための上昇である。そして知識人達は現在あるものと同じ諸利益をもつであろう——この事実に対し、且つ知識人達に対しどういう重要性が与えられるかによる。・・・「都合の良いケース」ははっきりとした優越性に基づくものでない、「邪魔せられた」とか「搾取せられた」とかいった「自由な途方もない文化的諸力の設定」に基づいてのみ言われる。・・・化学工業の計画・・・

17 1) 帰するところ、今や比較であるものは何か。・・・自由なる資本主義・・・競争・・・ここに最大限の優越があるとする・・・それが失われた。・・・拘束され、しかも課税で縛られた資本主義・・・全ての三つの場合が扱われなければならない。・・・スコットランドと東プロシヤは決して扱われない。・・・生産機構の経済的立場からの非合理は——人々

に対して配慮がなされることができない点にあるのではなくして——これらの国々がそれぞれ非合理的数百万人を抱えているところにある。・

・無駄をもたらす計画についてはもはや・・・

2) 更に、可能性と可能性を利用し尽くすこと、の間にある区別が(die Unterscheidung zwischen Möglichkeit und Ausnützen der Möglichkeit)・・・ここでか、あとで・・・

3) 比較論は十分に他のように構成されてよい。・・・相対的能率に対する私の定義——遅かれ早かれ——に基づくことになる、ムーア(Moorés)のような概念となる?・・・その場合強力なケースが・・・そこでは諸々の質と論点が注意されるべきである。

18 自由にして巨大な文化的諸力の設定・・・

第2、我々が社会主義の行動主義者的問題(the behaviorist problem of socialism)と名付けてよいものについての我々の議論から

第3、事物がより明らかになる、一層の規律・・・

どこで失業を・・・一個の非能率としてのみのようにみられる・・・

衝撃的なものが多大にある。・・・それをもって、事物がもっと明らかになるところが大で、だからして集団行動の規律が(部分的には脱落することも)、更には他の規律の手段をも確かに、というところから等しく始まる(農業者にはそうでない)・・・

19 不確かではあるが、全てが排除されるわけではない、無駄の諸源泉。・・・無駄・・・行き過ぎの比較(展示のそれ)・・・但し不安と寡占は・・・資本主義との比較、a) 現実性をもった比較(Wirklichkeitsvergleich)ではない、(社会主義の)理想を以てする傷ついた(資本主義の)現実との比較である、b) 資本主義の内部にも改良はある——失業、その対策の手段の用意・・・保障をする事業支配人達による大規模事業体の危機・・・結びつける(hitch)よりも論理を思い浮かべることの方が容易である。・・・誰がどのように?・・・充分性に至る時期・・・能率の定義・・・諸条件の選択・・・どのようにと誰によって・・・悪しき事業・・・満足と不満足との排除・・・設問一般が意味をもつや?・・・理想—現実・・・
社会主義諸国が生産すべきものに対する諸手段の通路は、我々が所得を低

位水準に平等化する場合には、極めて大なものとなり得る。・・・但しこの増大は純利得(Reingewinn)ではあり得ない、そのための準備がなされるが故に。・・・

20 会社についてのアダム・スミス・・・そのように社会主義についての現代の著作家(ランゲのこと?・・・編者)・・・言わずもがなのこと・・・

2) 独占の評点簿には何の利点もが数え上げられていない。大規模事業体との比較について、もっと正確な原価計算が?!・・・

5) 失業・・・無慈悲且つ無条件の失業に根差している限りにおいてのみ。・・・部分的には資本主義性のものでなく、仕事に伴った妨害によるものも。・・・

4) 貯蓄と蓄積の誤った管理・・・

そして今や尚 6) 有閑階級の除去と更に一層の所得の平等・・・いずれにせよ弁護士の除去がある。・・・社会主義の下ではなくされる筈であるものを比較せよ。・・・それをなさないことが反社会的であるような価値豊かな力の合理的育成・・・

3) 資本価値の保全

最初にあげられるもの 1) 「他の無駄」、他の過大能力・・・過大能力の下での急速な発展については、社会主義の下でも恐らくは容易には避け得ないだろう。・・・

[消費のための生産、利潤は一種の手数料(a toll)である]。・・・我々にはこうした行論を用いない——消費者はそれ程良くには処遇されない!・・・ランゲの説、資本主義は資本価値を制限によって防衛する、そしてその場合、投資機会を破壊する、というもの。・・・しかし得点のバランスはそれ程大ではないのでは? 否、可能性はより大なる優越性のあり得ることを示している、と言われるのがベターである。しかしそこで次のように言われるべきであろう。全てはどのように機能するかに帰することになる、ということ以外は全く何事をも分かっていない、と。・・・我々が、社会主義は理想的に機能するであろう、と信じるのならば、我々は全て社会主義者であるだろう。・・・更にそこではポピュラーな行論、私的所有制や官僚制が。・・・

長期的な視野幅に由来する動機(Motiv aus Spanne long viewed)はあらゆる

る国々の人々——その義務を——愚かなる政治家によって邪魔されるにも拘わらず——結局において果たそうとする人々——にとって偉大なる讃嘆をもつ。・・・堅実な雇い主は将来のために働く。・・・

更にここにおいて正にその場合、それは理念と現実の、及び理想と現実の、比較についてということになる。・・・よく知られている誤りは些末なものであり、それを論破することに困惑させられる。しかし真実をポピュラーな信条の中で強調することは困惑の度がより少ないという訳ではない。・・・理論的平面での拘束された資本主義との比較は多分に変革についてのものである。・・・

2 1 改善され得よう——我々がシステムを扱うのに我々がそうしているようになすのならば。・・・そのように多くの事柄がある、しかし今のところ、現実に産出を本当とは思えない程に大ならしめるので、という丁度その点だけでも。・・・

需要が弾力的であれば、独占の重要性は大なものではない。しかし非弾力的である場合にあっては、事柄は甚だ重要ということにはなりえない。・・・需要表のシフト・・・殆どのが競争と二者択一的なものとしてあったかの如く扱われている。・・・競争はさほど重要ではない！・・・識別・・・統治の大きさにおいて二つがあるのでは。・・・蓄積・・・誰が一個の社会主義国家をファイナンスすることになるのだろうか、がわきまえられること。更に費用価格においてはより安くなるであろう、及びより多くの生産がなされるであろう、といったことは定かでない。

2 2 社会主義の理論と実際・・・大規模産業のように巨大経済と結合した目的(end mit huge economy)が優れている、そしてアダム・スミス・・・今や真実であるところのものは自己利益である、それに官僚制といったこと。・・・狭く且つよく定義された諸目的の重要性——利潤・・・各人は生産者として搾取(開発)され、消費者として資する。・・・加えて独占、またしても良く管理されているといったことに根差している場合には、高利益はある意味では独占化の事情に根差している——その意味でそれに非難が向けられるのは全く当たらない。・・・

法律家達は彼等の所得——以前他のところで述べた——ではなく、彼等の能力の浪費が問題なのである。・・・ワルグムンド事件についての小説・・・

23 会社についてのアダム・スミス・・・社会主義・・・(除去されるもの)・・・

1) 法律家や他の活動等、所有権を防衛せんがための無駄(浪費)——企業の国家行政との闘争(Kampf der Unternehmung mit Staatsverwaltung)の中に向けて陰を拡げていき、そのようにしてそれが他方において私的システムの道徳的破壊に至る・・・

2) 半狂乱の投資と新しい事物と資本の摩耗・・・イギリスの戦後の実績(戦後・・・第一次大戦後 編者)と1932年のアメリカの実績は自慢の諸原因と共存しているので数え上げられない。

24 それ故に、社会主義経済が資本主義の大規模事業より優越しているものであることは——資本主義にあって大規模事業体の経済が中規模産業の経済、我々が、ラフにか、または悪く、過ぎ去りし時代の多かれ少なかれ完全競争と結び付けようとする習慣の中で用いているようなタイプの経済、に対して優越するものであることが論証されたのと同じように——いつの日か論証されることになるだろう、という可能性を疑うことは不可能である。このケースは、一見して(prima facie)、我々が問題の社会心理的帰結を考慮に入れる場合にも、弱められるものでなく強められるということである。・・・

慣用的な意味での無駄ではないとしても、尚、他の分野に無駄があるのである。・・・寡占体制のもつ無駄と反社会的な能率、私はこれをどこかで集中審議するべきであろう。・・・

単純に所与の量のパンの配分を考察する必要だけでなく、現存する装置を運転することも必要だ、ということはどこで。・・・このように尚も何事かが告げられてよいであろうもの、例えば戦争・・・更に能率の定義に即して公正ということとは？・・・戦争と有閑階級の切除はどこで？・・・

25 そして適切な規模を以てする競争・・・比較に際してはより良くなし遂げられる。・・・ビッグビジネス同様にそれだけは優越していることの可能性・・・

競争、所有、動機・・・自己責任・・・誰が官僚制を知っているのか——大市場が如何に良いか。・・・交易と貿易(T and T)・・・

国家は諸動機を創出する可能性をもたない(State have not Möglichkeit, Motive zu schaffen.)。資本主義体制における国営企業・・・些細なことに対応した位置・・・8時間制は戻される・・・健康と競合することは少なくない。・・・それは資本主義の一つの源泉をもたらす。最も平和裡に、且つ非政治的に。・・・失敗に通じる——代表者の欠如・・・責任、動機付け、官僚制・・・国家は何物をも創造しない。・・・

26 必要に応じて各人が、はどこで。・・・可能性は最高の給付を引き出すことに結び付けられるといったことが重要である。・・・

ランゲと私の理論との区別・・・私は商品引換券(voucher)が今や無価値になることはないであろう、と論を進めることはあってはならない。・・・人々は地代を受け取る。・・・利子の支払いを排除するような実行案をもち出してなされるべきことは何もない。・・・所得は賃金的性質をもたない。・・・賃金は二通りに入り込む。・・・利潤——自動的に信用を指導する。・・・それ故に利子と共にあるもの・・・貨幣、価格、所得、需要に戻らなければならない。・・・労働の衰えている質・・・監督がない、職業選択がない。・・・

他の可能性 a) 我々の構図は他のように構築されてもよい、 b) 別な構図。・・・資本主義との家族的類似性、しかしそうすることによってのみ、私はラフではあるが競争的資本主義を完全に論破する。

27 国家は創造しない。・・・経済が統治に対して——並びに同様、政治(策)(Politik)に対しても——下位に位することは正になかったとする論点、自由は正に政治的装置が全てを支配するものではないということの内にある論点。・・・

階級から発進する、どれ程に良く、または悪くなされたかに依存する。・・・

発展段階は可能性に対する予備的設問よりももっと重要である。・・・私はそうしたことをプラトンに任せる。・・・可能性に対しては、そこで社会主義は大きく優越している、だが動機付けは選択(抜)次第である。・・・

課税によって推進力を失った拘束された資本主義について、・・・比較においては、トラスト化した資本主義あるいは競争的資本主義との——自由なる資本主義あるいは拘束された資本主義との——そもそもどんな資本主義との比較なのか。・・・田舎の広告——単に一個の技術問題であったのか、それとも個々の俳優達がタバコを吸っているのであって欲しかったのか、何れも望みうる。・・・読者を愛しはしないだろう——最良の成果(best performance)——プラトン・・・

28 かくして私はもう一度、移行上の諸困難の議論は——別に取り扱われるべく——先送りすることとし、更にそれらの諸困難が——それらが社会化後の数十年間に渡って様々な結果をもたらす、または歪めるであろうことはもとよりのこととしても——完全に克服されているという想定をおくことにする。こうした諸限定によって設せられた領域の中においても、そうは言っても、我々は尚、社会主義の実体が赴き易いところのものを描き出さなければならない。それは社会主義の理想化された構図ではない。我々が資本主義の実体との比較を設する時はいつでもそうでなければならない。もとより我々がある理論的なシェーマを他の理論的なシェーマと比較することは構わない。あるいは他に、何等かの種類の完璧に理想的な社会主義を完璧に理想的な資本主義と比較してもよい。しかし次のようになすのは無意味であり、不正直なトリックであると言えるだろう。即ち、我々が知っている——正当に検討された——あらゆるその染みと汚点と共に資本家の諸行動はもとのデザインに不忠実な以外の何物でも決してあり得ない、となす傍らで、社会主義者の諸行動はその理想の完全なもの以外の何物でも決してあり得ない、と想定するような比較は。しかしそうは言っても正確に殆どの人々がそういう比較をなしているのである。社会主義の優越性が先験的に(a priori)明白とするような社会主義者の信念は正にここに根差している、と告げても決して誇張ではない。

29 あるタイプの社会構成は他のタイプのものよりも、その理論的乃至は理想的構図から偏奇(逸脱)することが起こり易いであろうと論じることは可能である。しかしこのことは逸脱のそれぞれの種類に対して別々に論証されるものでなければならないであろう。更にそうした論証は博士論文の材料としての用途をもつものである限り、次の点が心に留め置かれるべきであろう。即ち、資本主義のケースにあっては、我々の先行する進化の過程たるや、その個々の歩みは進化の過程の本質的な諸特徴に関して決定的な証明とは必ずしもなるものではないということ。これを知ることが、その長い期間に渡る趨勢に眼が向けられる場合においてのみ可能なのである。

30 厳格な意味では、商業的社会と社会主義社会の文化的世界間の比較は可能でない。それは通常包括的な比較のどんな試みにも根差してはいない関説となるともとより別問題である。しかし世には容易にその比較を見出すような理想主義者達乃至は偏執者達がいる。彼等はいくつかの特殊な徴候の強調の上に、一方または他方を選好または排除するのであり、その特徴を他の全てを排除してしまうほどに評価するのであり、しかもその特徴を見せるよう社会主義に期待するのである。しかし、我々が——我々の理解が届く限りにおいて——一個の文明のもつあらゆる諸事実をそれと共に生み出され且つ死んでいく光の下に見極めようと決心するならば、我々はたちどころに全ての文化は固有のものとどんな他の文化とも共有するものをそれ自身の内にもつような一個の世界であることを明らかならしめる。このことはどんなケースにあってても比較の道程に立ちはだかるであろう。しかも我々のケースにあっては、我々が社会主義の文化的不確定性(**the cultural indeterminateness of socialism**)と呼ぶところのものがある。社会主義者の文化を商業的文化と比較する、あるいは一方を他方よりも選好する、といった者の場合ならば、そうする誰もが社会主義一般を比較乃至は選好するのではなくして、ただその中の自分のもてる個人的ブランドだけを取り上げているのである。我々が比較を経済的分野に閉じ込めようとする理由がこれである。私は個人的には経済的分野は第二次的な重要性しかもたない一つの局面であると信じている、にも拘わらずである。そうすることによって我々はこれらの諸困難から逃げられはしない。生産の社会主義的エンジンは多くの異なった方法で構築されるものであるから、我々はそれらをもっと・・・に還元したいのである。

3 1 上記のように示された諸理由の故に、私は商業的社会と社会主義社会の文化的世界を比較することには赴かない。しかし次のことは観察されるべきである。経済的分野に限定するとしても、我々をしてそうするように誘引する諸困難とは完全には縁切れにはなっていないということである。というのは社会主義は文化的に多くの顔をもち得るのとほとんど同じほどに経済的にも多くの顔をもちうるものであること、すなわち、社会主義のエンジンの経済的効率なるものは——その潜在的なメリットとデメリットが何であれ——良きにつけ悪きにつけ余地が如何であるかに大きく依存するであろうこと、並びにこの余地なるもの、帰するところ、誰がこれを運転するかに依存するであろう、ということである。この明白な論点はそれが通常なされているよりも一層に強調される価値がある。無邪気にもこの仕事が自分達の上に展開されるであろうことを決めたことととっている社会主義者の知識人達がある。彼等はこの仕事は余人ではなし得ないであろうと自分達のもてる諸能力についての確信を開陳するだけでなく、何にもまして最重要事はそのことだということが十分に論証され得ようと、これまた決めたこととしている。しかし我々はしばらくの間彼等の範例に追随していくことにする。いふなればあらゆる諸経験は、社会主義のエンジンのもてる諸々の可能性をフルに利用する(可能性を活動に転じる)ため要求されるであろうことを、ともかくも招来しつつある、という想定に基づいて我々は論を進めることにする。・・・次のことを想起されたい。上記の行論は要求せられる能力と経験の量が資本主義産業の経営に注ぎ込まれる能力と経験の総量よりも多くはないであろうということを確認しているのだ、と。

3 2 しかしながら、比較におけるエラーやトリックとは全く独立して、心的映像を以てする諸実体の比較(comparison of realities with mental images)に内在する危険は責任感というものを完全には欠落させてはいない人ならば誰の良心にも重く作用する筈なのである。

33 冷笑による及び思慮のない言い張りや否定による、そうした行論に對抗して身を守る必要のあるのは他の如何なるところよりも正しくここにおいてである。・・・冷笑と主張によって論を進めること——知識人達はここでは経済学の規律(学問領域)から解放されている。・・・社会主義者達は皮肉な笑いで以て多くの良識ある諸結論を避けることの技術を獲得してきている。・・・思慮のない言い張りや否定については次のことを観察するのが面白い。つまり議論が経済理論の規律的な力の下にある(学問領域に止る)限り、幾分か責任を開示することになるような両陣営の習熟した経済学者達が——彼等が自らの「正確なグラウンド」を離れるやすぐさま——その領域を自分達の想像上のものに移してしまう、ということである。このことは方法を切り捨てるということになる。・・・無責任性と行論の愚劣性の果している役割という点に関しては、友と敵双方の間に選択の余地はほとんどない。・・・必要だと、可能だと、論証せよ！・・・資質とプライバシーを欠く悪弊・・・極めて疑問・・・私はいつも自らを冷笑している。・・・

34 理想—現実の選択・・・現実にあるものと、そうであるとされなければならぬものとの比較——それは操作し得るものか。・・・しばしば過大視さえする、ボルシェヴィズムの判断にはツァーリズムの下ではどうであったかという設問だけがたてられる。・・・社会主義についてはここにも前もって封建的管理とのアナロジーが・・・それから所有制については他のどんな論点があるのか？・・・何が軍事的な結果であるのか？・・・両親だけが？・・・判断には社会主義それ自体が作用しているということを見逃す、という方向変化がここにあるのでは。・・・

35 純粹に経済的領域に限定されたとしても、比較の問題は——量的なものに限っても——解決をみることはないであろう。帰するところ、何等かの意味をもち得る比較である為には、比較されるべきそれに替わり得るものが共にはつきりと同じ時点に関係させられていなければならない。環境的諸条件——技術論的諸可能性、人々の数とタイプと嗜好、そういったものを含める——はそこでは同じであるということ、これらは比較能率の定義上少なくとも何等かの克服し難い困難とはならないであろう。我々は、

他に比して実質所得のより豊かな流れ(a richer stream of real income)を永続的に生み出すであろうような、そうした配置をより能率的である、と称すべきである。

36 この定義が明確な意味付けを担うのは、ただ偏に相互代替性を以て同じものであらねばならないであろうという意味で、単一の種類と質をもった消費財の束のケースに対しての場合のみである、ということは真実である。現実には所得の流れは消費財の無限のバラエティからなる。更に所得の資本主義的配分を正確に再生しているのでなければ、双方の相互代替性を以てという意味は異なった意味をもつものであろうから、どちらの所得の流れがより大だと呼ばれるかは、それほど明らかではない。しかし人々の嗜好が同じだと仮定する限り、この困難は次のような手法で処理されることができる。つまり殆どの経済学者が同意しているのであるが、富の消費の目的のため、多数の消費財のケースを単一の消費財のケースに縮約するという方法である。これにより我々の目的にとって本質的であろうことをも失うという危惧なしに後者の単純性を享受できるであろう。・・・社会主義が自動的にもたらすものであるところの資料目録の変化を究明すること・・・もし差が大きければ放棄する——だがその場合ケースが明らかとなる。

37 人々は社会主義社会の中で——択一的配置の中で何等かの与えられた状態におかれる——「裕福」(better off)であるのかないのか、我々の相対的能率の判断基準はこのことを必ずしも告げないこともまた真実である。というのは我々は全ての人々に、あるいはその中の特定のグループに、要求せられる相対的な努力の量については何も言っていないからである。もしも、例えばであるが、社会主義のケースにおいてより一層に長時間働くことになれば、そしてそのもとで呻いていることになったとしても、その時生産された総実質所得が永続的に商業社会のケースよりもより一層大でありさえすれば、我々は尚、社会主義のエンジンは一層効率的だと言わなければならないであろう。・・・それを好まない人は閑暇を消費財に見立てることでこの結論を回避することができる。・・・更に進んで、社会主義によって廃止かまたは削減がなされるであろう所得の受領者の

欲望に現在対応している消費財の生産は打ち切られるものだからして、・・・失業？ 社会主義者であることを喜ばせる。・・・そうしたことが段階に依存することは明らかである、更にどのように誰が運転するかにも依存することも少なからず明らかである。・・・生産能率の比較・・・それが厚生を担うことに疑いはない——しかし厚生(幸福)そのものではない。・・・社会主義に生きることの充足、それは読者に委ねる。・・・

38 私はコメント(最大化)のところでこれまで言っていなかったことをここで言うべきだろう。——資本主義の文化はこれを侮視されることができるが、侮視できない部分を意のままに切り取り、これを非資本主義的文化だと名付けることはできない！——ブルジョワジーの文化的成功・・・だが価値判断には決して赴かない。・・・信奉者にとって優越性と劣等性の比較は必ずしも必要でない、前もって格律(axiom)や道徳的確定性がある——今まで語られていない。・・・しかし少なくとも我々は社会主義者のエンジンの相対的能率に胎胚する様々な指摘をもつに至っている。可能的優越性についてはすでに語った。問題はどこまでそれらが我々を引っ張るかである。・・・はっきりしていることは何もない、ただ数量的な解が見込まれるということだけで突き放されている。・・・だが我々は以下を想起するならば直ちにこれを実現する。・・・比較のありうべき諸結果は資本主義的進化の段階——共和国が社会主義に転換する段階——に従って大きく異なるものであるから、我々は農業は例外として、十分に発達した大規模産業によって特徴づけられる段階に論議を限定することに同意することで、この障害を克服するであろう。・・・そうすることで移行上の諸困難を排除する——尤もそうした段階でも困難は尚残るであろうが。・・・我々は成熟性を定義しただろうか？・・・したとしても正確にしていないのでは！・・・またしても全ては古き発芽のようなものに依存するというわけである。・・・

39—1 社会主義経済と商業主義経済の間に存在する特定の際立った諸差。双方の経済の能率に及ぼす影響は、重要性の量的なところについては明瞭であるとは言えないものがあるけれども、方向に関しては完全に明瞭である。我々は次のように結論を見出してきた。すなわち、社会主義社

会にあっては諸資源の合理的な使用(employment)が可能であるということだけではない。そうした合理性に至るため開かれている諸方法が——商業的社会に開かれているものよりも——適用において一層容易にして且つ一層確実である、と論証されると期待されてよいとさえ言えるのだ、ということ。この路線で論が進められている限り、このことは——それ自体——可能な優越、努力の節約、無駄の回避を語るものである。社会主義マシーンがその理想的バランスを模索しなければならない程度は、商業的マシーンよりも少ないものではないかも知れない。しかしその模索たるや、燦々と輝く光の下で、しかも諸努力の整合の欠如によって妨害されることはなく行われることが可能なのである。

資本主義は、それが単純に無秩序(無政府的)であるのではないか、などとは全く言えない、とはどこで。・・・理論的な可能性があるのみ・・・多分ここで、能率についての規定、いずれの場合にせよ諸困難の引率に向かつての能率を・・・大規模事業体のもつ優越は保持される。・・・多分その場合、どのようにと、誰によってと、どのような精神で、が語られる、そして短期のそれが。・・・長期的視野を採り得る。・・・その場合選抜(淘汰)が・・・より良い車が常により良く機能するというわけではない。・・・しかし、そのことはセクション1において既に半分は告げられている。そして悪くまとめられてしまった。ここでは多分、a) 失敗は理想と現実を比較しようとしたこと、b) どんな資本家かは、傷ついた資本主義の中の現実である資本家。・・・段階はどこで?・・・a) 事実上さほど重要でないこと——転嫁されるべきでない、b) 社会の浪費(無駄)——見逃されるべきでない。・・・資本主義に対する公正でない異論・・・吸収した資本主義の経験や能力についての冷笑、及びその段階は長所を現実に実現されることができるところのそれ。

39—2 読者が唯一なさなければならないことは、自らを納得させるために、先に提示した行論を今一度読み返すことである。このことは基本的な産業的諸変化に関わるあらゆる事柄の中で、とりわけ明瞭であることはもとよりのことである。無駄と紛争を社会主義的経営はかなりの範囲で避けることができるのであり、その究極の目標をばそれだから一層速やかに描き出すことになり、一層円滑に実現されることができるのである。その上、諸変化乃至は「進歩」の問題からとは離れてさえも、合理性はこれら

のケース——主として寡占と双方独占のケースであるが——の中にある問題を、社会主義の下では、よく捌くであろう。これらのケースを捌くことに商業的社会は結局において一個の確定した結果を生み出すことに失敗しているのである。・・・今日不確定性と不確定性一般 (*indeterminateness and uncertainty in general*)、それにとりわけ寡占的市場戦略に根差した不確定性と不確定性は、過剰生産能力と他の損失的努力の最も重要な源泉の一つなのである。すなわち、一方で企業群に余分の能力を建設するよう下命する傍ら、他方で・・・

硬直価格——誇張・・・全体の諸ユニットが利用し尽くされてはいないとした場合、限界にまで利用し尽くすこともまた。・・・どこで、このことのリストの中に幾ばくかの論点が欠けていること、その論点はいつも前景におかれ、二つの誤りがある。a) 補償が検討されていない、しかも資本主義自身の中で如何に多く訂正がなされることができるか、その諸手段を用意することができるか、について検討がなされていない。b) 社会主義のイデオロギーを以て資本主義の実体を比較している、・・・所有？ 正義？ それに一層多くの所得的平等性？ ・・・どこで官僚制が・・・どこで、拘束され且つ損なわれた (*fettered and impaired*) 資本主義を以てする比較は。・・・私は、私が所得的平等の中にはどんなヴィルチューも全くないということを検討する、という危険を冒している。・・・責められることは、だが、それほど大きくはない、非常に多くの帰結から。・・・資本主義の内部で訂正があり得ること——手段は用意されている。一方には理想を、他方の側には現実を。資本主義の客観的事実上の結末・・・そして続いてここで、だが可能性のみを、どのように且つ誰によって運転されるかに至る。・・・選抜(淘汰)・・・

40 丁度留意した困難と軌を一にする他の事柄がある。それは競争的産業と独占的産業の能率を比較する、という理論家達の努力の——未だ結論に至っていない——諸結果によってよく描き出される。流行のユーモアとスローガンには敬意を払うとして、それらの幾ばくかは独占という見出しの下に大規模産業を包括している。圧倒的に多くの場合、それは技術的に不正確なのだが、我々は簡潔性を求めるが故に同じことをなそうと思う。完全競争の能率をあらゆる点で単一の管理単位を構成するが如く組織された——単なるカルテルや業界組織ではない——一つの産業の能率と比

較しようと思う。今や試みているのは、ある競争的産業が如何なる他の変化をも受けることなしに——言ってみれば法制的措置によって——そうした独占産業に転換させられたとするならばどうなるかである。競争と独占についての時の榮譽を担った諸理論をよどみなく語り、その上で、その産業は後者のケース(独占化した場合)では通常前者のケース(以前の場合)にみられたであろうよりもより少ない産出量に転じ、しかもより高い価格を設けるであろうと結論する、といったことは実際に容易であると言えよう。遥かに更に十分に正確な結果が定式され得るのであるが、ここでは立ち入らない。しかし我々が近代産業の「独占」を語る時考えているところのものはその種の事柄では全くない。管理についてのこれらの大規模単位と典型的に呼ばれるに価するような無数の諸ケースの中には、競争的産業が用いる諸方法から離れているだけでなく、大規模単位にだけしか開かれていないような生産の組織と諸方法を含む。大規模単位の経営は、それに加えて、競争的経営が平均的にもつよりは力量があることが多いのである。

これらの事実はそれだけで、そうした独占的産出や独占的価格が競争的産出や競争的価格——競争的産業にとって利用可能な諸方法で以て実現される、または実現されるであろうそれ——よりも一層に大きく且つ一層に安いということ、そうであることの可能性乃至はその起こり易ささえもを確立するのに十分なものがある。更にそうした諸独占なるものは、需要を拡大することと他の商品群の領域への侵入の不可避性の下では、事情次第の不安定なもの(*precarious*)であり、しかも規則的にそうであり、それだから、産出も価格も——結局のところ——独占的パターンに一致することにはなり得ないのが通常なのである。それ故に独占者達の業績を競争的諸条件の下で期待され得るであろう業績を以て比較することは完全に挫折する。たとえ、独占と競争の間の選択が実際に可能であるというケースにあってもそうである。もっとも殆どのケースでは、技術上と組織上の諸条件の故に一方かまたは他方かという択一を課すことはほとんどない。そのように疑わしいが故に、というのが、比較なるものは正にその意味において、ということになる。・・・反社会的搾取・・・大企業に向けて運行している国・・・大規模事業体が支配的となって以来の諸財貨のなだれ込みについての観察(最上と平均!)・・・

我々の主題に対し、このことから導かれる教訓は明白である。しかし私は他の論点に注意を促す好機を生かしたい。読者が私に対し社会主義の経営的諸命題から期待されるころのものを「成就の第一のランク」に記す

ことは疑いない。そこで先ず発端のところ——あまり遠くでない到達点に向かってできえ——道程に設せられた数多くの落とし穴のあることに警戒しなければならない。

4 1 冷静に——素晴らしい語句・・・そこまで、これは比較能率について何も告げていない、ということ了我々はもつ。・・・社会主義とそれに代わりうるものとの比較評価は超合理的選好の問題であり、しかも科学的分析の裁定(jurisdiction)を超えたところにある。諸事実、諸傾向、それに諸展望といったものの比較の単純な並列(juxtaposition)の意味での比較すらもが、もし我々が文化的表明を比較することを意味させるのならば、たちどころに不可能となる。・・・優生学(Eugenik)・・・誰によって、どのように依存する、という故からしてもまた出来得ない。・・・段階・・・理想的と現実的・・・静態においてならば・・・

4 2 しばしば私的所有制(Privateigentum)は最上であるだけでなく、唯一の可能な方法でもある、とされる。・・・そういうレッテルが貼られたことを前提とする。・・・機構とそれを如何にうまく運転するかとの区別。・・・諸理想(念)——一個の階級的利益・・・最良の人々をそれが排除してしまう可能性がある。・・・私は再三にわたって社会主義の超合理的諸側面の恒久的重要性を強調してきた。このようにして何故に私は——付帯的な但し書きが付くことを禁じながら——今や一層に狭義に定義されるであろう比較経済能率の議論に自らを閉じこもらせようとするのか、の理由の説明に行きついた。・・・世には理想主義者達や偏執者達がいる。・・・彼等の理想・・・諸文明の比較をなそうとする。・・・エッセイⅡにおいて用いられた基準について・・・社会主義社会における生活の充足・・・社会主義のパン・・・住民の雇用者一人当たりの能率、全住民一人当たりの能率・・・

4 3 人々はそれだけで生産的能率のより低い水準にあっても、より良い暮らし向きを告げることはあり得よう。これは思うに全くの良き意識であ

る。「厚生」(“welfare”)に加担している何物かであることは疑いないような何事かについて私は語りつつあるのだが、厚生それ自体につき語りつつあるのではない。・・・私がそれをなしたとすると、社会主義のパン以上のことは告げるべき何事もない。・・・パンの端切れは困難に満ちている。・・・更に恐らく解き得られるであろう一つの問題がある。・・・そうした恒久的状態は他と同様に良い。・・・社会主義のパンは、人々がより幸福であるか、または人々がより満足であるかしているならば、楽しみである。・・・適正ならしめられた分配、一層に大な効用。・・・益々以て最適である。

4 4 積極的消極的いずれにせよ、一個の消費財としての閑暇における差、だが満足感または不快感の中で秤量していない。いくらかの人々は、食べているパンがそれぞれ社会主義か商業主義かのパンであり、プレイしているフットボールがそれぞれ社会主義か商業主義かのフットボールである、というそれだけの事実から導くかも知れない。いつにおいても消費財の二つの組は同質でない。・・・逸話——何が非常に重くさえしているのか、どのように生産物は諸財たらしめられるのか。・・・別な所得をも資本主義は生産する、そこではそれがより多いかより少ないかが追求される。・・・但し、大方に対しては一層多くをとるが、他の場合には一層少なくと閑暇を併せたものとなる。・・・

4 5 我々の意味における社会主義のもつ相対的経済能率の問題に立ち還ろう。成就可能(possible achievement)という平面で、我々は一個の強力なケースを作り上げることができる。我々がなさなければならないことの全ては、我々の歩みをもう一度跡づけ、その上で一つの社会主義経済の論理的確実性と作動可能性についての我々の行論をもう一度検討してみることである。要点は、生産の社会主義的計画の純粹経済問題は、商業的経営が今日解決することを要求されている問題と比較して、一層難しいのではなくして難しさは一層少ないのだ、という命題に争点を求めることである。

恐らく「より容易だ」という論がここに飛び込んでくる！・・・良好に

置かれておらず、用法は制限的である。・・・それでも単純に我々は「より容易だ」を検討する。・・・だがそれは何を言っているのか？・・・より速やかに、しかもより確実に一つのシステムにおいて、そうした最適状態の達成能力がある、とりわけ不確実性の問題の処理において、不完全競争に即して特に。・・・明らかにそれは移行現象である。・・・他の点での私の定義に対するコメント、恐らくその隣に来るべきもの！！・・・

同じように優越、競争的企業に対するビッグビジネスの場合と同じように・・・資本主義経済の下では存在しなかった均衡すらもがもたれ、しかも極めて速やかに達成される。三つの形を整えた資本主義を比較せよ。・・・だがそれが意味しているものは何か、更に不確実性とは何か、そしてそれは三つの比較対象の全てに対してそうであり、進歩との関係に入ることによっても弱められるものではない。・・・尚、社会心理によってもそうである。・・・不確実性と能率・・・だがこれが意味するものは何か？・・・

行論のため産業的分野で完全競争が支配していた時代にあったとし、更に商業的システムと社会主義システムの作動様式に——すでに注意しておいたような——類似性があると措定するならば、双方のシステムに同じ水準の能率とエネルギーが与えられるとして、社会主義経営はより確実且つ敏速に正しい諸数量と諸価値を実現するであろうこと、が尚認知されなければならない。・・・それは第一の節約と名付けられ得よう。・・・まして(a fortiori)完全競争型が不完全競争型に置き替えられた産業社会にあっては、全ての企業が自分自身のあてにならない市場をもち、その市場を防衛するのに戦略的な動きと他のそれに対する反作用的な動きを以てすることの必要性の下におかれる、と言ったことになったとしても結果は矢張り同じである。そこでは結局において理論的にも決定できないことが往々であるような諸価値と諸数量があることとなり、社会主義がそれまで完全に欠落していた決定性(determinateness)をもつということになる。たとえ資本主義が決定性をもつとしても、最大条件を充たす諸数量と諸価値は長い時間をかけ、且つ費用のかかるごたごた——社会主義の管理当局は完全に避け得たであろう——という諸手段によって達成されるだけである。それにしても決定性は結果の合理性を意味し、何等かの非決定性乃至は遅延は損失と正常以下の成果を意味する。・・・最大化を究め尽くすこととの関連では？　そしてまた変革も？・・・これらのことは無駄の回避として表現できる・・・私は平等の条件に替えて最大化の条件を言って

いるのでは・・・不確実は変化(変革)において・・・そしてそこにおいて、それが本質的なのである、私は覚書ではこの点にあまりに少ない重みしか与えていない。

46 それ故に社会主義者達は——彼等が通常それに立脚しているところの——諸事実についてのあらゆる疑わしい諸理論とあらゆる疑わしい諸主張をなしで済ますことができる。更に確信充分に次のように主張することができるのである。すなわち、社会主義経済は何時の日か(資本主義の)大規模事業経済に優越することになるが、それは丁度後者が多かれ少なかれ完全競争型であった経済——我々の多くが過ぎ去りし時代(実際にそうであったか、または想像上のものであったかは別として)と結びつけることに習慣付けられている経済——に優越しているのと同じであることを証明するであろうということ。しかし優越性に対するあらゆる諸主張の中の最強のもの、十分に決定的な主張に至りうるその主張は、未だ尚、来っていない。・・・我々はそれぞれよく知られた主張をより良いものの順に並べることができるのでは。・・・論理的に劣っている場合ですら、それ故にそれが勝っていることもあり得る。・・・自由主義がその本質を見抜いている、——但しブルジョワジーが支配している限りにおいてのみ——ということは決してない。・・・だがコブデン——資本主義、自由主義——エラー・・・

社会の経済的運命を資本主義が託しているところの私的諸利益が常に理想的に完全なやり方で機能していたとしてさえも、その体制は——人々にも経済学者にもそれが容易には理解され難いような事実のもつ社会的政治的な帰結によって——尚不利に条件付けられているであろう。資本主義過程の各要素の経済的性質は貨幣を作り出す機構の道具一式(paraphernalia)の中に包み込まれているので、・・・。そしてどんな影の形態が・・・利害が(社会的不安の中にあっても)・・・傷ついた資本主義・・・社会的機能は私的利益によって充たされる。・・・有閑階級はさほど重要ではないかも知れない。・・・大規模事業体の行動の残余の批難はさほど重要ではないかも知れない。・・・セクト的な利害対立・・・1) 一般的、2) 今日的、3) 支持的・・・

47 資本主義の下ではあらゆる費用が算入される、しかし他方では多くの費用が存在していない。例えば失業者に即した労働コスト、その中にある何事かが相当する。・・・要素がその新しい雇用の中に付加するであろうものがある。このことは結局、次のことを告げることになる。すなわち、当該社会の環境のもつ一般的諸方向に開かれた、あらゆる諸方向の下で、生産はそれが合理的になされ得る限りで——しかもそれ以上にではなく——遂行せられる、ということ。・・・この論証は多くの疑問を残したままにしており、しかも他の諸点を考慮に入れると、上記の批判のようにはならない。そうは言っても、いくつかのコメントを付すことは有用であろう。

我々の論証の最初のもものは経済生活の静態的過程(a stationary process)——そこでは全ての事柄が同じことを反復しており、その計画を覆すようなことは何も起こらない——に適用される。だが我々のテストが推定している限度では、社会主義のロジックは商業的経済のロジックと同等のものを実現するだけでなく、それ以上のものをもたらす。というのは、どのように経済的合理性が商業的社会の中で貫き通せるのか、を説明することが私の仕事であったとするならば、私は、諸価値と諸数量についての諸困難及び最適の諸成果(optimum of performances)——それは完全競争的パターンのケースにおいてさえ、とりわけ多くの不完全競争的乃至は非競争的パターンにおいては——に向かおうとする諸傾向の中にある諸障害について言及して然るべきであった。その一方で、こうした諸困難や諸障害のいくつかは社会主義の計画では欠けているのである。・・・説明、予見できないものを締め出してしまふ遅れのこと。・・・

例えば、次のような事例をあげよう。一企業の経営は商業的社会では諸々の期待の上に活動しているが、その期待のいくつかは高度に不確実であり、とりわけその戦略的な動き——それにより競争者達は自分の動きのそれぞれを考慮し合うという動き——についての期待の上での活動がある。明らかにこうした不確実性の中の少なくともいくつかは社会主義の下では、如何なるそうした戦略は全く存在しないであろうから、これを欠いているということになるろう。社会主義の産業的経営は経験上の討議の上の合意であるだろうし、それらの動きのそれぞれは——実行されたものも考えられたものも——他の全ての人々に知られているべきなのである。これは、ただし、事例としては大きい区分での一事例であるが、商業的と社会

主義的の社会がそれぞれ実現し得る可能的最適の諸属性が何であったとしても、社会主義的最適の方がより一層に一意に近く (uniquely) 規定されるだけでなく、実行上の可能的最適に対しても、商業的最適よりも、より一層に接近させられるところが起こり易いのである。・・・計画論でなさなければならないので、そのことと実行上の配意諸点は(3)で、時には膨らませて。・・・最大がより大であることはあり得よう。・・・規定することは非常に困難——共同研究者がいない、且つ動きと反対の動きが排除される。・・・そしてそれは十分に責任と努力の節約を意味している。・・・

48 かくして、能率(但し年々一人当たりのものではない)を以て定義された純粋に経済的なものの中にあってもそれ自身、私が掌握するのは諸事実だけである、一つのまたは他の方向に向かわせる諸要因といったもの、それらは、a) 形態上の属性と b) 「機能的」属性の二つのグループにおいて存在し、心理的と社会的の諸要件はおおざっぱにはあるが実行可能性において a) と b) に対応している。・・・そしてここでは差についての一組の性質が独占と自由競争との間の比較について描き出される。比較を成し遂げるには常にそうであるように。・・・正義と限界効用水準・・・ただし、それは実行可能性に即してなされるべきものであるのでは。・・・

我々は、社会主義経済の論理的整合性と合理的決定性についての我々の議論で行ったのと同様に、二段において論を進めるであろう。最初に、我々は新しい技術の導入と吸収といった産業的变化の諸現象には留意しないことにする。しかし、これを除きながらも、我々は今、その経済過程に内側と外側から作用するあらゆる種類の変化と妨害については容認する。そのようにして生産計画は——種々の不確実性の狭間にあって——永遠に変化していく状況に対する不断の適応がさせられなければならない。

論理的原則と実行可能性の双方の問題として、社会主義経済がこれらのその時々への適応を合理的なやり方でなすであろうだけでなく、それをなしとげるには商業的経済にとってよりも社会主義的経済にとって一層に容易であるだろうということも、またあるのである、と我々は検討してきた。その理由は、一方では社会主義がもつ生産計画の適応は——不確実性が考慮せられる場合はいつでも——一層に直接的で、そして確かなものとなるであろうことであり、他方では何等かの与えられた状況が——他にして一

定ならば——不確実性を抱懐するところが社会主義社会では商業的経営におけるよりも一層少ないであろうことである。・・・

49 定義されたような生産能率の判断基準はそれが直接的にカバーする範囲を超えたところで適切であるように見受けられる。それにしても、もし我々がこの範囲に立脚するとなると、私が先に語った社会主義の青写真の中にある優越性を支持するような、その強力なケースは何であろうか？

何をどのように生産するかについての意志決定、それが資本主義社会では確定的でないか、または一意には確定的でないと言ってよいような諸ケースにおいてさえ、それが社会主義社会では確定的であるだろう、ということをお我々は検証してきた。更に進んで我々は次のことをも検証してきた。双方の青写真が経済問題の理論的には確定的な解決を示す場合にあっても、そうした解決は資本主義のマップにおいてみられるよりも社会主義のマップにおいて一層確実に、しかも迅速にみられるであろうと。このことは比較が完全競争的資本主義との間でなされる場合にも適当である。しかし比較が不完全競争的乃至は独占者の資本主義との間でなされる——そうでなければならないであろうが——場合には、更なる力点を置いて適当である。更にこのことは経済的エンジンの運行における経常的諸問題に対しても同様に適用されるが、その改良——経済「進歩」の管理(the management of economic “progress”)——に付帯した問題に対しては更なる力点をおいて適用される。

このことは一見して考えられるであろうことよりも遥かに多くの含蓄をもつ。そうした確定的な解決は決定機関の立場からして「合理的」乃至「最適的」なのである。そうした解決に導く道程を滑らかにし、しかも安全にするような何事が、人的エネルギーと物的諸資源を節約すること——所定の結果が達成されるのに必要なコストを切り下げること——と結合しており、更にはそのように節約させられたその部分が完全に無駄とはならず、ある意味で能率を高めることとも結合させられている。

社会主義的計画のもつこうした優越性は——競争的構図(competitive schema)との関連では——我々が合理性のより高い平面といったものに

帰せられる。例えば「豚サイクル」の名の下にすすむよく知られた浪費は、生産者の意思決定が直ちにではなく、一定の時間の経過の後においてのみ効果をもつためである。計画経済の下ではこのようなことは殆ど完全に回避し得るものである。この事例は諸現象の中の一つの重要な類を示している。このタイプにみられる反作用は——競争的合理性が求められている限り——全く合理的である点が問題なのである。それらは競争型青写真には内在しているものであり、それからの逸脱ではない。それらは社会主義の青写真には内在しておらず、社会主義社会ではあり得たとしても失策としてのみもたらされるだけのものである。不完全競争乃至は独占者のパターンとの関連では、資本主義の世界では諸々の不確実性の類または個別企業の市場と戦略に見合って提供されるであろうところのあらゆる人的エネルギーと物的諸資源の浪費を社会主義の計画は節約するであろう。双方独占の一般化されたケースのように理論的にも確実な規範を提示しないような資本主義のパターンはもとより経済的合理性の範囲から脱落する。不確実性は無駄の表現である。社会主義的配列は商業的配列と同等かそれ以上に合理的であるが、それは今迄合理性がなかったところに合理性を導入する最初のものなのである。社会主義経済は必要なデータの欠如の故に合理性の判断基準に答えることができないであろう、という結論——さきに注意したミーゼス教授の論考——に対して我々は今やアナログな行論を行使しているのである。これだけで他の一切のやり方を省略させるに足る。

公準、社会主義的経営は望まれた経済的目標を——それを結果としてもたらす位置にある誰によっても——より低いコストとより少ない混乱と損失で以て、更に技術上または組織上の進歩の過程をも保持することで達成することができるであろう、ということ。一見してこの命題の主張は実行上の問題の重要性という点で他のタイプの考慮を以て重々しく修正されなければならない、ということを我々は差当たって認識するべきであろう。しかし我々が青写真を語っているその限りでは、資本主義社会ならば景気循環をもたらすような諸特徴の——全てではないとしても——その多くが社会主義経営では取り除かれることができるであろうことが、資本家的態度と制度の枠組みの中では産業的進化の「計画化」に随伴する筈であるあらゆるそうした不利益——補償される以上のものであろう——を蒙ることを必要としないのだから、ということが明白である。社会主義的経営は、我々はそのようにみてよいのだが、長期的トレンドにほぼ近いコースにある船のように操舵することができるであろう。この点を更に精

査する必要は恐らくない。

私は上記が社会主義の青写真のもつ優越性についての信念を支持するのに言われてよいものを尽くしているとは考えない。二つの追加的項目を設きたい。

第一、商業的社会の構造は敵対関係を生み出すことが不可避的である。分別くさく、どのような形態の社会の中にも存在する個人間及びグループ間の——人間の通常の宿命であるような——敵対関係は別として、商業的社会においてのみ特徴的であるような敵対関係も存在する。そのいくつかは後で付説されようが、ここで取り上げられるのにふさわしいケースがある。そのタイプとは法曹的職業の諸活動に人材が提供されていることである。社会主義社会でも弁護士立ち合いの訴訟はあるだろうが、企業対企業で活動する弁護士の必要はないし、ましてや公的権威から事業利益を保護するための弁護士の必要は更に少ないであろう。我々がこのサービスを召喚するのに、悪意ある諸利益または公共の善の悪しき邪魔立てとしてなすか、悪しき邪魔立てに反対する生産の社会過程の有益で必要な防衛としてなすか、は本質的なことではない。いずれのケースも集産的社会主義の枠組みからはこの機能は存在しないであろう。このサービスの提供から弁護士の受ける国民所得の中の割合は無視してよい程だが、生産的能率の立場からは無視できない事実がある。成人人口百万人のうち500人が恐らく優秀な頭脳であろうが、その相当部分が——現在そうした諸活動及び同系の仕事に吸収されており——もっと生産的な諸目的のために自由におかれていることになり得よう。

第二、失業の諸原因の中には、資本主義の青写真に対応するには適当ではあり得ないものもいくつかあるだけでなく、資本主義のエンジンが失業の結果の面倒をみる諸手段を提供するという事実の光の下で判断されなければならないものもある、ということは既に検討されている。しかし社会主義の青写真は後者のいくつかからは免れていることも尚真実さを留めるものである。・・・失業とその処理に関して社会主義は——然るべき諸想定の下に——その青写真に書かれるべきことが何もないという理由からしても、資本主義の措置に優越していると期待されてよい。・・・とりわけ資本主義的世界では、技術上乃至は組織上の「進歩」に由来するか、または他の何等かの混乱に対するその経済システムの反作用の為され方に由来するものであるような、そうした諸変動に随伴するところの失業は

——これらの諸変動そのものが回避されるのと同じ程度に——大部分回避されるであろう。

しかし私は次のことを保持している。社会主義の経済過程の確定性と合理性から導かれた上記の行論は論理的図式乃至は青写真の範囲内では決定的なものであること、その他の全ては——その中のいくらかは実体上のまたは分析上のエラーというよりはより良いものに基づいてさえいるのだが——決定的なものではないということ、その理由は決定的であるには、1) それらが時代にまたがる偉大なる等高線の中では十分に重要ではないか、2) 一様にだけでなく作用する諸要因を強調しているか、があげられるということ。このことはとりわけ読者が誤りにひどく驚かされるような、そういう諸要因に適用される。この意見を支持する諸理由は前の章に提示した。そして繰り返される必要はない。——私は再度に渡ってコメントすることはないであろう。——しかし更なるコメントをいくつかの見出しの上に加えておくことは良いことであろう。

私は一方で社会主義的配列が——その合理性の程度に対応して、あるいは経済システムの諸要素の最適の諸価値への接近の程度に対応して——(潜在的に)つくられるであろう差のことを強調してきた傍ら、他方ではそうした合理性の進路に対応して、あるいは、別な言葉で言うと、それらの諸価値の最適性がそこからもたらされるような立脚点に対応して、つくられるであろう差のことを強調しはしなかった。それはそうあるべきであった。次のように言うのではない。産業は公的利益に替えて私利利潤のため運転せられる。利潤経済が——完全競争的であろうとなかろうと——どんな社会主義経済が為すだろうよりも、消費者のより効率的な奉仕者であるだろう、その利潤経済が進行する限りそうである、と。そうではなくして、差の問題であって、それは社会主義経済なるもの合理性においてより高度の水準——社会主義計画の優越性を構成する——に達することができ、だからこそそれがもつ然るべき力の殆どを他の論議に供することができる、という事態と同根である差なのである。これを逆から言うと、反社会主義者の諸行論は——それらが利潤経済の能率についての理論的諸考察に基づくものであると、あるいは所与の企業群が全てで消費者や労働者の視点から筋道を立てて正され得る全てのことを果たしているとの例証的示威に立つものであると——資本主義に都合の良いケースを基礎としようとする試みなのであるが、これこそ結着をみることなく、残されている理由だからである。

とりわけ、独占類似体の行動の滲透についての行論が部分的には合理性についての上記の行論の中に含蓄されており、それがそのように含蓄されていない限りそのことが弱点となる、と私は信じている。最大規模産業とは分離し得ない独占類似体の諸特徴の中心部分を私が社会主義の青写真に好都合なケースならしめようとしている、と一見してみられる可能性があることは確かである。私は社会主義が一個の奇跡——非競争的なものを完全競争の原理に従ったものとして機能するよう作動させるという奇跡——を果たすことがあり得よう、ここにおいて、と述べる資格があるとみられる。——ここに奇跡は我々が、a) 起こったもの、b) 不可能であることを知っているような大事件であると、私はみている。・・・このことによって社会主義者達が攻撃されるのは驚くにあたらない。しかし我々が検討したように、現代社会のそうした独占の性質と行動を考慮すれば、その中に我々の行論によりカバーされたものを超えたところは極めて僅かなのである。このことは生産の「独占的諸制限」と内在する過剰能力と並列して適用され、それが主要な点で「創造的進歩」を保証するための諸工夫の殆どそのものへと転じていく、ということが想起されるべきである。

我々がこのように経済学の用語で、あるいは浪費(無駄)の最小化という言い方で表現した合理性乃至は最適の諸価値の原理につき、読者が、我々が何故に他の諸々の無駄を追加しないのかに怪しむところが十分なものがあるだろう。再度に渡るようだが、そうした行論は——誤りでない場合でも——他の諸々の無駄たるやそれぞれ補償無しではあり得ず、その補償たるやこれを評価するのに如何なる確信をももてない、ということの故に結論には至り得ない性質のものであるというのがその理由である。しかしながらその中の一点は注目するため留保されている。多くの理論家にとって、資本主義の——特に競争的な青写真を引き出す場合——そういう限定の範囲の中では経営が理想的に能率的になされているという想定に立脚するのが通常である。特定の諸目的にとっては明白になされて当然のことである。しかし他の諸目的に対してはそうでない。どんな時にも専門的な意見が理想的標準とするものから逸脱すること、または偏りをもつこと、はある。そしてその逸脱なり偏りなりは青写真を丸ごとのものではなくして、青写真の中の部分乃至は一片としてみられるべきものの逸脱であり偏りである。二つの例が二つの最も重要なそれに該当するものを描き出さるう。

1) どこであったか、私はこの織布企業を考察した。その設備と製造法は私には——私にそのように言うことが許されればのことではあるが——飛び切り遅れた代物に見えた。生産の熱効率、馬力、光線すら物の配列が、原材料と機械の取り扱いが、原価計算が、全て悪いと言いだす限り悪かった。幾分かの激しい論法をもってすれば、それは一塊のガラクタと呼ばれてよかった。しかし私を驚かせたのは、それがその地域で最も成功している企業だと教えられたことである。その所有者型経営者が天才的な手腕を製品デザインや販路発見に発揮していた、というのがその理由であった。今やそうしたケースはワンマン企業の範囲の中での私的管理産業のある論理図式の中の一部なのである。そのような人物はいつでもオーガナイザー、または技術者、またはセールスマンとなり、しかもそのようにして自分が良くなし得ることに集中する傾向をもち、仕事の他の局面は多かれ少なかれ無視していく傾向を見せるのであろう、ということ。

2) 資本主義過程は本質的に変革の過程である。それがそうである程一層急速な変革をもたらす。人々はこのレースにおける成功に対しては極めて不均等に適応させられ、そして後れを取った大階層が常に存在する。この階層の中にある企業群はここに展望された意味では標準以下である必要はない。しかしそれらは衰微していく人々の行動がしばしばそうであるのと丁度そうであるのがしばしばである。これもまた了解し得ることであり、青写真の一部である。それぞれの、そしてあらゆる企業の中で自分が研究していることにつきどんな失敗をもなさないような、コンサルタント技師と能率エキスパートと、私は尚、会わなければならないのはこれ故である、ということとは全く離れても、どんな時点を採ろうと存在している企業群の相当部分は様々な方向から見て標準以下の能率にあるだろうと期待されて当然なのである。利用可能な最良のエキスパートにより磨き上げられ、しかもそれを全領域に強制することができるような標準をもつことができようどんな社会主義の権威筋の下でも、それは決して少なくないであろうと期待することは大いにあって当然である。但し社会主義の青写真の優越性を良しとする行論の主流派はそうしたところから論を導いてはいない。資本主義は非能率な経営や企業との関連において非能率なのではない、それに何等かの硬直的な標準の強制が——つまり、ノルマの設定が——多分に干渉とならざるを得ないとする含意をもっていて、それが混じり気なしの祝福とはならないということを立証しかねない、というのがその理由である。

このようにして、社会主義の優越性に好都合であるような諸ケースによって、主として基礎付けられている我々の行論は、結局において守備を全うしているように思われる。しかし、たとえそれが、厳しく言えば、唯一の主張できるケースであったとしても、それで充分となすべきであろう。今や次のように述べるのが、我々が自らを納得させるために必要ではないだろう。我々の意味での社会主義社会のもつ能率は——そのポテンシャルティを言っているのだが——、資本主義下の大企業のもつ能率が19世紀の中葉辺りのイギリスの産業の類似的なパターンの資本主義(当然小規模)のもつ能率に対して優越しているのと同じ程度に、資本主義的大企業のもつ能率に対して優越していることはあり得よう。更に幾ばくかの未来が、社会主義的計画の劣等性を論じた行論をみるのに、我々がアダム・スミスの株式会社についての行論——それは同様に単純に誤っていなかった——をみるのと同様にみることになるであろう、ことも完全にあり得るのである。

(3) (2)の補足的パセイジ

摘要

カオスをその反対物に置換すること、資本主義的行動とは全く離れた何事かをなすこと、そうした社会主義的諸方法の中には進化的調整過程が存在する。改良の諸計画を整合するのに、またそれらを秩序だった継起として適合させるのに多分に効果的である。資本主義の150年において、いふならば食・衣・住の問題は、必要な諸財の供給キャパシティでみる限り、既に解決されている。しかしその成功裡の前進にも拘らず、無駄と妨害が含まれているところは多大である。そうした諸困難は摩擦的諸活動に帰されるべきもので、それ自体市場でよしとされ且つ市場メカニズムを通して調整されるべきものである。そこでそうした無駄と妨害を排除するためには、社会主義の官僚制的自動制御装置を備えた政府機構の諸決定が市場メカニズムに優越していることになる。投機乃至は他の諸失策の消去と資本価値の保全においても同様。他に分配と選抜の分離、硬直性と市場メカニズム、非決定性と不確実性など。・・・その他 (編者)

Ⅲ—(3)—1～29

(2)の補足的パセージ

1 正確に認識されうること一般と同じように、良き理論は、この他にと特殊にと、論点を強調することで害を及ぼしうる、ということ・・・不平等はあとで・・・自己責任と敏速な決定はあとで・・・

2 しかし利点の中には尚それでも憶測の部分もある。・・・

3 社会主義の他の諸形態は常に特定の概念を抱えている——それはまた準資本主義(quasi-cap.)的でもある！・・・競争的資本主義、その諸利益・・・自由と民主主義・・・理論、それは十分に消滅したか、または古い理論にはりついている。・・・無政府のギャンブルと無意味・・・
配分(分配)と選抜(淘汰)(Verteilung und Auslese)はない・・・
消費のための生産、まさに遠く離れている。・・・活動している指導者を欠く。・・・

4 個々人の利益の防衛に向けられる力の節約、・・・全く当然の成り行きとはいかない。・・・国家が巨大である場合にはセクト的利害がある——どこに劇場が建てられるか、どこに鉄道を走らせるかといったこと。更に政治と国家に対する防衛に向けられる力の節約・・・所得税、法律、それに国家それ自体がこの方向での無駄を意味している。・・・更に労働争議のコストといったものの節約・・・順応性——だがその前に同一の人々が他のように振る舞うようさせられることはないかどうか、更にそれは私的動機の重要性に対する問題に展開しないかどうか。・・・商業は利潤を永らえさせておこうとする、ヴェブレン(Veblen)・・・広告といったもの、極めて大袈裟であり、そして独特のものに映じる。・・・広告に対する美学的行論・・・

5 それに転換できないか、あるいはそれに一枚加われないか、そうした(順応性のない——编者)人々の大部分は絶望的に標準以下である。・・・比率は個々の国々で異なる。・・・心理療法に・・・この論点は私には決定的なものであって、社会主義者達の論理よりもずっと重要に見える、と直ちに述べて差し支えがない。・・・比較はそれでも「より容易」であるだろうか?・・・そしてまたもや不確定である。・・・その場合、独占との比較が、かくして能率の定義が・・・無数の結合した諸力をもってする現実のケースはどこで? 選抜(淘汰)はどこで?・・・

6 私は資本主義に対するある種の異義があるという困難に逢着する。それは子供じみたものであり、同様に——例えば消費者達のために生産するのでなく、利潤のために生産している、といったような——人々にはわかりきったものでもある異議である。もとより利潤が高められるならば、より多くが生産され得ることになる。その場合の技術陣——それは確かにそれ自身何かをもっている——といったこと。・・・この困難はそれを承認することによって、最も良く実在のものとなる——いつも初歩的な経済学を講じることはできない。・・・

7 (社会主義の利点として——编者) 最初に秩序だった連結が取り上げられる。その場合、資本主義もまた整合の装置をもっていること、そして更に社会主義は一層効果的だということ。・・・尚も常に高揚があり、沈滞は刈り取られている。・・・
もし我々が様々の可能性について語るのならば——そうする時、我々は偏執的な愛人や詩人のように「想像のあらゆる凝集」の状態にあることをいつも想起するのだが——、社会主義の優越はどんなこともが尚(?)であるが故に明らかである。・・・

8 集権的社会主義(centralist socialism)は産業上の、及び地域間の敵対

関係を締め出すべきである——しかしそれはうまくいって一つの理想に過ぎない。・・・それがより良く処理されたとする、そしてそこにはもはやすでに、事実に基づいた諸問題が存在しているのである。・・・すでにはやくも(2)において、平等である必要はなくして様々な形態を確かに多数派が賛成している、ということを告げた。更にその場合、私は生産手段は与えられていると述べた。続いて社会主義に対しては静態状態(stationären state)への接近が必要だと述べた。・・・私が大企業との比較をストップし、完全競争型の資本主義との比較をなしていることに注意せよ。・・・プリミティブな異論——利潤が除かれ一種の税なのだという——・・・戦争と有閑階級と無秩序も除かれはしない。・・・より良き合理主義者——社会的諸要因の包含・・・失業、無駄(浪費)・・・

マルクスはすでに「能力に応じてそれぞれから、欲求に応じてそれぞれに」(from each nach ability to each nach wants)となしている。・・・これらのことはそれぞれの社会主義的なものを撃つ！トロッキーといったものについて・・・

9 巨大な無駄・・・経営の全機関、そしてそれがビジネスであり、且つ今日の搾取形態であるところのもの、それにブルジョワジーが先ず創出したこと——ブルジョワジーの創設者に通行税を付したこと・・・ただ実地的問題に限れば、例えば価格——全く単純、高価格は生産を励ます方向を指示し、しかもそうすることで、生産が事物を利益あるものとするであろう。・・・安価なミルクは借地農(tenure)によって生産される。・・・

10 実質的狀態と、とりわけ失業はその役割を果たさない。・・・思っているよりは比較を・・・何との比較か、競争的かトラスト化されたものか、自由なものか傷ついたものか、理想的なものか政策的なものか。・・・ことさらに疑問はない。・・・順応(可鍛)性・・・興味を惹く、どのように私的家族が殺されるか。・・・唯一十分な社会的市民は標準以下的・・・植民地政府の態度・・・エデントン卿は先ず人々に慈悲を申し出るよう導いた。・・・待つことができない唯一の存在は、それを運転しようと欲している知識人達である。・・・

1 1 何故に平等主義的社會主義の下での充足最大化に関して、それが——ある種の正義、理想、の充足ということを除けば——所与の量が前提とされているのだから、何事をも意味していないのだ、と簡単に告げてしまわないのか。・・・だがそれでも尚、所与の量が、それが何であれ、より多くの効用を創出するということが残っているではないか。・・・

1 2 WBAがストライキを行った時、嬉しそうにくすくす笑う(知識人達が・・・編者)・・・しかも群衆は悪く行動し得ない。・・・解体を超えてその中に組織化が生み出される。・・・働くことや「義務」に対するラディカリストの墮落・・・働くことは必ずや始まる。・・・失業と変革・・・そのことについての事例・・・だがそのことは計画設定に属する・・・失業を説明するリストを待っているような組合の善(union's Gut)などはない。・・・社會主義に向かおうとする経済的ケースについて・・・平等性と長期的視野での適切な配慮・・・洗練についてのドップの苦情・・・諸君はムガールと労働組合事務局の相続人たり得ない。・・・

1 3 配分と選抜は最も重要な区別である、とどこかで述べた。・・・私が競争はそれほど重要ではない、と述べた時にすでに。・・・労働日の長さは最大律に即している(Länge des Arbeitstages nach einem maximum Gesetz)・・・資本主義的なやり方というべきであろう。・・・誰がそれほど知性的であり、そして限界効用の均等についての行論を適切な価値において見積もるのか、という言い回しを含んだノートはどこに。・・・最大状態の比較は別な事柄、それをここでは試みない——それ故に所得の限界効用の均等についてもここでは扱わない。・・・そしてそれは相対応した費用計算と一緒にしているのである(ランゲに還る)。・・・それにしても資本主義的な最大がより高い水準にあることには重要性がある。・・・更に社會主義的最大の資本主義的最大の比較可能性はここか後で・・・

1 4 合理的社会主義のためのデモンストレーションをすることを容易にする、という特別の関心から・・・あるいはそれが私には今や一個の比較のように見える論点に即しているので・・・労働は量的にみて——労働がもはや商品の労働含有量に即して交換されるものではないといった如くに——利用されることができよう。・・・

資本保全のための資本主義的政策について、国家は長期的視野をとることができるが、そうは言っても短期的誘惑があることが明らかである、という点でランゲの所論はピグーのそれと同じである。・・・

1 5 資本価値の保全についての留意・・・損失の回避と資産価値の保持——社会主義はそれをも効果的になし得るといふこと——はここにおいて必要である。・・・

1 6 私の無駄(浪費)論は第Ⅲ章において部分的にあるのではないのか?・・・硬直性、そこでは私は次のように述べた、硬直性は経済学者には手に負えないような事柄の一つである、と。・・・資本価値の保全と、ことによると貯蓄もが明らかに妨げられている。・・・進歩を阻害することによる無駄も。・・・私は適切に取り扱ってこなかった。・・・どこにも考察を集中していない。・・・我々は「二つのまたぎ(two sides)」を犯しているのでは?・・・

福祉のための能力を保存しておくこと。・・・「後で留意すべきである」。・・・推定は論証ではない——だが特に変わらないものに根差したものではありません。・・・

1 7 最大の性質!・・・
市場は理想的な民主主義的方法である。・・・貯蓄の本質は社会の中では明白なのは。・・・等しい所得の下での社会的経済的な不平等・・・報

酬30ドルのプロシヤの少尉は——自分の財産がないとしても——それほど経済的に悪くないことは明らかである。・・・非常に重要なケース・・・

18 ここにおいてのみ、不確定性に負うことで我々の社会主義社会の文化的パターンはあるのである。・・・しかしその限りでは我々は何の結論も述べていない。・・・その不確定性はまた何故かと言うと、どのように、そして誰によって、が重要性において多大なものがあるからである。・・・独占と競争を比較することも、これまたできないことなのである——しかし示されることのできる何事かがある、ここでは個人的資質のもつ能率を。・・・帰結は、良くいって類似のことが達成されることができるだけである。・・・機会を欠いた場合にも、尚、そのようには機能しはしないだろう！かどうかは問われる意味がある。・・・我々の時代の価格そのものが現れることはないだろう、ということを通きはしない。・・・

19 結構、しかし、それに関連して誤った行論がある！・・・無益、些細性・・・比較における最大性・・・だが社会主義に対してだけは最大—長期であることをすでに述べた。

20 比較、どこで行うか？

a) 国家や政治家は正確に短期的誘惑にだけには打ち克つことができない。 b) 注目すべき誤用！ 節約が蓄積を少なくし、そして視野の広さ(foresightedness)が欠乏に通じる、ということ。・・・もし、社会主義者が——社会主義の問題とは全く区別されるような——社会主義者達の問題がある、ということを知れば、我々をして憤激させているものは社会主義ではなくして社会主義者達だ！ということになる。

21 一見して責められる立場にある諸欠点を身につけ得ると丁度同じく、継承しているものとしての、そうした資本主義に対してのみ相対し

ている——どのようにそうした意識が生じるのであるか？——のではない、理性的な人々として(als vernünftige Leute)我々は。そうではなくして我々は、我々が医術と科学といったことについて見究める——資本主義経済とその社会及びその合理性の所産として見究める——としても、物語は印象的なものであることを見逃すことはできないのである。・・・抑制すること、衣食住の問題とそれに付帯するものはこの150年間に解決されている、となすことを。・・・それでも我々は無駄(浪費)——それは圧倒的に成功裡の進歩の付帯事——乃至は過大能力を語ることはなしうるのである。独占も尚・・・あるいは資本を減少させていく貯蓄も・・・それらの全ては一つの控え目なケースのみであり、資本主義的担い手の中で修正されうるものである。・・・失業もまた、とはいかない。その場合それに対しては、資本家が自動的になすところのものが付け加えられなければならない。そのどこに手段と意志が伴うのか。・・・

22 そこで独占との比較ということにもなれば——即座に告げられるのは、利用され尽くされている場合ですら何物をも示すことはないのでは、だが、利用され尽くされることができない、ということである。・・・即座に！・・・我々は、均衡へ向かっての前進は単に可能であるだけでなく、自由競争におけることと同じであるどころか、より確実なのであると検討してきた。それにしても、とりわけ資本主義の下では一意の解(eindeutiger Lösung)が完全に欠けていることがあり得るという事態は、それ自体異様そのものである。しかしそれは何を意味しているのか？・・・一意性は合理性を意味する、そしてその明瞭にして急速な達成は力の節約と損失の回避を意味する。不確実性、それはまた現実に資本主義的な無駄の理論である。我々は通常の意味における競争の無駄、(?)、重複といったこと、それに不完全競争における規制と広告といったこと、について語ることを必要としない。・・・そうはいつてもしかし、他の節除——有閑階級の節除や必要以上の高い支払いの節除といったもの——はそうではない。・・・疑問、だがそれに応じるものとして、威張って歩いているような弁護士及びそうした全ての人々の諸能力の無駄がある。・・・

23 不確実性がまたもや実際の節約の考察の中に入ってくる。・・・

所得税がないという一つの利点がまた・・・とりわけ傷ついた資本主義との比較・・・貯蓄依存が真実の光の下で一層よく現れる(ラーナーを比較せよ)・・・くすくす笑うな・・・家がない——もし彼等が重要である物を全て望むというのならば。・・・社会主義の中での叫びであるランゲの社会的なもの——彼等の不確実性といったものに由来する両親の全ての諸価値の解明・・・誰がそれを笑うのか、その水準に至っていないのは誰か・・・

24 ありうべき重要性は比較において求まる。(Mögliche superiority kommt bei Comp.)・・・だからここでこの材料は多すぎるということはない！・・・

長所もまた、例えば消費性向を回復することにおいても(スウィーヂィ)・・・長所——労働者協議会で、追加すべき費用はない、全ての費用を含んでいる。・・・関連——補助金・・・利潤を上げることとそこに投資することは許される。・・・

25 よく知られていない・・・形態でなく、不気味な家族的類似性も。・・・更に民主主義的でないだけでなく、(類似性は)更に少ない。・・・
a) 問題において、b) その時、それは過ぎ去っていった。・・・

26 1931年の国富調査によると、企業自己資本のほぼ50%が、200の企業により持たれていた。・・・それ以前には55%・・・但し鉄道も公的諸施設もその下にあった。

27 資本主義は何等かの段階で過ぎ去りしこと——まさに歴史的成長のさなかで夜を徹して輝いている醜い工場といったこと——の全てを背負わされる必要はない。その上に含ませられるべきだとしても、それはIIにおいて。・・・また重要なのは、資本主義には制御され得るものがあ

り、ブループリントは相対応した発展状態に対してのみ有効だ、という問題がある。・・・かくして私は、ブループリントの中では少なくとも真面目に、制約と落とし穴が、を述べてきた。・・・怠惰な金持ちが漸く能率のところに登場する(但し反対に、動機が観察される)。・・・高い増加と能率はその後に来る。・・・その場合、浪費家達は。・・・

28 我々は産業的变化の過程(“進歩”)を考察する。資本主義では、新しい諸商品、新しい諸技術、それに生産の組織構造の諸改良が個々の活動というやり方で侵入し、そして古い諸商品、古い諸技術、それに古い組織形態を競争という手段で征服する。これらの個々の活動はもとより相互に関連し合わないのではない。諸生産物やコスト諸要素の市場においては、それら諸活動は個々に自らを正当なものとしなければならない。更に、それらを整合へと導こうとする金融市場において自分達の信任状を提示しなければならない。・・・社会主義的方法は単純にカオスをその反対物によって置き換えることを意味するものではないし、あるいは資本主義でなされているものとは完全に異なった何事かを為すことを意味するものでもない。但しその方法は、改良の諸計画を整合させることにおいて、及びそれら全てを秩序だって連結するために適合していることにおいて、はるかに一層に効果的であり得る。*) これらのことと、投機や諸失業の少なくとも一組のものの消失は——好況と不況といった——そうした現象のほとんどを消去して、損失を避け資本価値を保全することに向けて遙かなる前進をもたらすであろう。

*) 秩序だって連結する。・・・たとえ資本主義もまた一個の整合装置をもっていたとしても・・・資本主義的現実のもつ産業的進化に替えて、秩序だった連結を生み出す、ということ。・・・

29 全てがそうだとはいかないにしても、道徳的責任の意識を全くには欠いていない人ならば、物事の実際にある状態と心に抱いたイメージとを比較するという作業をなす時、まさに懸念している何事かを以て検討を行う筈である。・・・その場合、それが理想と現実間の比較か、または現実とつくり物間の比較であるのかどうかである。・・・社会主義者達が手をこまねきながら樂園のヴィジョンを語るようなことを度外視しても、そう

である。・・・私がそうする場合、恐らくはともかくも他方の長所を先ずは取り上げるだろう。・・・その場合、競争型に対しビッグビジネス型が優越しているのと同様に(社会主義型が)優越していることはありうる、但し可能性としてのみ。・・・

何が行われ、何のために諸手段が整えられ、そして意志があるのか?・・・諸欠点はあるとしてもそれほど悪くなく、しかも相対化されるものである。・・・欠点のそれぞれは控え目なものであるところが大きく、一つの可能性であること以上のものではない——恐らくは、ビッグビジネスの(競争型に対する)優越性よりも(社会主義経営の)優越性が少ないということはない。・・・混乱(がみがみ言うこと、snarling)は十分に少ない。・・・成果と可能性の展望において、衝突する相違のそれぞれは明らかにお手上げになるケースでもない。・・・それを運転する者の不確実性や極端な低能率の可能性に即して、抗しがたいとするケースでもない。・・・しかし実行上の比較のため、それが意味しているものは何か?・・・可能性についてだけのことである——それはすでに多く述べられてきているが、私は手を引こうとは思わない。・・・

そうした比較は——科学的影響力の巨砲の洗礼を受けることなしに——いつでもなされ得るものであるのか、は十分に疑わしいことであろう。ある人は次のように反論するかも知れない。日進月歩に成長する我々の事実上の認識の現状の下では、次のように望むのは決して荒唐無稽のことではない。すなわち、近未来において、現存する産業的諸装置と新しい諸条件に適応させられたものとしてのその諸装置の双方を以て、何がなされることのできるのか、及び社会主義の状態の下では何がなされることのできるのか、を我々が見事に描き出すであろうことを望めるか、と。農業部門の全て、輸送部門と公共部門のほとんどの部分、製造工業と商業部門の大部分は、今日でさえ十分に解明されて、真実とはあまり離れてはいないブループリントを描き出すことを可能ならしめている。研究はこのようにして実際に社会主義計画に向かって導くところの道をつくっているのである。・・・しかし、我々の眼前にある困難を伴った紛糾の中には、それが助けになるものは僅かであるとしかいいようがない。というのは、関連している設問は、与えられた一時点から見通されて、社会主義的経営が与えられた技術的諸可能性——与えられた生産的諸装置、与えられた原材料の諸ストック、それにそうしたもの——を以てしてなすことのできることはないからである。このことは、我々にとって、関心を惹くところが消費財のストックを以てそれがなしうることは何かという設問よりも少でないところは僅かであるのみということであり、——だが何が・・・

(4) 社会主義システムにおける人間的要素

摘要

「魂は造型されなければならない」が、それは「ダマスカスでの或る日、人の魂は造り直され、牢獄から解放された人間性は突如として究極の愛すべき人に改造される」といった如くにはいかない。資本主義の進化は動機の基本中枢を干し上げ、心情を容赦なく社会主義に向かわせる。現代人は既に半ば社会主義者と言うべく、家族的動機から分離された個人的動機へと変換がなされている。しかもその変換期に社会主義に向かおうとする心理的造型、即ち、経済的諸類型と同じだけ多くの道徳的諸類型の前以ての実現をなしている。社会主義体制の下では、どんな私的報酬の刺戟からも離れて仕事に赴くことが要求されるような、順応性乃至は道徳的スタミナを保つよう条件付けがなされなければならない。労働者にはその各ポジションに対する資格付けがなされ、「義務の意識」をもって仕事に赴き、管理官僚制のラインスタッフ機構の中に配置される、ということになる。但しファーマーやペザントの分野では指示価格の下でそのままにしておかれよう。社会主義社会の下では生産の管理は「生きるか死ぬか」の問題であり、それ故に資本主義化の中の酷烈な選抜淘汰の所産であるかのような有能の士を如何に処遇するかが重要問題となる。更には別の局面として、「超正常能力者」問題一般が——そうした人士に機能の発揮をなさしめるために——ある。更に進んで、幾ばくかの特権を、貢献者に対する社会的距離の認知を示すものであるように、授与するという問題がある。貯蓄と投資の役割に関しては、投資を引き下げさせるような私的な節儉が長期展望にたった資本形成のための同志達の禁欲によって置き換えられよう。事業所における規律と服従は被雇用者に君臨する雇用者の権威に帰されるべきものであるが、傷ついた且つ拘束された資本主義の下では、そうした権威は、尊敬と畏怖を伴った権力の喪失により、且つ無責任な、また放縦な、また敵対的な態度の拡散により、破壊されている。社会主義のシステムでは私的所有をもってする権威は完全に消し去られるが、その一方で新しい道徳的忠誠を伴う新しい規律と服従がその社会主義的代替物となる。社会主義の経営は権威による規律による訓練の結果として大きく良化されたポジションにあることとなる。・・・その他 (編者)

Ⅲ—(4)— 1 ~ 3 7

社会主義システムにおける人間的諸要素

1 要するに、社会主義が実行可能性をもつという帰結は、更によりよく検討したとしても、何も言っていないことに等しい。よろしい、ではどのように効果的にそれは有りそうか？ そうした設問にはどのように答えられ得るのか？ それについて経験をもたないような何事かについて語ることは、方法論的に言って、どのように正当なものとなり得るのか？——天文学はそれをやっている、そして我々は経験をもっている—— 軍隊、大臣、科学。・・・人間は変わらないものとして存在する？ だが、それは前もって解決済みである。・・・効果的にとは何を言っているのか。・・・欲望充足の中にあるレジャーにおける効果的とは・・・進歩の率や活動分野・・・どこに災禍が—— 特に移行期の経済に・・・しかし社会主義にとっては、それが悪く作動している場合にも、どんな危険もない。・・・資本主義はその給付が(?)するどんな利点ももっていない。・・・そしてそれでも過激派の言っていること、産業は名だたる反労働組合的存在である、と(dasz die Industrie notor. anti-union ist.)。・・・

巨大な長所、全て見通し得ること。・・・無駄(浪費) ——困難な問題、十分に眼がくらむ！ だが多くは除かれている。・・・地位の利益をめぐる闘争、課税といったこと・・・失業・・・サボタージュは労働者と正確に同じだけ企業者にもあるということ・・・戦争にはどのように、反対に官僚制は・・・私的所有についての行論、競争による排除(敗退)・・・そこで正味の残されているところを実際に告げることができない。明らかなのは次の諸点だけである。・・・

1) [成熟](Reife)、とどのように上位階層(die Oberenschichten)が——その持ち味を一層広く発展させるように—— 処遇されるかというその方法、に大きく依存する。・・・

2) 差(資本主義の時代におけるのとの・・・編者)が、それほど大でないこと・・・

3) それは民主主義へ向かった案内となる、規律については、これを社会主義者が削り取る。・・・のらくら者(der bum)——ストライキ参加者・・・それに選抜(淘汰)・・・そこではその場合「解放」について語ったり、人間による人間の搾取について語ったり、することは何の意味もない。・・・

個々の工場指導者が労働者の細君に告げるに至る、——パンについて、またはパーティ集会について語ろう、と。・・・民主主義に即してはその場合選抜がある。・・・どういうわけで、より良く、またはより悪しく働くのか・・・回答は能率を確保するためにできることは何か、である——選抜(淘汰)といったこと。・・・恐らく民主主義の問題は末尾に・・・前に替えて後において「より良く機能するであろう」と。

働かずにおこうとする意志について、故意的怠業の個人的利益について・・・犯罪者が利益をもつ正にそのこと・・・民主主義と個人的自由はそれぞれ異なる事柄である。・・・人間経済学についてのエッセイ?・・・

——Ein Essay über Menschenökonomie——

2 今や正に心理的諸困難が生じることになる。もつとも心理的造形(die psycholo. shaping)はII. において既に扱われているとしても・・・私が表明することに決してうんざりなどはしていない要点、その認知こそがマルクスをして自らを一階級に位置させるよう要求させたものの一つを構成するものであって、要点、この要点を強調する必要があるのは他の如何なるところでなく、ここにおいてである。異なった歴史的状況に対しては異なって答えられうるだけではなく、異なって答えられなければならない、というのが我々が設しようとしている要点である。問題は、時の経過の中でその性質を変えていく、ということである。原始的なものからは区別されるものとしての現代の社会主義を——偏に成功裡に——作動させるためには、一定の経済的パターンの前もっての実現が要求されるのと正に同様に、一定の社会心理的な——また文化的と道徳的な——パターンの前もっての実現が要求されるのである。そしてその双方は資本主義が創出し得る限りにおいて十分に成熟させられている時においてのみもたらされる。一般論としてあるいは歴史的事情と関係なしに社会主義を弁護したり、またはこれと闘ったりすることの意味が何故に乏しいのか、並びに社会主義計画の純粹理論からの、更には我々が前もって吟味してきているその技術的容易性にすらもの、推論に付着する實際的価値が何故に同じように乏しいのか、についての理由の一つはここにある。・・・この点でランゲは? 恐らく彼は現在に対応して論じることを「与えられたこと」としているであろう。その場合、「社会主義のケース」の中で成熟が中心的な問題として扱われているのかどうか。・・・

上記の命題はそれに直面している時には誰も否定しないであろう。しかし多くの人々が特定の論点を論じている時にはそれを忘れている。多くの人々が社会心理的な領域の重要性を、その領域に変化がもたらされる時期と同様に低評価している。・・・例えば封建制度は当時の公的管理の一方法である以外の何物でもなかった。もともとは封土の保持者(holder)であるが、その後もそうであり、領主の関心たるや臣下に即した財政上の関心であったことが本質的であったこと、それが唯一あり得たことであり、且つ当時論じられ得たことであると検証するのは容易なのである。(公的機能が私物化の対象で、私的利潤の源泉とする仕組みによって管理されたのであり、君臣関係の階層秩序の中で騎士や貴族が封土を受けたのはそれより利潤を上げるためであり、そして公的機能である封土管理の権限は上位の王侯になされた奉仕の報酬であった。・・・刊行本より編者)・・・これを以て、そこに近代的行政を要求することは——当時の社会心理的、文化的、倫理的パターンよりして——何の意味をももたなかったであろう。遂には誰もが思いもよらなかったであろうような時代がくる。その間にある怪しげな時代があり、これが問題を設する。これが双方の道を切り裂く。すなわち、私的所有は「必要」、だが永遠にではない。・・・そこでもっと後になると何事が招来するのか!・・・所有と所有の欠如が心理的にありうる。・・・病的である、病気・・・私は「魂は造型されなければならない(Souls must be fashioned!)と指摘した。今や我々はⅡ. において事実上、全体の中の一つの然るべき過程——それは原理上社会主義に資す——を検討してきている。・・・事象に替えて動機を語ることを信じるや、という問題はどこで・・・映像の反転・・・

(本稿でⅡとは第Ⅱ篇の第11章～第14章であろうと思われる・・・編者)

3 ここでは引き続いてエッセイⅡとの上記の結びつきを述べ、その上で動機、生活形態、仕事がしっかりと捻じ曲げられていることを述べる。——困難は過ぎ去った時代を現在と同じように評価するといった場合においてのみ極めて大であるようにみられる。誰にも嫌がられる個人主義を良しとする者にとっては、資産運用において典型的にみられる資本主義的動機がいずれのケースにあっても同様に働いており、それが社会主義により

見習われることは先ず無い。同時に変形されたホテルに象徴されるような生活形態は格別である(但しそれには尚少なからず抵抗がある)。資産は重要性が切り下げられる。そしてともかく残されるのは専門的な仕事——但し生産物と生産が意味するものについては彼は理解していないし、知らない、とりわけ大企業にあつては——と社会的重みだけである。・・・諸政党は一方が社会的に妥当な動機であるとし、他方が資本主義的な汚染と名付けているもの、を過大に評価する。・・・汚染する資本主義的メンタリティについて。・・・

順応性(可鍛性)が極めて困難であるとしても、今一つの慣習の形成と固定という中間的なケースがある。・・・資格と秩序・・・他の設問、どのように文化が、1) 成果と、2) 型に影響するのか。・・・比較・・・研究のおかれる場——元に戻って善と悪に対する領主の立場・・・親方風の態度。・・・そして資産についての行論、a) かつては十分な意味をもっていた——社会主義者の戦術、人が拒絶できないことへの冷笑。・・・いふなれば孤立主義者と冷笑。・・・、b) 今日においても尚何事かを意味する、だが異なって、自己形成(*Eigengestaltung*)、決定に対する特定種の責任上の諸条件、自動性。・・・官僚制の問題・・・どこで?・・・それは配列に依存する・・・プロシヤを比較、一人の理性ある大臣が自ら国营企業を引き受ける。・・・そこで封建官庁を介しての描写、遙かなる牧歌の後の私有化。・・・成功と失敗の対照。・・・だが恐らくは比較のところで、あるいは差当たっては労働条件のところで。・・・

そこで恐らくは労働—生活諸条件を締めくくる。・・・二重の無駄骨(それらは多少は尚所有の利害をもち、そして(?))。

a) 資格の権威・・・古いタイプでは法律家、新しいタイプでは技術者、公務員・・・能力の権威は少なからず存在することが必要である。・・・私は資本主義の諸形態に最も近いよう固執しているのだろうか?・・・

b) そこで恐らくは資産の重要性は何かを。基本的なくびき(*cardinal yokes*)はもはや必要でない。・・・決定の重みと自由・・・ズボンに付した紋様?・・・議論は、資産がよく機能している場合はいつも、先ずは宗教、そして「権利」を・・・c) 社会主義は過激な態度を能率のため必要とされるか、または威厳を損じ、うんざりさせる程度以下の程度に引き下げてよい。・・・しかしそれは本質的なものではない。・・・そうでないと、考察している基本的諸パターンのもつ順応性の前に回帰するものがなく、それ以前に中間的な慣習の形成となる。それは、(α) その時代の中で巨

大なバリエーションの幅をもち、(β) 健全性のために固定された慣習が必要に応じたもので、それ以上に言うことはない。移行に際しては、食事、プライバシー、喫煙、銃、飲酒、性的習慣につき指示されようが、必要なのは制限なのだから、その全てが告げられることはなく、本質的な点はどのみち死すことになる家族の態度である。・・・d) 社会主義においてタイプが作用することこのようであるとして、どのように社会主義が成果とタイプに作用するのは別問題である。・・・e) 有閑(レジャー)階級——それに資産階級——にはそれほど単純なものではないことを留意するだけ。・・・特権はただ勝ち取るのみ・・・

4 (プラクティカルには)実際に不可能なこと——課題が大きすぎ、しかも込み入りすぎている——と言われる。もし私がこうした結論を得たとするならば、それは社会主義が管理的(行政的)に(administratively)不可能であること、一個の不可能な管理(行政)であることを意味するということになる。問題の課題は二つの事柄に煮え詰まる。

a) あまりにも込み入っている、言ってみればそれは一つの立案知識階級を要求するのでは、(そしてその場合、それぞれの計画から社会主義は可能であるだけでなく、より良くもあるということが、後になってからのことではあるが与えられるのでは)。

b) 一個の道徳的水準(ein moralisches Niveau)が前提となる。それはそこにはないものである。(資本主義にあってはぐずぐずした変更ができる、社会主義でも尚或る官庁にみられるように常なる怠業が可能である、しかしそれは今日の資本主義におけるほどに易々とは行われぬ。)・・・再び成熟が。・・・

a)とb)に付して・・・これらの全てについて一つの誤りがある。それが全てに先立って払拭されなければならない。・・・直面させられている管理(行政)的な仕事は、もし一つの頭脳のみがおかれた一つの部局が、資本主義的組織で成し遂げられるあらゆる処理——意志決定——の全てを成し遂げるが如く実行されるならば、その困難たるや不可能と言える程大きい。もとより処理の問題が今も資本主義下にあったものと同じである——同じ条件であることは今や確かであると——仮定するとして。このことは誰もが承認できようが、それは了解し得るそのポジションが想定せられた如きものである場合においてのみのことである。しかしこれに類似の

問題を持ち込むことは明らかに許されそうにない。もしポジションが正しく設せられるならば、現存するような資本主義の中央機関——我々がイメージしてよいであろう諸企業、諸銀行、あるいは何等かの中央当局の経営者達とゼネラルスタッフの全体——が直面しているであろう困難に比して、(社会主義のポジショナーの)困難は一層大ではなく一層小だということが、すぐにも検出されるであろう。・・・

a)に付して・・・我々を実際的で具体的であらしめよう。我々は、我々の概念に即して、「内閣」だけを作動させるべく設している。もとよりこのことは重要なのだが、能率的な行政事務のため必要な一般的な社会的文化的条件を想定したい。その最初の仕事は選抜、または指名、または選挙である。しかしこの後者を除いて、差当たっては我々は行政の官僚制的方法を想定する。大臣は多数派性を確保しなければならないが、彼は(官僚を)任命できる。・・・行政サービスの精神その他はあとで、我々はイギリスを念頭におく。・・・

官僚制についての指摘は如何にも多い。「国家は何物をも創出しない」という、そこでの真正の行論は官僚制に対峙して私的所有や私的イニシャティブに味方するものである。・・・しかしそれは唯一のものではない。・・・疑問は、そうだと軍隊の指揮はどれ程に行うのかである。・・・持っているものは保持すべき・・・その事だけではない。・・・α) 技術、β) 資格試験の刺激・・・どのように最良の(能力をもった)人材がもち来たられるか、並びに全ての手持ちの能力が用いられるか。・・・一方において「部局」、他方において「街のカフェー」・・・「官僚制的社会主義」、選挙による方法——選挙式の判定あるいは将軍の選出、アテネにおける——それはシシリー遠征やアイゴスポタミイ(Aigospotamoi)にも拘わらず、それほど悪いものではなかった。マラトンとサラミス、更にペリクレス・・・プリンキポ伯(Earl of Prinkipo)についてのジョークはここで。・・・

5　そこで、個々の事業所における個々の職員の仕事が一層に容易であることが看取される。彼に対しては資本主義的企業者に対してよりも——監督者の秩序だった、または自動的な観察によって——一層多くの事柄が設せられる。その上彼は(自分の行動に対する)他者の反作用のこともそれ以上に多く知っている。この反作用は省庁(省庁の部課)を通してのみ存在する。消費者の反作用とどのように技術が仕上げられていくであろうかは—

—資本主義の下には存在しなかったこうした問題の処理は、殆どの場合、主要な問題ではないという長所は有りはするが——依然として諸問題として働き続けることはもとよりである。その傍ら他の反作用——多分に他の企業乃至は他の産業からの反作用——はないか、または対応しなくとも同じである程に対応が容易である。・・・より良き人材がそうなきしめるのか？・・・

省庁の部課に留まろう。それらは諸企業のデータ(諸報告)に基づいて、且つ生産のため構成されているそのシステムのもつ諸特徴に基づいて活動する。そこでその活動は指導(lead)であるか、または単に統制(control)と調整(coordinate)であるかである。この活動はルーティンに還元されることができる。総「仕事量」はデータの明確性と調整のための機構——各産業への関与——によって少なくなり、簡便化される。ここでの仕事は何であろうとも、一個の軍隊のように——現代の軍隊は鈍重ではない、ワーレンスタイン(あるいはナポレオン)の軍隊よりも軽快である。恐らくは仕事と給付の手段の間(zwischen task und Mittel der Leistung)の区別を設けることが重要であろう。そしてこうしたことは打ち合わせの会議に関連する。・・・そしてそのようによく出来上がっている計画——事実大いに自動的であり、大臣は一般的リーダーシップだけをもつ、ひらめきと。単に実務上の精神だけでこのようであり、その強さがこれであり、理論上のものではない。

貴君は冷笑するのか？ そうした何か「より良い」もののあらゆる示唆に。よろしい、それは後で述べるとしよう。だが、もし責任がとられるのならばそれは挫折することなく作動できることは明らかなのである。・・・喫茶店・・・この行論の完成にはその前もっての存在が実質上の条件となる。より規模の大な乃至は最大規模の産業と関連していく。しかし、その一般的目論見に入るのは何時？ その場合ある種の部門——例えば農業——は別に扱われ、農業者達は排除せられると決定されると想定しよう。心情的なものだけであるにせよ、相当に大きい軽減となるため、それは集団的諸利益の創出である。農業者達は計算された提示価格に対応して生産する——それは現実の諸価格！——、提示価格は得られている「価格」から引き出される。もし価格固定にもっていく何かがあるのならば、相当の投資分をプラスする。このようにして所得が処理される。需要は他の産業と同様に見積もられる。・・・そして社会化される諸産業、鉄道、機械工業、肥料工業、それに(?)といったものは計算がすでに済まされてい

る。現存している機構よりも注意を多く払う必要はさほど大きくない。・・・それが民主主義的であるのかどうか、は民主主義の名の下に了解されているものに依存する。・・・あるいは衆愚政治・・・

結論として、私は、資本主義的な文化に理解をもっているとしても、社会主義の計画に非友好的ではない、ということをはっきりしている。それだから、もし私が——我々がそうであるように——ニューディールの社会主義者達に対立的であるならば、それは一個の矛盾ではないか？・・・そうではなく彼等はそれを駄目にしているし、ニューディールなるものは軽はずみなものである——前進の阻害であり、社会主義を戦争への船出と共に至る所で駆動させることで破壊する、そうしたものであることは確かである。・・・それは反動であろうか——もとより利害が担われているが故に・・・いつの場合にも私は建設的であるべきであろう。・・・

6 このシステムを作動させるために要求される「その不可能ともみえるような道徳性の高さ」に関する事、貨幣と私的報酬の刺激なしになされる企業者努力に関する全ての事、並びに如何なる強制からも解放せられて働き、しかも義務を果たしている——現在取引停止(traffic repeals)に服しているのと同じく自由意思で自ら納得し且つ好んで義務を果たしている、換言すれば自分の民主主義的な決定等による経営に対する貢献を果たしている——ような労働者達の理想主義に関する全ての事。・・・もはや、がっかりさせられることは何もないと。・・・

この異議に対しては社会主義者達自身の責任が大きい——懸念はあるがショウ(Shaw)を参照されたい。・・・社会主義の時代に向けて、乃至はともかく移行期のボルシェヴィキ政策に向けて、彼等の殆どは皮肉っぽくではあるが、ロシアの田園詩を編じた。ウェブ(Webb)——あたかも資本主義の下にあったものとは別のものであるかの如くに！ 意図されているものを見るだけのことで、如何にあったかの事例とする。そこにはそのイデオロギーがあることはもとよりのことであろうし、そうすることで人々を訓練することになるろうことが強く意識されている。・・・社会奉仕、今でも！・・・しかし我々は、道徳的スタミナ(moral stamina)をもつことを要求されることが資本主義下においてよりも多いのではなく少ないのだ、ということを見究めるため、決まり文句についての我々の考えを明

らかにしなければならぬだけのことである。・・・資本主義は多大の——更に多くの——責任を要求する、自立と自制の双方も多大である——「プロテスタントの倫理」を参照——、更に自分の行動の諸結果の受け入れがあり、更に将来のために働き、しかも「必須」のことでない場合にも約束を守るという徳義が要求される。・・・より少ない頭脳をと同じようにより少ない道徳だけしか、社会主義を運転するのに必要とされない。・・・

このことは次のように了解されるべきである。 α) もはや何の逃げ口上もない、この理由につき、 β) 反社会的活動へ向けての何の煽動もない、この理由につき、 γ) 仕事が全く無報酬にあてがわれる、この理由につき、悟らせられることが遥かに効果的であろうような完全に同じ動機と同じ義務を労働者はもつ、と。指導者は金銭面での幻想的成功の可能性をもたないし、私的帝国、王朝、閥閥的位置などにはあり得ない——確かにこれらはともかくも崩壊していき、経営者や専門職的グループに対する所得に替わる私的な立場からの一般的利得(α) 栄誉、 β) 文化的給付) はさほど大げさに定義する必要はない。・・・公務員の仕事は国家の機能に任じるものであり、公務員が多分、企業者よりも多くの影響力を多くの資源運用につき、もつであろう——それが熱狂をもたらす根拠である——。そしてもし公務員が動機をもつところがより少なく、しかも仕事をするとところがより少なくなるとすれば、何事が起きるであろうか？ 破産に至るようなことはない。一通の清算報告書が全ての罪をカバーする！ 運(fortune)は入ってこないだろうし、そうしたものとして示しだされる必要もないであろう。道徳的に標準以下の人物は変わらない(より僅かな休息)。

7 ここでは、すでに二つの事柄が混合されている。諸動機と外的諸条件のもたらした単純な諸変化とこれまで多分に習慣の中に置き去りにされていた性質の変化。・・・

資本主義における動機付けの基本中枢は、その進化により干し上げられていく傾向をもつ。個人(the individual)は「分離された(分遺された)」(“detached”)ものとなり、言ってみれば、家族設定の一要素として、及び世代の限りなき連鎖の一つの結び目として、及び彼に手渡され彼の子供達

に手渡されていく資産の受託者(trustee)として、そのようには自分自身を感じたり考えたりすることは最早ないといった存在となる。・・・生活に対するもてる全属性とその諸価値とそれに付帯する諸問題は——実際上のあらゆる個人的並びにビジネス上の諸々の事柄の中でそれ自身を言い張るような——最も意味深き変化を潜行させていく。そうした変化は——ビジネス上の態度について言えば——弁護士や医師によって例示されるような諸タイプのビヘイビアの中に観察され得よう。・・・これらは以前から既にそうだろう。・・・もっと遥かに多くの全てのタイプが自営経営者と企業執行部の中に観察されよう。更に新しいタイプが出現し、公務員と財務官(金融業者)によって代表されていよう。(以前にはその種のことは誰がなしていたか——18世紀の貴族。)・・・

α) これら全ての変化がどのように進んでいるのかは、基本的な諸パターンにおける変化を語るのに必要ではないであろう。しかしそうは言っても変化は更はずっと先まで進んでいるのである。・・・全ては社会主義を準備する方向に、その作動を益々以て可能とさせる方向にある。・・・更に個人的使用のための財の蓄積が必要とされる場所がより少なくなるということが重要である。・・・それに就業の機会を見出すための他の手段が、それに権力(勢力)——秩序が。・・・ズボンの上に紋様を付すことを認可する、更に肩書(titles)があるが、これはこれまでも用いられている。——何が寄与の理論(Theorie für contribution)となるのだろうか?・・・

β) 変化が人々をまたは過程を侵害するものでないならば、更に能率的とされるべきことがより少ないならば、変化の敏活性が重要である。更に前もつてもたれる発展の重要性がある。社会主義の成果はどんな状態に眼をあてるか(動機をどうもつか)に従って全く様々である。そこで恐らく先に述べられたことが? それはいつも弁護され得るものではない。・・・更にここでは資産の問題は省略する。・・・

これはもともと全てがエッセイⅡのための定式化である。・・・そして資本家ハウスのホテルはどこで?・・・Ⅱのための材料・・・スイッチを切り替えて良き光を。・・・

8 どの程度にまで順応(可鍛)性一般は必要なのか・・・状況適応的移行の必要性・・・社会主義が我々を鼓舞することは何もなく、また我々を恐れさせる何ものもない。・・・資本主義は動機を変更することにより魂

(souls)をゆっくりと、だが非情に(inexorably)社会主義に向けて形作る。がみがみと吠える。・・・部分的には、a) システムの作動によって、b) 課税などによって、そこから進化させられた意識構造が自ずからそれをもたらす。・・・資本主義的な賞金を主張することも、他のものを切り捨ててでも働くことを拒絶することも、このようなことではないのか?・・・緩慢な移行の必要性・・・このようにして、 α) 資本主義的發展は自身の内に I を形作り、それが創出した政策によって II を形作る——それはだが移行でもあり、しかも実際のところ部分的には他の条件付けによって。・・・ β) そこで適応するべきものは何か、適応させられなければならないのは誰か、そして何に対して適応するのか。・・・更にその上、適応するのは理想型か現実のそれか、を問わず資本主義に対してか、あるいはまた、ある意味深淵な価値(ein mehr inscrut. Wert)に対してか、の区別がある。・・・

国務次官の現代的タイプはどこで?・・・そしてそれは「若干の一僅かの」個人主義者達に対して当てはまるのではなくして、常に問題にしている人々に対して当てはまる? ということ。重要ではないのではない!・・・プトレマイオスの宮廷、ギリシャのガレー船、それに現代的ホテルはどこで?・・・資本主義は正に下層と中流層の購買力を高める、ということ。

9 我々は先行の章(エッセイ)において、資本主義的進化が如何様に——ゆっくりと、だが非情に——社会主義のための事物と精神を形作るか、を検討してきた。我々は想起するのだが、資本主義がこのことをなすのは、直接的にはそれ自身の働きによるものと、間接的にはそれが創出した社会的並びに政治的雰囲気とそこからもたらされる諸政策の双方においてである。しかし、部分的にはあらゆる事象において、その変化がもたらされる諸方法は——それが順応(可鍛)性を含むであろうような何等かの造型であるというよりは——むしろ単なる条件付けに似ている。この変化は主として最も重要な諸動機のいくつか——賞金、刺激、生活の習慣、資本主義を特徴づける人生に対する諸態度——を移動させたり麻痺させたりするところからきているのである。とりわけ著しいのが家族——家政と家業——に錨を下ろしているものからのものである。

- 1) 関連し合っている！・・・資産の意義、資本主義の標識灯、労働の意欲、服従・・・
- 2) 欠乏はその全てを資本主義の内部で一掃されることができ、a) 資本主義の働きで、b) 資本主義の用意した手段によって。・・・
- 3) 移行のところに戻ろう。・・・提起された行論は不断に正しく可能性を設けている。・・・問題は尚どこまで他のやり方で定式化されるべきかである。・・・ここで現代人が・・・オフィスで綿密な仕事をなす執行部は、決定的に重要な個体として自らを充たしている、という点ですすでに半ば社会主義者(halber socialist)である。・・・身体と精神の順応(可鍛)性は基本的問題である——理論よりもずっと重要である。・・・労働者においては、働こうとする意欲と服従、仲間と衝突しないこと、が重要である。

10 社会主義が時折前提として保つものとして魂の改造ということに
関連して、我々はたちどころにその最も良く知られている議論の一つに決
着をつけることができる。ここで展望されている社会主義のシステムを機
能させるためには、一般的道徳性のある到達し得ざる水準が要求されるで
あろうこと、それを反社会主義者がもち出したとすれば、その平明な解答
はそれはそうでないということになる。・・・到達し得ざる水準とは、社
会的義務の通念やそうしたことの他には、他のどんな動機によるものでも
なく働こうとすること、そしてストライキ参加者と行動を共にしようと
はしないこと。・・・社会主義機構の運行がもつ技術的諸困難についての先
行の行論においてみられる完全な平行線の中で、我々は反社会主義者が仄
めかしている種類の諸考慮が、社会主義者の修辞の中のいくつかのどぎつ
い粗雑性に向けられたものとしては、妥当なものがあると認めてよい。し
かし我々は次のことを認めなければならない。指導者とそれに従う同志達
に要求されている——理想と同様エネルギーにおいても——道徳的スタ
ミナの最小限の保持必要量(the minimum fund of moral stamina)は商業
的社会的帰化公民(denizon)に要求されているそれよりもより大なのでは
なく、より小であるだろうことである。・・・「動機」はここでは恐らく行
動についても同様に、但しそれはロシアのような場合には別である。・・・

その根拠ははっきりと個人的要素や個人的資質によるようなことは、殆
どの場合、その露な機能行使において役割を演じることが益々以て僅かな
ものとなっていくということである。新聞の見出しからうかがわれるよう

な否定されている全てのこと。・・・福祉、安全、馬鹿げた事・・・比較の場ではどんな種類の人物であるのかに立ち還ることが重要である。・・・洗練されたものとは何か。・・・噛むべきものが何もない時に歯を失うこと・・・カクテル・・・諸根拠・・・a) 資本主義的生活は自己依存の性格、闘争心、先見性といった徳目を——個々の知識人と同程度にかそれよりもずっと多く——要求する。・・・b) 言葉に忠実であること、逆境に自若としていること、行動を共にしようとする事、等の徳目の全て・・・c) 寛容、義務、それに自己否定もまた、経済的配慮においてはこれを追求し、且つ目をそらす——そこにおいて社会主義となる。・・・d) 一層多くの事柄が同志には設せられ、そして指導者には機械的処理が、これらの資質の全てに対し展望されるものは何もない。・・・

機械が労働節約的であるように、機械化された社会がそこにある。・・・そして難問——この設問は、だが本来はもっと後に来るものではあるが——もし理性的に扱われるのならば処理されることが出来る。・・・彼が処理するのだろうか、それとも反対に100万人を墮落させるのに任せることが許されるのか、はどんなことが後に来るか——赤い同志達の要請と粗暴性——という設問に道を開いている。・・・ともかく彼は今まで甘やかされていた以上に彼を甘やかすことは困難であろう。・・・

それでは同じ精神を以てする他の態度と精神の変化の間にある区別はどこで。・・・精神の順応(可鍛性)・・・社会主義——それでも適応においてそれを語る。・・・

11 社会主義を作動させるのに必要となるであろう倫理水準が何であろうとも、新しい諸条件に対する適応の諸問題——人間行動の再条件付けにはりついた問題——に直面させられることは確かである。社会主義者の信念の半宗教的な性質に対するものを除けば、それは何事をも論証しない甘美な章句を以てしてはみてることはできない問題である。ダマスカスへ通じる道、その道は社会主義が我々の精神を——ひとたび資本主義の諸拘束と諸牢獄から解放するならば——奇跡的に再構成するであろうという想定なしに旅することは可能なのであるが、その道での前進をはかる試みの中で、我々は「生活の社会主義的形態」という言葉によって覆われている「諸可能性のもつ困惑するほどに広い範囲の問題」によって煩わされるということである。・・・適応は現実の内容が無視される程度に従って重

くなったり軽くなったりする。・・・社会主義は一個の文化を一意に規定するものではない、ということがいつも反復し強調されなければならない。・・・更にその他に、それぞれ異なった諸段階がある。単純には「今」のことか、それともそんなことは全く問わずでのことか？・・・あるいは適応の範囲につき直接的に、そして次の点を添えておくだけにするかである。すなわち、様々な諸環境の下での様々な反作用とそれらの諸パターン——習慣並びにそれ以上のもの——の変化下での順応性(可鍛性)、この両者の間の区別を設けることはできるということ、更にその諸パターンは——区別がそれぞれの立場から信奉者に対し自由になされてよいとしても——時間をかけ、しかも苦痛と困難を伴って変えられるのだ！ということ、を。

12 しかし、その背後にあって今一つの問題が視野の中に入ってくる。必要とされる道徳的スタミナの水準がどのようなものであったとしても、社会主義的生活の形態は適応の問題を惹起することで他のそれとは充分に異なるということである。この問題は社会主義の美学についての甘美な修辭(mellifluous phrases)によっては処理され得ない。つまり、「ダマスカスでの或る日に、人の魂は改造されるであろう」(one day of Damascus, remake the soul of man)といったやり方では——牢獄から解放された人間性は突如として究極の人であり愛すべき人に改造される(reformed humanity freed from prison suddenly ultimative and lovability)——。それはどんな正確度をもってしても答えることはできなく、後にもっと更に明らかになるであろうように、「生活の社会主義的形態」なるものは困惑させるほどに「広い範囲の変化の幅を覆う」という理由からも一層答えるににくいのである。それにも拘わらず、常識的な結論に達しようとすることに望みがないわけではないように見える。・・・重要な問題は、破局に至るような習慣の容赦のない変革ではなくして、ブルジョワ的業績——a) 事実上の業績、b) 事の性質によっては決して成就し得ないような業績——の評価にそれが依存するという事。・・・

13 この目的のため我々は設問を——幾分かは人為的であることを露呈しているが——二つに分ける。我々の好みと嫌悪、刺激と諸動機、価値

観の諸構図、あるいは諸君が望むならば我々の反作用についての諸パターン、等は今あるものが残されることはあり得よう。他方、行動(諸態度)の中には——心理的な学習を伴う、伴わないを問わず——、それらを様々に異なって再条件付けることによってもたらされるような尚も必要とされる変化もあり得るということである。すなわち後者は一個の新しい社会的環境であり、それは新しい刺激を提供するものであり、しかも古いタイプのそのいくつかは提供しないものである、の中に我々をおくことによってなされる。後者の方向での様々な試みだけが、我々が人間性質の順応性(可鍛性)と称してよいであろう問題を含む。この順応性(可鍛性)が提示している明白な諸困難の故に、我々は先ず、どこまで我々はそれなしに進みうるかを検討するであろう。だがそれはそのように習慣を形成するものであろうか? . . .

1 4 労働の意味(Sinn der Arbeit) . . . 経済的に成就(成功)(achievement)するということの意味 . . . そうしたものは「泥沼に足を突っ込む」 . . . ランゲの目標は満足——充足——の意味において位置付けられる「生活の単なる事実」(mere fact of living)であるようにこれを完璧に作り上げたものである . . . 私的資産につき——どれ程に論じられたことか、すなわち、意図的に(willig)願望価値(Wünschenswert)を . . . そしてここでは、a) 精神衛生の要素(Element der psych, Hygiene)として、b) 機関の中枢(center of moter)としてのその重要性の中において . . . 追憶を抹殺する(killing off haunting)ことによっても重要、多分に遊戯的な満足ではあるが . . .

1 5 適応させられなければならないのは誰か? そして何に? ここではまたもやファーマーとペザントの領域には——以前同様の意味で、言うなれば、彼等の私的生活の枠組みや所有物の経営についての諸々の多くのことがある故に——触れずにおくことで、行論を構築するという単純化を図る資格をもつ。このようにして生産大臣は共和国の社会主義原則を何等傷つけることなしに、小商売や職人層の世界の完全な破壊を差し控えることで、その行政的事務を促進することが可能であろう。小商売や職人層は社会化された諸産業の中の一部としてのオフィス以上のものでも

とよりないことになろうが、店の殆どにとっては、彼等の現在の状態からはさほどには変わらないような準自動的状态において、そうしたものとして存在し続けていくであろうことがあるだけであろう。・・・

熟練または非熟練の労働者達と書記達(事務員達)の大部分もまた、彼等の運命と彼等の仕事を大きく変えられることを見出す必要はない。なされるべき仕事は本質的には変わらないであろう。仕事に向かう態度は、後に検討されるであろうように、改善されると期待するのがもつともであろう。資本家の強制のないところでは大衆は働くことに赴かないであろう。このことを疑う人々は、今日どんな仕事においても、働くことの心理的前提として注入されてある「義務の意識」の量と高度に「民主主義的」な社会主義においてさえ完全に適用可能である「強制」の量、の双方を過小評価しているのである。「より健康的な外観」(“healthier outlook”)・・・必要に応じて生活を得ることの刺激なしに働こうとする意志——その場合困難として現れるものに対して責められるべきは社会主義自身である。・・・社会化委員会・・・比較への考慮・・・

16 更に規律と服従の必要な量を——社会主義社会の中で——確保することの可能性を疑う人々は、同様の意味で現存している規律の量を過大評価している筈である。それは生産過程の配列であり、伝達の装置であり、そういったものであるが、現代の労働者達を規律するものであって、彼等を怯えさせている彼の監督者を規律するものではない。そしてそうした規律の喪失が社会主義へ向けての移行の中からは出てくることはあり得るのである。・・・心理的に？ 意図的に？・・・兆し(rudiment)・・・それは拘束された資本主義を以てする比較である。事業への小運転者を邪魔するものではない。・・・我々はここで提起している諸原則を後に論じるであろう。差当たっては權威の欠如は物事の社会主義的構図の中のどんな部分にもないのだ、ということに注意しておくことで充分である。更に私は意識充分な社会主義者達がこの点に関しては、多分に言及を避けようとしていることを見逃すものではない。——彼等は実務的な質問に直面した時には、1919年にいくらかのヨーロッパの社会主義者のグループがそうであったように、いつもそうする。だが日曜学校的ムードの中ではそうではない。例えば私は次のような人達——2～3人のことだが——に会ったことがある。その人達は職工長及びそれ以上にランクされる全ての席に

選挙原理を適用しようと準備がすでになされてきているとみられる人々である。更に言うとも選挙は「もとより」指導乃至は監督にあたるべき問題の職工長やそうした人物に対応する労働者達によってなされるのではないこと、——そうではなく何等かの他の、とりわけ弁護士といったグループによって行われること——といった条件を、私がそれを示唆したのではなかったのに、随意に付しさえしたのである。・・・ボルシェヴィストはここでは考慮から外れている。・・・

労働者達が職場を離れる時、彼等は家庭に帰るであろうが、その家庭は——我々が取り掛かっている問題に関連する諸点において——彼等が現在帰っている家庭とはさほど変わらないであろう。更に自分の閑暇時間を多分に現在と同じやり方で充てるだろうし、充てることできる。このように社会主義が彼等に与えるであろうこれまでとは異なった唯一の点は「選択の自由のいくばくかの犠牲の上に得られた仕事の安保障」(job security at the some sacrifice of freedom of choice)ということになる。もとより共和国は特定の諸目的を達成しようとしてビヘイビアにおける更に進んだ変化を課すことはあろう。しかしその場合においても、これはそれら特定の諸目的の問題であり、社会主義ならばとしての問題ではない。

17 以上みたように、社会主義が何等かの大適応をビヘイビアにおいて要求する、といったことは結局のところ、どんなケースにあってもありはしないし、またその必要もないであろう、という結論に我々は追いやられる。・・・そこではすなわち、人々の大多数に対しては、それが順応性(可鍛性)——人間の性情の基本パターンにおける変化——を要求しないという幸運をそれは導いている。a) これらの人々自身に対して、b) 総体(彼等の仕事をつくる)に対して。・・・但し、このことは留保されているケースにあってはそうでない。私はそれぞれのそれが出来得ない人々のケースを召喚することで、読者の感性に衝撃を与えるであろう。・・・a)脅かされるか侮蔑されるかの感情、b)機能充足の下方への削減、c)彼等の習慣の屈折・・・三つのタイプのうち二つだけが・・・そして各々は医師や弁護士には適用されない——彼が習得したものを適用するよりも以上のことをなし得る。・・・問題の性質と重要性について・・・恐らくここで、そのようにして、それが意味することは何かを告げる、すなわち、差別を設ける・・・ブルジョワジーの生活形態・・・巨大な差別、但し過渡期(移

行)は持続する。・・・しかし職工長は彼の小さな裁量(way)の中に熟練した労働者を求めるだろう。・・・

生活形態(Lebensform)(ホテル)・・・しかし、社会主義に対する切り下げられた抵抗という見出しの下に、尚又来るところの全てがある。・・・そこで更に有閑階級についての一考察がくる。・・・彼等は何者か？ 例えば自分の財産を管理している人物。・・・それが科学的業績を担う。・・・更に資本主義的ブルジョワジーと同盟させられ得るのでは？ そうしたこと、すなわち職業上には——及び準職業上のことも含めて——大衆には何の危惧もないことを示している。従って自由に全てが存続させられる！・・・特定の職業には訓練がある——軍人、子供達や孫達のスポーツ(人々自身のではない)。・・・とりわけ土着の貴族達・・・果てしなき文化的諸可能性を掘り尽くすことについて！・・・誰も上昇しない、何の対立者ももたない、という暗黙裡の想定、そしてこの場合における人々の巨大なる量は何の付言も要せず高揚を可能とするのでは。・・・

このようにして上層問題(die Oberschicht Frage)が残る。このグループはどのように重要か。弁護士の種類の中には役に立たない社会的グループがある(生産の社会的過程を保護する——あるいは反社会的諸利益を悪しく防衛する——それは完全に同じである)。医師や技術者は三つの事柄をもつ、a) 働き(work)と身分(Stellung)は多分に同じである、b) 低価値を甘やかすことの嫌悪、だがそれは社会主義を甘やかすものである、c) 充分な能率を以てする量産競争下における標準の生産。・・・その報酬は、当然のことながら5万ドルや10万ドルは充分により高いであろう、しかしその人物に正味に支払われる諸サービスに対する控除分はもはや手当されることはないであろうし、老齢に対して手当を必要とされる控除は少なからしめられることはあり得る。

18 それ以上に今一つの局面がある。何故に「超正常的な人物」(supernomals)が機能発揮の条件として優先的な取り扱いを主張することになり易いのか。この理由の中には単にそうした人物の事情だけでなく、余人を以て替え難し、がある。殆どのケースにおいて超正常的な業績(supernormal performance)は集中と緊張の結果であり、その結果は長期

的には優れた生活諸条件の下においてのみ耐えられ得るものである。こうした範囲でそのような諸条件の必要性についての主張はその人物の仕事に対して適度な状態を保つために許されるべき状態の確保である。経済的合理性の問題として、社会主義社会はこのことを——価値のある機構を価値乏しき機構よりも深く留意する傾向にある筈であるのと同様なだけ——深く考慮しようとする動機をもつ。競馬馬や懸賞牛は全ての牛馬にその額を与えることは全く不可能で非合理である程の大金受領の特権をもつ、それと同様の意味での経済的特権を、それが意味するのはもとよりのことである。これらの特権の必要な範囲について言及される必要はない。それはかなり広い幅の中で一層可変的である。我々にとっての問題であることの全ては、社会主義の経済的エンジンの機能発揮はこのクラスの困難で痛められる必要はない、ということである。たとえそのために必要とされることあり得るその最も充分な可能的重みを我々が彼等に帰属させたとしてもそうである。しかし我々が扱っているのは社会主義社会がそうするだろうことはあり得ることであって、社会主義社会がそうするだろうということとは全く別の問題だという点が——ここでも再度に渡って——強調されなければならない。・・・

非常によく似た結果が「親方の眼」についての修辭と結び付けられて然るべき第二グループの諸要因の議論からも出てくるであろうと看取することは容易である。能率的な生産と自己責任での決定の自由との関係は——オールドリベラリズムがそうだと信じてきたほどには——明白とは程遠いものがある。先ずは、私的産業の人物と社会主義共和国が雇用することになり易い指令機関の人物、両者の比較資質の問題である。少なくとも私的企業が最上の頭脳を惹きつけているような国々にとっては社会主義経営はこの理由のただそれだけで絶望的に劣ることになり得る、という諸ケースが容易に描かれ得る。社会主義にとって必要なことは管理諸階層——私は彼等を極めて厳しい選抜(淘汰)の過程の産物であると信じている——の意欲的な協力を確保することだ、と私が強く主張してきたのは正にこの理由による。だが尚、社会主義の青写真に内在するポテンシャルティについての我々の議論から知れるように、全体から見て問題は人物の質の問題ではないのである。・・・この点にまで考慮が至るとき、経済生活の官僚制化(the bureaucratization of economic life)の問題がその適正な光の下に現れてくる。私は告白しなければならない。私は社会主義的経営を単に一個の巨大にして全てを包攝する装置である——それ以外の何物でもない——と想念する(visualize)ことができる。私が知覚し得たこれに替わ

他の構造は全て失敗乃至は挫折に終わるものであった。しかし私だけではない。巨大企業のもつ官僚制的諸要素を観察し、そのようであることが不可避であることを認知し、しかも官僚制の作動の下で人々が、とりわけ阻害要因だと考えているような諸特徴の殆どを回避してきたことをもって、その成功の相当部分であるとみている、そうした人ならば誰でも官僚制化を恐れはしないのは確かである。

19 今日、官僚制化に反対する立場からの論と1850年の所有一経営者(owner-manager)のもつ個人責任制のヴィルチューを絶賛する論の両者は、近代的軍隊の民主主義的な管理を遺憾であるとなし、軍隊がそれぞれの族長によって命令されるような小グループに分断され尽くされるべきであると主張することを弁護する、といった論と比肩されるほどの論なのである。自分の金で自分の過失に対する支払いをしなければならない、という意味での責任体制は——願望的思考がそれをもつほどには敏速且つ完全にはいかないであろうが——ともかくも運行しつつあるのであり、そして大規模会社に実在している責任体制が社会主義の構造の中で再生せられるであろうことは疑いない。

物事の不可避性の認知はそのことが引き起こす問題をもとより露にしない。官僚制の兵営の中での個々の頭脳の機構発揮について引き起こされる難点とはそれでは何であろうか。金銭的な自己利益ではない、少なくとも第一義的にはそうではない。そうした苦情があるのならば、それは私が先に暗に示したような諸方法で以て救済され得よう。遥かに重要なのは他の要素である。政府官庁は——我々がそれを否定し得べくもなく知っているように——最も活動的な精神のいくつかに及ぼす沈滞させる効果がある。その場所の気風(genius loci)は様々な着想を不快に思い、それらを組織的に退けようとする。たとえ不快に思ったり退けたりしなくとも、それらの新着想はそれをもてる人を批判にさらすような多くの手を通して通過していき、更にその途上で死んでしまうか、あるいは歪められた形態で港にたどり着くことになり易いのである。委員会が支配権をもっているところでは、多数の立派な人物が仕事の中の何等かのはっきりした部分に彼自身を特化することを止める。そうでなければ——成功裡に事業運営に任じている委員会のケースにおいて確かにそうなのであるが——その委員会は一個の強力な人物の覆いマント(隠れ蓑)以外の何物でもなくなっ

まうのである。イニシャティブへ向けての自分の潜在能力が挫かれるため、個々の同志達の精神はお手上げとなり、更には消極的批判主義(negative criticism)及び仲間達の反感の態度に向けて自らを退化させるのである。もしも仕事を他ならぬ自分の仕事として特定されていたならば、自分達の意見のための最後の砦として闘おうとするであろう人々に対して、どうでもよい問題とさせる傾向のある協同型の意志決定には、痛快感と喜びの欠如がそこにあるのである。このことはあらゆる人生行路においてそうである。そしてまたこのことは、法廷、大学、研究機関等が何故にその役割を果たすところが——そこに就任することを命ぜられた人材から見て役割を果たすと期待されたほどには——ないのか、という理由の一つでもある。・・・

20 しかし、そうしたことの全ては一にかかって取り組まれている事柄が死活の問題ではないが故にそうなのである。重要であると感じられている事柄は通常——多くの例外はあるが——一人の人物に手渡される。少なくとも軍隊は委員会によっては指揮されないのが原則である。社会主義社会にあっては生産の経営管理が死活の問題であるだろう。資本主義国家の官僚制は非能率であることが許されるが、社会主義の官僚制はそれが許されない。しかしながら私はこんな慰めを以て満足するには程遠いところにいる。私はこの理由の故に経済進歩のペースが沈静化する以前における社会主義の成功を信じないのである。私は先に社会主義経営がもつ特定の諸利点を進歩の土台部分の合理化と計画化にあるだろうとみてきた。しかしもしこれが官僚制的諸方法で行われることになれば、そうした利点は高価な買い物となる恐れが充分にあらう。あまり前のことではないが、私はある政府機関で発行された一つの素晴らしいレポートを熟読した。その有能にして良心的な著者達が立証せんと試みていることは、資本主義的経営の前途に新しい可能性などは今やないこと、及び実際に産業的分野における偉大なる事柄は全てなされてしまっていること、である。それこそ我々が有為な政府官僚達にそこに達することを期待してきた結論そのものである。彼等もまた「資本主義的企業は、もし産業的進歩が継続されるべきならば、尚必要であることの論証」というタイトルの下で自分達の報告書を刊行したらよかったのでは。

この主題におけるほど偏見や修辞によって汚染された主題は少ない。論

争に向き合っている両陣営——オールドリベラリズムと国権万能主義——は相手が合理的には防衛できないような位置及びグループの利益を見えなくする効果が考慮される場合にのみ解かることができるような位置、そうした位置に自らをもってくるよう策略を練ってきている。オールドリベラリズムにとっては国家はその性質上非能率で腐敗しており、殆ど馬鹿げたジョークの尽きざる源泉の一つでさえある。しかし申し立てることのできる歴史上のケースと彼等の行論が現在からの展望にさえももつ真理の要素はそれぞれなのである。オールドリベラルが時折そこに行くその馬鹿げた長さの認知が、両者に正当な重みを与えることから我々を妨げるべきではない。18世紀のイギリスとフランスの官僚制は19世紀の両国の平均的な経済学者によって付せられたコメントにふさわしいものであった。目下よく知られたスローガン「国家は何物をも創出しない」は経済分野では単純に誤りだとは言えない。諸政府が「創出した」経済的装置の場合ですら個別企業の跡を追ってなされたものがほとんどであり、しかも資本主義的進化の環境の下でなされた——しかも仕事のより良質の部分は政府のための補完的個別企業によってなされた——のがほとんどであった(鉄道と鉄鋼・機関車・安全装置のケース)。しかしながらこの行論は結論がでない。官僚達は企業の操縦を意図していなかった、だから全く当然にその仕事には悪くしか適合できなかつたような諸方法と諸態度が発展させられたが故に、である。もし生産体の経営が彼等の上に委ねられたとしても、彼等は他の諸方法と諸態度を発展させなかつただろうとは導かれない。国権万能主義、プロシヤのユンケルまたは現代アメリカの急進派(彼等の修辞諸句が、国家の権威が問題になるところでは如何に似ていることか)にとっては、国家は黄金の雲の上にある王座についており、その雲から賢明と仕事の雨を資本主義というこの乾いた大地の上に恵み深く降らせるものである。この態度はもとより不条理という点ではオールドリベラリズムがそうであるところに比していささかも劣るものではない。しかしながら、この方が未来に対して頼もしい。もし急進派が、他の人々が自分達のために為すのと同様に、国家のため立ち上がって行進しつつあるようだと、社会的規律は社会主義の中で——彼の語りかけから期待されるであろうよりも——生き延びることのより良きチャンスを得ることになるだろう。

2 1 社会主義的配列の犠牲者達としてみられることが不自然でないよ

うなグループに属する問題が残されている。「上層」乃至「指導的」階層の問題である。資本主義対社会主義に対応する一つのケースは——ブルジョア階級のメリット・デメリットとは全く離れて——この階層のもつ質と現実にあげられた業績に基づいたケースである。逆から言うと、この階層を社会主義計画の仕事に適応させ、しかも取り付ける、ことの失敗が計画そのものの失敗として語られてもよいのではないか、ということである。その質が何故に問題なのかというと、それが正確に社会的選抜(淘汰)の諸方法——どんな種類の社会主義もこれを取り除くことと結びついている——の産物であることが明白だからである。その業績が何故に問題かかというと、それが諸賞金と諸罰、諸報酬、それに諸責任の高度に有効な図式——それは資本主義に特殊な特徴である——とはっきり関係付けられているからである。社会主義的修辞が提供する筈の、よく知られたこの問題に対する典型的な回答は、これらの要素の重要性の否定である。・・・非常に多くの社会主義者達が信じるよう訓練されてきた神聖化された修辞は・・・その階層は過食の猛獣以外の何物でもない者達から成り立っており、その位置にあるのはただチャンスと酷薄さだけで表出されたのであり、彼等の「役割」たるや働き且つ消費する大衆から汗苦の生産物をまきあげることである。——更には自身のゲームに身の程知らずによる失敗をしかし、近代的なタッチで付加すると、収奪物の大部分を貯蓄してしまう習性によって不況を生み出す。・・・こうした行論は、多くの政治家達がそれを語ることに利益になると気付いているほどに、喜びを引き出している。更にこの階層の中には自分はいないという事実の、最も愉快的説明をそこから求めるような多くの知識人の劣等感に対し、それは芳香を放つ。自分達の仕事に対する自己賛美がその含蓄にあるということである。・・・不幸にしてそれは妥当でない。

上層階層の人材の卓越した質は、その要素を補充していく過程の性質と効率から立証される。その立証は実際のところ統計理論上の意味での中位(mode)に関連しているだけのことであり、そしてかなりの率の例外と両立し得るものである。それは更に個人というよりは家族に関連しており、その個人は——自分でその質を得たとしても——競争レースに様々なハンディキャップを負うて発進しているということである。ここではその概略は簡潔に次の如く示し得る。第一に、諸個人は人間分子(human molecules)として各クラスの階層的位の範囲内で上向と下向の運動をなすのであるが、この事実は素質または能力または「人間的な力」における生得の差が、その第一義的な動因とする仮説によって、最もよく説明さ

れるということ、第二に、これらの同じ諸差が同様に社会諸階層の境界線を横断する運動の原因となるということ、それを我々は示しているのである。しかし上層階層に位す人々が決定的に重要な国民資産であるのは、単に彼等がそうであることのお蔭(徳性)によってだけでなく、彼等がそのように行動することのお蔭(徳性)によってもそうである。資本主義の経済的開花(the economic civilization of capitalism)——すなわち、成功の記録(a record of achievement)。ひとたびそれが成し遂げられた時点で、あるいはその世紀にまたがる長き経過の中の特定時点からの展望において、これを批判すること及びこの上に行くことは容易であろうが、それが現実に成し遂げられるのは——その経過のための歴史的諸条件が与えられてあったとしても——どんな他の人材の配置の下では至難のことでしかなかったろう。更に多くの追加的事柄が多分に彼等の仕事であるか、さもなければ彼等によって創出された諸々の好機を利用した結果であるかであった。

このことは、彼等が資本主義過程の中のその仕事を統括するために企てたのだという意味に読み替えるならば、もとより自明のことである。しかし私はそれ以上のことを意味付けるものである。もし5万のよく選ばれたファミリーがこの国で1890年に廃絶させられていたならば、彼等のおかれていた位置は他のどんな5万のファミリーによっても——正にそれだけの充分性をもって——充たされることはあり得なかったであろうし、経済発展は数十年に渡って阻害されることになったであろう、ということ。これは言うなれば、実際の発展が単に彼等によって制御乃至は管理されていただけでなく、大部分が彼等によって創出されたのだ、ということである。このことは選抜(淘汰)について前記行論を第Ⅱ章(第Ⅱ編であろう、編者)がその仕事の性質とそれにより取り組まれる流儀について既に我々に馴染み深からしめてきているところの行論(創造的破壊についての行論? 編者)を併せるところから導かれる。・・・このタイプの考慮は社会主義の中の特定の諸パターン、諸価値、諸章句とは決定的に対立するものではあるけれども、これから導かれる論が示すように社会主義反対論ではない。社会主義社会は——経済的及びその他の点で——資本主義の下にあるものとして丁度今、我々が一瞥したような諸事実によって条件付けられている諸価値を用いることを慎む必要などはないのである。選抜(淘汰)は疑いなくその大きな問題の一つを構成するであろう。しかし時間と精力の最小の損失で以て俊敏の才のある人々を結合し、そして適所に挿入するという点で、資本主義社会がもつ「自然的な」社会的淘汰よりももっと効果的で

さえある諸方法がその問題解決に利用可能なのである。その方法の諸限界に関しては意見の分かれる余地はもとより十分に広い。しかしながら、社会主義は合理的に選抜(淘汰)の手段をもっていない、と述べることは商業的社会では選抜(淘汰)の機構がない——あっても非合理的なものだ——と述べることと同様に不当であろう。

22 資本主義の諸条件の下で彼等にその役割を果たさせてきた諸賞金や諸罰という構図が取り除かれた後も、その超正常的人材ストックが尚、機能を果たし得るやという疑問に答えることは遥かに難しい。我々は先ず資本形成の機能を片付けておきたい。私的な節儉(**private thrift**)——節約と蓄積——が事実問題としてその目的に資すると説示することにより、または同志達による自発的節儉が正にぴったりとその目的に資すであろうという態度をとることにより、——説示についてはいくらかの今日の諸理論のように、そして態度については社会主義社会でも可能なのだと示してみせることで——、我々はこれを処理するものでない。単純に一つの実事指摘することではなそうと思う。ロシアでの経験は多くの点で結論の出ている。「禁欲」の犠牲はロシアでは社会の全階層に負荷された。それはどんな資本主義のシステムも強行し得なかったことである——この方向における資本主義的諸可能性は二通りの意味において社会主義政府によって追い越された。巨大な余剰が貯蓄するため奪われたという意味で、及びその殆どの部分が遠い将来においてのみ十分な果実に成熟し得るような諸目的に配分せられたという意味で。そうした英雄的な諸努力が一般的な行動として期待され得ないことは真実であろう。更に政府活動との関連における我々の経験は「国家はより長期的な視野を採り得る」(**the State can take the longer view.**)というスローガンに多くの支持を与え得ないことも真実である。事実問題としては政治家達は——相変わらずに——考え得る限りでの最短の視野を採っており、近代的世界では社会の長期的利益を配慮しているのは産業的家族(**the industrial family**)だけだ、と論じられて充分なのであるかも知れない。しかしその世界は資本主義と民主主義の世界なのである。・・・

2 3 超正常的人材ストックに機能発揮を果たさせることについては、行動の刺激の中心を取り巻いている動機付けという要因についての諸設問を我々は既に設定してきた。残されているものを処理するため、我々は親方の眼と金の卵を産む鷺鳥に対して今一つの評価を下さなければならない。それは——私はそうするが——三つの事柄を企図することである。すなわち、成果(performance)と経済的報酬の間にある関係、生産の能率と自己責任による決定の自由の間にある関係、及び生産の能率と指導的人物に授けられる権威の間にある関係。これらの関係のどれもが、時折言われている程には馬鹿げたものではない。

2 4 心に抱かれた——なすことが可能であるかないかを問わず——このタイプの諸動機が純粹に利他的な、またはもっと一般的に理想主義的な諸動機によって置き換えられよう、という希望に返答の主なものが懸っているようなことでは安全とは言えないであろう。私は完全な利害を離れた意味での義務がどんな社会的世界にあっても——我々自身も含めて——重要な要因であることを否定できようとは思わない。しかし我々は先ず利他的な諸動機の発露と善意の間に(between the operation of altruistic motives and good will)内在している連結関係を見捨てるだけの余裕をもち得ない。ある人物が物事の妥当性についての自分の理念に従って行動するとして、尚自分の周辺より侮辱されるか、または不適切にしか評価されていないと感じた時、その人は敵意をもった反抗的態度をとるか、または自己防衛に走ろうとする傾向をとるであろう。そうした理念は疑いなく修正されてよいものであるが、その人物が修正できる範囲についてまで思索するだけの気配りをなす必要はないだろう。次いで私は、私の記憶にある限り、かつてこれまで職業上の日々の生活の中で、または習慣的な非職業的生活の中でも、自分の利益とは完全に独立して、利他心や義務の意識が働いているような、それほどに断固たる志高き人物にただの一例と言えども遭ったことがない、と述べる義務があると感じている。医師、弁護士、牧師、教師、政治家、公務員、あるいは労働運動家、他、あなたが望むならば何でもよろしいが、いずれにしてもそういう人物はいずれにもいなかった。博愛団体の事務局にさえ、「連盟」とか討論団体の議長にすらいなかった。全てのそして最良のケースですら、個人的利益の要素ははっきりしたテストの方法により明らかに認め得るものである、殆どのケースでそれは——観察された人達がいつもそうであったわけではなかったが——

痛ましい程に明白であった。

我々が利益を離れた人物として関説しているのは——彼に了解されているのは公共の善に一意に専心する奉仕者としてであるが、彼の個人的利益を我々が攻撃的と感じる程には押し出しはしない、しかも他人の利益は認めるとなすような人物である。この事実はこれまた修正され得るものであるだろうし、そしてある範囲で我々は実際にその個人を経済的諸心労から免じることと資本家的利得の魅力から遠ざけることがそれを修正するであろうことを期待し得るのである。しかしそれにも拘わらず、それ(利益と結合する性情・・・編者)は資本主義の災禍について——精神の汚染が彼等の「自然な」性情を捻じ曲げているのだと——語ることで単純に取り払われることはできないものである。というのはこの事実の根底にある諸態度たるや資本主義のシステムなどというものよりもっと遙かに深く根をもった存在だからである。このようにして得点はアンチ社会主義者の側にある、と私はみる。しかし、このアンチ社会主義者のいくらかの社会主義者の諸態度や諸行論に反対して得た得点は、社会主義そのものに対して得た得点ではない。社会主義システムが機能させられるべきであるとすれば、個人的自己中心癖、とりわけ超正常者の個人的自己中心癖は考慮された上、合理的に処理されなければならない。

個人的自己中心癖の問題を合理的に処理するということは他の事柄との間であって、これを調節することを意味する。しかしこの調節(*conciliation*)はコミュニティの他の部分に対しては、ごく僅かの出費で、しかも定義されたような社会主義の諸原則を揺るがすことなしに——いくつかの特定の社会主義には原則を揺るがすことなしに、とはいかないであろうが——完全に可能なのである。我々をしてこれに直行せしめよ。・・・

25 「報酬」——それが強調されるのが常であり、その否定がエンジンの作動の麻痺に連なるのが常であるところのもの——とは何か。最低限のものとして成功裡の成果の認知(*recognition of successful performance*)があり、より頻繁には一層に本質的な社会的威信の類(*social prestige of a more substantial kind*)がある。かく想定することの根拠はこのタイプの見返りに成果を条件付けようとする心の装置がどんな社会的グループの

内部にあっても生活のロジックから起こってくるということである。

資本主義社会にあっては、この認知乃至は威信は次の理由から強力な経済的含蓄を担う。すなわち、資本主義社会のスタンダードに従って、金銭的な利得が成功裡の成果の典型的な指標であるが故に、そして個人的環境から——とりわけあらゆる経済財の内の最も敏感なものである社会的距離(social distance)から——もたらされる筈の社会的威信の身の廻り品(the paraphernalia of social prestige)であるが故に。この威信乃至は私的富の際立った価値は極めて一般的に認知されており、認知され続けられてきているのである。ジョン・スチュアート・ミルは洞察力と看破力の魔人という程の人ではなかったが、この認知を見抜いていた。超正常的な成果に対する諸刺激の中で、これこそ個人的利得に設せられた制限の理念を担い得ないような態度に対する——永遠に特異を加えたもの(forever plus ultra)を希求することに対する——配慮となっているものの一つなのである。・・・そして今や第Ⅱエッセイで提供されている諸考慮が教えてきているもの、資本主義的進化そのものが、とりわけそれが個人を超えて家族をも包攝するものである限り、その諸動機を弱くする、ということである。もし社会的距離が専用のホテルや専用のクラブや船等でグループ別に達成することができることにもなれば、その時、城や威厳のある都市の館やヨット等はその相対的利益を失うことになる(クラブ原理)。もし城、都市の大邸宅、ヨットが累増的に多くの出費となり、維持していくことが困難となり、実際に人迷惑な展開が演じられるということにもなると、何故か、人々は徐々にそうした物事を求めるのを止めていくことになるろう。課税、社会的批難、それにファミリーの弛緩が産業的王朝の基礎を確立することを不可能乃至は望ましくないものとさせることにもなれば、他の駆動力も活動することを止める。もし富が賞讃でなく冷笑されることにもなれば、それと関連して(pro tanto)その所有者によってさえネガティブに評価される。このようにして資本家のエンジンそのものの作動とそれが生み出す心理の作動のお蔭(徳性)で、資本主義の精神意識は今や崩壊の歩みの中にさえあるのであり、もしその梨の実が十分に熟するまで時間をかけるのが許されるのであれば、崩壊は更に一層大きな率を以て進むであろう。社会主義はそれ故に上層階層における生活の価値の再評価を要求するのであるが、その要求される再評価たるや、かつての小経済帝国の基礎を子孫に譲渡する可能性こそがあらゆる資本家のもつ諸動機の中の最も正常なものであり、しかも資本主義的行進の下にある最も普通の兵士達の背の後にある指揮棒であった時代にあったところと比較すれば、その大きさにおい

て比肩するべくもない程に小であるだろう。

それ以上に、もし社会主義社会が威厳の動機を満足させることを合理的と考えるべきだということになれば、社会主義社会は、そうするためには古い王朝時代にそうであった程に、有利な位置にある。もし超正常的な成果がその成就者に対し——そして他の者にではない——ズボン上に安物の標識を付けることを許すというような特権で以て報われるということになれば、これはぴったりとここでいうケースとなる。これをみるに、人の非合理的な性情に訴えるとか、または非経済的な報酬であると呼ぶなれば、それは全く悪い、というべきであろう。というのは、もしその標識があらゆる同志達に対し、それを着用している人々に対して特別の配慮を以て誘導するのに十分なものがあれば、その着用者に対する効用は高度に合理的な利益であるだろう。それはアメリカの名誉在郷軍人達が——彼等がフランスの税官吏と出会う以前から——金細工をボタンの穴に取り付ける習慣のあったことから裏付けられる如くである。更に今日の金持ちは、もてる金の大部分を我々の描写が象徴しようとしているものを正確に確保しようとして支出しているのである。

26 最上の、入手し得る質の中でのあらゆる「結構づくめの生活」を個人的に享受したい、とする欲望はそれでも残される。いくらかの倫理的理想的認識結果に相応じんがために、この種の充足を否定することはもとより少しも非合理ではないであろう。しかし、我々の少なくとも——多分生得の——常識とロシアでの経験を指針とするならば、経済的合理性は、このケースにもまた、一連の調節の諸政策(a policies of conciliation)を指示していると推定される。成果についてのリーダーシップ乃至は超正常の様々な水準において、このことを適切に考量しているであろうもっともらしい規模での産業予算を描くことはできなくはない、と私は考える。結論は並外れた他のものではないと言えよう——ある特定タイプの社会主義者達(あるいはどちらかと言えばプチブルジョワジー)のパリサイ人には衝撃的なものであろうが——。様々の調整的工夫は資本主義的世界で出現しロシアで発展させられたものとして既に手元にあるのだ、ということがかのパリサイ主義の視野の中に加えられるのが良いだろう。それは象徴的にだが現在の購買力で見積もって10万ドルに達する程度の可処分所得の規模で充分以上のものがあり、国民所得の数パーセント以上を吸収する必

要はないものである。その工夫は本質的に——特定の諸義務(諸税)の適当な免除に対応する出費であると規定されたものに対する——惜しみのない供与を以てする諸現物給与(payment in kind)の結合物である。殆どの国において高級位の公務員は疑いなく普通のありきたりの程度において支払われている——それはしばしば非合理である程そうである——そしてその巨大な執務室は殆どの場合、行儀よく少額の貨幣的俸給を保っている。しかし多くの場合、この処理はいくつかのケースにおいて、名誉だけではなく官公舎、公費支出の秘書達、「公式」接待の容認、船艇や他のヨットの使用、国際委員会での、また軍司令官としての仕事の特別の提供、等々によって補償されているのである。少なくとも一か月に400ルーブルで暮らすと思われている程には生活が厳しくないのが通常である。好む好まないは別として、このことは重要である。

27 現代の所得税と相続税が「怠惰な金持ち」(idle rich)問題を量的に無意味なところまで引き下げる、ということを我々は敢えて申し立てることはできない。その理由はこの課税が次の意識の表現そのものであるからである。すなわち、閑暇階級に対しては——完全な消滅への先行ランナーとしての役割を除けば——どんな経済的または文化的な機能をもこの意識は否定するものであり、来りつつある社会主義は既にこの分野では単に自明であるとしてきている、と。我々は設問を立てるにあたって本質的に元のままの手付かずの資本主義(intact capitalism)であったならばという仮説的なケースに相對しなければならぬのである。この手付かずの資本主義は、我々が知っているように、極めて重要な非資本家的要素である最上層の階層——それは「楽しむところの世界」(le monde qui s'amuse)において異彩を放つものであった——を潜伏させていた。国民所得に占める彼等の所得のシェアは——遅くとも19世紀中葉までの全てのヨーロッパ世界では少なくとも——かなりの高さになっていたに違いない。このシェアが今ではどれ程のものとなっているだろうか、課税の欠如の下で、しかも諸政策がこの階層に有利であるか、少なくとも敵対的ではないと仮定しても、告げることが困難である。イギリスはそれを推定する試みが、やって可能かも知れない唯一の国である。しかし合衆国ではそもそもこの問題は存在しない。

しかし社会の中の純粹に資本主義的な部分にあつては——全体として

資本主義の青写真に一致するような社会にあつては——閑暇階級による彼等自身の使用に供される消費財に対する支出の額は、絶対的にも相対的にも、一部の観察者が考えているところよりも遥かに少ない。そうした観察者は特定の極めて異様な部分にその支出額が多分に集中しているということを見逃しており、しかも習慣的に休日や勤務時間後のあらゆるビジネスマンや専門的人物を怠惰な金持ちの中に含めている。それ以上に、そうした社会での怠惰な金持ちは主として超正常的な成功を得たビジネスマンや専門的人物への寄食者達や子供達からなっているものであるから、行論は、ブルジョワ的動機で推進されている一個の経済的世界の中でのそのエンジンの能率に伝導する成果とこうした寄食者達や子供達の怠惰な満足との間にある交差関係を考察するものでなければならぬであろう。・・・更にまた、もし我々が実際に個々の環境についての詳細な研究にまで立ち入っていくことにもなれば、そうした諸現象は例えて言えば極めて膨大な科学的及び文学的な生産がイギリスでは経済的には怠惰な層から流出してきたといったところまで考慮されなければならない——その人物の際立った質が自立ということと多大の関係をもつ政治上の奉仕については考慮から外すとしても・・・更に過激派的性向を多分にもつ読者をいらいらさせるであろう他の多くの項目がある。しかしイギリスの過激派ですら、自己の資産をもった紳士という造型的威信なしには、彼があるところのものではなかったであろう。・・・一セットの充分に着古された、しかも平凡だが不幸にして真実である配慮にこれ以上のどんなスペースをも潰そうとは思わない。再び社会主義がこの標題の上に収納し得よう正味の諸経済の正にその性質がその正確な推定に対して克服し難い障害となる。しかしこうした考慮はそれ(正味の経済)を個人サービスに対する契約上の支払よりは他の源泉から得られた所得の総額に近いようなどこかに置くのは不合理であることを示している。・・・合衆国の場合、私はそれを国民所得の1パーセント以下におくべきだろう。

1929年は上記の主張を実態化する目的からすれば例外的に不都合な年であったが、5万ドル以上の所得をもつ者で自からの消費のためなされた総支出額は国民所得の3.5パーセントを超えることはあり得ず、逆にこれを下回ることは大いにあり得るということであった。モールトン、レーベン、ウェルブルトン「アメリカの消費収容力」からの数値に基づけば、貯蓄と課税と慈善の額は全支出の15パーセント程と想定される。1929年水準での課税は手付かずの資本主義と両立し得ると考えられるので、それらの控除が先行の考慮によって論点をそらせるものではない。

今やこの3.5パーセントは全ての高級ビジネスマンと専門的な人々の所得を含むものであり、そこでテキストにある結論を引き出すことは根拠なしとはしない。・・・何か複雑したものが・・・私は正味(net)を考えている・・・

a) 能率が損なわれるのでは、それはあり得る。しかしこの支出が(労働者に支払われる)費用に属する場合には、それは資本主義にのみ固有のことであるということも。資本主義的諸前提の中では無価値だということは尚、証明されていない。b) 正味——そうでないと社会主義に他の支出を発生させる。・・・他の側面、支払い——それは必要であるものよりも高く、高い部分は共同合同会社の労働者にはなしで済まし得るかも。謝礼(fee)的なものを留保している性質のもの、それは経営者、テニユア、教授に対しても、しかし「扶助」(Pflege)よりも高いものが必要であるかどうかは疑問である。・・・

もし我々が——これから後はそうしようと思っているのだが——怠惰な金持ちと経済的成果の間にある交差関係を提供している家族的動機が、十分にまたは殆ど十分に消滅させられるであろうその段階で、社会主義が受け入れられると想定するならば、このケースは幾分か改良をみることになる。しかしながら怠惰な金持ちの所得の抑止から得られるであろう額が多額でなかったとしても、今やその段階に関して類似の想定を我々がなしているなれば、とりわけ、あらゆる高額所得者からの——課税によって既に先鞭をつけられているような——更に大きなものが一般的控除から期待されることができるのである。その理由は現在の——将来にあっては尚一層そうであろうが——高額所得の提供する諸サービスを一層に少ない出費で以て確保し得るであろうことに疑問の余地がないからである。能率を下げることなしに、怠惰とアクティブの金持ちに即した全正味の節約の額はその場合、全国所得の2~3パーセントに及ぶ程に十分な額となるかも知れない。・・・殆どの社会主義者達とブルジョワ過激派達はそれらが極端に控え目な数値であることに驚かされるであろう。そうなったのは能率を下げないという但し書きの故であり、更にそれとの関連で社会主義者達には高額所得——5万ドル以上の粗所得で貯蓄、租税、慈善を含む——についての規定が不当に寛大なものと映じるからである。二つのコメントが追加されるべきである。必ずとは言えないが、ビジネスマンの所得の中には資産由来の所得と「働き出された」と称される所得の間を分離させている特殊なケースがある。一例がこれを示すだろう。ある人物が一片の土地を開墾するならば、彼がその後において受け取るであろう報酬は「人

によってつくられた装置についての報酬」準地代である。しかしもし改良が恒久的なものであれば、その報酬は地代プロパーから区別し得ないものとなり、それ故に不労所得の理念の正に化身のようなものを構成するであろう。その一方で実体的には、もし我々が賃金を人力の行使に対する報酬として定義するのなら、賃金の一形態である。更に一般的には、努力はそれが賃金の装いを纏っていてもよいが、必ずしもその必要がない将来の報酬で経験されることもあるということ。次いで我々が能率を産出の長期的発展として測定を語る場合、報酬の削減によって産出が増加することもあり得るということが忘れられてはならない。一例はアメリカの諸大学が教授達のこれまでもっと高く支払われていた俸給を引き下げたとすると、ある者は一層に多くの教科書を書くよう誘引されるであろうし、ある者は一層多くの学外授業につくよう誘引されるであろう。もしそうした測りえない社会的恵みが俸給のレベルにより放逐されるとなると、悲劇的な損失はそのレベルでなされる独創的研究の一層の増大や教育の一層の良質化によっては補償されるとは限らないことになる。

28 経済的エンジンの効率と被雇用者達の上に君臨する権威——私的所有と「自由」契約制度を手段として商業的社会が雇用者達に授けているところの権威——の間に内在するよう保たれている関係につき何が告げられるべきか？・・・再度言うようだが、これは一個の特権の問題だと——すなわちこれは「持てる者」に「持たざる者」を搾取することを得せせんが為に授けられ、そして社会化を以て<所有権が灰塵になるであろうと同じだけ速やかに>消え去ることが予定されている特権——だと単純に置かれる問題ではないのである。直接に関係する私的利益の背後には明らかに社会的利益がある。ある与えられた状況の下で、社会的利益が私的利益によって実際に資されている程度に関して、及び社会的利益を雇用者の自己利益に信託する方法が敗残者(underdog)に負荷する「機能無き激しさ」(functionless hardship)の程度に関して、意見は大きく拡散したものとなるであろう。しかし歴史的には如何なる見解の差もあり得なかった。そうした社会的利益が存在するという点に関しても。あるいはそれ以上にその方法の一般的有効性——とりわけ手付かずの資本主義(intact capitalism)の画期を通してその方法があり得る唯一の方法であることは明らかである——に関して。我々の設問は二つに分けられる。その社会的利益は社会主義的環境の下でも主張されてよろしいか？ もしそうな

らば社会主義の計画はそれが何であろうと権威の要求される量(the required amount of authority)を供給することができるのか?・・・権威は多くの事柄を意味する。それ故に我々はその言葉を二つの他の言葉に置き換えよう。それは我々の議論に関係している特別の意味に対して補完的である。すなわち規律と服従(discipline and subordination)。(服従——下級叙任・・・編者)

29 我々の社会主義の定義において、権威の単一性——恐らくは先ず中央計画(Zentralplan)——が強調されてきたことに注目されたい。これは権威の構成について何事かを意味付けしようと思図されたものではない。職責と権力(duties and powers)は広く様々である。それは選挙されたものであっても、なくてもよい、委員会または個人を通しての機能は内閣に一層似たものであり得ようし、法廷に一層似たものであり得ようし、議会に一層似たものでもあり得よう。一個の行政部であり、それと区別される監査機構であり、一種の決算機関(a sort of cours des comptes)である、とさえ言うてよいだろう。そうしたことは概念にとって無関係なことである。しかしそれにも拘わらず、統制の機関(control body)が一つ以上に多くある時には、それらは取りまとめられて——専断的であるか、または形式を整えられた諸ルールに従って協力してまとめられた——一つの意志決定を構成しなければならない。何がどのように生産されるのか、多くの目的に用役を提供できるような生産諸資源がどのように各部門に配分されるのか、及びもたらされた諸生産物をどのように処分するのか、こうしたことを全体としての社会の為にはからせるところの権威の単一性である。このことはその仕事の幾ばくかの領域を下部に位す担当者乃至は機関に与えること、下位グループの自治の方法に任せることを排除するものではない。但しギルド社会主義やサンジカリズム(guild socialism or syndicalism)等は排除される——彼等が提起しているのは全く違う問題である。いくつかの機構により仕上げられた一個の包括的な社会計画、従って一個の中央——少なくとも整合している諸機関——があること、これが私が今述べている社会主義にとって本質的な点である。

30 (集権的中央計画の強調の傍ら)、他方において、私は自然的諸資源

と工場等諸設備の公的所有制を強調してこなかった。この論点は非常に重要という訳ではないであろうが、明確化のためから看過されるべき問題ではない。第一に、所有という言葉からしてが、またはその更なる技術的な代用語のいずれもが、非社会主義社会からの外来語である。・・・それは資本主義に由来するとなすのも怪しいとみられるようなメカニズムからもち出された。しかしそのようなことは何であつても構わない。・・・一個完全な光明の下で社会は社会主義に向けて働く、とは言え、諸目的の外部で、ランゲに反して、とりわけ経済の確たる諸ルールは確かに一般的論理的に・・・論理に対する経済のマトリックス。・・・何が区別か、選抜(淘汰)、成果の配分、諸目的、方法における区別。・・・私的所有制は無責任性を咎めだて、そしてわめきたてる人を遠ざける。私的所有制は人がその過失に対しては支払わなければならないことを意味している(Privateigentum blemish irresponsibility und hält den Schreuer fern. Privateigentum means dasz man has to pay for one's mistake.)・・・(公的所有制とは上記のような私的所有制——それは資本主義の職責と権力を支えるものであつた——に差し替えられるべき、あるいはそれ以上の重みをもった職責と権力の体系を公的所有制下の社会主義は担うことになる。・・・編者)・・・

31 もとよりこれら全ての諸ケース、とりわけ労働者のケースにおいて、取引力のバランスが——いつもまたは必然的に——彼に都合よく存在すると信じる程人を誤らせるものはない。このようにして労働者の搾取(開発)の評価に至る。とりわけ資本主義的進化の初期の段階での搾取は——後の時代の感覚からはショッキングなものであるが、尚、次の事実を考慮しなければならない。それは急激な進歩のための闘争の一つの随伴物(an incident of a struggle for quick progress)——資本家の手による一種のゴスプラン——であつて、産業的装置のより一層の拡大のためのものであり、結局のところ引き継がれることになる大衆の生活水準における上昇のための諸条件の提供でもあつた、ということである。このようにして充たされた社会的機能は、それが如何に粗野で不似合いなものであつたとしても、社会主義社会でも充たされなければならないものである。しかし我々はそのことにつき自から心労する必要はない。というのはその機能は自動的に充たされるであろうからである——非人的諸資源のケースにあつては単純に青写真に従つたそれらの配分によって、また私が社会主義計画の「論

理的可能性」を論じた時、概略を描いておいたような機構を通して、そして人的諸資源に関してはそうした配分に加えて、様々な諸誘引をもたらす政策を認可するような社会の文化的諸意識(**the cultural idea of society**)によって。社会が与えられた同志(**a given comrade**)から何を得ることができるかという設問は社会主義的配置においても——経済的合理性がそこに行渡っているものならば——その意味するところのものを失ってはいただろうからである。広義に了解されたものとしての搾取(開発)がある種の社会的機能——ある種の社会に対する基礎的サービス——に相当するものを含んでいることと社会主義が人間存在を搾取し続けるであろうということとの間にある背理(**paradoxa**)は極めて僅かの省察を加えるだけで消え去るであろう。加えてどんな慎み深い人物でも、他のどんなことよりも深く欲するところのものは、正確に彼の能力を限度いっぱいまで開発(搾取)することなのである(**what any decent man wants more than anything else is precisely to be exploited to be the full of his capacity**)。

3 2 規律とは——個人自身というよりは他にいくつかの社会的機関の活動によって——個人の行動が造型されることを示す。それ故に自己規律(**self-discipline**)と呼ばれてよいものは、訓練すなわち規律への過去の従属(**training, that is, past subjection**)からもたらされた一つの習慣(**a habit**)である、というその範囲においてのみ入り込んでくるものである。しかし集団規律乃至は一社会的グループの自己規律と呼ばれてよいものは、いつも我々の一般的定義に含まれる。もしあるグループ——例えばある工場で労働者を構成しているグループ——がそのグループの意見と態度によって各個人であるメンバーにグループの標準に一致するよう圧力を行使するようなことがあれば、我々は尚個人自身というよりは一個の「社会的機関」(**a social agent**)をもっている、ということなのである。もとよりそれはある個人——たとえ選ばれた人物であったとしても——によって強いられた規律とは区別されるのが便利であろう。区別されるのはそのグループの全体というよりは他の団体乃至は他のグループによってなされる——これは我々が権威主義(盲従)的規律(**authoritarian discipline**)に即して意味付けようとしているものである。服従(下級叙任)(**subordination**)——それは規律の産物である——は決定に関する服従(命令に従うこと)と標準に関する服従(監督や批判の効果的な受け入れ)に分割し尽くされる。

自己規律はどんな自然的及び社会的環境の下でも生き残りの必須の条件であるので、更に集団規律はどんな社会にあっても——とりわけ社会主義社会にあっては——依拠すべきメジャーな要素であることが明瞭であるので、問題はただ権威主義的規律——権威による規律に関連してのみ発生する。それを馬鹿馬鹿しく理想化することにより、それを以てキリスト教天国の代替物ならしめることを試みることにより、社会主義に対応するケースを台無しにするようなことに固執する精神の枠組みに我々は再度出会うのである。そのキリスト教天国たるや、何故かというといくらかの他の天国は席を連ねた従者達の制度をもつからであるが、キリスト教天国は現実に「天使達の可能な限りでの搾取のしるし」に対応するよう求められなければならない、とさえするのである。しかし大衆について不条理な構図は——それはその場合、喜びに満ちた競争心(joyful emulation)の中でやり抜くべく提起された諸決定に<愉快的ゲームの休息の時>知的な討議というやり方で到達していくものなのであるが——以下の諸事実由来する特定の諸事実と諸推論に我々をして眼をそらせるものであるべきではない。第1、我々は権威による規律が急速に消滅しつつある資本主義的パターンと社会主義的代替機構を比較しつつあるのだということ。第2、大衆の自己規律と集団規律が課す役割において社会主義のコミュニティは現代資本主義の諸条件の下で果たされるよりもずっと大なものがあるだろうと期待される理由が実際にあること。第3、自己規律と集団規律が不適當だと分かったとしても、惹き起される困難を粉碎するのに、社会主義的経営は資本主義的経営が現在の諸条件の下であり得たかも知れないどんな位置よりも遥かに良い位置にあらうこと。この3点を確立するにはごく僅かな省察だけで充分であらうが、それらはより納得し得る形態で社会主義に有利な諸期待に支持を与える、という諸事実なのである。

33 資本主義のシステムを機能させるための権威による規律はしばしば過度に軽視されてきた。時には、特にベンサム主義的信条をもつ経済学者のケースであるが、それは完全に看過された。それは商業的社会の至高の素晴らしさの啓蒙的要約ではなかった。そこに発生している諸利益の合理的評価でもなかった。更には単純に——それがあつたというだけで重要なのだが——工場において彼に彼の義務を果たさせるといふ良きワークマンシップ(技量)の喜びと誇りといったものでもなかった。そうではなくして諸決定に関し、または諸標準に関し、それに従って動こうとする、ま

たは自からを服従させようとするところの、そうしたことへの「性向的」な容易性(**the instinctive readiness**)があったのである。それらは彼が彼のブルジョワ的親方の封建的先輩達の拳骨(**the fist**)の下で体得してきた規律から引き継がれたものである。この親方に対し、彼は——全ての正常なケースとして——封建領主に対し疑問なく抱いていた尊敬の一部を——決して全部ではない——移し込んだのである。更にこのことは、もし彼が特定の諸目的のため契約に入ろうとしている一人の社会的平等者としての彼自身(**himself as a social equal entering into a contract**)を感じていたとなると、事態はそれがあったであろうよりも多くのことをより容易とさせるのである。

この利益を産業ブルジョワジーは部分的には罰として失うことになる。政治的分野での平等性を受け入れることによって、そして労働者達に、諸君は正しく他のどんな市民とも同じく価値ある市民なのだと言ふことによって、——更に知識人達にそう語るのを許したことによって。この市民的平等性はまた更に進んで野蛮な規律保持の諸方法を排除するものであった。しかし、しばらくの間は、その「権威」とそれを護衛する諸手段は十分に保存された。その双方を不可避的に破壊していくことになる徐々ではあるが不断の変化を隠し、且つ殆どの人達が典型的に資本主義的方法として考慮するだろうところのものを構築したのである。そのやり方の効率は大約同じ手法の中にあり、その手法は罰としての解雇の行使の可能性——自由契約の理念とは程遠いが当事者はそのケースのこの要素に合意していた——に帰せられる。更に解雇を即座に行使しようとする——それは強制に匹敵する——動機の強度にも帰せられる。その濫用について我々に衝撃的であるのは真実のところ、その中にある一要素である。というのは、人間関係——国際関係であろうと、諸階級や諸グループ間の諸関係であろうと、あるいは個人間のそれであろうと——における権力の概念と結合したどんなことであっても、濫用の可能性は効果的な行使の一部、または一片なのであり、濫用は権力から分離され得ないものとして、「それが決して濫用され得ないという保証によって歯止めがかけられた権力は結局において権力ではない」(**power that is so hedged in by guarantees that it can never be abused, is not power at all.**)ということであるからである。

3 4 今やこれら全てが過ぎ行きつつある——その多くは既に過ぎ去っ

てしまった。以下はこれを集約し、その行論の一部を今一度招喚するものである。

何より第一に労働者達をして彼の雇い主を「見上げ」させ、更にその権威を当然のこととして受け入れさせるような、その威厳が過去のものとなってしまった。その威厳(**prestige**)に添えられてあったコミュニティの道徳的支持が——その反対のものに転換されてはいないところでさえ——引き揚げられてしまっている。その反対のものの徴候は労働争議に対する諸政府の態度である。すなわち変化は雇い主の権威の無条件的支持から、中立を経て、規律違反を容認し、しかも鼓舞しさえするような態度にまで進む。直接の攻撃目標になっている事業者利益の背後にはもはや社会的利益はない、とする理論にそれは基づいているのである。過ぎ去った、または殆ど過ぎ去ったものの第二幕は、規律の裁可(**the sanction of discipline**)である。すなわち、それは資本主義的方法——解雇の脅迫——を特色づけるものであった。今やこの用具の操作はその行使を試みる手を切断するだろうといった程にできないように形造られてしまっているのである。

過ぎ去ったものとして「闘おうとする意志」が最後にあげられる。支持されていないと自己を感じるにより、また自からの道に誠実さを失っている自己をみるにより、彼はお手上げの状態になろうとする。このことは、とりわけ、自分自身が被雇用者の心理をもちつつある大企業執行部のタイプにおいて真実である。彼は自分の俸給と契約をもっているのである。株主に対しては彼は何の配慮もしていないと言っても言い過ぎでない程に僅かな配慮しかしていない。彼は知っているのである、自分が防衛しつつある社会的利益のその効果に対するどんなクレームもが——陽気に騒ぐことを除けば——憤激を起こしさえしない、ということ。彼は知っているのである、自分が素早く折れるならば、肩を叩かれて真に進歩的で開明的な人物だと賞讃されるであろうことを。そもそも、彼が正にお見事とされるまで行き得るとして、何故に彼は闘うべきなのだろうか？ この点については、経営側にあるものとしての、そうした闘争精神がこの国(合衆国)では先立つ何年かの中に——そこでは個人的乃至は家族的利益が尚強くあるか、または少なくとも完全には麻痺していないような諸企業(自動車及び鉄鋼産業をみよ)の中から——現れてきた、ということが深甚の意味をもつ。一般的に言って通常既得利益(權益)と呼ばれているものは弱音を吐くことである。それあるところでは社会不安の中の權益が前面に出る。(what is usually called the vested interests shows the white feather. In places of them the vested interests in social unrest

comes to the fore.) このことの論理的帰結が——完全に拘束された資本主義に限られたケースにおいてではあるが——資本主義は帰するところ結局には機能することを止める、ということにならざるを得ないのである。その場合には、もとより、社会主義の優越が自明の理となってくるであろう。しかしこのメッセージが発せられる以前においてさえ、少なくとも可能性の領域では、構造の社会主義形態の採用から期され得るものが社会的規律の回復であることは充分にあり得よう。

35 労働者達の自己規律と集団規律が社会主義のコミュニティにあつては、それらが現在演じているよりも一層に大な役割を演じるであろう、と期待させる諸根拠とは一体何であろうか？ 社会主義の秩序が道徳的忠誠(the moral allegiance)——それは資本主義に対しては益々以て完全に拒否される——を課すであろうというのがその一方である。他方は社会主義社会では経済過程の性質が誰にも——資本主義でそれがかつてあり得たであろうよりも——理解され得るところが甚だ大だということである。これらのファクターは相互にぼかし合っているが、分離してそれらを見れば一層際立つことになろう。

道徳的忠誠が自己規律と集団規律の双方の増進であろうこと、このことを入念に立証するどんな必要も殆どない。労働者の自分がその中で働いているシステムに対する道徳的忠誠は——自分の義務を果たそうとする態度において——自分が信認していないシステムの下でもちうるものよりも一層健康な態度を与える傾向にあることは明白である。確信をもって期待されてよい社会化の今一つの帰結はもっと重要である。資本主義のシステムに対する労働者の不信認は大部分——彼がそれらに晒されている——諸々の影響力の産物である。不信認であるべきだと説かれているが故に不信認なのである。彼のロイヤリティと彼の良き成果の中の自然な喜びは組織的に論破されていくのである。彼の生活や仕事への全体展望は階級闘争コンプレックスによってスポイルされることとなる。社会主義の下ではこのコンプレックスはある程度自動的に消え去るであろうし、他の既得権益と並んで社会的不安の中のそれも消え去るであろう。

物事は社会主義的秩序の下では、経済的諸現象がそれらの様相を間違ふことない明瞭性を以て示されるが、その傍ら資本主義的秩序の下ではこうした様相が私的利潤の利益というマスクによって覆われている、という事実によって一層に円滑に進行することになろう。社会主義者達が保つ恐怖

と愚行は実際に彼等のマスク——そのマスク自体の重要性を我々は否定し得ないのであるが——の背後で犯されているとしても、我々は少ないと考える。このようにして、社会主義社会では次のことが疑われる可能性は先ずあり得ないであろう。国民が国際貿易から得るものは輸入物であって、輸出物は輸入物を入手するために耐え忍ばなければならない犠牲だということ。その一方で商業的社会では、この常識的見解が街頭にある人々からは完全に隠蔽されているのが通常で、それ故にかの人々は自分にとって不利益な諸政策を喜んで支持しているのである。・・・更に、この他社会主義的経営が不器用に行うものが何であろうとも、生産をさせないように誘引しようとするような明示的目的で誰かに何等かの報償金を支払うことは確実にないであろう。貯蓄についてはナンセンスだと言い逃れをすることができる者は誰もいないであろう。当面の問題から離れても、経済政策はそれ故に合理化され、無駄の最悪の源泉となっているいくつかは単純に——諸手段や諸過程の経済的含蓄が各同志達に明白であるというだけの理由から——避けられるであろう。しかしその他の事柄の中には、各同志達が仕事の上で反抗的なこと——とりわけストライキ——のもつ真の意味を明らかにするであろうということがある。彼が、ストライキなるものは「今や」国民の厚生に反社会的な攻撃を加える以外の何物でもないだろう、という結論に達したとしても、彼はその点、資本主義時代のストライキを事後的に責めはしないこととは関係がない。もし彼が相変わらずストライキをなすなれば、彼は悪しき意識を以てそうしているとして、公の不承認に遭遇することになろう。とりわけ軽はずみなストライキの参加者やリーダー達に拍手を送ろうとエキサイトして、それを考えるような男女のどんな低級なブルジョワジーも最早存在しないであろう。何となれば誰もが社会本位に考えるに至っており、だからもとよりのこと諸君は単純に国の運営をビッグビジネスに許すことはできないのだし、また諸君は正しく人並みの権利を与えられていない、ということを経済ブルジョワ諸君は知っている。これはいずれにせよ巨大な冗談である。

36 我々は第3の論点——もし自己規律と集団規律が不適切であったとしても、社会主義的経営は状況を完全に処理していき得るであろうとなすもの——を確立する方向に我々は前進させられる。推論的にそうであろう。というのは、自己規律と集団規律は権威による規律によって訓練された結果である——少なくとも部分的には——となす限りにおいて、たった

今示した行論から集団規律は結局なしで済まし得る、と結論するのは安全ではないからである。それよりも、外部からの煽動(instigation)が——いずれの大衆型の規律破りであっても——演じる役割を考慮するならば、我々は尚、次のことを無視し得ない。すなわち、紛糾をあふりたてることは、社会主義社会にあっても、尚キャリアであることを意味するか、またはキャリアへの近道であることを意味するという、及びそれはその機構の中にいる——自分達の地位につき、または物事一般につき不満をもっている——諸個人の自然な反作用として期待されるところが尚あり得るということ。セクト的——地理的と産業的——の利益の衝突が何ら働いてはいないなどと規定されることはできない。それどころか、そうした利益の衝突は現存のそれと同程度に由々しき問題であり得よう。・・・もし我々が比較を政治的諸手段についての考慮なしに資本主義的セクショナリズムの探求を受け入れるようなメンタリティでなすならば、それは更に悪いことになるであろう。ブームにおける煙の如く。・・・非セクト的な利益すらもが尚、意見を分かつかも知れない——例えば眼前の充足という利益は将来の世代の厚生のうちにある利益と十分に衝突しうるのである。更にこれこそ大企業の政策であると知覚されるものに向けての労働者乃至は大衆一般の現在の態度と甚だ似たような——社会主義経済を——経営するグループに向けての態度がその中に含まれていないだろうとは確信し得ない。私の説明に対して私が要求するただ一つのメリットは、私の説明が純化せられた倫理的栄光の海の中でそれらの諸問題に答えるのに替えて、それらの諸事実と諸可能性のことを考慮に入れていることである。最後に軽視できないこととして、私が社会主義の文化的非決定性と呼んでいるものの我々の問題への負荷が忘れられてはならない。生産における私的経営対社会的経営という一つのイシューを除けば、国民生活のあらゆる大きな諸イシューは依然、我々次第なのである。実際に人々が、全ての事柄をほとんどがヒューマン・ハートの問題だとして、闘うことを止めるだろう、とは信じるべき根拠がない。我々のこれまでの行論は、重要な諸局面で、人々を搾取する意向がより少なくなるであろう、ということより以上の何事をも確立してはいないのである。

しかし要点は、双方に相変わらずだと期待されてもよいものに対する展望が少ないであろう、ということである。資本家の利益を取り上げるというゲームや経済生活の歯車に歯止めを差し込むというゲームに最早喜びを得ることのなくなった公衆は、準犯罪的行為として認知されるようなことを許すことはありそうにない。最早現存の秩序に原則として敵対的でな

くなり、且つその多くは満足させられているようなグループとしての知識人達は、攻撃の諸目的に応じるものがそこにはあるとして、そうした「諸原因」を尚も用いようとする仲間の中のそうした人達を——黙って、あるいは活発に——助けることは最早ないであろう。社会主義システムは恐らくは知識人の数を一層少なく生み出すか、または少なくとも彼等の集団的利益を分断し尽くそうとするか、が期待されてもよいであろう。現在は否定されている多くの支持が、それ故に社会的規律に立脚した政府の方向へとシフトすることがなされよう。

37 社会主義的経営は、言ってみれば、ストライキを処理するのに現代の政府が軍隊内での反乱を処理するため許容されているのと同じようになし得ることになるだろう。ところでこれは要するに権威による規律に由来する——今のところは理論的に利用可能なだけで実際に行使され得ないような——諸道具の全てを行使し得る位置にあるということであろう。解雇による脅迫の席には自分達の義務を果たさない諸個人に対しては糧道を絶つという脅迫がおかれるだろう。後者の方が前者よりも遥かに効果的だろう。というのは、その措置が他の雇用の機会の存在によって弱められるからだけでなく、その措置を合理的とみてよいどんな程度においても適用され得るからである——その一方、現代の資本主義の下では、世論が一方の側の他方の側への労働契約に訓育的な権力を否認しているので、その措置たるや解雇か、しからずば何もしないか、にならざるを得ないのである。更にそれ以上に資本主義的経営では——その道徳的権威の欠如の故に——結局は行使できないような、さほどドラスティックではない多くの方法がある。軍隊的規律とのアナロジーがその含蓄しているところのものをよく描き出すであろう。社会主義的な経営では単なる訓戒が今日では決してもち得ないような効果をもつであろう。

しかしながら、それが全てではない。社会主義的経営は権威による規律という諸道具をもち、しかもそれを行使し得る権力をもつだけでなく、それを行使するのに十分な動機をもつ。現代の資本主義の下では、経済過程に対する政府の態度は——合わさってデッドロックを生むような——二つの要(かなめ)(factors)に帰す。すなわち、一方ではブルジョワ資本主義の建前理念に従って、生産のエンジンの成功裡の操作は——規範的または原則上の問題として——政府の責任とは未だ言えないということ、他方

では将来の社会的世界についての建前理念に従って、そのエンジンを導くとともに制御するものが政府であるということ。結果として諸政府は——疑問の余地なく行政的にと認知され得るその諸活動の範囲内で——正確に政治的並列(**the political apposition**)が典型的であるような「業務」に向かおうとする態度をとる。言うなれば、国家非常事態の下では、及び国民的重大事業の下では、疑いなく、批判すること(**criticising**)、検査すること(**checking**)、攻撃すること(**attacking**)を助けることを原則とする。・・・今や社会主義の下ではそうでない。生産大臣はそのエンジンの機能行使に責任をもち、しかも自分のこととしてそれを見守るであろう。責任は政治的なものだけであるだろうし、且つ良き諸策略(**good tactics**)が多く失策を多分にカバーするであろうことは確かである。そしてそれにも拘わらず「反対することの利益」は消滅しよう。成功裡の操作を期そうとする強力な動機がそれにとって替わることになるだろう。経済的必然は最早笑い事ではなくなるであろう。操作を麻痺させるような諸々の試みは、通常、経営者グループの針金を縦横に張ることで縛り付けることに等しいことになろう。これに反発し、しかも必要ならば断固反対することも当然期待されよう。自分達の義務を果たす以上のことは、通常、何も尋ねたりはしないノーマルな人々は保護されるであろう。その仕事に反対の立場に自分達をおこようと試みるような知識人は危険なゲームを演じることになろう。

(5) (4)の補足的パセージ

摘要

1950年辺りの傷ついた且つ拘束された資本主義の下では、諸産業の社会主義的経営に向けての経済上並びに意識上の成熟はできているのかも知れない。農業的分野といった分野を除けば。魂はそのように造型されているとして、倫理的水準での適応並びに新しい価値付けと動機付けの図式も出来上がっている必要がある。それにも拘わらず社会主義者達はそのことを曖昧にしており、その先行者が破滅するのを望むほどには社会主義を望んでいないかの如くである。社会主義に反対する根拠は実際にそれを運転する社会主義者達に対する不信にあるのであり、社会主義者達の危険は理想を語っている彼等の輝ける眼にあるのではなくして、熟慮と経験の不充分性にあるのである。しかしそうは言っても社会主義的経営では公的分野に所属する産業活動の全体があまりにも大であり、あまりにも込み入り過ぎている。ここにおいて必要なのは効率的機構と人的能力それに権威による規律である。官僚制は明確に定められた仕事を如何なる恣意的決定をも排して、標準またはノルマまたは規則や法規に従ってなし遂げる。官僚達はどんな特別の報酬もなしに彼等の義務として、シジフォスの苦難の中に仕事をよく果たすべく、全時間をこれに没頭することになる。社会主義の下では、厳格に区分された部署でのキャリアとして具体化された人的諸能力を確保することが一層に重要であって、超正常能力者達を機構の中に導入するための独特に効率的なスキームを持たなければならない。規律の点から指示される唯一の権威は社会主義に対して健全な態度を確保するための権力を意味し、それは人材を指導し監査し訓練する機能を意味するものであって、他の非合理的盲従として濫用されることになるような権力を意味しない。規律には3種があり、自己規律は人それぞれに訓練された習慣を、集団規律は調整のとれた諸活動を生み出すため誘導された仕付けを、権威による規律は尊敬乃至は畏怖を伴う義務の意識に根ざす自発性の態度を意味するが、自己規律と集団規律は権威による規律の下に促進されるものであり、社会主義はそうした過程に好都合なポジションにある。・・・その他 (編者)

Ⅲ—(5)—1～66

(4)の補足的パセージ

1 社会主義は1850年には——双方の根拠からして——何等の意味をも持ちえないものであったと言えよう、そしてその意味を持ちえない状態は我々の言っていることが真実であるに至るまで、且つ諸機会がフィクションでない社会主義に好都合なものに益々以て至るまで、持続するであろう。(ここで言っていることは移行問題とは衝突しない、私はその場合、益々容易になるだろうと言っている。)・・・明確な状態を以て比較されなければならないのではあるから、私は拘束された資本主義(**fettered Kapitalismus**)だけを取り上げる、その時機としては1950年(条件付けの終結)を採る——それは設定が下された場合の、及び諸力が実際に十分に眼に浮かぶよう整えられた場合の、諸環境を提示する——西ヨーロッパで、アメリカで、あるいはもっと一般化して。・・・そうは言っても全く一般的に——移行のことは度外視するとして——(社会主義の実行は)農業部門を除けば(困難は)さほど大ではないとさえ告げることができる。・・・巨大な節約、それは可能性としては、それだけでふさわしいものでありえよう、部分的には、それは既に今であるかも知れない、但し道徳的忠誠(**moral allegiance**)の欠如が方向において根底から認定されるや、すぐさまということにはならない。現存する標準に対する不支持(**kein support**)と解体(**disintegration**)、唯一の手段はそういうことである。・・・

Ⅱにおいてしておいた指摘、そこでは魂の社会化(**Sozialisierung der Seelen**)についてが!・・・方向(**Dir—Direktion**)に責任がある・・・社会的破局に対する責任・・・ズボンに付した紋様・・・

2 社会主義Ⅲ・・・単純に、大企業資本主義は正に現存しているようなものではなくして、現在の諸傾向が、尚よく働き尽くされた時に期待されるであろうものとしてみられなければならない。そこにおいて私は拘束資本主義の種子受領者となるべきなのである。社会主義Ⅱにおける「拘束」の中へ、それは導入された——しかしそうするとして、拘束資本主義の中にも当然成長があるのではないか?の問題がある。あるいは二段階で、自らの心理学を伴った——拘束なしの——資本主義と拘束された資本主義が・・・資本主義の優越は所有の利益と責任制度(**Eigentums interesse und**

Verantwortung)の上に基礎付けられることができる。・・・報酬と責任についてのその比類なく効果的なシェーマ、それは真実であり、しかもその同じ時代の中で！傷つけられるのである。IVにおいては選抜(淘汰)がくる。・・・三つの要点、頭脳(Gehirne)の質と練達の諸条件(Bedingungen der Fertigkeit)と動機付け(Motivation)——有能なアメリカ人はビジネスに赴く。・・・「盲目と空虚」(カントの純粹理性批判の中の命題、「概念無き経験は盲目であり、経験なき概念は空虚である」の含意、編者)——創出(造型)(Gestaltung)が移行活動の中で正されることが全く容易だということなれば、自由についての要求がもたれることはあり得ることであろう。・・・

“Begriffe ohne Erfahrungen sind blind, Erfahrungen ohne Begriffe sind leer.”

3 善良な少年を見よ、神を讃えている！・・・金の卵を産む鷲鳥、それは理想対現実に対応して重要である。・・・

資本主義を見よ。そこには先見と自制と理想的合理性を伴った真正のものがあり、それが新しきものを自己の責任において創出する——気前の良さを除いて合理性からの何の逸脱もない——。更に資本主義を見よ。そこにはこれも同様に「労働者達と消費者達を抑圧する過程の途上に立ちはだかっている汚いトリックで社会がゆすり取られている」(die Gesellschaft blackmailed durch dirty tricks standing in a way of Prozess oppressing workmen and consumers)、という準犯罪的なものがある。双方が資本主義であり得るものであり、且つあるべきものなのである。而して社会主義においても同様で、すなわち斯く斯く。・・・

4 何に苛立っているのか？・・・理想型の資本主義か、事実上のそれか。・・・労働者と農業者の再条件付けは何の必要もない。ただ力強い態度をとることが許されるだけである。・・・恐らくは、他の目的を得ようとする場合、その時チャンスをとらえること、だが必然でない。・・・健全な態度、後で検討しよう。・・・働く場での服従(subordination)——今日それらがあるもの——恐怖のコンペアーシステム・・・そして仕事といったものの膨大な量は、また今日におけると同じだけあり、小事業者に

しても同じである。それは移行には重要である。・・・どのように私はそれを取り上げるべきだろうか、追求され尽くすことができないような、更には完全に競合するものでもないような、論争をなさなければならないものかだろうか。・・・小さな少数派、その重要性については高度の配慮がもたれなければならない。・・・平等主義(equalitarianism)——投資に対しては不平等な配分である。・・・適切にここでか、または中世とのアナロジーを伴って。・・・

家、プライバシー・・・管理と責任の心理学・・・生産、選抜(淘汰)・・・資産、労働者達・書記達・指導者達の適応能力・・・歴史家は、自分が描かれていることをより良く批判することを知っていると考え、エコノミスト乃至はジャーナリストは事業とは何かを知っていると考え。・・・社会主義の内部にも生活形態をめぐる闘争(Kampf um Lebensform)はある。・・・バリエーションの途方もない幅がある、それは大部分、教育、訓練、慣習に根差すものである。条件付けられた識別(discrimination)の欲求。・・・しかし、しばしば変化は必然でない、言い逃れは容易にできる。・・・しかし、a) 能率を傷つける、b) 能率を下げることができる。・・・狩猟・・・食物の幅・・・喫煙・・・社会的交流、多くのことの底辺には更に多くのその外面的形態が尚も・・・性的要素の重要性——用具に対して合理的であることが重要。・・・文学の依頼・・・

5 一方において、資本主義の作動を許容しているどんな国にあっても、社会主義をスムーズに作動させるため要求される心理的適応が——幾ばくかの批判者が信じている程には——大なるものであるようなことはないであろうこと。他方において、歴史的で人物的な観察は、適応が能率を損なうことなしに可能だとするものか、或いは多大の困難乃至は激しさをさえ伴うものか、と見解の差の幅についての範囲の大きいこと、を我々は検討している。これは「生き残り得るや」と衝突するものではない。・・・

6 デザイン・・・能率のために重要である。

a) 社会主義の種類——全く様々であり得る、全てが「社会主義」であるとしても、b) どのように運転されているか、c) 誰によって運転されているのか。・・・諸機能に対する適応、a) 非経済的諸条件、b) 順応

(可鍛)性・・・利潤動機・・・所有制度、官僚制——そして次官級官僚達の役割(Funktionieren der Unterserektär)・・・その現代的タイプ・・・社会関係の中での彼の俸給、更に小言を言う。・・・

ワトソン、彼をして経済的両親からゲーテ(Goethe)を生ましめよ、20～30年は待て——何故に社会主義はその先行が破滅するように歓迎されないのであるか？・・・

他の文化を様々に条件付ける。・・・家庭といったもの・・・スクリーンの諸家族。・・・比較、競争と独占の間におけるのと同様に可能性はそれだけ乏しい。・・・諸条件が全く異なる、しかも文化実体や精神意識と人物のタイプに意味充分なものが欠けている。・・・

魂は機能させられなければならない。社会主義者はしかしそれをぼんやりとしたものの中におき、そして社会主義は二重の断層を常にもち、しかもそれが彼が冷笑しているものの上にある、ということを理解させるようならしめる。・・・何のために更に多くの道徳的スタミナを身につけるのか。・・・

7 特殊な場合——当然のことながら立体的なものとなり得る、あるいはそれは他の二つの契機に即して極めて似た結果に帰するのか、ということである。・・・

自己責任による決定の価値(二つの事柄、動機の鋭さと自由)は極めて現実的である。しかし全くのところ決定の相対的な質に依存する。・・・それは尚また、大規模事業体においてもそうである。・・・重要なのは課題が狭いこと・・・機能における開拓・・・そしてそれは二つの契機に対応した一つであり、他の一つ、すなわち監視である。・・・それを私は既に持ち続けてきた。・・・行論はこの人物に対してのみ当てはまるものであり、且つ、行政決定のルールを裁定することが常であるような人物に対してはそうでない。・・・それ程大きな展開はない、というところが重要である。・・・国家は創造するところがない。・・・事物の本質はより明瞭である——ストライキを行う人達にも・・・健康な態度、忠誠と許容(excuses wegen)・・・インテリ共はもはや車の中で叫ぶことはせず、喜んでい。もはや誰もが告げない、労働者達に対して働くことは正しくなく、それは屈辱的な服従であるとは。・・・それは命令することも規律化することも思い切ってなし得ないような拘束された資本主義に即して、とりわけ決定的である。——そう、偏に、それは極めて民主的である。・・・

8 社会主義に反対するケースは何等かの理論家の原理に根差すものではなく、それを運転しなければならない人々についての不信に根差すものであり、それに実行上の諸配慮に根差すものである。・・・社会主義にとっての危険は社会主義の理念といったものを語る社会主義者達である。・・・そして誰が運転するかの問題である。・・・不幸なことに——エコノミストである為には熟練と経験が必要だが、輝ける眼は必ずしも要しないということ——これを言うのを嫌われることを私は知っている。・・・更に政治家が有用な担保がある(die useful pawns sind)と認識することは危険である。

9 実行上の問題・・・尚、依拠している諸前提の下で続ける・・・見通しの悪さ・・・全体の仕事(die Leistung des Ganzen)が果てしなく込み入っており、難しく、超人的能力(superhuman Fähigkeit)が必要なこと、並びに有機体機構の中へ入らせることであり、並びにその中にある意欲ある労働者達に知性と道徳をある不可能なとも言える高さ(eine unmögliche Höhe der Intelligenz und moral)を要求する(知性の方は要求が少ない、それは事柄が指導者と被指導者の関係からより明瞭であるからであり、しかも商売敵やライバルとの間でチェスを演じることがないからである)・・・しかしストライキ実行者との間は・・・

α) このことはそうでない。・・・問題は全く単純である。例えば農業部門は鉄道、電力、機械、肥料等の産業と研究所を伴っている、そして帰するところ、ここにも他と同様の利害の闘争(der Kampf der Interessen)がある。我々が実行上の問題を語るのなら、それは正しく今(ja jetzt)である。農業はどこにおいても他の人々のコストによって生きている。・・・抵抗は？ だが例えば、それは家庭を破壊された！ところの資本主義である。しかしそれは時の成熟の下に全て可能であるだけである。・・・そしてここにおいても順応性(可鍛性)が？ (長期間に渡って?)・・・大きな要点はスコラ学的である、そのように例えば合理的シェーマ一般は「大きな異論」を添えられている。

β) だがその場合も尚ここで？ (あるいは「より良い」ところで?)・・・順応性(可鍛性)の問題——同じ人々が他の環境下で他のように機能するこ

とがあり得るか否か、を前もって問う。・・・彼のズボンに刻印された紋様を着用することの妥当性。・・・ゲーテが道徳的なだけではない、といったことは極めて価値多きものである。・・・

10 道徳性(Moralität)・・・道徳教育・・・事物の全体の半分の形成・・・過去についての博識・・・だが燃え上がった行動があるのでは？・・・必要である以上に長時間働かせるだけ・・・不正に手が加えられ、しかもとりわけ過激であることが確かな労働運動の文書の中で。・・・根がない(根拠がない)、無責任である・・・失業・・・失業はまた訓練のためのものである。a) 失業となり得る諸潮流に続いて、b) 目的とするもの、報酬以上に働かせる。・・・彼が欲したいと誘引され得る全てのことの教育・・・

11 労働の報酬はそれを充分に行うことの内にある喜びである。そしてその捩じれ(the distortion)は新しい道徳的世界なのではなくして、新しくして古くからの世界にとって正にそれだけ有害なものである。すなわち、個人的な「利益」(“Interesse”)の足場を生み出すということ。・・・

「官僚」、私はいつも驚いている、何故にその人々は彼等のシジフォスの苦難(ihrer Sisyhus toil)をかくもよく働くのかと、と。・・・

砂と金についての、そして鷺鳥と金の卵についての当惑・・・社会主義が行政を引き受ける・・・a) 冷笑、b) 承認——但し自己了解的に・・・他のトリック・・・強制のための全てのことを、そして19世紀のための全てのことを管理する。・・・失業と過大能力・・・より乏しい・・・臨時的と正常的・・・

全てが信じられない程に狭くなることも累進的に・・・2は100年遅れて、3は何か？・・・

大衆の規律化について、と他の働こうとする態度について、はどこで。インテリ共に由来する行論の幅について・・・彼等が煽動するところは社会主義の下でより少なくなるかどうか——はどこで。

12 親方の眼・・・金の鷺鳥・・・冷笑に替えて・・・

シェイクスピアの騎士達のように、正確には紳士が為すことではないことを互いに怒鳴り合う。(紳士と淑女は今となっては化粧台に向かったのみそうである。普遍化(Verallgemeinerung)による廃止。)・・・ズボンに付した紋様・・・尚、他の行論のためにする他の正義がある。・・・諸々の可能性だけが論じられよう。・・・実務家の論点・・・

社会主義・・・情緒的・民主主義者(sentimental-Demokrat)・・・同じ人々、諸習慣、他の文化・・・マックス・アドラー(Max Adler)——有権者に語るだけでなく、演出効果もまた。・・・労働者達による経営者の選出?・・・民主主義は先ずは一掃されなければならない!・・・上記に述べられたのは社会主義が自覚的にも一層もっと平和的であり得る、戦時様の意識(warlike mentality)に向かうような非合理的なものでなく作動することができる。

13 逆らって設せられることができることの全ては動機(motive)なる標題の下にもたらされる。ここでは、先ずその多くが——利潤動機と報酬動機の多くが——廃止されること、次いでそうなるのは完全成熟の場合に対応した場合のみであるということ、更に所得によるものではないような直接的諸利益(direkte Vorteile)により、並びにズボンに付した紋様のような実際上の利益によって置換されたものであることである。・・・構造的抑制・・・

機構が経済のお蔭(徳性)で人々(人民)を良くすることは必然的なものではないであろう。同様に利潤動機と所有制度が必須のものではなく、しかも既に重要性を実際に減じている、ことがある。ここでは、それについて尚、何事かが入ってくるということにつき指摘する。・・・ここでは更にその場合本来的にあるところのものは何か(was eigentlich besthet)、及びそれはまた選抜(淘汰)でもある(遺産 Erbschaft)、ということをして・・・

選抜(淘汰)と人々(人民)(だがその場合ここではこの全問題が、更に第2エッセイとの衝突が、更に社会化委員会については後述されることをここで)・・・動機を置き換えることの可能性・・・自由に対する文化的視点・・・それにしてもエネルギーの節約・弁護士についてはどこで・・・所得税・・・拘束された資本主義と傷ついた資本主義に対して格別に意味付けられるものは何か、恐らくは取り扱いが区別されよう。・・・

1 4 社会主義の感傷的人道主義(die sentimentale humanitarismus des Sozialismus)、社会主義は自己欺瞞させられる必要はないと。・・・優しさ(softness)を多とすることはない。・・・行政的管理の失敗、例えば戦時調達といったこと——その本質は誰が失敗を犯したかを特定できないところにある。・・・

1 5 適応(Adaptation)・・・ファーマー達と労働者達についてと併行している行論と倫理的水準についての行論の部分との境界線を緩めてはならない。・・・価値削奪と動機付けの図式の変更と他の諸条件の下でそれをつくる階層または人々の創出。・・・

馬鹿げた社会主義については後にする。・・・選抜(淘汰)——適性の保全(conservation of fit)、すなわち能力を求めて組み合わせ、そして最適の場合に適応させる。・・・更に重い他の諸問題がある、動機の図式といったもの。・・・ここでは、

1) プルードンの要約をエッセイⅢのところ(Proudhons le summe du Essay Ⅲ)、・・・既に変えられている私的な王朝を目指したような諸目的は最早可能でない。

2) 傷つけられた他の正義・・・成功、仕事能力の認知(recognition of Arbeitsmöglichkeit)・・・ズボンに付した紋様・・・同志の召使い(commrade valet)・・・平均以上の価値豊かな労働力の保護・・・だが官僚制とそれによる経済・・・そして責任と監督・・・諸委員会・・・だが特殊な場合のみ、その場合大きな利益・・・そこにある偏差(諸グループに対する様々な居所)(deviations(localities für groups))・・・

1 6 彼等は自覚しているのかどうか？——彼等にとって不正直や個人的な諸利益が全く誠実に投げ棄てられるか、を・・・この虚偽の見せかけ・・・社会主義者達は道徳的困難を明らかにしない。しかもどれ程彼等の行論が他の側を攻撃することであるか。また「他の側」などはない、とはしない。・・・如何に不誠実に彼等が映じることか・・・更に彼等は道徳的批難の炎の中で訴える傍ら、きちっと見ている(anschauen)かどうか極めて疑わしい、ということ。・・・いつも独占を持とうと求めている

る。・・・だがそれは反社会主義者が正に誠実だということではない。・・・
何故に規律？・・・賛同に対する価値の喪失と自由な賛同も今やない——
禁止をみよ・・・飢餓暴動は特別の現象である・・・あらゆるグループを
締め上げる政策・・・

17 社会主義の下では全ての事柄がどのようにより軽く、なのか——私
的生活もまた、どのように事物が整えられることができ得るのだろうか。
私は「集団住宅」を考える、そこでは人々は相対しながら(*gegenseitig*)奉
仕を給付し合い、且つ落ち着きをももつように！(*man auch Ruhe haben*)
といった如く、全てが配列されることができるとは。・・・とりわけ今
日の私的住宅の下では、紛糾の源泉であるものが然るべくあり、しかもそ
れに慣習から——誰もが信じていないような「理想的諸根拠」(*idealen*
Gründen)から——固く縛られている。・・・道徳的・文化的諸理念と生活
諸形態を衝突させる場である状態における私的生活は半ばスポイルされ
ている——a) 日々の不愉快(*Unannehmlichkeiten*)により、b) 防ぎ得
ない諸活動(所得税、他の課税等)により。・・・

しかしながら、他の点では社会主義と非社会主義は最早真正の対立(*die*
wahren Gegensätze)ではない。対立は消費者の社会(それに18世紀の諸
理念)と常にはっきりと自己宣言をなしている新社会との間にある対立で
ある。・・・私はラーナーとの間におけるよりはハイエクとの間において
少なからざる距離をもっている。

ルーズベルトの四つの自由は獄中において可能である。・・・奴隷達の自
由理念・・・

18 どこで人々は満足しているのか？ パウロのノックを比較せ
よ・・・卿の日が開かれた——彼等は眠っている。・・・私的な富、それ
に王朝、それに一族などはない。・・・機能と刺激のためのもの・・・文
化的諸条件、中世における現代的な管理・・・社会主義はそれが絶えず防衛
され比較されるような一般的概念ではないことの理由がそれである。・・・
そうすることは意味がない。・・・それからの推論にも意味がない。・・・
冷笑による行論・・・またもや二点が、企業者の刺激と労働者の順応
(*Stimulus des Unternehmer, Einfügen der Arbeiter*)・・・なされるべき

義務・・・

19 ある完全な光の下に、社会は社会主義に向かって作動している。だが諸目的の外にある。・・・反対にランゲは、これとは離れて、経済のある一定の諸法則は、実際、全く論理であるとする。・・・経済は論理のマトリックス(matrix der Logik)である。・・・何が区別されるのか、選抜(淘汰)(Auslese)、収益の配分(Verteilung der Ertrage)、目的(Ziel)、方法における区別。・・・

20 それ以上に今一つの局面がある。多くの諸理由の中で、我々は次のことを期待しなければならない。すなわち、超正常者達(the “supernomals”)は役割を果たすこと条件付けとして選好的な取扱い(preferential treatment)を要求するであろう。単に彼等の事情であるだけではないのであって、余人をもって替え難い、という一事があるのである。そうした取扱いを挟むことで、彼等は自分達の仕事に対し適性を保つことを許容されているのだ、と要求することになるだろう。殆どの場合において、超正常的に価値多き業績は要求されるものが、単に「天分(“the gift”)」だけでなく、集中できること、その超越した生活諸条件の中で納得してその仕事を成功裡に進めることができるほどに、精力を使い切らせることによっても成し遂げられる。

21 ここではまた力量の問題(die Frage der competence)をもできる限り扱う。・・・

なんと有用な馬鹿なのであろうか、彼等は！・・・私はひょっとすると不平等について関説するべきであったのでは？ ブルジョワジーと下層階級の間の不平等、及びブルジョワジー内部での不平等・・・

22 どれ程に能力が必要か！ 社会主義はその量を軽くする、産業人は

雄弁家では決してない、ということが重要である。・・・1) 経済的に選択する、2) 適応——本来移行に属する、なるほど、だが規律といったものの問題は？・・・そして理想主義・・・3) 能率のための諸条件、それは心理学的側面に属する。・・・

23 もし社会主義者が標準以下の者——酔っ払い運転手——と闘うのならば、彼等が短距離を走るかのようにそうすることを控えるだろう、ということを読み出しはしない。・・・賢明性の問題は破壊されるべきではない、そして誠実性の問題は・・・

24 眼前に抱えている課題の定式化・・・先ずは一個の特殊な問題であることを指摘する。・・・
その仕事に根を下ろしている階層を・・・選抜と成果の間の区別・・・だがそれほどには大きくはないという異論に晒されている——指導者達がモンモレンシィ達(Montmorency・・・レジームに対する忠臣)であったとすると。・・・「二つの階層」・・・最良の頭脳がより高い効用をもたらすとはできないのだ、となす行論。・・・

25 破局は明らかである——現在の二者択一が継承されていく限りは——しかしそれが必須のものという程のものではない。・・・選出があつて規律がなければ、崩壊(Zusammenbruch)。・・・我々の構図は、それ故に一つの特異な社会主義のそれにとどまるのではなくして、民主主義との関連においても甚だ疑問なところがあるということ。・・・「ありうる」(can be)は——常に単にできるである。・・・未だ移行になっていない。・・・
a) 良き意志を保持している、b) 諸習慣(habits)、圧力を意味している。・・・社会主義者達と政治家達にとっては全くの喜び・・・命令を与えることをパスする者は誰もいない。・・・労働者の全体が審問下で働く。・・・競走馬(race horse)や懸賞牛(prize bull)のように、より合理的である。・・・社会的資産・・・上層階層は社会主義の下では一層効果的である・・・価値あるストックの問題・・・諸習慣と合理的変化・・・更に

そこでは喫煙といったことについても・・・変化の内、ある種のものが消し去られたことは既に述べた。・・・しかし何がなされたであろうかは既に述べてある。

26 選抜(淘汰)——資格の諸要件(Qualifikationslisten)・・・

地方的及び集团的利益は排除されない！・・・それについてはⅢ－1で示されよう・・・更にそれに加えて比較におけるそれに回帰し(検討されよう)。・・・これらの地理的といったものの諸困難は、多くの制度的なものが資本主義だけに内在するものではない、ということを示している。・・・もっともそれは至るところで所得の均等をはかることで排除され得よう。更にまた個別産業の自主性が正確に合理的になされる、という「大胆な仮定」を受け入れるのならば。・・・また個別産業の経営者達が既に決まっているのならば。・・・そしてそこでは一個の「トラスト」の内にある諸々の事柄の如くであることを超えたものとなる。・・・しかしそれでも利潤は単純にそうであり、経営者達は指導者をリタイアすべき馬鹿者であると示すことになる。・・・ロスバッハ(Rosbach)・・・少なすぎる規律という意味で(?)ではなく、18世紀を比較している・・・あるいはそれは民主主義では？・・・動機に即してもフランス共和国は将軍達を射止め、スターリンは経営者達を射止めた。・・・

スタハーノフ(Stahanov)は志気の改良——労働者と鼓舞(moral Reformation——Arbeiter und Begeisterung)があり得るということを示した。・・・

27 所得の不平等・・・不平等性についてはどこかで扱うにしても、ここではないのが妥当にみえる。——より高い所得とは各種の料金報酬をもち続けることである、というのが私の考えである。その上に当然のことながら老人や子供に対する手当てがあり、更にそのようにして資本主義的百万長者は5万ドルの実効購買力を手元においており、しかもその多くは隠されている。・・・それは幅広く様々であるだろう、とりわけ隠された差が大きい。・・・しかし社会主義者達は(これに)大いに不同意である。グスタフ・ステファン(Gustav Stefan)は、とりわけ購買力については1万ドル以上で充分であるとなした。社会主義者はこの点については何かはつき

りしないものがある。はっきり言えば各人が自分の所得については特殊であるとなしている。そこここで更に表明されている「経験」の中には現物給付を以てするトリック(trick mit Naturalia)がある。というのは現代の国家はそのトリックを社会主義の指導者について教えている。この他にも私的支出ではないかとされるものがある。代表！それが人民委員ならば、彼はそれで充分なのである。

28 等しく根拠を語らなければならないであろうと同じ程に、注意を払うことは非合理であろう。・・・だが社会主義を構成する原則を揺るがすといったことなしにこのことが完全に可能だ、ということがその要点である。・・・

全くの工夫によって覆う。・・・クラブ原理(club principle)、最早家々が荘重に確保されている必要はない。それはそうは言っても既に修正である。・・・権威の欠如を以てする支配は関心を緩める。・・・勲章(Auszeichnung)の経済的価値を非合理的なものとみることは、そうしないと、極めて高コストとなるだろうことを我々は習慣付けられている。・・・

29 社会主義を分類しようとする一つの試み、何故なら挫折が社会主義者達を発生させる(Zusammenbrüche Sozialisten entstehen!)のだから。・・・それは諸根拠に即した分類となるのでは。・・・諸段階に即した、諸理念に即した、それを始めた人々に即した分類も。・・・

処方箋は、というなれば孤立主義者達は冷笑する。・・・老婦人の平和主義——その社会主義的立場は何であったのか。・・・

規律は自己の欠点に対する支払いの作用に属する(Die Disziplin Wirkung des Bezahlens für eigene Fehler gehört.)、しかし資産の諸メリットについての議論に対しては——ここでもまた——明らかに重要な事柄についての冷笑がある。・・・社会主義ではより少ない節約がより大な能率となるのでは。・・・それは正しい。・・・しかしより少ない損失は。・・・

比較のためには恐らくは不平等性もまた属しよう。・・・いずれの場合も、資本主義の下では貯蓄が資本形成を阻害するという理論、並びに自由な職業選択ができ得る限りの浪費を意味するという理論がある。・・・今日の資本主義の下では正にそうである。・・・

スウェーデンとその社会主義とその非移転性・・・求められている支出問題・・・

30 指導する者と指導される者の間にある不平等は同じものである、そして大衆はこの関連では社会主義に対し前もってそれがそもそも何事であるだろうか？をわきまえていない。社会的重要性をもち、資格のある——それにふさわしいような——仕事(qualifizierte Arbeit)をなす——それは僅かな者達でしかあり得ないであろう。・・・更にそれを今日では、貧困である場合、誰にももち得ない、と述べることは欺きである——欺きは政策にもあり、ビジネスにおいてすらある。・・・そうは言っても、社会主義的選抜(淘汰)が更に、より速やかに、しかも純粋に人物的に、作用することは確かである——しかしそれは本質的には如何なる区別をつくるものでもなく、しかも如何なる正味の利点となるものではない。・・・更に民主主義的指導は「制御」される——だがそれもまた重要でない。・・・ズボンに付した紋様・・・

31 製造品を開発するという一つの機能・・・資本主義では隠されて行われるものである！そして瞞着(disapproved)・・・罰・・・監督者の選出といったことについて、移行のところか、エッセイVで・・・

32 比較に際して、方程式を解くことはより容易なことだ、と既に述べた。・・・三段階、競争に即した静態的過程、分配における静態的過程、変革？・・・形式的な理論から何がもたらされるのか。・・・

ここでもまた現存の装置を管理すること。・・・

競争的社会主義の精神(spirit of competitive socialism)についての指摘・・・移行についての指摘・・・

委員会業務及び議会諮問会議(科学と政策についての指摘) 対 官僚業務(内閣組織と所属部課の指揮者)についての比較。・・・問題としては、部分的にチームワークとしての個々の仕事の調整の問題があるだけであり、そしてその場合、金銭的(pecuniary)オリエンテーション 対 非金銭的オ

リエンテーションの問題と責任の問題がある。この問題は今も存在し、部分的には個人的な金銭的動機の問題だけであるが、課題の知られざる領域でもある。・・・大規模事業体・・・個人的要素は排除されない。・・・民主主義が真面目に取り組み、全てに口出しをするととなると、再び他の問題が生じてくる！・・・成功と失敗のパフォーマンス・・・その場合、民主主義に即した選抜(淘汰)(Auslese bei Demokratie)が？・・・消費者の利益はどのように配慮されるのか？・・・

3 3 社会の社会主義的な構造の中で、このことは——良かれ悪しかれ——存在するだろうと信じるべき根拠は何もない、ということに注意しておこう。——一介の医師であり技術者として、成功によって自分の野心の盃を満たそうと思っている医師や技術者は、その際立ったタイプの人物であり、そしてその際立った利益の型をもつものである、と言えるであろう。・・・祖国の制度を作動し、または改革することを意味するそうした医師や技術者は、尚、今一つのタイプであり、そして利益の今一つの型をもつのではないか。・・・第二に、政治的構造の研究者達は、いつも、大にして複雑した社会にあっては民主主義の行政的効率 (the administrative efficiency) を取り扱って疑問を感じてきた。とりわけ、それは論じられたところ・・・

3 4 どのように委員会は作動するのか——全ての委員が論議にくちばしを入れ、だから専門家は何もなすことができない、ということが重要である。しかし尚、次のことも。彼は自分が意図したことをなし、他人の雄弁をば語るに任せること。・・・(同志諸君、失礼)・・・事情を設定するため、1時間の時をかけることを、正に私自身に許そうと思う。・・・このことは人間の社会的性質の順応性(可鍛性)についての多くの論ぜられてきた疑問を処理しているようにみえる。だがストップ。それはそうではない。実際に人間の性情(human nature)なるものは資本主義によって既に造型されてしまっている、ということ——信頼に値するものとして——我々の結論は想定している、のは明白である。官僚制的な仕事は——誰に対しても、いつでも、どこにおいても——可能なのではない。それは適応を要求する。ここに適応とは、人々の内、十分な数が生活や仕事に対す

る態度において、官僚制的な仕事が意味しているところのものを理解して、しかも好む、ということである。・・・(アメリカでは困難)・・・そこでもし問題となる頭脳達が全て「社会主義と闘う」ことを情熱的に決意されていた——50年前にそうであったように——となると、更にもしブルジョワジーの(経済的「独立」の上に基礎をおいた私的領域である)家族動機(the family motivation)が生来のままであったとすると、事物は恐らく作動しないであろう——それこそ何故にボルシェヴィズムが彼等を粛清し去ったかの理由である。こうした疑問が全て同じようにおこる。

現実には二つの質問がある。ビヘイビアは——変更されつつある価値に対する好みがなくとも——様々に条件付けが行われていくことによって変えられることができる。・・・同じような人物であっても、家族や財産上の諸利益をもたない人は異なって行動するであろう。更に諸見解やそれと結合した諸価値観は、それ自体が如何様のものであっても変えられ得る。(司法制度、愛国主義、名士達(?)(great curves)——私は彼が売春婦のところで殴られたことを不名誉であるとは考えるが、罪に落そうとは欲しなかった)。尚、他の事例がある。[国民感情はそれを容易ならしめる(national sentiment macht das leichter.)——重要な契機!——]。・・・

作動可能性だけのことならば、それ以上の変化は必要としない! 更に彼等の価値への好みは(そしてこの理由に由来する諸価値と諸標準の構図も)変化しうるのである。・・・

注釈 1) 社会主義者も反社会主義者も、ここでは同じやり方で彼等の先入観の棍棒をもって闘うのであって、論議は意味をもたない、とは言えない。2) その時代が必要とした全ては多分に流儀に依存するということ。3)このようにして、問題は更に一層の変化をなすだけのことであること。・・・

そこから学ぶべきである! 建設的となることができるのではないか! 長引けば長引くほど改善される! 恐らく結論も。・・・
不平等についてはどこで。・・・そしてここでは官僚制と私的イニシャティブと所有制度についてのみ。・・・分野、被覆、教説の喪失・・・社会主義は多くの道徳的価値を破壊する。・・・そこで次のような帰結へ、1)より良いかどうか、2)どこまで民主主義的に。・・・

35 神々と天使達・・・

しかし、可能性が利用され尽くされるという保証は全くなされないのでは

る、しかもその上、他の偏りをももっている。・・・資本主義の優越が基礎付けられるところのもの、動機と領域の鋭さ、理想を達成するためのより大なる軽快性、それに運転する人々のより良き質——それらは選抜(淘汰)があることから直接的にもたらされる(auf Schärfe der Motive und Sphäre und auf grössere Leichtigkeit, das Ideal zu erreichen und auf bessere Qualität der Leute who run—kann direkt gezeugt werden durch selection)。・・・正に選抜(淘汰)・・・困難ならしめられるのは民主主義的修辭だけである。・・・怠惰な金持ちもまた労働者である！！・・・私の喫煙と共にあるそれは何なのか？・・・食事の変更は致命的である——ここでも歴史的舞台が全く無視されてはならない。・・・尚また導入を伴って・・・導入の困難は後でもくる。・・・

36 誰もが如何にして自分が成功するかについての機会を打診する——あらゆる経済的契約を取り結んでいる愛すべき詩人の道化のように。・・・そして我々は全てそうである。・・・決してこのことを認知しない。・・・そして彼のちっぽけなゲームを演じる。・・・単純に頭脳の問題ではない。・・・この考えを採らしめよ。・・・

上層諸階層は他の階層とも同様にこの点を諒としなければならない。・・・しかし可能性は与えられている(貯蓄の機能といったものを引き受けることによって)・・・

巧い表現の中に大きな事柄を・・・資本主義社会においてのみそうだという異論にちなんで(例えば生活に対しては面倒がみられているので、更に諸根拠が見究められた場合、それを安閑としてみておれない、ということには彼は決して至らないので、という)

37 今やここにおいて、何がより容易になるのか。・・・a) 経済政策、それに節約といったことに向けての全体に対する態度、b) 忠誠心、並びにそれが規律を良化させ、仕事に対する健康的な態度をもたらす。・・・上位階層・・・価値・・・

節約の機能は良き意志があるか否かによっている——ここではボルシェヴィズムが意識される。・・・三つの場合に光を・・・「・・・であることができる」——いつも「できる」となるだけ・・・その場合は拘束された

資本家のケースである。・・・二つの点で逃げ去っている。・・・
指導者は社会主義では一層に自由である。だが官僚制は・・・適応的バ
ランス感覚・・・ナイーブな信念・・・何が国家であるかは留保するとして・・・

38 我々の委員会・・・事態ははっきりしている、貯蓄について、それ
が刺激の必要という点で災厄であり悪であると聞かせることは無意味で
はないだろう、ということ。・・・工場指導者の選出といったことについ
ては、ここでか、またはIVで・・・

39 具体的方法であるかどうか、それを見よ。・・・貯蓄を見よ。・・・
資本の保全は社会主義の下でも必要である。

40 貯蓄は多分3で？・・・あるいはもっと以前に——一つの制限的効
果として？・・・リカードの利潤？・・・

41 私は改善のための諸手段と基金の必要性を呼び起こす方法につい
て、既に何事かを述べてきたのだが。・・・

42 社会主義Ⅲ. 規律(Disziplin)・・・
規律は資本主義では必要である。社会主義ではどこまで必要か——部分的
には集団活動に回帰する。標準以下の者達(subnormal)の故のみではなく、
単純に協調された行動をもたらすためである。誰もが思い通りに生産で
きるわけではなく、しかも単純に得心され得るものでもない。・・・
自己規律(Selbstdisziplin)は教え込まれる。・・・しかし何故に「規律」を
必要とするところが(社会主義の下では・・・編者)より少ないのかには根
拠がある。・・・

過去のものとなったもの(but gone)、単なる臣従(mere allegiance)、敵意ある状態、怠業すること(erlaubt)とスローダウン、誰もがとがめだてしないし、依拠する利益は依拠できないものだとしさえする、働くことに反対するという人を設しさえする、ということ。・・・自己利益(eigene Interesse)のようなものは、何も残されてはいない。とりわけ拘束された資本主義にあっては。・・・行使する権力は濫用する権力である。・・・そして社会主義は規律を回復することができ、しかも腐敗した人物(tainted man)である資本家、搾取者、よりもより良い位置に就くことができる。

4 3 最後に、経済的エンジンの効率的な運転と、商業的社会が事業体の経営者達に与えている被雇用者に君臨する権威、との間に存続し続けるべく保たれている関係がある。我々が考察に赴こうとしている権威の唯一種は、対応する用語、服従または規律、によって効率的に示される。・・・方法を特色づけるもの、直接的に私的利益に応じたものだという事・・・鋭い差がある。・・・

自己規律——意見による誘引規律(inducement discipline)との区別が必要、だが極めて様々である。要するに搾取するための権力ではないのか？ 回答、働かざる者は食わせない(wer nicht arbeitet, wirt nicht essen)——だがそれ程に単純でない——現実に働こうとしない者は、帰ってくるな。・・・個々の計画が極めて様々に異なった規律を必要とすることは明らかである。・・・

4 4 だがそれは労働者に即しただけのことではない。今一つの論点がある。総じて進歩に対するもので、しかも決定的なものとなることが大いにあり得る。社会主義では客観的に明白である。・・・

ここには尚、権威といった何ものかがある。・・・それは重大且つ決定的な利点を意味する。a) 政策、b) 行動についての判断、c) 労働者と知識人に対する良き規律、等に対して。・・・今や言うべきことは多くはない。・・・仕事に赴くことをぶち壊さない。・・・より健康的な態度・・・ストライキには支持がない。・・・

明らかに非常に大きな利益がある。・・・その場合、社会主義的公共機構(Gemeinwesen)は他にして同じならばそうした知識はもっていよう。しか

し極めて多くの権威がその人物に形づくられることになる、企業者による父系の組織。・・・

権威と規律・・・それは拘束された資本主義において致命的である、ストライキなどはその道徳的不信認であり、働くことから防止することへの忠誠である。・・・恐らく規律を回復することが唯一の手段となろう、革命の一形態でもある。・・・

民主主義と知識人の支配について、だが5. とは衝突しない。・・・上層
1) IIとの比較、2) 諸能率と諸課税、3) 機械化・・・「可能性」のみ・・・特殊なケース・・・

45 集団規律・・・要するに、本来、資本主義的図式の外側にある。・・・有効性は誘引に依存する。・・・資本主義のブループリントの中にはないというところに興味がある。・・・

決定に関する従属——命令に服従——、仕事の標準——監督と批判——に関する従属・・・自己規律であるところのものは部分的には訓練の結果であるところに困難がある。・・・それは能率に即している。・・・契約は服従を意味する。・・・

契約一般も特殊な誘引も出来高払いの作業には充分ではない。・・・強く無視する・・・優越性の認知・・・働こうとする意志がないのならば、食うために闘う何物もない。・・・諸々のチャンスだけがある、そしてそれ程には知られていない。・・・阻害的意味でのその家族的類似性に対しては。・・・そして民主主義的？・・・諸々の偏り？・・・

搾取についてのノート・・・規律の回復はより大きな利益・・・社会主義下のストライキ参加者は眼に見えて社会を攻撃している。軍隊のサボタージュや敵前逃亡のように。・・・ストライキの寓話？・・・理由——明瞭性、忠誠心、働くことへの健康な態度。・・・我々がそれを好むか好まないかは、それに埋め込まれている程度による。・・・

46 こういったものがない場合には、他の規律や手段の必要がある。規律に反対するものとして a) ルッソーの強調 b) 煽動者の利益がある。・・・

社会はより少ない道徳と知性を要求する。・・・スタミナ・・・順応性(可

鍛性)に至る前に他の環境の下での他の態度が来る。・・・

47 規律と濫用・・・親方の眼・・・二つの事柄、搾取と規律・・・極限にまで働く。・・・

諸態度、階級的利害以外の他の何物でもあり得ない・・・どんな目配せもない。・・・栄光を創出するものでなく、階級闘争をダウンさせる。・・・だが規律の必要、監督の必要も・・・

48 自己規律・・・そして我々は自己規律を区分する(その場合率直性が、そこで)・・・従順を強いる・・・そのように異なって必要という事実・・・搾取と規律・・・

49 規律のビジネス——教育・・・二つの区分、資本主義にあってはガイダンスと規律が必要であり、且つ配列が有効である。・・・社会主義にあっては必要ではないという答弁は、ここで?・・・応答・・・トレーニング・・・しかし対立が・・・だが過ぎ去ったもの・・・より大なる利益・・・

50 不適切なトレーニング——ここで扱うのがより良い。・・・違反には豚飼い(Schweinehirt)・・・実践的批判・・・人物、タイプ、所属、制度・・・様式といったものに対して含蓄された批判、だがテキストによって拮がっていく。

51 労働者の直接的利益が問責されている。規律の経済学、忠誠の了解、限界状態では優越は自明のこととなること・・・そして知識人達には・・・動機——権力・・・搾取——規律・・・働くことの喜び、働くことへの健康的な態度、諸君はそれを望むのか・・・

ストライキを闘わないことの善・・・それが体制というものか・・・社会主義のもつ最大のサービスは規律の回復である——だがそうであり得るのか。・・・よろしい・・・それが自己規律と集団規律である。・・・忠誠(知識)は自己規律に導く、そしてその場合——今日では行われ得ないような——善であるところのものが尚重要である場においてエネルギーを支持する。(allegiance (knowledge) lead to self discipline und self discipline dann supports Energie wo noch wichtig was good, heute nicht machen kann.)・・・

そしてその改善が弁護される場合、我々がインテリ婦人にそれをなすということを導きはしない。・・・

5 2 社会主義が自己規律に対置して更に多くの規律を必要とする、という結論に私は至るべきではないであろう——明らかにそれは洞察の結果と衝突する。・・・行論が社会主義に対するものである限り、何の規律も必要とされないとなすところだが、結果的に(ipso facto)、規律が必要となった場合も、それらはより軽からしめられたものとなるだろう。・・・規律の全体はより多くが必要とされる、しかし要求される「規律」はより少ない、あるいは規律されるべき要素が消失する。・・・規律のための必要性は集団活動と経済の多角化した利害の主張と他のもの(地方的なものど節約)から導かれる。・・・向上しつつある社会主義(up-lifting socialism)・・・

5 3 過度にならないように・・・搾取について語る事・・・怠業(Sabotage)について相互に責め立てること・・・生産過程を傷つけるものであるような価格操作・・・

職長に権威がないことと規律についての善意の報告(die wohlmeinden Berichte)についても・・・それに対する責任・・・

直接的に傷つけられる殆どのが大企業であるならば、傷つけることは殆ど全て是認される。・・・資産家の利益・・・公的権威による支持はない。・・・

労働者を預言者にまで仕立てあげる。・・・義務についての冷笑・・・税金泥棒であることに悦に入っている。・・・更に良き仕事の中にあるどんなプライドも取らない。・・・

社会的義務を強調する。・・・

5 4 規律は遠く過ぎ去った。・・・義務は冷笑の対象である、しかも全ては怠業者を支持する党を受け入れている、しかも大企業の不規則な買い付けを喜んでいる。

5 5 ストライキの良き支持、働くことの喜びをスポイルする。・・・私的利益の背後には社会的利益があるということ。

5 6 規律がストライキを回復させる。・・・更に優しさによる組織解体が恐らく――帰するところ自分が意図していることを知るものは誰もいない。・・・
仕事に対する態度・・・平等主義者によってスポイルされている。・・・
慣例(practice)は仕事を悲しみとしてみるよう教えている。・・・

5 7 商業的社会が産業の経営に依ってきた権威は、彼の事業にある人材を指導すること、監督すること、訓練することの機能を意味する。・・・ここで規律の機能とその行使力は非合理的な盲従という他の決定において濫用される力を含む。・・・規律の経済・・・それは尚もっと難しい。・・・それでは他の決定とは、動機と権力。・・・そこで歴史的例証を、そしてそのようにして・・・
それが資本主義のケースと比較されること・・・現代の、特に拘束された資本主義におけるところまでいく。・・・専制君主は去った、雇われた職長(foreman)は、この間、彼が譲歩するならば果てしなく紛争が続く、ということをおきまえている。・・・会社役員、肩たたき、社会不安の中に賦与された利益。・・・社会主義だけが回復できる社会的規律・・・そしてそれは潜在的にもてる長所(Vorteil der Potenz)を引き出すが、その最大のものは、中でも、a) 理解(Verständnis)、b) 人々(知識人達と労働指

導者達)の利益である。・・・如何にしてももたらされないもの・・・ストライキ・・・階級闘争・・・

58 社会主義。各人誰もが、誰かにそうするよう励まされたり、進行指示灯に従わせられたり、することなしに、自由な意図と意志に由来して、自分の課題を充たしていること、そのように行動するのを見守ることを理想とする。・・・だが、それがそうでないという論証。・・・ソシュール(Saussure)によればモデル人間に寸法を合わせるが必要な要請だという。だがそれは標準以下の者の問題であるだけではない——働いている時の問題である。・・・再度、規律は資本主義において必要——信じられるべき根拠であるもの、それは社会主義においても。・・・規律とは何か?・・・命令に従うこと、更に自己刺激として仕事をなすこと? または自己履行(Eigenleistung)?・・・そしてブルジョワジー、彼等は自分自身を信じない(II)、更にウォールストリートの編集者達、彼等は社会主義者である。・・・

何よりも先ず、規律は資本主義では必須である。・・・支配者の文化。・・・だが経済生活の中で規律の必要性は極めて大である。我々はでき得る限りその誘引を見究める。・・・(?)・・・どんな配分にあっても地域的及び集団的な「圧力」はあるだろうし、消費者にも同じものがある。双方はさておき、ここでは必要性に還元すると、残されるのは多分に自己規律である。しかしそれは教育の結果であり、教説することの帰結である。

59 資本主義にあっては、全てに対する懲罰がある。・・・行動を見守り、理由をつける。・・・

正常な人物にして、自分が公正な要請を充たすことを行うための準備がない時、尚、準犯罪的だというような行論はない。・・・よく操縦されているグループはよく自らを規律するが、そうは言ってもリーダーシップと教育の所産である。・・・

秩序そのものは善意の下でも必要である、一個のクラブにおけると同じ。・・・指導型の社会(guiding society)・・・拍車をかける・・・単なる諸命令か、または監督と規律を伴っているか・・・

権威と搾取・・・どんな社会にあってもそのための用意がある。・・・権

威は搾取に資する権力であり、規律に資する権力である。・・・動機と権力・・・私的利益と権力そのもの・・・

負け犬に対する同情・・・人間の尊厳(Menschenwürde)と自由意志についての章句・・・社会主義に対するベルグマンの行論・・・そこではとりわけ現代資本主義と拘束された資本主義に反対している。・・・単純にその場限りの反作用ではないようなどんな作用もが規律を修復する。・・・

60 搾取を駆り立てる・・・知識人達と社会主義は本来どこで・・・

61 民主主義的計画策定——私はその態度を強調するべきではない。・・・社会を搾取することを民主主義的に決定することができるのだ、ということ私はそれは怪しいと思っていないのだが。

62 機構が作動において適正ならしめられていると想定せよ。それでもその良好さは、不満足な労働者の非難からその機構を免れさせることができるような、更にはその機構に手柄——適正性を最上にまでさせる、そのようにして成果を歴史的にユニークであるとさせるほどに一過性にのみ利用可能とさせるような例外的諸状況をも手中に得さしめる、そのような手柄——の全てをも与えさせる諸環境に依存するのが尚いつものことなのである。・・・事態を解明するものは、良き機構ではなくして、その下に機構が作動する臨時的な諸事情だ、ということはあるのである。・・・「自由貿易に帰させる」。・・・自由、共和国、新開国・・・これらは尚、数量的指標をもって行われるべきことが甚だ多い。・・・しかしこれらの諸条件は常に尚与えられたものである！・・・

一般的忠誠という意味では——病的な諸々の場合を除けば——あるのは民主主義だけである。・・・自由の設定と動機付け・・・

私は、13. /VI (6月13日・・・編者)はでき得る限り社会主義に集中し、第I章から始めようと決心している、ここではこの分野に、1. /VII迄作業する。但し私が他のどこかでその意味をもった時には更に論を發展させることがあり得ないとは言えない。・・・そして気分は、私はそれ

を更に発展させることもできないし、意図もないかの如くである。

6 3 そこで歴史的検閲(Berichtigung)・・・事例といったものに即した権威・・・それはそれを与えられないような人々の理念には作用しないであろうが、機構の経済的合理性や諸機能には影響を及ぼし得る。・・・動機と便宜・・・教師は両親を見出した時働くのを止める(Teacher ceases to work wenn find parent.)。・・・権力の濫用・・・巨大な損失・・・あらゆる「不正」が阻止されることができれば、その機構は切り取られる(Wenn jedes “Unrecht” verhindert werden kann, ist die Maschine clipped)。・・・心理的罰、他の罰、解雇の脅迫・・・
仕事を良く行うことの内にあるプライドと喜び——私流のプライド。・・・心理的健康の挫折、それは働く人にとって恐ろしいことである。標準を冷笑することは恐怖の紛争の一徴候である。・・・生活の標準とは何であるか。・・・

6 4 どのように賞罰があるのか——そして解雇の武器は十分に効果が
大である。・・・ギャング的方法も消え去っていない。・・・その正に同じ
諸要素があり、しかも公的公開性が充分でない限りにおいて、彼等のつくり出したものは今一つの規律という諸用具を行使することをより容易ならしめる。・・・良き態度の変化・・・更に可能性だけを語っている知識人達に対しても——諸々の逸脱——ローカルな諸利益・・・地理的なトラブルには、決定的な利点がある。・・・全ての統治は相互に無責任なおしやべりを競い合うことである——不人気——民主主義的な狭さ(demokratischer Enge)。・・・本質は、ランゲのそれに対する行論。・・・

6 5 社会主義にあっても尚、逸脱への責任が——官僚制。・・・地域間と産業間のライバル性——あるいはその間での合意・・・顔面に陶醉が。・・・地域性——それに対するものは他の集権主義を伴った一つの集権主義があるだけである。・・・寓話・・・

66 「官吏階級」・・・国家は創造しない。・・・不確実性・・・どこにも無駄という意味での釣り合うものがない。・・・赤軍の同志達——煽動車の国家・・・資本の破壊についての言及がない。・・・セクト間の利益対立。・・・

(6) 移行過程——社会化——

摘要

移行の問題は先行の資本主義の発展の段階に相対的である。そうした段階は成功裡の作動がこれに依存する経済的・行政管理的・心理的諸条件の複合体として与えられるものであり、上記の相対性に対応して成熟と未成熟に区分される。成熟の場合、経済は利子率がゼロに向かっている程に資本をもって飽和されており、いくらかの少数大企業により、統御されている程に集中化されており、官僚制的自動化の問題と云ってよい程に進行が機械的であり、その上に社会化の雰囲気「時は未だ来ていない」と告げることが道徳的不誠実と同義語とみられる程にもなっている。そうであっても資本主義が自分で社会化に赴くことはないのであり、特別の政治的行動がなされてそうなる筈のものである。知覚し得るべき諸抵抗やその他の諸困難なしにそうした行動を眼に浮かべることはできないのであるが、だからと言って——例えば——ファーマーとペザントあるいは小規模事業の幾つかを社会化から見逃してやるといった方法を講じることでは乗り越えられない程の由々しきをもったものではない。収容をなさんがための立法的処置は比較的簡単な事柄で、道徳的挫折は最小限に抑えられよう。未成熟の場合、先走り過ぎた社会化に対する悲劇的ジレンマというべきものがある。通常未成熟な全社会化は革命として讃えられるが、革命とは挫折または混乱の特異なケースなのである。ここでは資本家達が尚も一定の機能を果たしており、他の有効にその機能を果たすべき機関はない。それ故に彼等のバイタリティは尚傷つけられておらず、彼等に対する悪しき侵略に対しては闘争なしには屈服しえないこととなる。他の側では、そうした状況下での全社会化はリーダーとしての社会主義的知識人の集団利益となる。権力掌握後の且つ資本家から収容されたこれまでの諸機構や諸装置の受領後の彼等にとっては、監督下の強制経済以外の他の事をなすことは不可能なのである。このケースにおいて移行の実質問題は由々しき問題となる。諸抵抗と仕事の諸困難の量が未成熟性の程度を示す尺度となる。そこで血塗られた意味での革命が避け得ないものとなり、妨害者の他の世界への追放乃至は受牢がなされ、権威による規律の目一杯の行使がある。しかしこの状況は、その中に機械化された産業組織が創り出される限り、人間性情の内部にある適応の習慣を形成することで成熟した存在へと徐々に変化していくものである。・・・その他（編者）

Ⅲ—(6)—1～19

移行過程——社会化——

1 移行上の問題は二重に取り上げられる。移行期間の政策と移行がなされた時の政策——革命に向けた政策、・・・そこで(5)・・・後の修正のための重要な方向・・・

1 完全成熟の場合・・・スウェーデン型社会主義もまた含まれる。・・・

2 未成熟の場合、最初に状況の記述、次いでインフレーションとそれに恐らくは赤軍・・・年に半ダースの殺人・・・更に次いで社会化、原理的な問題とは離れて一撃(one stroke)について、更にここにおいても尚、それぞれのディテールについては細心に、とりわけ大衆制御と組織化の必要性、ソビエトについては。・・・ソビエト形態・・・唯一の可能性、赤軍・・・一撃については政治的契機とその他の契機を峻別すること。

3 そこで何時成熟になるのか、は批判がある。但し量的に規定されないということ、抵抗がどれ程に多いか、大規模産業はどのようなものであるか。・・・更にこの問題では勇気と責任の問題が結びつく。

4 しかし、何も起こらないこともあり得る。——そう、社会主義を採用する以前の移行政策、他の意味での移行と移行政策。社会主義へ向かっての移行であると意図される必要はない。・・・偉大なる前進が意図される目的なしになされてきた。・・・ドイツの国家社会主義(Etatisums)、カーネギー(小売業界へ参入)はある段階とある世界を教え、社会主義においても利用可能な組織を同時につくり出した。如何に社会主義と違うところが少ないかをみよ——スウェーデンのカール6世の「私的所有は全くのところ時代が与えた一手段に過ぎない」に対して。・・・イギリスの場合につき論じる。そこでは拘束と損傷が設けている区別を強調すること。実際それら——拘束や損傷——は、一部は社会主義者達によって目論まれた。・・・設せられた課題そのものは可能である、しかし要求された方法では可能でない。・・・良き政策では全くない、だが事実である。・・・太った豚、社会主義者によって、賞讃される。・・・考えられて然るべき卵、だがそれは良き経済である。・・・(拘束は *fettered capitalism*、損傷は *injured capitalism*・・・ 編者)

注意・・・

a) 未成熟な状態で、従って事前にそれ自身を準備することなしに、社会主義が決定され、しかも十分に社会化に特化したプログラムが効力をもつ

に至る——選挙はさほど良くない場合で！——、といった場合には、そこには現実問題としても社会化が行われ、しかも正に一撃でなされなければならない。事情がそれを要求し、そこでは現実主義的に最も安全な筋道がある。更にそこでは、でき得る限りに多くの事柄を掌握すること以外には、もともと何もし得ないということである。掌握には軍隊などそれぞれの問題のグループ以外のものも数え上げられる。巨大な課題は組織化することと一時的な錯乱にならざる規律の保持である。・・・更に民主主義の如き外観をもった何者か——労働者評議会といったもの——が与えられなければならない。・・・他方、成熟の場合にはそうしたことは必要ではない。・・・

- b) 私の証言・・・私は、民主主義的・・・自由・・・であることが
(α) 遅れば遅れるほど、(β) 少なければ少ないほど、益々うまくいく、という「可能性」のあることを否定しはしない。・・・
c) 社会主義は全体主義である(Sozialismus ist Totalitarianism.)ということ。

2 移行問題(transitional)・・・既に適応可能性の問題があることは述べたである。・・・精力を節約することの重要性(知識人達)・・・移行問題は本来既に解決済である。・・・どんな雰囲気になされるかということも、及びそうでないと全てが秩序立てられるか否かということも、——それはいつにおいてもあらゆる早期の——先走った——社会化に対する非劇的ジレンマ(das tragische Dilemma für vorzeitige Sozialisierung)である。・・・本質的なこと、どんな段階においてか?である。(Wesentlich: in welchem Stadium?).・・・臨床医といったものの診断の如く。・・・他の如何なる問題におけるよりも——「段階」に依存する。・・・極限的な場合には何事もし得ない。

移行期として現在が観察されるならば、ある他の側面が見出される。・・・全問題が——尚も人々がそれに拠って生活しているところの——一個のシステムの更なる加工だということの内に(in Weiterarbeiten eines Systems)ある。・・・収容と協同への意欲・・・ぐずぐずした移行と敏速な移行・・・収容と貨幣の価値削奪(Entwertung des Geldes)、・・・それに国有化(Verstaatlichung)といったこと、押しなべて人気のあることではない。課税・・・長期償還債券・・・文献、ランゲを見よ・・・それ

に農業的セクター(*agrarischen Sektor*)と小売商、それに芸術家たちについて・・・大きな問題が不寛容の中に横たわっている。・・・十分に成熟した資本主義とは何なのか？ それ以前には可能でなく、それ以後では祝福されることが可能であるような、そうしたはっきりした時点の存在は、異論があるだけでなく、事実上もあり得ない。・・・イギリスにおける移行・・・

3 それに移行は今や心理的困難を提起する。・・・諸条件が必要なのだ、ということが、どんな他のところにおけるよりも、ここで告げられなければならない。・・・そうでないと、社会主義は行政的—技術的にも心理的にも最早可能でないことが確実なのである。そして他の諸々の場合は、論議の余地のない程に、明瞭に、もっと劣ったものなのである。それ故に時代に対応した諸々の場合を強調することが重要なのである。更にそれ故に抽象的な理論の中には、それだけ含蓄が乏しいのである。・・・中世の行政——そこに利潤が必要だったことは確かであり、それが死に絶えてはいないことは確かである。・・・国家は創造しない、の時代が続く。・・・(そして社会主義が来る——编者)・・・経済的並びに文化的に社会主義の内実がどのようなものであるかは完全に未確定である、ということを強調することが極めて重要である。・・・

ストライキ参加者・・・社会的な義務と享受から上部階層の諸機能と諸集団の確認・・・我々は實際上、この心の枠組みを癒すことが可能なことを検証するだろう。・・・家族と性愛(*Erotik*)・・・コストと結びついた行動にはがみがみ言う——その意図は知らない？ そして私は私がうるさがられているのならば改める。・・・既に次官タイプの現代人(*die modernen man von undersecretary type*)のことを述べた。・・・専門家達(課税においては斯く斯く、資源においては斯く斯く、といった如くに、半科学的(*semi-scientific*)).・・・

4 社会主義社会についての全ての命題は、事実上その先代である資本主義の発展の中の一つの与えられた段階に相對應するものとして存在するものである、ということを我々は以前から心に止めてきた。それは比較の最も明白な標準を提供するだけでなく、社会主義的配列の作動可能性と成

功がそれに依存することになる経済的、行政的、社会心理的な諸条件のそれぞれ全てを提供する筈のものであるからである。とりわけ移行問題の範囲の中では、この相対性が殆ど全ての事柄において重きをなす。・・・問題は(移行の時期は・・・編者)確定した時ではないことである。・・・いつでも可能である。・・・そして拘束された資本主義との比較である。・・・いつ、そしてどのように、更に両者の間の諸関係は・・・。論ぜられるべきは成熟性の判断基準である。・・・但しⅡ. において入り来たり、政治的方法との関連ではⅣに連なる、相互に矛盾しない——例えば肅清(das killing off)はそこにおいて来る！・・・ボルシェヴィズムが本来の社会主義ではないということはどこで？・・・

移行は独自の問題を常に提起するだろう。たとえ利子率がゼロに近い程に資本の潤沢な経済の下であったとしても、たとえ全企業を完全に統制しているのがダースの巨大企業以外の何者でもない程に集中の進んだ経済の下であったとしても、たとえ全ての事柄が官僚制的自動化の問題であろう程に機械化がなされている経済の下であったとしても、たとえそこには家族の家庭等はないだろう程に合理化がなされた経済の下であったとしても、——そういう状態の下でさえ、資本主義は自分で社会主義に変換していくのではない。特別の政治的アクションによってそれへの変換がなされなければならないだろうということである。更に我々はそうした行動を——同時に諸々の抵抗や他の困難を知覚することなしには——思い浮かべる(visualize)ことはできないのである。しかしそれをひとり克服し難いものとして放置しておくほど由々しい(serious)ことは他にない。抵抗について言えば、臨時的便法であろうと恒久的な措置であろうと、その措置がファーマー達やペザント達を——更に小規模な非農業でのこうしたタイプの幾ばくかをも同様に——見逃してやるとしても、我々はその社会主義はやはり社会主義であると想定する——この点は他も同様である。・・・諸々の抵抗や諸困難に伴う必然的損失がないような特例、それは我々の行論の一つの補足である。・・・真の勇氣——アリストテレス——「持ち来ることが必要でないことをも問題にする」のが真の勇氣である。・・・

5 社会主義者は弱者に対しては強い態度はとれない——ということに勇気づけられて、このスタイルを採ることに嬉しがらされている。他方で

共通の仕事や事務机の中では、それを指示するための勇気などは必要でない。・・・勇気が入ってくるとすれば、反対のことを言う必要にせまられたが故の時である。・・・

6 社会主義を「導入する」ため必要な立法活動は、かくして、比較的単純な事柄であるだろう。私的所有と経営を存続させることに決定されるような何等かの部門があったとしても、その部門の範囲を設けることの中に、及び彼等の社会化された産業に対する関係の規制の中に、それらの諸部門の境界設定において乗り越えることができない困難などはないであろう。社会化される諸産業に関しては、新規企業の設立はこれを禁止する、未だ社会化されていない現存企業群の社会化を強制して特殊法人形態——もしそうした形態がとられていることが僅かなれば——とさせる。彼等のもっている株式の全てを生産大臣に引き渡させる。収奪された個人のオーナー達(*the expropriated individual owners*)——法人ではない——は先に示唆しておいたように、その持ち株に応じた「共和国が定めた年金に対する請求権」(*a claim to the annuity determined by the commonwealth*)——金額表示のない一種の債権——を受け取る。もし法が私的所得に上限を課すものであり、しかも手続き的にその上限があるべきだとされるその上限の限度よりも高いものであれば、それ以上の金額——最後の残余——は所得税によって押収されることになるだろう。・・・よろしい、だが繰り返しになっている。・・・せいぜいのところ一撃のところどころで・・・繰り返しはしない。

このタイプの社会主義からは——何の不条理もなしに——次のことが望まれてよい。すなわち、それは我々がそのように印象付けられてきた我々の意味での優越性のあらゆる諸可能性を実現するであろう。更にそれは文化的諸価値の破壊を最小限ならしめるであろう。経済的な落ち込みの危険はこのように最小化されるであろう、そしてそのようにして道徳的な落ち込み——それは通常革命として栄光化(*to glorify as revolutions*)される——の中の一つのもつ、更にずっと由々しい危険が最小化されることも同様であろう。・・・恐らく後で比較を・・・そしてここに論行につき第二の補足がくる。・・・自由貿易についてのマルクスの忠言に即して行動する！・・・社会主義者はこの確信から何を為すべきか？について。・・・だが他に何かがある、それは後で、その時ある冷笑が——但し一回だけだ

が。・・・

しかし、この都合の良い予見(prognosis)が次の二点に完璧に立脚するものであることは明瞭である。先ずは「成熟性」(maturity)についての極めて包括的な諸条件——それはただ世代にまたがる諸作用力の緩慢な作動からのみもたらされることができ——のワンセットである。第二にこれらの諸条件が関連していることが確かであるような数多くの諸仮定がある——それらは変換を効率的にすることと確立されたシステムを運転することの双方の諸方法に関わっているものとしてのものである。これらの諸条件が充たされておらず、しかもこれらの諸方法の行使が期待されない場合は、そうした予見は可能でない。・・・どれほどに多くのことがこれらの世代にまたがる作用力の働きなのであるか、大部分。・・・当然のことながらそれが社会主義的殉教者達に対する一つの弱点(ein Nachteil für sozialistische Savonarolaes・・・イタリアの修道僧(編者))・・・社会主義者は他のやり方では何もし得ないのか？・・・

7 しかし、先行のエッセイで予想されているその諸困難に対し、我々が対面するのはこの点においてである。そこで指摘しておいたように、それ自身の発展のロジックのお蔭(徳目)で、資本主義は成功裡の社会主義のための道程を舗装してきているので、成功裡の社会主義は時が経過するほど益々以て可能となる、という命題は保持されてよい。はっきりしているのは——ある社会主義者の経験からおおざっぱに言って——、言ってみれば、1890年にそうであった程度に比して幅広く存在することが今や馬鹿げたものではないということである。だがこのことが、我々が何等かの確信をもって主張できることのすべてである。・・・カオスの侵害と危険無しにではない、文化的価値の損失無しにではない。・・・民主主義的でない——消失——ロシア・・・あるいは一撃をもってではない。・・・熱狂的興奮、傷ついた資本主義に惹きつけられる。・・・イギリスに対してだけの行論では。・・・完全な社会化は破局ではなかったのか！・・・(そうした異論に対して・・・編者)・・・

明らかな不可能性は、疑わしいということへと、徐々に影をひそめていき、更にその上、明瞭な可能性へと進む。更にこのことは、再びゆっくりとした程度においてだが、累増的に、成功に都合良きチャンスへと進む。その場合、それらの間には明瞭であるような区画線等はないのである。そこに

何の利益もなく、無駄多き思考もその余地がない場合にさえ、更にはいくらかの人々にはほとんどどこにでもある環境の下で「時は未だ来ていない」と結論するような如何なる示唆も、道徳的不正であり悪しきごまかしと同義語であるような、そしてその一方で他の人々には「その時は来ている」と結論するような如何なる示唆も、常に冒涇と同義語であるような、そうした事実がなかったとしてさえ、決定的な重大な措置(a serious operation)を成し遂げようと決心するか、または拒絶するかは重大性からは離れ得ないような診断に合意を得ることは尚困難であろう。その困難たるや外科医の執刀をいつも要求するタイプの医師とそのケースは手術が正当だとは決して認めないタイプの医師の間に合意を得ることの困難と同様なのである。・・・勇氣、素晴らしい！・・・真の勇氣とは責任ある人物にとっては、殆どの場合、粗野な怒声に立ち向かうことであり、知識人達に対しては、彼等の無責任な冷笑という批判に立ち向かうことである。・・・既にはっきりしていること、社会主義者は疑惑の存在であり、ブルジョワジーもまたそうだ、ということ。すなわち、全ての社会主義者は自分が社会主義者ではないのではという疑惑の中で社会主義者であると正しく感じている。また他の社会主義者に対しては論議は——ブルジョワジーに比すれば大ではないとしても、正にそれなりに大きい個人的利益に由来したものである個人的利益と関係のあるような論議は——信じられないと弁明される。(Schon begreiflich, dasz der Sozialist suspicious ist und bourgeois auch: every socialist rightly feels that he is socialist in being suspicious dasz er nicht Sozialist ist, dasz der andere Sozialisten geradeso justified ist Argumenten zu misztrauen, die mit persönlichen Interessen zusammenhängen which proceed from personal Interessen just as much though not more als die bourgeoisie.)

8 殆ど全てが労働者となり、そして既に平等性は——技術者や医師の能率が害されているので——労働者の利益すらもが傷つけられる程に大である。・・・それにも拘わらず、古い章句が反復され、本質的に諸機能に対応するべき諸標準が無視される。・・・

9 労働組合についてのロイターの見解。・・・よろしい——それでは、

何故に労働者階級を指導者による生産の方向に組織すること——資本主義の下では全く容易でない——を引き受けることにはならないのか。・・・

10 私は進歩について十分な配慮をもって扱ってきた。更にそれでも尚、前もって既に多くの進歩が達成されていることの必要性を強調してきた。・・・更にまた精神の社会主義教育が必要なので、それだけではないということをして！

11 短期の到達状態・・・1) 最初においては恐らくは同様であろう。そこでは如何に良く機能しても、それほど良くはないということ、——それは解き難い問題である——と私は言っている。・・・2) 更に誰が運転するのかとどのように運転できるのか、という問題について。・・・適正な人の手中にそれがあるという状態はそれぞれ様々な時期に対応してそれぞれ様々である(zu verschiedenen Zeiten verschiedenen)——資本主義の側の代わられるものの傷つき具合もまた様々である！——という公算の故に、私は尚何かを告げるものである。・・・3) 未成熟な全面社会化(unreife Vollsozialisierung)は社会主義者達のグループ的——階級的利益である。・・・それは失業している知識人達に正にぴったりである。・・・労働組合にはその利益は提供されない、熱心な政党人に対してもそれ以上に。・・・標準にまで仕立てあげられた改革者、但し知識人達についてはたびたびそうでない——比較においては尚検討されていない事例。・・・

12 知られざる事態が明らかに見通せた！・・・だがどんな意味での「真実」があったのか。・・・確かにある関連では利点がある。・・・人々について均等造型がなされること。・・・金銭的なことにながみがみ言っている個人的利益は一掃されよう。・・・II. ではそこで、a) 移行、多数派性といったものがない。・・・研究は必要なのだが・・・b) 運転、それは進行する？・・・スターリンはそれほど広範ではなかったのでは、長期的政策。・・・支配の委員会(Committee von Krata)・・・何かを確信している人々、例えば優生学を・・・更なる労働に対する新しい態度といった

こと・・・数多くのことが強要されなければならない。・・・

1 3 この優生学(Eugenik)の歴史、そして社会主義は——これが個人的自由の理念でないならば——それをより速めることができるのでは。・・・更に給付の最大化に、またはある客観的な文化的理念に合わせるという可能性は、そのように片手間に扱われるのではなくして、一節をさいてその場を充たすことによってであるべきだろう。(最大性の傍らで言及)

1 4 資本家的諸利益に対する温和性(mildness)は、その場合、最早あり得ない。概括してどこまでが同じ方法で、どこまでが他の方法か?・・・あるいは行論の中の第二の状態(未成熟な状態での移行・・・編者)を際立たせるため、我々が考慮するであろうところのもの。・・・恐らく、これは一節をみてることで、然るべき予見を可能とするであろう。・・・我々は、その下での社会化の試みが——成功には至り得ないとしても——単なる想像的叛乱以上のものがあるような状況を、我々が定義している尺度の他の端に位するケースとなす。・・・そこでは権力の掌握は可能であるが、他の全ては未成熟である。・・・そこでは革命は可能であるが、他のことは何もできない。・・・それは総崩壊と紛擾が起こるような様々の場合の特別の場合であるだろう——際立った敗北、社会主義国家の機関の一時的な麻痺——(Das wird besonders der Fall in Fällen der Zusammenbrüche und Verwirrungen — — äuszere Niederlage, temporäre paralysis der Organe des sozialistischen Staates.)。・・・

恐らくより良いだろう。というのはこのケースにおいて移行の事実上の問題が発生する、あるいは同じことであるが、遭遇させられる抵抗と仕上げられるべき仕事が由々しい重大事態となる。実際、抵抗の量と仕事の困難が経済的及び社会的諸条件の未成熟性の尺度そのものであり、同じく次のエッセイ(・・・第IV部・・・編者)で論じられるように、真に民主主義的方法での一撃の社会化を成し遂げることの不可能性である。・・・資本家的諸利益、それらが依然として他の如何なるエージェントをもってしても効果的には充たし得ないような機能を充たしているという状況の下では、それをもって処理するよう処せられるものが経済的合理性だ、とみる

ような正にそうした配慮と優しさは不可能となるのである。そのようにして、その十分な、且つ血に染まるという意味での革命が殆ど不可避となる。その理由はもとより、一定の社会的機能を充たしており、それ故に彼等の生命力が傷つけられているところがないか、または傷つけられるところが充分ではないかであるような、そうした諸階級は彼等が悪しき侵害と考えるところのものには闘争なしには降伏(submit)しないからである。この事実の認識とカール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルグの運命に遭遇することもありそうなことではない訳ではないという疑惑とが、そこで攻撃的な社会主義者達をして、どんな本来の意図をも超えた暴力的過程に駆り立てるであろう。彼等はそこで人々——その人々にとって彼等は間もなく恐ろしい犯罪人達として見立てられるよう、彼等自身を仕立てあげていくのであるが——に対し犯罪人的恐ろしさをもって振る舞うであろう。・・・よろしい・・・そして脅かされている者が脅かすといったこと。・・・しかしロシアのケースは殆どの点で特殊的であり、それ故に一般化のための展望を殆どもっていない。

15 対抗した「追い立て」(“drives” gegenüber)が広範にわたる。・・・実践から——誰が摘出されるのか?・・・過激化・・・そして幾ばくかの犠牲を見出す。・・・陳腐でも新奇でもない。しかしこの過激主義は古く、しかももともと壊れ得るものである。・・・

16 しかし、暴力やサディズムは、あり得べき一つの問題を除いて、どんな問題をも解決しはしない。その一つの問題とは、どのように政治的に政治的権力を手に入れるか、及び通常、抵抗の土壌となるところのものを除去するか、という問題である。このことが成し遂げられたとしよう。あらゆる行政的中枢——内閣及びそうしたもの——並びに政治的意志と影響力の中枢——非社会主義諸政党の事務局、新聞社編集局、ラジオ放送局、そういったもの——は征服されている。闘おうとする、そして仲間を集めようとする、そうした意志と能力をもつあらゆる個人は、安全に、牢獄や他の世界に宿泊させられている。行政職員は——その最も勇気のある反対者は追放せられており——気が進まないサービスを提供しつつあり、その上カフェーからの徴募によって急速に水増しされつつある。産業のブルジ

ヨワ的経営者達は——ブルジョワジー達がいつもそうであるように——その立場において呆然としている。

我々に二つの願い事を新しい指導者に与えさせていただきたい。と言うのは、もしそれがないのならば、論じるべきことは何もないからである。先ず労働者組織は——命令に服従する傍ら——十分に強力ならしめられることである。それは組織破壊の騒ぎを防止するのに十分な程になされ、新政府が左翼に対し砲撃を加える場合、あるいはもしそれらが解体し去っているのならば、出現してこざるを得ない新極左党のメンバーに対し撃破を加える場合、新政府を支援するのに十分な程に強力であることである。加えて我々は次のことを想定したい。新政府は少なくともファーマー達とペザント達の中立性を——我々をして言わしめれば彼等を多かれ少なかれ独りにしておくことで——最低限確保することに成功することである。このことに失敗すると、田舎では至る所でロシア的ペザントであふれている(このことの含意は?・・・編者)、ということ想定しなければならないと知るべきである。・・・

中央委員会は設立されている。万事が明確であって然るべき程には完全ではないならば、サボタージュについて不平を言い、そしてブルジョワジーの陰謀と破壊活動を処理するため追加的権力を要請する、といったこと以外にこの中央委員会が為すべきことは何であろうか。・・・

17 様々な事件と気紛れな破壊を見ての恐怖を通しての分裂。・・・経済事情についての完全な無理解・・・急進的生産・・・労働者に対する仕事の規律と彼のヨーロッパの仲間達(peers)・・・併し希望は誰をも満足させる程に偉大な成果に向けられている。・・・輸出願望自体が活性化される！！

18 人民委員の監視と労働者及び公衆双方の気分によって拘束された資本主義産業が、その下で、機能し得る唯一のことは・・・である。このことを自ら了解する読者は、そこには——完全な操業停止を除けば——成功よりも大きな罪悪はない、といった雰囲気想起するだけで充分である。

そうした環境下で産業を稼働させ得る唯一の方法は結局は社会化させることである、というに十分なものがある。このようにしてここでも、第一のケース(完全成熟の場合・・・編者)と同様に、完全に異なったものであるとしても一撃による社会化(one stroke socialization)もあり得るということになる。・・・そして損失は非常に大なものとなり得ようし、その一方で漸変主義(gradualism)に即した体制の危険(Gefahr für regime)もとりわけ大であり得よう、とランゲは是認する。しかしランゲは時間次元なしに論じており、ある場合には斯く斯くであり、他の場合には斯く斯くである、という代替するものがないのがその解決である、というところをみていない。・・・

しかしこの行論は、大規模産業のケースとそれに加えるに、多分管理につき大規模単位に造型されることが容易であるような部分のケースだけを完全にカバーする。除外された農業分野と大規模産業の間に位すあらゆる分野を完全にカバーするものではない。小規模乃至は中規模を主たる構成分子とするような地盤においては、便宜的方法が指令され、しかもとりわけ——レーニンがやったように——その便法への考慮の変化に従って、前進したり後退したりすることがあり得るといったように策謀(manuever)することが大いにあるだろう。これでも尚我々の言葉の枠内で「十分な」社会化であるというべきであろう。・・・多分に保証の限りではない。・・・モンゴール達?は「ネップ」を冷笑する——ブルジョワジーの反逆者であり、しかも怠業者である者達が同じ見解をもたないか。

この他に、一撃の社会化は巨大な衝撃力を持ち、政治的アピールをもつことも大である。少しでも弱さを見せることが致命的となるところが極めて重要である。・・・決定の為され方は成熟期での社会化の場合と似たものになり得よう。中央当局は理論的討議の中に告げられるような手続きで必要な変更を加え、一個の計画に至り、且つ修正する。その場合他方の側に評議会(Soviet)が唯一可能な形態である。それは軍隊における兵士会議よりも以上の意味をもたせる必要はない。この場合におけるこの軍隊は本質的である——とトロッキーの言は意味深長である。同志達の訪問と——幻想に対する反作用があればのことだが——弱さの創設的な利用、赤軍からの同志の訪問——それが差当たっての移行上の政策であると言えよう。調整とすでにあった課題一般は——もし馬鹿げた挫折が非常に厳しいならば——このシステムを殺してしまうことになるが、そうした挫折が十分に色合いを変えていくことは将来——いつのことか期待されないが——

にはあろう。何時それが可能か？を決めることを求める作業は無駄である。・・・ここでも尚私は「不可能」とは言っていないことに注意してほしい。・・・ひとたび機械化された巨大産業が生み出された後ならば、疑いなく移行問題は解決される。そして可能性はいつもより一層に高まるのである。かくして未成熟のケースは成熟における社会主義へと溶解していく。・・・今は何時なのか？ この問題は関心と気質によって非常に屈折したものとなる。・・・我々は性情の内部に、性情をつくり出すこととその中から諸習慣(habits)をつくり出すこと、という区別されるべき諸機能をもつ。このことがここでは重要となる——禁酒は非常な厳格さをもって短期間に習慣を固定化するように働く。・・・

19 厳肅たるべき良き神(good God to be serious)・・・衝突に走る赤軍の同志達・・・併しながら、これらの全ては自己規律と集団規律が——拘束された資本主義の段階におけるよりも社会主義社会において——一層強力になりそうだという単なる予見(prognosis)を超えたところに迄、我々を導く。それにも拘わらず、十分な論証になっていないことは明らかであろう。しかし我々は既に我々の最後の命題を確立する方向に向かって幾ばくかの前進をなしているのだ、ということを見抜くことは容易にできるのである。社会主義的経営は権威による規律という武器を——それが必要とされるべきならば——生み出すにあたって、如何なる資本主義の経営にせよ、それが現在もっている位置よりも更に良い位置にあるだろう(Socialist management will be in much better position to wield the weapons of authoritalian discipline, should that be necessary, than any capitalist management is present.)、というのがその命題である。挫折した事業家達を見出しては嬉しがるのが最早なくなった社会は、最早、準犯罪的な行動を是認しはしないであろうし、更にそうした行動に労働者を据えようとするそうした人々には——これまでとは——異なった眼で以て見張ろうとするであろう。我々はこのようにして——と私は思うのだが——労働者自身の位階(ranks)からは離れたところにある知識人達や指導者達——彼等は新しい体制に一般的な同感(be in general sympathy with new regime)をもっているのであろうが、反体制的活動に転換することもあり得る——に対しては、その数において存在する余地を少なくするであろうと期待してよい。しかしそこでは権威による規律が打ち砕くよう要求されるといった種類のトラブルはないであろう、とは我々は言う必要はな

いし、私は言えないと信じる。その理由は我々が諸誘引のいくつかに眼を向けるやたちどころに明瞭となる。

とりわけ自分達の——利益のために起こる——衝動的トラブルは最早可能でないであろう。体制を吹き飛ばすことなどは昔話であろう。尚、特権官僚や最短昇進組は相変わらずであり、更に将来の享受か眼前の享受かといったこと、またセクト的な差——地域的なものでも産業的なものでもよい——をもたらすという問題も相変わらずである。そしてここに恐らくは大きなトラブルとなるのでは？・・・このように武器は・・・。単一の個人は事業所や機構の中で無力な位置にあり、そして統治機構のもつ権力的な手段は可能性と動機において反逆者に向けられよう。但し、今日の統治機構のようには——それは反対の立場を保有する——軽々しく発動することは許されない。・・・神経の抑制・・・

(7) 社会主義の経済的バランスシート

摘要

社会主義の経済的バランスは——多かれ少なかれ——そう甚だしくは変わらない。人的諸要素を含めてあらゆる可能性を成熟した資本主義と比較するのならば、了解し得るべき推定は社会主義に歩ありとなさしめよう。能率におけるありうべき利は開示された損失の諸源泉に対する補償をなすに充分以上のものがある。但し・・・その他 (編者)

Ⅲ—(7)—1～4

社会主義の経済的バランスシート

1 今一度、社会主義の経済的貸借対照表(*das ökonomische Bilanz des Sozialismus*)は——大なり小なりで——大きくは変わらない。・・・我々の判断 —バランス関係は有利なようである。・・・[こうしたいい方に・・・编者] 我々は強気でありえないし、しかも時間は充分にある。・・・領主社会(*Herrengesellschaft*)、すなわち領主という言葉(*Lord*)によって性格付けられた社会・・・私は平均的な社会のオフィスの中に、閣議におけるよりもより多くの有能の士がいると信じている。正しくないか？

2 かくかくに優越していることの可能性・・・有閑階級や不完全競争の無駄(浪費)の削減・・・その場合、恐らくは実現へのあらゆる可能性が手に収められ、それと資本主義の現実が比較される、それはいつもそうしている。・・・このケースは一見して問題の社会心理的側面を考慮に入れることによって弱められるのではなく、強められる。・・・行論全体の中の最強のものはいつも了解可能性(*understandability*)に達しうるもののように、私には見えてくる。・・・ただし、そこには尚、システムのもつ摩擦の問題が今や入ってくる。そうしたトラブルは一層の支持を集めはしないし、誰もそれをなそうと欲しないであろう。しかし成熟した資本主義の下でも——他者に対する対立として——そのようにあるだけなのである。

経済的諸現象は了解可能であり、しかもそれらの真の顔を示す。・・・すべては逆にもなり得る——すなわち有能な人物が見出され、配置されることができる。この他・・・

α) 生産の諸規制に対する自由交易、貯蓄・・・

β) 利益闘争が反社会的である、という分別・・・それはまた道徳支持に属する。言ってみれば、人々は資本主義に反対する場合(ストライキ、サボタージュ、ピケッティング)、それに地方的利益を凶る場合、罪の意識に惑乱する。・・・全てに対して消費者のための生産である、ということに疑問を感じさせられるということはあるか。・・・より健康な態度。

γ) 知識人(インテレクチュアル)達に対しては、事態はそれほど容易とは

ならないであろう。——恐らくは望まれることはないであろうし、且つ、恐らくは、彼等には許されるだろう。・・・しかしどんな場合にも、僅かな効果をもつにすぎないだろう。・・・それがどれほどの重要性をもつかは、どれほどに社会不安の中で身につけた利益が封じ込められているかに依存する。・・・もはや個人主義ではない、それは正しく道徳的支持としての何者かに対するものである。・・・

完全な敵対者は確かにいない、反対は誰が機構を運転するのかわかる。・・・荷馬車—自動車双方の方法を切り捨てる。・・・社会主義が戦争に賛成であっても、その利益の中でのものであり、無駄(浪費)には属していないのではないか？ 更に有閑階級の保持に対しては？・・・労働組合はあったとしても、尚、社会主義を超えたそれである、という結論にはならない。・・・所有の理論・・・何よりもまず「残渣」、何となれば便宜(方便)は一つの行政の方法なのだから・・・資本主義とその利用、乃至は排除(An—Oder Einwendung)・・・

3 比較に対する総括・・・Ⅲ(4)比較のところでは「多大の長所についての力強い観点」が欠けていた。・・・私は理論と実行可能性のところになされた示唆から私の「リスト」を始めることにする——多くのエネルギー(モラル上の努力)の節約。・・・ことによると疑わしい人間性の価値についても、機構は人間類型における進歩を必ずしも意味していない！ そして次のことを忘れないで欲しい。道徳上の欠陥は必然的にさほど大でなく、しかも補償なしにとはいかないこと、及び、その機構が文化的成果は度外視するとしても、それが何であれ前進している限りにおいて——しばしば合理的でない可能性はあるとしても——手段を整え、更には政治的意志を整えていることは、信認しなければならないこと。・・・しかし最大の利点は、——と言っても「可能性」だけのことだが、損失を利得に変えるような利点であり——外部からの(政治的局面からの)侵害(injury)に対する過程の保護である。

かくしてリストは提示される。しかし、このリストは尚、能率に関するもののみである。——そこで行われる正義とはどんなものか？

- 1) 正義と平等(これは尚、機会の平等ではない)と厚生からのものではない。・・・確かに能率に有効に働く。・・・
- 2) 奢侈品生産からのものも、さほど著しくはない。それにしても無駄(浪

費)の削減。・・・

3) 進歩を計画することへのロジック、規定性、可能性についての反復して言われた示唆・・・ここでは独占と寡占、それに消費者のための生産だということ。・・・

4) 政策がもたらした紛争、妨害、無駄(浪費)、監視人ロス(keeper loss)・・・

α) 誤りによるものと階級政策によるもの・・・生産しない者に支払おうとする明瞭な意図。・・・自由貿易——今日、自由貿易に賛成できるものは誰もいない。・・・銀10億ドルの蓄積。・・・時には国際分業をも排除する。——ただし農業者とは全く別の問題である。・・・

β) 社会主義が軍備を削減するかどうか。・・・全く疑わしい。・・・

γ) 労働者の特別の立場・・・ストライキ参加者のアンチ政府的性格・・・体制に向けての道徳的是認と共に、可能性としての規律が消滅する。・・・

δ) 知識人とそのくすくす笑い(chuckle)・・・その重要性が如何に大きいか、そして止めるだろうか。・・・利益は残される。・・・

リストについてのノート

貯蓄と投資、二つの問題・・・資本主義的失策と資本主義システムの失策・・・ここでもまた政策が？——有閑階級はここで扱う。・・・非資本主義的有閑階級とはどのような存在か？・・・強調すべきこと、比較は拘束され傷ついた資本主義との比較であること——それはだが、移行の後段においても出てくる。・・・関連付けられた比較をもってするともっと良い。・・・ズボンに付した紋様もここで？・・・所有制度、官僚制度、それに貧弱な動機についてはどこで・・・ここでは動機と蓄積の減退に応じて能率も減退すると言っておく。・・・時(時代)(Zeit)、それは諸困難と関係する！！・・・短期的視野に走ろうとする傾向についてはどこで。・・・国家は長期的視点を採り得るといふこととの関係。・・・今日把握し得る前進についての提議にはむかつく (Disgust mit Resolution des Fortschrittes heute begreiflich,)——だが経済学者達はそれを見究めようとしなないし、50年を概観することはできないとする、これは一つのスキヤンダルである。

4 能率の中の利得・・・恐らく、開示されることがあり得るような損失の諸源泉に対して、補償するのに十分なもの、それ以上のものがあるだろう

う。・・・

これが必然的である全てではない。しかしその計画を超えたどんな前進もが、特殊な、大部分は非経済的な、理由によって自らを正当化させなければならない。軍備または枢機産業、映画、造船、食糧市場などはそのあり得べき諸例である。その上ともかく、十分に消化するためには将来相当の時間を要するものであり、責任ある社会主義者をして——彼がそれだけの仕事を成し上げたと言うのなら——自分の仕事を祝福した上で、国営化された部門以外の部門においても、同時に合理化を成さしめるであろうような容認(譲歩)(concession)を受け入れるに充分ということになるろう。もし彼がそのようにしても尚、土地の国有化にこだわる——農業者のステイタスは今あるが如く残しておくこと、私はこの場合を想定している——のならば、すなわち、あらゆる地代や鉱区料等を国に移転するというのならば、一人のエコノミストとして異を唱えたりはしない。・・・[刊行本の中に同文あり・・・編者]

問題(Frage)、ここでは尚、取り上げずにおくかどうか。

1) それは一般化され得ない。・・・

2) それが労働者達と、そういった人々に関わる諸困難を増大させる。その上、あらゆる脅しよりもより良く作用するという点を除けば、誰にも多くの利益をもたらさない。・・・

3) 要するに二つの可能性がある。時の充分性があること、一步一步と結果を積み上げていくこと、こぶしを握りしめていないことが非常に重要である。ただしそれについて「社会主義者」が考えているものは何もない。彼には嬉しくないことであろうか。・・・

第IV部 社会主義と民主主義

- (1) 社会主義と民主主義における様々なパターン
- (2) 社会主義をめぐる権力への意志
- (3) 民主主義の概念についての雑録
- (4) 民主主義を根拠付ける二つの理論
——代表制理論(the representative theory)から
選抜(淘汰)制理論(the selective theory)へ——
- (5) 民主主義的成功の諸条件
- (6) 移行の前線における諸屈折
- (7) 移行(過渡)期における「社会主義と民主主義」
- (8) 結論 社会主義と民主主義

(1) 社会主義と民主主義における様々なパターン

摘要

アメリカに存在する確かな意見は、手段としてではなく目的として、民主主義への忠誠を宣言してきている。しかし、そうした固執そのものが他の究極の目的に資そうとすることである。民主主義は確かに一個の制度的工夫であり、それ自体その枠組みの中でどんな諸理想が実現され、どんな諸犯罪がなされるであろうかを決定し得ない。・・・どのように社会主義と民主主義が相互に関係しあっているのかを理解するためには、この主題についてのマルクス主義者の命題を検証しなければならない。次のように。「真正の民主主義は社会主義秩序の外側ではあり得ない、というのは社会的及び政治的権力なるものは本質的に経済的なものの中にその根をもっているからである。」但し上述の命題は誤っている。事実問題として資本家陣営の政治権力は一般に多くの観察者にみられている程には大きくはない。「資本主義の邪悪な精神がひとたび消し去られれば、ボス達は喰うべき何物をも持たなくなるだろう」、と考えるのはナイーブに過ぎる。・・・反対にロシアの共産主義共和国は一つの少数派からなる政党によって統治されており且つどんな他の政党にも如何なるチャンスをも与えない。・・・「少しばかりの意志堅固な人士達の行動」(レーニン)の中に集中されている掠め取られた革命による「プロレタリアの」独裁制・・・そして世界中で「最も完全な民主主義」としての自己賞揚がある。他の側には民主主義的理想の立場に立つイギリスや北欧系の社会主義者達の多数派があり、ロシアの体制が「真正の」社会主義を構成するとなすことを拒否し、一種の倒錯であるとなした。これらの社会主義者の諸グループは首尾一貫して民主主義的誠実性を保持してきており、如何なる政治的全体主義にもチャンスや動機を持つことを許さず、更にフランスのサンジカリズムにも終始反対した。・・・彼等の殆どは民主主義の路線で前進することをもって満足されるべきであることを心得ていた。ドイツでは社会主義者達は強力でしかも敵意をもった国家と対面しつつもブルジョワジーの同情と労働組合に頼ってきたのであるが、1881年には社会民主党が然るべき証しとして民主主義の方向を決め、休みなきエネルギーをもって最左翼を鎮めた。しかし党は分裂し、左翼は少数派の中に過激派バッジを要求し、残されたグループが民主主義の諸原則を保持する多数派となった。・・・その他 (編者)

IV—(1)—1～9

社会主義と民主主義における様々なパターン

1 社会主義と民主主義の双方を愛する人ならば誰であろうと、彼は自分のタイプの社会主義に属するとみられる諸特徴の価値を、——それができるとみられる時はいつでも——、その諸特徴を民主主義の価値と結びつけることによって、高めようとする傾向をもつであろう。次のように言うであろう。社会主義は民主主義的である、何故ならば、それは経済のエンジンを「全体の利益」(the benefit of all)のために運転するものであるから、と。しかしながら、これは諸々のイシューを混乱させるのに役立つだけである。更に、社会主義は経済的平等という根拠によって必然的に民主主義と合一化させられる、とも論じられるべきではない。というのは、社会主義は必然的に平等主義であるというわけではなく、しかも、所得が不平等であることそのものが、民主主義的諸方法を禁じているものでもないからである。

社会主義的秩序の外にある限り、真正の民主主義はありえない、という命題を論証せんがため、終始押し出されてきたと言ってよい唯一の理論は、諸個人及び諸グループのもつ社会的及び政治的な権力の根底は本質的に経済的であるという命題に依存している。おおざっぱにはあるが、具体的であるようにこれを置き直そう。この理論に従えば、資本の集積体(agglomeration of capital)を覆っている統制は次の二つの能力の双方を根底においている、すなわち、労働を搾取する能力とその社会のもつ政治的諸問題の処理にあたって「資本家階級」の意志を課す能力——その意志はもとより資本家達の階級的利益として方向付けられているであろうし、その上、それ故に、更に一層の搾取を——国内と国外で——図る目的の諸施設(facilities)を増大するという諸目的に資すものとなるだろう。(・・・第I部 マルクス を参照・・・それに加えて「資本家階級の政治的力の喪失」というテーマも・・・) 資本家階級の政治的権力は、このようにして彼等の一般的経済的権力の一つの特異な形態以外の何物でもないということに帰結する。アメリカの読者はこのことを自分で思い浮かべることに困難はほとんどないであろう——ボスルール、圧力団体、議員と公務員の買収といった諸事例によって。そしてそれは次のように連なっていく。私的統制力の消滅は、個人的であれグループ様式であれ、権力の諸座を事実上(ipso facto)消滅させるであろう、そして人民は解放され、自分達の政

治的権力を以て自分達が好むところのものを為すことを許される、という如くに。

この論は少なくとも一つの合理的行論であり、それ故に、それとは無関係に進められるようなこの主題についてのあらゆる混乱した宣託に勝っている。但しただ一点、それが誤っているということであるが。

2 何よりも先ず、事実問題として企業家達のものであれ資本家達のものであれ、政治的権力なるものは、多くの観察者に対し大であるように映じられているほどに大であるといったような、何等かの事態は一般的に存在していないということ——とりわけ普通選挙の投票に関しては、また「資本家的商業紙」によって行使される影響力に関しては、そうではないということ。更に社会化が取り除くであろう民主主義政府に対する障害は社会主義が主張されてもよいだろうものよりも十分に小であると言えよう。しかしながら更に重要なことは——これも我々がマルクス主義社会学の論議の中で検討してきたことでもあるが——個人的及びグループ方式での政治的権力の源泉は経済的な言葉では定義できないということである。経済的諸要素は、いくつかの歴史的パターンの中で、基本的にはリーダーシップという遥かに一般的な諸現象に還元されるものに対して、特定の色合いと技術を提供するにすぎないのである。諸個人と諸グループは社会主義的秩序の下では非民主主義的な——実際にそれが非民主主義的であるならば——異なった諸手段で権力を獲得しなければならないのであるが、そもそもにおいて、そうした権力の諸座がもはや存在しないなどということはどこからも導かれはしないのである。とりわけ政治的ボスが自分の手の範囲にあるあらゆる利益を狙い、しかも変わることなく彼に騙されている人達に幾分かの価値を——見返りに——与え、そうしたことが彼の利益であると見出したとしても、彼と彼に金を出している資本家との関係が実質上、首長に対する職員の関係であるのかどうかは、さほどはっきりとはしていないのである。ボス社会学が一層の現実味を以て基礎付けられるのは次の条件の下においてである。地域共同社会が急速な成長と大量の個人の流入——彼等は自分達の国民的及び道徳的な諸感覚を失っており、その多くは性質において何か粗野な才幹といったものをもっている——によって解体させられているような、そうした社会が優勢であること。そうした諸条件に対応して諸々の親方と親方の掟——それに親方の掟が代表的

であるような諸現象——が存在していること。こうした諸状況については資本主義的秩序におけるよりも社会主義的秩序において少なくはないのである。

資本主義の悪しき精神がひとたび消滅すれば、ボス達が食べるべき何物もがなくなる、と考えるのはナイーブである。正統派社会主義によってつくられた大それた主張はそれ故に却下されなければならない。しかし控え目な主張さえもが、——つまり我々の今の時代画期にあって民主主義の諸運動の中の一つの場所を占めるべきだという社会主義者の主張すらもが——、今日では社会主義と言わず非社会主義と言わず、これまでであったほどには実処的なものではありえなくなっているのである。

3 第一の場にあるのは、かの偉大なる社会主義共和国である。それは少数派に位す一つの党によって統治されており、どんな他の政党にもどんなチャンスをも与えない。更にその党の代議員達は報告を拝聴し、決議案を——議論と呼べるような如何なることもせず——満場一致で可決した。彼等は、「レーニン—スターリンの党への、そして偉大なる指導者への無条件の献身の中で・・・同志スターリンの報告書に描かれた壮大な諸事業のプログラムを・・・ロシア人民(?)は採択した」・・・「我々ボルシェヴィキ党は偉大なる天才スターリンの指導の下に発展の新局面に入った」・・・を公式の声明として——投票によってしめくくる。・・・それに単一候補選出制度があり、表明実演とゲ・ペ・ウ方式での祝辞がある。・・・それらは「世界の中で最も完全な民主主義」を構築したことは疑いないだろうと。・・・そうは言っても、少なくとも本質と原理において、それは一個の社会主義共和国なのである。・・・同様にババリア地方と特にハンガリーにおいて、その様相を見せたようなタイプの創出諸国があった。・・・いまでは、この国(アメリカ)で、民主主義の諸理念により意味付けられているものを今日まで首尾一貫してもち続けているような、社会主義者のグループは疑いなく存在している。イギリスの社会主義者達の多数派、ベルギー、オランダと北欧の社会主義政党、ノーマン・トーマス氏に率いられたアメリカの党、それに亡命中の多くのドイツ人の諸グループがこれに含まれる。彼等の立脚点からして、ロシアのシステムは「真の」社会主義を構成するものであることを否定し、この点に少なくとも倒錯があるという立場を保持するという心情をもち続けた。しかし「真の」社会主

義とは「我々が好む社会主義」以外の何を意味しているのだろうか？・・・

第二の場にあるのは、この争点を検討するのに十分な知性を備えているのであるが、それにも拘わらず、民主的社会主義乃至は社会主義的民主主義に立脚することを頑なに決意している価値多き人達である。一つの神聖なる結合と彼等にはみられているものが二つの構成要素に分離されうる、更には相互に排除し合うことさえ立証されるかも知れない、ということ認めるのを拒絶するのであるが、その立場を正当化せんがためには、今や全てのアメリカ人にとって人気のある一つの行論に立ち還ることになる。すなわち、全身に産毛の生えた社会主義(fully fledged socialism)がしばしの間そうであるほどに民主主義的であるものは全くない、のは当然のことであるが、我々の魂と諸制度が資本主義の毒素によって浸されているような我々のこの不完全な世界の下では、民主主義的であるというにしては何か足りないものがあるような諸手段によって——時には権力やテロの行使といった頓服薬を含みさえするような諸手段によって——その完全な民主主義に向かう道を舗装することは認められてよいし、必要でありさえするであろう、と。・・・それが民主主義的手続きのためのあらゆる責任を回避することを提供する賞賛すべき好機がある。すなわち、誰であろうとそれを用いる人は——その場合——民主主義的手続きにより要求せられた安全装置を——正に民主主義的原理に従えば——それらを招集するところが他のいずれよりもより大であるようなその切所(junctures)というべきところで棄ててしまうのである。しかも——その場合——自分が無条件に支援していることならばどんなことに対しても、誰もが引き受けられない危険を引き受ける。

ブランキスト(blanquist)タイプの社会主義者達もある・・・革命は「少しばかりの意志強固な人達の行動」に集中されるとする想念。・・・レーニンの諸見解の中にある。・・・

4 一方において、民主主義的な誠実性を首尾一貫してもち続けてきた、そうした社会主義者の諸グループは、どんな他の信条をも公言する機会も動機も決してもつことはなかった。・・・常にサンデカリスト達には対立していた。・・・彼等の殆どは民主主義的路線において前進が生み出すことを約束した諸結果を以て満足させられていた。言うなればイギリスやス

エーデンの社会主義諸政党にとっては、もし彼等が反民主主義的性向の由々しい諸徴候を演じるようなことがあったとすれば、何事が起ったであろうかを思い浮かべることは容易である。彼等は感じていた。自分達が着実に権力の座に近づきつつあり、責任あるポストがゆっくりと自らの視界の中へ来りつつあると。・・・ドイツにあっては、党は尚より良く発展させられてはいたが、社会主義者達は強力にして敵意をもつ国家に対面しつつ、しかもその保護をブルジョワジーのシンパシィと労働組合——それはせいぜいのところ準社会主義者(semi socialists)であったのだが——の力に依存しなければならない、といった状態にあっても、民主主義的な信条から逸脱することの自由は尚乏しいものがあった。

他方において次のような僅かなテストケースは全く以て納得し難い。1918年、ドイツ社会民主党は民主主義の側に立つことを決定し、その信条の一つの証として共産主義者を黙らせることに精力を休みなく注ぎさえした。しかし党が分裂した。正確には、以前からあった仲間割れを治めることに失敗した。多数派性はその左翼において厳しく失われた上、更にその離脱した異端者達は社会主義のバッヂを要求するところが残留者達よりも一層大なものがあった。残された方の多くは、党の規律に従ったのであるが、賞讃されはしなかった。そして賞讃された方の黨員の多くは、ただ単にその基盤の上にあるだけに過ぎなかった。すなわち、少なくとも1919年の夏以来のより一層に過激な——このケースにあっては反民主主義的な——路線で成功していくチャンスはもはやネグリジブルでしかありえない、という基盤の上にあったということ。とりわけベルリンにおける最左翼の政策はラインランドやマイン川の南部の諸州において——たとえそれが直接的に粉碎的な敗北に遭遇することはなかったとしても——由々しい後退の危険があったのである。帰するところ、多数派に対しては、或いはその中の労働組合同的要素に対しては、民主主義は彼等が実質上欲する全てのもを——政治的権力をも含めて——与えたのである。彼等は中央党(カトリック)とそれを分かち合わなければならなかった。取引は双方に満足いくものであった。目下のところ社会主義者達は民主主義的となったことを声高らかに謳っている。しかしながら、それは、対立者が部分的に非民主主義的な信条と結び付けられて、彼等に反対して立ち上がり始めた時においてであった。

5 私はドイツ社会民主党を、彼等が演じた責任意識に向けて、或いは彼

等が快適な、お役所機構の肘掛椅子に坐って自己満足に耽っていさえたということに向けて、これを責めようとしつつあるのではない。第二のものは一つの共通の人間的弱点であり、第一のものは完全に彼等の名誉に属するものであり、双方がしかるべき成就の一部であり、且つ先行要件であった。今やもとよりのこと、誰もがその成就については失敗であったことだけしか語らない。すなわち、負かされたことは常に悪しき表現をもつのである。社会主義党の舞台に踏み出した諸士と諸グループは彼等の先行者達のレジームに向けて呈されたどんな賛辞(eulogies)をももたない、とするのは当然である。私は想定するのだが、次のこともまた当然であろう。社会主義者自身が、すなわち、ドイツ(社会民主)党のメンバー達が今やあらゆる同じ信条をもつ非ドイツの社会主義党员と同じように相互に侮辱的な論評を述べることを競い合うこと。もし当然だとなすならば、しかしながら批判は双方のタイプ共に著しく不公正である。諸批判が事後的流儀のものであるということだけではない。更に外国人の批判の場合には、ほとんど常に不適切に伝えられ、且つまたその事情とその諸困難を理解することを全く得させない。・・・このことは——私は残念ながら言うのだが——ノーマン・トーマス氏の批判にも当てはまる。・・・1918年から1928年までの10年間、この間に社会民主党はドイツの政治力学において、注意深く、しかも同情的な長短評価研究において支配的な要素であらなければならないと言われてよい。そうした研究は失敗以外の何事かを明らかにするであろうし、更に究極の敗北は、この社会主義者党がなした、またはなさなかつた何事かに対応するというよりは、問題の基礎事実の中に内在している諸困難性——乃至は諸不可能性に対して原因付けられるところがより一層に多いということであろう。もし彼等の経験は永遠に繰り返されるということならば、成功のための唯一の望みは再度に渡って同じ過程または極めて類似の過程で舵取りをなすことであろう。個人的に言えば、彼等の体制(レジーム)のもつ明白な汚点と失策のように——私には——見えるところのもののため、彼等を責めることには私は正当化を思いさえもしたくない。というのは、彼等の性情を考慮するならば、熟慮すべきことは、そこには彼等のもつ以上のものは存在しなかつたということである。・・・もとより、もし読者と私が一緒にカクテルを飲んだならば、我々はそのための理想的プログラムであつただろうところのものを引き出すを得たであろう。というのは、我々はそうした優越した人士達であるからである——完全な先見性が我々の些細な諸問題の処理の間にも備わっている——、すなわち、どんな知覚できる危機もが我々の完全な成功を阻害するを得なかつたであろう。しかし我々はドイツ社会民主党員達が

我々の高さに迄上昇するべきであったかどうかを尋ねることはできない。彼等は正に通常の人間存在なのであった(They were just ordinary human beings.)。

6 オーストリアのケースは民主主義の信条に対する信奉という点で召喚されるべきものであった。ある意味ではそうされて十分なものがあつた。オーストリアの社会主義者達は1918-1919年には、その後自己防衛の問題——たちまちのうちにそうした問題となった——とはなっていなかった時には——未だ民主主義の信奉者であつた。しかし権力の独占取得が手に届くに至つたかのようにみえた数か月間の間に——その傍ら未だ多数派には至っていなかった——、彼等はそれに固執した。彼等の多くの者達のもつ諸々の地位は疑いなく確かなものだとは——この間——言えなくなつていたという状況がその傍らにあつたのである。その時、フリッツ・アドラーは、多数派原則を「算術の気紛れ」の物神性(the fetishism of the “vagaries of arithmetic” (Zufall der Arithmetik))といった如く指示したのであり、多くの他の黨員達も手続きのための民主主義的諸ルールに肩をすぼめたのである。これらの人達は未だ単なる正規黨員であつて共産黨員ではなかつたのである。更にボルシェヴィズムがハンガリーを支配した時、路線を選ぶという問題が燃え広がつた。この党の意識が、次の定式化によって悪くは示されはしないということを明らかにすることなしには、そのエポックの議論についていきうる者はないであらう。すなわち、我々は左に行く——ソビエトの方法を採用する——べきであるとする展望を楽しんでいるのではない。それはあまりにも危ない。しかしもし行くのなら、その場合は我々の全てが行くのでなければならぬ、としたこと。この国の一般的情况とこの党の危険の双方についての評価は大いに納得しうるものである。・・・すなわち、彼等はオーストリアとして条件付けられた一国でボルシェヴィズムを試みることの危険は見通してはいたが、実際には外国の軍事使節団の言うがままに威圧せられていた。・・・推論はそうである。但し民主主義諸原則への熱心な忠誠はいずれにせよ怪しまれるものでなかつた。(その後オーストリア社会民主党の)民主主義原則への反転があつたことは疑いない。しかし指導者の多くにとって、それは——後悔からもたらされたものではなくして——ハンガリーでの反革命からの帰結としてであつた。

7 私が社会主義者の不誠実を告発しつつあるのだとか、私が社会主義を悪しき民主主義者としてか、無原則な図式家またはオポチュニストとしてか、そのいずれかとして軽蔑されるのを望んでいるのだとか、とは考えないでいただきたい。彼等の予言者達の幾ばくかが子供じみたマキャベリズムに耽っていたにも拘らず、私は基本的には彼等の殆どが他のどんな人達にも劣らず誠実であったと信じている。加えて、彼等が信じようと欲しているもの及び彼等が絶え間なく公言しているところのもの、を常に信じるに至っている人達に対しては「社会的不仲の中にある不誠実」(insincerity in social strife)があったとは私は信じない。そして、こと民主主義に関しては我々の内にあるその他のものよりも以上にオポチュニストとは想定しないのである。彼等は単純に、それが彼等の諸理想に資するし、更に他に方法がないという——「ならば」と「ので」と「の時」の——その場合において民主主義を支持しているのである。読者がショックを受けないようにするため、且つ政治的実践者達のその最も非情なところばかりに価値付けをなすような見解を不道徳なものと考えないようにするため、我々は直ちに実験にとりかかるであろう。

8 諸君は成人に達した市民達の多数派の意志が行き渡っているという原則によって民主主義を定義するのか？ それでは、もしその多数派が異教徒を柱にはり付けて焼くことを望むとすれば、どうなのか？ 我々はそうした民主主義を支持するのであろうか？ 我々はからかいを試みているのではない。このケースは決して幻想からきているのではない。歴史解釈についての一つの単純な事柄なのである。その伝統に従うとネロはキリスト教徒とユダヤ人達を焼き殺したのであるが、それは部分的には彼自身に向けられた公衆の激怒をなだめるためであった。すなわち人気のあることを為すため、彼は人々の意志であると気付いたことを一度だけ充たさんが為のものであった。スエトニアスははっきりと公衆の意見を表そうとして信憑性を与えるためにその手段を記した。スペインでの——もとよりオランダにおいてではない——フィリップ二世治下で行われたプロテスタントの迫害は国民の多数派によって完全に承認されたものであった、この事実は正確には何故にフィリップ二世がこのことに乗り出したかについて

ての諸動機の一つ——但し唯一のものでも、最も重要なものでもなかったが——であったことを否定しえないものとしている。

魔女と魔法使いに対する迫害がある。これは聖職者やプリンスによって国民に強いられたものではなかった。カトリック教会は——13世紀の諸討議と諸対策がはっきりと示しているように——この問題に触れることを好まないこと甚だしいものがあり、しかも人々の意志に任せることを嫌がったのであり、二百年に渡って罰を精神的ペナルティに制限することを固守した。諸々のプリンスや政府はそれを好まないのはそれ以上のものがあり、自分達の力が十分に強大となり、他方魔法の力への信頼が十分に弱くなるや、すなわち18世紀になると、迫害を鎮圧するのに何のためらいももたなかった。オーストリアでは女帝マリア・テレジアはこの事態につき極めて個性豊かな区分を設定した。彼女は公告した。魔法の力をもっていないのに自ら魔女だと考えている個人達がいる——こうした者達は隔離されてしかるべきであるが、牢獄ではなく精神病院にである。詐欺的にそうした能力をもつかのように見せかけている他の者達がいる——こうした者達は罰せられるべきであるが、魔法のためでなく詐欺師としてである。最後に本物の魔女達がもとよりいる、しかしそうしたケースでは全て女帝の判断に留保されるべきである。勇気を欠くものではなかった、かの偉大な女帝が何故にかくも単純な目的を達しようとして、かくも回りくどい方法を選んだのであろうか？ 理由は簡単、彼女はここにおいて国民の真正の意志と闘っているのであり、しかも極めて不人気となることに気付いていたからである。

最後に現代の諸イシューと何等かの関わりのある一つの事例を選ぼう。反ユダヤ主義(anti-Semitism)は——ユダヤ人がかなりの数に上るような殆どの国々において——人民の最も深く根差した意志作用の中に常に存在してきた。ヨーロッパ大陸ではカトリック教会とプリンス達一般は共に彼等を保護しようと試みた。プリンス達は最後には彼等を解放した。しかし人々の意志は殆ど一瞥して別な道を探ってきたのである。これこそが何故に政治家達がかくもしばしば反ユダヤ主義的なスローガンと諸政策に訴えるのかの理由である。彼等が大衆に訴えたのは確かであり、しかも実際に過去60年間に最も驚くべき政治的成功のいくつかを生み出したのである。これらの諸政策が責められるであろう理由が何であれ、民主主義的行論は——民主主義が前記のように定義されてあるからには——その中には決してありえない、ということになる。

私は認めよう。我々は尚「絶対的」民主主義者でありえようか——どん

な状況にあっても民主主義の諸原則が道徳的に結びついている状態にあり、且つ結果の如何に拘わらず支持されなければならない、ということが保持されているという意味において。更に我々は十分な論理性をもって次のように述べてもよい——「魔女達は焼き殺されてもよろしい、異端者もユダヤ人達やそれと同類の人達も幾世紀に渡って迫害せられてよろしい、人民の意志は果たされなければならないのだ」と。よろしい、そうかもしれない。しかしそうした諸ケースにあっては、なされてしかるべき遥かにもっと当然のことがあるのである。それを人民と言うに替えて暴徒(rubble)と呼ぶことであり、最も不条理にして野蛮な僭主としてそれを憎み、それと闘うことであり、更に我々のもつ諸理念をそれに屈服させることを拒否することである。しかしそうすると、我々は益々以て(pro tanto)民主主義に対する忠誠を——少なくともたった今、前提として採用した意味においては——明け渡しつつあるということになるのである。そして正確に社会主義者達が為すところのことを為しつつあるということになる。社会主義者達にとっては資本家の行動が拒絶されるのは——資本主義社会のメンタリティに対して異教徒の焼殺、魔女狩り、ユダヤ人達の迫害が拒絶される場所に比して——決して少ないものではないのである。

ここにおいてかくして偶然にも我々是一个の論点——それは以下進められる行論の中で基礎的に重要な論点であることが論証されるであろう——を得た。我々の多くは自分達が民主主義に賛成するのは、自分達が受諾の用意があることを民主主義が為す限りにおいてのみである、とは言わないであろうが、同時にもし民主主義が、自分達がひどく嫌うようなことを為すというのなら、民主主義を支持することを拒否するであろう。嫌がられるようなそうした乱暴で無法な行為は、決して人民の「真の」意志から導かれたものではない。腹黒い諸利益や僭主達が時々ミスリードに持ち込むことはあったとしても、人々は基本的には賢明で親切なのだ、更に突き詰めれば人民は理性とヒューマニティに従うものだ、と我々の多くは省察することにおいて満足を求める傾向がある。しかしその場合、このことが否定しようとしている正にそのことを表現するもう一つの方法でしかないとするならば、——換言すれば、その民主主義が我々の忠誠に対する要求を何等もたないならば、つまりその民主主義が、我々が賢明で親切であると考えたことをなすよう行動することがないということになれば、——我々は民主主義のことをもはや単純には語り得ないのである。すなわち、民主主義の概念は大衆の心理とそれが機能する方法については、

何事をも含蓄してはいないということ、及び我々は異質のしかも高度に異論のある事柄を導入しつつあるということになる。これらの付加的な諸命題の中にある信念は疑いもなく歴史的に民主主義と結び付けられている。しかしそれは冷徹な分析による立証または非立証に従うべきことであって、論理的原則ではないのである。それについての目的論(teleology)はないのである。

9 アメリカ人の世論を代表するいくつかの団体が、最近、民主主義に対する忠誠を手段としてではなく、目的そのものであることを表明した。この表明は、その十分な意味を我々に納得させることを促進するという事情と結合することに動機付けられているのが通常である。ここに与えられている諸動機とは、例えば良心と討議の自由、自由選挙、各自が生活をつくる自由、等を含む。更にはっきりとは述べられてはいないにせよ、あらゆるタイプのファシズムとは理由のある無しを問わず闘われるべきこと、とりわけ「暫定的」な、または「過渡的」な民主主義的行動からの逸脱を弁護する諸グループとの妥協は——歴史の光の下で時折の同盟が形成されてもよいということが追加されるべきであろうが——なされるべきではないこと、という含蓄がある。了解。しかしそれがもたらそうと意図されたことが明白であるそのことを定式化する正確ななされ方は次の如くであろう。この時代とこの国という諸条件の下にあっては、民主主義の諸原則への強固な密着こそが——こうした諸解決の支持者達にとっては——真実「究極の」諸目的に資し、しかも諸々の危険を排除する最良にして唯一の為され方である、と。しかしこれらの諸解決が示している正にその言葉は、民主主義が究極の目的であること——すなわち、それは「もっと高位にある」諸目的から導かれるものではない——という内容の、彼等の主張を拒絶しているのである。

上記が他のものであろうとなかろうと、民主主義は制度的工夫乃至は政治的方法の一つであり、それ自体を(per se)、そしてあらゆる時代と場所でのその枠組みの中で起きるであろうことを——つまり、どんな諸理想が実現され、どんな罪が犯されるであろうかということ——決定しはしないことは確かなのである(Democracy is certainly an institutional device or political method incapable of determining per se and for all times and places what will happen within its framework——what ideals will be realize, what crimes will be perpetrated.)。だからして民主主義が誰に対

しても「究極の価値」で常にあり得ようと自覚することは——上記したように不可能ではないとしても——困難なのである。民主主義は我々の誰にとっても究極の価値であるものに影響するであろうが、それは様々なやり方で——様々な状況下で——様々になされる、と民主主義を考える方が容易である。その区別——我々はそれを構造的諸形態と文化的諸内容の間の区別だと認めてもよい——は結論として明白である。しかしながらそのような明白な点がかくも念入りに吟味される必要があったという、正にその事実こそが、民主主義的手続きに対する諸政党の態度を解明しようとする我々に対して、私の為した試みのところで我々が止まってしまうことはできないということを示しているのである。社会主義と民主主義がどのように相互に関係付けられているのか、またはその諸関係は実行上どんなことを引き起こし易いか、それらを我々が理解することを欲するというのならば、我々は民主主義のイデオロギーと機構にもっと深く立ち入って検証しなければならない。すなわち、我々のいくらかの人達がそれらを定義することに讃嘆するに違いないような民主主義の意味付けに立ち入るのである。・・・我々の得た諸帰結の光の下でこの主題についてのマルクス主義の教義を読み替えるという試みをなそうと思う。

(2) 社会主義をめぐる権力への意志

摘要

社会主義が論理的基礎において成り立ち得ることは既に示されている、それで良いとしてそこで、社会主義は民主主義たり得るか、更にそれは如何なる意味で？・・・この問題は外生性の問題である。・・・多重的リーダーシップ・・・民主主義にしか具現されない善の意志・・・思想の自由についての信条・・・方法とマナーにおいて合意している・・・いずれかの信条を倫理的尊厳にまで高めることは、普遍的忠誠への要求と他の見解の無意識の排除、それに支持を喚起することになり易いような倫理的諸価値の最大公約数に結び付けることを強いること、といった事を意味する。マルクスはブルジョワ民主主義から来った、彼にとってそれは自明の事であった。彼の「プロレタリアートの独裁」はそれが何であれ特権づけられた少数派の独裁ではなかった。彼の信条・・・経済過程のまさにそのロジックこそが必然的人民の大多数を社会主義者に変換する、となすもので革命行動についての彼のヴィジョンはそれ自身の波打たれた意志作用——それは党の教育によって創り出されるものではない——から引き起こされた変革なのであって、社会主義への意志を説く、あるいは創ることはマルクスではなくして「ユートピアン」と呼ばれた社会主義学派にふさわしい。マルクスに従えば、大衆の真正の意志作用は必然的に適切な時期に客観的諸条件の反映として出現する(階級意識)。革命は圧倒的多数派の意志のおかげで引き起こされるのであり、だからしてそれは或る意味において「民主主義的」と呼んでも不条理なわけではない。彼の強制は資格付けられていない少数派の転向なのである。・・・少数派の中で、その社会的機能がいまだ傷ついていないような少数派と、その社会的機能が既に麻痺してしまっている少数派が区別されるべきであり、且つまた意志と意志作用の中で、自発的意志とある理念を放出させんがために、政治的諸グループにより創出または製造された意志は区別されるべきである。・・・民主主義の——それがそうであるかないかの——判断基準として、自律的な意志作用から導き出された民主主義的諸決定によって構成された多数派が、資格を失った少数派に対し従うことを強いる、もし資格のある少数派(未成熟な段階における雇用する者)の降伏を、製造された意志(政治的諸エージェントに負う)によって強いるということにもなれば民主主義的ではない。・・・その他 (編者)

IV—(2)—1～17

社会主義をめぐる権力への意志

1 社会主義は可能である——論理的基盤においては、ということは既に述べられている。ところが同じく、社会主義は民主主義的であり得るや、更にそれはどんな意味で？ という問題は何も述べられていない。・・・既に移行についての行論はなされているのである。・・・

外からもってこられた事柄(extraneous matter)・・・多元的リーダーシップ(multiple leadership)・・・善の意志は民主主義の中に体现されるのみである(Will of good but embodied in Demokratie.) グランヴィル

(Granville)。・・・思想の自由の中にある信条のテスト・・・何故にアーカンサスには民主主義がないのか？・・・ユダヤ人迫害の弁護・・・

民主主義的手順(procedure)が前提とするもの a) 過大な対立がなく共通の基盤が充分であること、b) 方法とマナーにおいて合意のあること。・・・しかし、このようにして資本主義は民主主義とは両立し得なくなる！！今日の複合的社会の故に。・・・

ラッセルとフォーシングハウス・・・ブライトは忠実な民主主義者である、その場合ブライトは砂と岩を間違えるような思想家達の一人である。

2 よろしい、それでは何が民主主義なのか？ 我々が無条件に賛成を意味していることが何であろうと、それを倫理的尊厳にまで高めよう——本来的に倫理的尊厳とは優しさといったものであるが——と我々が試みるならば、それは——そんなことができるとして——普遍的忠誠への要求であり、その上共通の儀礼の名のもとに、如何なる他の見解をも意識外へと排除することの要求を含意するものである。・・・一方において、このことは一般的にそのあるものを——それが何であろうと——我々をして一層の支持を喚起することになり易いような倫理的諸価値の最大公約数に結び付けることを強いるものである。他方において我々は——不本意ではあるにせよ——歴史的相対性の理念と特質に対して条件付けをなさないような諸細目を我々の理念に縛り付けることになるのは当然であろう。・・・ボルシェヴィストであるかないかは、尚必要ではない。

3 民主主義者の審判に対して、彼の仲間の遊行者の信条がボルシェヴィズムであることを見出しても、彼はそれ以上のことをなさない、ということになれば、それで充分である。それでも彼をボルシェヴィストであるとする必要はない。・・・立憲君主制の理性。・・・方法として正にぴったりの民主主義の倫理的原則——優しさ、強制的なもののないこと。・・・そしてしばしば不成功な政府の取替えが人民のための善を保持することになっている。・・・フォーシングハウスの倫理学は倫理学の原理としての責任感を強調している。・・・しかし私には諸事実は一つではない。・・・要は、歴史である、その場で機能しており、その他に同じやり方で行われている。・・・

しかしそれを道徳的原理にかえるような立脚点を採用することは我々の助けにはならないであろう。・・・個々の場合には意味のあるものは多くある。ラッセル、アメリカ人ではブライト、マッチニー・・・しかしアリストテレスに相談すればそうではない。更に言葉の意味の中にはないものがある——諸困難がそのように語らせることができよう。・・・48通りの民主主義！・・・相対主義(relativism)を恐れていてはならない！ 現代人はそれを受け入れる筈である。・・・それは中途半端な情熱乃至は妥協を意味するものではない。・・・人々が実際にそのために、またはそれに反対して闘うこと——そしてそれは既に用いられているもの——が意味しているものは強力な諸目的と諸理念の存在であるが、それらは特定の歴史的状況の下で——彼等が民主主義のため闘い、そして死す場合において——護るかまたは達成するかしようと思わせられているのである。・・・倫理的原理——歴史的相対性、これが我々の欲しているものである。・・・自由、グループの自由、個人の自由・・・「くじ」は選挙よりも更に民主主義的である。("Lot" ist more democratic als Wahl.)

4 1) かかるもの(然るべきもの)としての人民の意志なるものはない(kein will of people als such)ということ、2) 実在の意志は個人の意志である(real will of individual)ということ、——但し多くの条件を付した上で。・・・理念は他の目的の道具である必要はない——だが「より高き」諸目的がある。・・・我々は個人主義に投げ返され、グループ様式の意志作用(group-wise volition)と他のものを結果としてもつことになる。

5 現実上あり得るのは個人の意志作用とグループの意志作用だけである。しかし第三のものとして我々がその上に民主主義に好都合なケースを基礎付けようとするれば、途上に立ちはだかるいくつかの知覚し得る諸事実
に抗して歩を進めることになる。

1) これらの意志作用は、心理的乃至は社会心理的な現実にはつきもの
のこととはいえ、極めてしばしば不明確である。政治的な諸イシューは
直接的な意志作用の外にあり、個人やグループに対して直接感じられてい
る日常的な諸利益や諸義務に訴えたりはしない。全くたやすくすり替えら
れ、且つ教え込まれる。消費者行動のケースにおいて十分に了解されてい
るものと同じ広告の過程ではないか。あるいは実質的には遅きに過ぎた、
しかも既成事実(*fait accompli*)であるような場合にのみ訴える。今や人民
のどんなルールがこそこそと彼等に語られてきた人民の意志であるとい
うことになるのか? . . . 自律的意志と創出された意志 . . . どこに専門
家的ルールがあるのか、それに経済計画の専門層 (*classe dirigiste*)
が? . . . 民主主義的な見せかけと装い . . . 雲の中の理想 . . .

2) たとえ完全に明確であり、強力で注意深く保持され、しかも干渉さ
れてはいないものであったとしても、それらの意志作用が合成的意志——
それが独立した諸成分の合力としての解釈を担えるであろうようなもの
——を合成的につくり出す「何らかの知る諸方法」(*any of know methods*)
には連ならない . . . ポアンカレのアイディア (*Poincare's ideal*)、その
正しさは充分にある . . . この合力が誰もが現実に欲しているところの
政治的意志——たとえば多数派が欲したとしても——に相対応するものと
なるだろう保証もない . . . どこに本来の官僚制が、職業的政治家が、
政党が、知識人が、 . . . 圧力団体が . . . 結果の正当性と方法の正当性、
それぞれ別の事柄に——国民意志 (*Volkswillen*) と国民の意志との間のこ
れらの対立の重要性 . . .

殆どの人民が非民主主義的方法により一層効果的に確保せられるであ
ろうところのもの、その下にある状況をヴィジュアルライズすることは容易
である。そのヴィジョンを構築するのに、我々は成功裡の父系的絶対主義
の諸ケース (*cases of successful paternal absolutism*) に閉じこもる必要は
ない。ナポレオン I 世はこのカテゴリーの範囲内には入り難い。しかし後
の狭義のボルシェヴィズムがそれ以上のものを成し遂げる。そしてもしそ
うならなかったとすれば失敗したからである——失敗はこの方法を用い
ることと何等かの関わりがあることは確かである . . . そう言うことの

特別の根拠はというと、人々が——彼等の直接的な諸利益とその集合に対しては——自分達が唯一手中にしている営為によっては(durch Handeln auf einige Hand)自分達の諸利益を損なうこと以外には何物も達成し得ない、更にはしばしば党の中に織り込まれている、といった状態の存在である、例えば労働者。ヒットラーやムッソリーニはしばしば人々が望んだものを、各人が政治的に行動することを強制するような方法で達成した。明らかにその反対物(Gegenteil)もが——しかし民主主義にも即していた、そう、労働組合傘下の労働者ですら！(ブルーム・・・レオンブルーム編者)・・・農民の場合はそうした要素はより少ない。・・・その場合、大衆心理の諸事実が・・・対外政策が可能であったとすればどのようなか？・・・いずれにしても民主主義的ではない。・・・少数派の役割、大統領の好み、社会的選抜(淘汰)の諸方法・・・

6 その枠組みの中で何が起きるのだろうか——どんな諸理想が実現されるのだろうか、どんな罪が犯されるのだろうか。このようにして、誰もがそれが「究極の価値」(ultimate value)であり得るであろうようなことを心に抱くことは——我々が上記で検討したように——不可能ではないとしても困難である。しかし様々な環境の下で、ある方法で、または他の方法でとしか(要するに様々に)言う他はないのであるが、それが万人にとっての究極の価値であることのように装っているであろうと心に抱くことは益々以て容易なことである。

その区別は、我々はそれを構造的諸形態(organisational forms)と文化的諸内容(cultural contents)の間の差として認証してもよかったのだが——帰するところ明白である。しかしながら、そのような明白な論点すらもが更なる吟味を要求する、という正にその事実こそが、民主主義的手続きに対する社会主義政党の態度を明らかにしようとするどんな試みにも、我々は止まり得ないということを示すものである。もし社会主義と民主主義がどのように相互に関連し合っているのか、あるいはその関連は実際にはどんなものなのか、を理解しようとするならば、我々は民主主義のイデオロギーと——我々の内、幾人かが定義するよりも賞讃することの方が遙かに容易であると看破した——民主主義の意味の探求を深くするものでなければならない。・・・我々の結論に照らして、我々はそこで主題であるマルクスの教説を解釈することになるであろう。・・・その上に更に何かが。・・・

7 このようにして、特定の諸グループの諸利益または諸理念の諸利益が必要とされることにもなれば、民主主義はいともたやすく、その本質からして——ブルジョワ的幻想であるとして——捨て去られることがあり得るのである。・・・信条(belief)のテストが選択の欠如によって由々しく阻害されている、という観察の妥当性・・・それはIIIとの反復の危険があるだけでなく、選挙人(Wahler)と名付けられた部分にひき続けられる「脱線」の中に別に記されている。・・・恭しく信じられていることは確かである。・・・全ての他の民主主義者と同様に民主主義も審問にかけられる——結論——。

8 帰するところはこうである。その元々の形態におけるマルクスの教義(Marxian teaching)は結局において(民主主義に対しては・・・編者)差し向かいで対応すべき実質的問題として扱われたものではなかった。ブルジョワジーと考え違いをしているボルシェヴィストの兄弟達の双方に対してそれが尊大に開陳されたのは、偏にこの理由による。かの時代のほとんどすべての社会主義者達に似て、マルクスはブルジョワ民主主義を引き継いだ——彼の知的にして道徳的な血液の中には民主主義がもたれていた。彼にとっては民主主義は、他の18世紀の諸理念がそうであったと同様に公理であった。更に彼は分析の領域でそれを疑問視するどんな動機をももたなかった。その上政治的実体に対する彼の眼からしても、それをブルジョワ的幻想であると宣言しはしないというあらゆる動機をもっていた。・・・他方で、政治権力の征服は民主主義的方法である必要はない、すなわち「プロレタリアートの独裁」(Eroberung der politischen Macht nicht notwendig in democr. Weg; “Diktatur der Prolet.”)。・・・彼の独裁はある特権をもった少数派の独裁ではない。また独裁はここでは行論の結論としてではない。・・・それ以上に彼は次のように信じていた。すなわち、経済過程の正にそのロジックが必然性をもって人口の大部分を社会主義者に変換するであろう。そのように社会主義の実現は実際に圧倒的多数の意志のお蔭(徳目)で生起することになるだろう、だから、民主主義的と呼ばれることが明らかに不条理ではないであろうようなやり方で。・・・ここでは、しかし、これが決定的な点である。・・・彼は言うて

みれば秩序だった憲法改正のような措置を思い浮かべることはなかった。革命、暴力、テロは必要でありさえしたかも知れなかったが、それはただ単に幾ばくかの自覚的な手兵達(妨害主義者達)(a few waked hands(obstructionists))と彼等に雇われた部下達——腐朽した制度が彼等に雇われ暴力団の地位を与えているのであるが、数の上でも社会的役割の上でも全くの取るに足らない——のレジスタンスに打ち克つためにである。彼の言う強制(coercion)はこのようにして一少数派にのみ加えられることに限られた強制であった。しかも金が目当てで動く者達を除けば極めて小さい少数派であり、更にそれだけにとどまらず特別の諸性質によって資格なし(disqualify)と標示された少数派であった。

9 幾ばくかの搾取者に抗した人民の強制(Musz der Leute)ではないとすると？ その中に入り込みうる疑問は次のものだけである。

- a) 社会主義が多数派性を利益適合的に保持しているかどうか——特定の諸理想に即して利益が定義されている場合は別として——、果たしてそうかという問題。・・・
- b) 誰が強制されるのかという問題、多数派が少数派か。・・・
- c) プロレタリアートに行使されるプロレタリアートの独裁。・・・
- d) 少数派か、しからずば多数派か、はひねくれた頭だけの問題——地位の代表(Standesvertretung)、許されるのはただ仲間についてだけ。・・・
- e) それが真正の民主主義ならば、実質的設問は打ち上げとなる。だが平等性は常に信じられている。・・・

社会主義に即していない民主主義は正しく真正のものではない！ 一個の良きロジック！ 正に認識の対象でもあり、理想の対象でもあるだけではないか。もし古風で熟練の労働者がそこにおればもっと良かったのでは。・・・但しそれは我々が未だ討議していない設問であり、更にそれについては様々な見解をもつことが可能な設問である。・・・どこで自由と平等が・・・

10 更には、我々は独裁と階級戦争という言葉——この言葉を社会主義者達はその使用によって彼等がそれだけ多く非難しようとする諸階層の面前で甚だ頻繁に使用する——のもつ諸含蓄に対して抗議を受ける筈で

ある。独裁は彼(マルクス・・・編者)の秩序想念の中で彼が文学的効果の誘惑に負けたことに起因する一種の逸脱であった。それは最大多数の最大幸福、あるいはまた誰もが一人として数えられること、すなわちいくらかの廃棄を伴ったベンサム、これよりもそれ以上に他のことに関心がもたれるべきでないというそれだけの意味である。・・・脇道へそれた主題との不一致の危険・・・階級相互間の態度に関わる階級戦争ですら抵抗する多数派の軍事的征服としては考えられたものではなかった。それはエンゲルスの諸研究があったとしても、そうである。現在の諸状況の中へ置かれたら彼は何と言うだろうかは全く定かでない——ブルジョワ的幻想とでも言ったのではなかったらうか?・・・

1 1 彼(マルクス・・・編者)は恐らくは多数派性を擁することなしに権力に至る可能性については考えていなかった。どのようにして武器なきプロレタリアートがそれをなし得るのか——といったことはあまりにも細かい小理屈屋によって作りだされた無益にしていらいらさせるような設問だと考えたのであろう。共産党宣言は確かに「革命」を説き「合法性」を強調してはいない。だが。・・・その上尚もカウツキーや戦前のネオマルキスト達の罪が大きい——(資本主義は・・・編者) 自己崩壊はしない、というヒルファデーニングの発見が小難しい議論の開始であったことは確かなのであるが。・・・恐らく今もそうである。しかしながら我々が脇道に入って研究しなければならないような困難が既にこの点についてもあるのである。イギリスでは重要な法案は多数派が小に過ぎる場合には継続審議とならず廃棄となる。しかしその場合、それに先行して述べられた失格させられた少数派(**disqualified minority**)のことは考えないでおくのが恐らくは良い。・・・既に一つの契機が与えられている。・・・どのように合意と強制が両立し得るものであるか(**Wie consent und force zusammen möglich sind.**)!!・・・マルクスは、さもなくば成功しなかったことを、成し遂げさえしている——如何にして圧倒的多数が出現に至るかを事実明示した。しかしどのようにしてこれらの意志が生じるかはもっと後のこととなる。・・・これらの全体はテキストには適していない。

1 2 「失格させられた」少数派(“**disqualified Minority**”)の概念——

その場合プロレタリアートの独裁は前もって直接的なものではなく、強いられたものである。マルクスにとって重要であったものを述べるだけのことである。・・・このことは全てに差をつくる。その社会的生命力が未だ傷ついていないような少数派——その意志とは関係なしに——に降伏を強いようとする試み(多数派だけにしようとする試み)は一つの事柄であり、社会制度の惰性のお蔭(徳目)で単にぶら下がっているだけの麻痺した少数派に降伏を強いることとは全く別な事柄なのである。常識は双方の場合に対し成功のチャンスと同様にその意味が基本的に全く違うことを我々に語っているのである。この見地から、基本的には和解し得ない諸要素ではあるが、尚それ自身に健全な意味合いをもつものではある諸要素の間において、単なる妥協ではない合意と強制という合成(synthesis)が可能となるのである。もとよりそれを実行に適用することは困難である。いくらかの人々はいつもそれを受容するであろうが、他の人々は少数派であるとされた存在が定義せられた意味での資格を失ったものであるとは決して認めないであろう。しかしそのことは、その原則——我々が、それにも拘わらず、現代の社会主義者だけではなく非社会主義の民主主義者をも、その精神とは隔たっている相克の合理的解決をもつに至った原則——に影響を及ぼすものではない。

13 このことを示すため、更にまた正しく当然にあり得べき誤った理解を警戒するために、我々は宇宙異時間衛星(飛行機)に乗って、フランス——但し12世紀のフランスへと飛び立つことにする。・・・我々は、特定の諸要素(特に町のそれら)を考慮から外すとして、一個の封建制度を観察することになる。封建領主とその臣下は人口の少数派を構成している。そこではその時代とその国の環境下で、實際上、成功をおさめ得たであろう他の如何なる組織構造はなかった、ということを我々は容易に了解する。更には封建制度を排除してしまおうとするどんな試みも、文化的諸価値の全面的な破壊とその社会の死活的利益に対する侵害の危険に晒しかねないカオスにまで至るであろう、ということを了解する。・・・今や今一つの飛行機を選ぶこととし、1789年のニューヨークとパリの間を飛ぶことにする。我々は今一つの社会構造を観察するのであるが、そこでは彼等(封建領主とその臣下)は最早社会のエンジンの必須の歯車とはなっておらず、反対により効率的に作動するには、彼等なしの方がより良くなされ得るであろう、といったことが容易に見て取れるのである。・・・このよう

にして飛行機を降りた後、我々は特権の廃止——それは用いられることのない死語となっていた——は今や全く別なマターであることを明らかにするのに何の困難もない。歴史的事実の中で、それは8月の第4日のかの有名な夜において修道院から観察されたという点が本質的である。もしそれがなかったとすれば、そしてそれが修道院に替わってレジスタンスの一派であったとすれば、強制は我々をして別な光の下で観察されたであろう。我々は都合の良い事例を選んだ。「活力のある」(vital)少数派に降伏を強いることと「資格を失った」(disqualified)少数派との間に設した我々の区別が、役に立たない、または實際上無益である、ということではないということを示すことは示して充分なのである。それは単なる我々の主観的な好みの問題ではない。掌握すべき要点はこうである。少数派グループの活力についての認識とそのグループが特定の国民のオーガニズムの中で充たしている諸機能についての認識——何故にこの二者が通常一致するかを示すことに私は留まっておれない——が我々がそのグループに同情しているとか、またはそれらの諸機能を承認しているとか、とは完全に別なマターだということである。我々が——現代の男女で星条旗をはためかしながら滑走路に立つ者達であったとしても——かの活力あるものと認知された封建階層を大いに好むことがあって然るべきなのは、丁度12世紀のフランスの浴槽を好むところが極端に少ないのと同様であろう。そして我々は1792年または93年のフランスに旅行するとすれば、迫害されている貴族層が担い続けているその文化的諸価値を評価するものであり、心の底から——制度的に無用になった人々が取り払われた——その方法に内在する不条理な語句、血を流す残忍性、道徳的卑劣性を憎むであろう。私もそうする。しかしどんな種類の感情も個人的な価値判断も、事実の問題に向かおうとする——評価の問題に向かうのではない——我々の判断基準に関わるものではない。

14 日常生活の中で、また社会的諸主体の考慮の中で、我々は正反対の判断基準(criterion)を採用する習慣がある。我々は我々の人的な、またはグループ様の評価に我々の立場をとる。その場合、他のグループを、その諸利益を、その諸理念を——正確に我々がそれらに組するよう、または憎むように図式化するかしないかに従って——認知したり、または失格としたりする。諸価値のいくらかが我々にとって充分な契機である時はいつでも、また我々がそれを抱くのに充分な風味(zest)を添えている時はいつでも

も、特定の諸状況の下では宗教的に悔悟をなし、また他の諸状況の下ではそれに対し特定の代替物をもとうとするが如く、他の仲間達は暗闇の中をさまようのであり、その暗闇たるや如何に広く拡がっても、光を覆い尽くすことを許されてはならないのである。

社会主義者にとっては非社会主義者は——実際のところ禁止主義者であろうと他の者であろうと——何等かの「主義者」(“ist”)である限り、単に誤りを犯しているだけでなく、罪(sin)をも犯しているのである。何等かの信条(belief)があつて、それが絶対的真理であることを要求し、しかも真の教義の喧拏と開示の行論以外のことは知らないということなれば、これこそがその信条のテストなのである。この態度が様々に変化し得る諸含蓄をもって存在することが、あらゆる時代の際立った特色の一つであるのと同じく、我々の時代の際立った諸事実の一つである。このことは我々が先に取り上げたものよりも實際上遥かに重要である。我々はそれをしっかりと視野に保っていくであろうが、しかし正に今二者の間にある混同の危険については私は言及しておかなければならない。・・・私が活力ある少数派をある社会的機能によって「正当化された」(justified)ものとして語り、麻痺している少数派をそうした機能の欠如によって失格させられたものとして語るならば、特に大となる危険がある。しかし明確にされるべきは、我々の言う失格化——社会的機能の欠如——の判断基準は次のような諸少数派に対してのみ適用されることができるといふことである。すなわちそれは一つの条件を提示していること、民主主義的な実行は合意による政府という原則から逸脱することを要求するという条件である。更にこの合意なしには諸々の少数派の意志を踏みにじることは民主主義の措置の中には存在する余地がないことである。それ以外の判断基準は異論を唱える人達が少数派の側にあるのか多数派の側にあるのかとは関連をもたず、民主主義的措置の理論の中ではその所を得ないということである。反対にそれは——あらゆる時代にそうだったのであるが——反民主主義的傾向の主たる源泉がその中にあるような諸態度と諸決定のためになるような一つの条件を提供するものである。

15 我々はこのようにして民主主義の分析に資すような予備的貢献を拾い集めている。第3のそれはマルクス主義についての我々の解釈と結合させられてよい。・・・かの圧倒的大多数なるもの、それ自体・・・それはマルクスが——良きにつけ悪しきにつけ——思い浮かべたものであり、

その革命的活動が遂には社会主義を実現させるであろうものであった。それは合意することであるか、あるいはどちらかと言えばそれ自身の波立たされていく(律動せしめられていく)意志作用からの変化に基づいて情況的に主張することであった。疑いなく党の教師達はその意志を磨き上げるように働くであろう。しかしそれらはその意志を創出しはしないと言えよう。目標を説くことが社会主義への意志を創出するという意識内容は——マルクスにではなくして——マルクスによって「空想家」(utopian)と侮辱された社会主義諸家において典型的なものである。マルクスに従えば、大衆の真正の意志作用(genuine volition)は他の如何なる意志作用をも麻痺させるであろうような客観的諸条件の還流するものとして適切な時期に必然的に発生するであろうものであり、そのようにしてマルクスが大衆に示唆するところは——彼が彼等の階級意識であると考えたように——僅少なものであった。

この中に、あらゆる民主主義の理論と実行に絶対的に本質的なものである何かがある、となすことは根拠のあることである。民主主義の教義がその体系の礎石として受け入れる人々のそうした意志が何であろうとも、それは一個の独立した実態(an independent reality)として存在するものでなければならない。とりわけそれはそれを管理するべきものである政治的機関や施設の活動からは独立したものでなければならない。あらゆる尊厳とあらゆる情緒的価値だけでなく、あらゆる意味付けすらもが、もしその意志が製造せられたものである——とりわけそうした政治的諸機関自身によって製造せられたものである——ということになれば、それが民主主義の理念からの逸脱であることは明白であろう。・・・ある利益乃至はある理想に加担するべく形成された存在である職業的政治家達やそのグループによってそれが製造されることはあり得る、しかもしばしばである、といったことは今では如何なる疑問の余地はない。しかしながら、民主主義の精神が失われるそうしたケースにおいてはその諸形態を注意深く観察されてよいのである。更に我々はいつもそれらを真正のケースから区別しなければならないのである。この目的の為、我々は二つの自己説明的な用語を導入する。すなわち、我々は自律的な意志作用から導かれ、しかもそれを体現しているものを民主主義的決定にとって本質的なものとする。そして我々は創られた意志を反映しているような決定を非民主主義的であると呼ぶことにする。・・・この区分を保ちきっていくことの実行上の困難はまたもや容易に認められる。・・・多元的リーダーシップと競争的リーダーシップの問題・・・。

16 このことについてですら我々は——今ここで——注意を横道にそれなければならないような一つの困難がある。それは抽象的に考察されるのではなく、イギリスの議会慣行の具体的な舞台で考察されるならば、更に説得力のあるものに仕上げられよう。通常イギリス政府は総辞職したり、または解体したりするが、その要件は実際に選挙に敗れた時だけにあるのではなく、与党の多数性がある限界以下に下った時においてもである。その限界は弾力的であり、且つ閣議の判断の問題なのだが、更にどんな時においても政治的状況の中の正にその問題要因であった。・・・というのはそのように不十分にしか支持されていない政府が政権に居座ることを許される場合にはいつでも——野党に御せられていることがあるにせよ——、その政府は正確に、その政府が行う行わないについての特定の了解事項の上に条件付きの支持の合意を得ることも時折あるような、そういう意味での多数派性の下にあるように振る舞ってきたということ。類似のこととして、小さな多数派によって支持されている政府は大きな異論を含む諸案件は取り上げられることはめったになかった。もしそんなことをなしたならば、それは政治的に誤った行為であるような何事かとみられた。諸利益または諸原則についての大きな問題を含んでいるような大きな諸政策——養老年金や関税政策といった場合に——は野党または野党の一部との間に暗黙の合意を取り付けるか、または投票で地滑りの勝利を得た後の大きな多数派となることによってか、そのいずれかによって提案され且つ成し遂げられた。もし多数派性が大でないか、または与党が大きな政策について第二次読解で審議を止めた場合には、この政策は継続審議とはならず廃案または棚上げとなったのである。

ところで多数派の意志が法ならば、何故そうなのか？ 標準的なケースについての半ダースほどの精査は——私は思うのだが——この設問は読者に対して暗黙裡の常識の考慮によっては適切に答えることができないということに納得させるものであった。もとより多少の票の余剰をもって乗り切ることを決意している内閣は経常的な事業行為の中ですら自尊心を傷つけられるような失敗の危険に自らを晒すものであろう。もし内閣が異論の多い立法を試みるならば、その立法とは関係なく支持が既に不十分であるとして、それは更に一層に党のもつ諸価値に危険を与えるに違いないだろう。これは真実である、しかし本質的な論点ではない。かつてその喜びを手中に得ることに意欲をかたむけ、(多数派性のための)重い端数と闘うことに没頭した多くの首相達があった。時折彼等は——例えばディス

レイリが60年代になしたように——成功を収めさせえた。しかし、そうした彼等もその仲間達も野党側も共に、そうした手続きを適正ではないと見ていたということが重要なポイントである。大きな諸イシューは巧みに頭数一つで掻きとられた勝利によっては決定されるべきではないと誰もが感じていたのである。議会と国民は先ずはもっと完全に説得させられるべきものと了解されていた。そして上院での攻撃がより一層に成功裡のものでなかったとすると、このことは正確に次の事実のなせる故であった。我々はその機能の理論(**the theory of its function**)と呼ばれてよいと思うものが、正にその問題の考慮に——それはその制度に対し原則上最も荒っぽく反対であるような人々にさえ訴えるものであろう——に基礎付けられることが益々以て累進的に大となってきたということ。

17 今やこの態度は意味深長なものがある。民主主義的コミュニティの下では、少数派の意志が無条件に踏みにじられるべきでないこと、または多数派の意志が無条件に行きわたるのは——少数派各派が単に少数派であることに加えて——他の諸特性、例えば社会の残余の人々には重要でないような単一の利益を求めた小会派であるとか、またはその少数派の欲しているものが道徳的に承認されないとか、等々の場合についてだけであること、といった原則以上の意味をその態度は示している。この態度を行動に移す人ならば誰もが、投票の都度、抽象的な多数派原則に確信を求めているのである。そうであることの背景として、一方ではそれぞれの政治的設問——単純にして信用のできる装いにそれは造型され得よう——に対して良いか悪いかで答えることができるという信念があり、他方では人民の圧倒的多数派なるものは、「共通の善」(**common good**)——それは合理的説得の一直線の過程によって得られる——であるものの上に、それを求め且つ行動することで作られることができるという信念があるのである。合理主義者及び開拓者的な啓蒙思想(**the Enlightenment**)の心理学と社会学——おおざっぱには17世紀と18世紀のもの——の中から、こうした確信の亜流を検出できなくはない。同様にこれらの確信の実行上の適用は、極めて特殊な環境下においてのみ成功裡になされることができるということも検出できなくはない。二つの光り輝く真理を忘れてはならない。たった今、我々はこのことの結論と対面しなければならないのである。政治的行動についての支配的な理論との関連では良かろうと悪かろうと、その理念は確かにあらゆるものの中の最もヒューマンな——しかも慈悲深い——

—理念であり、しかも人間性の最も寛容な見解を採用したものであること、更には政治機構と行動の一般的規範なるものがあり得ようとなかろうと、その規範が実際に殆どの部分が少なくとも一つの近代的な国イギリスで——おおざっぱには19世紀の諸条件の下で——作動していたということ。・・・どこに共通の善が・・・だが社会化は、それは常に民主主義的—非民主主義的なのであるが・・・人々の意志は抽象的ではない。・・・私の脱線は、何故に私が少数派のもつ格別の質について、かくも多く強調したのかを明らかにさせるものである。少数派は——マルクスの見解では——そこから社会主義の不死鳥が飛び立つものである大革命のさなかで、必要とあれば権力によって払拭させられるであろう存在であった。もし私の解釈が正しいとすれば、そうしたい者は誰でも、マルクスは社会主義者と同じく真正の民主主義者であったと考えるように自分の主張を構築することができるのである。更にその場合、マルクスは今日のあらゆる社会主義者の信条の聖なる守護者であったのではなく、社会民主主義者の信条の——それだけの——聖なる守護者であったということになる。私自身はそこまでは行っていない——私は自分の解釈を言い張ってはいない。彼の書いたもののいくつかに、特に彼の書簡のいくつかに、その軌跡が見出される。それは疑いなく様々に解釈され得るものである。その上で私は——それでも尚私の見解を良しとするものであるが——マルクスがもし今まで生きていたら民主主義はブルジョワジーの幻想だったということを見出していただろうと思っている。私の推測は極めて単純なことに基づいている——何となれば、ある意味でそれは真実なのだから。しかし私はマルクスが考えていたもの、または考えていたであろうものが極めて重要という訳ではない、とは留意してはいない。重要であるのはどこでそれがプラクティカルな諸可能性と符号が一致させられるかということである。社会主義者達は民主主義を投げ棄てているのだが。

(3) 民主主義の概念についての雑録

摘要

人民の自己決定、如何にそれは根拠付けられるものであるか、及びブルジョワジーのどんな動機の中に見出されるものであるか。人民の、人民による、人民の為の、は民主主義の概念としては単なる形式であること以外には何事をも意味していない。その時代の目的論的教説が、いくらかの理想主義のもつ尊厳性を実際の諸行動に対して、乗り合い的アトラクションとして与えるために用いられた、ということである。統治権の究極の価値とそれを代表するものの移転・・・そのもとの意味合いは権威の委譲である・・・その場合、民主主義的方法は鋭いタイプのものでなく且つ個人主義的タイプのものであり、個々人の意志は人民の意志に整合させられる。・・・人民の意志なるものは帰するところ政治力学の産物である。・・・何等かの哲学からの演繹ではない・・・選挙権者の投票をめぐる争いと合意を通して・・・多重的及び競争的リーダーシップ・・・そのために要求されること、第一にどんな事態にも引込み思案でないこと、第二に彼等自身、人民の為に資すふりをするタイラント達には反対の立場に赴かしめること。・・・自律な意志を提示し、その上でそれを理想として標示すること。もし単純に諸々の圧力や妨害が取り除かれるならば、そうした状態は人々をして真正の民主主義的態度を採らさせることになるや否や・・・同様にそうした経済は全ての人民に向けられた諸利益の中に存在するや否や。権力と数の上での強さは、自由にして自律的な投票だけの下にあるものとして、民主主義下では同義語である。・・・彼の信条からの投票の決定の中にある個人的参画の構造的自律性・・・しかしマルクスによる荒っぽい警告がある、すなわち、社会主義的民主主義だけが真正の民主主義であり、ブルジョワ民主主義は尚民主主義たり得ない。・・・しかしながら、産業的分野における統治権は、経済的能率の確保のためから専制的権威とならざるを得ない、民主主義的社会主義は幻想である。・・・その他

(編者)

IV—(3)—1～44

民主主義の概念についての雑録

1 社会主義的政治学についての歴史的概観はペルンスタイン迄のところにのみ行われる。・・・

このことを民主主義と連結して仕上げることは困難・・・

民主主義というテーマは社会主義の諸可能性(Möglichkeiten)と社会主義の展望(Prospects)の幅広いキャンパスの中におかれる一個の単なる間奏曲となるだろう。あらゆる諸部分——マルクスもまた——が視界の中におかれることができる。この関連でニーチェもネオマーカンティリストといった者も重要な者となるであろう。・・・

戦争、宗教といった政策に対する他の事柄等は民主主義的方法を社会主義に導くのでは。・・・

個人的責任を信用しない経済学者は、依然、民主主義者ではあり得ない、更に民主主義者は剃刀の刃を合理的にもちいることができない人々を、依然、信用し得ない。

2 1月9日の午前、私が祈りから離れた時、私の頭にあったものは？・・・戦争景気——その余波もない！

そしてその無駄(浪費)に対して意を払おうとする社会主義についての留意は・・・どこで・・・

民主主義は理想的なものを締め出す一つの方法である(Democracy is eine Methode, das schlieszt aus, dasz ideal ist.)

3 恐らくは一個の完全なものでもある良き言い回し(Wendung)があるのでは、——あらゆる教義と視点を許容することを要請できるような教義に到達させられた民主主義が社会主義である、ということすらもが尚、疑問であろう。

これらの事柄が死んでしまっている場合には、帰結は明らかである。・・・それではそもそも社会主義の多数派性なるものがあり得るや、そのように社会主義への民主主義的道程はあり得るや？ (我々はⅢにおいては尚、

検証していない。) イエスである。a) 偉大なる勝利、b) 既に時の充分性の内にある——我々自身の行論がこの可能性を論証している。・・・

4 民主主義についての議論・・・

どんな設問が、我々は民主主義の諸問題をめぐって、グループ分けできるのか。これに対しては、しかし、より正確に見据えるべき何事かがある、ということが必要である。・・・

究極の価値なるものはあり得ない。・・・万が一議論がその展望(Aussichten)に即してなされるとなると。・・・ある意味での——自由を伴った——政治的民主主義は資本主義と共に滅びるであろう——競争が滅びるように。・・・a) 社会主義的民主主義だけがそれをなし得るといふ主張、b) 移行期問題、どこで・・・自由と民主主義、次のようなことではない。・・・

定義するよりは固執する(adhere…張り付く)ことの方がより容易。・・・ルールではなく政府である。・・・人々の開陳することの諸困難——それが民主主義ではないからと。・・・

価値の定義は我々を助けるのでは。・・・(?)ラッセルを見よ、しかし一つの特定の概念のための理論が発展させられるという重要な事実がある。・・・権威(?)(κ ρ α τ ο ζ)の委譲・・・代表するものの変更(Repräsentation transfer)・・・人民と同様権威(?)(κ ρ α τ ο ζ)も・・・～の意志・・・人為的に規定されている！・・・本来の理論では、それは高貴な人々(edele Volk)である。・・・「人民」(the people)・・・我々はそのに革命的ブルジョワジーの見地(Einstellung der revolutionellen Bourgeoisie)を支持し難いとみるものである。それにしてもどうして支持することが可能なのであるか。・・・

他の理論・・・その場合も尚、社会主義である。・・・ある意味では常に民主主義であり、他の意味では、～のための善と、～による善である。・・・

「人民」(多数派)が彼等の利益になる筈だと考えるところのもののために、監督者を指名し、且つ指導者を召喚する方法。・・・ベルンスタイン、何が出てくるというのか。・・・

5 民主主義は、程度はどうであれ、鋭いタイプではない。・・・

基本的なこと、全体としての社会機構が諸々のルールの存在に反対に転じるならば、すべてのルールを欠くということになる(No rule if Organismus as a whole turns against rules.)。・・・

君主制や貴族制を別とすれば、今や民主主義は区別されるべき全てを失う。・・・

6 誇張されている諸事例・・・それらが——そこでは理解に欠けているようなケースにおける社会主義の下では——存在しないとは必ずしも言えないであろう。・・・それにしても、そのうちのいくらかは流行にまで至ったとしても研究の中では消えているのである。・・・帰するところ、明らかに自らの面倒をみきれない病理学的な天才がしばしば成功することがある。・・・

ルッソー主義者(Roussaunian)は不平を言う根拠を多くはもたない。・・・これについては情緒的空想物語(sentimental romance)——恵まれていないことについて語る——としておく。・・・

7 民主主義・・・多重的リーダーシップ(vielfache leadership)?・・・複数政党(meher Parteien)?・・・批判(Kritik)?・・・それはソビエトにもある。・・・

他方で民主主義は人々が他の目的には資したくはないということの要求である。そしてこの意味で現実に個人主義的—資本主義的なものである!・・・

8 人々は、様々な民主主義的過程に対し様々な結果を考えているので、世界秩序の一部を理解すること様々なものがある。だがそれはそれと結合した諸目的に由来する。・・・私はそこで次のように言うことができるのでは、すなわち、他の目的への顧慮を我々が払おうとするだろうかを問わず、唯一の価値ある方法として民主主義をとる時、方法として理想的方法であり得るには如何に程遠いものであろうか、と。・・・

しかし、ここにおいて既に、それは歴史的にのみ存在し得るのだというこ

とが明らかである。a) 結果が人種や構造といったものに即して同一のものとはならないことにより、b) それを定義なしに検討することは常に可能という訳ではないことによって。・・・我々が上記理想について解明しようとするならば、私はこの国(アメリカ・・・編者)とこの時代につき考えることができるだけである。・・・

魔女狩りといったことは、多分もっと後で。そこでは良き、しかも高貴な人々が示されるであろう。・・・だが当面、私は状態をあるがままにしておく。・・・

そこで今一つの理論ということになる。・・・続いて機能の諸条件と民主主義には適してはいない事柄との関連では、非能率が前面におかれるという法則が来たる。・・・更に続いて、ひどく緊張して組織された国家では(in straff organisierte Staat)その可能性がないということが来る——社会主義と民主主義——、諸要請と移行諸過程についても？・・・

その上、他の思想潮流(Ideenströme)が？・・・民主主義と自由・・・、民主主義と戦争については、民主主義と宗教については、どこで。・・・民主制(Democrasia)における他の思想系譜(Gedankenstrom)についてはどこで。

9 人民の自己決定(self-determination of people)・・・2～3の制約があることは明らかである。・・・ある小規模集団は、彼等が大規模機構の中から一人の人物をつくるようにして、デビューすることができる。・・・部分的には国家は途絶えることを望まない(Staat nicht erliegen wollte.)ことからしてだけからも、それはそうである。そうだから国家は実際それに適するように構成されることになる。・・・国家は何者をも創出しない(State create nothing.)という章句は意味が乏しい、常に個人が存在しているのであり、それは市民の中に存在し得る、と言っている表現なのである。

しかし何がそれを基礎付けているのか？ 果たしてそうなのか？ 何故にそうであるべきなのか？ それはブルジョワジーの発見というだけのことだったのか——あるいは動機か、または何かがそれに付け加わったものなのか？

アメリカ人の中にはこうしたものが60あり、全体として一個の意味をもたせている。・・・(人民・・・people・・・の自己決定は)、当然のことながら、小規模諸国の諸条件に対しては軽からしめる(容易ならしめる)もの

である。何故ならそれらの諸小国はギリシャ的構造に対するそれとは異な
ったケースであったから。・・・資本主義は諸問題を解決する、そして今
や居住問題である。・・・何故にそれがかくも困難なのか——工場の中
では試みがなされていないから。・・・労働組合事務局はその最初のスト
ライキの時、プロフェッショナルの立場をとる。どのように利益が——労働
指導者の利益と労働者の利益。・・・

10 社会主義こそが唯一真正の民主主義である、とする社会主義者達の
主張は本来どこで？・・・そこで考えられているものは何か？・・・経済
民主主義とは何か？・・・全ての人々に利益を囿ることにある経済と
は？・・・あるいは給付の民主化——政治の出番。・・・

あるいは単純に、真正に民主主義的に振る舞うことを不可能ならしめて
いる圧力を取り除くことか。(Einfach Druck weggenommen, der Leuten es
unmöglich macht, wahrhaft demokratisch sich zu erhalten.)・・・

でき得る限りエッセイⅢ(第Ⅲ部・・・編者)で！ あるいはⅣのⅢで・・・
奢侈産業に従事している労働者はその生産物の販売者である。そして社会
主義は、彼が労働者のために生産することになるであろう状態に対応する
としても、彼がそれでより良くなるであろうかどうかは定かでない。Ⅰに
おける階級意識云々のごまかし！・・・

11 平等に対応した選抜(選択・淘汰)などはない。・・・あまりにもあり
きたりで合理主義である。・・・二つの新しい概念・・・

社会心理、階級心理、素朴な思考、小児病、しかる上で多数派性について
——これらの、及び他の諸問題は、恐らくはまた私の理論の中にある新し
い概念をもって論じられよう。・・・他の仮定・・・今一つの意味におけ
る合理主義・・・

人民の意志という言葉(the term will of the people)に我々が関連付けてい
る現象そのものが実存するものではない、ということこそは必ずしも意
味するものではないのはもとよりである。国家の意志とは区別されるもの
として、政治の相互作用の産物(the product of interaction of politics)に順
次なっていくような然るべきものがある。・・・それはこれらの選抜をも
たないのでは。・・・

先ずは第1に要求されること・・・どんな事柄にも恥ずかしげでないこと・・・

第2に、我々を脅威の上に一般的に赴かせるのに充分であること、脅威的僭主者達(threat tyrants)は——病的なタイプ以外は——人民の為の統治であるように見せかける。・・・剥ぎ取ると独裁(discover and dictatorship)・・・シーザー、ナポレオン・・・

自律的意志の理論——くわえタバコのことだけを解明。・・・

個人主義と集団意志、密接にリンクしているが、(前者は・・・編者) 後者の与件ではない。・・・教育と情報・・・それらを仕上げる諸手段であるのみ・・・我々は行論がどんな民主主義に対しても反対を切り捨てていることを見出すのみである。・・・

個人的諸意志と集団的諸意志と国民的諸意志・・・そして第3が国家の意志である。一個の理想として自己表示する。・・・

1 2 管理された経済——管理された思考(controlled Economy——controlled Thinking)・・・

しかし、たとえ社会主義が民主主義を意味するものではないとしても、だからと言って社会主義が非民主主義を当然のこととすることを意味するものでもない。・・・実際には・・・

1 3 本来的に民主主義は、いつもそうであるのか、または全くそうでないのか(immer oder nie)である。アメリカのフレーズ、指導者・・・

社会主義は一個の巨大官僚制として考えられるべきである。・・・労働者は上向し得ないということ——如何に多くのスターリンがその場合存在することか?・・・階級理念・・・

1 4 貴族制的選出について・・・

1) その全体が特別に重要である(しかも、私が言っているような意味で興味無きにしも非ず、である)。・・・それは自らの長所をもつ。・・・

2) 過去における諸結果と現在における諸帰結・・・事業執行部(business

executives)の設定・・・。

- 3) 将来には恐らく非常に重要となるであろう——ボルシェヴィズム
- 4) だが、しばしば民主主義の妨害はあるだろう。

1 5 貴族制的選出は指名によってずっと拮げられる。

- a) 指名(appointment)が必要であることが強調され、しかも民主主義的方法が100パーセント貫徹されるものではないことが自覚されている。・・・
- b) それは仕事を民主主義的にすることを大きく助ける。
- c) 民主主義がそれをスポイルする可能性はある。・・・スポイルシステム(spoils system)の洗練された形態・・・外観に基づいた比例配分(proportion Aufteilung auf Anschauungen)・・・
- d) 競争試験をもって行われること——行われ得る限りで全く正当、しかも経験ある人の手で行われるならばテストは知識の体系以上のものであり得る。・・・もう一つのテスト・・・試験用紙の中には文化と個性がある。

1 6 正義(justice)・・・個人的諸機会の自由と平等・・・

自由、それは闘い取られなければならない。・・・

(社会主義経済のための・・・编者)多数派性は——掠め取られた場合以外には——展望し得る期間内に期待し得るところが全くない。・・・断念(Resignation)、しかし状況はそれほど悪くはない。・・・そして、現実にその日が来るとい希望はある、そこではとりわけブルジョワジーが含められ、しかもどのように機構が運転せられるかをも含めて、一つの多数派性が成立しているという日である。・・・このことについては第Ⅲエッセイ(第Ⅲ部)を参照されたい。・・・更に我々は何故に民主主義的要素が少なければ少ない程うまくいくのであるかを常に見据えている(Wir sehen, eben, warum um so besser je weniger dem.)。・・・しかし本質的な対立(社会主義の理念に対する・・・编者)はないのでは。・・・更に能率が確保されないならば、時の充分性があつたとしても、何事をもなし得ない。・・・今や社会主義を意図する者は民主主義者であつてはならない(スターリンの正当化)(Wer Sozialismus jetzt will, muss nicht Democrat sein

(Rechtfertigung von Stalin).)。・・・しかし意志が創出されるのならば——それぞれのタイラント達は、彼が自信をもっている場合でも地域に関係することよりも以上のことは言い得ない。・・・

17 民主主義の諸箇条(the democratic lists)は例外なく人気のあるルールの諸制限——それはせいぜいのところ、そうすることに足るだけのものをもっていたからなのだが——によって特徴付けられている。社会主義と社会主義者・・・実質的イシュー——人間存在は双方に対して一つの立場を採り得るかどうか。・・・それは扱いにくいテーマ(die heikelen Thema)ではある。・・・

ヒットラーとスターリンは、彼等が最終の真相を知っていたが故に、成果をもつを得た。・・・

ⅢまたはⅣにおいて、プロレタリアに対する独裁を。・・・マルクスは人民の好みに由来する章句(phrases from the people's hobby)によって醜くなった。・・・だが信条(creed)は残されており、それをもつ者は次のように言うことができる。社会主義者達はそれが自分達にとって本質的な論点(Punkt)ではないとすることからして既に原罪の下にあるのだ、そして既にこの意味で社会主義者は民主主義者ではあり得ない！！と。対立はあり得るが、だからして他の何者かがそれに対し一層重要だということ。・・・

18 ゲティスバーグの演説(Gettysburg address)は言う。

「我々の父親達はこの大陸の上に自由についての自覚をもち、且つあらゆる人々が平等に創出されるという宣言に捧げるべく新国家を前進させてきた。」・・・「我々は人民の、人民による、人民のための政府が地上から滅ぶことはないであろう、という問題を高度に解決した。」・・・

76年7月4日の独立宣言も、同様に、曖昧な命題をもって構成せられた。そして等しく何事をも意味していない。・・・全ての人々が平等に創出されることは自明であり、彼等が創造者により譲渡し得ざる諸権利を賦与されたこともそうである。——但しこれらの諸権利を確実にするには、そうした諸権利は、全体として、政府の構成からして、その正に諸権力をもつに値する人々の間に分かち与えられることとなる。その場合これらの諸目的の破壊が善の形態の中に入り込んでくるようなことにもなると、それを

変更したり、または廃止したりすることが人民の権利だということになる。——更に存在するものは生活を与え、幸福であらしめ、またこれを追求させるような、そういう経済であるということも自明である。・・・
前記の章句で、最初のもは詳細に述べるに足らない形式上の前書きであるだけであり、しかも尚これらは歴史家にとって考慮され得ないものであり、行動のよく知られた習性の中に具体化され得るとしても、修辞と心情である。・・・

19 ルッソーの教説は理想主義と行動の実際についての寄せ集めの見世物を与えるために用いられただけのものであった。1773年のベルリン新聞に(in Berlin Gazette)寄稿されたサミュエル・アダムス(Samuel Adams)による2通の書簡——先に米諸州のことに言及し、その上で議会に対し民権条例(Bill of Rights)の制定に注意を促している。イギリス駐在の大使をもっての表明。・・・ここには軍隊にもなり得べき抑圧者達がいる、如何に独立国家とは離れていることか(それは印紙条例から生じてきた)。1673年12月に絶頂に達した茶事件(a tea affair)。悲嘆を捻じ曲げることは血に対する非人間的な渴きの表示であったろう。茶は当事者の最悪のものであったし、和解的方法の範囲外にある全てであった。・・・
1779年のアメリカ大陸議会(Continental Congress)は一般法からの適用除外を要請した。・・・議会の権能(Authority of Parliament)は次の3つの根拠の上にあった。a) 人性についての不変の法(immutable laws of human nature)、b) 大英帝国憲法、c) 植民者の教会。・・・人間のもつ聖なる至高の権利(sacred rights of mankind)、——それは生来のものであって、且つ変更し得ないもの(inherent and indefeasible)である、ブラックストン卿の法学——絶対的諸権利——生活(life)、自由(liberty)、財産(property)、それに結果としての権利。・・・生活、自由、それに幸福の追求、何千もの政治的諸権利は文化的なものではなくして、議会制度、すなわち憲法、すなわち慣習法(common law)なのである。・・・
植民者達は狡猾に(virtually)議会の中に代表権を得た、とイギリス人は言っている。これらの制定法がどれ程に欺瞞に満ちたものであったか。与えられた集会は個人によるか、所有者の「代表によって」かを問わず、比例性をもつことができなかつた。

20 南北戦争(Civil War)について。・・・広くはアメリカ独立の補足・・・イギリスに対抗するヨーロッパ連合やあらゆる軍事的諸困難が克服されたとしても、植民地はそれでも持続して支配していくことはできなかったであろう。占領をめぐって保たれてきたもの、それは植民者によって受け入れられた平和裡の行政に移行することを可能とさせたのであろう。西部では要するに妨害されずにありたいとしても、それを他の目的に資そうとする意図はなかったのであろう。・・・

分離することが欲され、実際それ故に移住がなされた。・・・それぞれの理想が発展させられ、実際に英国戦争は大部分イギリスの統治を消失させることが為のものであったのが正確なところであった。・・・具体的な利害関係はさほどに明瞭ではない。しかし他ならぬ連合(union)への形態が一般に異なる諸評価をもたらした。・・・諸事情がそのように設定され、しかもそうしたことが自ずと安定化されるや否や、帝国の中のメンバーたることによって役立つようなメジャーな目的乃至は利益はアメリカ人達にとって何物もなかったのである。・・・道徳的及び社会的結合(bonds)においては極めて乏しかったし、しかもそれは全く当然のことであった。・・・

a) 諸々の苦情と「権利」が用いられたこと、b) 時代の章句の中に愛着をもったこと——但しそれは多くの意味をもつものではなく、たまたまの一致だったのだが——においてそれらは何ら告げていないことは明らかである。・・・それは理論に資した。・・・

21 1775年のジョージⅢ世治下のイギリスで民主主義があったという含意がある。アメリカ人はそれを好まない。彼等は不正義(injustice)と呼んだ。・・・事実上大司祭の如く。・・・

提起、民主主義を略述することは鋭くにはいかないのが常である。しかもその中で——それに向けて——「偉大なる大衆」に直接的影響をもつ方法や程度の問題でもない。・・・彼等にとって民主主義は一個の方法(手段)ではない(For them democracy is not a means.)と。そのことも指摘し尽くすならば、どこに自由について？ どこに正義についてが？・・・関心が多くもたれるところ——選択肢がない。・・・選択肢と民主主義は、諸ケースが明らかに優越してはいないことよりも一層明白な関係(association)をどこに招来するのか。社会主義がその原因とはなされ得ない。多数派性がない。・・・民主主義的移行による社会主義の可能性はあ

る。だが非常にうまく働くことはないだろう。・・・指名(appointment)・・・常に自らの原理を鈍化(abstumpfen)させることが必要とされる民主主義を補完し改良する。・・・民主主義と資本主義は歴史的に相互依存関係をもつ。・・・有効に?・・・(?)共和制・・・但し論理的には・・・職業的政治家(Berufspolitiker)・・・

今日の共産主義者達は詭弁を立て、しかもつまらないことに時間を使っている——但し人々が何故に彼等がもっと時間をかけないのかを示し、且つ論争を挑む場合。・・・意図していることを告げ、考え、書くことの自由、それは社会主義の下ではあるのだろうか、因みに資本主義の下ではあり得る。社会主義の下での可能性に対しては、私は以前から事務局に居ることに甘んじている一人物の指導の手を信用しているものではあるが。・・・

22 何故にもっと速くならないのか、成長しきった民主主義は世界の正常な状態であるのではなかったか。・・・「選抜(淘汰)」が既成事実化し、そして投票をめぐる競争または競争的指名によった選抜(淘汰)の中に支配(kratein)を膨らましきった。そのようにして「コントロール」と合意も・・・民主主義は政治としては多くの規律をもつ。・・・

正義規範集(die Js code)、第1巻、15頁 目標(Goal)と方法(Methode)!
・・・244頁、一個の内的基本律が政治的権力における独占と競争についてのみ?・・・ワルトハイマー(Wartheimer)の規定について、270頁、が極めて重要!!・・・「カリカチュア—」273頁——ただ一つ、それは現実であること。・・・しかし、より重要なことも多い、民主主義は善一般であり得るか(ob democracy “good” überhaupt möglich ist.)、ということ。・・・読者にそれにつき判断させるためには、それが意味するところのものを議論するべきである。・・・次のようになすことはできない、本質的に言って何が良く何が悪いかを告げることを除いてそこから何かを告げること。・・・

権力と数の力は民主主義では同義語?・・・如何様にして民主主義はある小さな少数派の過大評価に至るのか——過大評価の本質的契機は選抜(淘汰)の中10%といったところがおおざっぱである。・・・合意による善もまたこの他にもたらされよう、その場合充分に同じく民主主義——尚手段であるが——である。・・・

新聞報道の自由——「正しく」(“rightly”)しかも「正直に」(“justly”)投票する、すなわち、そこにブルジョワジーの意志がある。・・・これは資

本主義系の新聞による主張である。・・・構造的に別であるところのもの
277頁、出来ることに反対してではなく、不正義に反対してである(**nicht gegen kann, sondern gegen injustice**)。・・・合衆国とフランスは全くそれぞれである。・・・277-8頁は、他の国のルールに対して反対しているということで、非現実的である！・・・不正義に抗する治療は、他の側からするとかかわりのあること、である。・・・「不正義」に至った場合、その場合、真直に民主主義—君主制、人民の「開化せられた」割合、更には——さなくば単なる手段に過ぎなかった——正義と理性の中心的理念に至る、というのではない。・・・政治的並びに社会的な民主主義、それは言ってみれば政治的諸方法がどんなところにも適用できるものではない、ということとは別なことである。・・・価値のすり替え(**Wert shift**)
283頁・・・それは仕組みに即して及び成果に即して論じられるべきである。・・・諸悪から離れて自由に投票をする意思決定の中に個々人の参加の構造的自律性(**strukturelle Autonomie**)がある。・・・選択(選抜、淘汰)制理論(**Auslesen theorie**)は利益に由来して投票することそれ自体を構造的に意味深くさせる。すなわち、人は人々でなければならず——そしてそのようにして諸利益を貫徹させる。すなわちそれが実質上彼の民主主義なのであり、しかもまた「等価性」(**Gleichwertigkeit**)をも必要としない。
変異の破壊(**Ravage of variation**)・・・アメリカはその場合、新しい要素であり、一個のアメリカ型のタイプである。フロンティア時代についてはまさしく理性的(**recht vernunftig**)である、283頁、と結論付けられる。そこでは、理念的なものは何もなくして、あるものは諸環境であること、が含意されている。確かに、結論に即して、辺境的緊張(**die frontier strain**)が実際にある——民主主義は問題が実質的に何であれ、大きな緊張を作用させるということ。「真の民主主義は3つの自由以上のものを記録する」と。・・・3つの諸態度について、283頁・・・正義の法廷としての公衆(**Mob als court of justice**)！！ 公衆は悪事をなし得ない。唯一つ民主主義システムの逸脱がある。それがファシズム(**Faschismus**)である。・・・本来的に世論を超えたものでもある。・・・民主主義と調和・・・民主主義と諸権力の分割・・・職階的構成(**hierarchical Struktur**)と個人的諸論点281頁・・・そしてその場合既に干渉が入り込んでいる。そしてその場合あらゆるきれいごと(**all die schönen Dinge**)が来たる、279～80頁、更に本質はその場合、生活に対する諸態度である——甚だ見事、但し民主主義ではない、とるに足らない(**slight of hand**)。・・・開かれた個人主義・・・フェアプレイ・・・

1) 正義(justice)、2) 個人主義の自律性(Autonomie des Individualismus)、3) 平等性(equality)、4) 自由(liberty)—レッセフェール(laisser fair)、5)自由(freedom)—寛容であること(to toleriert)但し危害無しに(aber nicht harming)・・・但しこれら(2～4)があり、1)は第二義的に・・・

23 民主主義の下で忘れられてはならないこと・・・

1) 国家は人々の意志を導き、しかも歪曲することを試みるということ。・・・婦人有権者連盟(Frauen voters league)をみよ、更にさもないと平衡が失わせられる、というような行論をみよ——ヒットラーもまたそれ以上のものではなかったろう。・・・

2) ラッセルは民主主義を単純に君主制と陰謀のある法廷(an intriguing court)に対立するものと理解していた。・・・多重的リーダーシップ(multiple leadership)、競争的リーダーシップ(competitive leadership)。

3) ジェファーソン型の民主主義(Jeffersonian democracy)に対しては当時の——アメリカ「人民」の変化しつつある意味としての——社会構成だけではなく、当時の技術——帆船で航海し、電信もラジオもない——のことも考慮することが重要である。・・・

4) 歩一歩、a) 人民の意志なるものはない、b) 個々人の諸意志に対して区別されるファクトとして手持たれなければならない!・・・それはまたリーダーシップ並びに多重的リーダーシップとの総合関連の上で重要である。・・・

異論の屈折についてのこれらのおかしな諸問題は、どのようによく考慮されており、しかも適正に導かれているか。・・・更にこれらのフレーズはアメリカ人でない者の活動からきている。・・・更に民主主義者はいつもその諸原則に即して行動してはいない、ということが重要である。・・・知識人についてはIIかVで、干渉主義はVで。・・・

24 そして戦争(war)、国家(Staat)、非干渉主義(non-Interventionismus)、それにあらゆる他の事柄に即しても、またそうである。・・・老婦人の平和主義(Altweiberpazifismus)は今や社会主義

がかつていつもそうであったという意味での平和主義である。・・・そこでの、「職業上の利益」(Geschäftsinteresse)は安泰要望的(für Frieden)である！・・・ここでか、Ⅲにおいて・・・民主主義は一つの方法であると既に述べた。・・・

25 1) 宗教——キリスト教的博愛主義の血・・・教区民の招集・・・万端に通じた聖職者(universal priesthood)・・・2) 第2——喜ばせるフレーズ・・・3) 理想とは遠く離れているか、または自己矛盾的な状態(selbst entgegengesetzter Tatbestand)であるのか。・・・アメリカ型の独立——ここでは恐らくは分離(Sezession)が？・・・そしてジョン・ラッセル卿・・・4) 個人的な意思と、ある望まれた人気ある意志が近似しているような諸条件がしばしば問われる。・・・スイス・・・安穏な環境、安穏な人々・・・大きな決定における最悪の場合、事後的には自由である(herunter frei)——分離と世界大戦——・・・どこで南部が？ 憲法との比較・・・

26 ある一つの場所に結び付けられた資質と存在の意識。・・・フローレンス——そこにある家があり、ホテルに住んでいる。・・・(マキャベリ？・・・編者)

指導者の選出(選抜・淘汰)、しかし、a) ある基本的な弱さを留めていること、b) ケースはそこで諸徳性(virtues)に頼ることになる。・・・それを欠いた指導者の選出。・・・

はっきりした問題であることが重要である。課題の設定、失業は多くの場合、容易に解決されるべきものである。人々が望むものは人々に対する自由であり、しかも規律を伴った結末をもって守られていることである。・・・審判は周知のこととして他のルールをもたねばならない——周知性の意味と民主主義。・・・民主主義は政治家のルールであり、言ってみれば常に統治者達の選出(抜)の一方法(eine Methode der Auswahl der rulers)である。・・・誰もが統治者として名乗りを上げることができる——それは民主主義諸政党の顔として既にかたちづくられてきたものである！・・・更にそこでは許された手段によっている限り妨害されることもやむを得ない。・・・プロパガンダでは他の事柄が告げられるのが常であ

る。・・・しかし誰もが妥当としなければならないような善は単純に単純な意志の前提である。・・・そうでない場合には、そもそも意志などはないのであり、意志もないが企みもないという結末を伴うような集団行動の完全な構造でもある、ということ。・・・そしてそれは刷新せられた理論においても残される。・・・一国は何事をも目論んだり欲したりはしない(A country never means or wants anything)。・・・どんな種類のものであれ、常に一つの原理に由来する尊厳はあり得ないのであり、革命につき予言されたものがその全てである。(Gar kein Dignität von was immer für ein Prinzip aus und ganz divined von Revolution.)。

27 1) この節では、要するに単純に適応を——どのようにそれらが現代生活においてあるかとして——考察することである。更に生活の現代的諸条件——神経過敏についてのルッソーの魅力——に対する適応人格の病気(maladies de la personnalité)から区別することである。・・・

2) その場合、知識人達の独裁——それは移行の論と衝突しはしない！——である時、指導者達について——というより彼等の不機嫌について——注意が払われるべきである。・・・且つまた比較をともなつて・・・更に労働者は自由の喪失には適応がなされてはならないのでは？・・・[自由と民主主義については、たとえ概念上は存在していても、消失することは驚くべきことではない、ということをも最早繰り返さない。——「仕事の安全」の確保がいやが上にもなされる場合に、非安全につきいうことと同じである。]

3) この節が止めにされ、2と4に分割し尽くすのがベターではないか、は疑問である。・・・

28 多数派もなく、少数派もない——同意がある。そしてこれが常に達せられるべきなのであり、しかも常に善なるものである。・・・しかし私が次のように述べるとすれば、それは最早善を示すものではない。すなわち、民主主義に対しては諸君もまた絶対のものではないということ、あるいは18世紀の形而上学的なものからのみ理論の中の厚遇を多分に得ているのだということ、そしてその理論たるや善良な人々を僭奪し(tyrannisiert)、脅しと教説を以て欺き、そのようにして搾取するものであ

ったということ。・・・工業家は援用するだろう。・・・
私が機会主義者として社会主義者達をけなすことに両手を挙げていつつあると考えないように。私は実際的にそれがどういうものであるのかを告げているのである。諸君に対しても。・・・どのようにしてそれはシステムに対する一般的忠誠となるのか。・・・Iの末尾で、この目的の為、我々は民主主義をもっと深く観照(anschauen)しなければならなかったのでは。第1にマルクスとその後継者の位置付けに引き続いて、創られた意志の概念(Begriff des kreierten Willen)を導入する——そしてそれは常に一般的なものとする。あるいはIIにおいてそれをなし、しかも公善(common good)——但し支配(kratein)——が来るまでのところで？・・・Iにおいては尚、民主主義とは全ての人々にとっての手段である(Demokratie für all Mittel ist.)というだけを。・・・
諸君は——N. Thomasのように——社会主義者達は民主主義に対して宗教に対するが如き態度をとると考えないように。・・・意志と選抜(淘汰)・・・その関係が確定していない2つの事柄があるということ。・・・創られた諸意志は抽象的にではあるが論理的に導かれる。・・・「社会主義が防衛的となる？」のはどこで。・・・Vにおいて(社会主義の政治を?)・・・知識人といったものはどこで。・・・階級闘争は本来どこで。・・・

29 追加、多数派でない！——同意である！・・・恣意的に益々狭くなる、国境のように。・・・とりわけ地方的小派閥の行政は悪質(bös)である——南北戦争、中西部——、そこでは完全な諸共同体が問題で、多数派性は歪曲される。ここでは単純にある大きな共同体(Gemeinwesen)がある小さな共同体を管理している。・・・同様に主題に適用・・・重要なのは、経済的平等性だけが現実に民主主義を打ち立てることができるという標語と対置されるのが一層良いと思われることである。・・・あらゆる権力の根は経済にありとする理論がある——だがそれは誤った理論である。・・・しかし地方の経営者や法律家が給料支払日にニューヨークの不在権力者となる！といった状態にあることも事実上誤っている。・・・資本主義的自由なるものは認められない、ということに資するような行論・・・それは社会主義の下でもあり得ることなのだろうか？ あるいは彼等だけのことと言い得ることなのか。・・・ボスルール・・・そして如何に多くの章句や願望が、社会主義はかくも民主主義的であり、万人のための諸機構が作動しているのだ！ あるいは消費者の為でもあると！、という主

張の中に込められていることであることか。それでも喜びを必要とする人は誰もいないのか。だがそこには何かがある。・・・

30 迫害されている人々(*die Leute, die verfolgt sind*)をも含まれることに合意がなければならない。・・・ユダヤ人については、それはどのように行われたのか?・・・それでは社会主義的諸改革に即しては?・・・しかし、それは人民の構成部分(*Glieder des Demos*)の問題ではない。・・・このようにして、多数派原則の上に何が生じているのか?・・・小さな少数派、それはかくも過大評価になっている。・・・低評価の比率(割合)・・・批准(承認)(*ratification*)・・・イニシヤティブ・・・過大評価になっている少数派が考慮される、そして指導的人物がある。しかし多すぎる必要はない。・・・自由投票(*free vote*)と自律的投票(*autonomic vote*)は必要である。このことと統制がプラスされる。そして合意は完全なものとは程遠く、純粋な場合にあつて既にそうである。統制にも拘わらず、指導者は例えば——戦時にはなしで済まし得ないような——状況を創出することができるのでは。

指導者選抜(淘汰)理論(*Führer Auslesentheorie*)は次のような長所をもつ。・・・大きく改善せられた。・・・最早処女懐妊(*virgin birth*)のような背後におかれるあり得ない命題を受け入れる必要はない。

a) 低能者達(*morons*)——病患者だけでなく、愚鈍の者だけでなく、芸術家をもまた含めて——決定に参加させるべきである、とするのは最早不条理ではない。忠誠にあることも必要である。・・・

b) ニグロのウェイトレスをも、他に対する差別の残忍な結果の故からも(*wegen des brutalierender Effects des Ausschusses auf andere*)、含ませるべきだという道德上の原理は(益々重みを増して)必要である。・・・(死刑と肉体的強さについての論考)・・・

c) 各人が十分に原理上の受け入れをなしている、というのではなく、愚かさをもつ人々の忠誠のみがある、と言っている。・・・

d) 一層告げられるべき意味は、人々は諸争点(*issues*)について決定することよりも、どのように彼等が統治しているつもりでいるか(*regieren wollen*)を決定するべきだ、ということである。・・・選出母体の主人・・・
「なんと良い仲間でしょう、コーヒーを飲みませんか」。・・・

e) 民主主義の外交政策は漂流する。・・・世界大戦・・・

f) しかし、私はそこに尚欠落している何物かがあると信じる。・・・但し、

自律的諸意志は・・・但しそれは尚もより良き実現を要求し、しかも甚だしばしばそうである。・・・

g) 比例代表制(Proporz)・・・

民主主義と自己主張・・・君主制におけるよりも一層に可能である。民主主義を区別することは明瞭ではない。・・・民主主義的な選出技術は諸争点を見据えていない。・・・更に逸脱がある場合、その逸脱に対し資本主義が提供すべきものをもっているということが忘れられてはならない——彼等が悪い自動車を生産するか、または零落するか、であったとしてもそれは別なことであるだろう。・・・反対・・・独裁制と民主制の問題はどこで。・・・比例代表制、レファレンデューム(国民投票)、アメリカのプレビスシット(国民投票)——そこでは真の意志と少数派の権利が確保される——のようなもの。・・・

3 1 少数派性を強いられているのではなくして、「ひねくれ者」(“*Querköpfe*”)であるだけの者達も、あらゆる人達に対するのと等しく同様であること。すなわち、民主主義はあらゆる他の方法と同様に、民主主義的であるという限りにおいてのみの「諸手段」ではない。・・・民主主義には得心がいくこと(reasonableness)と根拠についての説得力のあることにおいての信念が所属している。・・・意志に対する尊重・・・あきらめ(*Entsagung*)を意味するものではないのか——それは基本的な困難に行き着く。・・・必要とされる相互関係がない、ということの発見は、本来的にもっと後で——既に述べられていたとしても。・・・特徴を規定することは展示することではない。・・・私はこんな訳で、I—Iマルクス体系のところでは全体としての位置付けをなし、後の議論においてのみ、それにつき指摘するようにしている！・・・だがその場合にも、全ては合意と強制についての全てのことでもあるのである！！・・・

影響、情報、喧伝・・・人々は自分自身のものでない目的に資すことを欲しない。・・・マルクスは、民主主義が一つのブルジョワジー的理念(想)であることを恐らくは発見してはいなかったのでは。(Würde Marx nicht vielleicht entdeckt haben, dass Demokratie ein bourgeois Ideal ist.)

3 2 マルクス・・・彼にとってはブルジョワジー的誠実についての一箇

条(an article of the bourgeois faith)を依って立つ程に重要なものとして受け入れることは論外のことであった。それは不都合にと行ってよい程に大きい共通の土台(a most inconveniently large expanse of common ground)を覆うものではなかった。しかし、社会主義者の民主主義だけが真の民主主義であり、ブルジョワジー的民主主義は尚、民主主義ではないという警告を荒っぽく発することで、どこまでこの困難に対応できるものか、ということを知っていた。・・・このことを我々は先行の部(Part)の中で見届けてきている。・・・

33 経済が管理されるところの統治は企業者(Unternemer)に相当する類似の権威をもたなければならない。・・・外交的に招来せられた災難がどのようなものであれ、それは統治にとっては内政的に位置付けられなければならない。・・・天国という意味での民主主義的社会主義(demokratisch Sozialismus in Sinne von heaven)は一つの幻想である。

34 大きな格差のあるところでは不可能・・・そこでは多数派が枠組みに同意しない。・・・民主主義に対しては——資本主義に比し、全く同じように頻繁ではないとしても——その発展段階が前倒しにされる必要がある。だが議会制的な善(parliamentary good)は立憲君主制の一形態であるだけのことである。・・・民主主義は政治家のルールであるのか?・・・民主主義的過程・・・

35 それでは何が民主主義か。民主主義は競争的リーダーシップ(competitive leadership)のことである。もとより、a) 事実そうであるだけでなく原理(Prinzip)としても、b) 特定のルールに即して、経済の分野で事情に応じて行われている競争のように(nach gewissen Regeln, wie Konkurrenz in der wirtschaftlichen Sphäre je nach)、そうでなければならない。更にこれだけは自由を伴って行使されなければならない!・・・比例代表制(Proporz)に言及するのを忘れていた。・・・アメリカの革命について・・・具体的な目標はある、但し反理想主義(wider

idealism)の性格をもつ。・・・その予兆も・・・粗雑に誇張された合理性。・・・
創られた意志の実際上の是認・・・恐らくは二つの事柄が、すなわち自律
的意志と資格付けられた多数派・・・非自律的—創られた意志・・・
二つの事柄、よく知られた大学の理論を現実化した事柄・・・アメリカ人
達は、今イギリス人達がアメリカ人に願っているように、フランス人を援
助するつもりであった。

36 百科事典での比例代表制(Proporz in Encyclopaedia)・・・

運用についての各追跡・・・代表されてしかるべきもの・・・そのこと、
しかもそれ以外の何者でもないことが明らかである。

しかし、浮動票があったとしても、イギリスではどんな結果になろうとも
政党の独裁はない、偉大なる政体(grosze constitution)・・・しかし、チ
ームワークに赴き、機構独裁(Maschinendiktat)が・・・今一つの方法は
政党リストに対し投票する、その序列は変更せられることができな
い。・・・

但し付記されなければならないことがあるとすれば、これを用いることは、
十分に施行をみた場合、民主主義は自ら失敗するということであり、そし
て骨抜きにされた場合にのみ作動するということである、更に論理的に究
めれば究めるほど悪くなる——そして、それは実際のところ驚くべきこと
ではない。

民主主義はぐずぐずしており、事後的であり休息を必要とする。・・・自
由と平等(それはいつも・・・に対する「正義」である)はどこで、更に社
会主義は純粹にして真正の民主主義(die reine wahre Demokratie)である
という信条はどこで。・・・

37 良き機能、すなわちスイスの小さな幸福はどこで。・・・強力な中産
階級が諸問題を多くしない。スイスのホテル産業は農民に直接的間接的な
利益を与えていることが多大なものがある。ホテルは自分の娘をしてそこ
で高賃金を稼げるよう、提供する。多くのスイスのホテルは村の宿屋から
育った。・・・北欧諸国——オランダ・・・

38 かくしても尚、含意(connotation)を欠いているということの言及が？・・・

修型せられた広告と変わらない。・・・政治家のように嘘を言う。・・・そこで何がなされているのか？・・・嘘を言うことと手を切る？

そして、情報について、「我々は与えてはならない」、政治家は——攻撃に対して脇腹を提示することがないように——諸争点を真直ぐには認知しない。・・・捩じれ・・・ある戦争は民主主義でなかったのでは。・・・老婦人の平和主義(Altweiberpazifismus)・・・人々は暴徒となる(それは既にIにおいて)・・・

どれ程一般に反復の危険があるとしても、そこでは私は乏しい含意について語る、我々固有の世界の代替物が正にそこで命名される。・・・

この意味での自由投票、単純ではあり得ない人物の理解という意味・・・

39 民主主義的な情報は、この究極の興奮と牡牛が闘う雰囲気を示している。・・・

どこで自由について、小グループの自由(subgroup Freiheit)は中世の技術教師の中においてのみ確保された。

諸君は、諸君が何のために闘っているのかを決して知らない。・・・諸君の子孫達にそのように気付かせよ。海兵隊のボートの為——アメリカの自由の為——人々は闘った、ということに嘘があったといった、ということ。

40 ここでは、過大評価にある小少数派の傑出した重要性なるものは全くの誤認である、ということ。・・・

確かに共和国は——だが経済的平等がそれを生み出すのでは、ということと結び付けられてはならない。・・・

(編者・・・共和国はソビエト連邦共和国、傑出した重要性をもつ小少数派は共産党<エリート前衛>?)

4 1 ノート・・・

1) 独裁的諸方法が最初に来るのはより良くはないのではないか、という事は尚疑問である。・・・その疑問はそれにつき、または他のことにつき更に語らなければならないのかどうかに依存する。プロレタリアートに行使される独裁もが必要である。何となればこの階層は決して十分に準備を整えているのでもなければ、他の諸階層に比して成熟しているのではない。とりわけ未成熟であると言えるのである。何故かと言え、煽動による解体——アジテーションが殆どの場合、それぞれの労働及び労働者の秩序をある不正なものとしてさせている——であったのだから。能率についてのイリュージョンもまた存在する。

2) 民主主義の我々の理論が助けになる。ここでは全く特殊に役立つ。この理論は民主主義的社会主義の理論に対しその不条理の部分を取り除く、すなわち、単純な自律的意志(*einfacher autonomen Wille*)や白紙の見解を必要としない、更に生産をその諸目的に導く人々は最早邪魔されるといったことはない。[事物がそれ自体をつくり出す必要はない](*Brauchen die Sache nicht selbst machen.*)。・・・専門家の助言についての修辞学・・・どのようになされるかは充分により早くから検証されることができる。実行上の諸問題は具体的に、しかも容易に解決可能となるであろう。その上決定されるべきことは充分に小となる。可能な文化的並びに経済的な結果においても、そのことがなされる方式におけると同様に。

4 2 前述のところ、多くの反復の危険が(既に I において多く述べられている)・・・結論のところ、それは手を加えられなければならないのでは？ 人間性というものは制度的型枠とふざけているようなことでは救われぬ。そんなことは生意気な小娘(*flapper*)に似つかわしい。・・・そこでは結論をもって終わる、一つの可能性だけが示される。抑制のための更に拮げられる行論は成り行きにまかす。革命は非力者の現実的手段(*das real Mittel der incompetence*)である。どこで成熟は知られるべきか？ 社会民主主義の諸政党のための行論が完全に見落としているものは、勝利を掠め取る試みは唯物論の中では容易に打ち砕かれ得る、ということである。しかし、それは家族と人格の自由を重視するところの、かの民主主義ではない——それは現実に資本主義の秩序に結びついており、言うなれば一個のブルジョワジーの幻想である。それにしても私はどうして

次のことを見逃してしまうことがあり得たのだろうか。すなわち、資本主義における公共の精神(*der Geist des Gemeinwesen*)とは、主観的には文化が民主主義の前提であること、客観的には、——社会主義が最早問題でないならば——適正な客観的文化を導く、ということをして！・・・民主主義に愛着がもたれるところのものは放縦(*Ausschreitungen*)ということである。・・・その事実関係の意味は、そこに機構(*Maschinen*)から独立して人々があるということ、更に合理的生活の大部分は国家機構がどんな歩みをなそうと経過していくということ、である。・・・民主主義、後退(*decline*)? 昔のこと(*reculé*)・・・そうであるとすると、どこにおいても、資本主義は衰退するのだから。・・・

43 人民なるものは基本的に賢く、しかも親切であり——時に応じて笑みを浮かべ——いつも最後には理路整然と條を通すに至る。という人民の「真の」意志にはそうした諸々の事柄はないのだ、と諸君がもし——そうは言っても——言うに至るならば、諸君は実際に次のような信条の宣言をなしているのだということ。すなわち信条は歴史的に民主主義と結びついているのだが、貴君は民主主義の概念の中には論理的には内在してはいないそれ以上の前提(*assumption*)を導入しつつあるのだ、と。諸君は諸君の倫理的な理想をもっているということ以上のどんな存在でもない、——その理想をもつことに諸君は常に自由であるが——、ただ人間の性情についてのいくらかの事柄を言い張っているだけのことなのである、——冷やかな諸事実即した信条と非信条にそれらが馴染み易い(*amenable*)ものではあるが——。而してそれらについての神学(*theology*)はないとなすべきなのである。・・・ルッソー・・・もし諸君が自分達はいずれをも意味付けてはいない、ただ単純に民主主義的政府は——この時代と国という諸環境の下で——自分達に最も望ましいように見える諸結果であると、自分達が知覚するところのものを実現するであろうというだけのことであるならば、私はもとより諸君と全く見解を同じくするものである。しかしその場合、諸君が私と意見を共にするのは、諸君が含意させているものが、かかるものとしての民主主義は諸君等に忠誠を課す諸ケースの全てではないであろうということ——更に言えば諸君は同じケースにはいない友人達を非難することはできないのだということ——であるが故になのである。

4 4 正確にこのことの故に、私は民主主義の規定において諸士の選抜(淘汰)に対すると同様に諸手段の統制に対しても余地(room)を見出すべき責にある、となすことに反対があるかも知れない。しかし、そのコントロールが現実的で、しかも効果的であるその正確な程度に対しては、それは次のような諸要求に似たものとなる。投票は自由である。キャンペーンを張ったり、組織化をなしたり、討議をなしたりは妨害されることはない。これらの諸要求は投票者をめぐる競争による選抜(淘汰)の観念(the notion of selection by competition for voters)のうちにあるものであり、それは帰するところ政府を「解雇」(“dismiss”)すべき議会の権力を意味する——これがグラッドストーン派の教理(Gladstonian Doctrine)である——更に議会を解雇すべき有権者の権力を意味する。

(4) 民主主義を根拠付ける二つの理論
——代表制理論(the representative theory)から
選抜(淘汰)制理論(the selective theory)へ——

摘要

アリストテレスは「民主主義」なる語を良く秩序立てられた共和政体からの逸脱としての一つのタイプを意味させた。民主主義は単に厳格な奴隷制と自由制の間にある何等かの状態と両立し得るだけでなく、充分に特権的な市民の多数派によってなされる特定の宗教的または社会的諸グループからなる少数派の排除とも両立し得る。民主主義のドクトリンの功利主義的父祖達は三つの諸事実を検証することに失敗したままである。第一に共通の善または一般的福祉なるものはないこと、第二に人民の意志なるものが容易に権威への一般的忠誠になし崩されること、第三に明確な判断諸基準が様々な代表へと緩められること。・・・ルッソーの哲学、心において捻じ曲げられることがない限り、一個の輝ける共通の善が誰によっても見出され且つ誰からも忠誠を下命する一般的意志がある、啓発し投票させよ、さればあらゆる紛争と苦難が終わることになる。・・・選抜(淘汰)制理論は人民の代表という理念を犠牲にして委任の理念を採り、議会制民主主義の諸事実も一層現実的に考慮していく。民主主義の種差は、普通選挙の投票をめぐる競争という方法によって、政治的オフィスの譲渡を勝ち取ることの内に存在する。議会の主要機能は選挙権者を代表するのではなくして政府を設立することであり、その過程の中で人間社会の基本的事実である「競争的リーダーシップ」がそれ自身の中に入り込み、そのようにして様々な政治諸団体と政府の間の主導性の正常な配分が真実の光の下に検証されるのである。・・・諸々のリーダー達のヒエラルキーの理論に向けて、リーダーシップとダーウィニズムを一对にするような選抜(淘汰)過程そのものに向けて、指導者達の自己負荷に向けて、職業的政治家と政党の諸機能に向けて・・・もはや代表制理論のもつ不可能とみられる諸仮定を採る必要はない。むしろ人民が自分達を統治する人士達を決定し且つ人民が与えられた代表者よりもより選好する人士達を決定するといったような、そうしたずっとよく受け入れることができる仮説でもって満足するものである。そこで遂に多数派原理に対する一つの合理的な解が提供されることとなる。・・・その他 (編者)

IV-(4)-1~18

民主主義を根拠付ける二つの理論 ——代表制理論(the representative theory)から 選抜(淘汰)制理論(the selective theory)へ——

1 「私は言う」、ユダヤ人達は結果を残忍とさせる原因となるような彼等自身の為、及び、それ故に民主主義的な自制的な為、の双方から保護されなければならない。・・・それと共に比例代表制(Proporz)をもち出すことが重要である。これが比例代表制とアンチセミニズムにおける最良の、または現実的なテストだとみられるからである。・・・多数派＝単一立候補制は民主主義を脅かすことによって民主主義を救う。・・・我々は既に「民主主義」と「意志」について述べてきた。・・・民主主義的社会主義であること自体が、資本主義よりも統治を強化する筈である、一層多くのことがそれに依っているが故に。・・・

イギリスの数学者にして哲学者 W. K. クリフォード(Clifford)は、どこかで、他の人々が意味付けているものであるだけでなく、ある人が自分自身で意味付けていることでもあるものを作り上げることが困難であるような諸主題が尚存在すると述べた。民主主義に対してこのことは極めて強い意味合いで適用される。それぞれのケースにあつて民主主義が防衛または達成しようとしていると信じられている、そして殆どのケースにあつて、人々が民主主義のために、または反対して、——死すか、または闘うか、する時に——現実に死すか、または闘うかを意味付けている、そうした諸利益、または諸理念から民主主義が切離されるや否や、ということになる。・・・人々はその下に理解されるべきものを自覚していないし、しかも同意の最大を得るのに聖職者が正義と自由を説くのと同様のやり方で始めようとする。あるいは我々の同時代の文献から始めようとする！ このようにして民主主義理念は尚改作され、更にまたもや完成されてはいないのである！ 自己学習から始める——あらゆる価値と時代に対する唯一の指針としてのアメリカブランドの推挙の中に、その代償がある。・・・

アリストテレス老を研究することから始めても、助けになるものは殆ど導かれることができない。彼は良く秩序付けられた共和政体からの逸脱(a aberration from the well-ordered commonwealth)として考えられたものの一つのタイプを明確にするために民主主義というこの語を用いた。支

配すること(the Kratein)、統治すること(the ruling)、それに人民(the demos)——すなわち「統治」を果たすべき「人々」の定義である——のあり得るだけの多くの様々な事態を意味するような、そうした言葉を分析することからは、我々は多くの利益を期待できない。

2 しかし、これらの語句の背後に見出される幾ばくかの難しさに、一度は注意しておくことは恐らく無駄にならない。「人々」(人民、demos)の概念に入っていく場合の恣意性の故に、民主主義は奴隷制や厳格な奴隷制と完全な自由の間にある中間的状态——後者は政治的市民乃至はローマ的意味での人民(populus)の構成員であるという認知を含んでいる——と両立できるだけではない。十分な特権を与えられた市民達の多数派の意志によってなされる人々の何等かの部分——婦人、少数派、特定の宗教的人種的なグループといったもの——の排除とも両立し得る。平民(Plebs)、それは次に締め出される階層(stratum)——陶片追放(ostracism)——それは歴史的にだけ通用するものではない。そこでは善の民主主義的形態がそうした少数派に対し保護を提供することが、非民主主義的世界よりも少ないとするような何等かの契機と環境を可能とするような、そうした決定を様々な民主主義がとることができるのである。ただこの意味のみで、ジョン・ラッセル卿——公国を授けられたことを示唆している行政府の長——は19世紀の前半のイギリスを民主主義であると語ることを可能としたのである。精神的に健全であって、誰もが一人として数えることが許され、且つ一人よりも多くには誰もが数え上げられない状態を正常であると思込まれるような、あらゆる成人の住民を包含することを原理とする民主主義とは、このようにして、一個の特殊なケースなのである。

支配をめぐる難しさは更に重要性が大である。ここでも我々は、先ず、何よりも、それ自身官製的である理論——ルッソーの時代から生き残っており、しかもその最も重要な教義において明らかに悪い——に反対して民主主義を防衛しなければならないのである。もしそれによって、取って代わる他のものがないのなら、「民主主義は探求された失策以外の何物でもない」ということになるだろう。・・・しかし我々は事柄を錯綜させないため、単純に次のように述べることができよう。どんな階層をも排除されることのない(白痴)民主主義が(運営される上で・・・编者)一般的で(allgemeinen)、平等で(gleichen)、秘密の(geheimen)選挙権を備えている

場合、——それは特殊なケースとしてのみのことかも知れないが——民主主義はこの方向で実現されるものである、と。・・・私は信じる、私はここにおいてのみ充分にはっきりと描き出すことができるのではないかと。問題は諸政策や諸行政の決定に向けられている人々の全般的な評価や忠誠についてであり、その場合、それをもって全てがなされることのできるような、然るべき代表者によって(durch duly repre., mit denen man alles machen kann)極めて広範な不確定性が尚も入り込んでくるということである。更にその場合、官製の理論——即ち、人々が自らを統治する、あるいは従わせるのは同一の思想である(die official Theorie : people rule themselves or what is subordi. to the same thought.)——が入ってくる。即ち、教示(伝道)され、且つ自由に投票することを許された場合に、彼等が求め、且つ実現する公共の善(common good)なるものは、貴君に対する一個の意志(a will dir)をもつことであり、それは英知、神の声、正義と自由を実現させるため必要なものの全てである、となす理論に帰着すること。・・・そして全ての諸イシューは善と悪との決定を許す、ということになる。

3 第一に、人々(=判断力のある年齢に達した全ての正常の人(normal person)——そうした人々で、しかもそうした人々のみが信託を実現することができる)が合理的に評価し、しかも共通の効果をもって実現することを試み、且つできるような、そうした共通の善(common good)なるものは存在しない。非常事態があり、そこでただ一つの目標だけを圧倒的多数が認めることはある。しかし物事の通常成り行きの下では個人達、または諸グループが——事実問題として——単純に気持ちの上で全ての人々の厚生に懸命の努力を払いはしないということだけではなく、これこそ遥かに重要なのだが、個人乃至はグループそれぞれの見地からすると共通の善なるものは一般に別なものであろうという理由からしても、それ故に懸命に努力を払うべきそうした共通の善乃至は一般的福祉(general welfare)なるものはないことが明らかである。・・・究極の価値に対する布告されていない差・・・第二に、何等かの明確な目標に向かって方向付けができるであろうような一般意志としての物事は存在しない。小さな且つ原始的な諸グループの内では別として、人民による政府(government by the people)はどんな自然的意味合いをも担わない。代表と委任(representation and delegation)が入ってこなければならない。しかしな

がら諸君は全てのことをなし得るというのか、更に諸君が行うものが何であろうと恣意的とはならないのか。人民の意志はこのように現存の政府の形態への一般的忠誠にと容易に退縮させられるのである。この意味においてどんな政府も、その種の忠誠を求めることは、一時的にはともかく、長期に渡ってはあり得ないのだから、非民主主義的形態ということになりさえする。それもまた既に以前に支配により述べられている・・・人々は暗室で居もしない猫をみる。・・・ナポレオン三世の人民投票(plebiscite)・・・「戦時のアメリカ」・・・議会におけるイギリスの事例——人々は自らを有効ならしめる、但し例外的なやり方でのみ、しかも殆どいつも流行おくれのものである。(Leute machen sich geltend, aber nur ausnahmsweise und fast immer post fashion.)。・・・

第三に、共通の善が失われてしまったので、更に共通の善の理念を提供するようもたれていた、はっきりとした判断基準が失われてしまったので、我々はそこで極めて容易に「代表している」(represent)ことを得さしめるような人々、のもつ便利な意志(the serviceable will)をも野放しにしてしまうことになる。もとより私は、その言葉が適正に適用されてもよいような諸現象のあることを否定しようとは思っていない。しかし、人民の意志は多くのやり方で読み替えられることができるのである。そして、かの魅力ある実体(that glamorous entity)は民主主義的忠誠を命じるものであり、常に明白である何物かであり、更に倫理的尊厳を要求するものであり、その上、それを除くと本質的に「正に善である」(just good)であるとして認知される必要があり、その他のものは何もない、といったものなのであるが、——その一方で、その魅力ある実体は人々が同じこと——それは功利主義的な「理由」によって認証されるものなのであるが——を欲しなくなるやいなや取り返しがつかなくなる程に失われてしまうということとなる。

4 功利主義に対する全土壌といったものについて・・・民主主義の教義の功利主義的父祖達がこのことを見出すのに失敗したのは、その環境の故である。様々な文脈の中で再三強調されたことではあるが、彼等の誰もが——若い方のミルは、幾分か疑わしい例外として——社会のブルジョワ的枠組みについての本質的な変化のあることを、由々しいと言ってよい程に、考察しなかったことのせいである。・・・

(そうした実体の)魅力が失われたのは、道徳的承認を欠くものは誰もいないであろう(dasz niemand will keine Moralsanktion)、ということの帰結なのである。・・・内容が失われたが故に・・・人々の叡智と徳性はどこに?・・・合理主義は過大評価されてしまった——多数派性の真の承認(true sanction of majority)はただ正義が実現されることであるということ。少数派は道を誤っていることをそれは意味しているのである。そして全ての一人が一人としてカウントされるべきなのである。・・・キリスト教的要素・・・そこでこれらの内容なしにはこれらの人々の意志も、それに対する承認もないということになる。・・・だがそうすると、個人的な意思一般も人民の意志一般もないということになる。・・・

グラハム・ウォーレス(Graham Walles)——ブライス(Bryce)・・・そして人々はそれを熱心に聴くだろうか? その言わんとするところは、全ての人々は生まれながらに平等であること、官職の地位をもつことができなかつた人も自由についての持ち分に平等の権利をもつべきであること、である。・・・自己関心——それが入り込んでくるのはどこにおいてか?・・・その第一であるものは、だが——一個の宗教である。・・・民主主義によって世界を救う。・・・ある量の気前の良さをもった感情がそれと結び付けられており、しかもまた。・・・キリスト教的なものとの依存関係・・・その場合、専制君主制とは対立する。・・・あらゆる人は生まれながらにして平等であり、人民による善は必ずしも人民の為の善ではない。・・・資本主義との関連でなされるべきことは何か。・・・

学派でも「ファシスト」でもないのに、正に闘うことが先決だという主張が繰り返されている。・・・安逸は放逐されなければならない、と。・・・グラハム・ウォーレス、異常なることの恥ずかしげな入場——それは本質的なことであるのかどうか。・・・そしてここでもまた自由が正当化される!・・・戦争もできる、且つ干渉せず、である。・・・人々はそうしたことに高僧がとる態度の如く理性的ではない。・・・許されるべきで、しかも本質的な第一のことは、まさしく人々のためにのみ語っている知識人達のスローガンと苦心に対する攻撃である。

5 かくも明白で本質的な諸事実が——異常についての恥ずかしげな認知のやり方を例外として——これまで注意を免れ得た、ということは一体どのように可能だったのか?・・・説明のためのエッセイ・・・重要なこ

とは次の点である。具体的な諸問題が、社会主義においてもまたそうだ、といった如くに解決されるのならば、その全体を語る必要はないということである！　しばしば民主主義は——いつも第一にという訳ではないが——一つの絶対的な理想であるか、または特殊な論点として受け取られているであろうか、である——ラッセル(Russell)。

第Ⅰ、ルッソーの哲学すらもが。18世紀の知識と世界観が——笑いごとでなく——「進歩主義」(progressivism)を担うべくもちきたられた。・・・これらが意味しているところは、全ての人——心が曲がっていない人ならば——が見出し得るであろう光輝ある公共善(common good)があるということである。・・・人間性——奇妙な態度であって実証的精神にとっては全く受け入れ難いものであるが——は歴史を通してのみ聞かれるものであり、自然的な状態からの偏りとしてのみ発展させられるものである。(Humanity—curious attitude, ganz unannehmbar für positive Geist—has only heard through history and deviated from natural state.) 更にこれらのことは次のことでもある。心が曲がっていないひとならば、どんな人からでも得られるものである「忠誠を下命する一般的意志」——ベンサムの場合の一つのキリスト教精神の代用物——が存在するということ。・・・更にまた、平等と叡智と善と基本的な調和が前面に出てきているとしても、(現実には)悪意のある諸力によって鎖につながれているだけなのであること。・・・如何に多くの社会主義がこれに拠ってきたことか！・・・啓発せよ、そして無理にでも投票させよ——そのようにして、あらゆる紛争と災難が最後に。・・・少なくともルッソーには、彼は産出を最大化しようと意図していなかったし、文化を保全する意図もあまりなかった。・・・そう——だから官製理論のそれは正に、それだけは支持し難い。それは貴族制によって胚胎させられ、修辞以上の何物でもないが故に、イギリスでは機能している。

第Ⅱ、次の説明は。我々は日々の仕事——自分の問題である場にあっては真に責任感をもっており、しかもその根拠を知っているのであるが——という狭い領域の内部においてのみ我々が終始している場合には、その全てが合理的であり納得のいくものである、しかし、その外側ではそうでない。・・・大言壮語する馬鹿者達は人々に世界問題を語る！　社会的問題については、労働者はしばしば尚一層に理性的である、と(social questions; Arbeiter ist oft noch vernünftiger.)。その永遠の馬鹿らしさの一つが我々の評価を微妙に代用してきているのである——我々は精神の高揚が多分にこの源泉から出ていることを検討してきた。・・・正に我々の僅かな一片の理想！・・・これこそこのようにして民主主義をより良く

解明するものではないのか？ 但しその諸目標——それは個々のケースにおいて民主主義をより良く実現させるということであるが——をその代替物によって。

第Ⅲ、次の説明もある。不条理であることを現わさないようにさせられることが十二分であるような類似の諸々の場合からの「出発と無意識の固執」(Ausgehen und unbewusstes Festhalten)。私は思うのだが、未だに労働者と「直接民主主義」(direct democracy)——それは十分に異性種(Aberration)であることは明らかである——から始める幾ばくかに政治学者達が尚生き長らえている。自律的な諸々の意志が決定的なものであり、それは農民共和制の下で——スイスのケースにおけるように——、といったことは決定的な論点ではない。・・・この場合、現実にあるものは同意によってであり、多数派性によるものではない。・・・

アメリカにおいてもまた。・・・企図されたこと、植民地を搾取せんがためという理論に従って貿易を行っていたイギリスから離れること。イギリスのために何事かをなす——例えばイギリスを弁護するといったこと——のは全く正当ではなかったのであり、このようにして民主主義とは、この時代の言葉の用法をもってすれば、「キング」と君主制体制一般から解放された形態を受け入れることであつた。更にその他の点では、抜け目のない農業者達と商工業者達が存在し、どちらかと言えば素朴な外観をしており、問題は単純で——連邦政府や州政府は殆ど機能する必要がなく、地方的な善(local good)に基づく——宗教上や他のトラブルの処理、シセイの叛乱——。そしてイギリスの吸収への心からなる嫌悪が百万人を闘争に巻き込んだのである。・・・このように推移してきたことがしっかりと記憶されており、無意識のうちに農業者対工業家、工業家対大衆といった社会的な対立の場に社会組織を関係づけることがなされ、熱狂的に他の事柄へと目が向けられるに至った(ベアード、Beard)。如何にしてそれを独裁者のせいにするか、ということ以上のことを知らない人々が「戦争の合衆国」——紛争の海を舵なしに運行するような——を設いたのである。・・・満足はしばしば実質的には一般選挙民にはそうなることが決してないようなグループと少数派に直結することとなる。・・・

嘘の精製(refine der lies)?・・・年期と数、戦時に喚起する新聞とラジオ、リンカーンの言葉——諸改革はそれらが政治的必要に向かっているが如くになされる。それぞれの戦略がその地位を得るといったことによって、既に禁酒法が!・・・だが民主主義的ではない、根本的な点で。・・・同様に「同意」(consent)であつても多数派ではないということが強調されるべきである。・・・

全く別の事例を挙げる、第Ⅲ共和制のフランス、それはうまくいかなかったが、官僚制が健在であったので、さほどに大きな対立にはならなかった。・・・1871—1890年(オルレアンといったものの後)、そうしたものの克服をなしていた。・・・

6「資格のない」少数派だけでなく、どんな少数派に対しても、更に少数派だけでなく、多数派に対しても同じように、暴力を行使する用意をもって、彼等は存在した。そしてそれを試みるのが自殺を意味するような、それだからそれを決定しないでいるような、どんな国々においても彼等は存在している、と我々は推論してよい。この修辞は高度に教訓的である。もとより、それは現実の暴力ではないであろう。彼等と絶対的真理を保護するために異教徒を焼き殺したカトリック教会——及び他のキリスト教社会——に似て。・・・

彼等の関心の中には考えるべく求められた考えはないのである。一個の問い(ein Frage)があつて自明のものとなる公理(Axion)なるものはない。それがそうであるかないかは問われない。更に多くの馬鹿げた主張がその中に入ってくる。論理を伴った必然的であるものとしてでなく、事実上のこととして。・・・農民達には自主独立の意味での文化的価値がある。・・・文化的といったこと自体が単にそれぞれの意図(Ansicht)がもたれているというだけのことなのである。・・・社会主義的な理想が前もって既に絶対的なものとして受け入れられている場合には、——そのそれぞれは別々のものとなる！・・・適用させられ且つ防衛されるのは、a) 真正の諸意志(den wahren Willen)であり、b) 人々がもつべき、またはもつことが望まれる諸意志である。それは当然あらゆる制度の理論であり、更に絶対的真理への評価であり、更にはその意志をもたない人々には、言うなれば原罪をもっている(sind in sin)——その原罪たるや創造の過程に迄行きつく？——とする攻撃となる。・・・民主主義は現実の(現存の)意志の滲透という意味である。・・・

創られた意志の概念・・・民主主義は他のものの方便(expedient)として存在する、あるいは含意において無内容である、といったこと、更には社会主義者達をして率直に比例代表制を効力あるものとはさせない何物かがある、と告白するような決定をもたらし得るということではないか？つまり私の選抜淘汰制。そしてその場合、民主主義は一個の手段であり、

他のものの為資すだけのことであり得る、とはそれはどのように続くのか？——しかし実質上本質的な諸目的に対し民主主義が目的として用いられることがあり得るとすれば、それが意味するところのものを見究めなければならない。「我々は今やもっと丁寧に分析しなければならない」、これが結論である。・・・

民主主義は最悪であった——18世紀ドイツにおけるユダヤ人迫害は全く。・・・魔法・・・異教徒の焼殺・・・開明的君主・・・オー、イエス、今も同様に悪い。・・・私は自由と平等に関連した移行期の話にもっていきたいのだ。・・・言うなればそれは何か？もし機会主義者なれば？・・・二つの設問、人民の意志が行きわたっている民主主義では、異教徒の領域でもそうなのか？・・・彼等を焼き殺した民主主義と彼等を保護した開明君主の間ではどんな選択が？それでも民主主義が——そうだとするとその場合、絶対君主制かまたは優生論(Eugenik)か。・・・私は離れることに合意する——私は完全に社会主義の側にある！・・・

民主主義的社会主義は最早、胚(germs)ではなくして品種(species)である、そして、それは事実である。・・・恐らくは先ずはそれが目的ではない、としておくのが良いだろう。・・・

7 教義(doctrin)は今や大幅に改善されているのを見出す。尤も下船するまでには至らない。しかし行論と守備位置は改善されることができる。このため犠牲とされなければならないことは多い、しかし、それらはその他の中に留まっている。代表ではなくして、選抜(選択・淘汰)とコントロール(nicht Repräsentation, sondern Auslesenmethode(+ Control)・・・但しその場合一般的に、または大きな諸イシューの決定においてのみ。・・・そこでは白痴(idiot)に即した善などはなく、その上忠誠が誰についても必要であることが告げられることができる。・・・自律的意志はいつも必要——機構を通して這い上がっていく意志も。というのは、そこでは意志の一致(Willenübereinstimmung)が押しなべて必要。・・・誰もが意図していないことを引き出すことは論外である。その場合人民による(共通の)善などはない、ことが付加される。・・・言うなれば、かくして代表への断念である。・・・しかしながら、見究めなければならないところのものは、選抜(選択・淘汰)の方法について、その意味するものは何かで

ある、クレオンの成就(performance von Cleon)についてはより高く。・・・真直ぐに多数派性が強調されることになる——比例代表制には反対、その意味するところが何かを検討すること、即ち強力な統治はそのまま人民の鏡(Spiegel der Leute)——人民はいつの時代にも愚か——ではない。・・・

対外政策——その中にある民主主義的統制！ 閣僚が知ることは一度もない！ そこに威厳の契機がある。・・・そしてそれが最深の根拠であるが——どんな含意も、特に「自由」のそれをもたないこと、[更に尚、重要なことは、生起することが多すぎないこと、信託されることが多すぎないこと、そして国家の事業が善の事業である必要はないということ]である。・・・今や何が成果として？ アンチ民主主義の嵐——そこから民主主義は何も実現し得ないという感情すらもが。・・・ブルジョワ民主主義では、とりわけ、なおさらのこと。・・・

どんな種類の人物が？ より悪くなっていったようにみられるその人物は先程まで泥の中に膝まで没しながら自分のルールを多く与えている恐らく唯一の人。民主主義(の政治過程)にあるものは、他の(経済)分野で仕事をなし競争を演じるものと同様に、そのリーダーシップと少数性である。・・・リーダーシップの設定が残されている秘伝の妙薬である。この方法をもって事物が起こり、且つ倒れていく、それが決定的な要点である。(Besetzung der leadership ist des nostrium dasz bleibt, und das ist entscheidender Punkt.) 加えて比較されたい。1) 非民主主義的な選出、つまり一種の限定的な母体による選出はそれ自体、民主主義的ではない、2) 業績による設定・・・つまり職業上と事実上の選出における淘汰の旅、3) 設定せられた組織体による指名(appointment)、4) くじ——それこそ民主主義的である——による選出。・・・民主主義は連合体に対しては、その成功の権利を失う。それどころかその場合、白痴達の統制と決定となる統制と白痴達の決定となる。4)のくじは成功に帰属するものではない。・・・そうであっても弁護！ 成功に導く資質は最大限の成就(die gröszte Erfüllung)を保証するものではない——資本主義では全くそうであるように。・・・更に利益は相互的である。・・・

民主主義と衰退(Verfall)との間の依存関係は、個々の場合において様々である手綱付けの仕方の正しさによる。どこで内閣を？ 更にその場合、職業的政治家、機構、政党、圧力団体、知識人、官僚制が。・・・

8 しかしながら幸いにして、そのこのところ——即ち、ふさわしい位置

にあること、嘘を言うことから決別していること——そこから離れる必要はない。今一つの理論の方が一層現実的に民主主義の諸現実を考慮に入れており、しかも同時に民主主義的諸方法がもつ殆どの付着物が、それらがその諸原因をあからさまにされた場合、何を意味しているのかを多く拾い上げる、という点で有効なのである。・・・例えば本当の職業的政治家は？ 政党は？ 圧力団体は？ ボスは？——官僚制は？・・・責任と正義は・・・もとよりこの理論は民主主義についてそれぞれの民主主義者には崇高ともみられるような抜粋をつくり得るものではないし、また不確定であり、不確定なままに残しておくような政治的諸決定を生み出すような一つの方法の合理的根拠以上のものを我々に与えはしない。しかしそれは民主主義の墮落または退化(*degeneration in democrazia*)という章句で束ね揚げのような含意を除去するものである。

有権者の代表(*representation of the electorate*)という観念を捨て、有権者の委任(*delegation of the electorate*)の観念を強調することで、我々はこれに成功するであろう。我々は前者が如何なるケースにおいても正確な意味を欠いていること、並びに議会は国家の一機関として述べられることが一層適切であるということを検討した。今や我々は代表制のカバンと小荷物を、即ち代表制の理念そのものと、その18世紀的諸関係(*associations*)の双方を捨て切ることにし、大胆に選挙人投票団体(*electoral vote body*)は、民主主義の下では、第一義的に有権者を代表するものではなくして、その目的は政府を設立することを目的とする、という命題に乗り換えることにする。あるいは他の言葉で言うと、民主主義の種差的特性は人気投票によって政治的役職の指定を得ることの内にある、と。(*Differentia specifica of democracy consist in the assignment of political office by the popular vote.*) しかし様々な明瞭化が必要とされる。・・・議会民主主義 (*parliamentary democracy*) と立憲民主主義 (*konstitutionelle democracy*) とは極めて重要な差がある。市民的世界は経路を結着させないし、しかも官僚制の設置に対する問題がある。軍事的官僚制以上のものすらもが、・・・考えは改めなければならない・・・月を守備するような・・・。簡略化のため、私は明確化を最高の指導者の席(*the office of the supreme leader*)に主として限定したい。最高の指導者たる彼を大臣の職(*portfelio*)たる首相と呼ぶ。・・・

1) 先ずはヨーロッパにおいて立憲君主制 (*the constitutional monarchy*) と呼ばれるもののケース、それについては今日では日本が唯一の重要事例を提供しており、そこでは君主が殆どの公職者を如何なる公的

な投票とも関係をもつことなしに任命する——例外は町(towns)やいくらかのケースでは地方的な諸機関(provincial authorities)といった自治的諸団体の首長を除けば——、ということに難点があるように見受けられる。

2) ヨーロッパの民主主義諸国にあっては、首相はルールとしてではないが、技術上、議会によって選出される——例外はあるし、且つあった。しかしながらこのことは問題ではない。何故かというと私が施行上の慣行を示すのに時間を採る必要がない程に、どんな正常のケースにおいても——我々はフランスでのあらゆる組閣において認証の投票が行われるという慣行を思い描いているのだが——事実上それにぴったりであるからである。しかし首相が市民達によって直接選出されることはないし、あるものは例外的に大衆にアピールをなす人達——例えばパルマートンやグラッドストーン——といった稀なケースにおいてのみ、投票者が誰に投票するかは所与の個人の意志次第であると言われることができるのである。・・・もしその人物が直接的に選ばれるとすれば、とりわけ注目を惹くような仲違いが生じよう。・・・通常のケースでは議会の介在が諸方法と諸帰結における実質的な差をつくっている。それにも拘わらず、議会の主たる機能はその指導に従っていこうとする政府をつくることなのであるから、更にその政府はいつもその「国民」(the “country”)にアピールすることができるのであるから、如何にこの仕組みが実際には——法理論ではそうでないとしても——我々の定式化によく一致するか、が見出されよう。

3) 合衆国にあっては、首相は直接に選出される。選挙人団体(electoral college)は単なる一形式である。しかしこのことは承認せられた理論にとって一つの困難を創出しているとみられる。議会は政府の創出によるところが、さほど大でないことが明白な傍ら、もう一つの主要な機能をもたなければならぬからである、と。しかし、それはそうでない。大統領は極めて特殊な首相である。彼の地位は諸理論、とりわけ18世紀の権力の対抗バランス(contre balancé of des pouvoirs)の理論によって形作られたもので、イギリスの同職者のように政治的諸事象のロジックによってつくられたものではなかった。しかし、このロジックが自己主張をすることになり、その帰結が単純な定式化を拒否するような協力と干渉の複合組織なのである。かの首相とその内閣は彼等の諸機能を両院の諸委員会と有力議員達と分かち合うのであるが、同様に両院もまた、ある特定の限度まで統治し、且つ行政をさへ行うのである。但しその場合、議会が統治し行政すると言っても、その単に代表するという機能はイギリス議会がなしているものよりは、尚少ないということである。政策についての議会の声明の中で

強調がなされるものである「議会」の政策であるとなしていることが意味深い。換言すれば、我々の理論に従って「競争的選出によってつくられるというのが民主主義の主題である」、とされるような場におかれる諸政府は——この国では——他のところにおけるよりは立地することがより困難であり、しかも変わることなく一層に拡散させられているのである。但しこの理論のために考慮しているアメリカ政体の特殊性は、この理論に反対して影響を及ぼすものではなくして、その主要な命題を強調することに資しているだけなのであるが。

9 太平洋岸でイギリス経路によって結び付けられた文明世界がもっているその精神意識は、それが評価されてしかるべきよりも低くしか注意が払われていないが、ヨーロッパでは立憲君主制と呼ばれているものである。その唯一ではあるが、だが重要な、今も評価されるにたるケースは日本のそれである。こうする以外には機会をもたないということもあるが、代表制理論(**the representative theory**)に得点を挙げさせるため検討することができる唯一の機会を、それが提供しているというそれだけの理由で、私はこれに注意を払うものである。議会制政府のケースにあっては、言ってみればイギリスでは、君主はあらゆる正常なケースにおいて、当然のこととして議会の多数派の指導者を首相として受け入れるのであるから、形式的に君主によって指名されるという事実は配慮される必要すらなかった。しかし君主による指名は立憲君主制の枠組みの中での「政府をつくるという機能の果たされるその過程の本質」なのであり、だからこそそれは民主主義についての我々の定義の中へは入ってこないが、しかし、それが完全に「人民の意志の真意」(**the true will of the people**)を含意し得るのである。君主の選択の諸動機の中には次のような期待があるのである。即ち、ある与えられたその個人が、議会との関連で進退する者達よりも一層ベターであること、または「政治的人士達」一般は殆どの場合、演じる場所はそこそこであるが、時折決定的な役割を果たすことがある、ということ。このことは、しかし原則に影響しはしないし、後者の場合ですら、首相は自分の指名を君主に負うのであって、自分がそのメンバーであることを必要としない議会での優越を獲得することで典型的にその地位を得るものではない、という事実を変えはしない。このケースにあつてすら、首相は議会によって受け入れられ承認されるだけであり、議会によって従わせられる存在ではない。そして彼は議会のリーダーでは決してないのである。

彼の内閣の閣僚達は——彼等が議会制君主の下にあるのと同じほどに、首相の示唆によって指名されるのが多くの場合通常なのであるが——原則的且つ典型的には政治生活とは異質の人達なのであり、行政の各部門での専門家達なのである。だからして議会の実体は、どこにおいてもそれがもともとのものであった立憲君主制の下にあるのであり、政府の装置から分離したその実体はチェックすること、監視すること、限られた範囲でそれを統制することである。典型的には政府より発せられる立法提案——例外的であるケースとして議会がイニシャティブを採ることもあるが——に賛成したり、または拒絶したりすることが議会の機能なのである。その実体は尚も正確に人々(人民)の代表として描かれる(エッセイⅢを見よ)。しかしその真実の機能を——それを隠す代わりに——提示するこれらの章句には統制や監視といった言葉が好まれるとしても、そこに常識的な意味合いはない。・・・それでは代表的「善」(repräsentative “good”)とは何なのか。その事態に対する心理としては次の逸話が良い。「グラッドストーンはあたかも私が、彼は卸売業に従事していた、といったが如く政治に従事していたのであり、そのように彼の閣僚的諸活動に関連するところではどこでも専ら叱られてばかりいた。」・・・

生きているこの種の唯一の事例は日本のそれである。しかし、もし我々が、それが実質的に含蓄しているところのものを検討するならば、この事実がそこから一般的重要性を剥奪するものではないことを我々はたちどころに明らかにするであろう。君主、長老的経世家の一団(a group of elder statesmen)、とそれに似た人達は政治的諸決定を形成するのに独特の意味合いを持つ実質的要素なのであるが、その政治的諸決定における影響力の行使は、影響力の殆どが是認されるであろうような環境の下では行使がなされ、他の環境の下では行使がなされないというものであった。政府の立憲的形態と議会制または民主制形態の本質的な差は、但し、政治的諸 이슈ーと非専門的政治家達、並びに専門家的(文民的と武官的とがある)官僚達の経常的行政についての相対的位置関係の中にある。(The essential difference between the constitutional and parliamentary or democratic form of government is in the relative position with regard to political issues and current administration of the non-specialist politician and the specialist (civil and military) bureaucrat.) このようにみていくと、この制度装置は将来に対する審理の外にあるのでは決してなく、少なくとも社会主義の将来にとってはその全てなのである。我々にとってはもとよりのこと、このケースは重要である。我々が民主主義の選抜(選択、淘汰)理論(the selective theory of democracy)と呼ぶであろうもののもつ諸限

界をそれが示し尽くしているということが特別の明瞭性をもってくると
いう理由だけからしてもそうである。それは尚次のことが真実であること
を留保している。即ち、選抜の機能(**the selective function**)は議会制民主
主義の下でと共通のものであるが、議会の機能は——それが立憲君主制の
下では原理上唯一のものなのだが——退化するのではなく、議会制的に
つくられた政府に対抗して自己主張をなすのだ、ということ。・・・権力
をめぐる紛争、権力のゲーム・・・

歲月(**Jahr**)、多きに過ぎることはあり得ない。日本の側面には常にたわ
み(**distortion**)があり、その他に(1932年にはもともと自由貿易ではな
かったこともあり、通貨もまたそうでなかったのであるが)真直ぐに民主
主義的選択を処理するための諸イシューを知らないという政治家の原
則が尚存在している。

10 選抜された人々に対する価値の配分…泥の中に膝まで——「なされ
てしまった」となすべきである。・・・我々は理性を適用することを欲し、
しかも周辺にあるあらゆる社会的世界に対する章句を適用することを欲
しない。そういう合理的存在である限り、民主主義の諸現象に対する我々
の立場は選抜(選択、淘汰)制理論(**selective theory**)によって大きく改善せ
られる。その主たる論点を検証することは有用であろう。・・・

代表する諸団体の行動(**the action of representative bodies**)が——その
時点での——あらゆる大きな諸イシューについての選挙民の熟慮され
た諸意見を体現しているという、あり得ないような諸仮定を最早つくる必
要はない。それに替えて、投票者達は——一般的に、合理的に過ぎるも
のではないようなやり方で以て——自分達が利用可能な選択肢の中で選好
する諸政党や諸人物に対して賛否を決定するという、遥かにもっともらし
さをもった仮定でもって、我々は自らを満足させるのである。・・・教義
は今や大きく消失されているものを見出すであろう。・・・誰が真実を欲
しているかを根拠付けるような全てのことを提議する用意はできてい
る。・・・如何に長い間、合理主義と知識人達はビザンティニズム
(**Byzantinismus**)——(新ギリシャ主義的?・・・編者)——を過大評価し
てきたことか? 政党がらみで過度にぐずぐずする危険・・・地滑り・・・
だがそれが、全ての更に真正である物を包括しているのかを観察せ

よ。・・・諸イシューが入ってくる、理性もまた。・・・良き仲間——誠実であるか尊敬し得る何かがそこにあり得る——政党としての信義をはかるといったこと。・・・むかつくこと・・・無駄を省く・・・指導者に対する建議は最早長老会議の討議ではない。言い争うビザンティニズム・・・それは理論と哲学の差である。・・・最早考え直すことではない、またあり得べき場がない。・・・そして尚如何なる含蓄もない、とりわけ押し付けられるものがない。・・・尚最早能率的でもない——即ち、議会の中の首相・・・反民主主義的傾向——非能率・・・だが自由と正義を扱うことも何もない、しかもはっきりとはあるが、あらゆる時代と場所で効力のあるものは何もない。

1 1 もしその理想主義的な輝きの幾分かを犠牲にするというのならば、諸仮定のもっともらしさと諸命題の説得力に関して民主主義の教義は今や大きく改善をみることになる。いくつかの論点を精査するのは充分に有意義であろう。

a) 我々は最早あり得ないような諸仮定を設する必要はない。そうした諸仮定により構築された代表諸団体または諸政府が——その時代でのあらゆる諸イシューについての——有権者の熟慮された諸意見を体現している、という事実と反するような諸仮定は捨てることができる。それに替えて我々は遥かに受け入れ可能な諸仮定、人々は自分達を統治する者を決定する——言うなれば、一般的と言っても合理的に過ぎるといったものではないやり方で、自分達が利用可能な選択肢として諸政党や諸人士を選好する——という諸仮定をもつことで満足しておれるということになる。このお蔭(徳目)で常識が明確とされるべきなのである。

b) 但し、この理論は殆どのどんな選挙にもつきものの諸イシューに即した、または諸イシューの実質的な役割に即した投票を排除するものではない、ということが尚観察されるべきである。例えば私は1852年にイギリスの有権者が本質的に自由貿易対保護貿易という争点において投票したことを否定しはしない。あるいは1873年における自由党の敗北に対して組閣を受諾したグラッドストーンの功績を否定するものでもない。私は、人というものは正常な場合、自分が酒を飲みたいか飲みたくないかを充分にはっきり知っているものだ、ということをはっきりと認めるものである。私は民主主義の古いイデオロギー一般と、とりわけ代表制理

論が欺きの体系以外の何物でもないといった見解を採用してはいない。人々が政党や立候補者に対し追求することを期待する諸政策について評価をなし、バランスをはかる、という高度に合理的で込み入った過程に即して自分達の票を実際に行使するといった、そういう人々が存在することを私は認めさえするのである。恐らく合衆国にはそうした人達が無数にいるであろう。・・・この他一つのイシューである諸効用、貨幣、利潤の他は知ったことではない、といったパラノイア達もいるが。・・・この僅か10か年余の間に、私は自ら再三ならず、それを見出している。選抜(選択・淘汰)理論の優越性は正確には代表制理論が逃している多くの諸事実を考慮に入れていることに加え、代表制理論が依拠しているあらゆる諸事実をも含んでいることから成り立っているのである。更にそれが事実であり、しかも単なる理念的な公準(idealistic postulates)ではないという限度において、正確にそうなのである。

同時にこの理論は我々をして民主主義的な諸過程のそれぞれの要素をその正しい場所に置くことを得さしめる。即ち諸イシューにもつ投票者の判断が更に一層現実におかれ、その判断が直接的に議会や政府の活動に結び付けるよう構築されているような直線的關係である場合においてよりも、選好において特定の人士を他の人士に対してよりも支持するように選挙権者や議会を決定させるところの多くのありうべき諸要素の一つとしてみられている——「彼は戦争から我々を守ってくれるだろう」(例えば)の場合において——であろうということである。・・・そのフレーズの含蓄は、人々が欲するところのものを見出し、それをそこに提供すること(だがそれは行政の原理であり、恐らくはNAPに言及するものであろう)。・・・戦争にならないが故にある善を退ける、戦争になるが故に他の善を退ける、といったことができるのか！ 但しどんな脚注をも付すべきことなしに。

だが選抜(選択・淘汰)制理論によって含意されている他の帰結は尚一層に重要である。それは投票者の諸イシューについての判断の要素を、政策プログラムの合理性査定というドアのところでもなすよりも批准のドアのところでもなすことを認めることである。批准(ratification)について我々が意味付けているものは代表諸団体と有権者達が——彼等が権力を与えた政府の——諸政策の帰結であると信じているものに対してなす望ましき反作用だからである。諸結果についてのそうした診断は疑いもなく甚だ誤り易いものであるだろう。エジプト政府はナイル川が肥沃化機能を果たすほどに適当に増水するごとに人気があり、ナイル川がそうすること

に失敗するといつても不人気となると言われている。ましてや街頭に居る人——大衆——を前にしての分析的な仕事は、事前の評価のケースよりも、彼の権威を背景とした事後の主張の方がずっと容易なのである。例えば戦争の勃発時に彼が警鐘を鳴らすことを彼が合理的に差し控えるであろうことよりも、戦後になって揉み手で失望を表明するであろうこと、を想定する方が遥かに現実的なのである。(It is much more realistic to suppose that he will be able, after a war, to ring his hands than that he will, at the break of it, rationally refrain from ringing the bells.) 更には我々はこうしたやり方でそれを——こうした恐るべきほどに頻繁に起こるケースに——適用することができる。その中には選挙人が自分が自ら関与したことに——彼の口数少なく選ばれた言葉が語るであろうように——何の理念もなかったことも入っているのである。

c) 最早我々は民主主義を愚者(morons)による政府であるという冷笑に顔を赤らめる必要はない。というのは与えるべき何の指令書ももっていないような、または単純に馬鹿者であるような、更に提示するべき合理的意見をもっていないような——(そうした者達がないと代表制理論は成り立たない・・・编者)——そうした愚者達ですら、もし自分達が好まない統治者を取り替えることができるという、そういう権利の留保によって資格付けられる従属の契約(a contract of subjection)に相当するものに入ることができるのである。もう一度言うと、選抜(選択・淘汰)制は、その完成の為そうした愚者を必要とはするが、代表制理論が必要とするよりは必要とする程度がずっと少ない、と我々には信じられてよい、ということである。それ以上に愚者の意見も他のどんな人の意見もが全く同様であるとする理由によるか、あるいは道徳的根拠から愚者の意見や利益が配慮されるべきであるとする理由によるか、いずれにせよその愚者達——私は精神病学者が為すであろうよりも遥かに多くの者をこの概念に含めている——が一国の諸問題に一つの声をもつべきだとすることは私には全く不条理にみえるけれども、その反面如何なる政府もそうした全ての同類の者達からの支持を取り付けない場合の不利益は存在するであろうし、しかもこの意味での愚者の忠誠すらもが政府の能率にかかわる一要素である、と論じることが私にはさほどに不条理ではないようにみられるのである。・・・今一つの根拠、野蛮化する結果・・・

d) 最早この民主主義の教義は1750年といった時代——それは疑いなく代表制理論によって基礎付けられていた——に運用されたものだ、という咎めだてに晒されることはない。「自然的平等」であるとか「人間の顔をした全ての人」といった全ての章句は篩い落とすことができるのであ

り、しかも人間社会学の基本的な事実であるリーダーシップこそがその本来の位置に来るのである。(All the phrases about “natural equality” and “every one that bears of human face” can go overboard and the fundamental fact of human sociology, leadership come into its own.) 首相なるものは今や、閣議において頭数を数える人であり、議会や選挙母体には——「これがそのメニューです、お気に召さないようならばコックを替えましょう」と語る場合に含蓄されているものとは何か違った意味において——何かへりくだっている人であることを常に慣例としてきたほどに、理論上の多くのしがらみを捨ててしまっているのである。この点が解明されるやたちどころに、代表諸団体や政府の活動が、更にとりわけそれらの間での主導性の正常な配分が、一層に真実性のある光の下で見究められるということになる。諸イシューがそれによって形作られ、民主主義的な決定がそれによってもたらされるその過程において、個々人によって担われる重みにおける途方もない不平等性はそこで——もし首相一人だけによるリーダーシップという単純化されたケースを超えて指導者達のヒエラルキーの理論(a theory of the hierarchy of leaders)へと発展させられる余裕があるのならば——全てを一層によくそれが示すべきであり、且つ示すであろう程に際立ったものとなる。・・・選抜(選択・淘汰)過程そのもの・・・リーダーシップとダーウィン、その区別の多くを失う。・・・それは現実に即した方向で更なる改良をもたらす。・・・指導者は自己負荷をなすということ(leader imposes himself.)・・・機能の理論が生きる、そして議会・・・ディズレリー・・・保守の指導者としてよりも以上の「支配権」はない。・・・職業的政治家、ボス、政党の理論に通じる。・・・無口であることと発生したことが選挙人の前にはおかれぬこと——特に我々の政治においては——の解明。・・・

e) 最後に、選抜(選択・淘汰)制理論は、他のやり方では欠けていた多数派原則の為の合理的根拠を提供する。もし、それがある代表団体の意志、あるいは選挙民すらもの、ある多数派の意志だととられるのならば、多数派原則は到達遥かなる手段である——とりわけ社会改造の手段としてはそうだ——ということ、更に、もし少数派の意志が無条件に踏みにじられるということなれば、民主主義にいつも要求されてきたことの全てが失われたと同然であること、を我々は検討してきた。実際のところ、51パーセントには無条件の特権を与え、49パーセントには無条件の奴隷化をもたらすことを良しとする判断基準をもつことよりも更に合理的な判断基準はない、というところから導かれる議論以外には何の行論もあり得ない。我々はこのことを失格させられた少数派(disqualified minority)について

の我々自身の理論によって認知する。しかし、尚付け加えられるべきはこのケースを除外するならば、民主主義的諸慣行は諸々の少数派を——とりわけ一個の完全な社会的オーガニズムを構成しているような少数諸派を——典型的に踏みにじったりはしないのである。合意によって基本的重要性をもつものだと信じられる諸手段が講じられるのである。この原則はイギリスの慣行に例証されることができる。・・・真剣に闘われた挙句、小多数派は第二次読会に至った時、原則として法案の審議が打ち切られるか、または廃案乃至は骨抜きにされるか、が許されるような例外措置が確保されている。野党に許された大きな特権と議事妨害に対してさえ、示される慎みはこれと同じ方向を指している。・・・例外は法的例証(**probant regulariser**)にすぎないにせよ無数にある。・・・こうした原則からの大きな逸脱は——アメリカの南北戦争がその際立ったものであるが——国民的破局をもたらし易い。

それでは「多数派によるルール」の意味するところのもの——多数派を保持しているどんな政党にも与えられるべき価値——とは何であろうか？ よろしい、もし我々が選抜(選択・淘汰)理論を適用するならば、並びに投票の第一の目的が諸政党の中の一つの党の指導者に対する我々の立場を議会で従う配下を提供することで政府をつくることであるところにおくとするならば、我々は遥かに合理的な回答を得るかの如く私には思われるのである。これは諸イシューに関し、必ずしも少数派を踏みにじりはしないという故をもって無条件的多数派原理とは対立するものではある。政府の第一次的機能は国民の当面する諸問題の処理であり、非常事態にあってはその対応を指導することである。しかし、もし「資格のある多数派」(**qualified majority**)によって支持されることが少ないとすれば——疑いもなくその多数派の「大きな」多数派性は極めて不完全な代替物でしかなく——、首相は厳しく異論の多い諸争点に身を晒すようなことはしないか、またはしようとしなないかであろう。

如何様にこのことが比例代表制(**proportional representation**)——それははき違えられた絶妙さの方向へのたわみをもっているような人々には抗し難い誘引をもつ——の成否に負っているのか、という問題に我々を移してきていることに注意されたい。もし代表諸団体が代表するべく存在するという事となれば、このケースは回答不能の如くに見える。しかし、もし彼等の第一の機能が政府を構成することなのであれば、その場合は、政府の能率、選挙上の妥協の抑制効果、諸政党の強さと安定性、「愚劣なもの」(**follies**)の排除、等そうしたことが正統な事柄となり、その反面比例的な考えに応じようとするケースはそれだけ益々弱められる。しかしなが

ら、このことが誰に対しても——よりポピュラーな意味で民主主義を信奉していればのことだが——採ることとなる一連の行論が、如何に危険に満ちたものであるか、が観察されるべきである。その人は現時点で行われている単純多数派制のシステムが、多くの民主主義国で生ぜざるを得なくさせているコミュニスト達やファシスト達を、これで以て排除されると喜んでいことはあり得よう。その人はこれこそが民主主義的諸政府に与えるであろう強さと余裕の取り付け道であるとし、そして自分達の生き残りのチャンスの増大を結果としてもたらすものであるとして、自らを祝福するかも知れない。しかしこれらの利益は諸政府を設立したり、解任したりすることに影響力をもつ多くの人々を放逐するという出費の上に得られるものなのである。更にそれに応じたケースもあり得ようけれども、それは最早民主主義的なケースであるとは呼ばれ難いものとなろう。・・・

そうなることを防ぐことによって民主主義を強化することを望むことは——それがイギリスの19世紀の慣行を賞讃し評価することの中に時折見受けられる見解なのではあるが——民主主義は貴族制によって本質的に運用される場合に素晴らしく機能するという行論に多分に近い。私はそのいずれとも言い争うものではない。実のところ私は次のように確信している。民主主義はその最も顕著な歴史的成功のいくつかにとっては、その諸原則が慣行になるまでに至った過程の不完全性に負うものである、と。しかし比例代表制に反対して今なお論じている全ての熱狂者達は「彼の信条の殆どを彼は潜在意識の中では信じてはいないのだ」ということを明らかにするべきなのである。

12 そしてそこで尚恐らくは——だが恐らくは次の段階で——少数派の権利について国民投票(Referendum)や反対(Opposition)といったことが最後に提起され得よう！・・・

正確にこのことの故に、私は前述の民主主義についての定義の中に、選抜(選択・淘汰)(selection)と同様に統制(control)に対しても論議の余地を残しておくべきであったことが主張されよう。私の弁明は統制が選出・選抜の中に含蓄されているのだということの他に、それは正確に——その適正な——範囲をも含蓄しているのだということである。というのは、議会は様々な首相をつくるのと同様に罷免することができるからである。「議会は内閣を解雇する」という語句の表現がより高い権威によって認可される——この言葉は例えばグラッドストーンによって用いられた。議会の多数

派が首相の指導に従うことを拒否する主要な諸動機があり、即ち、何故に人気投票が、ある与えられた首相を支持する多数派に反対する方向に転じることがあるのだろうかの主要な理由の一つが、それは何かと言えど何等かの大きなイシューについての意見の相違なのである。そのメカニズムは、ある理論家の解説するようなものではなく、はっきりと観察し得る多くの諸ケース——例えば1873年における第一次グラッドストーン内閣での、及び1880年における第二次ディズレリー内閣での注目すべき諸ケース——においてみられるものである。議会の行政に及ぼす完全な統制、それに有権者の議会に及ぼす完全な統制、そうした統制があるというのは、事実上、政治的エンジンの中の本質的な部分を考慮から完全に外してしまっている理論家の解説ではあるが——あらゆるものはリーダーシップの要素に集中するものであり、且つ議会に帰属するのである。・・・代表団体の理論、反対の理論、議事妨害の理論・・・代表団体は選抜団体である。・・・欺きの愛すべき薄っぺらの理論構成・・・飲酒を欲する人であるのか、ないのかを問う。・・・こうした理論で扱われる人々は、それについての実質上の意味のところまでは考慮していないだけである。(Wollen die Leute von der Theorie nicht nur so weit berücksichtigen als real meaning to it.)・・・それでも尚同じことである。・・・その限りで実質的には同じ理論の受け入れである。それにつき全く何もないということをもととする意図の部分もない——欺きの薄っぺらな組成。・・・完全に愚行が示していると同然の諸態度、さも驚嘆したかのような調子で現実の作業については明瞭—曖昧といったやり方はいつも馬鹿げている。

13 正しい人物であるかどうかではなく、仕事のできる人物であるかどうか。[それは例えば20年代における事物の処理の如き諸現象を説明する。]・・・

選抜(選択・淘汰)制理論が民主主義の諸事実に適していることは代表制理論がそうであるよりは遥かに大なものがあるということは認められた、と私は考える。しかし、その成功が本質的なものであるにせよ、古い民主主義の信条の中に含蓄されている諸命題を拾い出すという点で不完全であった。このことは実際にこれまでの行論の中に「不条理である所が少ない」、「一層にもっともらしい」、「主張し得るものにより近い」、といった語句が乗合馬車的な頻度で往来したことからも明白である。とりわけ我々は選挙人達の自律的(自主的)な意志作用(autonomous volition of electors)

を尚必要としている——我々は今では自律的選択(Autonomous Choice)と呼んだ方が良かったかと思う。そして我々は尚、機械の如くつくられた政治家(政治的人士、政治屋、politicians)のどんなケースにあっても、それを見出してはいないのである。選択の自主性が正しく仮定されている場にあつて、我々が尚、要求しなければならない最低限の合理性の中に、自律的な意志作用がしばしば避けられているのである。その最も調和の取れていない投票者によって披瀝される諸動機——次の如きもの「彼は私が今まで聞いたことがない程に良い仲間だ」、「彼は尊敬すべき生活を過ごしている、それにタバコを吸わない」、「彼は誠実だ」等が、疑問のあることの少ない定式化を担うであろう諸印象を覆い隠したりはするであろうとしても。愚者達(the morons)は——とりわけ、ある特定種類の政治的技法に対する時、愚者であるとの感応性をもつものであるが——我々の内のいくらかが好むよりは一層大なる重みを担うであろう。更に重要な諸ケースの中で、批准による統治という方法は、それが唯一利用可能な方法である一方で、避けがたい遅滞を伴って機能するところに運命的とも言える重要性をもつと言えよう。更にこうしたことの為、そして他の類似の諸理由からも、我々は尚「静粛の時間」、「理性的な人々」、「社会の全体系に関わるような諸イシューがないこと」、といったことの必要性を排除できない。

指導者達は自分達自身を選出する、だが選挙人達は受け入れるべき人達を決定する。・・・どこで、1) 南北戦争を、2) 人々が自らを明らかにすることに、かくもぐずぐずしていることについてを・・・ラジオと電話について・・・

諸々の意志に対する敬意が本質である。・・・だがそうではない——自己負荷(self-imposed)がなされると！・・・ディズレリーは今日では選ばれなかった！・・・そして古き理念は失われた、そこで愚者が、あらゆる人々が、あらゆる時代に存在する。・・・それがリーダーシップ論によって改善せられたとしても尚、指導者は自己負荷をなす。しかしそれは以前からのことであり、且つ後においてもまた、である。・・・それでもいつものことだが、はっきりした諸理念の含蓄が欠けている、抑圧はないという示唆はあったとしても。・・・価値の存在！・・・その他には？ 対外政策！・・・人々は新聞を用いる、それ故にラジオといったものは民主主義にとって良いところが何もない。

1 4 a) 国民意志の貫徹という点で、 b) 国民的諸問題の決定と管理

という点で、という二者の関係において民主主義は非能率である。(Democracy is inefficient in 2 Beziehungen a) im Durchsetzen des Volkswillens, b) in der Entscheidung und Verwaltung of national affairs.)そうであるとしてもだが、統制の手段としての批准の有効性は民主主義に対する比較制度論上の判断が、主としてその上に向けている筈のものである。そうした判断は指導者を選出する一つの方法としての競争的選出の——あるいは、もし我々が選出の過程における志願者の役割について、先に述べたところを記憶しておられるならば、彼等を受け入れることの——有効性に向けられたものでない限りそうである。後者に関して言えば、競争的選出の方法が他の方法によるよりも「適切な人物を掘り起こす」(“pick the right men”)かどうかという設問は、次の設問とは区別されなければならない。競争的な選出は他の方法の選出よりも、動機の創出においてと、選出された場合に「機能をよく果たさせる」かについての可能性に関して、より適当なものであるかという設問。双方の設問に対する回答が歴史的諸条件に関して相対的なものであるということだけでなく、無条件的にどんな条件のもとでも民主主義を良しと答えられるものではないということもまた、直ちに明白となるものである。・・・指導者が自己負荷をなすという原則は保ち続けられるのがより良い。・・・どんな種類の人物がどのようにその地位を占めるのか、がその人物の動機と可能性に影響するであろうことが論じられるのもよい。忠誠についてだけは、既に幾ばくかが述べられている。・・・得点の為のゲーム・・・

このことは甚だ明らかであって、実際に合衆国と大英帝国を除いては——イギリスそのものが問題とされている限りにおいて、この国が非常に特殊なケースであったし、今もそうであるという理由から、その表明(her voice)が一般的論議の中で考慮されるべきであるかどうか疑わしい——民主主義に都合の良いケースは極めて重大な挑戦を受けることなしには決して進んではいけないのである。更に我々の時代は少なくともその元々の理想からはっきりと離れてしまっているので、しばしば当然あってしかるべき境界線を越えて進行し、そしてそれ故に再批判がなされなければならないような批判をもたらしめているのである。民主主義にとって適正な人物は適正な志願者であることと、成功裡に志願者とさせる素質は国民的諸問題の成功裡の管理者乃至は経営者とさせる素質である必要はないということ、は全く真実である——いくつかの点でそれは留意せよというにはあまりにも明白なことなのであるが、2クラスの素質が同一の人物に備わっていることはありそうにないことも真実なのである。・・・適正な人物とより良き実現の間にある一種の区別がなされなければならない、というこ

と。・・・この根拠に即して民主主義に加えられる逆説的予言は次の3つの極めて適切な環境を見出すのが習慣となっている。

第1、投票での成功は大衆の支持を意味する。そうした支持が効率的な政府である為に問題でないという訳ではない。だから投票における成功は——それが最も疑わしい雄弁あるいは無口といったものを通して得られたものであったとしても——尚無視してよいような個性によって得られたものであったとしても、それでも効率的な政府である為の必要なものの一つを提供するものである。

第2、しかしながら、諸ケースの中で少数派の場合に限り、採るに足りない個性であるその疑わしき雄弁が一個の人物をして至高の指導者の地位にまで持ち上げるのに充分であることがあろう。一般に単なる雄弁すらもが——その結果次第では——パーソナリティを露出させることになるのである。そして泥の中に膝まで浸りながら、その機構を通して、自分の道を登りつめたその人物が結局において「ある男」(some guy)となる筈なのである。その範囲で、「民主主義は跳ね返りの戯言言いに登用する」という反民主主義的スローガンは修正されなければならない。

第3、選出の民主主義的方法は、それと替わり得る方法との関連で評価されなければならない。我々はくじによる選出でも不平を言う必要はないのである。更に我々は法王の選出が、その最も際立った例である非民主主義的選出を論じることに止まることもない。というのはこの法王の選出は非民主主義的選出の中では疑う余地の無い程の成功——嘗てそうであったし、今もそうである——を担うものだからである。我々は現代の大規模産業の指導的人士の選出——少数の統括グループによる選出に注目してよいであろう。選出されるべき指導者が充たすことになる諸要請は、国政一般のリーダーシップについて言われ得るものよりも、遥かに狭く定義せられるという事実に対応した選出がそれなのである。次のようによく言われるイタリアの諺が存在しさえする。「本来の法王として法王庁へ入っていく者は枢機卿として出ていけだろ」——これは教会の声が指導者にと一本化しているような人物は概して最上のチャンスをもつものではない、ということを書き表している。しかしこの方法のもつ一つの要素は民主主義的手続きの中にも入ってくる。そうした制度が公式的であろうとなかろうと、その指導的人物は一般に指導的な仲間達あるいはその党の幹部会により受け入れられることがなければならない、と。・・・

選出方法と社会主義者を扱うところでは、1919年に、諸工場の指導者はその工場の労働者達によって選ばれる必要はない、と認識されたとい

うことを。・・・常にしっかりとした組織があること、それが民主主義においては極めて重要である。先ずはこの組織を制定すること、どれほどに強力な人物であったとしても。・・・様々な位置にある志願者達の間から選ぶというより選出する、あるいは多くの諸可能性を批准する(*elect. than choose zwischen verschiedenen Stellen candidates oder ratifies viele Möglichkeiten.*)。・・・より高等な者が誰もいないという故をもって、強制だけとすることがあってはならない。我々が何故に論議を分けようとならないかの根拠はこれである。・・・だが恐らくは社会主義に対しては！・・・その場合、統制抜きの独裁者の選出が？・・・そういう差はない！ ぼかす。・・・指名は民主主義の下でも常に必要である、それは指名グループ次第である。・・・大学——しばしば民主主義の下で墮落させられている。ビジネスマン——芸術家——弁護士・・・適材である。・・・一般的な諸利益を考慮の中に入れていないという理由から正に社会的に卓越している(*gesellschaftsüberlegen gerade*)。・・・

15 点数稼ぎが演じられる。・・・議会にはいつもそれがある。・・・党と批准への考慮は双方の道を切り捨てる抑制力である。・・・民主主義がその指導者をして喜んで赴かせるかの特別の職は——彼が執務しているオフィスでの仕事を充たすという点で——彼の仕事を妨げるところに重大なものがあることは真実である。更にはこのことは、多かれ少なかれ、指導的位置にある人々の全グループに——彼等の地位が代表団体内での選出乃至は支持を要求する彼等の能力に負うものである限り——及ぶということも真実である。そして彼(と彼等・・・編者)をして仕事に専念することから多分に離れさせている構造は容易に眼に浮かべられ得ることである。イギリスの首相と閣僚達のケースを取り上げよう。その小さな一団は聖書画の一つ——イスラエル人達(*Israelites*・・・ヘブライ人達)が左手ではある市を取り囲む城壁を造る傍らで、右手には引き抜かれた剣を持っている——を想起させる。これらの大臣達は通常あらゆる議会の会合に出席し、自分達の諸政策を案内し、自分達の諸政策を弁護する、そして十分に精力を使い果たす業務である反撃の策を練る、といったことをなさなければならないだけではないのである。もし彼等が議会の中のそれぞれの従う人達と院外での従う人達の各グループそれぞれの陳情を聞き、喫茶室でのもてなしに時間と神経を使う習慣を身につけ、国中至るところでの会合を訪れる、等々の用意がなかったとすれば、彼等は自分達の

多数派を長くは保ち得ないであろう、という事情もまた存在しているのである。・・・短期的政策の動機と可能性が出てくるのは、この故にである。・・・改革は仲間を締め出すことであり、仲間を孤立させるか、ぼかすか、する。・・・それは教授をして語る——とりわけ因果関係を語る——ことを困難にならしめる。・・・だがそれはイシューを世に示すという長所もある。・・・その他にも効用はある。・・・

この指導的人物の行動の中に——ありきたりの民主主義者達が多く国王や他の由緒ある人物についての冗談をつくるのが常であるような——際立った特色のいくつかを、もしふさぎ気味の興味をもった観察者が見出したとしても驚くに足りない。その特色とは、例えば、「彼等は6ページのメモに凝縮できないような全てのことに無知である」、「もっとも成功を収めるような民主主義的指導者達は、結局において、どんな仕事をも試みようとしないうか、またはどんな主題をもマスターしようと試みたりしない」、「行うことは議会での闘いの為、またはリーダーシップをとるためのジェスチャーにタフな神経をもっているだけである」、「そして時々自分自身の無能を羊のように笑う」、そういう人達であると。そう。それは往々にして思慮、エネルギー、能力が一国の諸問題を管理するため投じられるところが——通例百貨店の諸問題を管理するため経常的に投じられているものよりも——少ないかの如くみえる。・・・もっとも、その場合の成果は？ だがそうした一般論は多くのことを溶脱させている。従って比較も可能ではない。更に常によく知られた事柄と結びついている故をもって判断を墮落させるものでもある。・・・結びつく因果性・・・

彼等の自国の人士達との正に日常的な紛糾の雰囲気こそが——国政についての諸問題との関連のものでもなければ、敵対者との関連のものでもない——指導者達の政治的チェスボードでの点数稼ぎのプレイをその目的そのものとさせ、それ以外の全てを彼等の心情から離れさせる傾向をもたらす。・・・解けない諸イシューの脱国民化(dissolved issues — denationalisieren)。

16 民主主義の非能率——イギリスの大臣はどのように自分の義務を果たすのか？・・・

これが全てではない。指導者にとっては——我々をして彼等を閣議に召喚することに赴かされたい——日常的にある紛糾の雰囲気、国政上の諸問題または敵対者達との紛糾ではなくして、自分達の選挙区民との紛糾があり、

且つまた自分達の諸活動の結果を急速にして頻繁に批准することを確保することの必要性をめぐる紛糾がある。その雰囲気は政治的ゲームにおける点数稼ぎのプレイを目的そのものとさせ、他の全てのことをそのための役割とする、という傾向をもたらすのである。このことが各イシューのもつ真の色合いを如何に完全に変えるものであるか、及び国政を何等かの合理的コースにおいて操舵することがその雰囲気の下では——例え最も志高き人物がこれに当たるものであったとしても——如何に困難なことであるか、をここに示すことを許すほどの余裕はない。しかし二つの事柄は明白である。第一、急速な批准を確保することの必要性は、殆どと言ってよい程に、諸イシューと諸政策についての長期的局面を指導者達の心情と守備範囲から排除してしまう。現代の民主主義の下では短期的視野と短期的政策が瀰漫し易いのである。根本的な諸問題は全てが長期的問題であるにも拘わらず、である。そうした諸問題は取り組みの態度が漂流していたり爆発していたりでは合理的には解決され得ないのである。第二、政党人のもつ紛糾の中にある雰囲気の皮肉な重要性は——展望されるこの事の多い時代においてさえ——対外政策の分野における程に大なものはない。他ならぬこの分野において、選挙上または議会上の駆け引きによって鼓舞せられるような諸活動が——意図もされておらず、しかも起こされることが修復不可能であるような——災禍をもたらす危険に満ちたものとするところがあるからである。私は自分の生涯を閉じる時がくれば、その時に20年代のあの悲劇的な光景を思い起こすに違いない。その時には誰もが実際に地下に潜行した企みのあること(subterraneous brewing)を感じ取っていたのであり、更に誰もが実際にこれらの災が起きかねないことを知っていたのであるが、誰もがそれよりも誇大に強調された些細なこと——その上に彼の政府の運命がかかっていたのだが——に向かっていくことに肩をすぼめるだけだったのである。・・・対外政策については民主主義の為には国内的には騒ぐことなく平和裡にあるのが合理的である。・・・更に「国民」(Volk)は態度が両立的(compatible)であるような卓越した人物には支持を与えない。・・・しかし民主主義者はその人物と統治の動機については、あらゆる美点が備わっていると信じているその一方で、他の諸形態の下では専制政治の下で「私は気付いている、その反対のことが信じられている」と規定しているような人々を信じているのである。・・・そして押し付けられるのは正にこのことである。・・・対外政策は国内政治の諸目的に資す(Foreign policy serving ends of home politics.)。・・・忍耐についてのそのゲームを演じる資格のある最後の人物は懇願している人物である。・・・どのようにイギリスは出てきたか。・・・

それが例外的に都合の良い時、世界大戦におけるクリミアにおいて。・・・
対外政策においては諸要求を非妥協とする。・・・フランス？・・・その
全てを否定することの内に。・・・だが最も悲劇的であったのは個々の失
敗にあったのではなくして、他のようにはいかなかったところにあ
る！・・・他のようにもいき得た、——しかし民主主義的方法と関連し合
っている。・・・

17 しかしこの種の行論は、多くの歴史的パターンが民主主義的方法を
排除し、その傍ら他の諸パターンがそれを唯一可能な方法であるとなし、
更にまたその他の諸パターンがその中間的な制度を強いるということ
を我々が明らかにするやすぐさま、その重要性の多くを失うことになる。
事柄の性質からして、人々に対しそのうちにそれ自身を提示するような観
念 (**the notion of presenting itself**)——民主主義的方法と非民主主義的方法
の間の選択といった——が結局において何等かの意味をもつような重大
局面なるものは稀な筈である。この事実は更にまた民主主義の歴史的成
果についてのどんな合理的評価とも関わりをもつ。それ以上に関係があ
ること (**association**) を、因果関係 (**causal relation**) の論証であるとして無批判
に受け入れることの内にある分析上の罪を民主主義の教義の披瀝者も反
対者も共に犯していることが問題である。・・・

かの有名な諸事例、ペリクレス後の時代から我々に受け継がれてきたも
のである民主主義的諸政策と諸政治に対する貴族制からの批判をみられ
たい。この時代のギリシャの著述家達はその殆どが我々が今日反動と呼ぶ
べき人達であった。即ち、彼等是一群の有能の士達——彼等に從えばアテ
ネ共和国を滅亡させた人々——に、彼等がとった諸政策と共に憎しみと軽
侮の情をもった準貴族層 (**semi-aristocratic people**) に共感をもち、且つ
書いたのである。だが現代の研究者はその宣託 (**verdict**) を受理することは
できない。先ずは、アテネ帝国の構造なるものは海上制覇の上に打ち立て
られていたということである、そうであるから不断の軍事的成功だけが——
どれだけの期間もつかのことであったにせよ——その生き残りを保証
することができた、という頭でつかちの構造になっていた。そうした構造
は没落する、民主主義であろうとなかろうと。次いで初期の大衆的指導者
達——とりわけクレオン (**Cleon**)——は貴族制の中で虫の好かない人物 (**a
pet aversion of aristocracy**) であり、帝国主義者としての情熱と計画を立て
て指導する能力において欠けた以外の何かがあった。もし我々がシシリ

一遠征と、エイゴス ポタモイ(Aigos potamoi)の失敗のことだけを考えているとすれば、完全に誤った構図をもつことになるのである。その場合の民主主義はその国の諸事情をおかれてあったままに男らしく受け取り、しかも圧倒的な劣勢に逆らって男らしく戦ったのである。・・・

民主主義が一つの原因としての民主主義に結び付けられたものをもって究極の失敗に帰属させるのは安全とは言い難い、単にその原因とされるべきである。だが同様に、ルイ16世統治のあの陰鬱な最後を因果関係上結び付けられるべき民主主義の欠如に帰属させるのも安全ではない。更に合衆国においても、民主主義は環境的諸条件の結果の一つとみた方が、国民的発展の推進力の一つとしてみるよりは一層に妥当であるということは十分に明白なことである。その中には政治的構造の因果的重要性が一層に大なる確信をもって主張されるような、他の諸ケースがあることは確かである。しかしこの種の諸ケースの範囲内でみても、今日の平均的な観察者が承認するであろうような結論となる諸事例は、民主主義の中にある方が非民主主義のパターンにあるよりは、一層頻繁であると言えるかどうかは明瞭ではない。

18 結論は次のようなことに直面させられる筈である。民主主義を良しとするケースはあらゆる時代と場所に対応する「絶対的且つ明白な民主主義の優越性」に基礎付けられるものでは決してないということ、それは言ってみれば、往年のそれに比した現代の歯科医療の方法に対して主張され得るような意味で言っているのであり、しかも、そのケースが各事例において考慮されている諸条件、及びそれらの諸条件の下で期待されてよい諸結果に立脚したものでなければならぬという条件を付した上で言っているのだということ。全世界に民主主義を——あるいはその特定のブランドを「売る」という試みは意味がないのである。将来において、我々の心を捉えるような諸目的を確保するのに、非民主主義的な形態の構造が一層に効果的であろうと判断されるが如き諸パターンが発生するかも知れない、ということを我々は——少なくとも可能性としては——認めることを強いられているのである。だからこそ、繰り返して言うのだが、社会主義者達が民主主義の理念を放棄し、そしてその表現の中に不適切な熱望とも我々にはみられるようなことを演じることがあったとしても、我々はそれ故に社会主義者だけを責めることはできないのである。・・・

民主主義を理想の領域にまで持ち上げる——時には、それがスローガン

だけであるかも知れないが——という準宗教的信条は残される。しかし、このことはそれを合理的議論の主題から離すことを意味する。誰もがそうしたことをなす権利がもとより有り、議論に替えて旗を振るのもよい。誰もが民主主義を合理的に——私は非合理にとは言っていない——愛する傍らで、故国の丘や溪流を愛するその愛情をもって民主主義を愛することはあってもよいのである。何となれば、それは自分自身の一部であり、しかも「我々は」を意味するものであるからである。そうすることを拒絶するような社会主義者はこの点からすると疑いなく原罪の持ち主であるだろう。しかし社会主義が至高の理想であるような社会主義者はこの意味では決して民主主義者ではあり得ないと言えるのである。・・・

民主主義のリストは、イギリスのケースがとりわけそうなのであるが、例外なく人気あるルール——それは人気あるものとしての成功を伴ってなされるだけの充分さをもって行使されなければならないルール——についての特徴的な諸制限を展示している。一つの言葉が民主主義と退化(**degeneration**)の間にある関係についておかれよう。退化とは何であるのか。よろしい。事実内容の問題としては退化は進化と正確に同じものである。というのは双方に即して認証される唯一の事実は変化があるからである。もし我々がその変化を好むのならば、我々はそれを進化と呼び、もし我々がそれを好まないのならば、我々はそれを退化と呼ぶ。それは完全に好みの問題である——もし我々が虎の理想像を制限なき凶暴性をもつあらゆる栄光を心に抱くならば、そしてもし虎が捕えられて優しくなっておればその虎は退化してしまっているのである。しかし、もし優しさこそを理想であると心に抱くのならば、その場合は虎は進化していたということになる。しかしここで私が社会的理想を栄光、勝利、活力、高貴性といった諸価値の合成であるとなしていると想定されたい。その場合、国民の進取性の何等かの損傷は——国民の枠内にある諸グループの傲慢性の損傷すらもが——私にとっては退化であるだろう。そして歴史の問題として、そうした進取性や傲慢性の損傷(**a loss of aggressiveness or assertiveness**)が容易に民主主義への傾向と結びつくのかも知れない。それは必要のないものなのかもしれないが、民主主義は退化との結合を獲得し得るのである。だがそれだけのことである。

(5) 民主主義的成功の条件

摘要

どんな時代にあっても社会主義に都合のよいケースなどないのと同様に、民主主義に都合のよい一般普遍的ケースなどはない。民主主義がその択一的制度を欠くために自己負荷をなしているような諸ケースにあつてすら、成功裡の作動の条件を充たすことに失敗するのである。競争的リーダーシップの下では、選挙人や政党機関は煽動化の大嘘を排除するのに十分な知性と道徳性の一定の水準を持たなければならない。諸結果は競争的にイニシアティブを担う政治家達の質に依存するものであり、だからして民主主義の成功は公的な事柄の管理のためにある高度に資格付けられた社会階層の存在を要求する。少なくとも、その人達の単なる存在が他のどんなことにおいても成功をもたらすような人々のそれへの参入を思い止めさせるといったタイプの人々だけからなる、政界においてはとといった状態は避けること。諸条件の他の箇条は「民主主義的諸原則」という言葉に集約される。票をめぐる競争的紛糾の故に、最小限の規律さえもが確保することが難しい、それは非民主主義的なパターンにおけるより以上のものがある。諸々のロビー活動と圧力諸団体は民主主義の精神には有害である。多数の自己負荷された規律のあることは束縛されざる敬意をもって事をなすことである。忍耐と自己抑制という民主主義的徳性の実行はとりわけ死活的利益に関わるケースにおいて必要とされる。公務員等の民主主義的選抜にあつて十分に適切であるのは、直接的信認は少数の役職に限られる場合のものであり、残余は首相によって指名または推薦であるべきである。最後に民主主義より成功裡に作動する状態として、政治力学から独立しておかれている官僚制の質が高ければ高い程良いこと、民主主義が円滑に作動する状態として、政治的決定に従うビジネスの範囲が小であれば小であるほど良いこと、且つまた政治的争点が少なくまた小であればある程、政治的ゲームでやりとりされるボールが重すぎたり夥し過ぎたりとはならない帰結となる。・・・その他 (編者)

IV—(5)—1～5

民主主義的成功の諸条件

1 民主主義的方法が「成功裡に作動している」とは、私は次のように意味付けるものである。民主主義的過程が着実に——そのうちに非民主主義的諸方法が訴えられるような諸状況を創出することなしに——それ自身を再生産していること、及び民主主義的過程が時事の諸問題(current problems)と——政治的考慮の中に入り得るあらゆる諸利益が長期的に受け入れられる*)ことを見出すようなやり方で——取り組まれていること。これらの判断基準は我々の個人的な価値判断とは独立したものと考察されるであろう。民主主義的過程は、採択された意味で、成功裡に作動し得よう。しかしそれにもかかわらず、いくらかの観察者達は——例えば道徳的、優生論的(eugenic)、ナショナリスト的、文化的な諸根拠に基づいて——不承認という帰結をすらもたらすこともあろう。

分析の結果として、我々が尚、民主主義的成功の諸条件に言及するのをためらわざるを得ない正にそのことは、それが民主主義についての——厳格な意味での——相対主義的見解(relativist view)を——これまで終始配意してきたように——我々に委ねてしまうということになるからである。あらゆる時期とあらゆる場所で社会主義に都合の良いケースはないのと全く同様に、民主主義に都合の良いような絶対的に一般的なケースなるものはない。政府をつくるという民主主義の単なる可能性さえもが相対的であり、歴史の幅広い展開の中でも非存在であったのである。更に実行可能な替わり得る制度の欠如から民主主義が自己賦課(impose itself)をするに至った歴史的な諸パターンの中においてすら、成功裡の諸条件を満たすのに失敗することがあり得るだろうことが示されている。三つの事柄——可能性、不可避性、作動可能性——が区別を保たれるべきである。・・・社会主義のケースにおいてみられたが如く、一致してあるべき可能性、不可避性、作動可能性についてのこの失敗は、社会での社会的組織構成の中の——あるいは心理学的上部構造の中の——特定の諸部門における進化の跛行または外的諸要因、乃至は何等かのアブノーマルな政治団体の中に発生した緊張に、起因しているとみてよい。例えば民主主義が表面的には可能ではあったのだが、1848年以降のフランスでは不可避性ははっきりとなかったし、1918年のドイツでは不可避性はあったのであるが、成功裡の作動についての我々の判断基準を満たすことに失敗した。・・・簡

略化のため、我々は成功裡の作動のための諸条件だけを扱うことにする。それらは驚くほどに数多くあるので、いくつかの見出しの下にグループ分けされ得よう。

* 長期の諸状況には、そのうちにあらゆる意味深き利益が民主主義的方法を受け入れるが、その結果については受け入れ難いと思出すことがある。それ故に我々の基準を満足し得ないだろうことも。

2 最初に言われなければならないこと。一方において民主主義的方法なるものは、役職にある政治的指導者達にその様々な仕事につき、人並み以上の諸能力と強い性格——その能力たるや、更には同じ諸個人にはみられないことがしばしばであるほどのもの——があり、他方においてその民主主義的方法なるものは、それ自体、それらの諸能力の全ての存在を効果的に試すものではない、ということをお我々の分析は見てきている。我々の意味での成功の諸条件に転じるには、これは二つの事柄を意味しているように思われる。

第1、我々は競争的リーダーシップの理論(the theory of competitive leadership)を受け入れているのであるが、その根拠は他の根拠に混ざって、有権者の諸機能——大衆の中にある人々はその諸機能を果たす点で均質ではない——に帰せしめることができない、というところにある。そうだとすると、それにも拘わらず、我々は民主主義が作動するであろうと認知するのは次の場合においてのみであらねばならない。即ち、有権者(the electorate)、諸政党(the parties)、政党機構(the party machines)が煽動家の大嘘の提案とその政治活動を排除するのに十分な、更には気紛れな計画(freakish program)、大衆の腐敗(mass corruption) *、大衆心理と小児病(mass psychosis and infantilism)をはねつけるのに十分な、更にはまた、少なくともある程度には将来のためにを感じ且つ考えるのに足りる、そうした然るべき水準の知性と道徳的性格を備えているということ。その上我々は次のことを論証するため止まる必要はない。即ち、そうした水準に迄高められた有権者達や政党組織があり得たということ、だからこそこれらの諸条件が非現実的であるとは言われ得ないということ。但しあらゆる民主主義をもつ有権者達と諸政党がその域に達した、あるいは民主主義的方法そのものがその水準にまで彼等を引き上げる傾向があるといったこ

とを保持することは非現実的であるだろうということをも。しかしながら私が提言したいのは、人種的平等に次いで、資本主義社会での生活に付帯した責任についての訓練こそが、こうした諸条件が充たされてきているそうした諸ケースを肯定するための考慮されるべき最も重要な要因であるだろう、ということなのである。

*) 大衆の腐敗については現代の諸条件の下でも——古代の諸条件の下でもそうであったように——、国民の大部分を占める諸階級に対し個々人の金銭的な諸利益(pecuniary benefits)を約束することによって有権者を動かそうとする試みである、と意味付けられる。

第2、選出についての一方法がもたらす諸結果は、同様にそれより選出がなされる人材(the material)に依存するであろう。だから民主主義的方法の成功は、政治的リーダーシップに向かった競争的な抗争が役職に就こうとする意欲のあるタイプの人士達に対して惹きつけるところが充分であること、を要求しているようにみられる。この条件は第1のそれから区別される。次のことは真実ではないのである。「あらゆる国民は賞賛される政府をもつ」(“every nation has the government it merits”)。これを言うなれば、ハイレベルの選挙権者の知性と道徳的性格があり、それに国民の中に人材の適切なストックの単なる存在がありさえすれば、それに相対応して有能な政府を生み出すのに十分なものがある、とは言えないのである。良き人材は存在し得るだろう、しかし彼等は政治の世界に入っていくことを拒否することはあり得るのである。而して、政府は知性と道徳における国民の水準(the national standard)よりも下であることが——上であることがありうるのと同様に——あり得よう。

手付かずの資本主義(intact capitalism)は前者の結末をもたらす傾向をもつ。十分な振幅をもった資本主義的進化と未だ傷ついていない資本主義的な諸価値の図式とを伴って、最良質の頭脳を吸収するのはビジネスである。政治に残されているのは次のようなタイプの人々に対してであると言えよ。単にそうした人々が(政治の世界に)存在すること、それが政治以外のことならばどんなことにも成功を収めることができるような人士をして、その場合、政治に入ることをためらわせるような人々。このことは、しかしながら、民主主義に特にそうという訳ではない。どんな政治的方法でもその成功は、公的諸事件の管理に当たる人々を供給するところの階層あるいは諸階層(the stratum or strata)の質と条件付けと共に、

変わるものであろう。実際の見地からすると、このことは次のことを言うに等しい。社会主義ではない社会にあってはどんなことにおいても、民主主義的方法の成功裡の作動は高度にその資格を与えられた政治的階級——それは外部の有能の士を締め出すものであってはならず、逆にそうした人士を引き出すことに十分に強力であるような階級——の存在することを要求する、と。大国の中では、イギリスが民主主義の成功の頂点にあることを示していると信じることで、私と同意するような読者ならば、この長所を評価するのに何の困難ももたないであろう。＊)

＊) その長所は、我々がそれに紙面を割くことができる以上に多くの注意を払わせる、という利点がある。我々が容易にそれが逆説のようだとす——我々がそう考えるに至った時には単純に常識なのであるが——ところは次のように述べることにより伝え尽くされよう。即ち民主主義的方法が成功裡に作動するであろう場合には、そこに産業ブルジョワジーの上層(本書の第Ⅱ部において彼等の超資本主義起源の諸要素との共生につき述べられたところを想起されたい)との間に結縁はあるが同じものではないような政治階級が存在し、しかもその階層がそれ自体民主主義的方法の所産ではないということ。そうした諸ケースにあっては、民主主義的選出という仕事が前もってその働きの一部をなしている非民主主義的選出によって促進されることになる、と。

それはまた正反対のこと(*per contrarium*)によっても検証され得る。政治的階級の不在と結合させられるその際立った失敗例は1918年以降のドイツのケースによって提供される。この事例は——通常歴然たる失敗として考慮されるであろう——1920年代のドイツの政治家達にみるべきものが何もなかったという正確にその理由の故に、それだけ教訓的である。平均的な国会議員と平均的な首相や閣僚達は真面目で思慮深く、それにとりわけ厳しく正直であった。このことは全ての諸政党にも言えた。そこここに見出された有能の士をばらまくことに対しては敬意を払うとしても、それは高位の指導部(*the high command*)の内部または近傍にある位置については稀なことであり、更には彼等の殆どが目に見えて額面以下(*palpably below par*)の人物であった、ということが付け加えられなければならない。いくらかのケースでは哀れなほどにそうであった。このことは全体としての国民のもつ能力やエネルギーのどんな欠如のせいではない、ということが今や明瞭である。しかし能力やエネルギーが政治的キャリアを門前払いした(*spurned*)のである。そして当然のこととして、そ

れを引き受けるであろう人士の属する階級がなかったのである。

3 諸条件の他の一つのグループは民主主義的規律 (**Democratic Discipline**) という語句の中に要約されてよいであろう。民主主義的方法を成功裡に作動させるためには、有権者と諸政党に知性と道徳的性格に比較的、高水準を要求する、ということを我々は検討してきた。しかしそうした水準は民主主義的ゲームの諸ルールが全ての人々より受け入れられ、また観察されるであろう、ということをそれ自身保証するものではない。事実問題として、そうしたことは決して完全にではない。しかし、納得し得るべく (**reasonably**) 安定しており、しかも能率的な諸政府を生み出さんが為には必要とされる、そうした最小限の規律ですら確保されることが、非民主主義的な制度的諸パターンにおいて相対応する量(の規律の確保)にみられるよりも一層に困難なのである。その理由は投票をめぐる競争的な争いがルール違反を招くからである。そうであることは、我々が自らに民主主義的規律を構成しているものを問うならば、直ちに明瞭となるであろう。民主主義的方法は諸政府をして選挙戦の結果に抛らしめるが、それはまた諸問題への有権者の直接的な影響力を——非民主主義的な諸方法が行うよりも少しも劣らない程に——効果的に排除する。我々が検討してきたように、このことはある程度には議会にも——議会の直接的にして第一次の機能は内閣を創出したり解体したりすることなのだ——当てはまる。即ち、ついていくか、ついていかないかである。もし議会が首相の指導についていくことを止めることにもなれば、そして首相を取り替えもすることなしに案件 (**matters**) を議会自身の手引き受けることにもなれば、政府の威信と能率 (**prestige and efficiency**) の双方は致命的に傷つけられることになる。もし有権者が特定の行動の諸道程を議会のメンバー達乃至は行政のメンバー達に負荷することを試みることになれば、諸事態はもとより更に悪くなる。政府はその場合、完全に麻痺させられることになるだろう。それこそが、何故に近代民主主義の当初から議員達がいつも有権者からの教訓 (**instructions**) に腹を立ててきたのか——彼等の抗議はその古典的定式化 (**classical formulation**) をエドモンド・バークから引き継いできている——、並びに何故に諸内閣が逐次その議会の支持者達の「信任」について主張するのが常であるのか、の理由である。このようにして、もし民主主義的政府が成功裡に作動していくべきだとなすならば、投票者達、そして——ある程度は、少ない程度においてであるが——議会の議員達は

多きに過ぎる主導性を自制しなければならない(must refrain from too much initiative)。・・・

陳情団、圧力団体、及びそういったもの(lobbies, pressure group and so on)はそれ故に民主主義の精神にとって無縁であり、敵なのである。陳情書をもった議員達を溢れさせているアメリカの慣行すらもが民主主義的規律の違反——読者はこの叙述にいくらかの驚きを恐らく感じるようになるが——なのである。但しこうしたことの全てが民主主義の作動を致命的に傷つけるものではない。その理由はどんなシステムでもある程度迄の逸脱した慣行をもつからであり、しかも争点に対する直接的な影響を行使しようとするそうした試み——とりわけ陳情書による試み——はもたらず実際上の配慮においてそのオーガナイザーが考える程には恐らく大ではないのが常であるからである。

しかし、もし誰もが自分の票が熱心に争われることを知っておれば、更にもし誰もが——投票者としての、または議会のメンバーたるの資格において——本当にその人自身が諸争点のひとりの裁定者であると信じている程に、束縛されざる敬意を以て(with unbounded deference)存在することにならされてきたということになれば、そうすることは多くの量の自己負荷された規律を引き受けることでもある。とりわけ議会議員に対しては政府計画を——彼等がそうすることができたであろうそのそれぞれの時に——ひっくり返すことを自制し、更に時には自分達の自覚(conviction)に反しても支持を与える、という多くの量の自己抑制をそれは課すことになる。しかしながらそうした自己抑制は、個々の議員達にとっては、議会手続の中の特定の諸ルールを受け入れることによって、さほどの困難無しに提供されることができると観察されるべきである。例えば議会開会期の配分(allocating parliamentary time)という方法は、それ自体彼等に口枷を入れる方向での、且つ彼等の行動の自由を削減する方向での、長い道程を歩ましめることができるようにする。あるいは彼等は——嘗て一度もなされはしなかったが——特殊に迷惑な諸々の事柄を行うこと、例えば追加支出を含むような諸施策の提案など、を禁じられてよいのである。そうした諸制限に従っている議会が、その場合、それが自分達にとって必要ではないと反応することもいくらかの妥当性をもつものであり得る。このことはだが全く真実という訳ではない。諸制限が一般的ルールとして現存している場合に、それを恭しく受け入れる人物は——それらの遵守が完全に個人裁量に委ねられるような特殊なケースにおいては——それらを破りたいという気分を尚もっているかも知れないのである。しかしそれが必要

とされる規律の全てではない。リーダーシップをとるための自由競争の民主主義的方法は、全てのリーダーとなり得るべき人物に対し、自分のケースが如何なるものであるかを、混乱を招くことなしに示すことが可能でない、と作動することができないのである。更にこのことは意見の不一致——それは誰の仲間の市民達の見解であろうと、また意見がどんなものであろうと、誠心誠意の敬意を以て聞くものでなければ知覚し難いのであるが——に関わるある程度の度量(a degree of toleration)を含意している。度量(寛容)はだが絶対的なものではあり得ない、とは先に指摘しておいた。経済の領域では、競争の自由よりももっと厳しい何等かの競争が常にあり得たのであるが、そこでは十分に意味のある数の人々の社会道徳に対して攻撃的であるようなやり方で競争するようなことは——例えばであるが——許容されることが誰にも出来得なかったのである。民主主義は——もし非民主主義的な諸見解の喧伝を禁じようとした場合に——自らの諸原則を踏みにじっていることになるのでは、という厄介な設問(the vexed question)は、私の見解では、否定的に答えられなければならない。これに適用できる原則そのものがないのである。しかし、もとよりのこと、反民主主義的諸見解が——例えその存在は自由であったとしても——自発的に拒絶せられる場合においてのみ、民主主義はデザイン通り理想的に作動するであろう。民主主義の教義が政治的保護の必要に置かれることにもなれば、これこそそのこと自体が不吉なる徴候になり得るものとして拒絶される、といった如くに。

注目に値するグループの死活的とも言うべき諸利益や諸理念が扱われる時はいつでも、その命題の論理的帰結は忍耐と自制という民主主義的諸徳性の実行(the practice of democratic virtues of patience and self-restraint)を一層に召喚する。即ち、人々は彼等市民達の諸見解を尊重するだけでなく、彼等のもつ意見に従う用意もまたなければならないのである。人々は民主主義的なやり方で到達されたどんな争点の設定すらも——例えそれを好まないものであったとしても——喜んで受け入れなければならないということ、更には民主主義的手続きを侵害するような方法で到達されたどんな争点の設定すらをも——例えその帰結が自分達に適するところが充分であったとしても——拒絶しなければならないのである。

議会の諸活動と政府によって決定された行政的諸方策——議会の「信託」(“confidence”)として関連させられるものを保持している——を受け入れ

ることの用意よりももっと多くのものを上記は含んでいる。我々は次のことを検討してきた。即ち、現代の諸環境の下では、公務員を選出することの民主主義的方法は——その合理的な適用領域の中では——その直接的適用が少数の政治的官庁に限定される場合においてのみ、よく機能することができるであろうこと、その他方で、公的諸機能の残余は非政治的な役職に任される——その政治的領域との連結は排他的に首相によってか、彼の閣僚(colleague)によって指名された(または「推薦」された)彼等の存在(特別職)を構成することになる、ということ。他の公的乃至は半公的な役職は、例えばイングランド銀行の総裁の職がそうであるように、如何なる政治機関からも独立して充たされることになることもあろう。いずれのケースにあっても、こうした職務(service)は、純粹に政治的な視点で指名決定することが少であればあるほど、一層に能率的に果たされることになるであろう。

今や民主主義的な規律は、一方において、政府、有権者、諸政党がこうした指名の問題では非政治的な諸原則を受け入れることを必要とし、そして他方において、政府、有権者、諸政党が非政治的に指名せられた人達によってなされた諸決定を——例えそうした諸決定が時にはそうした連結を縫い合わせることに失敗することがありえたとしても——受け入れることを必要とするのである。中央銀行や法廷はその最も重要な例ということになる。そうしたことに公的部門か議会によって支援せられた見解を押し付けようとする試みがあるとすれば、そうした試みは民主主義のエンジンの中にストレスがかかっている徴候である。諸条件についてのこのセットを充たさんが為には、その社会的パターンはもてる諸特質(traits)についてのその特別の組み合わせを呈示するものでなければならない、と指摘することは恐らく必要はないであろう。討議するべき役割がかくもはっきりと割り当てられ、しかも拮がることの許容を示す尺度がかくも大であるような政治的方法は——益々以てそれだけ——合理主義の文明の一部乃至はひとかけらなのである。しかし、公的精神についての充分に発達した合理主義かというとは充分ではない。それは伝統主義または現存の諸制度に対する敬意のもつ——多すぎることも、少なすぎることもない——特定の手段と結合させられていなければならない。何となれば、変革(change)はそうでなくしては秩序だつてなされることができない、それ故に成功裡にはなされ得ないからである。このことの含意の発展は差し置いて、私は、我々が手付かずの資本主義と呼んでいる社会的パターンが双方の方向において良き資格を備えているように見受けられる、ということに注意して

おくだけに止めたい。

4 促進的諸条件のワンセットとして、最後に述べられてよいものがある。前に述べた諸条件のいくつかと同様に、これらの殆どはいずれの政治的方法についての議論の中にも現れるものであろうが、民主主義では追加的重要性をもつだけである。どんな他の政治システムにも似て、民主主義はそのサービスを制し得る官僚制度の質(**the quality of bureaucracy**)が高ければ高い程、及び政治力学からのその独立(**its independence from politics**)が大であれば大である程、一層成功裡に作動するであろう。このことを繰り返し言う理由は、民主主義のケースにあっては、多分に見逃されやすいからである。第三共和政(**the third republic**)を約70年間に及ぶ期間幅に渡って混沌(**chaos**)から救ったのは最初のナポレオンによって繰り返され、改良されたフランス官僚制であった。実際にそれは秩序だった政府を可能ならしめた。オーストリアーハンガリーー君主制(**Austro-Hungarian Monarchy**)の滅亡から起こった独立諸国家(**the succession states**)を担ったのは、かの帝国の官僚制からの遺されたものであった。

これもどんな他の政治システムとも同じくということになるが、民主主義的方法は政治的決定に従属する事業の範囲(**the range of business that is subject to political decision**)が小であれば小であるほど、更には政治的な諸争点が結果的に赴こうとするところ(**the political issues tend to become in consequence**)が僅かであればあるほど、また単純であればあるほど、一層滑らかに作動する。公共行政の諸装置が国家の諸活動の範囲(**the range of the activities of the state**)が小であればあるほど、より良く作動するであろうということを持することと、これは同じではないことが観察されるべきであろう。公共の事業と政治的に従属する事業は異なった事柄なのである。・・・しかし民主主義にとっては、最初の標題の下に留意された成功のための諸条件(2. と 3.・・・編者)を全く例外的な程度にまで充たされることがないとなると、政治的ゲームの中でつくられた諸々のボールである国民的諸利益たるや最早重きに過ぎることも多きに過ぎることもないのだ、ということが特殊に重要である。もしそうでないとすると、その場合は民主主義的方法は——こうした諸条件が充たされるところから程遠い諸ケースにあってさえも——有権者(**the people**)の大多数に対して長期的に満足を与えることがあり得よう、ということになる。

殆どの観察者達が成功裡の民主主義的政府の諸事例の間にリストするだろういくつかの諸ケースは、そうした基盤においてのみ考慮され得るのである。

そこでは成功の他の諸条件が実際に例外的な程度にまで充たされている、といった場合においてすら、成功はいくつかの場合、諸争点の厳しい制限によってより容易なものとされたのである。・・・例えば、1830年から1905年のイギリスを採ろう。そこには十分な装いをつけた討議の為の養素 (food) を提供する対外政策があった。そして一つのケースでは一大選挙キャンペーンを引き起こし、今一つのケースでは一大憤激の波 (スーダン問題(the Sudan question) についてのグラッドストーンの処理) を引き起こした。しかし一般的に対外政策は国内政策の前線的ランクにはなかった。国内問題には財政問題と参政権問題(finance and franchise)があった。これらの処理がこの期間の政治的成功を実質的に構成していたのである。しかし第二次ランクの諸争点——特許であるとか、教育であるとか——まで降りてくることがないならば、一つの大きな争点だけが残されたことになる。再度言うようだが、あらゆる問題の中の最重要なもの、政治的に言えば、アイルランド問題であった。そしてそれが喚起されたその方法と、それが盛り上げた不愉快な駆け引き(unpleasant tactics)は明らかに示している。政治的世界はそれを政治的ゲームにおけるボールとして選んだ、部分的には少なくとも他の要求として、のだと。・・・手付かずの資本主義の社会的パターンは、またもやこの条件をよく充たしている。ブルジョワジーのメンタリティと諸利益はその国家を駄目にする傾向がある。しかしそうすることにより、彼等はそうして政治的な誤管理(mismanagement)に対する諸々のオポチュニティを最小限に迄切り下げるものでもある。このことは、実際、ブルジョワデモクラシーの本領(the essence of bourgeois democracy)を構成するものである。

いくらかの政府の非民主主義諸形態に似て——他の非民主主義形態のそれとは似ていないが——、民主主義は国民を引き裂いて敵対する諸陣営にもっていくような根本的な諸争点と取り組むには悪く整えられている(ill qualified)と言う他はない。アメリカ南北戦争はそうした民主主義的な規律を挫折させた諸事件の中の古典的重要例である。そうした挫折は、ある争点が当該社会の十分に大きいセクションに対して国内的な機構(domestic mechanism)によって解決受理させるには重要性が過大に過ぎる時にはいつでも——即ち彼等自身による以外には解決の道はないと受理するように解決される時にはいつでも——起こるのであろう。問題に召喚

されるのが国民国家(the national State)——分離独立(secession)のケース——であるか、あるいは現存の憲法——革命のケース——であるか、いずれにせよ民主主義的方法は挫折する。そうしたような諸争点とそれに付帯する興奮(the incident excitements)が不在であればあるほど、またはそれらが比較的重要な分野に閉じ込められていることが大であればあるほど、そこでは社会的且つ政治的な機構の本質的な諸部分が問題とされるような措置が少ないということであり、それだけ益々民主主義は成功裡に作動するであろう、ということである。いくつかの他の諸形態の政府にみられるよりも、民主主義においてこのことが一層に真実である理由は、自己規律が民主主義過程の本質的要素だからである。それが失敗するどんな場合にあって、民主主義の兵器廠(in the arsenal of democracy)の中にはそれに置き換えるべき何物もなく、民主主義の精神とは無縁の諸方法が相変わらず頻出し来たる、ということになる。

我々は民主主義的方法が格別の困難に遭遇するのは対外政策の分野においてであることを検討してきている。このことに例外のあることは事実である。一方において、国の領土の侵害といった誰がみてもそうしたものとして誰によって然るべきものとして(as such)認知せられるような単純にして一過性の緊急諸事態があり、完全に民主主義によってよく処理されることができる。他方において、一定の作為乃至は不作為(a certain course of action or inaction)が、多かれ少なかれ、それぞれ全ての政府に引き継がれて国民的伝統となっている程に長期間に渡って来たされている、といったように慣行化されていることがあり得るような国がある。一つの事例が今日孤立主義(isolationism)として関説されているアメリカの政策である。しかし、国民的事情や国民的野心が対外政策を——遠い諸目的と困難な諸駆け引き(distant ends and difficult tactics)に巻き込んでしまうような——込み入ったゲームの中に移し込むような時にはいつでも、民主主義は容易に失敗か、しからずば民主主義であることを止めるか、という選択に直面しなければならないであろう。・・・

こうなる理由は、またしても、そのような重要にして興奮をもたらすような諸々の事柄には、公衆や議会は民主主義的な自己規律を保持し得ない自分自身を見出す、ということである。彼等は民主主義的なやり方で自分達の影響力を行使する——即ち、自分達の政治的支持を与えるか引き揚げることによりそうする——ことに満足しはしないであろう。ではなくして、私が先に指摘してきているように、それぞれの動きについての自分達の見解を別々に、立腹した調子で、そこからそれぞれの動きはその意味を導く

ところの一般的情況(**the general setting**)には考慮することなしに、言い張ることを要求するであろう。そしてこのようにその国民的ゲームを駄目にしてしまうであろう。熱狂者達(**enthusiasts**)はもとより、そこにどんなそのようなゲームもあるべきではないと応答するであろう。しかしこれらが不合理な帰結であることは免れないであろう。而して強力な諸政府あるいは弱い諸政府の背後にある諸々の官僚達は、それには一つの救済策(**remedy**)が事実ある、換言すれば、秘密外交(**secret diplomacy**)があるではないか、と応酬してきた。秘密外交は——それがあらゆる嘘をつくこと、外国列強に対してよりも、どちらかと言えば国民や議会に対して嘘をつくこと、からは全く離れても——熱狂者達には甚だ不人気であり、しかも実際には不満足な解決以外のものは提供しはしない。もしそれが失敗すると、その時は独占的リーダーシップ(**monopolistic leadership**)が合理的な計画立案の中に諸利益を求めることになるであろう。それは経済の分野で大規模事業の管理のもつ優越性に対して設定せられる諸利益と類似したものである。民主主義は帝国主義者の野心をもたない平和志向のブルジョワジーに似合った政治的方法なのである。(Democracy is the political method that suits the needs of a pacific bourgeoisie without imperialist ambitions.)

5 民主主義的な政府の能率は不可避免的に傷つけられる。その故は議会の中での及び院外での途切れることのない戦いがその指導的人士達に負荷するエネルギーの、その途方もない損失の故にである。途切れることのない競争的紛争は、票の「取引」なる章句(**the phrase about “dealing” in votes**)によって賞讃的に表現されるような偏り(**the bias**)を授ける。それは<政府の>支配にある人士達(**the men at the helm**)に短期的見解を強いるものであり、更に——遠い目的に対し整合的な仕事(**consistent work for far-off end**)を要求するような——そうした国民の長期的利益に彼等を資させることを困難ならしめている。このようにして民主主義の下での首相は——自分の命令を部下に受領させることを確実にすることに全く手一杯で——戦略を成り行き任せにせざるを得ない将軍に似ているかも知れない。批判は多々言われるであろう。もし我々がこの問題を抽象的に考察するのだったとしたら。しかし我々は現代的諸環境の下で私には考察に値する唯一のものであるようにみえる一つの特殊なケースに自己限定をなしたい。そのケースは二つの条件によって規定される。即ち、よく訓練さ

れた官僚制があつて、その専門家の助言がアマチュア達の為に利用可能である、更に民主主義的方法の適用が首相とその代理官達——言ってみれば他の閣僚達——に限られる、と我々は想定する。このケースでは批判は当たらないように見受けられる。というのは、どんな配列構成の政府にあつても、妥協(compromise)が政治的リーダーシップと、専門家または部門上の練達者(competence)との間に打ち込まれなければならない、そしてこの妥協という民主主義的形態は——他のケースにみられるよりは——より良く機能するとも必ずしも言えないとしても、より悪く機能するとは必ずしも言えないのである。

この問題にはもう一つの側面がある。民主主義の下では、公共サービスにおける非政治的な諸々の地位への指名は、行政サービスの、軍および司法の、更に彼等がトップにいるアマチュア達に与えることができる専門的アドバイスの質の高さからして、これらのアマチュア達——首相と国家のもつ様々な部門(department)を管理している第二次的リーダー達——の手中に握られているのである。獵官制度(spoil system)といったような事態——それらに悩まされたどんな民主主義もが時の経過と共に成長していくと期待せられてよいところの様々な諸不調は過ぎつつある、という根拠において——を無視するというのを我々が選んだとしてさえも、実態(the fact)は、政治的指導者達がいつも——それは人と事情に従って大きく変わるという程度においてのことであろうが——支持者達からの様々な圧力下であり、または——彼等の政治的前途の展望を改良せんがため——「引き立て」(“patronage”)を用いんとする誘惑の下にある、ということ留めているのである。他のシステムに反対して論じられることが何であれ、——それは充分にあるのだが——、この圧力と誘惑が民主主義的な方法の中にだけ(alone)内在していることは正確にそうなのである。

我々は服務規定(service rule)と巨大官僚制の権威(the authority of a great bureaucracy)が適切な治療薬を供与してくれようと論じることで幾分かの慰めを引き出すであろう。しかし昇進の服務規定は化石化する。そして官庁の人事当局の権威が、誰が昇進させられるべきかに関する当該団体の意見の重みを確かに増大させるが、その意見の価値を増大させることには必ずしもならないのである。そうは言っても、少なくとも潜在的にはその存在を投票をめぐる成功裡の紛争に負うことはないような一機関による選出が、より良き諸結果を約束することは疑いない。このことは、しかしながら、我々に目立たない論点に至らしめる。即ち、アマチュアで

あろうとなかろうと、政治的リーダーシップをめぐる競争的紛争の中から勝ち誇って出現してくるのは、そもそもどんな種類の人々となり易いのか？ということである。民主主義に対する反対の判定に前提として資すことがかくも多くの諸命題——例えば良き志願者をつくるような諸資質は必ずしも良き閣僚をつくる諸資質とはならないといった命題——を受け入れざるを我々は得ないのであるか？ということである。我々は——私の考えでは——この命題を受け入れざるを得ないのではあるが、だからと言って、それは真実の全体を伝えるものではないということである。

選出についてのどんなシステムもそのテストの性質に従って評価がなされるであろう。そのテストは特定タイプの人々を有利とさせ、更に他のタイプの人々の決定に対抗させるような特定の諸才能を過度に発達させるものであろう。民主主義的方法は政党機関を運転することに妙技(knack)をもつような人々に都合よく、その上自己宣伝において、人的及びセクト的な諸問題の処理において、賛否のはっきりしない付託事項(non-committal commitment)において、殆どの売り込みうる釣り合い関係において、微笑と不機嫌をミックスすることにおいて妙技をもつような人々に都合が良い。それはこうした資質を欠いた人々の上昇(the ascent)を禁じるであろうし、そうした人々を単なるコンサルタント達——その助言は政治家達が選ぶところのものよりも効果の無いものである——に縮退する傾向をもつであろう。・・・更に選出する機関の諸要求に見合った能力と選出された場合満足のいくような仕事を成し遂げる能力との間にはいくらかの不合理な裂け目があるのが常である。いくつかのパターンでは一人の男が宮廷風に威儀を正して登場する——ラミリーの闘いの結果として司令官に選ばれた M・ド・ヴィレロワ(M. de Villerois)がこの方法を示している——他の諸々のパターンではある人物が制定された諸ルールに従った昇進として上向する。——前に指摘しておいたように、この方法は賞讃に値する凡庸(meritorious mediocrity)に都合よからしめる傾向がある。更に尚他のパターンがあり、ある人物が非民主主義と銘されてよいようなことによって最高の統率(supreme command)に迄至る。この方法の古典的事例は法王の選出であり、その結論はイタリアの諺——「将来の法王として選出会議(conclave)に入っていく人は枢機卿(cardinal)として出ていくだろう」——によって示されるが如きものとなる。もとよりこうした事態を他の方法だと告発するほどたやすいことはないであろう。そして、結末は、問題なのは選出の方法が民主主義的か非民主主義的かの性質にさほど大きくかかっているのではなく、その方法が捌かれるそのやり

方に多分にかかっているのだ、ということにまたもや至るのである。

もしも、それにも拘わらず、我々が政治的方法そのものの諸長所を問い続けることを望むのであれば、その場合には我々がそこから出発した命題に一つの修正(a qualification)を加えなければならない。民主主義的方法のルールに従って最高位のリーダーシップの地位を支配する能力とその地位を充たす能力とは同一でないことは確かである。しかし両者の間に何の関係もないということも真実ではない。民主主義の下では、——投票をめぐる競争がその階梯を登りつめさせるような——そのタイプの人物が結局において統治のできる唯一の人物だ、と論じることができないのはもとよりのことである。そうするのは明らかに循環論(be circular)になってしまう。しかしながら、我々は次のようには論じることができるであろう。民主主義的手続きは正常には人的諸力量をテストするということ、並びにその力量なる言葉がもち来る諸能力は——政策の形成や行政において成功の為必要な他の諸々のことと、またもや通常には、結び付けられていることを別としても——首相室の中においてそれらの行使をしないということはないということ。如何にして人心を総攬するかを知ることと、如何にして国政を処理するかを知ることとは同じではない。しかし前者は明らかに後者の上に担わされたものである。更に政治家達をして国政の執務室に足を運ばせる流れ(stream)の中にはいくつかの篩(sieves)があり、その篩(ふるい)には実際には大きな穴がいくつも開けられているのであるが、愚者(moron)または多弁者(windbag)が通過することを禁じるのに全く効果がないわけではないのである。

(6) 移行の前線における諸屈折

摘要

社会主義は、すべての事柄が社会化に向かつての諸々の必然性から来るといった如く、常に説いて訴える。しかし移行は再度に試みることはあり得ないし、また一度それが確定された後やり直しを図ることもあり得ない。更にその時々社会化についての二者択一は、単に永遠の資本主義との二者択一であるだけでなく、それは先送りされた革命との二者択一でもある。革命かその先送りかの選択は民主主義の滲透と関連させられる問題である。社会化に向かつての民主主義の道程は常に社会主義者達によって邪魔されてきた。以前には社会主義者の民主主義的足跡として印象付けられるものが少ない、彼等の内のいくらかはブルジョワ急進派に由来する傷ついた少数諸派として社会化のための直接的権力を要求したが、民主主義時代の公的感情を害するものであった。近時にあつては大衆は均質的なプロレタリアートとなるのではなく、そうしたものとしての自律的な意志作用をもつものではない。諸利益の多様な種類が大衆の中で分化させられ、労働階級の中にあつてすら、上昇志向を強くもった上位階層を析出する。これらの状況の下では民主主義的自制は社会化を先送りするように働き、体制はそうである限り緊張を緩める。もしたまたま一時的な多数派を得るチャンスによって社会化が掠め取られることにもなると、そうした革命統治の下ではそこには創られた——自律的でない——意志作用があり、民主主義的諸ルールは断念される。民主主義的諸要素が少なければ少ない程そうした掠め取られた体制はうまく作動するのである。・・・その他 (編者)

IV—(6)—1—a～d 2—a、b

移行の前線における諸屈折

1—a

それを説く人達の誠実性について、だが我々が到達した結果が人が考える程にはそれから離れてはいないことが明らかにされる。人物は造型できる粘土なのである。・・・このようにして集められた印象は我々が既に本書の中で注意した二つの事実により強化されるだろう。・・・

社会主義はある意味では常に説いて訴える存在である(*Sozialismus in a sense appeals ever to reason.*)。——諸事物(*Dinge*)が必然性に由来することは益々明白となり、均斉化がとりわけ所有の消滅によっていること。・・・コメントはここでは推論として可能である、どんな種類の諸差が残っているのか?・・・トロッキー——過渡期でよろしい。・・・どのようにそれぞれは資本主義に対して論じられているのか?・・・それは我々を一般的忠誠を超えたところに迄運ぶものであり、しかも単純に補償されるものでもない。・・・

1) 成果がはっきりしたものでない場合にはいつもそうなのだが、放縦なグループは存在することとなろう。

2) そこで様々な争点(*issues*)がある——今やスターリンだけがそれを裁定する、彼は人民を分割することで自分の時代を掌握している。不平等とセクト的問題。

3) 危険が冒され得るものとしてはあまりにも人任せである(批判もまた今やできるとしても)。

4) どうしても全能が前もってある(*eben Allmacht vorhanden.*)。・・・

私が移行について語る場合——物理的消滅、それは機構を消すだけでなく、人物をも消す——、移行の諸現象について私はもっと語らなければならないのか、それとも私は移行をここではそのように横道に押しやらないでおくことが許されるのだろうか!・・・

全てははっきりと移行に向けて押しやられている。・・・移行については第Ⅲエッセイで既に十分に述べられている。・・・かくして我々はどのように移行を評価し、信任状を与えるであろうかという問題に至る。ここで移行は社会主義と永遠なる資本主義との二者択一ではなく、延期せられた社会主義との二者択一の問題としてである。・・・はっきり望めることは、体制は、そこに替わるべきものがない場合——全てが施錠され尽くされて

いる場合には——、安閑であることができる。これを言い換えれば、一個の体制が休みなく押し付けられる場合、それは不断に拡がり続けるということ、あるいは人々が十分に成熟していて、否(ノー)を受け入れることなど尚あることだろうか？、だということ。・・・もしそれが「民主主義」であるならば、その場合はアジア的専制性に相対するどんな区別もないということでは？・・・それにしても批判と議論が、——しかし細かく点検すれば、先進的グループに位しながら成熟していない場合には、どこにおいてもそうであり得る、ということ。

1 - b

民主主義の前線における社会主義の価値。・・・特にモスクワ起点のどこか(その上に)・・・チェックにおける悲劇としてさえ・・・しかしノーマン・トーマス(Norman Thomas)は？熟考した。・・・イギリスの社会主義・・・

我々がざっと目を通した諸事実をみて、大戦(第一次・・・編者)の前の社会主義諸政党のもつ民主主義的事跡によって印象付けられるものが少なかったのは当然であるかのように見える。それが挫折しなかったことも過度に強調される必要はない——サンジカリストの行動は、言うなれば、実態上、統計的意味での一種の異常(an aberration)として現れることができただけである。しかしながら、あらゆるタイプの大戦前の社会主義が——これこそ重々しく取り上げられるべきことなのだが——何の機会をもたなかったということ、これこそ何にもまして強調される必要がある。いくつかの国々では社会主義者達は官憲の迫害を免れてかろうじて発生した。全ての国々で、社会主義者達は傷ついた少数派(vulnerable minorities)を構成していたのであるが、それは民主主義の時代における公的感情を害するとして受け入れられる余地があり得なかったのである。民主主義の諸態度と諸スローガンは殆どが彼等を既に述べたようにかばうものであった。・・・キリスト教的並びにユダヤ教的調理律(Speisegesetz)の如きもの・・・その権力との抗争の中で彼等を助ける場所はその最たるものであった。そして普通選挙権のための戦いにもそうであった——ジョン・ブライト(John Bright)のような——彼はいつも岩場に向かう筏を操ることに失敗ばかりしていた——ブルジョワジーによって義務として進められたのである。どの場合においても、そのメンバー達は半宗教的熱狂をもって民主主義を敬愛した階層からのみ参加することができたのである。・・・社会主義者達はブルジョワ的過激派から来た(Sozialisten kömen von bourgeois Radikalismus her.)者であり、そのためには必要な

手段を権力に迄高めるといふ注目すべき要求を設したのである。・・・このことは既に述べられている・・・だがそれはマルクスによって繰り返して述べられている。・・・1848年に自ら放った一撃を防衛し、そして保持するために闘う。・・・不正常なストライキの理論・・・民主主義は少数派の取り扱いを示している。イギリスでは内閣はその多数派性が小となった場合に辞職する。・・・

どうか私が不誠実であるとして、これらの社会主義者達を責めているとは思えないでほしい。彼等の予言のいくつかが脚光をもたらしたその中にある子供じみたマキャベリズムにも拘らず、彼等よりも誠実であった人々は嘗てなかった。その傍ら、私は社会的不和の中での不誠実には信頼しない。人々は彼等が信じさせようとするものを信じ、しかも彼等が不断に反復しているものを信じようとする。・・・

1 - c

政策を求めて叫んでいる社会主義者達。・・・だが内実は「実質の権力」(“real force”)を求めているだけである。・・・それではブルジョワジーとは一体何なのだろうか？・・・

各人が行うところのものは何か——誰であろうと理想的であり得るが、殆どの場合そうではない、しかもそのことは全く分かりきったことである。(問題は)これが意味していることではない。・・・国家社会主義(Etatismus)と全く同じではないか？ということも含まれる。・・・それは恐らくはここで？・・・社会主義者達は社会主義グループの諸利益をそれが促進する限りにおいて民主主義者である、ということが含まれる。・・・

悪しき民主主義者として、オポチュニストとして、どんな一種の材質からもいくつかの矢をつくる図式家であるとして、私が社会主義者達をけなすようもち出すことを試みつつある、と諸君に考えさせないために、私はすぐさま、この点では彼等は他のどんなグループとも異なりはしないのだ、ということをつけ加えておこうと思う。民主主義的諸方法はある与えられた目的——その目的は実質的に忠誠を要求するようなものである——に対する実際上の諸方法であるのが通常である、そして民主主義的諸理想(念)は、その民主主義が達成するであろうと望まれているものに由来する、それらの魅力を引き出すのが実際上通常である。今一つ、諸君がこのことは無神経な政治の実務家達(callous practitioners of politics)の態度だけの問題であると考えさせないように、私は諸君が彼等よりも上等な代物ではないのだということを諸君に示そうと思う。諸君の多くが正に今日かくもポピュラーになっている「民主主義は目的そのものだ」という戦場での

叫びを結び付けていることは疑いない。しかし諸君が意味付けているものを明らかにすることを試みてみよ。諸君は民主主義を、人民の意志——成人に達した市民達の多数派の意志——が行き渡っているべきことだ、という原理で定義するというのか。よろしい、それではもしその多数派が異教徒を火あぶりにすることに賛成していたとしても、それでよろしいのか？ 諸君はそうした民主主義を支持するというのか？ 私は諸君をテストしているのではない。このケースは決して幻想的なものではないのである。歴史の中で取り上げられるとしても、かのローマのネロ時代におけるキリスト教徒(あるいはユダヤ人)の焼殺とフィリップⅡ世治下のスペインにおけるプロテスタントの焼殺が、完全に多数派によって承認されたものであることは、いささかも疑いの余地の無いものなのである。・・・

このようにして、労働者、ホワイトカラー、農民等々が社会主義者であるべきであり、副次的な行論が完全に切り取られるならば、基本的にそうである、ということ根拠付ける考えを設する把握の逸脱性(die Digression)と誤謬性(die Falschheit)が適正な判断の場におかれなければならない。恐らくは、私がマルクスと今日のマルクス主義者の教義を取り扱った後、次の2項が続くことになる。a) 副次的な行論、b) 民主主義についての何事か、即ち、創られた意志——多数派でも少数派でもない——合意・・・

Ⅱ. においては、その場合、官僚制(専門家)機構(Bürokratie(Fachmann)Machine)についても・・・職業的政治家・・・特定の資質を備えた特定の集団の出現、知識人達・・・情報と数・・・遅延と代表制・・・全てがつくられることができる——差別がないことがつくられるならば、我々は神の恩恵に代えて人民の恩恵に至る(würde keinen Unterschied machen, wir kommen von Volks Gnaden statt Gottes Gnaden.)。全てにつき言及されることはできない。・・・諸君が弁護するものは何か？ 虚言による政府？・・・パフォーマンス・・・ロンドンの戦争危険保険・・・だがそれが意味するものは何か？・・・比例代表制——それが意味しているものは？・・・どこで独裁制が・・・

1-d Ⅲ. の為のスケッチ・・・

この場所で、即ち、何が過ぎ行こうとしているのか、あまりにも性急に求める、更には民主主義的社会主義に替わって然るべき指導者を生み出そうとする。・・・a) ボルシェヴィスト、b) 非社会主義の指導者・・・より軽からしめる。・・・予期されなかった、だがそれをつくるには長くかかる。・・・[もっと後で、その場合、掠め取られた勝利について]・・・「多

数派性がよって来るものはどこからか？ 少なくとも事物の過程において、という設問に対する事実の陳述の決裁されたものがそのようなものであるならば、社会主義は時の経過と共に他のものとなる、とりわけ「上層クラス」の転向(Bekehrung der “Oberklasse”)によってそうなるのでは、という設問が来たる。・・・それが要求する断念、恐らくここで。

民主主義的道程と民主主義的革命による移行は——たとえ事実上過ぎ行くこうとしているものによって危うくされることはあるとしても——可能である。しかしながら、ここから民主主義的諸方法による運営(操作)は区別されなければならない。我々が全ての——人民のロビイ(people's lobby)といった——そここの意味の乏しい章句の中にある諸ニーズを求める予言に注意を払わないのならば、また全ての他者を排した労働者(ファーマーを含めてもよい)の利益という意味での「人民のため」の経済を管理することのニーズを求める予言に注意を払わないのならば、更に「社会政策」(“social Politik”)の発展よりもより以上のものを問題にしているのならば、一切の生産手段が中央当局によってコントロールされているような経済にあって、民主主義的な諸手段として価値をもつであろうものは何であるか、また労働組合や職域結合(労働者人民)の持ち場(ポジション)に変更のあるだろうところのものは何か？である。最初の例においては、選出諸機関(elective organ)、閣僚達が彼等が軍隊をコントロールするのと同じように生産をコントロールするだろう。民主主義方法は、政治的方法が国民生活の全体をカバーするところまで拡大されるであろう。まず、我々が想起しなければならない諸利益は——諸意志と個々のポジションの均斉化(Gleichschaltung)が多く、諸問題を単純に削除し、民主主義をより容易にすることである。諸争点の自己決定はたとえ疑わしいものであってもやり過ぎされる。W.P.A(Work Project Administration 事業企画庁)の労働者は一部の労働提供者とは対立する労働者と同じ立場を構築することになる。他方において、あらゆる非能率と諸困難が何がどうあろうとより厳しいものとなる。そこで次のことが言われることができる。民主主義的方法が機能している時とところにおいては、民主主義は諸機関に任せるところが過大でないが故に正確にそうであったのである。同じ理由から、それが国民生活に広く行き渡っている場合、機能しない。・・・ここにおいても次のことが告げられ得よう、私は民主主義の資本主義的起源と民主主義のごつごつとした精神(the rugged spirit)——それは個人的な成果の中に信をおくものである——をあまり強くには強調してはこなかった、と。今や首相が議会に坐していなければならず、それだから短期的な

政策のみが可能だという状態は掛る目方が一層に重くなるであろう。更にそうすることに依存することが過度に大となると、議論の自由自体が何か疑わしいものとなり、アジテーションの自由が確実なものとなるであろう。

選出の方法と政治的コントロールが今日でも民主主義の土台になっている諸要件(*Angelegenheiten*)に限られており、その上残余に対しては非民主主義的な選抜(「考量」(“*ration*”)といったものの固執)に等しい任命をでき得る限り多くさせる場合において、当然のことながら、より良く作動する。それは労働者の利益を消費者の利益よりもさほどに多く強調するものではなく、労働者に対しては監督者——近似的には今日と同様に独立した存在であるが、恐らくはその上に更に大なる権威がもたれる——が対置されることになる。・・・失業は訓練によって一掃される(*エッセイ III*で、それとの混交)、・・・リーダーシップと登録された責任・・・更にまた自律性(*Autonomie*)と個別企業(*einzelne Unternehmung*)が、統治とは離れて、ずっと活発に作用させられる、ということになる。・・・

この視点が考慮に入れられれば入れられるほど、民主主義的なものは乏しくなる、それを我々は既に見届けている。そして今や何故に他方において、民主主義、資本主義、私的所有制といったことが前提となっている(現実には独立したものである!)ということが現実に正しくないことを見届けているのである。歴史的に、及び遺伝結合的にも、また論理的にも?・・・このようにして、経済が静態的であるならば、問題は極めて軽かろう。

2-a

ここにおいて我々は入念に仕上げられなければならない一つの論点に遭遇する。彼等は恐らく社会主義者であるべき筈の者達であった——彼等はプロレタリアートであり続けている——しかし、1) そうでなかったとしたら、2) それほどはつきりしたものでなかったとしたら、その良きところ(*the good of it*)とは一体何なのか!・・・

ここでそうだと客観的利益のみである、更にその場合、これらの諸グループの問題から適切な争点と最後の屈折(*Endgebogenen*)に移行することとなる。・・・その最も予期されなかった困難(正統的理論からする)は事務職階級の問題である。・・・既にしてあらゆる肥大の事実が概念にまで至っている(常に増大しつつある、諸機構は管理されなければならない、と)。・・・しかしその場合、地位を受け入れる(*Stellung nehmen*)、即ち、

彼等はそれを望み、それであり、そうならうとする(wollen, waren, werden)——それは当然のことながら圧力と錯覚(Druck und Irrtum)でしかない。・・・もてる諸利益の認知はだが、a) 事実、b) 全くそうはつきりしたものではない、ということ。それは公理(Axiom)ではなくして事実問題(Tatfrage)である。・・・これらの事務職達の参入についての冷笑。・・・しかし、ここにおいて、我々は独立した職業を寄せ集めて多数派性を得る。そこで今や第2の問題に至る。プロレタリアートと非プロレタリアートの非現実的な対立。所有(Besitz)と非所有(Nichtbesitz)についての移行は漸進的であるのが本質的である。残余(übrigens)は「所有」が決定的ではない。持つ—持たざるの知識人層は保守的労働者の階級意識の創出となる。アメリカ的に指導的なモンモレンシィなき産業陣(人達)がある。強力な上向意欲、それは今や備えていると自称するに至っている(但し正統派によって常に否定されているものではあるが)。・・・錯覚？ それは英国では問題の全てである。その上層(そしてそれ自身は労働者である)がそこでより良くなるであろうかは、全く明らかでない。・・・失うべきものをもっている、所有は家屋、生命保険といったものに分けられる。・・・しかし、誰が常に！ 事実が残される、そして、アメリカにおいて、とりわけ当然のこととして。・・・しかし実際、合衆国における

77. 5万人の女性のタイピスト達(1930年における、因みに

1910年には26.5万人、1870年には1000人よりも少なかった)は正にそのように社会主義者では何故にあるべきではないのか。・・・合衆国の1910-30年における事務職階級は、(? 全労働者の中の ? ・・・編者)14パーセントであった。・・・

それはまた知識人達にも。・・・上向(昇)問題(Aufstiegsfrage)、それは魅力を備えた諸循環である、その魅力に対しては非常に弱点がある(だが各レポーターは上向の意志を報じており、しかもそのそれぞれは社会的不正義による上昇ではないということを明らかにしている)。更に次のように語られている——彼等がそれをもつまでは多くのことが語られる、しかし基本的なことは、彼等がそれをもたない、ということである。健全な感情(gesund Gefühl)、すなわち各人がともかく何等かの良きところがある場において成功するということ、だがこのシステムは失敗の競争(racing failures)でもある。・・・

このようにして、今や運転が問題となる。a) 強制が導入される場合には、それ迄に一般的忠誠がまた確保せられている——だがそれは創られた意志(kreierste Wille)でしかない。・・・成熟しているかどうかの問題・・・

b) 平等の関係は平等に処理する(Gleiche Verhältnis schalten gleich)。最早がみがみ言う者はいない。利益集団がひよっとすると、しかしその多くは消滅している、それ故に合意が、私はそうだと考える。・・・c) ただし、広い視野をもった政策が。・・・規律、それは今や政治家に手渡されるものでなければならない。・・・課題の困難性、今やそれに全てがかかっている。・・・

スターリン、知識人達の議論すらもが最早許されない。既に——我々は今や民主主義的であることが少なければ少ない程うまくいくことの故を見出している。・・・優生学といったものには語るべきものが全くない——ロシアは極めて特異なそれに関するプロレタリアート生物学をもたらしている。・・・

精神的抑圧？ 個々人の精神にはある、しかしそれは民主主義ではない。・・・しかし今やここにおいてこの移行の意味するところのものを持ち来るのである。すなわち、ロシアはそのようであるが故にではなく、そのようになければならないが故に、そのように特徴付けられるのだということ。他のところでならば、知識人的大衆の故に、(民主主義的要素は・・・編者)より少ないのではなくして、より多い。・・・論争ははっきりしたものとはなり得ないであろう。・・・その場合、選択は最早可能ではない。・・・論理的なものではない、ただ常に困難である。・・・そしてスターリンはそれ故に一層に真正の社会主義者だということである。・・・子供じみた態度——社会主義は殆ど作動し得ないだろうとなすこと。・・・更に我々は婦人達と社会主義を、知識人と社会主義を・・・

2 - b

かくして、今や最後の屈折させられたもの(たわみ)にまで至る準備が整う。・・・

事務クラス、教授、芸術家、及び知識人達については、尚、仕上げられる。それは全く以て単純ではない。・・・他の2つのグループが他の諸側面により信じられない程に誤って管理されてはいない場合には、差当たっては、これによる。そこで極めて重要なのは、多数派性が——とりわけ自由業に対しては——一つの不満足な結果となったのであり、更にそれには社会主義の不正義によって説明がつけられる、ということである。かくしてその場合、重要なのは原理的異論の部分(Abschnitte über prinzipielle Einwendung)である。・・・

しかしここにおいて、我々は一つの一層に深い争点にぶつかる。a) 短期と長期の視点設定には経済的な位置配置が決定的であること(今では、

それが以前からのものか、または——その方が良いのだが——分離したものか、但し以前に述べたところよりも多すぎないように)。それを知識人の状態をもって始め、手芸労働者に対してはそのように配慮することは全くないこともあり得る、すなわち一つの利害対立が(部分的には消費者の利益との、更に社会的利益とも)。・・・b) それは、その場合、労働者階級の内部においても、保守的労働者(Das dann auch innerhalb der Arbeiterschaft ; konservative Arbeiter.)・・・c) 「プロレタリアート」の非現実的な対置——実際のところ「ルンペンプロレタリアート」(“Lumpen-Proletariat”)すらもがと尊敬すべき労働者(respectable Arbeiter)と非プロレタリアート(Nicht “Proletariat”)をもつ。・・・とりわけ土地所有と非所有(Gutbesitz und Nichtbesitz)が、α) 区別されない、β) 鋭くはない、という場合における対立。・・・統計を欠くことがどうにもできさせている。・・・芸術家に至っては考察に小児性もが、社会主義は彼等にとってはしばしば問題外である。・・・

そこで言われる、すなわち、多数派性のチャンスをとらえての勝利を掠め取ることが可能であるかどうかは疑わしい、と。しかし、そうであったとしても、1) 正しきプロレタリア層は存在しない、2) 自律的意志はない、ということは真実ではないのであろうか。・・・このことはⅢの初めのところで注意しておいた断念(諦観)に回帰する。それは知識人達を経営者たらしめるべきであり、そのようにして(?)たらしめるべきだということになる。・・・そしてそれは一個の非民主主義的な過渡期体制(ein non-dem. transitional regime)を意味する(それは容易に永続させられることができる)。それは明らかに様々な硬さをもって存在することがあり得る。・・・但しロシア的レジームにつき本質的なことは、それがそうであるということではなく、それがそうであらねばならない——降りることができない自転車乗り(Cyclist, der nicht absitzen kann)——、というところにある。・・・それは悪意をもった残忍性ではない。・・・もし事態がそうなされてしかるべきならば、そのようになされただけなのである。・・・スターリンは騒々しい知識人達を自分達の意志を言い張って動こうとしないグループと共にそれ(なされるべき事)を——たとえカオス(chaos)が存在し、しかも一層悪化した飢餓の切迫が尚あったとしても——成し遂げるを得たといえよう。それは正当化されるものではないし、ウェブ夫妻(Webbs)がそうしたように、あるいは婦人達が軽はずみにも——その一步一步の歩みに即して——追放が行われ、またテロが永久化するといったことが必要だ、となしたようなことは尚更である。そこにはマルクスの社会主義に対する確たる差がある。・・・ブルジョワジーの正義・・・

ショウ、ジャーナリスト達・・・

疑問は移行後に民主主義は可能か？の一事のみである。・・・ある程度までは・・・そこでまたもや社会主義に対しては、社会主義が民主主義について設定するところの理想をあらゆる諸条件の下で実現するということが等しくみなぎっている、ということ。・・・しかし、意志は創られた意志であり、しかもそれは人々が強制的に造型できるということ以上の意味をもつ。そして民主主義はあらゆる本質的なものが設定された場合に可能だということを意味する。・・・工場指導者の選出などはない。・・・明らかに官僚制が充満しており、規律が甚だ多い。その場合、それは非常に多くを(官僚制の)諸機能に依存している。・・・そして我々は今や次のことを見出す、すなわち、何故に社会主義は——我々が既に心に抱いているように——民主主義的であるところが少なければ少ない程、よく機能するのかということ、その他にも作動が静態的であればある程、益々良好なのであるか、ということ、但し暖められた魂(the warmed souls)はそれ以上のことは欲しないだろう、ということ。・・・その他に他の世界があったか？・・・

(7) 移行(過渡)期における「社会主義と民主主義」

摘要

社会主義マシンの運転はそれが出現した経緯に従って異なる。進化過程の成熟の所産として時の充分性の下に出現したか、あるいはそれを望んでいない多数派から暴力によって、または戦争であるとか恐慌であるとかそうした偶発的機会の特殊な恩恵によって、掠め取られた勝利の結果として出現することが出来得たようなやり方の下に出現したかである。進化的社会化のケースと違ってよいだろうが、十分に成熟させられた、つまり圧倒的多数派の自律的意志作用の結果としての社会主義ほどに民主主義的なものは何もない。更にその後においても、このシステムの運転は民主主義的方法の滲透を続ける、いふならば真正の民主主義であり続けるだろう。しかしながら暴力によって掠め取られたケースにあつては、移行過程は非民主的なものとなる。我々の魂と諸制度が未熟である諸条件の下では、民主主義的社会主義はありそうになく、反対にその体制は一ダースの暴力とテロの頓服薬を含むような僭主専制となりやすい。その過渡期は非常に長い期間にわたり、過渡段階という御都合主義の下で拷問の諸道具の倉庫——示威の試みと集中収容所に始まって情報と討議の遮断それに映画とラジオに至る——が続く。そうした方法が統治グループの命令によることに変わりはない。個々人の多数派の自律的意志という意味での民主主義の諸原則への執着は、民主主義に対する諦念を社会主義者に数え得る将来にわたって課すことになる。同様に創られた意志乃至は意志作用が人民に押し付けられるが、それは非民主主義的コミュニティと反民主主義的イデオロギーの事実によってである。創られた意志がひとたび創られるとそれ自身の慣性により永久運動を行うことになり、その間ずっとその教条が説き聞かされていることになり、社会主義の諸メリット以外のことは何も知らないといった如き新世代を形成する。このようにして創られた意志は自律的意志となり、その社会主義体制は真正の民主主義となり、これが社会主義者達の公式理論となる。・・・その他 (編者)

移行(過渡)期における「社会主義と民主主義」

1 社会主義への移行に関しては、次のことが明白である。民主主義的諸原則への固執——個々人の大多数、または何等かの多数派の自律的意志に対する忠誠という意味においてである——が社会主義者達に諸々の断念を課すということ、この断念が今日迄及び考え得る将来に渡って、自己風化(自ずと消し去られること)(self-effacement)を含むものでは必ずしもない、ということ。彼等には党を強化していくことにおいて、政府を部分的に担う——あるいは政府を構成することすらをも担う——ことにおいて、為すべきことが満ちているからである。権力の賞金(prize of power)と多数を満足させるような業績。しかし彼等のものであるものの全ては、非常に様々な程度においてではあるが、現存の体制の死活的中枢をはっきりと保つこと条件(the condition of keeping clear of vital nerves of the existing system)の上にある。・・・一人で保つのか、または他にブルジョワジーラディカルの仕事として——その体制の枠内で——一部を担わせるのか、の二者択一。・・・そうした全ての仕事はたわみ(distortion)に向かっているかの重要な知識人達を模したものである。・・・更に基礎的な変革に対してはというと、私が信じているように、マルクス主義者の教理(Marxian doctrine)が、マルクスによって意味付けられた如く要求されている正にその意味においてそうなのだが、そういう意味での多数派なるものは来ない、今来ていないし、向う数十年は来ないであろう。・・・これこそ正に、何故に社会主義者が民主主義者でないのかの、あるいは諸君が二者択一を以て満足していることなのか、の深甚の根拠なのである。そしてそれらは留意するには当たらない。

(15)は、その場合、(時の)充分性の中でなされる民主主義的移行の可能性はあるのか。更にどのように運転(Operation)が・・・あるいは、それはないと言った方が良いのでは(14)・・・(16)、その場合、ゲバルトによる移行、または、掠め取られた勝利ということになる。そうだと反作用的に社会主義の下にあった知識人達が強化されなければならない。・・・ブルジョワジーは仕返しをうける。・・・Ⅲ・・・我々は立ち還り、すでに述べられたところを用いる。その場合、「作動しうる」のエッセイが移行と運営を区別するであろう。・・・移行に注目する、更にその場合、大問題である多数派問題(Majoritätsfrage)がここで(Ⅲ)か(Ⅰ)に

おいて。・・・

このことをもつことで、我々は容易に満足させることができる。行論の一部に対しては、我々は、マルクス主義のトレーニングを受けた正常の社会主義者が採るであろうところとは、さほど離れてはいない路線上に移動するであろうが、その他の部分では道を分かつたなければならない。

2 産業プロレタリアート(the industrial proletariat)——職長タイプのもものはこれを含み、事務スタッフのもものはこれを含まない——はどこにおいても選挙権の多数派を構成してはいないし、そうなることは永久にありそうなことではない。マルクス自身は恐らくそうなるだろうと考え、かの集中とプロレタリアート化の過程が——最後には——必要な多数派性を生むだろうとなした。それは極めて均質的な多数派であり、冠絶してその満足するべきケース——すなわち、彼が考えた兵となるもの——であった。しかし、規定されたような産業労働者達が事実的にそうした均質的大衆に熔融し、染み渡った階級意識によって結合させられ、当然のことながら社会主義の立場において思想的に同化され、そして如何なる他の者に対しても非妥協的に敵対する、といったことになるであろうということを、しばしの間、同意するとしてさえも、その相対的な成長は緩んでいき、おおざっぱに言って今世紀の最初の10年辺りから停滞を始めたのである。マルクスのメッセージ乃至は予言は、これは問題だとして召喚することを必ずしも行うことなしに、このことを観察していた社会主義者の多くの正統派に属する人達は——今や——修正主義的(そのエッセイを見よ・・・第V部であろう、編者)な諸結論を引き出し始めた。少なくとも社会主義の招来が、彼等や彼等の先代達が考えていたよりも、もっと緩慢な過程となるであろうとなす範囲内では・・・。プロレタリアートと非プロレタリアートと保守的労働者の対立・・・これらは公理(Axiom)ではなく、問題(Problem)である。・・・過程は当然のことであり、更に同時に——日本とインドとを大きな例外として——合衆国では7～25パーセント、尚、大約20パーセント、イングランドとウェールズでは9パーセントよりも多いということは、先ず無い。・・・反転して！・・・多くの法則が！・・・より良い表現はないか！・・・該当する国が抜けていく。・・・

3 最初の疑問は農業的分野(*agrarian sphere*)に関わるところに生じた。ペザント(*peasant*)は、死に絶えていくのに、非常に時間がかかるのは確かである。ペザントは嘗てあったように特例的にしっかりと支持せられることにもなれば、結局において死ぬかどうかすら不確実なのである。「集中の法則」(“*laws of concentration*”)の適用が問題となる。カウツキー(*Kautsky*)は一書を書いた。ここにおいて、事実上、プロレタリアートの階級意識の拡大を妨げる固い岩石があるということが——利益についての阻害的配列(*objective constellation*)を強調する他の観点からしても正確に——はっきりしているとみられた。しかしながら、次善の策がある。それは素晴らしい理論的方法ではないけれども、この農民人口はプロレタリア化されてはいないとしてもプロレタリア達の前線の中に挿入されることはあり得よう、と。その正にペザントの現実主義、彼の臆面のない狭い利己主義はそれによって彼の政治的基盤を反転させることになるようなハンドルを提供するようにみえる。自分の財産と収入が保障されたとすると、彼は他のところに何が起きているのかの配慮はほとんどないであろう。自分が自分の土地で働き、しかも手におえない労働者の大規模雇用者では全くない——ツガンーバラノフスキー(*Tugan-Baranovsky*)——、という事態はペザントをしてプロレタリアートのある種の名譽職的なメンバーたらしめること、並びにこの特殊な種類の私的財産を保障すること、保護及び他の様々な贈り物という交換条件で、どちらかと言えば重い価格を支払うことを申し出ること、社会主義の理論家達と実務家達に対し二つの犠牲を美味(*palatable*)ならしめる——支払われる重い価格は後を継ぐ人達に重い負担を課すだけのことだったのであるが。しかしペザントはその正に彼の現実主義の故に、彼が他の側からの付け値(*bids*)を意識することが完全なものがあり得よう程に十分に、これまた信用できないものであった。せっかちな知識人達は農民—労働者諸政党を弁護しよう。しかし、克服への意志——このケースは真底自律的であった——は恐ろしい指導であったし、今もそうである。

諸原則の厳しさでは暴風ほどではないが、少なからざる実行上の困難が小売業や小生産業——主として小売商(*retailer*)、職人(*artisan*)、職人に比して大だとはほとんど言えないような小マニュファクチャラー——についても経験されてあったし、今もそうである。彼等は、教説が完全にとは言えないまでも、ある程度の真実性をもって述べているように、消滅することが運命付けられた存在である——実際チェーンストア——は結局にお

いて業界の主体になるであろう。だが彼等も死に絶える過程であまりにも時間をとりすぎる。・・・彼等こそ典型的な資本家に対抗して護らなければならない存在であるのだが！・・・しかし社会主義の中で経営しようと自分自身が意欲するような、せっかちな青年に対しては、満足するところが極めて乏しいだろう。何故ならば彼等こそ私的企業の最も生き生きとした信奉者なのであり、しかも政治的大黒柱(the most lively adherent and political mainstay of private enterprise)なのであるから。

4 このようにしてⅢに引き続くことになる。つまり、このようにして多数派性がない、または「真正」ものではない。・・・更に一個の非常に信用できない、しかも半ば意図に反したものがある、それはすでに反民主主義的なものを利用しようとしており、またすでに甚だしくはそれに対して多少のテロといったものの助けを借りて招き寄せようとしている。・・・そしてまた尚1～3枚の更なるページが！・・・恐らくは、a) 概括的に、b) 民主主義的に達せられた場合を、c) ゲバルトを以て(mit Gewalt)達せられた場合を・・・

今や社会主義の機構(the socialist machine)の——ひとたびそれが構築されてしまったとして——の操作について。我々自身今一度心に留められるべきは、この問題がかの機構の出現の為され方に従って異なってくる、ということ。出現が時の充分性の下で、先行の論述の中で関説した意味でのそれ(出現)に対して完全に用意された経済的及び社会的な諸条件のもとから、進化過程のもたらした熟した生産物であるかの如く、更には民主主義的であると主張することが公正に許される——いくらかの革命的活動が腐朽しつつはあるがまだ完全には腐朽しきっていないような障壁の抵抗を取り去るために必要とされることが尚あったとしても——そうしたやり方で出現したものであるのかどうか。あるいはそれが出現し得るのはそれが唯一のやり方だといったふうに、換言すれば、暴力によりそして都合の良い——今一度の世界大戦といったものがそれを創出しかねないような、また臨時的ではあるかも知れないが——そうしたチャンスによって不本意な多数派から掠め取られた勝利の結果として出現する、といったことであるのかどうか。・・・世界大戦という主題は本来どこで。・・・我々は我々の議論を后者のケースに限定したい。前者にも同様適用できる諸論点については、そのいくつかを指摘するだけに止める。

5 論を始める前に、今一つ心に留めておくことがある。私は要求しはしない、私の諸結論を支持するような諸行論が厳格な意味において論証され得るものであることを。そして十分に認めるものである。様々な意見が、超え得ない諸断層によっては隔てられてはいないような人々の間においてさえも、見事に拡散させているような幅広い地盤の広がり存在を。そこで私は何を主張しているのであるか？ 正確に私が主張していることは、これらの諸行論の殆どが——見受けるに——進化的革命の方法による社会主義の具現化のケースに対してそれらの力を緩めていることである。その通りである。移行が民主主義的なマナーで自覚されており、しかも圧倒的多数の自発的意志の帰結としてなされる。そしてその場合、民主主義的方法がその後において滲透すること続けるべきではないという謂れに根拠はないのである。恐らくは、自分達のもてる地盤に立脚した自存の人士の行動と結び付けられているならばの時(**when associated with the action of self-reliant men standing on their own ground**)、その意味付けに用いられる血に染め尽くされた事態ではそれはないであろう。そうした事態の類の全ては、今日では冷笑を引き出しさえするのである。だが上記の移行は尚、混じり気なしの民主主義なのである。

私はこのようにして次の結論に至った。即ち、

1) 資本主義の勃興は——結合の分裂という経由で(**via Aufbrechen der Bindungen**)分離した公的分野の創出があり、そこでは自分の土壌によって立つ自立した「武骨な」諸個人があったのであるが——民主主義的な諸形態と諸イデオロギーの発生に責任があるにもかかわらず、計画といったものにはどんな民主主義をももたない、ということは尚正しくはない、ということ。それはIV—3における諸行論の切り替えを意味する。

2) 社会主義は一つの呪いとして以外には決して来るべきでない、と望むほどに十分に社会主義を憎んでいる人ならば、誰もが現代の知識人に感謝の念をもつべき理由をもっている。

3) 本質的な諸点において、ファシズムは社会主義の諸方法と諸原則を積み込んでいる。そしてこのことは裏切られたパレスチナ人達の牛の吠えるようなうめき声についても見逃されるべきではない！・・・区別はしかし、これまた本質的である。私的所有に反対する刃の切っ先が欠けている。

6 私は再度強調することを望まない。「移行」(“transition”)が永く続きそうにはない、と言えそうにはないということ、並びにそれが続く限り、拷問の諸道具の倉庫——示威の試みと集中収容所に始まって情報の遮断と討論、それに映画とラジオに至る——は、統治している人物またはグループの指令の下に留保されるであろうということ、を。しかし、このことを考慮しないとしても、創られた意志(the created will)がひとたびつくと、それ自体、自分の慣性によって永久運動を引き起こす。その教義を叩き込み、その最も都合の悪い光の下で見る以外は何事も知らない新しい世代を形成するような、教育組織、新聞、知識人階級を育て上げるのに十分なほど、それは長く続くのである。自覚的に追加的な圧力が加えられなくとも、とりわけ人々の権利停止の行使を伴う追加的な干渉がなくとも、来るべき並外れた期間に渡って「適正」に人々を考えさせ、感じさせ、投票させる強力な保障が存在し得るのである。

このようにして創られた意志は心理的にはその先代がそうであったのと同じように真正のものであるとして——先代の場合、その意志の形成に強制の要素が入ってきたとしても、より少ない程度においてであったが——一個の自律的意志となるであろう。それが何であるかは、ただその過程についての官製の理論を何かもっと現実味のある言葉に読み替えるだけのこととなる。——その教義は次の如くである。即ち、人間性は、その誤って導かれた意志に逆らうところが如何に大であろうとも、生活の社会主義的形態へ向けて押しやられることだけを必要とする、その栄光を求め、そして改造されんがために。

この教義の真実性については、更にこのタイプについての先の行論——それは確かめられ得る諸事実に基づいており、しかもそうした諸事実からの合理的推論なのであるが——に対しては、諸君は好きなように考えられたい。そして私が保持しているこのことこそが、もし我々が単なる信条の告白だけに止まらず、論議の下におかれている諸争点に対する根拠付けに適用しようとするのならば、利用可能な唯一の方法なのである。どんなユートピアでも論理的には整合するようにつくられることができるのである。そしてこの意味においてそのユートピアは合理的行論に対して難攻不落なのである。とりわけ論理的不整合が全くないということ、それが実行上の唯一のものであり、そして全ての人々はこれらの諸事実及び諸推論に向けて、彼がもつ自分の諸影響力を付すのに、議論の余地のない論理的視

界(an undebatable logical sight)をもつことになるのである。

真の民主主義者にとっては、その存在を強制に負うような社会の社会主義的構造は——少なくとも強制が多数派に適用されているのならば、たとえそれが血に染まっているものではないとしても——その根底において損なわれているのである。何等かの通常の意味における強制がなかったとしても、何等かのその代用物をも——我々の言葉をもってすれば——自発的(自律的)意志とするために創られた意志(created volition)をも、更に人々が正常になされたとは考えない場合における単なる「掠め取られた」勝利(the mere “snatching” of a victory)をさえも、不承認となすべきことなのである——このことは実のところ論理的整合性の問題としてなのであるが。・・・「掠め取られた」勝利には賞賛、落胆、または恐怖の状態がある。・・・しかしそうした社会主義の実行上には、その代用物が究極の成功には貢献するところが大きいであろう。

7 私が I において多数派性の不可能(Unmöglichkeit der Majorität)について、それが比例代表制(Proporz.)であろうとなかろうと、さほど多くは言及しなかったとしても、そのことは III で完成されている。・・・替わり得るものを前にした社会的なものが如何様に断念に対応するものであるか、断念は燃え上がる炎を保つ形態をも、あるいは労働者主義の形態をもとり得る、それとも暴力「革命」すらをも。(Wie das sozial vor die Alternative stellt der Resignation, welche die Form des keeping the flame burning oder die Form des laborism annehmen kann oder even violence “Revolution”.)・・・

最初に論ぜられるべきは前者であり、民主主義に対するその帰結である。・・・そこにおいては、革命を通して自律的意志の原理そのものに可能な限りしっかりと結び付けられているということ。・・・ブルジョワ的民主主義者が民主主義とどう結合しているかは本質的なことではない。——統治階級としての人民・・・官僚制・・・民主主義的なものが少なければ少ない程、それだけ益々能率的となる。・・・経済が静態的である場合には、それはさほど重要でないことは明らかである。・・・更にこのようにして等しく個々の実現が「今日では」前面におかれることになる。・・・更に信奉者にとってはそうではないかも知れないが、それは根本的な式次第の終わりとなる。・・・更に直近の未来についての決定もまたなされ

る。・・・ロシアはそのように進まなければならなかった——レーニンは正に1903年から始めた。・・・

ここでは原理的なイシューだけ論じることにする。民主主義に対しては抽象的な問題設定を前面に出すこともできなくはない。・・・だが叙述は社会主義の位置付けと尚衝突する。・・・恐らくは次のように終結しよう。・・・モデルは真正の社会主義である、しかし民主主義的社会主義——更にまたその理論はランゲ一家のものである——という特殊な場合、しかも準ブルジョワ的である。・・・それは基本的な神経を逆なですることになるような、あらゆる追求を含まなければならず、しかも歯車とマキャベリスト的助言の形態すらをも語るものとなる筈である。・・・その課題が実際に意味するところは——恐らくはフリーハンドにしておくのが賢明であろう。・・・しかしそれは、そうは言っても政治に属する！・・・個々の国有化がなされるべきか否かという個別の論点の中には過失もあり得よう。・・・

8 IV—3が多数派であることの可能性はないということ(そのことと民主主義へ向かっての社会主義の設定がそこでVにおいて考証される)の仕上げ論証をもって始まるとすれば、そこでは何故に民主主義的ではあり得ないのかが告げられてしかるべきではないか、ということ。導入においても操作においてもあり得ないと。更にそれはそれほどに危険なことでは事実はない！！・・・そうであるとしてその場合、どのような意味で最後には多数派性があり得るかも知れないということが対置されることになるのかも——ペザント問題は残っている、小売商や職人は重要性をより少なくするだろう、更に事務職—技術職的階級(上層階層は実際に益々以て支配への諸手段を不断にもぎ取られていっている)であり、しかも活動の範囲は縮小されるということ)は部分的には克服することができる、それにしても上位階層の「合意」は最重要事である。・・・

バターの中に全てがある、とはどうあっても主張し得べくもない。言ってみれば自己憎悪にある契機は決して来ない。そうは言っても移行は不可能だという訳ではない。そしてある意味では運転をも——あるいはこれまた不断に可能となるだろう。・・・(投資機会の消滅の理論の社会学、人々はすでに今日それを認めることができたのであろう。)・・・しかし今一つの民主主義がある(大きな対立に向けて民主主義は機能させられないと私がみた場合、私はそれでも結論しなければならない)、更にすぐさま経

済民主主義なるものはないと。・・・議会といったもの、我々が民主主義と共にあると結びつけている、は資本主義的制度からすっかり変えられている。チェックする団体といったもの。そして今やそれは趣味の問題、出現してきたものがもはや民主主義ではないのか、または真正の民主主義なのかは。・・・自由？、何を以て自由だということのか？・・・優生学のようなそうした事柄(solche Dingen wie Eugenik)から完全に離れるのならば、幻想を以て終わりとなる。

9 どこに困難があるかは、また、完全に明らかである。・・・即ち、大きな諦観に至ることを求める。ここに原理がある。指導者達と職業的追従者達の関心事は社会主義の場合、多数派性を欠くが故に、他の各政党におけると同様に、何の上に来たるのか！ということである。・・・

移行段階——過渡期——(transitional stage)というトレードネームの下で・・・、つまり十分に成熟させられた社会主義程に民主主義的なものは何もないだろうことはもとよりのことである。しかしそうこうしている間、我々のもつ、そして我々の魂と資本主義の諸々の牢獄に満ちた諸制度を伴っている、これらの未成熟にして不完全な諸条件の中では、民主主義的というには何かそれよりも足りないものがあるような、しかも脅かしと恐怖の頓服薬を適当に含むであろうような、そうした手段によって社会主義のその完全な民主主義への道を舗装することが、有用であるかまたは必要でありさえすることはあり得よう。・・・

ある社会システムを運転する諸手段とある社会をもたらす諸手段とは、論理的に区別される事柄である。だからして一つの目的に適用されるべきワンセットの諸原理は——他の別のものと言ってよいし、あるいは対立するものでありさえするような——諸目的に対して適用することに必ずなるといふ謂れはない、ということが今や一般的命題としてしっかりと把握されてよい。しかしこのことは我々が関わらされている困難を克服しはしない。民主主義の信奉者にとっては、移行上の専制性(tyranny)はその新秩序を根底のところから墮落させるものであろう、その故は彼にとっては民主主義的諸原則は絶対的だからである。それらは便宜的な場合もこれを見逃すことができない、たとえ一時的にと言えどもできないのである。それらは社会変革に対しては、社会の基本的枠組みにまでは手が届かないよ

うな、どんな諸決定に対してよりも、重みにおいてより少なくではなく、より多くの重みをもって適用されるのである。社会の構造変革を包圍しているものが変わることなく諸々の民主主義の中にあり、社会の憲法乃至は基本的制定諸法(the constitution or organic statues of the community)のどんな変更もが特別の保障を以て変わることなく包圍されている、ということである。

10 移行状態(transit. state)という便法(the expedient)が如何に危険なものであるかは、時折明らかである。それ以上に、物事のどんな状態もが過渡的(transitional)であると呼ばれることができ、更にその標題がひとたび貼り付けられると、その過渡的という標題の下に含まれると承認されるものには制限がなくなる。・・・そして民主主義的社会主義は多分に日曜学校の理念に不断になっていき得るであろう。・・・更に臨時的または暫定的な構成や諸政策など、そうしたものは通常その成長が永久に空気と光をその「究極の諸理想」から受け取ることを保ち得る硬い諸施設となりうる。この点に妥協し、この工夫を手段とする人は誰もが、それ故に、民主主義は——自分はそれを好むであろうけれども——本質的なことではないということ、それに他の諸々の事柄が自分にとっては一層に重要なのだということ立証するのである。・・・もとよりそれは不名誉なことではない。・・・実際のところ、それが一般的に意味するところは、その人が民主主義のことを気にかけていることは本当なのだが、ただその人が好ましいと思っている事柄を処理するために問題となるその特定の民主主義に期待している場合においてのみである、ということである。・・・

現実に民主主義を愛する者はこの危険を放置しないことが必要である。・・・選挙を前にして社会主義は民主主義に形を変える(「臨時的」に)(Vor die Wahl gestellt und Sozialismus der Demokratie vorgezogen (temporär)).・・・

しかし私はこのことを強調せずして他の行論を過度に多くしていることを怪しむ。それらは十分に真実である。しかしそれらが民主主義の論点になるであろうところのものを容易に覆い隠しかねないのである。・・・本質的な点はまさしく論証 1 のところにある。すなわち、変革も民主主義的でなければならない。・・・そこでは私は創られた意志(kreierten Willen)につき語ろうとすることを考えることができた。これも尚、真正の社会主義であるボルシェヴィズムの事実に向けて戻るのが恐らくより

良いであろう・・・家父長的社会主義・・・更にロシアにおいて事態が永続する必要がないのではないか。・・・そして権力の行使、即ち多数派でも少数派でもなくして、先祖返りでは。・・・合理的合意、迫害は信念の基礎。・・・様々な意思がつくられる・・・1)このようにして、先ずは非民主主義的共同体と反民主主義イデオロギーの巨大なる実態が・・・

(8) 結論 社会主義と民主主義

摘要

社会主義と民主主義は両立し得る。社会主義が秩序ある成熟の状態として導入されるのならば、また資本主義社会において進行した麻痺にとって替られるのならば。おおざっぱにその状態は静態定常状態に近い経済状態、高度に合理化されており且つ更なる発展に対する資本の然るべき飽和化がなされている、といったことに相対応する。こうした諸条件がないと民主主義方法による社会主義の運転は失敗せざるを得ない。とりわけロシアのゴスプランのようなそういうやり方では確実にそうである。一定の密度を超えた社会的諸差の存在は民主主義の機能発揮を脅かすし、社会主義の下でのより小なる階級風の諸格差やより大なる生活スタイルの均一性が民主主義には都合良き状態であろう。しかしながらそうした視点は「社会主義でなくしては真正の民主主義はない」という命題を支持しない。平等主義者の社会主義と平等主義者の民主主義は同義でなく、また相互に半宗教的理念の問題として規定し合う条件でもない。社会主義と民主主義は競争的リーダーシップ(セレクトティブ セオリー)の観点から両立し得るのであって、相互性を意味するものではない。社会主義は専制的でも家父長的でも、またその他でもあり得るのであり、非民主主義的方法を都合良しとすることもあり得るのである。反対から言えば、民主主義的方法は経済的諸パターンの中の何等かの特定のタイプに閉じ込められはしない。集権的社会主義は政治的民主主義と両立し得るのである。政治的諸リーダーによる公的事務の民主主義的管理は投票をめぐる競争的紛争の中から出現し、経済的リーダー達による経済的局面の専制的管理は顧客をめぐる競争的紛争の中から出現し、相異なるものなのである。経済についての公的管理の拡大は政治的決定の領域との歩調を揃えた拡大ではない。社会化された産業の運転は政治的民主主義の装置によって成し遂げなければならないのではない。組織の枠組みと分配のルール、それに投資計画等々も議会において討議されようが、社会化された企業の経営執行部はそうしたものとしての能力に従って選抜されるのであり、それらは高度に訓練された力量ある官僚制によって補完される必要がある。・・・その他 (編者)

IV—(8)—1～8

結論 社会主義と民主主義

1 前述の行論は以下の帰結——即ち、我々の意味における社会主義と我々の意味における民主主義は、社会主義の秩序(**socialist order**)が我々の成熟の状態として述べてきたものの中に導入せられるならば、両立し得る——を導き上げるかのようにみられるであろう。不幸にしてこの帰結は尚説明を必要とする。・・・

成熟についての但し書き(**the proviso about maturity**)の必要性は明白である。我々が検討してきたのは次のことである。資本主義社会のもつ諸制度や諸利益が(完全にとということではなかったとしても)一種の進行性麻痺の状態にあることになる迄は、社会主義は民主主義的なやり方では担われることができない、ということ。我々は更に次のことをも検討してきた。この状態たるや、おおざっぱには次の経済状態に相対応させられるべきだということ。即ち、経済が定常状態にあるか、または少なくとも高度に合理化されていて、しかも更なる発展がそこから——どんな基本的解体も、または方向付けの仕直しもなしに(**without any fundamental breaks or reorientations**)——引き継がれることができる程に資本で飽和されている状態にあるか、であること。こうした諸条件が充たされていないならば、これを言ってみれば、もしロシアのゴスプラン(**the Russian Gosplan**)のようなそうしたことが企てられなければならないとすれば、その場合、民主主義的方法はその仕事に失敗するであろう——例え民主主義的方法を用いようとする試みが非民主主義的な移行を完了した後でなされるという場合であったとしても、失敗するであろう——、ことは実務上からして(**practically**)確かである。しかしながら、もしこれらの諸条件が充たされているならば、その上、社会主義の秩序を採用することの決定、あるいは社会主義の秩序の採用に至るような一連の足取り(**a series of steps**)が民主主義的手続きの諸ルールに従ってもたらされるならば、その時はこれらのルールが後になって棄てられなければならないだろうような、どんな理由も存在しないようにみられるのである。

2 恐らく、我々はもっと先までさえいくことができよう。・・・

民主主義は政治的な諸差については、いくらかは寛容であるという含意

がある。それと同時に諸差の存在が一国民のもつ精神と諸環境——「基本的諸次元」(“fundamental dimensions”)と我々はそれらを名付けるものであるが——に従って変化する、その密度の許容幅が与える許容限度を超えた程になると、民主主義の機能の発揮、及びその正に生命すらをも脅かすこととなる。私は第Ⅲ部において、そうした諸差がなくなる必要はないが、だが社会主義の体制はそうした諸差のいくつかを消そうとするであろう、ということを指摘してきた。社会階級の諸現象が完全に消滅するということはないであろうが、それにしても、ともかくも、次の予言を十分に保証する程には変わるであろうということである。外観と諸利益における階級風の諸差(class-wise difference of outlook and interests)と階級的敵対意識(class antagonism)は重要でなくなることが多大であるだろう。・・・この論点における我々の期待は、後に再召喚されるであろうが、一方において社会諸階級の性質についての我々の諸見解と他方において社会主義についての我々の諸規定によっている。・・・部分的にはこのことの故に、また部分的にはこれとは関係なしに、教育や生活スタイルのより大ならしめられた一様性(uniformity)がこれまた——諸見解の広がりに沿って——基本的な亀裂の危険を切り下げる傾向があるだろう。・・・

最後に、社会主義社会で行きわたることがありうべきであろうかの規律はもとよりのこと、その政治的領域の境界線のところで自己主張をなすことを止めないであろう。・・・もしこれが全てであったとしたら、民主主義的方法なるものは社会的秩序において——資本主義的秩序においてみられるよりも——能率的に作動するところが一層に大であり、一層に小であることはない、と期待し得たかも知れない。・・・

ここまでのところは、このようにして、社会主義に利ある所(score)である。

3 しかし、その行論は、それに付すべき何の修正もなかったとしてさえ、社会主義の正統派(socialist orthodoxy)によってなされたずっと大きい要求、換言すれば、真正の民主主義は社会主義社会において以外には存在するを得ないという主張を支持することに尚失敗するであろう。もとよりこの主張は常に規定によって確立されることができる。例えば我々は社会主義と民主主義の双方を——平等性を基準として——両者を調和させるというやり方で定義することができる。しかしながら同義反復(tautology)に満足しない、となすならば、我々はその信条の基礎を求めることになる。

我々は早くも民主主義の古典的教義へと導かれることになり、そのベンサム主義の仲間達(Benthamite associations)に至ることになる。キリスト教の諸教条から出た 18 世紀の合理的視点に我々自身を位置させることで、特定種類の社会主義と特定種類の民主主義が神聖なる諸前提より揃った足並みで出てくるのを我々は容易に検証するものである。更に 18 世紀にみられる人間の性情と人間の行動についての分析という立脚点に我々自身を置くことによって、これまた、社会主義と民主主義が揃った足並みで (pari passu) 自己分析をなす、と期待されるであろうこと、を我々は検証できるのである。但し、ジョン・スチュアート・ミル以前には、ベンサミスト達は前者(社会主義)を単に中間的な一停車場であるとする以外には想念しなかった(not visualize the former but only an intermediate station)のであり、競争的資本主義をば彼等は終着駅であると誤認したものではあったけれども。その原理の立脚点からは、「誰もが一人としてカウントされるべきであり、一人よりも多くカウントされるべき者は誰もいない」(everyone to count for one, nobody to count for more than one)であり、平等主義的社会主義(equalitarian socialism)と平等主義的民主主義(equalitarian democracy)が事実問題であると同様、半宗教的な理想として共に相互の条件をなす、であった。このようにして民主主義の古典的教義に基礎をおく社会学に基づくとなれば、議論の基にある命題は同義反復であることを止める。しかし同義反復ではない代わりに、それは——その社会学が事実について支持し得ない叙述を含んでいるものであるが故に——支持し得ないものとなるのである。

社会主義と民主主義を同一視する(identify)傾向の中には、心理学的ファクターがあることに注意せずして先へ行くべきではない。何となれば、多くの正統派社会主義者達が——マルクスも含まれるのであるが——その諸主題(the subjects)に関して心に抱いた諸観念(the notions)があり、その諸観念の形成の中に心理学的ファクターの明らかな役割があったからである。彼等の多くは自らの形成的年月をブルジョワジー過激主義(bourgeois radicalism)の雰囲気の中で過ごしたのであり、その諸理念(想)とその一般的文化背景の多くを保持し続けたのである。民主主義とは素晴らしいという自覚はその背景の一つであった。彼等が社会主義活動に乗り出した時、彼等は自分達の魅力に満ちた理想が生活の良き諸特徴の何物かを——例え可能性としてのものであったとしても——欠くことがあり得る、と考えることは許し難いとみてきたのではなかったか。彼等が最も評価している良き特徴の一つが、ブルジョワジー社会がそうであるように、諸悪との結合の中に提示されることができる、と考えることはほぼ一致し

て許し難いことであつたのであろう。

4 しかしながら我々が競争的リーダーシップの理論(the theory of competitive leadership)を採用することにもなると、(両者は)両立し得るとしても、相互的であることを意味しない。社会主義は社会主義であることを止めることなしに、専制的(*autocratic*)、家長制的(*hierarchic*)、貴族制的(*aristocratic*)、その他の政治形態であり得るのである。更に社会主義は、非民主主義的方法を良しとするような傾向をもつところの帝国主義(*Impelialism*)といった文化的パターンでもあり得る、ということ。このことは私が先に十分に主張しておいた。・・・そうした傾向は——社会主義社会において、そして近代的諸条件の下で——とりわけ強力になるであろう。このことを我々自身に納得させるためには、必要なのはイギリス帝国主義が個々の資本家グループの活動に負うところの、その範囲を考察することだけである。半ば私的な征服によって前もって創出された諸利益を防衛することを政府に対して急き立てる——例えばインドやローデシアのことを考えよ——そして後になってその仕事を政府の管理に委ねる。こうしたことが国家にとってより容易であること多大なものがあったことは明白であつた。そのようにして、そうした仕事を——民主主義的体制の諸条件の下で計画され、運用される政府活動によって——創出するといふことがなされてきたと言えるであろう。このあり方は帝国主義者的諸性向(*imperialist propensities*)を備えることを社会主義社会に対し利用可能とする唯一の方法であるだろう。

反対から言うと(*vice versa*)、民主主義的方法は——直接的な歴史観察からと同様、先行の章の分析からも——経済的諸パターンの中の何等かの特定のタイプのパターンに限定されはしないということが導かれる。尋ねられるべき唯一の設問は、それ故に、私が既に以前に答えているところのもの、換言すれば、集権的社会主義の諸パターンの中にあるどんなことをもが——そうしたものとして——民主主義の機能化(*functioning*)を促進するや妨害するや、という設問である。社会主義でなくしては真正の民主主義たり得ない(*no genuine democracy without socialism*)ということ論証せんと試みた社会主義者達の諸行論を精査してみると、その諸論証が確立するであろうところは——論証が論議の余地なく(*incontestably*)真実であつたとしてさえも——資本主義パターンの中にはそうした阻害諸

要因の存在があるということ、及び資本主義的民主主義は社会主義的民主主義よりもデザインされたところより逸脱することが一層にありそうだということ、それが全てであったというのが実際のところなのである。

5 第1、公的諸問題の民主主義的管理と経済領域での専制的管理は、論理において諸々の矛盾を、実行において不公平の最たるものを構成している、となす行論がある。あらゆる事柄が民主主義的方法の諸ルールに従って管理されるに至る迄は、我々は真正の民主主義をもち得ないというのがこのことの意味ならば、その場合、社会主義体制の成功はこれらの諸ルールの適用を周到に(judiciously)制限することの能力に大きく依存するものであろうが故に、この行論は意味を失うことになる。このことに対しては我々は差当り引き返すことにする。しかしながら、その意味するところが次に述べることであったとすると、その場合、その行論はもとより全く真実だということになる。即ち、得票をめぐる競争的抗争から出現する政治的指導者達と顧客をめぐる競争的抗争から出現する経済的指導者達は、タイプ、態度と関心のもち方において異なるところ大いにあるであろう、そして彼等は手を携えてやっっていくことに失敗するであろう、ということが含意されていることの全てだ、と。但し上記は何故に民主主義は移行上の諸状況(transitional situations)——国民生活の様々な諸部門が相互の調和から離れたものになる——の下では円滑に作動しないのか、という理由の一つを指摘しているだけのことである。手付かずの資本主義(intact capitalism)の時代における民主主義はそうした現象を演じはしなかった。それらは社会主義者を喜ばせる種類のものではなかったであろう。しかし、それらはそれにも拘わらず、真正の民主主義であった。同じことが他のどんな政治的方法にも適用される。国家における最大級の絶対専制性(absolute despotism)と経済活動の完全自由(perfect freedom)の間には論理上の矛盾などは決してなく、更に実行上の非両立性も必然のものではないのである。

第2 資本主義社会では政治的リーダーシップをめぐる抗争が——民主主義的方法の理念とは関係なしに——資本家階級の経済的権力という要因によって損なわれてしまう、という行論がある。他のやり方でも同じことが主張されようが、それは腐敗や圧力を考慮させるのに充分である。もとより資本家から出た資金による買収と人々が——自分達が資本主義の産業と金融の中で保持している諸々の地位のお蔭(徳目)で——行使でき

る圧力とは、資本主義の政治的民主主義に特有の偏り(**deviation**)とたわみ(**distortion**)である。そうしたことは資本主義の政治的民主主義に生来のものではないということ——但し我々がそれらを偏りだと言うのは我々の権利の内にあるということになるのだが——そうしたことから実際上免れているような資本主義的民主主義が存在するという事実から導かれる。イギリスの事例は、このことだけでないが、如何にして諸々の民主主義は——腐敗と威圧(**intimidation**)が、いつも資本家の利益になった訳ではなかったが、実際に永遠の重要性をもった一つの役割を演じさせるような——一連の事態を育て上げたかを示すものでもある。それ以上にこの民主主義の作動におけるたわみの特殊なタイプは——あるいはどんな他の政治的方法でもよいが——有権者や議会を造型していくための諸工夫についての、更にその「意志」をつくっていくための諸工夫についての、長いリストの中の一つの項目でしかないということでもあって、我々の社会主義者の友人達が心得ておくことなのである。与えられた諸条件の下で、それが他のことより多少なり重いものであるかどうかは、それ故に、その回答たるや第一義的には環境の質——それはその経済構造とは大部分独立したものである——に依存するであろうという事実についての設問なのである。政府が全経済装置の管理に任じている社会で、真正に独立した投票が一層によく行われる筈であるかどうかは明白でない。

6 我々の行論に立ち還ろう。いくらかの諸点では民主主義は社会主義社会において——資本主義社会においてなされるよりも——一層円滑に形成されることがあるかも知れない。我々が急いでなさなければならないのは、如何なるそうした期待も政治的決定の分野を制限することについての社会主義社会の力量(**the ability**)に依存するということを展望することである。結局において民主主義と社会主義の両立について、それを私は以前に民主主義がその下で成功にもっていくことが多分にあり得る諸条件についてとして記したのだが、私をして語ることを可能ならしめたのは如何様にしてであったのか、を読者は怪しむに十分なものがあつたであろう。回答は単純である。経済活動の領域を覆う公的経営の拡大は政治的決定の王国と歩調を整えた拡大を意味するものではないということ、しかも民主主義的な社会主義が成功裡にあるという条件は政治的王国と歩調を整えた拡大を意味するものであつてはならないということである。言うなれば、社会化は社会化された産業が政府により、または議会活動の諸方法により、

運営せられるべきであるということの意味しないのである。更に、「人民」によって運営せられるべきだとか、消費者連盟や類似の団体が——それらが今日もっているよりも——一層多くの発言権をもつべきだとか、を意味するところは更に少ない。

特定種類の何足の靴が毎年生産されるべきか、及びどのように靴産業がその靴生産に赴くべきか、を議会的諸方法によって決定することを試みるのはもとより不条理であるだろう。どんな利子率が——どんな率であれ——あるべきであるかを議会で討議することは相当程度に不条理であることが少ないだけであろう。しかし、特定量の投資を予算案の一部として提案することは政府にとってさほど不条理なことではない。更に枠組みと原則にかかわる諸問題——分配の諸ルール、または一日の作業時間の長さ等の決定、あるいは独立管理機関(例えば中央銀行に類似したもの)の認可や廃止といったこと——は今日、政府が取り上げているが如く取り扱われるべきなのは全く当然であるように見受けられる。能率についての一般的討議、調査委員会——イギリス王室委員会の如きタイプ——などは現在果たしている役割を充たし続けることになるだろう。

そのような配列構造こそが民主主義的方法を採用している社会主義体制の成功にとって全く本質的である。更に次のことが明らかである。一方においてどんな量の自己抑制を関係する諸グループの全てに課すか、そして他方において如何程に厳しく殆どのそれを心に抱く社会主義者達の希望の内のいくつかを押さえつけるか、が図られるということ。もし、社会主義の反対者達が社会主義的民主主義なるものは決して見込まれたような流儀では(in a way envisaged)作動しはしないと論じようとする気分させられるとすれば、それは上記のようになさない故である。彼等の推定は、私のものと同じだけ適切である。私の取り組んでいる全てのことは、一にかかって、社会主義者としての成熟が達成されていくのに対応して累進的に充たされていく傾向を見せるような諸条件の下では、その構図の中に本来的に(intrinsically)不可能であることは何一つない、ということを示すことにあるのである。そのために必要な補完的な要件はまたもや高度に訓練された強力にして正直な官僚制の存在である。その官僚制が政治的諸要因——騒々しい市民達の諸委員もこれに含まれる——からの独立性を十分に享受している、ということである。

7 このことは帰するところ部分的には、経営にあたる職員(the

managerial personnel)がどのように選出されるべきか、という設問に答えることになってくる。第Ⅲ部で述べたように思慮深い社会主義者達はいつもこの設問を気にかけてきた。更にまた——私は信じるものであるが——「民主主義はそれには何も答えない」という事実に気付いていた。1910年にドイツの社会主義者達がボルシェヴィズムには反対の立場にはっきりと転じた時、より過敏な一派は尚も自分達が産業を——少なくとも大規模産業だけは——収容しなければならないであろうと信じることで、これらの問題に答えようとした。社会化のための委員会(社会化委員会 Sozialisierungskommision)が従って設置され、その問題に多大の由々しき注意が投じられた。ところが結果は奇妙なものであった。経営者が所属の工場の労働者達によって選ばれるべきである、といった提案は——私の記憶にして正しければ——一度も論じられなかった。存在していた労働者の諸評議会(workmen's councils)は——それらは世界的挫折の数か月を通じて高揚され尽くされたのであったが——嫌悪と疑惑の諸対象であった。審議会は、産業民主化(Industrial Democracy)についてのよく知られた諸理念からはでき得る限り離れている道を行くことを試みながら、これらの評議会を本質的には会社(company)のそれに類似した一つの鑄型(a mould)へ向けて形作ることに全力を挙げた——組合の諸委員会(union committees)はそれらの諸機能を発展させるためには顧みられることが殆どなかった。

産業または経済民主主義というのは——その中に甚だ多くの準ユートピア(semi-utopias)が含まれていて——その正確な意味は殆ど残していないようなものに由来している修辭(a phrase)である。しかし私の考えでは、主として二つの事態を意味している。第1、労働組合が産業的諸関係に優越していること。第2、諸当局での労働者の代表参加(representation)による専制的工場(monarchic factory)の民主主義化、または次のような道程において彼等に影響力を確保するべく意図された他の諸工夫。即ち、工場における技術的諸改良、営業政策一般、それにもとより工場における規律、とりわけて含まれるのが「雇用と解雇」(hiring and firing)の方法である。利益分配制度はそうした諸構図の中の枝分かれにある妙薬(a nostrum)である。こうした経済デモクラシーの多くは社会主義体制の中での彼等の空気の中に消え去るであろうと言っておくのが安全である。またこれはその響き程には攻撃的なものではない。この種の民主主義が守ろうと意図されている諸利益の多くはその時は存在するのを止めるだろうからである。益々以て、それは経営の権威を強化し、独立性を守ることへの配慮をなした。彼等は、如何にして経営者達を資本主義的活力の喪失からそれに官僚

制的手続きの慣例への沈み込みから防衛するべきかにつき、思考を多く費やしさえしたのである。諸討議——それは間もなく実際上の関心を失ってしまったのではあったが——のもつその明確な諸帰結について語り得るとすれば、修辞上のことは禁じるとして、これらの社会主義者の経営者達は現代企業の執行部(**the executives of a modern corporation**)とは殆ど離れていない、ということによってのみ述べられることができる。責任ある人々はそれとは他の結果に至ることが難しいだろう。我々はこのようにして異なるルートの一つによって第Ⅲ部に既に到達した結論に至ることができよう。

8 それ故に社会主義体制は選任の役職の範囲(**the scope of elective office**)を拡大する必要は——政治的決定の範囲を拡大する必要があるよりも以上には——如何程もないであろう。任命、とりわけ指導的な経営上の諸ポジションへの任命は政治的考慮によって導かれるであろう政治的士官(**a political officer**)によってなされなければならないであろう。しかしながら、将軍達が任命されるが如く、一般的に政治力学が全てだということにはならないであろう。その業務についての諸ルールと諸意見があるのである。それに通常それが利己的なものでありと他のものでありと、いくつかの諸動機があるのである。それが生産大臣をして有能の士を見出すことに急き立てるであろう。

社会化が政府と議会そのものに及ぼす影響は、社会化の人事上の自由に及ぼす影響のようには予言することが困難である。次のように論じてよい。議員候補者達と議員達は「独立した諸手段をもっている人士達」(**“men of independent means”**)——そこでは個性と金との間に幾分かの相関のあることは疑いない——の諸々の時代には彼等がそうであったところのものでは最早ないであろう、と。あるいは、パンとバターの供給が政治的ゲームからは独立しているのが正常であったような諸々の時代にみられた程に、社会が彼等に供与することができた多くの行動の自由を彼等に許容することは間早ありそうにないであろう、ということさえも。よく知られ、しかも擦り切れたものである社会主義のバラックの中での奴隷制(**slavery in the socialist barrack**)の普遍的存在についても、また斯くの如くである。これに並行して、少ないとは言えない良く知られた、しかも擦り切れた反対の行論が社会主義の陣容から発生して存在している。しかし、こうした

諸行論は大きくバイアスのかかった推論なので、私としてはその一方の冷笑に対し、そして他方の抗議に対し、付記すべき何物をももたないのである。

第V部 第I・II次世界大戦と社会主義政党
付 アメリカ経済とケインズ理論

- (1) 第一次世界大戦から第二次世界大戦へ
 - 1) 第一次世界大戦の諸帰結
 - 2) 管理資本主義に入った社会主義者達
 - 3) 第二次世界大戦と社会主義政党の将来
- (2) 第二次世界大戦中のアメリカからの展望雑録
- (3) 大戦直後の世界情勢と社会主義諸政党進出の様々な様相
- (4) (3)の補足的パセイジ
- (5) アメリカの事情、ワシントン経済学とケインジアン・セオリー
- (6) スターリンとフランス・イギリス・アメリカのロシア問題

(1) 第一次世界大戦から第二次世界大戦へ

摘要

第一次世界大戦をとおして、イギリスとドイツの社会主義諸政党は大戦の衝撃を凌ぐを得た。諸教義、究極の諸ゴール、党の諸機構、リーダー達の諸類型、といったものは基本的には変化がなかった。その上、増大した支持者と自己負荷された諸責任があった。イギリスの場合、労働党が着実に管理に当たり得る実力を持つべく成長をみた、しかしその一方ドイツの場合、社会民主党は——ブルジョワ陣営の失策の所産でもあって——戦後問題に遭遇することになった。・・・権力の降誕はしかしながら経済的エンジンが資本主義の路線でしか動かないことを意味するような、そうした一個不可能の状態をもたらすものであった、その上ロシアと組む共産主義者の諸グループから発生したもつれ込みもあった。・・・最左翼の少数派はロシアの公式的カルトによって指導されていたけれども、ドイツの社会主義者の他の多数派は連立によって管理諸政党の中枢入りを果たしたのである。・・・社会主義の古典的画期はイデオロギーにおいてもプログラムにおいても消し去られた。・・・ワイマール共和制の中で賠償とハイパーインフレーションの下で労働立法と極めて控え目な社会化が図られた。・・・だが経済の回復は外国からの資本流入によってもたらされたのであり、党のメンバー達は地方政府や労働組合の諸々の席に居座って十分なものがあつた。・・・しかしながら財政的並びに通貨上の諸困難が表面化し始め、外国資本の流入が止まるに及んで周知の破局が発生し、それが指導者達の最も求心的な位置を掘り崩すことになり、尚ゼネラルストライキを招来するに足る力をもちながらも、ナチスにより完敗させられ、リーダー達の手勢は一ダースの信奉者にも足りない程に凋落した。・・・第二次大戦となり、社会主義諸政党の将来はその結果次第となった。もしロシアが主要勝利者にでもなると、混沌が周辺諸国のボルシェヴィキ化を確実ならしめるだろう。しかし結果の如何にかかわらず、社会主義へ向けての一つの長い歩幅が採られ、諸々の事物と魂における成熟が戦時の経済統制と官僚機構の立ち上げを通して加速されることになろう。・・・その他
(編者)

V—(1)

第 I 次世界大戦から第 II 次世界大戦へ

1) 第 I 次世界大戦の諸帰結

ロシアを例外として、戦前の社会主義諸政党は、どこにおいても、第 I 次世界大戦の衝撃を生き延びた。しばしの間、彼等は権力の座への一大接近を経験しさえした。諸教義、諸スローガン、究極の諸ゴール、諸構造、官僚制の諸機構、リーダー達とその諸類型、これらは第 I 次世界大戦が解きえない諸問題の巨塊のさなかに身を置くよう燃え上がった時の様相と尚同じ——少なくとも基本的には——であった。これは誰もが期待して然るべき状態であり、更にもし大戦の影響がその世界に関わったことの全てであったとすると、以前からの諸趨勢が再度とられることはある筈がない、となす理由は実際には何の根拠もなかったということになり——恐らくいくらかはもっと速いペースで進むであろうとみられてよかった。水面下にあってずっと以前から噴出の契機を集めつつあった——ただ我々の殆どが全くそれに気付いていなかった——諸事実と諸要因を水面上に持ち上げることにより、この大戦は追加的な重要性を獲得するものであった、ということをはっきりと示す位置に、我々、あるいは我々の幾人かがあるのは、今において他にはない。社会主義の諸政党はブルジョワジー陣営の失策を共有しながらも、自分達の戦後の諸問題への接近を図ったのであるが、そこでは自分達が取り組まなければならないものは依然として尚、旧世界の諸事物であり、更に自分達はそれについては全てを心得ている、という諸仮説の上に立脚するものであった。・・・この態度は後に注意されるであろうファシズムについての最後のカード理論(the last-card theory of fascism)に反映される。・・・そうは言っても今や次のことが明らかである。即ち、我々が第 III 部でそれを定義した社会主義ならばどんなものであろうと戦中戦後の諸条件によって推進せられたものであったけれども、これらの社会主義の特定タイプのもの——それは本質的には平和志向で国際主義的なブルジョワジーの世界の中から育て上げられた——にすぎないものであり、更にオールドスタイルの正統社会主義(とマルクス)によって描き出されるような社会主義の特定タイプのもは——それらの文化的補完体と共に合わさって(together with their cultural complement)——急速に色褪せていくことになった。

前章の終わりのところで指摘しておいたのは、社会主義諸政党は自分達が戦争回避の為なし得た全てのことを彼等の国際組織のメンバーとしてなしたということである。このことをなしたとしてもだが、彼等は真に驚くべき率直さをもって自分達の祖国の大事に向けて結束した。ドイツのマルクス主義者達はためらうところがイギリスの労働党员よりも少なくさえあった。もとより、全ての交戦国の国民が純粹に防衛戦争を戦っているのだと十分に納得させられていた、ということを中心に止めておかなければならない——全ての戦争は、戦っている国民の眼からすれば防衛的であり、または少なくとも予防的(preventive)であった。・・・社会主義の政治家達の多数派がマルクス主義者の国際主義(Marxian internationalism)を信じていることがあろうとあるまいと、彼等はその宣託(the gospel)に拠ったどんな立場もが単に自分達に追随する者達を失わせるものであることを確かに実感したのである。大衆は先ずは彼等を見据えるのである、そして次に彼等は忠誠を拒絶することになるだろう——そこではプロレタリアには祖国はなく、そして、階級闘争が関わるべき唯一の戦争である(the proletarian has no country and class war is the only war that concerns him)、というマルクス主義の教義は事実上、反撥されたのである。その意味でマルクス主義的構造の死活的支柱の一つが1914年8月に崩れたのである。それは保守陣営でも感得されており、ドイツの保守派は突如としてお世辞に満ちた言葉で社会主義政党に関係し始めた。それは信頼がその古き情熱を尚も保持していたような社会主義陣営の中のその部分においても感じられていた。カウツキー(Kautsky)とハーゼ(Haase)は多数派から離れ(1916年3月)、1917年に独立社会民主党(the Independent Social Democratic Party)を組織した。

今一つの分裂——それはもっと後に起こったのであるが、1914年の諸事件にまで遡って跡付けられよう——はもっと重要である。実質的には日付は更に遡る。公認となった社会主義であるものの左に一層過激な党の存在の余地があったことは、エンゲルスの「平和的諸方法」の宣言(Engel's declaration for "peaceful methods")以降においてさえ、ドイツのケースにあつては、明瞭であった。更にロシア党のロンドン会議(1903年)以来に遡ってさえロシアのケースにあつては、それは明瞭であった。そしてこの種の余地は埋められないままに長期に渡って残されることは決してなかった。様々な根拠に対応して様々なタイプの過激派が——殆どの場合、既存諸党の中には足場をもたない活動派知識人達(actively intellectuals)であったのだが——共産主義の名を社会主義の名よりも選好して採択し

た時である1848年の社会主義をマルクスとエンゲルスが見た光の下で、その公認社会主義(that official socialism)に愛想を尽かすこと多大であり、これを見届けようと始めること多大なものがあったのである。ベーベルの指導力はしばしの間その災禍の日(the evil day)を遅らせることに成功したが、しかしそれは来るべきものであった。更には左翼の突き上げは成長期のゼネレーションの野心を満足させるため不可避であっただけではなく、着実な——見捨てられさえしなければ——権力の座へ向かっての進歩がそのウィング(翼)の存在によって累増的に阻害されつつあるという混じり気なしの災禍でもあったのである。

当然のことながら、戦争問題(the war issue)はグループを統合する方向に大きく歩を踏み出させた。尤も最初には事の十分な意味合いは独立党(the Independents)の継承によって曖昧ならしめられていた。この党と共に賭けられていた(was at stake)全ての事柄は本質的に当面の——信じられている多くのことが戦術的な問題であるにすぎないようなことにおける——意見の差の為であった。第2インターナショナルは死んでいる、そして時は全く異なった諸目的と諸方法を求めて鐘を鳴らしている、との趣旨のレーニンの声明すらもが、その場合、社会主義者達の多数派に対しては、根本的に異なる何物かを持ち込むものではなかった。類似的にドイツにおいてK. リークネヒトとR. ルクセンブルグによって設立されたスパルタクス団(the Spartacus league, founded in Germany by K. Liebknecht and R. Luxemburg)——これは戦争に反対する運動の中で独立党の防衛上の信条の最後の断片を削除し、その上に軍隊と手を組むことを試みていた路線とは大きくかけ離れた道を歩んだのであるが——もまた、戦時統制が取り除かれた後でさえも、古いエルフルト綱領(the old Erfurt program)の文言での主張を超えて進むことはしなかった。・・・独立党の党員の幾ばくかは、推奨できない急進性に低評価をなしつつも、彼等に同感の念をもっていた。・・・リークネヒトにしてもルクセンブルグにしても、いつも多大の非難を蒙っていたが、個々の独立党員との約束の遵守が全くなされなかったわけではなく、多数派等のいくらかのメンバー達との間においてさえそうであった。最後にスイスのツィンメンバルトの大会(the conventions in Switzerland at Zimmenwald)(1915年)とキーンタールの大会(at Kienthal)(1916年)では、そこでの討議が出席者の殆どは一層過激で、しかも滞在していた人達には遠くかけ離れた革命路線に一層傾斜していた、という事実によって当然影響されていたものであったけれども、国際的な接触を確保しようという至極当然の試みの他に

はそれを超えた何事かを彼等自身にもたらずものではなかった。・・・こうした集会をもとうとする願望の中には、特に過激なものは何もなかった。このことは第2インターナショナルの事務局(C. ユイマンズ)がスカンジナビアン社会主義者(Scandinavian Socialist)の示唆に即して活動していたことから証明される。このようにして次の会議が開催される試み(1917年)となったのであるが、その失敗は基本的に連合側が——その時最終段階にあった戦時下の為——必要なパスポートを出すことを拒否したことを理由とする。

我々の分析のこの部分を要約しよう。「共産主義」——その信条が既存の諸社会主義のそれよりも一層過激である点で革命的という意味においてのものであったが——は戦争を通じて諸勢力を結集しつつあったのであり、しかも古い諸政党では決して身につけえなかった多くの新しい諸要素をもった際立てる共産主義諸政党がその出現を確たるものとした。但し社会主義者達のその偉大なる多数派はこの展開の足跡にある容赦のない必然性について留意することはなかったし、留意するべきだと期待されることもあり得なかったのであるが。ただ、この共産主義は一個の純真なるマルキシズム——既存の諸政党により見捨てられつつあるイデオロギー的な靴に足をかけているそれ——への単純な回帰であったかも知れないし、そしてこれらの共産主義諸政党はよく知られている政党政治のメカニズム——このメカニズムによって新左翼グループは登場してくる——に対応した何等かのそうした諸事例であるとみられること以上には興味を惹くものではなかった、と言えるかも知れない。これが実際にはロシア——現代共産主義に対し一個の完全に異なったカラーを与えることによって、診断に更に多大の困難を引き起こしているところのロシア——において展開に都合良きケースとなった、というように見ておくのが理のあるところである。

敗戦に終わったどんな大戦もが社会組織をその根底よりゆさぶり、しかもとりわけ統治グループの地位を脅かすものであるだろう。軍事的敗北の一つの帰結である威信の喪失が彼等の生き残るための最難事の一つである。私はこの法則のどんな例外をも知らない。しかしその逆の命題は定かでない。成功(勝利)が敏速なものでないならば、あるいは統治階層のパフォーマンスと結合して衝撃的で明確なものでないならば、疲弊は、経済的、物理的、それに心理学的の何であれ、戦勝国のケースであってさえも、敗戦国のケースとは本質的に変わらない影響を諸階級の相対的位置に——

社会的グループの全ての他の諸タイプのそれと同様に——もたらすところが充分であろう。第 I 次世界大戦はこのことをよく描き出すものであった。

西部及び中央ヨーロッパの社会主義諸政党の命運に対して、このことは 3 つの事柄を意味した。

第 1 権力の降誕(the Advent of Power)・・・戦前、彼等を責任ある役職から隔離していた長い時間帯は殆ど余幅の無いものに収めこまれた、そしてその道程に立ちはだかっていた多くの障害物は突如として撤去せられた。社会の中央機関の管理は征服されなければならないのではなかった。それは彼等に信託されたのである。このことは次の諸事実からの当然の帰結であった。即ち、社会主義政党は様々な戦時の連携に加わりこそしたが、そうは言っても戦争政治と結びつくことがブルジョワジー諸政党のそれに比して際立って少なかった——だからして不信がもたれるところが遙かに少なかった。もし彼等が戦時中、国民政府を支持することに失敗していたならば、全ての非社会主義者と社会主義者の多くは祖国が危機にあった時に彼等を見捨てた、と感じられたであろう。反対にもし彼等が、他の諸政党がそうであったように、充分に交戦を叫び続けていたならば、不信は彼等の上にも広げられていたであろう。事実そうであったように、彼等は国政に責任を負う資格を有する存在となった。そして内政においても、外交においても、然るべき諸問題を処理することのできる唯一の人々として彼等は出現した。

前者(内政)については、社会主義諸政党だけが、怒っている大衆に対し、与えることが可能であったその範囲の親労働政策(that measure of pro-labor policy)を受け入れさせることができる位置にあった。後者(外交)については、彼等は戦争によって開いている傷口を縫い合わせるための彼等自身の繋がりを唯一活用するものでなければならない——その時はそのようにみられていた——ということであった。どのように彼等はこれを行うべく着手したか、自国内で行われたそれぞれの政策は、そして如何なる成功が彼等の努力に報いたか、我々は尚分析を続けるべきであろう。しかし彼等の活動に付帯した——国際的スケールでの——みるべき程度の成功は直ちに注意を喚起する。

彼等のある一派は第 2 インターナショナルの復活を試みた。他の一派は

——彼等はそうした試みの成算に不信をもち、第2インターナショナルがその古い形態でははっきりと過去のものであることを明らかにしつつも、共産主義インターナショナルの結集には配慮を行わなかった人達であったのだが——彼等自身が掌握する組合をもって社会主義党の労働者国際同盟(**the Workers International Union of the Socialist Parties**) (ウィーンインターナショナル)を設立した。二者の差の性格はインターナショナルへの参加者としてウィーンに差向けられるのが慣例となっていたこの時代の共産黨員——と多少の社会主義者を含めて——は数の上で2人の内1.5人が召喚されていることによって示されるであろう。終わりには全ての社会主義者を収容することを目指した「2つの町の中間の宿屋」(**a half-way house**)を構築するというのがその意図であった。そしてその雰囲気は再生した第2インターナショナルに所属するグループの過激化を期待する傍らで、共産黨員達の抑制を図るところにあった。この願望は我々にとって奇想天外なもの(**chimerical**)のように見えたが、それでも当時としては理に適ったものでなくはなかったのである。従って階級闘争と革命は保持せられるべきであったし、教条の神格化(**enshrined in the credo**)はあったが、その一方で実行上のプログラムは共産黨員と共になされるべきことは何もないということであった。もとより、このことは共産主義者達にとっては受け入れ難いものではあった。しかし第2インターナショナルは、はっきりとそのプログラムの基礎の上に達せられたということを理解させるものであった。

派閥的な諸障害(**the sectional obstacles**)は妥協により、何か18世紀の外交官に信任を与えた時起こるであろうような流儀で除去された。・・・大陸では階級闘争なしには生きることができなかった。他方イギリス人はそれを伴って生活することは不可能だと感じていた。そのように議定文書(**protocal**)のドイツとフランスのテキストでは階級闘争が保持されており、イギリスのテキストでは便宜的で完全には理解できないような遠回しの繁文で置き換えられた。・・・ともかく、それは——達成されたところは乏しいものではあったが——1923年のハンブルグ集会(**the Hamburg convention**)において起草された。戦争は帝国主義者として汚名を着せられ(**stigmatized**)、「反動」(“**reaction**”)に反対する国際行動がぼんやりとではあるが示された。賠償についての調整は通過した。そして労働組合の利益は一日8時間労働制度への賛成と社会立法の国際化(**the internationalization of social legislation**)のゼネラルプランへの賛成の投票によって和解せられた。より一層に深い意味では、その全ては時代の提

起した時事問題への考慮という点では——同時代のブルジョワジー達がより一層の自由貿易と非軍備について解決を図っていることと比較すれば——失敗しており、しかも過去の追い払うべき陰を意味していた。しかしながら、それはその時代では決して無駄ではなかった。そのことは賠償についてのロンドンの合意(1924年)とロカルノ政策(Locarno policy)が——ある程度には鼓舞さえするものであったが——ハンブルグの解決(the Hamburg resolution)によって大きく助けられた、という事実からしても十分に明白である。

第2 一個の不可能な状況・・・マルクスは社会化に対する必要な前提として政治権力の征服を考えていた。これは——そしてマルクスの行論は実際にいつもそれを仮定しているのであるが——好機は資本主義がその道程を走り終えた時、そして私が第Ⅲ部においてそれを取り上げているように、諸事物と諸魂(things and souls)が成熟した時に起こるであろうことを含意している。彼等が考えていた破局は内的諸原因に由来する資本主義の経済的エンジンの破局であるべきであった。ブルジョワジーの政治的破局はこのことに対する単なる随伴部(a mere incident)であった。しかるに今や政治的破局——あるいはそれに近いこと——が起こっており、その傍ら経済過程には成熟に近い状態など未だどこにも存在しなかった。それはもっとも非マルクスの状況(a most unMarxian situation)であった。

書齋での研究者は、もし社会主義諸政党が——諸々の事柄の状態がオフィスのトロイの木馬(the Trojan horse of office)となることを拒絶していることを認知していて——反対の位置に止るならば、そしてブルジョワジー達にもたらされている混乱と窮迫(mess)を払拭することを許したとするならば、諸々の事柄の原因に何があったのだろうかについて思案を巡らせることはあり得よう。恐らくはそれが彼等にとって、社会主義にとって、世界にとって、より良かったことであろう——誰が知っていたか?・・・この主題についての言及のいくらかはドイツのケースについての我々の議論の中で提供されるであろう。・・・しかし、この時代の人々にとっては、彼等の属している国と彼等自身とを同一視する(identify)よう、更に責任の観点からこれをみるよう教育されてきていたのであって、選択の余地などはなかったのである。しかしながら彼等は一個の解きえない問題に直面した。

そこには資本主義的な諸路線においてでない機能を果たせない社会

的、経済的システムがあった。社会主義者達は、それをコントロールし、それを労働側の利益になるように制御し(**regulate**)、それを搾り取ること、それ以上にやると能率を損傷することになる正にその直前まで行う、といったこともあり得るかも知れない——しかし彼等は特に社会主義ならではのどんなことをもなすことができなかつた。もし彼等がそれを運転したとすれば、彼等はその資本主義のロジックに従って運転しなければならなかつたであろう。そのようにしてなされた。もとよりいくつかの事柄は社会主義者の語句で自分達の諸方策を飾り立てながらなされたし、いくらかの成功があれば、拡大鏡が自分達の政策とブルジョワジーの——あつてほしいと望んでいる——代替政策との間にあるあらゆる諸差にあてられた。しかしながら、本質的には、リベラル派や保守派がそうした環境の下では同じようになされたであろうものを、なさなければならなかつた。しかし、そうすることが唯一可能なことであつたとしても、この政策は自身を社会主義者と呼ぶ時、何事かを本気で考えるような人々の全てを失望させた。しかも背に経済的あるいはイデオロギー的代価を背負つた人々を和解させることには完全に失敗した。死せる労働主義(**a dead laborism**)が授けたのは労働組合や特定の改良主義者のグループに団体旅行をさせる以外には誰をも満足させなかつた。

第3 共産主義者の危険・・・共産主義グループとロシアとの関係、その関係がなかつたとしても社会主義諸政党に対して独自の位置をもつであろうものとしての共産主義の問題、この二者から引き起こされるもつれ(**complication**)を区別するには我々は慎重でなければならない。

後者に関しては、公認の社会主義の左に今一つの政党が出現することは——どんなケースであれ——それだけで時代の一問題であつたということ、並びにそうした政党はマルクスに帰れ(**back to Marx**)というスローガンの上に出発させられるべきであるという事実に関心されることは何物もないのだということ、を我々は検討してきた。ここに我々が追加しなければならないことは唯一つだけである。即ち、離脱が様々に起こって由々しい問題となつたのである。それは社会主義者達が彼等に転がり込んできたその権力を受け入れたその安逸性によるものであり、更に彼等がそれを受け入れるやいなや自分達の立場を見出したものがそこにあつたところのその不可能な状況によるものであつた。革命的社會主義の中にこそあつた知識人の信奉者達は——自分達の過激主義を吐き出すことが許されることがあり得た党の学校といったいくらかのもの(**some party school**)の

教師の地位に側置されることで満足はしていなかったのである。彼等の殆どにとっては単純に党の中には彼等の位す余地がなかった。古いそのスローガンを記憶しているか、または今や新装されたスローガンを食べるべく彼等にあてがわれてきているような、大衆のその部分においても状況は同じであるところが大きであった。この局面——ロシアの局面とは完全に独立したものである——は繰り返すようだが、決して失われた情景であるとされてはならない。例えツァー達があつたロシアを統治していたとしてさえも、共産主義諸党はあるだろう、ということである。

しかしロシア的局面が、遥かに重要なものであつたこと、及びそれが共産主義者達と社会主義者達の間急速に開かれ尽くされた衝突の広がりに対して責任のあるものであること、そして更には他のようならば決してそうはならなかつたこと、を確立することは容易である。・・・

2) 管理資本主義に入った社会主義者達

・・・マクドナルドの第二次の政権獲得によって強化され得たかのように転じた。再度、リ・ピール卿(Sir Re Peel)の第二次内閣とのアナロジーがこれを描き出すことを助けるであろう。ピールの保守党多数派は穀物条例のむし返しである争点で分裂した。そのピール派の一派はマクドナルドの個人的な信奉者よりも遥かに数も多く、また重要であったのだが、忽ち分解してしまった。保守党は骨抜きとなり、政権を勝ち取る能力の無いことを証したのである——1873年におけるディズレリーの大勝利に至る迄、3回政権をとることはあったとしても——。しかしその後、保守党はキャンベル・バナーマン卿の1905年の勝利に至る迄、この時代の約3分の2の間、力を保持していた。しかしこのことよりも一層に重要であるのは、イギリスの貴族や郷紳は、政治的に言っていることだが、その間の全期において彼等の地盤を——もし高貴な血統の不名誉さが取り除かれていなかったとしたら彼等が為したであろうよりも遥かに良好に——保持した、ということである。

事実問題として、労働党(the labor party)は急速に回復し、分裂に続く数年を通じて、その国の中でのその地位を整えた。次のように言うておくのが安全である。諸々の事柄の正常な経過の中で、社会主義者達は増大した勢力と成功へのより良き諸々のチャンスを伴うかをもってして、さほど長くない将来に再度政権の座に返り咲くべきものであった、と。更に彼等は以前に採ってきたよりも一層に強力な路線を採ることが可能となるであろう、ということ。しかし同じように次のように言うておくのも安全である。彼等のプログラムに関しても、それに効力を与える彼等の能力に関しても、共に彼等の政策はマクドナルド政策(the MacDonald policy)から隔たるところは——主として社会化についてのいくつかの個別的諸手段においてのものであったが——単に程度の問題に過ぎなかったであろう、と。今次の大戦のもつこれらの展望に及ぼす諸影響はもとより予告することは不可能である。しかし、こうしたことは一つの可能性としてあり、考察の為、純化されるべき充分に興味のある可能性なのである。

労働党員は非常時の呼びかけ(the call of emergency)に応じてチャーチルの政府に結集した。しかし成り行きが何であれ、この戦争は単なる間奏曲(intermezzo)では断じてない。それが社会の枠組みを完全に変えるであろうことは、ありそうなのである。戦時課税(war taxation)と戦時産業統

制(war control of industry)が再度反復されることは決してないであろう。双方は資本主義の秩序の存続とは両立し得ないのだから、根底からの——徐々にではあるかも知れないとしても——再構築が自からに負荷されるであろう。正確には1919年には不可能であったところのことが、今次の大戦の後には避け得ないものとして来ることがあり得よう。今や労働党が、単独であるか、または労働党に主宰された(dominated)連立においてか、いずれにせよ、その再構築において主人公となる位置にあるだろうことはあり得ないことではない。というのは、彼等のプログラムが、他の場合ならば遭遇したであろうこれに対する反対の殆どは、この世界に死に絶えていると期待されてよいからである。その世界では、これに対して闘うよう残された資本家などは最早ないのである。もとより、政党の精神はその過程の中で変化することはあり得よう。ファシズムの色調(fascist hues)をもつこともあるかも知れない。例えば軍国主義的社会主義(a military socialism)が発生するかも知れない。それはマルクスの願望(Marx's prayer)に対する一個の奇妙な回答であるだろう。しかしイギリスの歴史においては反復して起こることであるが、連続性——綱領と人事における——は尚そのケースにあっても保たれよう。それは依然として古式の政党であろうが、だがしかし、変態されて(metamorphosed)、それが新しい国家を統治することになる。

それは正に一個の可能性であり、繰り返せば、多くの中からの一つの可能性である。しかし、もしそれが成熟したものであったならば、それはその種の唯一のケースを構成するものであろう。その他のところではどんなところでも、社会主義の古典的画期(the classic epoch)にあった諸政党、諸機構、諸イデオロギー、諸プログラムは彼等の足場を壊してしまうか、または失ってしまうかしていた。彼等が立ち向かっている物事の多くは他の諸機関により、他の諸立脚点から実現されるべきものとみられていた。更に彼等のスローガンの多くは——ロシアではマルクスの神位の公式の礼賛(an official cult of Marxian deity)すらもが——限りなき時代の経過の中に生き残ることがあり得た。しかし政治家個人がそうであるように、これらの政党は去っていくものであり、彼等の信条もまた——それが十分な文化的・政治的含蓄において問われているのならば——同じく去っていくものである。このことは合衆国における胚芽的なグループにおいてすら真実であった——もし国民的重要性をもっている何等かの政党が何時の日か自らを社会主義政党だと名乗ることが起こったならば、それはこれらのグループのいずれかがそれに成長したかも知れないであろう政党とは、

甚だしく異なった何物かとなるであろう。こうしたことは社会民主党(the social-democratic party)において力点を置いて(emphatically)真実である。20年代におけるこうした政党の履歴(career)についての短い検証がこのスケッチを締め括らせるであろう。

その履歴は非常に多くの特異点において英国の党の履歴とは異なるのはもとよりである。しかし、それが崩れるに先立った10か年を通して、その二つのケース(ドイツ社会民主党のケースと英国労働党のケース)の類似性は尚一層の重要性をもっていた。私が以前に述べた時指摘しておいたように、社会民主党は殆ど革命的ならざるやり方で権力に立ち至ったのである。単純にその国の運命を最も信託させることができると思われた最強の政党として——というのは外交的と内政的な双方の状況を考慮した時、ボールを足元にもっている、とみられたからである。ところが政権に就いた(ドイツの)社会主義者達——「多数派社会主義者」(“majority socialist”)と反対側の人達は彼等をそう呼んでいた——はすぐさま共産主義蜂起に直面しなければならず、このことはイギリスでみられたいくつものトラブルよりも数段に厳しいものがあつたのである。更に後者(蜂起)は(イギリスの)労働党が未だ政権の座についていなかった時に起こっている。このようにイギリスの社会主義者達は単に演習を行っただけに過ぎなかった傍らで、ドイツの社会主義者達は実弾を以てなさなければならなかったのである。治安妨害の鎮圧には旧時のプロシヤ將軍の誰かに信認を授けるほどのエネルギーを費やしてなされたのであり、しかもそのように奉仕した彼等はブルジョワジー社会の管理下に置かれている自らを見出していたのである。基本的な諸問題はイギリスにおけるものと同じであつたが困難度においては比較にならない程大きかつた。

彼等は——当然のことながら世間一般の殆どの悪口を受けながらではあつたが——今日の離れた時点からみると、我々の敬意を更に賞賛をさえ引き出すことは間違いないといったやり方でそれと取り組んだ。エーベルト(Ebert)、シャイデマン(Scheideman)、ヴィッセル(Wissel)、それに他の当初数年の指導者達はどんな人格的な惹きつけも欠いた単純な人達であつたとしても。彼等は脚光を浴びることの反対であり、この点非常に賢明であつたとさえ言い得ないものがあつた。彼等が成し遂げた事と言えば、正直や常識が政治の世界に入っていくにはどのようなことになるだろうかを示しただけであつた。彼等はベルサイユ条約に対する責任——実質的には正に責任を負ってしかるべき他の諸党はこれを回避しようと図つた

——を肩に担ったのである。彼等は共産主義者の蜂起と共産党の出現——その環境下では彼等の禁猟管理区で密猟を成功裡に進めていた存在であったが——を鎮圧することに反応して燃え広がった憎悪を受け入れたのである。彼等は先ず自分達の支持者の内、より過激であった支持者に対していくらかの承認を取り付けた。特に社会化を語りかけ、甚だ穏健な社会化法案(a very modest socialization law)を1919年を通過させることによって。しかし彼等はすぐさま、ニューディールとしてアメリカ人には人気のあったタイプの労働立法(labor legislation)を彼等自身に適用させるために、その(社会化の)全てを棚上げしてしまった。この措置は労働組合を満足させたが、他の誰をも満足させなかった。実際に彼等は彼等自身を「労働党化」(“laborised”)した。労働組合官僚制(trade union bureaucracy)の中で指導的位置にあった人々をして党の政策策定機構の実行部門(the operative part of their policy making machine)を形成することを許した。このことは、誰かが考えたかも知れなかったように、マルクス主義的伝統(a Marxian tradition)を備えた政党——この伝統はこの党の教育部では支配的であり続けていた——にとってはでき難いことであるべきであった。しかし、そうではなかった。極左の相当部分と生粋の共産主義者達の離党を別とすれば、党内で反対して立ち上がることが予測されていた知識人達は掌中に保たれていた。イギリス党とは異なり、ドイツ党は国(Reich)、州(state)、市町村(municipalities)の行政諸機構(the administrative apparatus)の中によく根を下ろしていた。その上、党の新聞やその他のところで提供する仕事をもっていた。これらの官職等の任免権が精力的に行使された。服従は官公庁において、学界において、無数の公共企業及びそういった機関において、昇進を意味した。このようにして鞭打ちの仕置きは過激派を手なずけるのに効果的であった。

この種の事態はもとより党の規律を強化しただけではなく、党員数をも、更に党員数をも超えてすら党がカウントしてよい投票率をも増加させた。しかし、党が国民生活の全領域で力強くはあったとは言え、議会政治的な意味で統治するのに十分に強力ではなかった。1925年に総人口は、約6千2百万人であった。プロレタリアート(労働者達と彼等の家族達、それに家事サーバント達を私は含めることにする)は、2千8百万人に満たないのであり、それにこの階級でさえ、一部は他党の投票に流れているのが習慣になっている部分があるのである。「自営業者人口」(“independent” population)はそれほど少なくはない——約2千4百万人——、そしてその大部分が社会主義者の説得に応じなかった。我々がその

上層、言ってみれば、百万人を除いたとしてさえも、ペザント・職人・小売商等、投票にカウントする諸グループに自己限定をしてさえも、現時点及び想定し得る将来において、これらが制される(**conquered**)には程遠いものがあった。これらの二つの階級の間には、ホワイトカラーの被雇用者があり、彼等の家族を含め、彼等に属する者は一千万人よりも少なくはない。社会民主党は全くのところこの階級(ホワイトカラー層)を枢要的地位に保つことによって生き長らえているのであり、これを制することに多大の努力を払ってきたのである。しかし、みるべき成功があったにも拘わらず、ホワイトカラーは——それが社会階級についてのマルクスの理論に従って存在するよりは——遥かに由々しき障害(**a much more serious barrier**)であるということを示すというのが、これらの努力の唯一の見返りであった。

その(上記の)事実と整合させられようとする場合、社会主義者達は通常次のような論議を進めることで満足を引き出そうとする。即ち、社会主義者ではない雇われ労働者は、未だ真の政治的位置を見出してはいないのである、正に道を誤った羊(**just erring sheep**)なのであるが、やがてはその道を見出すことが確かな人々であるということ、あるいは彼等は彼等の雇い手(雇用主)による休みなき圧力が加えられていることで、党に加入することが妨げられているのだ、といった論議。はじめの行論はマルクスの教義(**the Marxian fold**)——我々は社会階級の理論がマルクス主義者の(理論の)連鎖の中の最も弱い連結部の一つであるということを検証済みである——を飛び越えて誰にも罪を負わせるものではないであろう。次の行論は平明な事実の問題として誤っている。それが他の時代であれば真実を含むかも知れないが、20年代のドイツの雇用主達は——量的な重要性をもたない例外はあろうが——自分達の被雇用者達の票に影響を与える位置にはなかった。

これが全てという訳でもない。政治的経験と能力という点で、ドイツの反社会主義諸勢力は全体としてイギリスの仲間達に劣るところが大であった。事実、知性のある保守の反対の欠如という故からも、諸事態は社会民主党にとって更なる困難をもたらすものであった。しかもこの反対はイギリスのそれに当たるものがそうであったよりも、国民的土壌の中に確として根を下ろしているところ多大なものがあった。例えばユンカー階級(**Junker class**)は数の上では採るに足らないものであった上に、全くと言ってよい程に政治的リーダーシップを採ることが——その種のリーダー

シップを採ることに、イギリスの郷紳(the gentry)が巧みであったのに比して——できなかつた。しかしこの国の大部分のところで、その位置は上記に拘わらず、それを崩すには物理的暴力(physical violence)に訴える以外にはあり得ない程に、しっかりと確立されていた。

このようにして、この党(社会民主党)が共産主義者達と共に共通の原因をつくることに逆らうこと(against making common cause with the communists)、及び血の奔流の中での反対を和らげる(to quench opposition in torrents of blood)こと、を決定するやたちどころに、排除のルールについてのどんな意図をも放棄しなければならなかつた。入らなければならなかつたのは、非社会主義諸政党や諸勢力(interests)との提携(coalition)と妥協(compromise)であつた。更にそれは臨時的な便法(a temporal expedient)としてではなく、永続的な協定(a permanent arrangement)としてであつた。その上、そうした協定がひとたびなされるや、それがなされるべきではないとする理由が現実上なくなつた。そうした協定はその追随者を重複させることから党を防ぐものではなかつた。更に提携の立場は労働組合の諸要望を充たす道程に立つものでもなかつた。更に責任の分担に対して言われるべき事柄が多かつた。

カトリック(センター)党との同盟は、それ自身、非常に初期の段階に示唆されていた。この党が實際上カトリック教会に対して忠誠を公言していた人々の全てを含み、その中には幾ばくかの反社会主義であると大略言つてよい人士がいた、ということも真実である。しかし、この党は非常に過激な一翼をもっており、それらの人達の重要性は——社会民主党との競争の中で——カトリック系労働組合の忠誠確保の必要性によって大幅に増大させられていたのである。そこでセンター党员(the centrists)は実践行動の中では「労働党员」が社会主義者達そのものであるかの如くであつたのと丁度そのように振る舞つたのであつた。更には、彼等はプロテスタントであつたホーエンツォルレン君主制の、とりわけ散逸する筈もない記録類を収容し、社会主義者の立場からその極めて重要な点で騒ぎ立てた。彼等はワイマール共和制(the Weimar republic)こそ、そこに住む自らにとつて全く居心地の良い場所であることを、すぐさま見出したのである。

もとより社会主義者達はカトリック教会をそのままにしておかなければならなかつたし、更にはその力と独立性を支持することで手を貸そうとさえしたのである。彼等はこのようにしてこのセンター党に支持の大きな

シェア(a good share of patronage)を与えることを承認しなければならなかった。センター党はこの支持を社会主義者達がなしたよりも更に効果的にさえ用いたのである。しかし、このセンター党が二つの問題点で満足させられるに至った時、協力は信じられない程の円滑さを以てなされた。総じてプロシャの自由州政府(警察の管理を含む)では——州政府のレベルが多かれ少なかれ、共通の狩猟場として扱われている中で——支配的な影響力がカトリック西部を絶妙の巧みさで処遇したところの社会主義者の手に握られたのである。この仕組みは非常にうまく作動したので、カトリック中道派も社会民主党のいずれの名義も、事柄の核心にその区別が記されることは稀だという状態を育んだ。

しかし、ワイマール体制に足場を置く用意のあった諸党は、どの党も完全に無視されたままにしておかれることはなかった。重要な——時には指導的な——官職が、繰り返しドイツ国民党(おおざっぱには保守党に当たる)に与えられた。そして、如何なる政治的養子縁組をも行っていない人達について言えば、これら全てのブルジョワ政党のメンバー達は——戦前にそうであったように——「国民党」と社会民主党の間で広く広がった大きな地盤の中で存続し続けることが認められた。このことはとりわけ「民主党」に当てはまるケースであった。同党は尚完全に資本主義ではあったが、その中では最左翼のリベラルグループであった。この党は党員数においてよりも人材(talent)において強かったのであるが、新国家については全てのことに好意をもっていたような、社会主義者達についても——何か問題にもならないような近年の社会主義は別として——その全てのことに好意をもった、そういう人達を強く掌握するに至っていた。

普遍的原理としての連携(coalition)は一個の普遍的妥協(compromise)を含むものであった。カトリック教会との妥協——それはいくらかの観察者にとっては最難事であるとみられていたであろうところのもの——は現実には全ての中の最も容易なものであった。あからさまに社会主義者達が感じていたのは、このことがこの時代の死活的争点の一つであったということではなく、更に戦慄すべき組織(a formidable organization)であるとその時みられていた——ヒットラーはそれをそのようにみてはいなかったのだが——ところのものより発する敵意の惹起よりも、満足した同盟関係(a contented ally)をもって平和裡に協同していく方が遥かに良いということであった。帰するところ、君主によって課せられていた拘束の幾ばくかを政教的措置(concordat——教皇と政府の間の条約)によって取

り除くこと、それが賭けられていた全てであった。農業政策に関する妥協はずっと深刻なものであった。この国(アメリカ合衆国・・・編者)でもそうであるように、農業補助金(**agrarian subsidies**)と農業保護(**agrarian protection**)は「計画」(**planning**)と呼ばれることにより、更に美味(**palatable**)ならしめられていた。計画は、しかしながら、より高価なパンを目指しており、農村の利益と妥協することは避け得ない代償(**quid pro quo**)であるとみるような人々の全ての耳には心地良く響くものではなかったであろう。更に、ベルサイユでの諸制限の中で、軍隊は世界を元通りに保つため許された。しかし、この点における党の態度は、国民的立場からみて防衛的なものであったとする我々自身を納得させるが為には、我々はそれに替わるものが何であるかを思い浮かべる必要があるだけである。党の立場からみれば、これは国民党(**the Nationals**)との暴動に由来する今一つの妥協であった。

これらが、社会民主党が主導した(**sponsor**)様々な妥協の内の見事な諸例である、と私は信じる。もしそうだとすれば、次の3点は公平にみて明白である。第1、個々の政治的争点の是非につき、それらの妥協に帰せられるべき強力なケースがそこにあった。第2、それら諸妥協は民主主義的協力の精神の中で(**in a spirit of democratic cooperation**)入ってきたものであることは明白であり、しかもそれらは責任を取ることに冷静であり、自分達の力量に満足しており、当面の問題と究極の原則の間には長い道程があるという事実に思慮を以て当たっている、そのような人にとっては当然起こるようなものであってしかるべき問題解決の種類のものであった。第3、党勢の凋落をもたらすことになるような何事かを抱いているような妥協は——私の考え得る限り——なかった。尤もそうした妥協の政策が、党の下士官や兵達(**the rank and file**)の隠し持ってきたかも知れない革命的熱心さを、生き長らえさせることを保持させる方向に向けては殆ど何物をもなしていない、と強調するといったことを指導者が選んだりはない、ということがない限りではあるが。

一個の重要な点を除いた全ての点で顕著に安定している、とみられる情況が出現した。政府のそのシステムの政治的及び文化的成功の部分は、政府のエンジンに油をさすものであった公的支出(**public expenditure**)の大規模にして急速な増加のせいであった。更に言うなれば、この支出は——高度に成功裡にあった売上税(**a highly successful sales tax**)をその中に含むものではあったが——蓄積の源泉を干し上げるような諸方法によって、

ファイナンスされなければならなかった。外国資本の流入が続いている限りにおいて、全ては比較的順調に推移していた——もっとも予算編成の上と、それに通貨保持準備上においてさえもの諸困難が、流入の止まる一か年以上前から現れ始めてはいたが。流入が止まった時、かの良く知られている状態が発生し、それが人々を惹きつけていた指導者の地位を崩してしまったのである。

それでは我々は、前触れなしにそれ(ワイマールの政治構造)を襲ったかの破局(the catastrophe)に対し、どのように考慮すべきだろうか？ 官職から、更に様々な安全弁(entrenchments)からそれ(党)を駆逐してしまうような、更に多年に渡って構築されてきた(aere prennius)ものであり、また我々の時代の政治的パターンの中では殆ど揺らぎそうもない時期の一つ(one of the most unshakable date)であると誰によっても考えられてきたその組織構造そのものを滅失させるような、それほどの完膚なきまでの敗北に対しては？ 行政機関の多くが尚この党とカトリック党の同盟の奉仕において作動していた間、そして党が尚ゼネラルストライキを呼びかけることができる力量をもっていると感じさせる権利をもっていた間、その間に発生した敗北に対しては？ 更には、発足してから10か年足らずだというのに、指導者達の手中には忠誠を誓うものが1ダース以下でしかなかったということに対しては？・・・他の誰かが与えるのに適していると考えらるであろう回答がどんなものであれ、私は物事に誠実でありたいので、私は提供するべき適切な説明を何ももっていない、と敢えて言いたい。私が了解している説明は——それは私が知っている最良のものとして、他の観察者も了解している説明と正確に同じなのだが——そうならしめるのに都合良き諸環境説である。・・・ベルサイユ、失業、そうしたものはもとよりそうである。・・・丁度ムハメッドの成功はアラブ馬の高い資質なしにはあり得なかったと言うに同じく、類似のことはホーエンツォルレン王朝の下では決して起き得なかったと言うに同じく。・・・しかしこうなるのに都合の良い諸環境のどのような部分も基本的な説明とはなっていないのである。私が関与している限りでは、この説明は、帰するところ、一層の思考と観察を付け加えることによつてのみなされる。かの環境下での私の推論は次の如くである。社会民主党の政策が基本的に悪かった筈だとか、少なくとも執行において無能であるのははっきりしている(patently incompetent in execution)とか、といった結果に対して、かの破局の発生から引き出され得る結論などにはありはしないということにするのが、正に自然だということ。どんな政策や政治体制も、それがこの種

の激震に対する何の論証もないという故を以て、責められ得るものではない。カトリック中央党の挫折は尚更に衝撃的であり続けている。それにも拘わらず、同じことが彼等に適用されている。

3) 第Ⅱ次世界大戦と社会主義政党の将来

現在の大戦は、もとより、我々の問題についての社会的、政治的、経済的な諸与件(data)を変えるであろう。以前には可能でなかった多くの事柄が可能となるであろうし、他の多くの事柄が不可能となるであろう。本書の末尾の2～3頁が、簡潔にこの局面を取り扱うであろう。しかし、私には大戦の結果の如何とはかかわりなしに問題を見据えることが、政治的な思考の明確性の為にも、本質的なことだと思われる。そうでないと、その性質はそうあってしかるべきようには決して姿を現してはこないのである。

どのように今次の大戦が様々な社会主義者グループとその政党に影響するのだろうか、もとより、大戦の持続と結末に依存するであろう。しかしながら、いくつかの論点が注意するに値するようにみられる。

いくらかの小国、例えば、スウェーデンとかスイスとかがある。そこでは社会主義政党の地位は結局において影響されるところはないであろう。しかし大国における諸政党の中で、イギリス労働党ははっきりした展望をもつことが許され得る唯一の社会主義政党であろう。党员達は非常時の呼びかけに応じてチャーチル政府に結集した。しかし、もし前に行った分析が正しいとすれば、彼等はその時、官職と権力への——非常時とは関係なしの——道程を前進するところに十分なものがあつたのである。それ故に彼等は全く自然に——単独であるかまたは彼等が管理する連合で——再構成の仕事管理する位置に至ることになる。また戦時経済は彼等の直接の諸目的の幾ばくかを実現したことになる。相当程度において、彼等は既に得たものを保つだけのことでなければならぬであろう。その上、更なる前進がなされることは、そこには闘い取るべきものが資本家達に多くは残されていないという条件の下では、比較的容易だと期待されてよい。もとより党の精神がその過程において変化することはあろう。修辭(phraseology)におけると同様、活動においても、もっと過激になるか、または保守的となるか——あるいは多少なりナショナリストとなるか——諸環境に応じてそうなるであろう。原則と人事の連続性(Continuity of principle and personnel)はいずれのケースにも前提とされるであろう。このことは大戦がイギリスの勝利の下で問題とされるのであれば確として適用されるであろうが、そうでない場合でも推定され得る。

大戦がこの国(アメリカ合衆国)において現存する社会主義のグループを利するかどうかは定かではない。その下で能率的な社会主義政党が一大勢力となることが経験されよう、といった諸環境は實際上容易にイメージし得る——そうしたことは多分ありそうでないとさえも言えない——のである。そうしたことは他の社会主義労働党をつくろうとする一つの力強い動機となることもあろう、そしてそれと結合しようとする農業者—労働者グループ(**farmer-labor groups**)の結成に対しても。このケースだと、ある組織が大統領の座を制するのに十分な力をもつに至る事態も出現するかも知れない。細部に至ることと諸条件を吟味し尽くすことは読者に任せるとして、私は唯、次のことを述べるに止める。第1、この役割を果たすために資格をもつその唯一の社会主義者党がそれ自身かくも弱体である事実によって、この可能性たるや大いに弱められているということ。第2、そこには多くの他の諸可能性があるということ。次の点に依存するところが多大である。共産主義との競争がどのように形作られるだろうかということ、並びにこのことは帰するところロシアの地位が——同盟国の中でまた全世界一般の中で——大戦の終結時にどうなっているであろうかに依存することとなるであろうということ。その上、古い政党機構を用いた全くの新しい諸々の冒険(**ventures**)が他の一角から点火されることもあり得よう。これらの可能な諸ケースのいずれをも禁じると期待されることのできる原則も人物もないのである。

アングロ—アメリカ人の完全な勝利——いふなれば無条件降伏を強いる——を仮定すれば、勝利者達の、特にイギリスの政策は占領諸国にある古いタイプの民主主義的社会主義を利することは確実であろう。というのは、このタイプの政治構造のみが——一定の屈服の期間よりも長い間——非武装と勝利の賞金となるであろう様な世界の諸問題のアングロ—アメリカ人の管理(**the Anglo-American management of the world affairs**)を受け入れると期待され得るからである。しかし、そうした政府の設立は容易ではないであろうし、更にそうした諸政府に権力を維持させ続けることはもっとありそうでない。例えばフランスのケースでは社会主義者達と労働主義者達は、良きにつけ悪きにつけ、その国民的災禍との関わり合いがあった。ドイツでは、社会主義者達は——彼等の過失によるものではなかったとは言え——戦争の浮沈(**the vicissitudes of the war**)を分かち合うことができ得ない状態にあった。多くの亡命者達はアンチ・ヒットラーの態度をとっていたが、それがアンチ・ドイツの態度から区別されることは困難であった。戦勝国の恩恵は多義的な勧告(**equivocal**

recommendation)となるであろう。それ故に、古い諸政党の復活(renaissance)は不可能ではないとしても、そして多くの正常でない——しかも無意味な——諸徴候を示すのは避けがたい筈のこととさせるような短期的状況の下では、何が起きるかを予言することは不可能であるとしても、ヨーロッパ社会の仕組みが、熱狂的に支持されることはありそうにないであろう。

そして、とりわけ、ロシアが主要な勝利者となるようなことにもなれば、混沌(that chaos)はボルシェヴィズムと結合して確たるものとなるかも知れない。最初に被占領諸国で、次いでそれらの国々を超えて、ボルシェヴィズムは問題解決の機関としてである。このことは、以前に述べられてあるように、世界革命にはアメリカ人的共産主義の諸タイプのものに合理性があるということになる。

もし我々がロシア—アングロ—アメリカ同盟の成功が不完全なものであると想定するのならば、いくつかのヨーロッパ諸国ではファシズムの降誕以前に存在していた、そしてその他のヨーロッパ諸国では大戦の勃発以前に存在していた、そうした社会主義者に——そしてこのケースでは共産主義者のグループと党においてもまた——前述の行論の含蓄が一層の強度の激しさをもって適用されることはもとよりである。

どのような結果となるものであれ、大戦の結末とは全く関わりなく、また何等かの特定の社会主義者のグループの命運とは全く関わりなく、文明世界が——ファシストの諸国を含めて——社会主義に向かつての一個の長い大幅の足取りをとることは確かである。我々はこの方向での発展を加速させた1914—1918年の大戦とのバランスにおいて検討してきた。現大戦は遥かに高い程度においてそうなる結び付けられている。それは社会の枠組みを完全に変えるかも知れない。1914年と1939年にまたがる4半世紀は社会主義の未来に対し「事物と魂の成熟の設問」(the question of maturity of things and souls)を含んだ問題という点で無視され得ない時間帯である。その画期を通しての出来事と政策はこの成熟の過程に大きく貢献するものであった。経済活動の戦時の諸統制とそれらを作動させるために構築された官僚制機構は容易には——相対的に言うならば——1919年とそれ以降にそうであったように完全に溶け去ることはないであろう。

大きな範囲に渡ってこうした成熟のプロセスは疑いもなく定着したのであり、しかも全ての国々において様々な準備がそれらを他の用途——表面的には戦後の落ち込みを防止するとか、国際的な再建設の問題と取り組むとか、をなさんが為というが、実質的には完全な社会化のための諸機関を発展させんがために——設置するべく整えられつつあることを見て取るものである。再度、廃棄されることはありそうもない戦時課税はその他のことをなすため使われるであろう。正確には、1919年には不可能であったことが、平和が今一度回復した時に、それ自体を課すことはあり得よう。このことはもとより意図の問題ではない。その意図が何であれ——はっきり言えば、闘われてしかるべきこの種の明確な諸意図などはなく、状況の論理に従順に流されているだけのことであるとしても——結果は同じであろう。

私は世界革命の可能性のところまで降り立った。そして今やそれを無視しようとは欲しない。社会主義的秩序をもたらす劇的要素の乏しい方法が——しかしながら——一層に起こり易いとともに、長期的には一層に効果的である(ように)見受けられるのである。(that less spectacular method of bringing about a socialist order seemed however (to be) both more likely and, in the long run, more effective)。諸形態と諸章句は戦術的諸考慮に依存するものであろう。しかしながら、本質的にはそれはどんなケースにあっても社会主義であろう。しかし、そうであるのは我々の意味での社会主義だけである。とりわけ——ファシストであることを意図し、しかも目指すようなあらゆる人達には——それは民族主義者、軍国主義者、帝国主義者に転化することもあり得るのである。それはマルクスの念願に対する異様な回答となり得よう。しかし歴史は時として疑問の多いジョークに耽るものである。・・・全てのことが述べられ、そして特に保守主義者と過激派知識人について述べられた時、悔みを寄せ合う同じ不愉快な場所で身を寄せ合っている(side by side in the same uncomfortable spot exchanging condolences)彼等自身を見出すであろうことは、全く以て何の切り札でもないのである。

この章は1939年の秋よりも前に書かれた。大戦によるより大きな論点のいくらかは第IV部において触れられるであろう。ここに追加される必要のある全ては、含まれた基本的な問題は反転させられた諸々の出来事によって影響されはしないのだ、と言うことである。とりわけ、戦時政府の統制と計画は独特の(sui generis)現象であって、それ自身は手元にある主

題と関係しはしないのである。それにも拘わらず、今次の大戦は、そしてその下に行われる諸環境は、いくつかのやり方でその主題に負うのである。それは我々が、戦争と戦争に結び付けられた諸条件が数年かけて諸事態の正常な状態になる、という可能性を考慮の外においてすらそうである。——その可能性は、経済的にも社会学的にも全くありそうなものとして、永久戦争(permanent war)の可能性である。

戦時の統制は——もし全面的にしっかり確立されたならば、——取り止められることはどうあろうとありそうにない。部分的には、このことは課税負担の増大の帰結であるだろう。もし我々がなされると納得させられる次の想定を採るならば、即ち、戦争における税率は、1919年の税率は1914年のそれを上回るものであった、にみられるのと大約同じ比率で、戦前に課せられていた額を上回るものとなろう、という想定。というのはこのケースでは、私的産業の駆動力は決定的に消滅させられるであろうし、政府は資本主義経済の一重要セクターとしての役割に自ら責任を取らなければならないであろう。このことから離れても、政府はこの仕事に対し1918年にあったよりも遥かに良く装備されてであろうし、公衆も同様1918年にあったよりは状況を受け入れるのに格段に良く用意されているだろう。戦後の諸調整は以前とは異なった精神と雰囲気の下で行われるであろう。最後にこれに抵抗する諸力はこれまた切り下げられよう、その反面、社会的変化を成し遂げようとする諸力は——現代の戦争が社会の網の目に課す緊張により——大衆と知識人達の結果としての過激化をもたらし、このことがブルジョワジーの標識灯を消すということになるだろう。あらゆるこうした諸点の中に、十分な重要性と持久性をもった現代の戦争は、——その軍事的結末がどのようなものであろうと *) ——第Ⅱ部で略述した諸々の発展、それは20年代と30年代におけるヨーロッパの経験から実際に明らかなのだが、その展開のアクセルを踏む傾向にあるのである。しかしながら、正統派の社会主義者達、とりわけ開化された彼等が、事実上祝福されることになるだろう、とそれが導くのか導かないのか明瞭ではない。我々は納得されるものとしてのありそうなことだけに依拠する必要はないが、我々は既に経験から——正統的社会主義者達と正統的保守主義者達が、いつの日か、お互いに彼等の最も心に響く悔みの辞を開陳したいという感傷に耽り、更に彼等が相互に(そして彼等の自分のビジネスを)以前には理解していなかったという悔恨に耽るだろうと推理することで——見解への支持を望みうる。

＊) 軍事的結末がどうであろうとも、は過去には異なっていた。成功裡に戦勝を勝ち取った統治するグループはどんな時でも、政治力を掌握していた。読者は何故最早そうでないのかを求めるのに何の困難もないだろう。戦争のエンジンに密接に関わった非ブルジョワ系の諸グループ——彼等は戦争のエンジンであったか、少なくとも戦争の要員であり、管理者であった——は成功と失敗に同定され、公的心情もそれに従って作用を受けていた。今では、戦争は一方においては社会の全階層のもつ一個の事件であり、他方においては非人格的で機械的なものである。一個の政治家はそれでも尚、しばしの間、「戦争に勝った人物」として成功裡に姿をさらすことはあり得よう。しかし、どんな階級も、どんなグループも、成功から得た力の恒久的継承を——社会がブルジョワジーを本質的に思い浮かべる程に長くには——多く引き出すことはないのである。とりわけ産業は大衆のイマジネーションに点火する性質をもたないような、そうした貢献には信用を決して与えはしない。

(2) 第二次世界大戦中のアメリカからの展望雑録

摘要

巨大な潜在生産力を備えたアメリカの存在、言うなれば、「もし神が世界を破滅させようと欲するのならば、そのための方法はアメリカをして盲目ならしめることである」ということ。そしてアメリカのルーズベルト政府は、対内政策にあつてはニューディール政策をとり、対外政策にあつては倫理帝国主義をとった。ニューディールは自由な資本主義から拘束された資本主義への変換を意味し、倫理帝国主義は孤立主義から離れて世界大戦への積極的参加を意味した。・・・ニューディールは正にそうした基盤と闘いながら後退局面にあつた・・・ケインジアン理論・・・生産計画と完全雇用の社会学・・・OPA・・・そしてそうした諸要素が戦争経済の軍備拡大・・・官僚機構の闘志と統制のための行政的諸装置・・・改革対回復・・・しかし生産の社会化を期待するものではない。ドイツと日本の膨張に反対するルーズベルト・チャーチル同盟・・・更にその上に、そこにはロシアをめぐる紛糾がある。・・・アメリカ国民の80パーセントは戦争参加に反対であるが、それにも拘わらずあらゆる情報機関や新聞は心情的にいつて戦争参加賛成なのである。「我々は手を出さずにいることができる」(孤立主義)という表紙の下にあつて内実は戦争参加賛成なのである。あらゆる方策が潜在生産力を戦争向けに動員させるために整えられた。その上で日本を大戦の一角へと追い詰め、第二次世界大戦に参入することになる。・・・人材の輸入において多数の知識人が流入し、その中には政治的工作員(political maneuvering staff)が含まれていた。・・・コミュニスト、エンパイア・ロシアのサーバント・・・ファシズムの抑圧からの解放、しかしそうした解放は半分の仕事しかない。・・・その他 (編者)

第Ⅱ次世界大戦中のアメリカからの展望雑録

1 世界と合衆国における眼前の状況・・・もし神々がこれを破滅させようとするならば、これを盲目ならしめることである。・・・トラブルはある、政策がない。・・・ケインズを見よ・・・反対のことを達成しようとしているアメリカについて・・・ロシアの奉仕者・・・全く予期せぬ事情、規律を確保するためには、そして標準的階層を確実にするためには・・・実質的勝利者 クレマンソー・・・ケインズのエッセイ 40頁、平和について 42頁・・・

2 ケインズが述べたところと同じ状況が再び、アメリカはあらゆるカードを持っていて、しかもゲームが出来ない。・・・我々はこの大戦を失った。・・・

3 ニューディールは後退の中で正にそうした基盤と闘っている。・・・幅広く後退することは全く必要でなく、そして賢明だったか・・・その諸機関はまさしく攻撃に待機しているだけのことであり、その上、仕組みに対する理解を欠いている。・・・経済学者は合言葉をもっているが前からよりも多くのものがあることを理解しない。・・・

4 ファシストの組織構造は社会主義のための多くの事柄をより容易ならしめた。・・・しかし、そこから賛成または反対のどんな根拠をも引き出すべきではない。

5 チェスター バーナード・・・委員会を訪問—コール計画・・・ファシズムだけが救うことができる・・・ヒットラーの死亡記事・・・信じら

れない教化・・・金曜日の会合・・・そして今や紛争が来る一だが社会主義でも大衆の利益でもない。・・・「希望」による陳述、その一方で他の者は変節の諸形態を研究し策動している。・・・態度は極めて奇妙なものである。・・・情報を顔に出させる、そして、からかい気味に告げる、彼は本当はボルシェヴィキではありません、と。・・・脅しのあつてはならない態度、益々以て信ずべきものが少なくなる。・・・

6 眼を閉ざす。・・・逃避主義、交信を排除している(to exclude correspondence)限りで。・・・私はどんな時でも自分の価値観は留保しているのだが、良いか悪いかは問題ではない。・・・絶え間なき必要に向けての日本―ドイツの膨張があるのでは。・・・我々が付記するところよりもさらに重要・・・ビジネス毎に細分化されたかのニューディールの方向には未来がない、しかも一歩一歩悪くなっている。・・・苦悩するプログラムを好む。・・・脅威は、全くのところ軍事的なものでなくして地下潜行している。・・・この不条理な反トラスト法！しかり、ゴスプランでありさえする？・・・

7 重要なこと、CIO(アメリカ産業別労働組合機構)や日雇労働者共産党が「ある」だけなのか、またはそのために宣伝をなしているのか、の別は問題ではないということ。・・・重要なのは彼等がスターリンの仕事を成しているのか、あるいはスターリンのために仕事をさせられていることに、なお耐えているのかである。

8 もっとも物静かな老いた人達は反大企業である。戦争遂行の評価・・・新しい温和なボルシェヴィキ化・・・誰もがそれを逆行させないであろう。・・・「特権のない」(underprivileged)しかも「財産のない」(disinherited)人達の一様な窮迫がある。・・・

トラブルはロシア、ロシアということである。・・・法王、唯一の真面目な権力・・・「新しい帝国のツアー」、あたかも一部局が機械の中の一部

であるように決定する。・・・、労働者一般(Arbeiter überhaupt)はその機構の中で「決定する」(entscheiden)には至らない。・・・いずれにせよ、独占、貯蓄、投資が自己決定されていく、というケースではない。・・・

9 そして完全雇用の社会学・・・資本主義的な社会機能は買い手市場だという点にある。・・・生産計画の社会学(イギリスにおいて早々と熱心であっただけ)・・・痴者の世界のための計画・・・

そうした改革は再度復活する。・・・これではない、これだけなのである、何が社会主義者を変えたのか、変換と再構築は一つの課題なのではなく、社会主義に対するそれぞれである。・・・

アメリカにおける経済機構の信じがたい力・・・他の労働者に反対するストライキの存在、そして労働紛争はギルド社会主義におけるものとは全く他のものであるということ。

連邦価格統制機構・・・実質的な論議を求めることはできないであろう、あるいは国家は正確には、ただし、はたりの抵抗がトリックを行使するだけのこと、であろう。

教化(Christianisierung)といったことが我々に何等かの意味をもつとするならば、我々は戦時において、すでにあるべきであった。一個の機構乃至はメカニズムがいつも十分に重なり合って進行する、ということは無意味である。理想的な資本主義は破綻する時には存在していない。・・・

10 我々は彼の諸価値の中に囲い込まれている、しかも、これらの諸価値たるや世界である。・・・[編者注：彼とはルーズベルトのこと] 彼の宗教とかたくなさと義務についての理念・・・そこに彼は自分の足を下ろしている。・・・人間の輸入の中には、多くの爆発的材料がある。・・・賃金における失われたもの・・・

最大の不信を伴った最少の能率・・・不確実、如何にして何等かのより

多くのものが確実に獲得されるのであろうか(政治的にまたは事業的に)・・・

アメリカは外に留まっていなければならない。・・・戦争の外側に、なおもそれ以上に平和の外側にいる。・・・

1 1 比肩して語る事ができるような唯一人の権力・・・[編者注：唯一人の権力とはスターリンの権力のこと？]

1) ルーズベルト—チャーチル政策の完全な失敗——誰がこのことを認める余裕をもつことができるのか？ しかも、それは半分の仕事でしかないのである。・・・

2) 燃えに燃えた喧伝は充分である、そして生活の正常な状態に戻ろうとしている。・・・

2)a 全面的にそれが可能であるか・・・

3) サディズムと自動的な拡大疾走・・・

逃避主義・・・その時持っている結論を説きつけることで物事を処理しようとする習性・・・非現実的なアメリカの政治・・・我々は単純にそうであると言ひ、我々は何事かを成したと考える。・・・そのように、我々は希望に逆らって希望するものを求めることをしたくないので、私は問題を位置づけ、その上で私がそれを取り上げる場合、何故に問題になるかを明らかにするものである。・・・

そのかたわらで我々は、自分達自身を防衛できないような人々の手で、さらに一層の諸権力を固定しつつあるさなかにある一方で、集中収容所において鎖につながれているのだろうか。・・・カーン(汗)の選出・・・24年におけるイギリスにおいてさえ、今や永遠ではない。・・・共産主義者は希望と保護を持つ、とりわけ合衆国からの独立に望みを託している。・・・その他に法外な論理の中にあるかたわらで、我々は——できる限り、しかも敏速に——自己修正をなし、譲歩をなし、反省をなす。・・・官僚至上主義と輝かしい業績についての経済的補足・・・益々重要となる診断・・・

1 2 硬直性—短期—投資・・・属性は与えられており、しかも変わらない・・・不断に新しくつくられる——だが、なお硬直的に置かれている。・・・

婦人有権者に対する教説(物語詩)・・・大企業の専制、古い章句のはりつけ、すでにその内容は失われているのだが。・・・重要、本来どのようなすべてが達成されるのか、そして行政の無能があるだけだ、ということ。・・・街頭には子供達の上に輝いているものが示しているもの——揺りかごから墓場までの保全(konservativ)がそれである。・・・その上にさらに自由についての白痴的言動・・・

1 7 8 9 年！・・・8 9 年に何が発生するべきだったのか。・・・そしてロシア・・・資本主義とキャパシティの留保・・・有機体的秩序・・・敗北主義・・・明らかなことを秩序だてなすこと、そうであれば、さらにそれ以上のものはないだろう。・・・一つの政策がなされうるとして、アメリカは何をなすべきか。・・・

1 3 平等性の問題さえも(失業)・・・実処的問題の社会学・・・経済学よりも興味がある・・・失業——諸サービスにシフト・・・失業救済、保険によって確実に、そして労働問題から飛び離れる。・・・動機の問題——実際に長期的には、そして教育もまた・・・資本主義は不平等を制限しはしない。あるいはラーナーは正しかったのか？ 何故に彼はそれに立脚したのか——だが、そうは言っても、何物をも取り出していない。・・・労働不安・・・ベバリッジの保障・・・

1 4 合衆国は社会主義を秤量皿ではかっている。・・・閣議における政治家・・・取引としての反トラスト行動は理解を超えるものである。・・・技術的失業と短期的な査定・・・政府事務局の失業・・・雇用と産出は区別されるべきである。・・・実質的危険・・・粗野で温かみのない諸施策・・・資本と反インフレーション施策・・・

経済学で我々は実際に観察された行動を処理しようと試みる、政策では夢を処理しようと試みる。・・・料理の盛り付けとバターは容易に上方変

換させられる(税特権により)。

15 トラストは生き残れるか?・・・官僚制度の闘志 — 統制のための行政的装置・・・この目標に達することを防ぎうるものは政治と官僚制以外には何もない。・・・改革対回復というのが全くぴったりである、完全にそうであり、完全に融合している。・・・生産の社会化が期待されるものは何もない、ということに行論は言及を避ける。・・・発展が考察の中へ入ってくるところでは話は全く別のものである。・・・連邦価格統制機構(OPA)がよりよい例である・・・二つの問題も・・・もともと二つの問題・・・それは影響を悪くする・・・本来的に二つの問題がある・・・純粋に経済的な問題と実務上の問題・・・「抑制」・・・降伏を強いる、官僚制的な決定に従うように。・・・鋭さ、どのようにして達成するチャンスがあるのか?・・・

16 もし・・・であったならば、官僚制、労働、ニューディールは勝ち抜いていた。・・・
a)賃金支払いと b)投資を凍結することによって資本主義の降伏(surrender)があったとしたら・・・

17 価格メカニズムの指導を拒絶するような社会は、私経済的に存在することを等しく止める。・・・思いどおりにより多くを購入し販売することができない場合には、資本主義は死につつあるのではない、死んでいるのである。・・・

18 かくして、何事になされうるのであろうか?・・・それはよいとして、何故に撃つことを止めるのか・・・パッションが爆発するや、独裁者にはできるが、民主主義的経世家にはできない、ということ。・・・手に負えない破壊・・・私が追加しようという欲望を持つ、または持たないか、

ではない。持つことはあるだろう、しかしイギリスには何物かがある。・・・だがイギリス、そこではロシア的視角への配慮(Rücksicht auf Russian angle)を欠いていることは確かである。・・・チンギスカーンは、[編者注：ここのチンギスカーンはスターリンではないかと思われる。] だが救済だけを・・・共通の善(common good)を生み出そうとする行論は結局においてさほど納得させるものではない。・・・小さなシフト・・・

19 「社会主義者」との本物の紛争(very struggle with “Sozialist”)・・・ロシアはここで社会主義を生み出すことができる。・・・戦うことなく日本を得ること、このように非常に多くのチャンスが——満州国に劣らない——こうしたものとしてある。

20 この他に、統治政党(the reigning party)にとっては非常に困難——不可能ではないとしても困難——がある。それは最大化政策(maximal policy)、例えば軍事的にみてそうすることは客観的に非常に容易にできる、しかし、それは政治的に責任をとることの次に位するものである。・・・満州・・・過激派は民主主義ではありえない。

21 日本、領土の替わりに賠償を・・・生来のものと鈍感さ・・・そして人種的な恐ろしさ・・・公言せられた諸目的との対照がもっとも驚くべき事柄である。・・・章句のみが保持されている。・・・そしてロシアが勝つか勝たないかは同じことである。・・・つきつめれば彼は死ぬだろうということ以上のものではない。・・・物事のあらゆる状態は過ぎ行くものである。・・・(彼・・・日本である？・・・編者)

22 付IV

・・・保証付の情報(information)が、なお真正の意志(genuine will)を満たすものであったとしても(さもなければ、せいぜいのところ極めて長期

的に起こりうるものであるのだが)、合衆国の現状は、すなわち、双方に対する事例となりうるものである。・・・めったに起こるものではない。・・・確かにそれは一個の研究をなさしめうるに足る。・・・(そう、統計といったものを伴った経験である。)

a) 仮にその人物が、[編者注：その人物はルーズベルトであろう] 高度に開明的であったとしても、彼がいま日々に(currently)果たし得ている仕事よりも十分に多くの自らの仕事を成し得ている人物はいない。東アジア問題とその社会的、並びに経済的な意味について一つの構図がある。一情報そのものがそれを準科学的事実認識として描き出している諸機関(agencies)によってねつ造された(falsifiziert selbst)ものである。注目すべき結合があり、それがその国を日本との関係で困難においやっている、(東方諸国の労働者の利益、その上に基礎をおいてはいるが、それとは独自につくられた反日的な態度)。 [編者注：注目すべき結合とは、その国とは、?]

b) 80パーセントが戦争に反対である、それにもかかわらず、あらゆる情報と新聞は組織的に戦争賛成なのである。「我々は立留まることができる」という標語は、立留まる(孤立主義がとられる)ための諸手段を見出そうとしているふりをしていながら(pretending)、表紙の下では戦争賛成なのである。・・・一般的意志・・・どのようなものであれ、ある他の問題(「防衛」として多分に一体化されている。・・・このようにして人々はこの国——自分たちと世界のために支持を与えているのであるが——の無比の地置(die einzigartige Sit.)を確実に可能とし、しかもものぞむこととなる。・・・さらにその下で戦争を準備せんがための全てのことと、戦争が企図されていないとすれば全く意味をもたないような経済的動員と諸施策、が生起しているのである((?)の経営)。

アメリカは自分の市場を掘り崩すために最善を尽くしつつある。・・・敵国の中にある対外政策の部局(Board über for. policy in foe Lands)・・・ [編者注：敵国のなかにある、とはアメリカの中にあるソ連の局か、日本の中にあるソ連の局か?] 決定的となったことは確実である、これについては1920年の大勝利(landslide)と鋭角的連盟離脱(scharfes Abwenden von league)をみよ！ 但し後になって始めて災禍は起こった。・・・本質をねじ曲げたものであるアンケート、NIR局・・・このコミュニケーション・・・

2 3 興味あること・・・合衆国における、ここそこの計画策定機関・・・ソ連邦におけるものと全く似ていること・・・それにこれらの設問表・・・

2 4 労働問題についての逃避主義・・・これらが損失であったが如く、諸要求が満たされることができ、ということ・・・労働層の独裁・・・悪い・・・組合連合はそのように悪くなりうる・・・ギルド社会主義は可能・・・消費と民主主義的スローガン・・・婦人有権者連盟のレベルでは意味のないサボタージュと機構の破壊があり、諸国際連合体(internationale Kartelle)はその諸機関が機械のように活動を拡げており、創造的理念なしに(ohne creative idea)意味のない歩みを拡げている。実処的労働問題、そこではその偏狭さが省みようとはなされないということ・・・労働分配分の最大化は他の経済学である。だが経済部門においては巨大な成果がある、それは非常に多くのことを可能とさせるものである・・・労働組合との交渉がなされなければならない場合、實際上、闘いは負けているのである・・・実処的問題だから異論をつくらない・・・

ロシア問題についての逃避主義・・・そして同じくロシア人とも！・・・教授、彼は自分の野心を遊びごと風に満たしている(ケインズ)・・・共産主義者達は紛争を検討し、それに合理的な準備を整える・・・他の者達は放牧されている牛の畜群のようなものである。そして社会的利潤の放棄が指示される・・・あらゆるルールが拒否されるのならば、かの良き軍備はチンギスカーンよりもずっと悪い・・・軍備競争・・・悪しき論理における・・・信用破壊・・・獄中での自由・・・社会は相互に分裂する、労働組合・・・彼等は何のために闘っているのか・・・自由世界とその成功のためだけではない——そうならば現実に不承認ではなくして小さな腐敗がある。

特権をもたない人々・・・硫酸(H₂SO₄)・・・そして私に出来ることは発生してくるものを告げるのみである。

25 あらゆる安全と希望の標準が1950年に可能となる筈だったというのは悲しむべきことである——過激派や労働官僚達なしに。・・・産業の戦時における成功は際立ったものではない。・・・より少ない危険でより少ない収益、そしてまた、低位利用(unterutiliz.)。・・・

26 資本主義・・・完全雇用(full empl.)・・・それが機能するのは売り手市場にある(in buyer's market)場合においてのみである。・・・戦後問題にはない。

27 資本主義

合衆国における移行の相対的優しさ(the relative gentleness of transition)——非能率であることは明らかである。・・・長々と時間をかけてなされる育成によって(durch langsam Erziehung)、変えられた環境によって(durch changed environment)、さらには部分的には合意によることによって(durch consent)。・・・このことを見極めて、そして行動することの重要性、疑いのないことは行動することだけが基礎条件の実現だということである。・・・口笛を吹いているジャックのにせの勇氣(supurious courage)。・・・敗北主義についての敗北主義者の言説、逃避主義についての逃避主義者の言説。・・・その前に、ある資本主義世界の中にある、ある社会主義的社会の問題、ある社会主義社会の中にある、ある資本主義社会の問題。・・・ファシズム・・・インフレーションについて、好ましい価格といったことの議論・・・インフレーションに対する対抗手段は、そのトリックを洗いたてることにあるのではなくして、巨大独占企業のもつ装置の生産力の中にある最大化装置にある。

(3) 大戦直後の世界情勢と社会主義諸政党進出の様々な様相

摘要

問題は今次の世界大戦を通して、影響を受けた正統的社会主義の位置と展望である。未成熟であった可能性を成熟した可能性に変える、民主主義的社会主義にとって好都合な政治的情勢を提供する。だがそうした前進はロシア共産党との紛糾によって歪められたものとなる。諸々の抑圧からの解放という半分の仕事が残されたままである。ロシアはサイドイシューではなくして他の全てを覆い隠すほどの問題である。スターリンは彼の同盟者達を凌ぐ勝利者となり、彼の同盟者達が与えて相当と考えたものを受理して満足するにはあまりにも強いポジションを得た。スターリンのロシアは如何なる者にも卓越したものとなり、ヒットラーが嘗て成したよりも更に多くの諸外国を征服した。そうした共産主義衛星諸国は隔離され、ロシアにとって有利な恣意的な価格体系を通して搾取された。アメリカが対等の立場でスターリンと話し得る唯一の勢力であるが、アメリカの守備隊に守られる外側のレンジではスターリンに対抗する勢力は何もなかった。アングロ・アメリカンの世界とロシア共産圏世界の間に中間的諸国、例えばフランスでは、一個の中心的問題が、ヨーロッパ社会主義のデカダンスとでも呼ばれるべくあった。次の如く・・・資本主義の民主主義的諸相は既に去っている、民主主義的ブルジョワジーは死んでいる、一つの時代の倒壊下での疲れ果てた予後・・・民主主義の勝利、一体何のジョークだ、水先案内人は船を捨てた、産業のシェフと多種多様な社会主義者達が人民戦線の同じボートの中で一緒にいる、そして非採算的な諸産業の国有化を求めている。・・・それにも拘わらず、ロシアにより監視されている共産党を除いた社会主義政党はリフォーマリストであり、プロレタリア独裁制を拒否し、パイオニア的執行部の必要性が強調された。・・・そしてその経済はアメリカの信用供与と援助に依存している。・・・暗さ、混乱、空しさ、陰しさ・・・その他 (編者)

大戦直後の世界情勢と社会主義諸政党進出の様々な様相

1 本章の行論は二つの設問に向けられており、そしてその他の何物にも向けようとするものではない。即ち、先行の諸章において述べられてきたこと以上に、我々の時代の社会的パターンに大戦の及ぼした諸影響につき、現時点で告げられることができるのは何であるか？、ということ。この大戦が正統派社会主義(orthodox socialism)の地位と展望に如何様に影響したか？、ということ。この2点を超えては、複雑した戦後の諸問題への精査をなそうとするどんな試みもあり得ない・・・(他に書き込み多数あるも解読できず・・・編者)

2 マルクス・・・紛争がある・・・マルクスにせよ、「諸理念」(“ideas”)にせよ、それよりももっと深い利害関係(Interesse)についての理論・・・しかし、それら全ては可能性が未成熟であることと関連している。可能性が成熟に転じる好期である。ロシアは脇道にある争点ではなくして、他の一切の諸争点の影を薄めさせるほどの現代社会の問題なのである。・・・全てが単に共産主義の問題であるというのではなく、ロシア共産主義者の問題だということを想定している必要があるべきである。・・・歴史哲学・・・即ち、闘っている諸々の体制(組織)なのでなくして、人々及び国民とか諸種族と呼ばれている諸グループの中にこれらの人々はある、ということである。・・・

半分の仕事(half work)——何事もなされていない。・・・反対者、譲歩によって圧政と闘おうとしている。・・・彼の戦術的位置(his tactical situation)の中に引き継がれている。・・・

社会主義は諸々のグループを組織するのにベターである、そしてそれ故に重要である、他のやり方ではこうはいかない。・・・

ロシアが国際社会主義者の集団と無関係であるとせよ、そして我々が我々の社会主義を——我々がそれを望み、またそれにも拘わらず、アンチロシアであることを望んだならばの場合に——もつことができるのでは。・・・示威(demonstration)の試みはショウ(show)である。・・・

それぞれの階梯(step)において、譲歩をなさなければならなかった禁猟監視人がいた。・・・如何に平和を動かすかを説明することが容易であるこ

とか・・・決して理解しようとはしないこれらの人々が、如何に快く、殆ど楽しんでのことか。

3 実処的問題ではない(nicht positive Problem)・・・

戦争の社会学(sociology of war)ではなくして、あるものは唯、a) どのように戦争が良き政治構造を提供するか、b) 正統的社会主義の行路を提供するか、である・・・

戦時課税・・・大いに人頭税(poll tax)が・・・証するものは何もないが、戦時課税が軍役にある者以外の全ての市民に課せられていることは証明される。・・・労働者達は1800ドル所得の層に入った。そして間接税は300(ドル?)を超える。300:18=16.6・・・

一個の単純な問題であるべきだ。・・・だが明白な諸事実・・・驚くべき現象・・・物事を、それを示そうと欲するままにもっていく。・・・我々のところでは相続税(inheritance)が廃止された。・・・生活の憐れむべき水準(pitiful standard of life)・・・

反対の陣営では、・・・世界に対する隔離(Abschluss gegen Welt)・・・連合の諸機関を再結合する。・・・恣意的な価格の取り繕い。・・・ポテムキンの村(Potemkin's village)・・・正直がなく、失策がなく、しかも全てが天使でない。・・・「全てが正当化される、即ち過渡期だから」、という行論をもってする「除外」・・・

真面目に！・・・理想的なストライキなどはない・・・

経済的な困難もまた、動くことの無能力と規律の欠如にある。・・・

戦争は——そしてこれは戦争であって、平和ではない——最早、大きなニュースではない。連邦物価統制局(OPA)は・・・しかし私は章(chapter)——あるいは帰結について、それにその他に、本書における敗北主義についても、いくらかのことを述べておきたい。・・・序文で・・・

我々は真に驚嘆すべき光景を見ている。戦争——その中で我々は一人の独裁者を位置につけた——の後、自由と安全を求めて泣いている。しかもそれは、もとよりボルシェヴィストではない人々の党派と党派の行為によってである。・・・

我々は今、半分の仕事(half work)をなしてはいないのだ、ということを感じるべきである。付して我々はロシア人を解放しなければならない。戦争の動機として公言せられたあらゆる諸原則が無慈悲に無視されていく中で、苦痛を和らげるどころか、彼等の信頼を裏切り、しかもいくつかの

小国を見捨てた。・・・自由を窒息させ、征服を承認する、スペインやシナをいじめる。・・・

ヒューマニティと悪しき取扱いに対する反対(contrariness to ill treat)・・・安全、大英帝国、法——決して多くはない。・・・ヒューマニティ、小国、だがユダヤは・・・異教徒で、そして不安で、しかも弱いというだけで、鋭い「蔑みの言葉」(“epithets”)を受けている。

4 委員会と講演会で仕事をする事・・・非情の論理に逆らって、政策に向かっては合理的に、更に不可能であることも。・・・専ら非情の論理に逆らっていじくり廻されたものの中にある民主主義的政策の所産(outcome)・・・満足と一つの発見・・・敗北主義と逃避主義——宥和(appeasement)・・・

私は本書を序文にあるが如きものとしている。・・・本書は政治的な書物ではないし、そういう意図ももっていない。・・・私の意図は、マルクス主義者の言い分が、私が検討してきたように、私自身または他の人々にとって愉快な事であろうとなかろうと、部分的には正しいということの検証(proof)なのである。・・・恐らくは私を信用してくれている読者もあろう、私はそれを望んでいる。・・・儚い(無益)なことなのだろうか？・・・充分である、それを知っておれば・・・

敗北主義？ 最後の章で今の時代の逃避主義者の態度を扱う。・・・もし爆弾が落ちてきたら、私はそうするだろう。・・・見出された者を助ける・・・そしてそれは新しい章に対しても適用する。・・・

フランス、ポーランド、フィンランド、そして、しかしながら・・・移行(Übergang)、それは尚も一層に困難であろう、疲労(Müdigkeit)と強いられた逃避主義(escapism enforced)の故に。・・・我々は彼等に対して責任をもつし、責任がある。・・・半分の仕事をなしただけのことである。・・・(?)・・・

過失は、無知であることではない。・・・我々は真直ぐに爆弾の方向に向かって舵を切っている、丁度、戦争に向かって舵を切っているかのよう。・・・常套句(truism)・・・更に先送りをする・・・「体面的」防衛(“honor” defense)・・・もし我々が一足飛びに反対して飛び歩いていったならば、何故に我々は婦人や子供達の1000人の内、何百人を殺していたというのか。・・・

ロシアは民主主義的となるであろうか？ ドイツのように！・・・我々は自由を望んでいる、そこで何を我々はなすというのか？・・・何故我々はポーランドが自由だというのか？・・・殆どの場合、なるようになさせるという解決法(letting things work out)である。・・・我々は唯それだけの——裸の——人間なのであり、内実のある民主主義の中でのみ成功を得るのだ、と——それでは何故、そしてその場合、我々はこのことを輸出ビジネスの前に置くのであるか、ということ。・・・宥和(appeasement)・・・逃避主義、及びきっちりと規定された戦闘配置(battle array)、そして自ずと告げられる。・・・姿を見せない首領と良心の咎めに打ちひしがれている巨人を伴って・・・二次の爆弾についての軽薄な語り(facile talk)・・・その上にビジネスマンの顔を置くということ。

5 一個の中心的な問題がある。これに向き合っていないような問題は役に立たない——明らかにカトリック教会もまた。・・・

ヨーロッパの退廃(Décad dé l'Europe)・・・他の事柄についてのカムフラージュであるか、さもなければ無意味であるか、ともいうべきものの組み合わせ。・・・現実には一層に困難な状態におかれた社会主義的社会党員達がいる——彼等は教育(Erziehung)、人間的価値(menschlichen Wert)、国有化(nationalization)を望んでいる。・・・ソヴィエト帝国主義を語るころでは(on a parle de Impérialisme Soviétique)、しかし、動機が搾取であるとか諸市場の制圧ではなくして、戦略上の言及や諸原料の確保であるとして。更に、恐慌の中にあっても衝突することなしに、それほど見事なものであるとして。・・・そしてイギリスの労働党(主義)は——支持であり、更にもっと早くからの最先端性(frühere frontiers)を保持さえしている、しかもアメリカと調和している。そして似たような保守党型の対外政策を採っている。インドシナの支配とポーランド及びチェコでの国有化に対する抗議。・・・更にそこには一層信じやすくなることと、一層盲目的になること(aux plus credules et aux plus aveugles)が考えられるべくあるのである。・・・おびただしいロシアの視察・・・隠れ資本家であるにも拘わらず！(trotz emservelissement capitalists!)、合衆国とロシア国の間の相克の中にあって党派を手に入れる(prendre parti in conflict zwischen U.S. und Russland)、そしてそれ故に単一の労働者党となっているのであり、そして自陣の中にロシアの如きものがあるという理由こそが問題なのである。・・・共産主義者達に対しては、ロシアは取り囲んで

いる監視人(épierist)なのである。・・・上の階に位す革命(revolution par en haut)(上流階級による革命)・・・

このようにして、直ちに、我々がここで聞くことは儂い無益なことだ、ということになる。更にアメリカのブルジョワジーは満足を求めて騒ぎ立てる。・・・合衆国では、野心的なブルジョワジー民主主義がアメリカの資本供与と援助物資によって生き残っている、という理念があり、そしていつも労働者層が打算を交錯させている(eben die Arbeiterschaft die Rechnung durchkreuzt)。・・・ヨーロッパの革命は再度一個の可能性となる。そしてアメリカのプロレタリアートの手中の諸領域が壮大な征服に向けられる(pour la grande conquite)。・・・「資本主義に対しては」一つの本質的である経済部門が抜き取られる。・・・かくして、はかり知れない反作用がアメリカとアジアにもたらされる。・・・

6 S. マリーネット、国際関係雑誌、1946、1月・2月号、「押し付けられた社会—民主主義」(Social—Démocratie dans l'imposer)・・・民主主義の勝利——一体何のジョークだ?(Was it a joke?)

暗さ、混乱、空しさ、陰しさ・・・そしてアメリカにおいてもまた、勝利についての一体化された結末を欠いている。・・・イギリスにおける労働党の勝利・・・

政治家達と煽動家達がそうしたことを知らないであろう牡牛のように振る舞っている(les politicians und agitants et tout est un jeu de Stier, der von ihnen nichts wissen will.)。古いシステムが遺骸から復活することは決してない(Das alte System ne renaîtra pas des cendres.)。・・・むしろ小さな革命的諸グループの内においてのみ、それは多い——だがいつまでもという訳ではない。・・・更にそれは何等かのある革命的熱意で以て事をなそうとする何者をももっていない。そうするには古い舞台は何の関心をももたれない、ということが明らかにされている。・・・

レオン・ブルーム(Blum)、疲れ果てた回復期(予後)、水先案内人が船を捨てた(Pilot a quitter le bord.)・・・一つの時代が崩壊(Un monde écroulé.)——あるいは、それはずっと以前から認められていた。・・・没落・・・残っているものは?。・・・資本主義の民主主義的局面は過去のものである。・・・民主主義的ブルジョワジーは死んでいる——合衆国ではそれは失政(misgovernment)を意味する。・・・他のものがある。ブルームの言う、人民の、しかもエネルギーに満ちた民主主義(démocratie populaire

und energique)、人間性の体系に属する・・・産業の管理者と基本的には社会主義者である者が、同じボートに乗っている、即ち、ブルジョワ的民主主義の首尾一貫した延長がある(Der Chef d'industrie und Sozialisten im grunde in same boat : prolongment logique der bürgerlichen Demokratie.)。・・・しかしブルームは、古い形態は過去のものになったと理解しているのでは？ それにも拘わらず、そこここでパイオニア的執行部(pioneer executif)の必要性を強調している。・・・ブルジョワジーは拍手する、そして小ブルジョワジーによるだけのものではない。・・・ドゴールの弁明(de Gaullistes Apologie)もまた。・・・

現下の論点となり得る諸々の事柄、即ち、文化、計画経済(Dirigismus)、アメリカ型の金融、自由(自由なる企業人達(die freie entrepreneurs))、大規模協同企業(Korporationismus der Groszen)——不採算企業の国有化に伴う。・・・

今や本書は、・・・如何に驚くべきことであるか——これがその外国におけるその評判なのである、そして利潤を約束してくれる唯一のものである。・・・長所(Vorteil)、利益、危険、ヒューマニティを導いていること、しかしながら残忍さに対する痛恨の仕事(remorse work)、我々は聞きたくない。・・・

合衆国においては、知識人達はどのようなのであるか、彼等は沈黙してはいないのである。・・・そしてロシア、だが如何に広範に反転した様相があることであるか。労働指導者達は、しかし、みじめな状態にある。もしその長達(major)が問われるならば、依然としてツァーリストであるだろう。・・・スウェーデン、オランダ——政策、民主主義、政治に対してみるべき仕事をなしつつある社会の驚くべき実行力。・・・

最初のプロパガンダは説得するのに、狼だ、狼だ、とあまりにもしばしば叫んだ。・・・理論家はプロパガンディストで、過激であり、社会主義者である。・・・ポール・レイノード(Paul Reynaud)・・・日本における文化と諸価値をさえも破壊することを欲している。

7 かくして、中道(Mittelwege)、融和(Lösungen)、妥協(Kompromisse)といったものは、この情景(Terrain)の上に留められる。各共産党自身がそれをなし、輸入削減に対する CGT(労働総同盟)の戦は、その場合、賃金についての階級闘争となる。1945年12月2日の法律、国有化について

(Über nationalization)、(多数のありうべき回答の中の一つであったとしても、銀行危機(crise Banquier)への回答としてだけのものであった)。・・・但し全てはブルジョワジーの小会派による第Ⅲ共和制への願望を込めた資本主義的言い回しで制定されている。それ以上に多くの人々が共和国の廃止反対を望んでいる(尤も、それは尚そうになっていない)。ブルームの立場は左翼の改良主義者である(réformiste de leile gauch)に過ぎない(レーニン!)・・・更に彼の喜びはそうした廃止反対についての戦線の統一の中に示されている。しかし共産主義者達も尚又それを行う——ただ実際のところプロレタリアートの独裁としてはなされはしない、ということ。・・・

社会主義者達はボルシェヴィクの条項を聞いている。共産主義者間の対立はあっても、戦術と自由とロシアについてだけのものである。ロシアと革命的な性格についての影響の下で、一個の勝ち抜き戦がおかれているのでは?・・・チトーは社会化をなした!、非民主主義もなければ赤軍の力もなしに!(ohne indemocratee und russische armée!)。・・・連携経由での革命は善か?・・・全ての事柄はロシア的視角に反転する。・・・全ての共産主義者の勝ち抜き戦の戦術の変化と反復されている宣言文の変化はロシアにおかれる忠誠によって解明される。・・・それに合衆国との関係が。・・・そして、それこそが革命に向かったの誠実性の旗印なのである(das ist marque de leur fidélité a la Revolution.)。・・・社会主義者達は言う、美しき革命(schöne Revolution)、資本主義アメリカと社会主義ロシアの間の対立。とは言え、一方か、または他方の完全勝利のみがその結着(das Ende)である、ということは誰もが研究している(しかし社会主義の為にではない! もっと先がある!)。・・・

全てが採用される、しかし社会主義は一種の退廃である(a decadence)。・・・恐らくは次のことであろう。多分誠実にブルジョワ的民主主義の復活(renaissance)に望みをつないでいるのが人々の真意だからである。・・・それこそが何故に痛恨を伴いながらも、あらゆるルールを踏みにじった戦争を支持したのか、の理由である。・・・第二の爆弾——但しそれは自由、安全、福利の為のものではない。・・・諸政策と政治力学(policies and politics)・・・労働組合のルールはそれではない。・・・

8 よろしい、が尚、国際経済事情はどんな希望を妥当とさせているのか、という問題がある。・・・戦争の経済的帰結と現在の政策——それ自体そ

れ程の大問題ではない、イギリスでは人的装置は手付かずのままである為、そう悪くはない——。そこで次のように集約されよう、世界革命は——正にマルキストではないのだが——我々の行動によって、更にそれ以上のものでなく、実質的可能性(a real possibility)をもつ、と。・・・

意味だけのもの(der nur Sinn)なれば、生活といったものの中にその産物をもつことができよう。・・・ウィルソン・・・完全雇用をもたらす為の輸出の為の輸出。・・・異国である国々の工業化・・・それを規制する計画を開発する。・・・イギリス、輸出に対する必要性がある。・・・経済問題と実処的諸問題一般(überhaupt positive Probleme)はさほど悪くないこと。恐らくはそれが前提(voraus)となる。・・・こじつけなもの(sophism)は・・・それについて何がなされるべきかに対し、平和—ロシアとさえも、と。・・・人々はロシアのケースについての彼等の正にその諸行論の意味するところを考究していないのである。一人の独裁者は二人の独裁者よりも危険である(Ein Diktator more dangerous als 2.)。・・・望みに対しては望みを、事実に対しては信仰を(hope against hope, believe against fact)。・・・恐らくは逃避と宥和(escape und appeasement)・・・両権力の正確に対立した(正反対の)性質。・・・更には権力と保持されている特権、即ち、第一にカウントされなければ、彼の生活に不安定が生じ、且つ奴隷労働となる。・・・しかしロシアの軍備は・・・ロシアの社会主義・・・。「もし、それが20年間になれば」・・・

フランスは・・・リーダーシップを欠く・・・結末の軍備——しかも社会主義を・・・ロシアの中のロシア・・・我々をして可能性の中に帰結を求めさせよ。・・・リーダーシップがない。・・・スペインも今一度・・・諸ルール、しかしながら半分の仕事・・・国際連合について・・・どのように政治体制を駆り立てるのか。・・・政治家はそのところを見究めようとしな。・・・諸恐怖の排除・・・あらゆるカード・・・議会の諸論点・・・ファシズム・・・

ロシアの為のロシア、ということ・・・もっとも初歩的な権利の剥奪・・・諸々の恐怖・・・奴隷・・・いくつかの要素、殆どプロパガンダであるものによって吹き込まれた諸々の他のものであるかも知れないが。・・・しかし反対しておかれている最強の諸勢力は既に摩耗させられている。・・・政治——そして、どこにあらゆる支持が招来するのか。

9 彼は彼の同盟者を上回る勝利者である。同盟者達が——望んでいたと、

あるいはその為闘っていたと想定することが可能性としてあり得るとしている——あらゆる事柄の予想を裏切って、彼は成功したのである。ロシアをツァー達(the Zuars)の下にあったどんな勢威を遥かに超えたポジションに引き上げることに。更にツァー達の意志を彼自身の意志に結び付けることに。そしてこの状態は、比肩する者がいない程にあまりにも強力な一ポジションからのものであり、事実、彼がもっていたであろうそのポジションはこれらの同盟者達が与えるにふさわしいと考えたものは何であろうと受け取って満足している筈のものであったのである。彼はヒットラーが、嘗て侵略した領域よりも更に多い異邦人の諸国を征服した。彼と対等の立場で話すことのできるのは、一つの権力以外にはない(合衆国のみ)のである。そして、彼の同盟者達が歩を築いてきた所においてさえも、ロシアはロシアにとって実質的に重要な部分の全てを得ているのである。・・・構築において民主主義を遥かに超えた諸ルール。・・・合衆国守備隊(U.S.garrison)の守備領域の外にあっては、評価に値するような権力はどこにもない。

ロシアとの紛争・・・軍拡競争・・・敗北主義の形態・・・ロシアのために国王の仕事を引き受ける天才。第1に一個の人物の業績である、ということの言及！・・・更にさほどに強力な地位にはなかった人物の、・・・彼等の希望では恐らくはあり得なかったこと、に逆らって。・・・あらゆることを達成し、その上更に快適に設定された威信が内外のロシア人の国に与えられる。・・・しかし、帝国主義者ではない、と不思議にも今信じさせられていることがあり得ている。・・・半分の仕事(half work)・・・我々は正当化する必要はない——その仕事が彼に対してなされる、ということ。・・・もし、我々が全てボルシェヴィストであったならば、希望に逆らったものを希望することである、何がどうあろうと。そしてその場合、ヨーロッパ情勢と合衆国は・・・キリスト教的博愛、または民主主義、または自由、あるいは——少なくとも——私的プライバシー、またはヒューマニティ、そうしたものの信念が力なく摩耗している。・・・イギリスにおいて唯一の(政治的)可能性がある。・・・資本家達——事業から外されている(ohne business)・・・独裁者の大衆把握・・・労働者、知識人・・・途方もない威信・・・自然な結果・・・彼の人生の最初の過失を犯すことがなければ・・・滲透・・・ポリシーII、必要なところでは譲歩する、他の人々が極限的にまで民主主義と自由を欠いた状態に赴かされているために、それが可能なのである。・・・搾取・・・名誉ある勝利の中の集中収容所そのもの(concentration camp selbst in honor victory)。・・・診断

が益々重要となっている。・・・富裕層百万人の中にみられる悲惨な生活水準・・・無遠慮になされる軍拡競争の開始、それは一つの目的だけをもちうるものであり、しかもそれ程のトラブルはない、という。・・・そこでは社会主義は細目の一つ・・・帝国主義・・・関係、単一政党はだからして反民主主義的であり、言論と出版の自由を欠くことは専制に他ならぬことを告白しているものである。

どのようにして、こうしたことがもたらされたのか。・・・歴史における諸驚異の一つである。・・・全てのこの不器用ないじくり、何が踊っているのか。・・・しかし信じられないことが多い、即ち、どのようにして人々がこのことを見透かすことに失敗したのか、更にはどのようにして歴代ツァー達の中の最大の者が多くの国々で共感(sympathy)を享有している、といったことがあり得たのか、が驚きである。更に次のことが後者を説明する。彼の奴隷制は恐慌もなく完全雇用にあると。諸事実との馬鹿げた相克の下にある諸々の章句が熱心に受け入れられている、ということ。・・・どのようにして彼の統治区域を独立国家として、更に彼の機関(his agents)を独立した諸国の代表する者達として、受け入れさせることが可能であったのか。・・・

宥和を試みることの決定——逃避主義・・・彼の慈悲にすがっている周辺諸国家・・・落ち着いて！・・・博愛・・・名誉・・・教授が闘うことに反対しているのは正にこのこと・・・短い期間での同じにして風味の良いサービス。・・・更に資本家達は、ここにいれば安逸であるようにみえるが故に、満足している。

10 とりわけ反作用(reactionary)が観察されてしかるべきであろう。しかし、この反作用自体はそれを企図するものではない。・・・世界革命は今のところ閉ざされている。・・・何故に、そこで、先ずは戦争なのか？・・・何故に全ての標語(Schlagwort)が解放を断念しているのか？・・・予言もないし、為されるべきことも出てこない。・・・ロシア人はスターリンが行ったことの全てを防衛するところの劣等国民(inferior Leute)である。・・・何故に民主主義者は、そして平和裡に。・・・

バルカンにおいて、近東において、極東において、二つの陣営の間に。・・・ロシアの守備隊は強力ではあるが、不完全である——彼等(諸国)は統

合化させられるか、あるいは棄てられて自治領域の外におかれるか、がなされなければならない。全帝国は直接的または間接的に脅かされているのである。どんな個々の問題点をとっても、諸々の妥協が諸状況を——それに諸形勢を——暫定的に救っているのである。・・・結局において完全な降伏だけが平和を保証することができる。多かれ少なかれ、挑発に乗ってドイツと組んで戦争に走った国民は、そうした彼等のパターンに従った国の行動にふさわしいものではありそうにない。・・・しかし、たとえ、それが、a) 崩されつつあり、また、b) イギリスの保護下にあったとしても、治療は一国の政策としてあり得よう・・・。

一国の対外政策は、パターンとなっているものと、伝統から来った行動の組(集合)である。ドイツ人が今にも宣戦布告した軍隊を飛ばしてくるであろう、ということが直接信じられていたように、民主主義には、狼だ、狼だ、と呼び立てるムードを浸透させるような、そうしたことを除いて、保証するものはない。・・・スターリンは言う、安全は倦怠である、何となれば、諸国民が闘うことを欲しないから(safety is tiredness, denn Nationen do not want to fight.)。・・・それが意味している「国民」とは何であるのか・・・

「安全」(“security”)——のフィルターといったもの——を切望している、そして今や一挙に！？ そう、但し戦争の経済的無分別性は、委しく述べたい！ 立ち還るものが何もなくとも！・・・

1 1 我々は知識人達のことは無視することにし、状況を検討するのにケーススタディを以てする。

a) 命令に服従するヨーロッパの共産主義者達、b) 危惧(fear)、c) 合衆国の国内政治・・・敗北の形態と敗北ではないと正当化すること・・・キリスト教精神、自由、民主主義、公正な扱い・・・同じものではない、だが、ここでは問題ではない。・・・我々は事実を必然であったとして受け入れる——さもなくとも、少なくとも私有財産制だけは。・・・

際立った事実・・・しかし、更に際立っているのは、結末に対する態度である。・・・半分の仕事(half work)、そして恐怖と結び付けられている——a) ポーランドとフィンランド、b) 諸々の脅威を防ぐための諸方法を我々が奪われてしまった場合における、これらの国々の防衛——・・・関心、義務と名誉・・・疲れ果てた、政治力学・・・政治家は告白しなけ

ればならない。・・・

しかし明らかに、ロシア的要素は無駄にはできない。・・・我々は反対に(ロシアの経済が)成熟してはいなかった可能性を取り扱ってきたのである。それが成熟に至った経済に転じるのは今である。・・・しかしながら、先ず最初に我々をして、この政治的天才の驚くべき成功(**this stupendous achievement of political genius**)を讃えることを締め括らせよう。そのやり方は敵達と疑わしい友人達を自分に都合よく操ることで(**by pack**)きっちり「そのように」呼ばれるのである。第2に、それについての診断が、第3に、ロシアに対する態度が、問われるであろう。・・・いくつかのやり方がそれに至らせているが、それが望まれたものであるのか、または、あらかじめ見通されたものであるのか、それに、そうしているのが彼等の国の指導者達によってのものなのか、または、その大多数の人々によってのものなのか、ということが知覚し難いのである。・・・
反対者がいない。・・・独裁者の利益・・・他の全ては追随者(**followers**)としてあるのみ。・・・政治力学の中にある、あるいは4勢力の中にあるヨハン。・・・

スターリンがなしたことを如何様に民主主義はなし得てきただろうか。・・・ムードに依存した政策は合理的たり得ない。・・・民主主義、放任ではない、秩序正しい法の根拠ある過程。・・・一人は一人をカウントする、——専制性(**autocracy**)ではない、従属——軍事的ではない、そして近年においてのみ宣言された。・・・社会主義は、第5次の植民地化を意味しないのならば、副次的な事柄である。・・・帝国主義者、搾取がなされるのは、a) 賃金によっての、b) 課税によってのもの。・・・ポジション、即ち、a) 立場、b) 整理統合、c) 従属諸国、d) 慈悲にすぎている人、e) イギリスとスペイン以外の全てにつき部分的に。・・・紛争は、ロシアはロシアであるということ。・・・

12 ・・・等しく、良識と常識によって指示されるというやり方の中に、このことは採用されるべき診断と予見となるであろう。但し、ラテン諸国や日本に対しては、様々な但し書きが付け加えられるべきであろうが。・・・即ち、労働者中心体制(**laborite régimes**)は、——共産主義者達のように多くはないけれども——20年代にあったそれらよりもずっと

ラジカルとなっている。このことが含意するところの全てを以て、経済的、政治的、そして文化的に「管理資本主義」(“Administrating Capitalism”)であることは疑いない、しかも、一層に明確な目的と一層に強い権限をもって、それを管理しているのである。・・・本書の行論が遭遇した誤解という視点において、私は諸事実の有無についての私の分析の諸帰結が提示しつつあるのだ、ということ今一度指摘しておきたい。・・・

しかし、ロシア的要素は無視されることはできない。反対にそれこそが世界中での支配的要素なのである。これまでのところ、我々は成熟していなかったものの可能性を取り扱ってきたのであるが、今やそれが成熟しているものの可能性に転じる時なのである。戦争における真の勝利者の位置にあったスターリンは、単に戦勝国の指導的メンバーの一人であるという意味においてのみではなく、・・・の意味においても同じくであった。

13 地上の楽園(Paradise on Earth)・・・合衆国における危険はボルシェヴィズムでもファシズムでもない。危険は諸政府の無能とポリシーである。・・・戦争問題はあらゆる力と最高度の犠牲を前面に押し出す・・・落ち着いて！・・・これが疑いのない結果であるだろう。・・・それは共通の知識である。・・・社会的民主主義・・・改革・・・管理資本主義・・・革命が天国の「ファシズム」を鎮圧する。・・・民主主義とは何か・・・大きく留保されてあるもの(the great reserve)は公的行政の合理化——(社会的に合理的な高揚)・・・最上の回復(choice recuperate)、ウェーバーの実地的問題(positive problem)・・・偉大な可能性！・・・400億ドル、それだけで低所得を補充する。

14 小さな公共の分野では、無駄(浪費)といった何事かは問題とされなかったような、そうした国のことにも想をめぐらせよう。・・・官僚制度の抵抗はあるだろう。・・・

読者にとっては、これらの諸条件が充たされることがあり得る筈がないとみられよう。完全な充足は、実際に、然るべき多くのことを要求するであろう。政治的リーダーシップにおける然るべきエネルギーと責任感、行政諸機関におけるそうした無私(self-denial)で細目に渡る能力、世論からよって来たる然るべき支持。その然るべき条件の水準は、それをつくるこ

とは可能性としてはあり得ない程に高いものである。こうした路線に乗った政策は、人々のもつその最も可愛がっている諸スローガンのいくつか、及びその最も深く根を下ろしている諸信条のいくつかに反抗して進行するものである。圧力団体は抵抗するであろうし、更に現行の浪費の体系によって生活しているような全ての人々の存在は、トラブルの尚一半でしかないであろう。他の一半があり、それはあらゆる善意にして(**well-meaning**)浅薄な諸々の頭脳から出てくるのだが、その人達こそ世論形成に大いに役立ち、またその浪費の体系——それに数十億を注ぎ込むことにより、あらゆる困難と取り組むということから成り立っているのであるが——が繁栄の主要な動因(**the chief motive power**)である、となす説を納得することで自己満足しているところの人々なのである。・・・

起こり得る最悪のものは資本主義の末路であるだろう。・・・

(4) (3)の補完的パセイジ

摘要

信じられない逃避主義、見え透いた無益さと希望に反対する希望を伴った自己欺瞞・・・国際連合は責任の欠如をカムフラージュせんがための存在である。・・・共産主義陣営の優位は諸情況を検討してその上で決定的な諸方法を探るところにある。・・・人々やそのリーダー達が本当にソビエトシステムを包攝すると考えているとしたら、爆撃による自殺以上の何事もが語られてはいない。それは20年代に資本主義の将来に対して楽観的展望をもつことによってなされた自殺と似ているが如くである。・・・イギリスにおける労働党の地滑りの勝利、だが比例代表制のもとであったならば多数派には達していなかった。・・・労働党にとっての難しさは資本主義の富や地位を移すことなくして、自己を規律するところが道徳の教師以上のものなのだということ。・・・ドイツと日本の極限的な窮迫、そして悪意のある破壊・・・だが永久に打つのか、義務であるかのように、その診断は今一度やり直す必要がある。・・・社会主義の過激派の馬鹿らしさ・・・フランスでは過激主義が経済だけでなく社会主義への前進を妨げるところが如何に大であったか。・・・アメリカはどんな有力な社会主義政党をももっていないが、諸産業、諸価格、諸投資を制御し得る官僚制を備えている。・・・戦時経済のねじれた状態からの回復が優先的争点となっている。・・・如何なる直接的攻撃の危険からも免れており、且つ倫理帝国主義に向かうには疲れすぎている。・・・そこで他国の非民主主義的で抑圧的な体制に反対する対決においては、当面のところ逃避主義が心中に滲透している。・・・しかしながら民主主義にとっては半分の仕事だけが第二次大戦を通してなされただけであり、且つそうした情況は何もしなかったよりも悪いということである。・・・次期大戦で半分の仕事をなし遂げること、そしてその過程の中で社会主義にむかってのアメリカ自身の道をとるということ・・・その他 (編者)

(3)の補足的パセージ

1 明らかな空しさ(**palpable futilities**)と希望に反対する希望(**hopes against hopes**)をもって自己欺瞞するような、信じがたいこの逃避主義よりも、かくも注目すべきもの(または当然となすべきもの)は何もない。・・・それを偽装するために、今では全てが国際連合の目的ということで、既に揃っている。・・・それこそ逃避主義であり、責任感の欠如である。・・・然るに、この共和国の人々はボルシェヴィストではないのである。・・・墓穴を掘った国(**country undermined**)?・・・
ニューディール(と労働組合)は勝っていた、もし彼等のカードがうまく切られていたら。・・・あらゆる秘密は、貴君が未だあまりにも弱すぎる場合には戦いを強いるべきではないということである。

2 賢い歴史家になる方法・・・共産主義者の優越、それは彼等が状況を検討し、そして断固として積極策をとろうとすることより来る。・・・但し、諸事実はイギリスとの同盟が存在するかのようにはおかれまいであろう。・・・軍拡競争(**armament race**)が発進している。・・・重々しげに不平を鳴らされている教会・・・ギルド社会主義・・・あらゆることを充たそうとする可能性・・・2100-40-40・・・何故に国家は、利子を支払う場合に、負担が掛ることがないというのか。・・・そのようにして、その差は長期には巨大なものとなる。

3 ヨーロッパにおける社会主義——殆ど義務の履行を注ぎ込むかのようになされた。如何なる意味で、世界革命は実現されるのだろうか、——それに世界支配は(**Weltherrschaft**)。・・・スウェーデン—スイス—オランダ、これらは荒廃させられた(**ravaged**)国々である。他に残っている国々、即ち、スペイン、ギリシャ・・・合衆国(U.S.)、奇妙に当てはまらない。・・・

4 カトリックのカレッジとユニヴァーシティ・・・恐らくは20年後には必要がない(但し、人々は言うであろう——必要なものは何もない)・・・強調されるべきこと、それは一人の人物の仕事だ、ということ。・・・彼がその状態を必要としていたが如く、彼は一人で支配した、ということ。・・・システムの類似性がある。・・・それに至ったものと同じく当を得たものであり得よう。・・・逆の役割を以てする同じ行論。・・・逃避、そうさせているものは、問題は正に爆弾であり、そして一回や二回の爆撃である。・・・なされた努力は苦痛を叫ぶことであった。

5 1945年7月26日 英国広報・・・「少数寡頭制」の終焉、徐々に？ (Ist des Ende der “oligarchy” gradual?)

	5月	7月	
保守党	358	197	35パーセントから45パーセントへ、労働党の得票は8.3百万票から12百万票へ、保守党は、11.8百万票から10万票への変化があっただけ。・・・議席一人当りの票数は、労働党3万票に一人、保守党は4.7万票に一人、自由党は8.7万票に一人。・・・
自由国民党	26	13	
国民党	9	3	
労働党	163	393	
自由党	18	12	
I.L.P	3	3	
共和党	3	1	
共産党	1	2	

比例代表制の下にあったならば、労働党は299議席、保守党は248議席、自由党は57議席をもつべきであった。

選挙人が3万人よりも少である特権選挙区——大学以外——は52であり、そのうち43議席が労働党へ。・・・8万人以上の選挙人の選挙区は43であり、そのうち22だけが労働党で、20が保守党へ。

6 職業による半労働党的メンバー (half-labor's members) である
内訳・・・

医師、教師、公務員、技術者、ジャーナリスト (33)・・・
イギリスにおけるストレートな地滑り・・・ロンドンを除いたイギリスの
選挙区 (boroughs) ロンドン49労働党議員・・・イギリスの郡部にお
いても (労働党110、保守党112)、そして投票数はもっと多い。・・・
保守党4.4百万票に対して労働党4.6百万票・・・新しい世代・・・知
識人の重みは？・・・

7 留意されるべき事情 (merkwürdige Situation)、即ち、労働党に
とっての困難は資本主義的な富と資本主義的な権力の座のおこぼれに預
かることではない。このようにして、ここにおいても困難は善についての
教師達よりも規律をよく守ることであり、そして、他のいくらかの人がそ
れをなすことを、永くは当てにすることはできないことである。・・・大
戦後に残されてあるものは釣り合いを失した損失であるか、またはそれ以
上のものではないか、である。・・・ロシア的要素は、社会主義は一種の
反動を経験する、という作用力をももちうる。・・・ロシアの世紀・・・

8 敵役不在 (kein Gegenspieler)・・・それは政治的思考の領域 (the
sphere of political thought)の中にある。・・・誤った認識への闘争的固執
——但ししばしば自覚されていないが。・・・誤った認識としての行動の
過程の中にある諸目的、諸章句、及び言い張ること。・・・それはいつも
のことである、だが運命付けられ得る。・・・永続する傾向——分析が既
になされているように戦争とは関わりなく。・・・そしてそれは強制なし
にという様相をとる、何となれば、カーン(汗)が待望されてきていると言
い得るものであるから。・・・政治的にはそれをあり得ないと考える人々
もあるが、狼だ、狼だ、と叫ぶ人々もある。・・・政策——欠乏からよっ
て来たる政治力学・・・
しかしながら・・・

フランスは再び戻ってきた民主主義の方に向かって歓呼した
(jubilate)?・・・交通妨害(process verbal)・・・如何に過激派が進歩を
阻害したことか——経済的に、但し社会主義に向かっても。・・・あらゆ

る変化の作用に即して忘れられてよいものは何もない。・・・生産方法の変化、それは諸要素の価格変化、あるいは拡張によって、更に新生産物の出現によって、導かれる。E.A.G.ロビンソンは著書「競争的産業の構造」(E.A.G. Robinson in “Structure of Competitive Industry”)の中で、最適の集中について(über optimum Konzentration)を示している。・・・低位利用(underutilizing)に即して産業は自らを創出していく、ということが重要である。・・・それ程単純ではない(というのは、輸入が閉ざされた場合には輸出も減するものだから、・・・外国が買うことができず、しかも輸出産業は一層に能率を高めることが容易にできるものだから。)・・・

9 フランスにおけるボルシェヴィスト、・・・また絶望的・・・ペロン、支配を達成した二重の母(eine Doppelmutter)である。・・・政策は民主主義の政治である。・・・そしてそれは、決してエコノミストではない人物の大衆操縦術(exoologie)の中にある絶対的支配者に対する反抗である。

10 そして私はフランス国に一個の「慰めと忠言」(“Trost und Rat”)を与えるべきではなかったのでは?・・・そして、とりわけ、日本についても・・・

11 フランスでは誰もが社会主義者である。・・・ブルーム(Blum)は協調組合機構の賛美者であると共に、調整者である。この機構は全てを掌握し、政府に対し無敵の力をもった——けれども、ドイツにおけるように、カルテル組織から何物かが育て上げられることはなかった。・・・

合衆国はビシー政府と交渉しており、今や敵国協力者に対する魔女狩りのような全てのことを支援している。・・・

400万人が政府勤務者(Staatangestellte)である——以前に比して10倍にも至っている?・・・

サンジカリスト(または社会主義者)同盟は1936年以来、共産党系労働組合と共闘していた?・・・それは確かに全ての自由な選択を抑圧する共産主義に大きな役割を与えたが、但し本質的であったのはロシアであり、その他では私的所有には賛同者でさえあり、例えば銀行や炭鉱の社会化は彼等の主張に逆らっていた?・・・

M.R.P、即ち人民共和派は管理者側であり、ド・ゴール派(de Gaulle)と(?)は3分の1以下であった。・・・

12 イギリスの盲目性、そしてニュールンベルグ(Nurnberg)とドイツの窮迫・・・そうしたこと、そして言われるべきことが何であるかを傍観するほかはない。・・・独裁制由来の血統は、また民主主義の場合の内にも。・・・一本の新しい矢・・・ファシズム・・・

議会制の類(閣議体制)が難色であるので、ファシズムとは取引しな
い。・・・適応力、それにそれほど大きな圧力は必要ではない。・・・

宣言された意志・・・リーダーシップの独占・・・自己資金調達・・・
帝国主義の条項・・・合衆国における産業の直接的行動の機構について・・・
要点は支払いではなくして、その必要性を引き起こすことであり、要点は
必要性を——必要な場合に——切り下げるのではなくして、原則由来のも
のとする、ということ。・・・長期的な生産の能率と雇用——現存設備を
使い尽くすことではない。・・・

13 大英帝国は強かった時代にふさわしい存在であり、この諸困難は労働党にふさわしいものである。・・・(但しさほどに悪いという訳ではない、即ち、投資と福祉配慮力と保持された地位)・・・ビーバーブック、今は危機なのか?・・・神経の問題・・・不足という標題(Überschripte)は一つの徴候であるだけである。・・・古い時代は陳腐化しているといったこと。・・・

機械化の為、行われる600以上に及ぶ炭鉱国有化(Coal Nationalization)・・・

このようにして、本章の3つの諸問題が、・・・a) 労働側の勝利、b) ロシア問題、c) この国での生活・・・

フランス、日本、ドイツでは何が・・・悪意のある途方もない破壊・・・今日誰が再度に渡って良くならしめなければならない、というのだろうか。・・・偉大なる戦い・・・だがそれは社会主義に向かったの本質的な運行ではない。・・・とどまっている、そして全くのところ、社会主義一般でないだけでなく、特殊な専門家でのそれであって、人民でのそれではないということ。・・・

不可避性(Zwangsläufigkeit)、シナが唯それをなし得る。・・・

予見における戦争の諸結果は？・・・他の場合にどうであったか、との比較・・・第一次大戦の作用と第二次大戦の作用は？・・・共産主義(党)の計画——ブルジョワジーの眼の前では全く明白である。・・・

1 4 そこに、かの島はある。・・・そこでスターリンは——それが全ての征服者達を挫折させたものと——同じ問題に逢着している。・・・征服を欲させた先行の試み・・・以前には——それを消滅させているのだが。実行の準備の前の認識・・・どのように先行者達は敗北したのか・・・

1 5 状況は39年においてと——戦火の時代に直面した時と——正確に同じである。・・・

再びイギリスである、そこに危機の問題がある。・・・直接的攻撃の可能性はその時よりも重大で、帝国の脅威は今やである、と言えるかも知れない。・・・だが本質的には同じこと・・・

1 6 ロシアよりのパターン・・・4党政体(4 party régime)・・・充足に向かったの略奪(pillaging nach Bedürfnis)・・・道徳——仕事をもたらした、そして承認されるべきであったであろうところの——崩壊(break down)・・・

リーダーシップの欠如・・・世論の欠如・・・

近年の移民達・・・ユダヤ人を見よ！　そしてヒューマニティの欠如・・・

17 同じ根をもつ論点(a cognate point)がこの関連においてつくられてよい。・・・ロシアにおけるソヴィエト・レジームの経済的成果——我々がそれを社会主義レジームの一事例として受け入れるか否かは、今全く問わないとして——は、しばしばツァー時代のロシアの成果(the performance of Zsarist Russia)と関連させて論じられてきている。・・・しかし、4半世紀の経過は、そうした比較のもつあらゆる意味を奪ってしまった。・・・もし我々がこのケースにおいて、結局のところ比較を欲するのならば、比較はおおざっぱに1894—1913年のもつ外挿された長期趨勢(the extrapolated long-run trend)をもってなされなければならないであろう。・・・

18 ロシア的視角(russische Angle)・・・Faschismus(ファシズム)・・・
a) 諸成果(Erfolge)とこの諸成果への反作用(Reaktion auf diesen Erfolge)についての説明から——それによって我々は自身の弱点を暴くことになる——。

b) 偶然の諸問題と個人的な資質、そしてそれらが処理するところのもの・・・二つの定義された問題・・・より良いことは、より良い。・・・歴史的方法の問題・・・第一次と第二次の大戦の能率の比較・・・労働問題と社会主義・・・

このようにして如何により良き結果となり、この目的のために何がより良いものとなるのか。・・・内容、自動性(autonomy)、遅滞の無さ。・・・軍隊政治と恐怖・・・

アメリカの理想を共同防衛する道を形成すること。・・・ニューディールは擦り切れた・・・国の精神意識を見出すこと。・・・

19 ボルシェヴィキ化・・・合衆国ニュース・・・平和について・・・欲している全てを得たロシアとの交渉。・・・フィンランドもまた・・・何故ヒットラーは打倒されたのか、後思案(hindsight)?・・・危険は戦争ではない、危険は平和である。・・・紛争(trouble)はロシアのそれである。・・・そしてどのようにして降伏が成功になるのか。・・・「その場合、

それはロシアに飛んでいく」。・・・

20 マルクスは明白にブルジョワジーの馬鹿らしさ(the stupidity of the bourgeois)を大きく期待していた。幸いにして後者(ブルジョワジー達)は過激派の馬鹿らしさからも同じだけの多さを期待してよいであろう。・・・逃避主義は爆弾である。・・・浮動している不安の固定化・・・爆弾とドルは、その全てではない。アメリカの政治家はロシアを利用している。・・・「彼等は間もなく民主主義に転じるであろうか、だとすれば実際にイギリスと衝突しなければならないのか。」・・・そして我々は社会主義に向かっては我々自身の道をもつ、と。・・・更にこのことは次期大戦によって加速されるだろう。・・・

他の不安がある、即ち、OPAの固執とそれと密接に関係する降伏。・・・傷つけられた業務、その場合の失業、そして輸出。・・・

諸々の章句についてと官僚制・・・この国は疲れている、直接的な危険はどこにもない、等々の章句。そして政策は政治的である。・・・工業化・・・働いている大物——頭脳なしに(a great at work—without brain)・・・国際に抗して、そしてビジネスに抗して・・・労働者は反社会的で、そして失業に新しい困難が・・・序では言い替えと念入りな実行・・・強制による民主主義・・・実質的には人々が投げつけるものがユニークな諸章句に爆弾を、というのが理想的・・・敗北の形態の一つ・・・唯一の言い替え(interpretation)、役立つか、もう結構だ・・・

対外政策について、そしてミュルダール(Myrdal)・・・共産主義者に反対の自由投票はどこで行うのか・・・彼等が欲している事態がどういふものかを知らない。・・・同じ人々ではないのか、この正直とあの正直(Is this and other honesty)。・・・インフレーション——OPA(連邦物価統制局)——補助金・・・さようならとしての全システム・・・その効率的な平時生産の機構(Mechanismus of its effective peace Produktion)・・・戦時政府による以外にはインフレーションなどはない。・・・

21 今日格律(Maxim)となるであろうものは、a) 公開所得

(öffentliches Einkommen)か、b) 労働者所得——但し労働者階級に対しては一緒のものでない——である。・・・

ロシアについては、「我々は半分だけの仕事をなした」、そしてそれは全く何もしなかったことよりももっと悪い。・・・

22 今では、もし人々が——あるいは彼等のリーダー達が——本当にソヴィエトシステムを包摂しようと考えているのならば、何をかいわんや(no more to be said)であろう。・・・爆弾による自殺か？・・・20年代における資本主義の将来に対する楽天的判断者(optimischer Beurteiler)による自殺——今一度の世界大戦はないものとしての。・・・誰も心配していない？・・・彼女や小事業主には充分あり得る。・・・階級の本質は財産ではなくしてリーダーシップにある(Essenz of class is not property but leadership.)。・・・そして、民主主義的なブルジョワジーの無能力。・・・価格政策事情・・・38年に向けてあらゆる観点から平和を買った。・・・しかし攻撃は宥和(appeasement)によって抑えられない。・・・何故にスターリンは我々に攻撃をかけるべきことになるのか？・・・しかし、極めてはっきりした回答、大英帝国が——しかもそれとは別にイギリスの存在そのものが——存在しており、行く手に至るところで立ちほだかっているということ、が忘れられている。・・・イギリスはリスクには動かなければならないであろうし、スターリンは待機することができる。・・・

政策はプロパガンダで煽られた情緒的な突出である(The policy emotional burst goaded by propaganda.)。・・・スターリンは諸章句が妥当でなく、しかも見せかけであることを知っている。・・・そして不器用ないじくり(fumbling)がみられ、しかもイギリスの中に同調的論調はない。・・・

23 革命は買い取られることができない。闘われなければならない。・・・

集中収容所(Konzentration camps)、拘禁(ketten)、精神的奴隷化(geistige Sklaverei)・・・心なしに危機はない(sans hearts ni crise)。・・・そして、そのために必要とされるものは、1) 諸権力の体系的な操縦、2) 一個のイデオロギー、である。・・・ロシアとの紛糾(trouble)は相手

が社会主義者だからではなくして、それがロシアだからである。・・・スターリンは遂行を仕上げている——ヒトラーが夢見たかも知れないもののもつ、更に良き戦略をもってして。・・・民族戦争(ein Völkerkampf)を「社会主義対資本主義」の対立に置き換えることは、もしそれが一つの巧妙なるトリックであることでなかったとすれば、無意味である。・・・ロシアをパラダイスであるとしてみる人は——更にそれを一個の民主主義的なあり方だとみる人は——そういう人には救いが無い。・・・宥和、逃避主義・・・それらは個々の問題を取り扱う。・・・ブルジョワジーは(これを)直視しようとし無い、しかしその傍らでそれを請求しようとする。そして全てに対して、その免れ得ない論理に打ち震えながら。

24 改革か回復か・・・

知識人(Intellektuelle)・・・(?)・・・より良い状態・・・そして従属、道徳的忠誠・・・但し必要あつてのこと、更に反感を恐れない敵意・・・ミル(Mill)・・・道徳的忠誠は完全に行き渡る、再生もまた改革的であるので。・・・

より一層の反ブルジョワジー的言辞——行動におけるよりも。・・・

25 我々がなしたようにこれらの諸国を扱うことで、我々は権威ある諸信条を受け取りつつある。・・・

26 ひとたび地獄(inferno)に直面すると、崩壊を過度に危惧することはない。・・・原子爆弾を打ち上げたその国が、髪を逆立てる——驚く——かどうか。・・・

27 オッペンハイマー夫人と嘘・・・我々がボルシェヴィズムの方向に引っ張られるのが、如何に様々な事柄によってなされることか。・・・おとぎ話のような助け・・・ブルジョワジーはボルシェヴィズムに信じられ

ないような行動を授ける。・・・儂さ、誰もが自分の決定を引出し、そして自分の行く道を決定すること、そしてそれが起きる——例えば、イギリスの政治社会・・・

28 恐らくは、現代世界と非合理性についての何事かが、それに付加された位置を得るであろう。

29 軍拡競争・・・スターリンは宣言した、再軍備は資本主義がある限り必要だ、と・・・

30 道徳的標準(moral Standards)のこの完全な破壊は、戦場にみられるより悲劇的である。・・・問題はソヴィエトであるかないか、ではない。・・・単純には、スペイン、フランスといったものは一つのポーランドである、といったように。・・・インフレーションとデフレーション、ドイツにおけるように。・・・いじくり廻すこと(fumbling)——全く見事ではある、しかし、コストが高くつく。・・・そうしたケースにあって、テキスト(本書)が変えられるべきである、とは私は考えない。・・・労働側はよくいって、またもや、管理資本主義以上のことは何もし得ないので——そして各人は、2～3の経済学者を除けば、これを承認している。a) 選挙人の要求(権能賦与)(mandate)の欠如の故に、b) 事物のロジック、即ち、実際のところ恐らくは労働者は躓けられなければならないのでは、という情況の論理の故に・・・

31 無事実(no fact)は一つの事実である。・・・何故にスターリンは民主主義の一人の使徒(an apostle)であるのか。・・・10年に渡って、我々は最早闘うことをなし得ないのだろうか。・・・

我々が望んでいるように物事はあるとなす習慣がある。・・・市民にとっては——非現実的・・・もし人々が——それをもって行動するための—

—何物かをもとうというのならば、ツァー達は依然としてロシア一円を統治しているであろう。．．．その目的を語っている者と厳しく対決するならば、後悔することになる。．．．そしてそれが人士を合理化することになる。．．．そのように歴史家は驚くであろうか．．．しかし、そうでない。．．．選挙の前に保守党を設しよう。．．．単純で控え目に．．．そして我々はアメリカの存在を厳しく責め立てるであろう。．．．

諸君は紛糾の中へ立ち入ることができる。．．．と言うのは、マルクスの一巻を負っているのだから。．．．

ドイツと日本．．．永久にうち続ける．．．言うなりに(*obeyingly*)．．．それは診断を再びやり直すことを必要とさせている。．．．トラブルは売上税に対するアメリカの反対者ではない——彼等は憤怒の法悦(*extasies of wrath*)に浸っているのだらうが。．．．流線型化したツァー(*streamlined Tsar*)．．．チャンスが．．．非情な意志の中におかれた対立．．．明らかなのは、一人芝居であること．．．実処的問題．．．

3 2 語り得ない諸画期．．．イランの過去——記録にあるような．．．アイスピゼック．．．クルディスタン．．．世界戦争を妨げたか!．．．しかしヨーロッパにおける前景(*Vorsicht*)にはいつも——ローマ時代におけるギリシャのように編入(*Einstellung*)．．．そうしたどんなことにも満足させられるものとしては存在しない。．．．何故にローマは膨張したのか、あるいはチンギスハーンは犠牲者達を焼きに焼いたのか。．．．

それについては、いつも言及がなされている——そして次の如く、ここそこの労働組合の事務局が反ソヴィエトであるということ。．．．公示されているロシアの機関は——多分——大きなものではない、しかし、活動に首尾一貫した整合性を与えるべく、ひたすら良く組織された機関である。．．．良き伝統が死に絶えるのが、遥かに重要である。．．．

3 3 そしてどんなケースであろうと、スエーデンとノルウェイは——我々が戦争に赴く用意がある限りにおいてのみ——存在する、とりわけスエーデンは我々の道徳的ヴィジョンの範囲の中に充分にあるところからも存在する。．．．

そしてイギリスとイギリスの領域(土)の确实性は、我々が取り組んでいるものに依っている。・・・

34 その場合、次のように告げられることが重要である。即ち、国際貿易といったものの中で、事態は既に極めて広く拡がっている——それが今や資本主義的諸方法に即してではなく——ということ。・・・ロシアの仕事を行うことは続いている。・・・どのようになすことができるか、我々の知識人達は・・・合衆国は殆ど民主主義と言える方法で正常に戻りつつある。

(5) アメリカの事情、ワシントン経済学とケインズ理論

摘要

ワシントン経済学・・・1950年に向けての潜在生産力の高い見積りをもって始まる。1943年の公式物価でみて2000億ドルといった額である。・・・労働力は6150万人である。純国民所得は1690億ドル辺りの額となる。・・・戦後経済に存在する過大能力と失業、だが官庁当局の政策は貯蓄に対する性向に幻想的ともいうべき過大な役割を認め、その作用の抑止を図った。・・・それ自身に相対応するべき投資機会をもたない貯蓄をさえ生み出すものであり、労働問題や投資効率とは遊離した存在である。・・・資本主義のエンジンについての正にそのデザインの中で、一個のブレーキがその潜在生産力を開花させようとするエンジンを妨げるのである。・・・国民総生産(GNP)が与えられたとすると、完全雇用の状態で得るべき各個人の貨幣収入に等しい程の諸便宜が経済進歩に対する由々しき侵害なしに、支払われることは可能なのだということになる。しかしここで「可能だ」という言葉は多数種の諸条件によってカバーされている。・・・無責任な戦時支出は平時における産出の増加を召喚せんとして必要とされる額よりも遙かに多額となる。・・・心に銘記すべきは乗数の理論からもたらされる諸命題だけでなく、戦争物資に対する縮減に差し替えられるべき政府の赤字支出が継続されないとすると需要不足もまた生じるということである。・・・投資と需要が増大するにつれて、貯蓄の額もまた増加する、そしてこの額は適切な収益性を確保する点を超えた額となる。・・・そうしたケースにあっては、遊休残高が累積し、投資財に替えて「貨幣の保蔵」を需要することになり、その結果、需要の非効率が進むことになる。・・・このケインズ理論が成り立つのは潜在生産力の巨大性、不況、それに移動均衡といった諸条件の下においてであり、アメリカにおいては失業と破局の原因となり得るものである。・・・それが社会主義の発展を遅延するのか急き立てるのかは明らかではない。しかし産業の自己組織化や自己制御に対する敵意は如何なる形態のものであれ、秩序だった前進に対する由々しき阻害となるのであり、最小限の混乱で以て社会主義体制に移行することを利しはしないのである。・・・その他 (編者)

アメリカの事情、ワシントン経済学とケインジアン・セオリー

1 ロシア的視角については尚も考えることは差し置いて、我々は今や合衆国における経済状況に関する側面に立ち向かわなければならない。・・・貯蓄・・・逆転した位置、そして我々は同意できる。・・・

権力(Macht)、保守政権でさえ望まれざるを得ない——尊敬無き戦後・・・一方ではその問題・・・他方では巨大な産業的成功を引き出すこと・・・何故に、我々は——圧力団体をつくることができる場合に——政党をつくるのか？・・・生産力は労働者を節約するだろう。・・・そこに問題があるのか、更にそれは何か。・・・平時の生産——供給すべき東方がある場合にはどのように・・・

今や均衡予算が・・・過大能力に阻害される生産・・・社会主義政党がない・・・非常に大きい・・・多くが引き出され得る——しかもこの場合、全く必要でない。・・・官僚制、それは企業群として現れて労働者と共に働く限りにおいては万能の偉力をもつのであるが、その官僚制において、未熟な官僚制をもつという諸条件がある。・・・問題ではない、そして充分明瞭である、但し、でき得る限りのことははっきりしないままになされている。・・・

2 ワシントン経済学・・・輸出・・・マレー法案(Murray bill)・・・そうしたことの全ては、1950年に向けての生産潜在能力(the production potential)の高い推定——1943年の公的物価指数でみた我々の総生産2000億ドルといったほどのもの——から出発している。この限度に迄高める、ということに異存はない。その年に利用可能であるだろう労働力は同様に——6.150万人といった——高い数値を示しているが、これに異論をはさむことも慎みたい。これから控除される第一に兵役にある人——言うなれば250万人——と第二に失業という「不可避免的な」量がある。・・・

今一度、1943年の公的物価指数で計られた1950年の総国民生産(gross national product)2000億ドルから出発させよう。更に純国民所得(Net National Income)は、その場合、1690億ドルといったあたりの数値となる。可処分所得は個人所得税、社会保険賦課金、法人賦課金、

並びに法人非分配利潤と追加移転分を控除して得られる。

(*) 減価と減耗分120億ドルの額が差し引かれる。他の210億ドルは連邦法人所得税と州および地方政府の課税分である。我々の今の目的からすれば、我々が前に示したプランに従ったこれらの減額をなすか、または戦後需要推定者がなすであろうような何等かの計画に従うか、は大した問題ではない。前者を採用したケースだと、我々は売上税によって得られるのと同額に近い連邦法人所得税を失うことになる。我々は仮説的な事例を論じているのであり、実際に得る、または将来得ることになるであろう数値を試みつつあるのではない、ということとはもとよりである。

3 実処的諸問題を定義すること・・・それはあたかも限定付けられたが如くみえよう。・・・留保能力(reserve capacity)・・・どのようにありそうか・・・

他の諸々の事柄もまた——利子・・・ケインズ(Keynes)・・・無力さ(powerlessness)がここにも・・・紛糾部分(the trouble)の半分でしかない・・・浅薄な頭脳(feather brain)・・・公的支援の必要・・・非アメリカ経済の中で取るに足らない経済(feathering economy)ではないところにおいて。・・・そうであっても、所得をより高めるのだから、為されることは確かである。・・・低い場合にあってそう。・・・他の方法は論外であるとして、そのように本質的に失いし部分だけが残る。さもないと、
a) 計り知れない額、b) 2000億ドルにもなる恐れがある。・・・

経済のサボタージュ(sabotage)、支払い率(the rate of pay)、臣下の礼(homage)・・・しかし私には実質所得が問題に対する問題そのものであるように見える。・・・失業は存在し得る、だからして不足払い(deficit spending)が、更にはそれ故に2000億ドルなのではない(私は堂々巡りをしているのでは?)。・・・失業と自発的失業(voluntary unemployment)についてのノート・・・充分にいくらかの造型可能なやり方で、誰が理解しないのか・・・我々は同意しなければならない。・・・インフレーション、デフレーション、それに貿易・・・私はあり得べき輸出超過を論じている(政治的と道徳的理由からの輸出)。・・・そして投資機会(investment opportunity)については国内的作用のみ。・・・軍事産業・・・何故にそのように危険なのか!・・・400億ドルが必要とされる。しかし200億ドルの正味の貯率が超過ならしめられるということにさえなる。そして

更にはこの出口のない場合における出口のなさに対しても、なしでは済まされないのである。

支援は到来していない——それによって生活している人々、それに政治家は紛糾部分の半分にはしか応じていない。・・・夥しい浪費に立脚することはできない、だから膨大な失業を伴うだけのことであったとしても、規律の欠如はそのように大きくはない。そして就中、勝ち取ったものの欠如。・・・起こりうべきであったこと・・・500億ドルの延滞は永く変わらない。・・・全てにうまくいったとしても、知識人達でさえも留意しない。・・・利子については、だが尚作用を超えている。・・・

課税に対しては・・・a) 二重課税(Doppelbesteuerung)、これにはイギリス型とドイツ型の理念がある(我々はドイツ型をあるべきものとして許容してきている)。・・・b) 投資控除(所得でなく税において)、この点では私はフィッシャーと完全に意見の一致をみているが、それでも私はケインジアンをめぐるそれを受け入れ難いものとみている。・・・c) 不動産課税(estate taxation)・・・産業の構造といったもの自体には十分な法制的保護が行き届いている。・・・労働者に対しては法制的無能力(legal inability)がまた、(ドイツ労働法)・・・オフィスの終わりには労働争議・・・

4 貯蓄がない——逆である。・・・ベバリッジ(Beveridge)プラン——異論はない。既に戦時中それが問題となるであろう諸問題を解決した。・・・雇傭・・・インフレーション・・・

・・・戦時を通してのその成果によって論証された。考えうべき未来、言ってみれば、20～30年先の為それがどんな意味をもっているのだろうか、が十分に明らかにされるべきである。しかし、かくも多くのことがなされてきたので、我々が含まれているその争点を明らかにせんがためには、しばしの間、立ち止まらなければならないところの「単純な諸事実」が、ぼやけてしまっている。1950年には——過渡的諸現象はその時に死に絶えていると想定される——国民総生産(the Gross National Product)は・・・において様々であった。・・・潜在的産出高・・・

全ては社会主義が物的諸関係の中に期待しているものである。・・・運営(Operation)と欠乏(Not)が資本主義の下では馬鹿げた作用をもたらしている。・・・労働者の為の産業の社会化・・・所得の一部が所得税から出でて、あらゆる所得に及ぼすという場合、それはどういうことになるの

か。・・・ $Y = 100$ の所得に対して、そこから税がとられるとする。
100の中に入っている俸給の他には、他の政府支出はないとする。人々は10を支払い、尚90を残している、だがその10は戻ってくることになる。さもないければ、 $Y = 110$ であったのであろうか。・・・クズネッツ(Kuznetz)の消費支出(consumption outley)——(GNP-GCE)——は、28対71.4である。・・・クズネッツは、それにも拘わらず、労働所得(賃金と俸給)を29対52.8としている。

5 何でありそうかではなく、何であるだろうか、を我々が予言的に述べる(prognosticate)ことを試みるならば、結論はワシントン・エコノミスト達の不吉な予告(the dire forebodings)とはさほど大きさは異ならない。というのは、我々は展望されている成功の政治的条件が満たされることに疑問をもって根拠を検討してきているからである。貯蓄への過度の選好という想像上の危険(the imaginary dangers of an excessive propensity to save)に対抗して警備を試みようとする政策は、停滞論者達(stagnationists)が期待しているものを生み出すのに、それ自体充分なものがあるだろう。しかも、それは30年代の状況に対する「対応する投資機会無き貯蓄」(saving without corresponding investment opportunity)すらもが一種の激しさをもって再生産されるだろう、という点を含んでいるのである。更にこの政策は、部分的には論理によって、また部分的にはその唱道者達のもてる政治的信条によって、他の経済進歩のサボタージュを示すような諸政策と結びついているので、とりわけ、どんな停滞論者もが示している程に高い失業の展望値に我々は至らざるを得ないのである。

失業はあとで、とりわけ新しい割増金利が労働問題からの逃避をもたらす・・・投資効率への配慮の欠如・・・資本主義のエンジンの正にそのデザインの中に内在して、そのエンジンのその生産潜在能力を実現することを妨げるであろうような、一個のブレーキが存在しているということである。・・・次のことを心に止めておくことにしよう。我々は最早戦争の帰結である流動諸手段の蓄積の問題(the question of accumulation of liquid means)と取り組んでいるのではないこと、我々は今やこのことから抜け出しつつあり、しかもそうした蓄積が貨幣価値の新しい水準を——臨時的にか恒久的にか——創出することとは離れて存在している一個の問題と取り組みつつあるということ。・・・

もとより、この理論は合衆国の経済状況を全く異なった光の下におくものである。その諸問題の解決の為、我々が求めてきた正にその事実こそが、あらゆることの中の最も由々しき問題である戦後の諸問題の源泉なのである。我々の行論に従うならば、何等かの社会主義体制に向かつての展開を一世代や二世代は遅らせるかも知れないような生産潜在力(the production potential)は、失業と破局の原因となりそうであり、だからして社会主義の生誕(the advent of socialism)を急ぎ立てることになりそうである。「戦後需要」(“post war demand”)についてのあらゆる推定は実際にこの見解に組しているので、そうした諸推定の手続きが、この理論の具体的な適用を描き出す最良の方法となるであろう。それを基本的諸要素に還元すれば、それはこのことになる。

6 自発的失業(voluntary unemployment)・・・1950年には60億ドルに・・・引退した人、それでも請求する・・・物持ちの間にもある・・・他の労働者達の犠牲の上の労働者の利得——それは既に述べられている。・・・

この言葉が如何になじめないものとなってきたことか！——超潤沢な富のさなかにあつて必要とされていること、それから最上のものを得るということ。・・・公的行政の費用と能率に関わるその限りにおいてのみではない、そこには公共サービスが個々人に貨幣を支給し尽くすことからなるだけでもあるのである。・・・失業の便益(unemployment benefit)はその際立った事例である。・・・

2000億ドルという国民総生産が与えられると、経済過程に(それに経済進歩に)重大な侵害を加えることなしに、完全雇用の場合に各個人が受け取っていた貨幣収入と等しい諸便益を支払うことは——この制度が適用者(applicant)の数の増加をもたらさないと仮定して——「ありうる」ということが全く真実なのである。

「ありうる」(“possible”)という言葉は他の——はっきりしない多くの——条件を隠している。・・・ここにおいてもまた、ひよつとすると、どれだけの数の失業者があるのか、それに雇用者の先行給付(Vorleistung)は、更に目的と他の諸願望すらもが、査定される必要がある。・・・しかし、これら全ての中で唯一真実なのは2000億ドルが達成せられたならば、ということだけなのである。しかもそれがこの諸状況の下ではそうで

ないのである。・・・「他の言葉を以てするならば」こうなる。資本主義のメカニズムに立脚している限り、国家一般は奪取により生活している——一般にそうしたものとして感得されている——のであるということ、それに、それ故に明確な限度というものが——それは可變的なものであるかも知れないが——あるということ、と離れては何事もあり得ないのだ、と。・・・その場合、最も良き使用があるだけであり、もっと後にした方がより良いだろう。・・・

9百万人×40×52=18.720 しかし尚、200-35=165 (住宅は除外されているとして)国家の為の諸財と諸用役に・・・25・・・=140が残る。・・・=128.6

(「10」が控除せられる全てならば) 家賃に・・・

しかし、とは言え差当たって・・・他の価格水準で・・・6千万人の仕事(job)に対して2080億ドル・・・

この他に顧慮されなければならないこと、a) 2000という平均は6000にもなり得ること、b) この5000は人々が実際に既に2000をもっているところのものである。・・・年々の賃金には、如何に実証が避けられている問題か、但し無益・・・。

7 ジレンマがあるが、課税によってより低く抑えることができる——それは生産をも低く保たせる。・・・賃金は半分にさえも。・・・素早いやり方・・・それ以上に悪くはならないところまで・・・パニックにおけると同じ・・・流動性選好——カーン・・・貧しい、貧しい、(poor, poor,) 何が必要なのか。・・・帰結を否定したり、貧しい、貧しい、を軽視しても得るところはない。

実際に生産された産出物を誘発させるため必要とせられたであろうよりも、遥かに多大であった無責任な戦時支出(war expenditure)の諸帰結を極小化させてみても、得るところは何もない。更に公衆が——ケインジアン「流動性選好」のお蔭(徳目)で——具体的に何等かの量に達する遊休通貨と遊休預金(idle currency and idle deposit)を保持することで満足している、といった基礎の上に対面させられるであろう何等かの諸帰結の存在の否定のうちに得るところも全くない。現時点で我々は当然のことながら、この命題を聞くことはほとんどない。そして OPA(連邦物価統制局)

と諸税の諸レートを防衛せんとするケインジアン(Keynesian)の正統派の信奉者達(votaries of Keynesian orthodoxy)によって開陳された懸念は、その中にある誠実性のいくらかの喪失の証明である。心に留め置かれるべき重要事の全ては、この命題が乗数の理論(the theory of multiplier)からもたらされたものであるだけでなく、それが明らかに馬鹿げた意見——絶え間のない政府の不足(赤字財政)が軍需物資(war material)に対する(需要の)縮減(the shrinkage)に差し替えられることがないとする(需要の)不足(a deficiency of demand)が発生するであろうというもの——の中に含意されているという点にある。因みに上記の意見は戦後の諸問題の議論の中の1944年の章句の中で繰り返し述べられてきた意見である。・・・

総(当座と定期)預金(total-demand and time-deposits)(調整済)プラス銀行以外の通貨の額は、1946年の4月には1740億ドルに達しており、更に500億ドル以上——但し負債の償還——が、諸企業や諸個人が前もって現金に替えるであろう政府負債のその部分が、勘定に入れるため追加されるであろう。そして次のことは疑いない。即ち、償却資産を除くためのどんなパニッキーな奪い合いもなかったとしても、このことが一般的物価水準を数年の内に1943年のその約2倍にさせるのに十分なものがあつた、と。・・・もし、この戦時債が・・・、極度のインフレーションが、賃金債によって・・・野蛮な諸方策・・・ローンの供与・・・負債の輸入・・・貨幣の輸出・・・貯蓄と再生産・・・石のように無情な政策の価値・・・信用基金、低所得層の分け前・・・貯蓄・・・制限的な財政政策が必要・・・不況に回帰・・・必需品の制限・・・インフレーションは賃金手形によって来る。・・・大規模軍需企業には必要。・・・価格統制と反トラストの喧しい世論の波・・・それは政治的な仕事にも侵入してくる。・・・物価統制局と無能な人達の補助、それに満足している人物は、他方で低コストの人物と「なり易い」(likely)。・・・

8 貯蓄を有利とさせるだけではない、退蔵をも有利とさせる。・・・利潤といったものを手に入れている。・・・余剰(Überschuss)!・・・それが働いていないのではない。・・・保証債の発行問題を助長する。・・・ビジネスの行動・・・余剰——社会的正義と企業に貢献する。・・・賃金手形・・・信用収縮に対する防止策・・・ジレンマ、即ち、価格統制を伴うとなると2000億ドルにならない、価格統制なしだと誰もが保有せず、しかも高金利があり得ない。・・・290億ドルは全減価償却分、そして

550億ドルはカット、200億ドルはコインや少額の紙幣・・・ハーン(Hahn)の行論・・・

このことは(長期的?)戦後問題を扱った全文献の見出しとなっているような、そのポピュラーな標題——見出し——によって、より良く理解されるものの範囲を規定する。読者が知っているように、こうした文献は無数にある。しかし分析上の諸困難を提示する文献は僅少である。それは実際のところ、あらゆる諸プログラム——都合の良いケースが陳腐であることがあまりにも明白であるような諸路線の上に練り上げられている——の検討をその下に煩わしくさせている諸々の不利益の一つなのである。彼等の提示している諸困難はと言えば、政治的でしかも道徳的な性質のものである。要するにそうした諸政策を描き出すことの容易さと同じほどに、それを遂行仕切ることの困難性が大なのである——成功に至る迄遂行することは不人気であることが唯一の報酬であるような夥しい自己否定的な作業となるのである。人々はこの政策をもたらすであろうアメリカを好むことは確かであろうが、それをもたらすことに手を貸した全ての人々を憎むことになるであろう。しかしながら我々は、「過渡的な諸問題」にまで触れることに迄至っていなかった。それは一点を意に留めることだけで充分である。即ち、インフレーション・デフレーション問題。

展望される巨大インフレーション、または巨大デフレーションの問題は、今までのところ固有の問題として扱ってこなかった。問題はインフレーションが今や挫折と共にここに来たものである点である。・・・インフレーションは賃金手形によって進行した。・・・当然のことながら、パニックはない——コストインフレーション——二重価格制の緩み・・・思慮なき戦時財政の結果・・・そしてその場合、生産を妨げているのが利子だけであるのかは疑問、GNPが4000億ドルになればどうなる?・・・更にもっと悪い総量規制に向かうことになる。・・・そして成り行き任せでは解決されないが故に、更にあらゆる総量規制が——とりわけ不人気であるOPAが——故に甚だ深刻である。・・・ケインジアン立場から必要である正にそのこと(gerade die, die von Keynesian Stande nötig sind.)。流動性選好(Liquidität preference)について語ることは何の助けにもならない。・・・危険が増大するのをプッシュする。・・・但し多くの望むだけの価値のある事柄——OPAの廃止——が流動性の事情によって困難となっているとするのは正しい。・・・見事に拡大した戦時財政に対する反対がない。・・・それが低落を進めている価格水準の上に進められているこ

とには深い意味はない。・・・労働者の能力よりも更に多くが生産されるだろうという希望は、短期においてのみ正しく、しかも賃金が低く抑えられている場合においてだけのことである。・・・低所得層の重い課税・・・ケインズ理論の示すところに根拠をおいている。・・・安全性のテスト(test of security)は笑うべきものとなる。・・・どのようにして1対20の生産ができるというのか(正に労働者とそれに即した節約の故に)。・・・失業といったことに置き戻される(set back)、それは基本問題とは区別されなければならない。・・・GNP(I. R. Doll p.436による)・・・45年には1973億ドル、但し通貨ドルで・・・

9 低課税と高金利を良しとするケインジアン理論(Keynesian Theorie für niedrige Steuern und höhere Interessen)・・・

3つの事柄、a) 自由(liberty)、b) 不況(depression)、c) 配置(arrangement)の完了に多くの年月を要すること。・・・撤退(retreat)、a) 人口が静態的ではない場合には、b) 大衆が豊かになる場合には。・・・しかし何かを得られるのかということ、何も無いのが全てである。・・・

流動性選好(Liquidität preference)は彼の所得と共に低下する?・・・安定化(固定化)された資本主義・・・2つの問題点、慣習(habit)なのか原理においてなのか、それに課税(と輸出)を伴ってか、伴わずにか。・・・更に完全雇用になった場合にはどんなことになるのか。・・・完全雇用と安全の中にある秘儀・・・が今日的に染み渡っている。・・・

・・・観察の下におかれている経済、生産と失業は(必ずしも比例的にはないが)Gに向かって、従ってIとDに向かっても、拡大しつつある。停滞論者(stagnationist)の論ぜられるべきテーゼ(命題)は次の諸点をカバーしている。I(投資)とD(需要)が増加していくにつれて、諸企業や諸個人が「貯蓄」しようとする総額もまた増加するという事、この額は適正な収益性をもった——即ち、人々をして彼等が貯蓄することを決意するものを投資させるのに十分な収益性をもった——投資の為の諸機会を超えて増加していこうとする傾向をとるという事。そこで遊休残高(idle balances)が蓄積されるであろう——このことは人々が有価証券乃至は投資財に替えて「貨幣の保蔵」(money to hold)を需要させていくことを意

味する——ということ。それ故に、そこでは全体としての諸財に対する需要の不足が——消費財に対しては人々が貯蓄するが故の需要の不足が、投資財に対しては彼等が退蔵(**hoard**)するが故の需要の不足が——発展させられるということ。更には、諸企業に対して結果としてもたらされる損失(**losses**)、及び(あるいは)、結果としてもたらされる失業は、そのシステムをして水準 **G** を目指そうとすることを妨げる——あるいはそれを、その水準は、それにも拘わらず到達されることがあったとしても、水準 **G** 以下に抑え込ませる——ものであるだろうということ。・・・

それがもつより広い含蓄という点で、この命題は既に本書の前述第 **X** 章で論じられている。そこで提示されたケースは——更なる資本主義的發展のためのあらゆる諸可能性をより十分な視界におくものであった——諸事態の引き続いて生じた経過によって強調されることになった。その更なる発展の諸々の可能性の存在は、その場合、部分的には過去の経験から、そしてそれに対する反証の不在から推論されなければならなかった。しかしながら、ここで我々が関与しているのは、停滞論者の教義(**doctrine**)の枠内での特定の論証のみである。その古典的形態として、その教義は故ケインズ卿に——彼の一般理論(**general theory**)の中に見出されるものに——負う。

実行上の帰結(**practical results**)と政策、だが合理的である。・・・

ラッセル(**Russell**)・・・「石積みがより良くさえする——そこでは財の不足については誰もが合意できる、そして意見の差は・・・のことだけである」。・・・どのようにそれが描き出されるのか。・・・更に老後や病気や疲労の日に備えた貯蓄はどうなる。・・・

貯蓄は、そこで、平和の敵(かたき)役である (**Saving ,then, is the villain of the peace.**)。・・・

- a) これまでに、どのように論証が終えられている、というのか。・・・
- b) 不幸にして、政策に対しては考えさせられる！・・・(言葉で表してもどんな利益が)・・・反対無しに統制を得させる素晴らしい諸手段、所得の使用をつくる・・・消費を得る・・・原案の形でのマレー法においてすら・・・
- c) 反証(**Widerlegung**)・・・馬鹿らしさ——双方にさえ役立つ、攻撃すべきところがない。・・・
- d) しかし帰結が同じである公算は甚だ大である。・・・
- e) どんな場合にも、最長期の診断には関わるものではない。・・・しかし、これまで言及されてこなかったことがある。・・・投資機会という基

盤への配慮なしの貯蓄だ、ということ。・・・4000億ドルが高い見積もりだということではなく、それ以上には多くは貯蓄されないという論証は？・・・それに対しては何もない。・・・しかし結果は恐らくは尚同じであろう。・・・失業についてはどこで・・・

より少なく充たされた流動性選好によって(*durch weniger befriedigte Liquidität*)! ——これまた重要・・・「もとより、流動性が選好的である不況期には適用されない」。・・・2000億ドルの基礎付けは、恐らくは、私がそれを導入した初期には同じであったろう。・・・失業はその時か、または最後にか・・・

ラッセル、更にアメリカ人は他のところを理解できるので、彼は売らさる(セールスマンの心理)と理解している。

産出と雇用におけるこの縮小または適度な拡大は、もし諸財とコスト諸要素の貨幣価格が——我々をして端的に言わしめれば、諸価格と賃金率が硬直的であるならば——、必ずや「総需要」(総支出)の縮小または適度な拡大をもたらすであろう。諸価格と賃金率が伸縮的であれば(*if prices and wage rates are flexible*)、産出と失業が、これまた縮小または適度な拡大となるであろうとは——理論の唱道者達によって主張されてはいるが——不確かである。ところで、このことこそが非常に古い理念、即ち、資本主義のエンジンの正にそのデザインのところ内在している一つの妨害的作用力としての「退蔵に流れていく貯蓄」があるということの現代的なケインジアン形態なのである。それは、少なくとも現在の諸条件の下では、資本主義のエンジンをその潜在的生産力(*its productive potential*)——それ自身の流れの下にある——に至ろうとすることを妨げる。これに関連した「戦後需要」の推定はこの理論の統計的補充以外の何物でもない。即ち、繰り返すようだが、現存している投資機会は——1950年時点で国民総生産が完全雇用の水準にあるとして——諸企業や諸個人が貯蓄することを決定するであろうその量を吸収することをなし得ない、ということを示す試みはその推定なのである。

諸価格と賃金率が伸縮的(*flexible*)なケースは、ここで論じるには込み入りすぎている。しかし読者は思い浮かべることに困難はないであろう次の状況がある。即ち、その下では伸縮性が現実問題として貨幣を循環過程から不断に引揚げられていく——つまり退蔵されていく——ことによる産出への諸影響を救済することに失敗するであろう状況である。そこでは諸価格

と賃金率の双方が下落しつつある場合には、例えば相互に「追跡のなされ合い」(“chase” each other)といったことが——正確には双方が相互に出現を「追跡し合う」または「競い合う」が如く下落を続けることが——それらの均衡関係に至ることなくもたらされるということが起こり得るのである、恐らく無限にではないとしても、内在的には十分に大な期間、厳しい不況にあることを意味するだけのことなのである。私が、この論点について問題の理論に挑戦しないのは、この理由による。

この(ケインズ)理論は合衆国の経済状況を——我々が我々なりにこれを考察してきたものとは全く異なるものであるような——一個の光の下におくものである。我々が経済的並びに社会的問題の一つの(臨時的な)解決とみてきた正にその事実が、それ自体、あらゆる問題の中の最も重要な問題の源泉となっていることである。我々自身の論証に従えば、社会主義に向かつての傾向を一代ないし二代程遅らせることになりかねないような生産の潜在的能力が、それどころか失業と経済的破局(economic break down)の原因になりそうなのであり、従って官僚制的社会主義の生誕(the advent of bureaucratic socialism)を急がせることになりそうなのである。更にこのことに由来する具体的要件として、政府の手による所得平準化の支出(governmental income-generating expenditure)——「赤字支出」(“deficit spending”)——が、生産の完全雇用水準に至るために提供されるというそれだけの手段として、自動的に負荷されるであろうこと、しかも特に完全雇用水準にとどまるためには——戦時の流動資産の蓄積が貨幣価値の新しい水準をつくり出すであろうか否かとは全く関係なしに——それがなされるであろうということがある、あるいは寧ろあったのである。

ベバリッジ計画においてもまた！ 「もし、我々が呪われた消費の下で死す」といったような用い方を人々がなす、という懸念が(anxiety dasz people make use of such “if we die im unselige Konsumption”.)・・・インフレ——全てのプロセスが逆行している。・・・計画の中の一部はいわれなき美味な裏切りの何物か(etwas unduly palatable insidious)である。

しかし、現在の状況下にあつて、「インフレーション的」な諸方策を賛美するようなエコノミスト達は——どんなエコノミストもが注意するところとなっている程に——馬鹿げた存在に近くなっているので、我々はこの位置から撤退して考察することにする。ワシントン経済学の究極の

判断基準は、最早赤字財政ではなくして、他の何事か——言うなれば——消費財に対する支出を必要な高さに、高率課税に見合った公的予算の方法によって (by means of public budgets balanced at high rates of taxation)、維持することになってきている。貯蓄は「平和の敵役(かたきやく)」であるとなし、しかも、企業と比較的富裕な個人を貯蓄の主体として考慮することで、我々は極限的なケース「失業の究極の原因は現代社会にあっては所得の不平等である(the inequality of incomes)」という命題に至る——更にこの所得の不平等は、そこでは、何であれ諸々の不足を創出することの何等かの必要性があることは伴わないような課税によって治療され得るのだ、ということである。

不足払い制(deficit spending)の政治的諸含意は、もとよりのこと、偏にかかってその国の政治的諸部門とその官僚制的助言者達次第であると言ってよいその権力の中にある。事業者階級の不足払いに対する嫌悪(the aversion)——ワシントンのエコノミスト達やそのアカデミック・ブランチである研究所員達には、非合理的なほどにもみられる——を説明するものは即ち、これである。いくらか異なった視点から見ると、我々は次のように言うことができる。赤字財政に対する反対はそれによって改善せられるであろう状況での赤字財政に対する反対ではなくして、赤字財政を避け得ないものとさせている状況を生み出す諸政策に対する反対なのである。その原案にみられるマレー法の諸原則は実際のところ反対するべき合理的理由はない。しかし、それにも拘わらず、この法に対する反対は——私のあずからないことではあるのだが——提案している機関(the agency)についての信頼の欠如からのもの、並びにそうした機構はひとたび設立されると、それが利用されなければならないであろうような諸状況を生み出そうとする政府や議会の意志を増幅させるであろうという予感からのもの、であって合理的に弁護されてよいものであった。

そうした政策が今日の諸条件の下では、不足払い制と全く同じように、インフレーション助長的であるだろう——それほどには明白ではないだけのことである——という事実からは全く離れて、その政策は次の目的に対しては理想的に資格付けられている。即ち、この国(合衆国)の資本主義のエンジンを妨げている鎖を、それがなし得るところのものを示すことによって、緩めてほしいとするどんな需要にも反対方向に作用させる(countering any demand for relaxation)という目的に対して、更にそのエンジンを最後には、不足払いをなすことすらもが再度に渡って不可避とさ

せるほどに、有効に麻痺させるという目的に対して。その理論そのものについてはどうなのか？ 広範にもたれている諸疑問はどうなのか——疑問は、不足払い制であろうと、確定したレートでの見合った予算であろうと、その政治的含意に共感をもっている人々以外の人々ならばどんな人々の間にも存在しさえするほどに広範にもたれる疑問であって——我々は果たして、「必要とされる消費者需要」を得ることができるのか、あるいは人々を「彼等の所得を十分に費やさしめる」ように誘導することができるのか、に関してである。

10 OPA(物価統制局)・・・賃金課税(wage taxation)・・・「それまで8(%?)の上昇」であるところの人物・・・何故ならば、我々は眼に見えてそのための見出しとなっているのだから。・・・

産業生産指数は物理量で1918年を100(99)として1943年に233(218)・・・一方で戦時のものは非認、留保無し、他方でもっと重要なものは何もない。・・・

産業の自己組織化または自己規制(self-organization or self-regulation)のどんな形態にも向けられる敵意は、秩序ある前進に対する、そしていつの日か必ず起きる社会主義レジームに向けての最小限の混乱を伴う移行を促進するような発展に対する、一個々の重い妨害作用(a serious obstacle)である。更にそれは政治的セクターや世論から強力な支持を引き出している。しかしシャーマン法(Scherman Act)に由来するその法制の最小限の修正と、とりわけその法制から発展させられた行政的・司法的施行は大きなものでなかった。NRA(連邦復興局)の時代、公衆が容易に受け入れたものよりは含まれているところが殆ど多くない——いくつかの点では更に少ない。

労働情勢(labor situation)は視野に保たれ続けてきた2000億ドルという目標に至るか、更に進んでそれを超えて進むか、という水準に応じたそれを達成不可能と見込まれている。その理由は貨幣賃金の諸水準が諸資源の完全利用とは両立し得ないという結果の故にだけでなく、ストライキを伴う賃金トラブルが労働側・経営側双方の能率を引き下げるであろう故にでもある。もとより1945年の産業生産指数が示しているような相対的貧困(relative poor)をストライキ及びその直接間接の結果に——少な

くともその主要な原因の一つとして——関係付けることに失敗するようなエコノミストはいない。これにつき言及されるべきことの全ては次の如くである。現在の諸条件の下では、労働者達の個々グループの諸ストライキの主だったものは労働者の他のグループに加えるに——同じ世論が通常その社会的同感(*its social sympathies*)の枠内にあるような——諸階層、言うなれば農業者達、サラリーマン層の低位層(*lower strata of salaried employees*)、専門家達に対立したストライキである、ということを一明らかにすることに世論は完全に失敗していること。即ち、生産過程に対する結果としての諸妨害の災禍を受けるのは主にこれらのグループだ、ということ。「資本家」の利害なるものは入ってくるとしてもパーセントにおいて多少のものであるに過ぎない、ということ。しかし、殆どのエコノミスト達の「機械的な観測」の特徴としては、「そうした紛争と官僚制的苛立たしさ(*bureaucratic vexations*)」がそれを避け得ない管理階層の能率に及ぼす影響の重要性を一明らかにしているのは、彼等の内十人中の一人もない、ということ。しかしながら、必要なことは、現代の経営者達の日常の作業をそのことについての適正な推定に至らしめるためには、一つの現実の構図をヴィジュアルライズすることであるのみなのである。大規模企業での経営陣の内部における分業は、こうした諸影響を和らげるであろうが、その社会的損失を消し去るものではない。

賃金についての議論はどうでもよいか、または、でありさえする。・・・我々はそれに立ち入って検証することはできないとしても、その中に一般読者にとって極めて有用なものがあるのではないかと言えさえするのである。・・・とりわけあらゆる勝ち取られたものと、あらゆるものに対する最良のもの・・・ニューディールを恒久的に整理していく道は・・・知識人は破壊に結び付けられる他の諸政策を要求する自由を保持するであろう。・・・

11 それにしても、何故に2000億ドルなのか、これらの諸条件が一—最小二つの例外はあるが——充たされたとしても。・・・何故に我々はそのための目に見える見出し(*visible heading*)であるのか、そしてOPA(物価統制局)と労働争議(*labor trouble*)といったもので充分であるべきでないのか?・・・しかしそれは実処的諸問題の下に(*under positive problems*)理解されるところのものではない、ということ。そうではなくして、今一

つの意味、即ち2000億ドルが達成されることができないという意味で、良く理解されるのである。——私の行論が見当違いであるのか、または循環論に陥っているのか——人々が貯蓄するかも知れないといったことがあるからなのか。・・・更に、だからこそ戦時下の課題のあと、それを脱却しつつある政府を置き直すためには、不足分の先行支払い(**deficit Vorleistung**)が必要となるのだろうか。あるいは上層の階層に対する課税と平等——均衡予算における逆払い——が必要となるのか。・・・このようにして、全くの無となり、有効需要は怪しげなもの(**a slum**)となり、そして急速に政府給付型の繁栄の中に摩耗させられる。・・・もとより輸出は無しとして・・・そしてこの場合帰結は。・・・彼等が更に50年間成熟させるのならば、更にまた一つの選択がその長期的な予測を一般的なケースに変換するならば、一にかかって、それはただ単なる客観的な可能性に過ぎないということになる。・・・そうでなかった場合には、しかしながらその場合には、社会主義が現実により良い——均質的にコストが節約される——とは言えないのである。・・・

実処的諸問題なるものはない。そこで諸問題はあったとしても、さほどに関心を惹くものではない。一つの可能性であるに過ぎない。そして、我々はそのために目に見える見出し(**visible heading**)なのである。追跡し得る偏りよりは **OPA** などと諸紛争に対するそれぞれのケースである。それにつき我々は観察者達と意見の一致を見ており、更にはこのことは本質的に、その機構が赤字支出(**deficit expenditure**)を役立たせる場合、そうしたその特殊な消費は課税を経た平等によることを必要とする、ということ告げることの上により由来するものであると弁えている。**OPA** のジレンマは、**a)** 租税政策によって、**b)** ストライキ参加者と企業に何が起こっているのかを明瞭化することによってのみ克服されることが出来るものである。・・・だがそれは既にインフレーションに即しても。・・・反インフレーション政策は、それ自体目的を達成することは不可能であり、しかもそれを止めればインフレーションは悪化する。・・・

貯蓄の諸慣習を言い張っている報告書を忘れてはならない。・・・恐らくは初めは同じであった、2000億ドルを根拠づけ43年の成果(**performance**)を確保することからではない、その上。・・・しかし偏りに読者が必要とするところに行きさえする。・・・不安は保険によって切り下げられる。・・・循環の中での高貯蓄・・・失業の原因・・・とりわけ勝ち取ったものの全ては保持される——ポストマン・・・**OPA** のプロパガンダ・・・被害者にあたる者であるところの標準以下の人々を補助する、

その一方で低コスト、丁度都合よく。・・・

600万人の失業についてはどこで(とりわけ軍人達の・・・)・・・統計的と実質的、雇用の量・・・

12 一つの基本的なエラーが説明される。・・・二重三重の取引・・・重複・・・悪い頭脳(bad onion)・・・合理的に高める・・・キャパシティの保全?・・・失業の循環(unemployment cycle)・・・

実処的諸問題(positive problems)の規定・・・唯一の承認されたものが既に・・・経済についての憎悪、即ち、何もないか、数千億があるか、のいずれか。・・・浪費の精神(spirit of waste)・・・

・・・に加えて巨大に拡大した軍事的整備についての財政的諸要請、更に加えて——それ以来技術的理由からして望ましいとされた為、非常に多種のものとなった少額の償還金をさえ含むことになった膨張させられてきた負債の利払いの財政的要請——は約300億ドルに見合ったものとなることができることになり、このように我々は新規の諸サービスと現在の諸サービスの改善をファイナンスするため適用されてしかるべき財政資金は、年々おおざっぱにみて100億ドルの額になるものが残される、ということになる。ベバリッジ計画(Beveridge Plan)、それは更に大きい諸対策が1950年以降のために対応させられることになるのはもとよりである。しかし、それはここでは正に公共的諸分野において・・・

詳細は必要でない。何故に諸償還金なのか、何故に諸所得移転と諸販売金の間を区別する必要がないのであるか。これに答えるには本書と同じボリュームの一卷の書における数章をみてみるべき程に拡大するに任せられるべきであろう。・・・それは詳細ということの深く根を下ろした仕事になるであろう。・・・サボタージュ・・・更に保守といったものは国民の道徳的意識をもつということ、このことはどのようにありそうか、・・・失業はどのように与えられるか、ベルグマン・・・マレー法案は必ずしもバランスしない。・・・

非合理的な統制(irrationale Kontrolle)または非合理的な処理(irrationale Handlung)・・・更に賃金諸政策——これらがそこで達成しようと目論んでいるもの——・・・干渉と労働市場、そこには政治事情(political affair)

が——利子もまた(議会は全く不適切である)。・・・

我々エコノミストは我々の政治的叡智と結合した問題を省いているべきなのか・・・昨日行われたモーターレースを予想するよりは経済的理由に対する予想を・・・実処的諸問題の定義・・・

(6) スターリンとフランス・イギリス・アメリカにおけるロシア問題

摘要

スターリンは大戦から真の勝利者として現れた。そうした戦後状態を意図した者は誰もいない。ロシアは征服の収穫を見かけよりも多大に得た。征服諸国の同化、すなわち、モスクワから無条件に管理される程にロシアの機構に完全に組み込まれるというやり方によって。あらゆる権力と威信は単一の人物に集中されていった。スターリンは超越的な天才であり、返復して生み出されたのは課せられた諸条件が何であれ喜んで受け入れさせるといった状況である。・・・その国の民主主義体制をスポイルするだけでなく廃止する・・・一人物の下でのこの専制社会主義、不安定さと威信の途方もない増大、生と死がスターリンの意志に依存する、法の正当な手続きの否定・・・大陸ヨーロッパ フランスではロシア侵出に抵抗するどんな効果的意志もなかった。そうした懸念は苦悩の諸々の叫びを窒息させるほどに強いものがあつた。・・・フランス人民は感謝の下に自分達の解放を万歳し、新生民主主義フランスの創出という魅力ある仕事に取り組む、と信じた幾ばくかのアメリカ人は確かにあつた。しかし実際にそこにあつたのは挫折した精神であり、国民的敗北の意識である。・・・共産党はロシアのセンターから指令されてはいたが、尚その場しのぎ的または見せかけの流儀である側面が多分にあつた。イギリスでもロシアの勢力との宥和の弁護人が幾分かはいるけれども、有権者が共産主義を支持するなどはない。政府であろうと労働党であろうと共産党と和解するべきどんな動機をももっていない。・・・その意図するところが何であれ、大英帝国に対立するべきものとしての客観的位置関係は和解し得ざる敵対関係なのである。・・・そうはいっても有意な支援が大陸ヨーロッパからは得られないことは全く明白であり、成功についてのあらゆる望みは合衆国からの支援にかかっている。・・・合衆国がロシア・イギリス戦争に巻き込まれる、そうした状態は遅かれ早かれありそうである。・・・しかし現在のアメリカには今一度の長くしてコストのかかる戦争に立ち入る準備はない、ワシントンは第二次大戦に入る前に採られた政策とは反対のコースを採っている。・・・対外政策は国内政策であり・・・国内では戦時プロパガンダや戦時統制それに戦時課税に疲れている。・・・アメリカでは共産主義は極めて少数派であり、多数派は他の戦争に不同意である。・・・信心深い願望の中に生じた更なる宥和・・・たとえ意図していなかったとしても親ロシアである。・・・更にその上知識人達の驚くべき数が意図において親ソビエトである。・・・その他 (編者)

スターリンとフランス・イギリス・アメリカにおけるロシア問題

1 しかし、それらの全ては、これまで成熟してはいなかったもののもつ、ある実現可能性に関わってくる。今やそれがもつ今一つの可能性の問題に転じるべきである。即ち、スターリンが、現実には大戦の中から、「真の勝利者」(the “true victor”)として現れてきたのである。そして、熟慮されるべき真に奇妙と言える事柄は、同盟国の中の一緒になって得られた勝利の中の彼の寄与分ではなくして、彼の勝利が二つの同盟国を超えていたことである。

諸々の情況(affairs)のたどった諸コースを形作るのに一役買ったイギリスとアメリカの諸個人と諸グループに帰せられるべき——あるいは帰せられるべきではない——狙い(aims)がどんなものであれ、結果的にもたらされた諸情況をもたらそうと意図できた者は——相当のアメリカの知識人を除いては——誰もいなかった、ということは甚だもって確かなのである。諸々の征服地という収穫物を具備したロシアが存在しているのである。その収穫物は見た目よりも多分に豊かなのである。その故はロシア的方法(Russian methods)が被征服国を自国と同一化するという点で——如何なるロシア以外の被征服諸国には全く達成し得ない程に——際立って著しいものがあったからであり、今一つのその故は、我々が独立国として取り扱うことを主張している公式には領土となっていない諸国が——ロシア的機構の中に完全に統合されているという点で、公式に領有されているどんな諸国に対する場合と同様である程に——無条件的にモスクワから管理されているからである。軍事的意味と同様、政治的意味においても、ロシアの戦略上の地位(her strategic position)は、外部からの有効な制御を試みようとする如何なるものにも全く卓越して、優越したものとなった。今や勝ち取られたそれは、大陸ヨーロッパと大陸アジアの全体を覆うに至り、その重みだけからして、隣接諸国は隷属国に転落させられ、その上、発展は——奇妙なことにアメリカのビジネスがそれに役立っているのだが——ロシアの領域(domain)に向けて成熟させんがためにおいてのみ必要とされたのである。更には、これらのはかり知れない権力と威信の全てが単一の人物の手中に集中されているのである。その人物は消耗戦の直後にあつて、焼け出されて、その上飢えている人々に、新しい軍備計画を——それはあらゆる従前のそれを凌駕し、しかもただ一つだけの意味をもつことができたものであつたが——負荷することができるほどに強力な一

個の人物であった。

2 こうした事態を予見することができた——あるいはそれを望むを得た——イギリスやアメリカの政治家がいた、とは知覚することをなし得ないところである。前者の場合、イギリスをして屈辱的である上、その状況たるや嘗て是正するべく戦争に赴いた状況よりも更に悪く、また更に一層危険に満ちたものであるような状況に着地させることを望んできている可能性は到底あり得ない。後者の場合、アメリカの政治家達がスターリンに対して卑屈になるような位置に向けて自ら策略を図る (*manoeuvre themselves*) ことを望んできている、ことはありそうにない。というのは、アメリカに生まれた市民達の圧倒的大多数にとっては、クリスチャニティ・自由・民主主義、それに中産層に関する限りでは、繁栄 (*prosperity*) が無上のものであることを意味する、という事実政治家達は盲目ではあり得なかったからである。それ故に、ナショナル・インタレストの配慮とは全く離れても、あらゆるそうしたことを否定するような権力に対して資すようなことは——そのケースの真相が大衆の心情によって会得せられるや——たちどころに不人気となるであろうこと、更にこの心情がボルシェヴィキのプロパガンダの霧の中に出現してくるのが如何に遅いものであり得ようとも、この不人気は投票所での結果に影響することと結合させられてきているのだ、ということを知らない筈はないのである。私はロシアの軍事的成功を評価する立場にはないが、この政治的成功が途方もなく大きなものであったことだけは疑いようがない。

3 この業績は全面的に一個人のもつ超越的天分 (*the transcendent genius of one man*) に負う。学者ぶってみえるであろうことを弁明するようであるが、私は旅に出つつあるのである。何故にこの事実が我々の論証に関係するのかを明示的に示すという旅に。

(1) 歴史形成的諸要素 (*history-shaping factors*) の中で、人員の資質として述べられるのが最良であるような要素のもつ重要性を信じることは、本書の中に提示されてある根拠付け (*the reasoning*) の根底にある「歴史についての哲学または理論」の一部なのである。この要素は——諸々の出来事の歴史的継起についてのどんな説明の中でも果たされるその役割に対

して——必要な能力と頭脳の量をもった人口(a population of the requisite amount of ability and nerve)の存在に依存するだけでなく、それによって、ある与えられた社会構造が現存の(能力と頭脳の)量を社会的に重要な諸々の場に有効な供給に至らしめるところの選択の諸方法にも依存する。我々が一個人の内において、天分(genius)と呼ぶもののもつ問題は、そして諸々の出来事の歴史的継起の説明の中におけるその重要性についての問題は、一般的な質の問題の中の一つの特殊なケースでしかない。それだけに、だから、私はスターリンの個人的業績を単に先行の分析を補完せんがためだけのものとして主張するものである。

(2) そうした業績は民主主義の下ではあり得ないということを注意しておくことが重要である。その故は、民主主義的なシステムは、どんな個人に対しても、彼に有権者のもつ当面の諸情緒、諸偏見、諸スローガンに顧慮を払うことなしに行動できるような位置を得さしめるようなことを不可能とさせるからだけではないのであり、要求されているそのタイプの人物は自由選挙で勝つことがありそうにないからである。成就の為には多くの年月を要するような、込み入ったゲームを演じることの不可能性は、それ故に、民主主義政府のもつ諸々のコストの同類の中に数え上げられなければならない。民主主義は秘密外交の込み入ったゲームを許容するではないか、という反論には、然るべき状況下では選択は込み入ったゲームと失敗の間にあるということが回答なのである。しかしながら、この反論は、もし、それが孤立主義者(an isolationist)によって申し立てられたものなれば正しい。というのは孤立主義(Isolationism)こそが、そうした諸状況を回避する唯一の方法なのであるから。このことは我々の民主主義分析を補完するものである。

(3) 最後に、ロシアの政治的成功は一人の人物の仕事である、という命題は将来の発展についての予見と関連している。とりわけ、その受入れが——ロシアの勢力の際限なき拡張を賞味してはいないいくらかの人々が隠し持っているように見える——愛すべき楽観主義に賛成して、私が洞察することができる唯一の合理的基礎を提供するものである。

4 ロシアの国内的な位置は、戦前には完全に羨まれるものは何もない(thoroughly unenviable)という状態であった。諸々の飢饉がほんの数年を遡るだけで存在した。奴隷化され、しかも苦吟させられている大衆は——あらゆる強圧にも拘わらず——体制に対する一つの危険を構成するだけ

のものであった。党内における不一致は、示威やエジヨフの恐怖の治世(Yezhov's reign of terror)によって抑圧されるのに困難を伴うものであった。軍隊の反乱は絶え間なく起こり得た、といった如くである。しかし、ロシアの対外的位置となると、拡張が問題である限り、尚一層に非妥協でありつつあった——そして拡張の企図については、スターリン体制はもっとも間違いのない証拠を与えてきた(シナとフィンランド)。ドイツと日本が効果的にその道を封鎖したのであるが、尚且つ、「ブルジョワ的」列強(“bourgeois” powers)がロシアの援助に赴くことが、そもそもあり得るだろうなどということは——この場合、想像上のことではあるが——どんな正常な政治家達や観察者達の思考をも超えたものであった。そして、そうであったとしても、ドイツとの協定に始まる長く、しかも、切れ目のなかった一連の絶妙な手腕(master strokes)によって、このポジションは、實際上、挑戦し難い優越性をもった地位に転換された。その誰も挑戦し難い優越性たるや、今日では、質の点でスターリンに比肩できる力は合衆国を除けばないということ、更にこの(合衆国という)例外すらもが、多くの問題領域においては疑わしいものなのである。このポジションの確立は——より弱いプレイヤーが相手の場合——相手国の彼の仲間達が喜んで担おうとするものならばどんな諸条件のものであったとしても、その諸条件が民主主義レジームを台無しにするだけに止まらず、廃止に及ぶものであったとしても、受諾しなければならなくなるであろう諸状況をつくり出すことによって、その状況を反復してつくり出す諸々の出来事の道程の中において、もたらされたのである。諸小国を戦慄するべき運命から守るということに連想することができるような榮譽と利益(honor and interest)をあらゆる動機として具備したものであったとしても、無条件降伏をした人達は無条件に降伏したのである。如何様に幸運(luck)と優秀さ(merit)のもつれ合いがあるかを決して理解しようとしまいであろう人々は、このことの全てを、事態は正にその道を成し遂げたと告げることをもって幸運と満足そのものをもたらした諸手腕の連続(a succession of strokes)として、解釈するかも知れない。しかし、政治的天分(political genius)なるものは、正確に、「諸事態」を自分の諸目的のために作動させ、思いがけない幸運の殆どをつくり出し、そのようにして危険に満ちた転換を——その場限りの観察者(the casual observer)が彼の視野からそれを見失ってしまうように——管理する、そうしたことを任せるといふことの内に存在するものなのである。

5 不安定性(instability)と威信(prestige)における途方もない増大を、このように経験したこのレジームの性質を今一度定義することは、余計なこととされるべきかもしれないが、不幸にしてそうではない。第1、生と死、戦争と平和、なされつつある全てのことが単一の人物の意志——本人はそれを主張することに細心の注意を払っている限りにおいて——に依存するという、即ち、このことは専制の正にその定義である、第2、単一の「政党」のみであり、厳しくその人物の下で規律されていることだけが許されている、即ち、これは民主主義の否定(the negation of democracy)である。第3、言論の自由がないこと、出版乃至は教育の自由のないこと、及び「法による正当な手続き」(“due process of law”)は専制体(autocrat)とは利害関係のない諸案件においてのみ存在する、即ち、このことは個人的自由の本質的要素の否定であることを物語っている。

(*) 読者は、本書第IV部第XXII章に示された理論に従って、個人的自由と民主主義とは同じものではないということ、及び両者の関係は「政治的リーダーシップの為の自由競争」として含蓄されるものに限られるということ、を想起するであろう。実際、ある非民主主義的な形態の政府が、我々が個人的自由として了解しているものについての幅を、民主主義がなしているものよりも、更に広く認めていることはあり得るだろうことなのである。このことはテキストの中で自由と民主主義の間の区別を正当化するために繰り返し述べられているが、ここでも重要性について異論をもつものではない。しかしながら、単一政党システムがファシズムの一つの本質的特徴であることが追加されてあるべきである。

火星人の見たヨーロッパ・アメリカのロシア問題

6 火星からの訪問者があったとし、その者は論理的なマインドを備えていて、如何にして諸事実を認知するか、その上で、それから合理的推論を引き出すかを心得ている、但し政治的心理学については全く不案内である、とする。その者をしてこの衛星に起こっている状況を見守らしめることにする。

彼が観察するであろうことは、あらゆる参加者達が——神と人々が嘗て作った——あらゆるルールを踏みじめるものであった戦争の結果として、

戦勝国が宣言した諸目的とは正確に反対であるような諸条件が行き渡っている、ということである。即ち、従前にあったよりも一層に多くの抑圧と少ない自由、一層に少ない安全と甚だしく多い無法が存在している、ということである。しかし、良心と名誉、それに——自らを防衛することができない人々を防衛するという——義務についてのあらゆる指示(*dictates*)を考慮から外して、我が訪問者が期待するであろうところは、明白な脅威の鞭の下での治療的行動(*remedial action under whip of an obvious threat*)である。彼はイギリスと合衆国に期待を寄せるであろう。この両国は仕事の半分だけがなされただけであると感じている開化された人間存在の残余の部分(*the rest of civilized humanity*)によって支持されている——一つの半分の仕事は、このケースにあっては、何事もなかったよりももっと悪いのである、その理由は二つの軍事的独裁政権が利益において相克状態にあることは、それが単純に一つであるよりは危険の程度が少ないからである。そして他の半分の仕事をなすよう元気付ける為に、それはなされたと感じられた。更に彼はその期待が次のような事実によって裏付けられていると感じるであろう。即ち、スターリンは——自分に課している一貫性をもってこの状況を率直に受け止めており——非常に多くの語録の中で真正の平和は「資本主義が生き長らえている限り」不可能である(*a genuine peace is impossible "so long as capitalism survive"*)と宣言したのであり、新しい軍事拡張レースの中で良きスタートを切ってきた。しかし、他の側では？ 他の側においては、どこに目的、意志、勇気があるというのか？ 5年前には逃避主義だとわめき散らしていた人々と全く同じ人々が、逃避主義者達に転じ、しかも単純にこの不愉快な諸事実の存在を否定しているのである。侵略は宥和によっては防止され得ない(*Aggression cannot be met by appeasement.*)と説教してきた正にその同一人物が、宥和論者に転じ、しかもスペインとシナをロシアの希望に一致させるようにいじめることに、全て賛成しているのである。しかし、この状況がもたらすものが何であろうと、これを説明することはともかく困難という訳ではない。これを行う為我々は三つの典型的なケースを手短に論じようと思う。

第1、ヨーロッパ大陸では——スペインについては、今のところ例外として——ロシアの侵略に抵抗する何等かの政治的に有効な意志といったものは存在していないし、且つまた存在し得ない、と言える。部分的にはこのことを危惧するせいであることは疑いない。その危惧は苦悩の諸々の叫びを窒息させる程に強いのである。しかし、危惧がその全てではない。

ロシアの諸々の政治的守備隊がある。即ち、各国の共産党である。簡略化のために我々はフランスに眼を限定することにする。フランス国民が喜びと感謝の伝達の中で自分達の解放を万歳したのであろう、更に新生の自由な祖国フランスを創出するという魅力ある仕事にフランス国民は熱心に取り組むことであろう、ということを感じた幾ばくかのアメリカ人はいた。しかし、はっきりと次のように展望することの方が一層に納得し得るものであった。即ち、我々が実際に見出したものは、正確に言えば、挫折させられた精神、国民的敗北の意識、あらゆる面で、従って戦前のデモクラシーに対しても、悔恨に崩れ去った一つの世界(*une monde s'écroule resentments*)という気分、レオン・ブルーム(*Leon Blum*)が遠回しに病後の疲れ(*convalescence fatiguée*)と述べたような種の不快感である。そこでは数的勢力ではほぼ等しい3つの政党があり、それぞれ等しく単独でも連立でも効果的な政府をつくることができない状態にあった。MRP(共和人民運動・カトリック・ドゴール党)、社会党、共産党。それらの全ては、夥しい数のグループ、更にはサブグループ——同じ言葉によっては、少なくとも社会主義と革命という言葉については、同じ事柄を決して意味させてはいないような状態にあった——よって支持され、また結び付けられていたのである。我々の目的からすると、次の3点が興味を惹く。その1、「自由主義」グループ(急進社会党、旧「左翼」にあって最も影響力のあったグループを含む)の完全な消滅。その2、アメリカの政治家が心から協力できるような何等かの重要性をもったグループの欠如。その3、これが最も重要なのだが、共産党の強大性。誰がみてもはっきりしているのは、この共産党の強大性は生活のあらゆる部分を網羅して、かくも多くのフランス人達が共産主義の諸原則に宗旨替えをなした、ということでは説明されることができないということである。彼等の多くは教義上の意味では全く共産主義者とはなり得ない存在であり——実際、共産党は銀行と炭鉱の社会化には反対投票を行っている——、あるいはその場限りでの共産主義者(*communists ad hoc*)、即ち、彼等のもつ国の状況についての諸見解の所以で共産主義者となっているのである。しかし、そうしたことは彼等が単純に親ロシア(*pro-Russian*)であることを意味する。こうして彼等は将来の紛争にあたってはロシア側に組し、合衆国とイギリスには対立する、ということの意味する。 * 彼等は・・・

* 偉大なる事実(*das grosze Faktum*)、偉大なる希望(*die grosze Hoffnung*)——どんなより良き条件も問題にされる必要はない。・・・世界革命、この意義(重要性)をもつ。・・・

ヒットラーの軍隊なしには革命はあり得なかった(No revolution ever ohne Hitler Truppen)。・・・イデオロギーの優越を除いては与えるものが何もない、ドルによって生活にはり付けられたアメリカ民主主義の野心があったとしても。・・・その場合、労働運動に縦横の交錯があることが必要、そしてアメリカの労働者によって反撃されることが。・・・ヨーロッパの革命、但しその場合、アジアや合衆国でも。・・・世界革命は、だが、視野には存在していない。・・・爆弾もドルもその全てではない。

第2、イギリスの態度は火星からのわが来訪者の期待を実証するのに最も近いところにあった。・・・

イギリスにおいてもスターリニストは、幾ばくかは存在し、しかも宥和(appeasement)を弁護する者も多い。しかし、有権者が共産主義を支援することは殆ど完全にと行ってよい程に無いので、政府乃至は労働党が共産主義者と和解するようなどんな動機ももつことはないし、共同戦線をつくるなどはもとよりあり得ない。この問題における彼等の立場と感情は疑問の余地が殆どない。そこにはロシア問題に由来して、共産党とは決別し、そして——自分達の諸目的の達成のためにロシアの支援を渴望するようにはみえない——イギリス的共産主義者さえいるのである。保守党と群小政党的の殆どのメンバーは、これまた、政府が強いラインの行動をとることに支持を与えるであろうから、イギリス政府は——このケースでは——一つの連合諸国を実際に指導することになるであろう。事実において、もしこのことがそうでないならば、それは奇妙なことであるだろう(it would be strange)。というのは、アメリカの楽観主義者達に対して——彼等がスターリンに心に抱くことを望むものである——基本的には平和主義的な意図という主題になされるであろうあらゆる回答の中で最も明白なものは、スターリンの意図が何であろうと、大英帝国に対立するロシアのもつ客観的状況こそが和解し得ざる状況なのだ、ということなのだからである。読者がこのことについて自分で了解せんがために為されなければならない全てのことは、戦闘配置を自分の心の眼に浮かべてみることなのである。

*

* 民主主義的状況が問題とされるものである限り、もしロシア的世界に対立する強力な戦線が採られることが決定されるならば、このことは自明のことではないが、はっきりそのようだと主張しておくのが安全である。完全な断念(complete resignation)・・・比較は論争点で相対化させられる、ということ。・・・それ自身が地下運動であることを妨げない。ヨー

ロップ問題は、NAP がそれを覆っているものよりもずっと大である、ということから眼をそらす。・・・

それにも拘わらず、火星からの来訪者に衝撃を与えかねないような、弱いだけでなく非合理であり、しかも外観では正反対のものであるような態度を理解することに困難はない。強力で合理的な戦線を採用することは、イギリスがこれまで決して採らなかったような戦慄すべき危険を伴うものであるだろう。1688-1714年と1798-1815年の期間を通して、諸々の連携(coalitions)が突入のなされたより以前から有効なものであり、しかもあらゆる正常な諸標準からみても、これらの諸連携は実際に実行されたものよりも一層適切であったとさえみられていた筈である。ある偉大なる人物の言を盗用するならば、我々の歴史についての理解はその事件についての我々の知識によってスポイルさせられるという。しかし、もし我々が自らを例えば1793年の視点に位置させるならば、そして我々が事情に良く通じたどんな観察者もが見出したに違いないような様々なチャンスについて調査することを試みるならば、我々は革命的フランスに反対する初期の成功が正に裏切りの事柄であるかのようにみえるに違いない、ということに同意せざるを得ないのである。実際上の確からしきがある。

次の比較されてよいケースは、似たものであった。1914年8月になされたどんな資源調査もが、その時点で合衆国に期待されたであろうことは全く関わりなく、最も勇気づけられる結果をもたらしていた筈である。1938年においてさえ、イギリスは孤立していたのではなかった。実際に、我々がスターリンとヒットラーの密約の真の意味の正確な評価を——少なくとも可能性としてでも——考慮に入れるならば、更にドイツの戦争エンジンの能率に関する諸々の疑問——疑問がその事件前にもたれていたとしても完全に正当化されてしかるべきであるのだが——を考慮に入れられていたならば、このケース(密約 entente)は充分にあらゆることの中の最も安全なことと考慮されてよかつたのである。

今ではどんな有意な支持も大陸ヨーロッパからは期待することはできない、ということが明らかである。成功についてのあらゆる望みは——そして成功に対する二者択一(the alternative to success)はイギリスの目的なのであるが——それ故に合衆国からの支援に向けられる。つまり、今一つの長く、コストのかかる、困難な戦争に入るための準備が整えられてい

る合衆国に向けられる。ところがこれは当面のケースではない。私は何も、もし最悪が最悪に至るならば、その合衆国はイギリスをしてその運命に突き放すであろう、と言い張ることを意味させようとするものではない。反対に私は、合衆国が早々とロシア—イギリス戦争(Russo—English war)に引き込まれるであろうことは、ありそうなことだと信じている。但しこのことは確かではないこと、及びワシントンはしばらくの間はこうした不測の事態を回避しようとしぎりぎりまで努力するであろうということ、あるいは同じことであるが、ワシントンは第二次世界大戦に採ったものとは正反対のコースを採りつつあるのだということ、を私は敢えて主張しておく。火星からの来訪者が理解に苦しむであろうことは、このことである。というのは、以前に採られたコースについての動機付けの中で、終始一貫して申し出されてきた一つの理由を除いて、あらゆる諸理由が現在のケースには追加的作用力をもって適用されるものだからである。

第3、この国(合衆国)の現在の行動を——国際的諸事情(*affairs*)に関するものとして——形作っている状況——は3つのセンテンスに要約されることができよう。即ち、国民が疲れている、物理的攻撃という直接の危険はない、対外政策は国内政策である、ということ、これである。国民は疲れている。即ち、巨大な、しかも血なまぐさいゲームに倦んでいる。戦争の諸々のプロパガンダと戦争諸活動、それに戦時規制(*war regulation*)と戦時課税(*war taxes*)と戦時官僚制(*war bureaucracies*)にも。国民は、全てのこうしたことが取り除かれることを望んでおり、更に通常の職業と娯楽、それに慣れ親しんだ生活の日常過程に腰を据えることを望んでいる。流血と破壊にはうんざりしている。民主主義形態の政府が何等かの意味での真正の「人民の意志」との諸政策の一致を保証するものではない、ということをお我々は知っている(第IV部を見よ)。しかし、そのように行きわたっている風潮(*mood*)はどんな形態の政府の下においても、——完全に規律化された指導階級(*classe dirigeante*)の諸法によって統治されているところのスターリニストまたはファシストタイプの専制でさえなければ——例えそれが専制のものであっても、行われる自己主張と結合させられているのである。*

* ツァー達の官僚制的専制が原則として国民の諸風潮に対し聞く耳をもたないとするものではなかった、ということを示さんが為の歴史的事例は容易に引き出されよう。このためには、他の二つの条件——それは専制それ自体の中には含意されていない——が充たされるものでなければ

ならない。指導者がピョートル大帝とかエカテリーナⅡ世とかにみられるように異常に強い個性の持ち主でなければならないこと。それに現代的諸条件の下では、専制者は——婉曲に(euphemistically)単一政党(the single party)と言いまわされているような——そうした統治の装置をもつものでもなければならないこと。即ち、これである。官僚制と警察、それは必要ではあるが、十分な装置ではない。

この国に物理的攻撃の直接の危険はない。こうしたことがあってか、人々は——狼だ、狼だと叫ぶことがあまりにも多くなされてきたためか——それを信じることを拒否するであろう。人々は彼等に訴えるであろう救済策を信じたとしても、それらは信心深い願望(the pious hope)の中に生じた更なる宥和(appeasement)であるだろう。その願望は、一つや二つの小国をスターリンに放棄することで、然るべき時迄——今にも起こりそうな民主主義化がロシアをして平和愛好国に転じさせるであろう時迄——スターリンを満足させるだろう、というものである。この救済策が、チンギスハーンに——彼が今生きていて、然るべき地位をその新しい共和国の中のスタッフに宛がうことを期待する——それ程に理のあることだと納得するように反応する人ならば誰であっても、その人物は反動的な人物(a reactionary)か、あるいは言うならば、ファシストである。それが意志を支配する風潮なのであり、それが理性を支配すると共に——理性を台無しにしてしまう——ところの意志なのである。

このことは、私は信じるものであるが、農業者達、労働者達、それに小規模事業家達の多数派の諸態度を適切に説明するものである。この他の一つの少数派が共産主義者であり、スターリニストとなると更に少ないし、更に彼等にとってロシアは大きな意味をもっておらず、その傍らで今一度の戦争に対する嫌悪がある。このようにして、彼等は——例えその意図がなかったとしても——親露(pro-Russian)である。労働指導者達の態度は彼等の戦術上の事情(tactical situation)によって説明される。知識人達の声の大きな部分もまた——知識人達の驚くべき数が結果におけると同様に意図においても親ソヴィエトであるのだが——ロシアの利益になるように事を運ぼうとする位置をとることとなる。もしある国が——他の国よりも一層に——解放の必要におかれているとすれば、その国はロシアである、といった意見に賛成するという明白なケースは決して支持されない。しかし、それよりも遥かに関心を惹く現象は個々に事業を行っているブルジョワジー上層の態度である。この態度が政治的に重要だというのはな

い。小規模事業家達や農業者達によって支持されない時にはいつでも、この完全の無力性は——彼等の防禦能力の無さからして——明白なのである。あらゆる大物達(all the greats)は、我々にとって、この態度の徴候的価値(the symptomatic value)である。彼等の内、多数派部分が控え目にみても宥和に断固賛成なのである。このことが彼等に対して意味するところのものを誰かが指摘するような場合には、彼等はすぐさま——自分が罪を犯しているかのように——沈黙の中へ、あるいは前述の信心深い避難場所の中へ、退却してしまうのである。僅かの例外を伴うものではあるが、大企業は戦争のもたらす経済的並びに社会的帰結に対し、自らを祝福するような根拠を殆どもたない。

そして、対外政策は国内政治だということである。——分析の原理は省略——ある範囲までは、それはどの場合においてもそうである。だが私はそれ以上の意味をもたせたい。我々の当面の目的にとっては、一国の対外政策というフレーズは外国での諸事件と諸国民に向けられた諸政府の慣行的態度(habitual attitude of its government)を呈示するものであり、その態度は「諸原則」と一致させられ得るものであるとともに、大部分は——もとより全体としてではあるが——政党の諸路線(party lines)とは独立したものである。全ての大国と殆どの小国において極めてはっきりと際立っているこの慣行的態度は、二つの要因の所産である。即ち、第一にその国々の地理的、経済的、及びその他の諸慣行についての比較的恒久的な諸要素、第二により良き表現を求めるならば国民性と呼ばれなければならないものの比較的恒久的な要素。それは時代と共に変化はする——主として制度的諸関係のパターンにおける変化と社会的諸構造の変化に対応した結果である。何等かの与えられた時代にあつて、それは正にはっきりとした事実上の強制作用である。つまり、それから過度に逸脱することを試みる政治家は直ちに思い知らされることになる。二つの事柄、規律、即ち、必要性和伝統・・・深く根を下ろした必要性・・・それぞれ様々な諸目的に向けられた行動についての合理的把握からのものではないような反作用への確かな方向・・・得意の競技・・・労働に次ぐもの・・・多分次のように言うておくのがより良いであろう。我々は様々な方向で、その場合、合理的であるような政策に対しては個性的なものを何ももたらされないということ。我々が合理化を尚極めて控え目にしておく場合において、行動のはっきりした形態の事実が明らかになるということ。

それが特に甚だしかった合衆国では孤立主義として定式化され、——理

想的にその国の位置に適しており、そこから了解せられる——、そうした慣行的態度が採られている。外国における爆弾の数の増大や第一世市民の増大という重圧があり、その重圧の下で弱められてきてはいるが、それは生き延びており、現在中断されているとしても、やはり一個の政治的作用力なのである。しかし、現在の合衆国はそうした慣行的態度を復活するにはかけ離れた状態にある。あらゆる対外的な諸利益を主張する口実は失われつつあるのである。この地球の半分において自らの道を保ちつつ、しかも「アメリカ市民とアメリカ産商品がそうではないと識別されるような所はどこにもない」というところのリストを検証する、といったことを超えた指針は何もない。しかし、この帰結——即ち、そのように伝統が、そのように外交が——は未だ尚重要性をもつ。他のところではこの伝統によって統治されている市民は、意見を持つこともなく与えられた喧伝機構が吹き込むであろうものに、何であろうと乗ることになる。彼等は市民にある情緒(an emotion)——孤立主義を不毛とさせるだけの——を送り込むであろう。不正直に満ちたものを包攝し、しかもかくも容易にそれを開発するノウハウを持つグループにより取り込まれるような、そうした政治勢力はここにはない。(孤立主義を除き、国際連盟という不人気な標題を人気あらしめることに煩わされないよう要望する)・・・更に政治家はそれを知っているだけでなく、同じ穴に落ち込む位置にある。・・・OPA(連邦価格統制局)はポーランドとポズナニ市についてのどんな感情よりも更にずっと重要視される。・・・行動する準備を決定する場合の冷静な熟考の中で、整然としているといったもの(square u.s.w)は正確には何もない、という結果になる(今次の大戦における42年のルーズベルトの如く)。秘密外交への嫌悪がそれを一層に悪くする。・・・我々はそのことに先立ち、またそのため、ヤルタでなされたことを全く知らされていなかった——了解は驚くほど僅かだったというが、明らかなことは何もない。

更に諸々のスローガンが——誰かがそれをを用いる時——益々熱狂的に実感されることになる。自分は国内にいるのだから、自分は安全なのだから、と。・・・スターリンはそれを心得ていたが、ヒットラーはそうではなかった。・・・と言うのは、政治は仕事に次ぐ人気のある楽しみであり、そのようにして全てが諸計画と諸提言の材料となるのである。・・・自由に向けての爆撃、奴隷制への引き渡し。・・・つじつまの合わない諸目的と諸原則・・・そして我々はそれを見出す——スターリンが評価することを得た「つかの間の見せかけの成果」を。・・・政策に期待できるものがない。・・・行動に整合性がない。・・・どんなチャンスがこのいじくり廻

されている国にあるというのか。・・・決断は可能ではない——強力な性格の持ち主であるとか、策謀家でなければ。・・・このように政治家は自分の所属階級とだけに相談することが自由である、そしてこのことこそ、我々が観察しようとしていることなのである(ミュルダール(Myrdal))。・・・他方において、行動についての合理的に認知された諸ルールが欠けている。・・・途方もなく多くの諸目的が注意されることなく通過していく、そしてその傍ら些末なことが取り上げられている。・・・数ダースのことが認められる——誰も語ったり、行動したりしない。・・・プラウダ——不面目(contempt)・・・諸々の根拠がある。・・・一つのことが目立っている。・・・革命の可能性・・・「何かなされるべきか」(“What should be done?”)——言葉の特殊な意味(cant)についての諸君の考え方を明らかにせよ。・・・諸公準についての武装されたもの・・・委員会の諸スローガン・・・それを洗い流すことによって諸問題を説くことができる。・・・

今や火星からの観察者は——とりわけ彼が政治的活動なるものは諸事実の合理的把握とそれからの合理的推論の問題だという理論に耽っていたとすれば——、当然のことながら、非ロシア的世界の全体が、憤りと恐怖をもって衝撃を受けているだろうことを見出していると想定されるのである。

編者後記

農学博士 浦城晋一 三重大学名誉教授

1941年にヨセフ・アロイス・シュムペーターは一つの仕事を完成し、他の仕事に取りかかっていた。言うまでもなく、「資本主義・社会主義・民主主義」が前者の所産であり、「経済分析の歴史」が後者の所産である。言われているところでは、前者は気晴らしに、また気軽に通常の読者のため書かれ、後者は能う限りの努力をもって高水準の学者達のため書かれたとされる。しかし前者もまた傑作のひとつであることは確かであり、ポリティカル・エコノミーの分野における諸古典の中の一つである。上記の二つの仕事を取り替わった時、前者の草稿文書類(manuscripts)——出版書に印刷された稿だけでなく、1)用いられなかった章句(passages) 2)諸論点を図式化したスケッチ類 3)この仕事の各局面を形成するため各種各様のノート類をも含む——は、シュムペーター自身によって彼が通常そうしたように取っておかれた。彼は後者の形成に自らの学的全精力を投入したのであり、それは1950年まで続いた。前者に関して言えば、1947年の第二版に際しても、その内容的変更は何もなされず、ただ、1)「第二版のための変更」なる序文と、2)「第二次大戦の帰結」なる一章の追加と、3)「社会主義への行進」なる小エッセイの付加だけがなされた。しかしながらその間(1942-1947)のノート類といったものは書かれており、第I版の部分と併せて取っておかれている。他方後者は予期を超えた遥かに重い仕事となり、自らを消耗し尽くし、ともかく仕上げに至ったとは言え、1950年、その完成を目前にして突然死した。そこで彼が秘書に打たせたタイプ打ち草稿類は彼の妻エリザベス・ブーディ・シュムペーターによって一巻の書に編集された。彼女の手によって前者の草稿文書類——その殆どは自筆であるが一部に秘書のタイプ打ち稿もある、全体で約1700枚——は日本に渡来したのである。その経緯は次の如くであった。

最初に関わりのあったエリザベス・ブーディと東畑精一について考慮が払われるべきである。一人のエコノミストとして、また親日家として、彼女は日本の経済学会で夫がよく知られていること、とりわけ東畑精一と中山伊知郎の諸業績を良く心得ていた——二人は嘗てドイツ・ボン大学時代にシュムペーターの下に学生であった時期があり、夫の仕事である「経済

発展の理論」と「経済学史」（この書が「経済分析の歴史」の底本となっていることに注意されたい）の日本語版の共訳者であり、更には問題の書である「資本主義・社会主義・民主主義」（第二版）の日本語版の共訳を成し遂げつつあった（1947－1951）。そうした状況下で、とっておかれていた問題の草稿文書類は彼女（エリザベス・ブーディ）から彼（東畑精一）に与えられた。彼女と彼との間に書簡の遣り取りがあり、彼女が彼に与えた書簡の幾つかは今も残されている。それらを通してその過程が推定され得る。1）彼に対して彼女は「経済分析の歴史」のタイプ打ち草稿が含まれている一式のマイクロフィルムを送り、彼に同書の文献的な誤りの校閲（checking）を依頼した。そこで彼は能う限りの範囲でその依頼に応じた。・・・彼にとってこの仕事が後年その書の日本語訳に連なったことは疑問の余地がない。・・・2）彼女に対して、彼は日本語版「資本主義・社会主義・民主主義」への序文の寄稿を依頼し、更には彼女の故夫の記念になるような何かを——日本ではシュムペーターの著作がよく読まれ、且つ関心をもっている者が多いという故をもって——貰うことを願った。彼女はこれに応えた。1951年11月付けの彼女の彼に宛てた書簡にはその旨が書かれている。『「資本主義・社会主義・民主主義」の草稿文書類は日本へ行くべきだ、と私は考える、而して私はこのようにして故シュムペーター教授の本のいくつかを貴殿がもつことを見たい」、「草稿文書類については私は何時にても貴殿に引き渡すことができる」。このようにして彼の学生であった古谷弘が出向いてこれを受け取り、彼の下に持ち来られた。その後問題の草稿文書類は、時折日本のエコノミストの間で話題になることはあったが、彼の書庫の中に置かれたままとなり永く眠っていた。

1984年、彼、つまり、東畑精一が没した。その10年程前に、三重県庁は彼の郷里の家屋敷を処分して、その近くにあった三重県農業技術センターの敷地内に東畑記念館を建てていた。というのは、彼は偉大なる一人のエコノミスト——とりわけ経済学一般と同様農業経済学において——であったが、その傍らで彼は三重県当局に対する最も重要な顧問でもあったからである。そうしたことで、彼の死と同時に生前の意志に基づき、彼の蔵書類の大部分が三重県に寄贈され、このホールに備えられるべく搬入された。諸書・諸論文・諸報告・諸調査資料及び他の諸書類が約15000点あり、その中に問題のシュムペーターの草稿文書類が外国雑誌と共に重ね合わされてあった。次いで必要とされたのは寄贈書籍類の捨てるか保存されるべきかの選別と、その適正に位置付けられるべき分野の諸カテゴリーに即した分類であった。そうした選別と分類をなすために私が指名

された。私が大学生時代、東畑教授の門下生の一人であった、センターの近くに住んでいた、三重大学教授として時間的融通をつけ得た、遠縁の者であった、というのがその理由である。この仕事は、間欠的にではあったが、1984年から1986年にかけて行われた。その選別の過程で、当然の結果として、私は1985年2月に自筆の草稿とノート類等を発見し、その一年後タイプ打ちされた草稿を発見した。その採られるべき適切な方法は、本物はセイフティボックスに保管し、その一方内容の研究等の研究はそのコピーをもって行われるべきだ、と私は考え、事実、そのようになった。1995年頃——その時から10年が経過した頃——記念館にあった東畑文庫は三重県立図書館内の東畑文庫へと、その所属を替えた。行政整理の一つとしてである。問題のシュムペーターの草稿文書類もまた一緒に所属替えとなった。このようにして現在(2012年)、それはそこに存在している。

発見せられた草稿文書類は3種がある。

- A. 自筆草稿、B の鉛筆で黄色の下書き用紙(30×20cm)——24罫線入り——の上に英語の草書スタイルで書かれている。各用紙は綴じ合せられていない、言うなればルーズである、またページナンバーは部分的に入っているものもあるが、原則として入っていない。但しかなりの枚数が草稿から転用されて諸論点や諸争点を整理させるためのノートになっている。その場合はC種と同じである。全体で約1200枚あり、この種が草稿文書類のメジャー部分を構成している。
- B. タイプ打ち稿は約300枚、但し相当部分がA種と重複している。
- C. 手書きの諸ワード、諸フレーズ、諸文章が小型の黄色の用紙といったもの書き込まれている。但し諸ワードの配置は各ケースごとに推定されなければならない。英語とドイツ語を混交させて素早く書かれており、英語文字の場合は単に短縮文字が用いられているだけであるが、ドイツ語文字の場合は殆ど速記文字が用いられている。この種は本を形成していくための諸ノート乃至は覚書である。

A種の発見後、私はそれを読むためのミーティングを今岡氏・米川氏・木南氏ともつことにした。ミーティングは僅か数か月しか続かなかつたが、お蔭で私はシュムペーターの草書文字を読むことが出来るようになった。そこでA種・B種・C種の全内容を、一人だけになつてでも、表出させることを決心した。私が行った最初の仕事はA種と刊行本の中の差のチェックであった。A種に属する各紙片につき刊行本の中に一致する部分を探

し尽くすことが試みられた。この仕事は相当に煩わしいものであり、完了するまでに約2年を必要とした。しかしこのチェックの結果として、1) 刊行本「資本主義・社会主義・民主主義」(第一版 1942年)の約80%がA種によって覆われている、2)一致しているその部分——私はそれをAa種とよぶ——は刊行本に記述された内容と殆ど同じである、3)Aa種はA種の約60%を占め、その残余——私はそれをAb種とよぶ——は刊行本の中にぴったりとは当てはまらないといったことが見い出された。第二の仕事はB種について同じことをチェックすることであった。結果として、1)B種の約半分はA種と重複しており、2)そうした重複部分を除いた残余は2種に分けられ、その半分が——私はそれをBaと呼ぶ——刊行本に一致した内容を持ち、他の半分の残余——私はそれをBbと呼ぶ——が刊行本の中にはぴったりとは一致しない部分であること、3)刊行本の中でAa種によつては覆われなかった部分はBa種によつて裂け目なしに覆われる、といったことが見い出された。[AbとBb]と[AaとBa]の関係の中には次の点が注意されなければならない。前者の中にある多くの章句はそれらを後者に書き替えることによつて発生したものである、だから当然のこととして前者は後者と似たところを多分に含む。後者にあるものと殆ど同じ文章またはパラグラフさえもがそれに含まれることがある、しかしそれらのそれぞれはいくつかの局面で後者とは異ならしめられていて、決して後者に埋没させられ得ないとみられた。

私はその草稿をもつて刊行本を再構成することを成し遂げた。私はコピーをもつてつくつたそれを三重県立図書館の東畑文庫の傍に置いた。もし本物の草稿をもつてこれをつくるならば、それは一つの重要文化財乃至は非常に貴重な文書類となるかも知れない。しかしながら、それにも拘わらず、それはシュムペーターの諸業績を研究するための資料として寄与すべき何物をも含んでいない、その故はその内容が刊行本と同じなものであるから。而して若しいくらかの寄与が求められるならば、それらはAb種、Bb種、それにC種といった残余の部分で以てなされなければならない。このことは誤解されてはならない。最も精製されたものは、もとより刊行本である。そして若し一巻のクラシックとしての刊行本がそうした未知の章句を極めて多大に伴っているのであれば、それを解読し読むことができる形態で提示することはそれ自体有意義なことであるだろう。更には以下の2点が考慮されるべきである。

- 1) シュムペーターは、自らの行論を配列して、それらを諸帰結の要

約にもっていくことに優れていた。その諸行論はテーマが非常に広範且つ包括的である一方で簡にして要を得ていた。「資本主義・社会主義・民主主義」のテーマは途方もなく大きい、刊行本は内容を400ページに収め、しかも各局面でのヴィジョンを保たせている。2) シュムペーターの尋常ならざる修辞の趣向が留意されるべきである。次のような表現・・・「資本家システムの持つ実際にみられ且つ見込みうべき成果は、その経済的失敗の重みに押し潰されての崩壊というアイデアを拒否してしまう程のものでありはするが、その正に際立った成功こそが、それを保護している社会的諸制度を掘り崩し、更にはその中でそれが生きることを得さしめなくするような、また更にはその後継相続者として社会主義を強度に指示するような、そうした諸条件を不可避免的に創出する、という命題」・・・この章句は嘗て、今日においてすら、シュムペーターの名の下に『資本主義の運命についての主要な命題の一つ』として受け取られている最も有名な章句である。しかしその含意は彼の修辞とレトリックの所為で逆説的な提示のようにもみられるのである。本書にはこうした修辞が満ちている。・・・この簡潔性と修辞のため、本書を彼の意を十分に体した如く理解することは容易ではない。十分な理解のためには関連文献からの補助線を引く必要がある。

しかしながら、上述の諸事実の傍らにあつて、[Ab + Bb + C]種は正にこの部分の中において、追補的・補完的・説明的な何物かを提供する多くの章句を含んでいることの故をもって、刊行本の理解を深め且つ広げるために有意充分なものがある、と私には思われたのである。AbとBbのケースの相当部分にあつては、その章句の中の冗長性・拡散性・付随性・逸脱性・重複性などが書き換えの理由であつたと推定されるのがその理由である。そしてAbとCのケースの相当部分にあつては、その章句の中に著者のイメージした・思考した・ひらめいた・想起されたなどの諸々のマインドについての多くの示唆に満ちたものがある、と推定されるのがその理由である。そのようにして更に、もしあればのことだが、刊行本の中には現れていない、著者の修辞の中に巧妙に隠されている、何等かの本音、リアリティがそこにあるかも知れないのである。分析的判断のための立体空間といったものの中で、刊行本は中心に位置するようセットされ、随伴者達——[Ab + Bb + C]種——はその周りに配列されている、としたい。そうすることで、読者をしてそれに関わる何事かを探らさせる、すなわち、随伴者達をセンター部分との関連を持たせながら交差させることによって諸問題と諸争点を見究めさせようとするのである。私はそう考えた。

このようにして、[Ab + Bb + C]種の内容の開示が必要となった。しかし、そうした仕事は決して容易でなかった。というのはそこにはドイツ速記文字を解読しなければならないという重い障壁があったからである。そしてそうしたタイプの速記文字が解読され得ない場合にあっては、C種のすべてが使い得ないし、Ab種のいくらかの部分もまた同様であり、Ab種の多くの部分が余白の部分に速記文字が書き込まれているので、その価値を減じることになる。この障壁を乗り越えるには、それを正しく読める人物を探し出す以外には方途がなかった。

いくらかの試みのあと、私は幸運にもそうした人物にアプローチできる人物の知己となるを得た。兼子次生氏であり、彼は日本における速記法の比較研究の指導者であった——今日彼の著書「速記と情報社会」が入手し得る、その中にシュムペーターの速記と私のことがふれられている。兼子氏は私が送ったシュムペーターの速記文を検討し、それがファウルマン型の草書スタイルではないかと思いつけた。しかし確信をもてなかったので、東西ドイツの速記協会宛てに鑑定依頼の照会を行ってくれた。その結果良い応答が東ドイツから得られた。DDRの速記者達の指導者マンフレッド・ケーラー氏はそれが古式のガルベルスベルガー型の草書体であると断定した——フランツ・X・ガルベルスベルガーは1834年にあらゆるグラフィックな可能性を駆使して彼の草書式速記体を作り上げた。しかしながら、ドイツにおいてさえガルベルスベルガーに練達の速記家はすでに極めて少なく、ケーラー氏の知る限りではアーサー・ハイム氏唯一人だけが私の目的を充たす有資格者であろう、という返信が得られた。ケーラー氏の紹介のお蔭で、私は彼の知己となることができ、更に私の手元にあるシュムペーターの速記文書の全体につき、その解読の要請に応諾が得られた。アーサー・ハイム氏は91歳という高齢にもかかわらず、極めて親切で快活であり、私の仕事を助けることを自分のもてる独特の能力をもってする国際的寄与として喜んでいるよう窺われた。そうしたやり方で障壁は1988年に完全に取り払われた。

1988年から1991年にかけて、次から次へと私は彼にシュムペーターの草稿文書類の中の速記文の部分を送り、彼の解読結果を受け取った。他方において英語の中の簡略文字については、もし読者が社会科学の学徒ならば、例えば、*inve. Opport.* ならば、*investment opportunity*、*comp. eff.* ならば、*comparative efficiency* といった如く解読し得るものであった。

このようにして私は諸行論または諸論評などの素早く書かれた部分を読むことができた。更に私は、ともかく、[A b + B b + C]種の全体、すなわち、刊行本「資本主義・社会主義・民主主義」に含まれる部分を除いた残余の全体を通観するを得た。

そうした後、最後になされるべき仕事は、それをその適正な場所に配列させることであった。この最後の仕事について当初、1990年頃、私がイメージしていた状態は、そのそれぞれのパセージがすでに私がつくった前述草稿版「資本主義・社会主義・民主主義」の中の脚注または各章末の後記として付加されている如き状態であった。しかしそれは私には不可能であった。その故はそうしたパセージの多くがその含蓄において、外延的にも内実的にも、刊行本の然るべき場所とうまく符合しないためであった。そこで結局、刊行本における行論の展開の次第に沿って配列していくほかには私にはなすべき方途がなかった。それらを類別し、秩序立て、そのようにしてそれらを刊行本に対応させられる一書をつくる試みとして構成していくこと、すなわち、今一つのシュムペーターの「資本主義・社会主義・民主主義」の別冊本を構成すること。しかしながらこの仕事も——私の語学的貧しさと連なるものではあったが——一見して思われた程には単純でも容易でもなかった。そこで私は各パセージ毎に原文の清書——但し速記文字は普通のドイツ文字に直されている——を付し、更にそれに日本語訳を付すという作業を施し、原文とハイム氏からの速記文字のドイツ語訳と併せ、1995年頃までに四者を綴じ合せたセット600部程をつくった。このようにして私はこの仕事を一応なすを得た。しかし結果は不出来且つ不満足極まるものであった。2回、3回と再配列を試みたけれども、その後ですら不満足であることに変わりがなかった。かくして、10年間以上それらは私の傍に積み上げられ、そのままにされていた。

2011年、私は80歳になった。体調不良が様々な病気を伴って噴出し、とりわけ動脈硬化・脊椎変形・ぼけが進行し、死が遠くないことを自覚した。状況は切迫しており、私は過ぎた年月を他のこと、例えば、我が家の古文書の解読とか漢詩文・仏典類の訳出とかに気を逸らしていたことを悔いた。そうした時、たまたま、秀逸な古文書解読家に出会った。井上孝榮夫人で、私のまたいところになる。我が家の古文書の彼女の訳文を読んで、そのアウトプットが驚くべきことに、単なる完全な解読のみならず、私が予期していなかったいくつかの重要なファクト・ファインディングをも引き出していたのである。彼女は古文書の取り扱いに精緻且つ厳格であ

った。その時、私は知った。シュムペーターの草稿文書類についての私の仕事は、言ってみれば、古文書の取り扱いの問題であったのだ、と。今一つの「資本主義・社会主義・民主主義」をつくるなどの試みはあまりにも不遜であったと思われた。かくして私はこの仕事を古文書の解読と翻訳の一報告書をつくる仕事として今一度挑戦することを決心し、彼女に提携を要請し許諾を得た。彼女もこの仕事に関心をもつところ大なるものがあった。このようにして今一度の再配列をそうした見地から行った後、なお満足され得るものではなかったけれども、この配列を締め切った。・・・II—(4)—13は、このコレクションを単独でも読みうる一書に構成するため私が追加したもので、刊行本の中にある「知識人の社会学」のアウトラインとしてつくられている。古文書の集成の見地からは排されるべきであろうが、この部分に限ってそれをそのままに残すことにした。・・・そして全セットは彼女に送られ、彼女が私のつくった清書をシュムペーターのオリジナルを通閲しつつチェックし、その清書でもって私の手書き日本語訳をチェックし、その結果をタイプライティング・マニュスクリプトに直す作業を行った。アウトプットは逐次作業済のセットと共に返送され、私がそれを同様に再チェックし、改めて配列の順序に即したハンドライティングでの再清書一式の作成と彼女によりタイプ打ちされた日本語訳の校正を行った。この手書きでの再清書一式が原書(original text)であり、原書と日本語訳が同時に出来た。

未だなお不完全で不満足なものであるとは言え、私は今存命中に草稿文書本、追補版「シュムペーターの資本主義・社会主義・民主主義」を刊行版に相對置させられている全パセージを用いることにより作り、且つその日本語訳を作った。そうすることで、こうした由々しい研究資料の発見者に帰せられるべき義務を私は果たすことにする。更に私の能力の故にかくも遅れてしまったことをば、どうか許していただきたい。最後に私の特別の謝意を故アーサー・ハイム氏と井上孝榮夫人に帰させたい、兩人なしには私はこの仕事をなしえなかった。更にいつも激励を賜った今岡日出紀氏に感謝する。

本書のどの部分も未だ印刷に付せられていない。尚いくつかのコピーが、然るべき人物または所に送られるであろう。

2013年 春

